

起きたらマさん、鉄血入り

Reppu

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

CGS社長相談役に就任したマっさんの話。

2022/04/24

申し訳ありませんが、暫く更新を停止致します。

2022/04/27

再開します。

目次

プロローグ：マっさん火星に立つ

0. 死の間際に人生の決算はやって来る ————— 1

1. 人間豆を食っていれば死なないというのは嘘である ————— 4

2. 企業とは営利団体であり、社員はそれに準じた権利と義務を
持つ ————— 9

3. 文明社会において学ぶという事は最も効率的な自衛手段であ
る ————— 15

4. 人間は欲求が満たされていれば、多少の不満は許容できる
21

5. 成功には才覚が要る、そして才覚のある者は少ない ————— 27

6. 悪評は一瞬で広まるが、払拭には莫大な時間と金を必要とする

————— 33

7. 悪人にも人権はある、考慮する必要はない ————— 39

8. 礼節を語れるのは裕福な者だけである ————— 44

9. 武力を背景にした為政者の発言は恣意的な情報改竄を疑うべ
きである ————— 50

10. 戦いとはそれまでにどれだけ準備をしたかで勝敗が決まる
————— 57

11. 解り合うのは命が助かった後でも遅くはない ————— 63

12. 弱肉強食を嘯くものは自らが弱者になる事を想定しない短
慮な人間である ————— 69

13. 悩むのは若者の特権であり、答えるのは大人の特権である
75

14. 凡夫の勇は英傑の勇に勝る ————— 85

本編1期編

16. 権力者との接近は相手からの場合、特に警戒が必要である

97

17. 暴力で問題を解決するのは下策だが、暴力を嫌って放置する事は更に下策である

103

18. 命とは最も価値のあるものであり、最も値引きの効くものである

109

19. やらずに終えた後悔はやった後悔よりも大きい

115

20. 正義とはその人間の価値観によって定められる不確かなものである

121

128

21. 利益の供与は物事を円滑に進めるための必須条件である

22. 運命とは都合の良い錯覚である

137

23. 強者の論理、弱者の論理

145

24. 解り合えたと思う瞬間こそ最大の誤解である

152

25. 思いだけで報われる程世界は優しくないが、思いがなければ世界は優しくならない

158

26. 臆病である事は恥すべき事ではない

164

27. 言葉が通じることと理解して貰うのには大きな隔たりがある

172

28. 子供にとって理想に見える大人は、年を取っただけの子供である

178

29. 料理に求められるのは愛情でも獨創性でもなく、美味しく食べられることである

184

30. 猜疑心は時に人を助ける ————— 191

31. 時と相手を選ばずに発揮されるのは勇氣ではなく蛮勇である
————— 197

32. 不完全な人間が目指す未来に正解はない ————— 203

33. 責任感のみで職務に当たるものは周囲を不幸にする — 211

34. 過程が同じでも目指す先が同じとは限らない ————— 217

35. 不変の価値観の中で生きる者は幸福であるが愚かである

224

36. 交渉が巧みな者とは、相手の思考を誘導するのに長けた者である
————— 231

37. 何をもって仲間とするかは個人の主観による ————— 236

38. 楽しむる食事は人生を豊かにする ————— 242

39. 戦争のルールとは、強者が勝つために決めた不平等なものである
ある ————— 248

40. 勇将の下に弱卒無し ————— 254

41. 自らが正しいと思えることを行える事は幸福なことである
————— 261

42. 冷水ごときで低体温症になる服が宇宙服に使える訳がない
————— 268

43. 悪が栄えないのは勝った者が正義だからである ————— 274

44. 物事の終わりが劇的に始まることは希である ————— 280

45. 自らの欲望の為に他者を踏みにじる者を悪魔と呼ぶ — 286

46. たとえ笑われようとも、誰かの不幸を無くすために戦う姿は
尊い ————— 293

47. 火星の王様 ————— 299

48. リスク管理は社会人の持つべき大切な技能である | 305

49. 殴って壊せるものが撃って壊せない訳がない | 311

50. 思想家が自らの正当性を疑う事は無い | 317

51. 抗う為の暴力を恐れてはならない | 323

52. 正しさだけで動ける程、人間は強くない | 329

53. 想定外に陥った時こそ、その人物の力量が解る | 336

54. 兵士を常に戦わせる事が出来るのが理想の指揮官である

342

55. 過度の信頼は時に味方を危険に晒す | 349

56. 人の身で全ての問題を解決することは出来ない | 355

57. 善意で舗装された道であっても、当事者が喜ぶとは限らない

58. 敵を知らず、己を知らず | 362

59. 新兵の身分は新兵のみである | 368

60. 些細なきっかけでも人の意思は変わる | 375

61. 刮目して見ようとも、人間が数日で変わることはない | 380

386

62. 武力を持ちながら行使せずに居られるほど人は賢明ではな

い | 392

63. 知識の無い者ほど事故を起す | 398

64. 死は誰にでも訪れるが、断じて平等などではない | 404

65. 辛い時こそ人は笑うべきである | 409

66. 正解を選び続けられるほど人は強くない | 415

67. 物事には常に対価が求められる | 421

68. 利害関係とは当人以外にとって不明瞭な事が多い | 427
69. 世界は常に変化する、それが良い方向とは限らない | 433
70. 歴史とは繰り返すものである | 439
71. 善人の顔をした悪人はよりたちが悪い | 445
72. 努力が報われるとは限らない、しかし報われる者は皆努力している | 451
73. 正しい行動が最良の結果を招くとは限らない | 458
74. 物事を悲観的に捉える人間は心を病みやすい | 464
75. 人は善悪よりも好悪で動くどうしようもない生き物である | 470
76. 誰もが最善を目指して動いている、それが最良の結果に繋がるとは限らない | 477
77. 戦争とは最も野蛮な外交手段である | 484
78. 仲間であるからと言って皆が同じ目標を目指しているとは限らない | 490
79. 戦争において当事者は短期決戦を夢想するが、成功させることは至難である | 496
80. 奇妙な戦争 | 503
81. 戦争は始めるよりも終わらせる方が難しいものである | 510
82. 軍事的優位を取った状況での交渉は、譲歩してはならない | 518
83. 帰ろう、故郷へ | 526
84. 継がれゆく意思 | 532

プロローグ：マっさん火星に立つ

0. 死の間際に人生の決算はやって来る

宇宙世紀XXXXX年某日。

「そろそろかな」

清潔な病室、そこに据えられたベッドに寝ていた老人がそう呟く。隣でそれを見ていた初老の女性が悲しげに眉を寄せ、否定の言葉を口にする。

「何を言っているんですか。まだまだやらなければいけないことがたくさんあるでしょう?」

だが返ってきたのは老人の苦笑だった。

「相変わらず手厳しいな。我ながら随分頑張ったと思うのだけれどね」

そう言いながら老人は目を閉じる。あれから随分と時が過ぎた。かつて共に戦った上司も部下も、今では数えるほどしか生きていない。

「おじ様」

「その呼び方も久しぶりだ」

静かに笑い、老人は自らの人生を顧みる。そして随分と上首尾に終わったものだと、この世界で唯一本当の自分の死を知る彼は考える。平和な世界でベッドの上で老衰、しかも親しい人に見送られてなど、いつそ罰が当たらないかと心配してしまう程だ。

「随分と見送ったんだ。そろそろ私もあちらに行くのが筋だろう。まあ、同じところには残念ながら行けそうにないがね」

「そんな事は」

「あるさ、敵も味方も随分殺した。こんな男が天国になぞ行って良いはずがない」

「でも沢山の人も救ったじゃないですか」

「どうかね」

女性の言葉に老人は大きく息を吐いた。成程、確かに自分の行いで

人生が上向いた者もいるだろう。手の届く範囲、そう口にしながら出来る限りをしたという自負はある。だが同時にそれは手の内の人間を守るために、それ以外を切り捨てたのも厳然たる事実だ。そしてどちらが多かったかと考えれば、明らかに手からこぼれた方が多かったですと彼は信じていた。

「まあ、先のことは逝った先で考えるさ。幸い行き当たりばったりでどうにかするのは慣れてるからね…」

「おじ様っ！」

人の命に敏感な女性が悲鳴に近い叫び声をあげた。目の前の老人から魂が抜けていくことを感じ取ったからだ。だがその叫びも、悲しみに歪む表情も見ることなく、老人は静かに幕を閉じた。

「なーんて、綺麗に終われるわけないだろう？ コメディアンに観客が求めるのはシリアスじゃない、スラップスティックだ」

気が付いたら俺は舞台に立ち、観客席の最前列に座った人物から、そんな言葉を投げかけられていた。なんぞこれ。

「中々愉快的物語になったがね、残念ながらここで舞台を降りられるのは一人だけなんだ。意味は解るだろう？」

印象の定まらない顔のそれが、そう告げてくる。降りられるのは一人だけ、つまりこいつは俺がどういう存在なのか解っているのだ。一つの体に二つの魂が同居するなんて意味不明な存在である俺のことを。

「アンコールに応える義務は貴様にあるだろう。人生をくれてやったんだ、先上がる権利位は譲りたまえ」

その言葉に向かって視線を送れば、見慣れた顔の男が立っていた。「待ってくれ、俺は確かにあんたの人生を変えてしまった。けれどその責任を問うなら俺ではなくこの状況に俺たちを陥れた奴に求めるべきじゃないか？」

「本人を前に責任を取れと宣うとはいいい度胸だ」

そう観客席に座るそれが嗤う。

「だがまあ、言い分も解らなくもない。だから一人は保証してやろう」
その言葉に嫌な汗が背を伝う。

「さて、さてさてさてっ！」

「積み上げた借金を清算して終わる矢先にもう一度借り入れを申し出るとは、中々冥利に尽きるというやつだ。次も精々楽しませてくれよ？」

そう言うナニかにつかみかかろうと、俺は一步踏み出し手を伸ばす、しかしその瞬間舞台が消え去り、俺は抜けるような青空の下、赤茶けた大地に間拔けな格好で突っ立っていた。

1. 人間豆を食っていれば死なないというのは嘘である

『お、おい。本当にいいのか?』

インカム越しに聞こえてくる声は多分に戸惑いの色を含んでいる。ガタイの割に気の小さい奴である。

「構わん、やれ」

『くそっ！知らねえからな!!』

躊躇なくそう告げれば、そんな捨て鉢な台詞とともに、足元のモビルワーカーが動き出す。その動きに合わせて後ろからは濛々と土煙が上がった。うむ、成果は上々である。

「ふははは！いいぞアキヒロ！その調子でどんどん行け！」

うむうむ、急造品の耕耘機にしてはちゃんと機能している。壊れた機材を融通してくれたサクラ女史と直してくれたナデイには後で礼をせねばなるまい。

『今度は何の騒ぎだ?!』

ノリノリでアキヒロと大地に喧嘩を売っていると、突然通信に怒鳴り声が割り込んできた。手にした双眼鏡で確認すると、監視台の上で腕を振り回しているマルバ・アーケイの姿が見えた。

「見ればわかるだろう、演習場の整備だ」

『またお前か！マっ!!』

またとはなんだ。失敬な。

「そうかつかするな。寿命が縮むぞ」

『俺はそんな指示を出してないぞ！モビルワーカーの燃料だってタダじゃねえんだ!』

「そんな事は知っている。そして有能な部下というやつは上司の指示無しでも動くものだ。良かったなマルバ?」

『勝手をするなど言っているんだあ!!』

うるせえなあ。

「後で報告するから気にせず部屋にいろ、上に立つものがそんなでは

鼎の軽重を問われるぞ」

俺がそう言うのと、マルバはがつくりと肩を落として建屋へと戻っていく。まったく、余計な時間を食ってしまった。しかもアキヒロの奴が空気を読んで速度を落としたもんだから予定よりも作業が進んでいない。

「ほら、アキヒロ。手が止まっているぞ、キリキリ耕せ」

『耕せて、演習場の整備じゃねえのか?』

おっと、そういう建前でしたね。

「もちろんそうだと。わが社は警備会社、様々な環境でお客様の生命財産をお守りするのがお仕事だ」

『んなことあ知ってるけどよ』

ふむ。

「ならば話が早い。お客様の財産には農場とその収穫物も含まれる。警備に行った先でそれらを台無しにしてしまつては問題だろう?だから事前にそうした環境での訓練が必要だ。第3演習場はその為に作り替える」

『…つまり畑を作るって事か?』

因みに火星では農地は厳しく管理されている。自給率が上がると支配者が困るからだ。だから畑の開墾は必ず申請が必要だし、莫大な使用料も必要だ。だからそう聞いてくるアキヒロに俺は否と答える。「いいや、これは畑みたいな演習場だ。まあリアルティの為に作物を植えるし、折角だから採れた作物を団員が勝手に食うかもしれない、あくまでこれは畑ではない」

『わけわかんねえ』

「大人の世界は少しだけ面倒なのさ、お前も追々覚えていけばいい」

無然と言い放つアキヒロに俺はそう言つて笑つた。

「あいつは全く!」

社長室に戻つたマルバはそう吐き捨てると備え付けのサーバーから紅茶を注ぎ一息で煽つた。

「失礼します、社長。ローテーションの件でお話が…、どうしたんです？」

ノックとともに入ってきた青年が、マルバの荒れた雰囲気にもう話しかけてきた。視線を向けたマルバは大きくため息を吐くと、口を開く。

「ああ、オルガか。いつもの奴だ、全く、彼奴が金の卵を産むガチヨウじゃなけりや縊り殺しているぜ」

忌々し気にそう口にするが、そのくせ社内で気ままにふるまう彼を放置している事にオルガは気づいていた。

「ああ、そういえば朝っぱらからアキヒ口を連れて行きましたね。また何かやってるんですか？」

オルガの言葉にマルバは鼻を鳴らしながら吐き捨てる。

「演習場の整備だによ！あのバカまた絶対余計な事をするぞ」

「問題はその余計なことが厄介ごとと同じだけ利益を生むってことですな」

オルガがそう笑うとマルバは半眼になりつつそれを諷める。

「あのバカの前では絶対言うなよ。付け上がる」

そう言っつてマルバは再びため息を吐く。そして厄介な男と出会ったその日を思い出す。

「その壺は贋作だぞ」

声を掛けられたのは行きつけの美術商で物色をしている時だった。火星の貨幣価値は、驚くほど不安定だ。何しろギャラルホルンの気分次第で乱高下するのだから、今日の大金が明日には紙屑になっていても不思議ではない。特に近年は火星の独立を訴える活動家が多くなったことで状況は予断を許さない。故にマルバは手持ちの資金を芸術品やレアメタルに換金していたのだ。

「いきなりなんだ、アンタ」

「良い出来だから無価値とは言わんがね。手ごろな日用品ならばともかく、貴方の求めているような役割は果たせんと思うよ？」

そう言っつと男はその近くにあったみすぼらしい壺を取り上げてマルバへ押し付けた。貼り付けられた値段は丁度同額だった。

「あ？だからなんなんだよ、あんた？」

「買うならそちらがお勧めだな」

その壺が購入費の100倍の値段で売れた事が、マルバの人生を大きく変える事になる。同じ美術商で同じような事を三度繰り返した頃、男は何気なしに言い放った。

「掘り出し物はこのくらいだな、では」

別れを告げて男が踵を返した瞬間、反射的にマルバは声を掛けていた。既に多くの利益を上げていたものの、金が多いに越したことはない。この店で出会うだけの関係である二人が今別れたならば、次に会えるのは文字通り奇跡にでも随う必要があるだろう。その思いがマルバの目を曇らせる。だから声を掛けた瞬間、男が邪悪に笑ったのにマルバは気づかなかった。

翌日にはCGSの社長相談役という胡散臭い立場を得た男は、社内を金と暴力、そして甘言で盛大に引つ掻き回し始めたのだ。マルバ本人も多大な影響を受けているのだが、心労が勝っている現状彼に自覚は無く、環境が好転している為にそれを態々指摘する馬鹿も居ない。

「まあいい、それでローテーションだったか？何か問題か？」

「マさんとトドさんが年少組に勉強をさせるから夜勤から外せと。それで変更したローテーションがこれになります」

手渡された書類を一瞥すると、マルバはつまらなそうにサインをするとオルガへ渡しつつ声をかけた。

「もう少ししたら新人を入れる予定だ、苦勞をかけるがそれまでは頼むぞ」

「任せてください、給料分はちゃんと熟してみせますよ」

マルバから声を掛けられ、しかも労われると言う一年前では想像もできなかった事態に驚きつつも、決して顔には出さずにオルガは答えた。

「頼む、ねえ。人間変われば変わるもんだな」

「あ、オルガ」

感慨深く呟きながらオルガが部屋へ戻る最中、オルガは三日月と共に歩いている集団に出くわした。それは三番隊の中でも幼い者を集

めて組まれた年少組と呼ばれる者たちだった。

「おう、ミカ。いったいどうした？」

「おっちゃんが演習場の整備を手伝って」

その命令自体は以前のCGSでもよく出されていた内容だ。しかしそこへ向かう面子がこれほど楽しそうに向かうのはあの男が来てからだった。

「ああ、マさんか。しっかりやってこいよ」

「ん」

その後、何処に出しても恥ずかしくない立派な農場が出来上がりマルバが絶句する事になるのだが、それはまだしばらく先の事である。

2. 企業とは営利団体であり、社員はそれに準じた権利と義務を持つ

「踏み込みが足りん」

気の抜けた台詞がハエダの耳に届いた瞬間彼の視界は回転し、気が付けば青空を眺めていた。思い出したように襲い掛かってくる背中の衝撃に彼がむせると、その原因となった張本人が声を掛けてきた。「受け身を取らんと死ぬぞ」

「な、うげっほっ！投げてからいうんじゃねえ!？」

盛大に咽ながら文句を言えば、相手は不思議そうに首をかしげる。「交戦中の相手にもそういうのかね？体で覚えたまえ」

そう言うとも男は倒れていたハエダを持ち上げると再び放り投げた。「ぐげ!？」

「呑気に寝ていると追撃を受けるぞ。戦闘中は体を止めるな、動け」隊長であるハエダが赤子のように扱われる様を1番隊の面々は青い顔で見続ける。全員の顔には絶望がありありと浮かんでいるが、それでも逃げ出す者はいない。逃げ切れない事は解っているし——以前逃亡を企てた者は、モビルワーカーでひき殺されかけた——逃亡を許せば連帯責任の名の下に、全員に更なる地獄が待っている事を知っているからだ。

「次」

4回ほどハエダが宙を舞い、ぐったりと倒れ伏したところで無慈悲な言葉が彼らへと投げかけられる。

「はー」

涙目になりながらも元気のよい返事をし、次の隊員が前へ進む。指導教官の言いつけを守れなかった場合も追加の指導が待っているからだ。何故このようなことになったのか、宙を舞う仲間を見ながら、彼らはその原因を後悔と共に思い出していた。

「何をしている?」

声を掛けられたのはその日演習場整備を任されていたハエダだっ

た。

「あん？なんだてめえ」

声のした方へ彼が振り返ると、そこには目を細めた男が立っていた。2ヶ月ほど前に社長相談役なる妙な肩書で社に入ってきた新参である。

「今、彼を殴ったように見えたが？」

そう指さした先には、ヒューマンデブリの青年が口の端から血を流して倒れている。そんな当たり前の光景がどうやら目の前の男は気に入らないらしいとハエダは理解し、嘲るように挑発する。

「これがウチのやり方だ、文句があるなら辞めちまえよ。あ？」

ヒューマンデブリ、人買いに売られ、人権を奪われた人だった者たちのなれの果て。その理由は様々ではあるが、買った側からすればそんな事情は知ったことではない。斟酌の必要ない便利な道具として使いつぶすというのが正しい扱いであり、世界の常識である。少なくともCGSにおいてもそれは共通の認識だった、その瞬間までは。

「成程、口をきくだけの知能はあるか。ならば私も最初は言葉で応じよう。今、貴様が彼を殴って負傷させたように見えたが、相違ないかね？」

「それがなんだ？あ？」

長つたらしい言葉に苛立ちながらハエダはすごんで見せた。しかし男はまるで意に介さず、言葉が続ける。

「そうか。ならば彼の治療費は貴様の給料から引いておく、今後注意するように」

ハエダは男の言っている事が理解できなかつた。何故ヒューマンデブリを治療するのか、そして何故その金を自分が支払うのか。意味不明な言葉に思考が追い付かなくなった彼は、衝動的に目の前の男に殴りかかる。しかしその結果は彼の予想と異なるものだった。ハエダは短絡的かつ粗暴な人間だ。それは恵まれた体躯により、物事の大半をそれで解決可能だったからだ。故に彼が物事の解決手段として暴力を選ぶことは至極当然の帰結であったが、今回は相手が悪かつた。

「獣かね君は」

呆れた言葉と同時に顎へ衝撃が加わり、視界が揺れる。それが殴られたことによる脳震盪であると自覚するより先に足が払われ、彼の体は宙を舞っていた。碌に受け身も取れないまま地面に叩きつけられたハエダは悶絶し目を見開く。その先には靴の裏が迫っており、素早く下ろされた。咄嗟に目を瞑るが衝撃は来ず、代わりに顔の横から土埃が上がるのを彼は頬で感じた。明確に命の危機を感じるハエダに向かつて、その張本人は凄むでもなく世間話のような気楽さで告げてきた。

「二丁前に社員を気取るなら、社会人としての常識くらい弁えたまえ。ヒューマンデブりは君たちの玩具では無い、我が社の大切な備品だ。常識的な使用で壊れたならば許容もするが、面白半分で傷つけたり、まして壊すなど言語道断だ。その足りていない頭にしっかりと刻みつけておきたまえ。…さて」

ゆつくりと男が顔を上げる。何処か爬虫類を思わせる容貌に何人かの隊員が後ずさるが、逃亡を図るにはあまりにもタイミングを逸していた。

「私の好きな言葉に連帯責任というものがある。良いも悪いも皆で分かち合おうというとても素敵な言葉だ」

ゆつくりとした動作で男は歩き出す。

「君たちは職場の同僚が蛮行を働いているにもかかわらず、止めもせず眺めていたな？つまり、同罪だ」

その日、1番隊に所属する全員が背中を強打すると共に、序列の変更を頭にたたき込まれる事になった。

「なあ、トドさんや」

「なんだい、マッさん」

1番隊との運動を終えて、事務所でスポーツドリンクなどをキメながら、仕事仲間の一人に声を掛ける。彼の名はトド・ミルコネン、元1番隊の隊員でオルガ達3番隊の教育係だった男だ。俺が入社した

当初はあまり褒められた勤務態度ではなかったのだが、一回投げたら真面目になった。見てみるとどうもこの人計算とか計画立てるのが得意っぽいから、事務方に異動して貰って教育係に専念して貰っている。それから何かと嗜好品を差し入れてくれるので気になって話を聞けば、個人的にオルクス商会と関わりがあると言う。オルクス商会といえば火星と地球間の通商を担っている大手企業であり、この世界の支配者と言っても過言ではないギャラルホルンとも繋がりの深い企業だ。まあ、繋がりとと言ってもお綺麗なものではなく、癒着と表現すべき関係だが。

「前にオルクスと個人的に付き合いがあると云っていたね？」

「ああ、あるよ。何だい、何か入り用かい？マっさんの為なら、俺頑張っちゃうよ？」

露骨な胡麻播りだけど今はその言葉が聞きたかった。

「それは有り難い。実はどうしても欲しいものがあってね」

「ほうほう、言っでご覧よ。大体の物なら持ってこれるぜ」

良いねえ、その安請け合い。

「MS」

「…は？」

「MSが欲しいんだ。勿論軍用の主力なんて贅沢は言わないよ。取敢えずちゃんと動くなら何でも良い」

「いやいやいやいや、まてまて、待てて。MS？MSって言った？」

おや、急に耳が遠くなったのかな？

「ああ、言ったよ。最低1機、可能なら3〜4機欲しいね。もつと贅沢が言えるならロディ・フレームの機体なら最高だ」

「聞き間違いじゃ無かったかあー」

そう言っって頭を抱えるトドに向かって俺は笑いながら続ける。

「無理って事は無いだろう？」

何せ火星圏の航路は危険が山盛りだ。300年前に起こった厄祭戦という戦争の名残であちこちにデブリ帯がある上に、それを隠れ蓑にして海賊行為を行う輩も掃いて捨てるほど居るのだ。本来治安維持機構であるギャラルホルンが掃海を行う筈なのだが、火星は地球の

植民地的な扱いという事もあり、送られてくる戦力も少なければ士気も低い。そんな中でオルクス商会がしつかりと業績を上げているのは、それなりの理由があると言う事だ。尤も、火星圏では有名な話だからちよつと調べれば直ぐに解った。

「海賊には物資の提供やMSのレストアを請け負う事で見逃させ、そうした違法行為はギャラルホルンに鼻薬を嗅がせて目こぼしさせる。実に強かだ、嫌いではない」

俺の言葉にトドは恨みがましい視線を向けてくる。

「だが独り占めは些か欲張りすぎだろう。他の連中に迷惑を掛けているなら尚更な」

「言いたいことは解るけどさ、マッさん。喧嘩を売るのは拙い相手だぜ」

そう忠告してくるトドに俺は言葉を続ける。

「喧嘩なんて売らないさ。MSを売ってくれないかと聞くだけだよ」

幸いにしてウチは警備会社、ちゃんと登録すればMSの保有も正式に認められている。まあ、真面目に登録する気なんてさらさらないが。

「…本当に何でもいいかい?」

「ちゃんと動くならね」

現在合法的にMSを入手するならば、各経済圏に存在するギャラルホルン認定企業から購入する事になる。正直馬鹿みたいに費用がかかるし、当然その機体はFCSも付いていない純粹な作業機だ。そして扱うオルクス商会も美味しくない。何故ならMSの輸送には非常に高い関税が掛けられていて、企業が儲けにくい環境になっているからだ。これはMSという強力な兵器に転用可能な装備がみだりに拡散しないようにするための措置なのだが、同時に大きな社会問題を生んでいる。

密造MSの横行だ。この世界のMSは非常識と思える程の耐久性を誇る動力と骨格を持っている。なにせ300年前の機体がメンテナンスをすれば問題無く動くのだ。そしてデブリ帯には戦争中に放棄された機体が大量に残されている。無論その殆どは損傷している

わけだが、フレーム側はある程度補修出来るし、元々整備のために交換可能な構造であるために、損傷機を持ち寄って1機分を組み上げるなんて事も不可能では無い。こうしたジャンクから再生された存在しない機体が海賊や民兵組織などに出回っているのだ。当然そんなものを売るのも買うのも大問題であるが、そこはそれ、バレなきやいのである。

「今後を考えれば絶対に必要な投資だ。悪いが頼まれてくれないか？」

俺の言葉にトドはがつくりと肩を落とす、力なく頷いた。

3. 文明社会において学ぶという事は最も効率的な自衛手段である

ライド・マツスはCGSに所属する隊員の中でも最年少に分類される少年兵である。基本的な人権が残っている分、ヒューマンデブリの面々に比べれば幾分マシではあるが、社内での扱いは大差ない。そんな彼は、今新たな困難に直面していた。

「ぐぬぬぬ」

「ほら、ライド、そこ違うよ」

横からそう指摘したのは仲間のタカキ・ウノだった。年少組のまとめ役のような存在であるタカキは面倒見も良く、博識だ。それは無論年少組の面々の中ではという但し書きが付くが、それでも字が読めず書けない人間が大半の中で、読み書きが出来るだけでも十分に先んじていると言える。事実、相談役が年少組にこの新たな訓練を指示した際にも、彼は教育係補助に任じられていた。

「……こんなのやってなんの意味があるんだよ」

ライドは自覚がないものの、芸術家肌の人間だ。物事を理屈よりも感覚でとらえる分、阿頼耶識システムによるモビルワーカー操縦については高い適性を見せていて、それが密かな自慢だった。一方でこうした地道な反復練習によって何かを習得する事は苦手としており、それが思わず口に出た形だ。

「字が読めれば本が読める。書ければ手紙が書けるじゃないか」

「俺は効率の問題を言ってるの。そんなの出来る奴がやればいいじゃん。なんで全員が覚える必要があるんだよ？それがおっさんの言ってたテキザイテキシヨってやつだろ？」

そう言いだすライドにタカキは答えに窮する。ほかの少年よりも大人びて見えたとしても彼もまた少年だ。経験に裏打ちされた含蓄ある台詞など望むべくもない。そして間の悪い事に、今日は各隊の幹部を集めて報告会が開かれていて、普段なら対応してくれる大人や、年長組のビスケット・グリフオンのような人物が居なかった。ライド

の言葉に、集中力の切れかかっていた他の少年達、特にライドと同じ考え方をしていた者が次々と手を止めて話し始める。

「確かにこんなのもやっても強くなれないよな」

「字が読めても俺、本なんて読まねーし」

「手紙、出す相手もないしな」

3番隊に所属する子供たちの大半は浮浪児だ。生活の中に本を買うなどという余裕などもろんなかったし、家族も居ない。運のよい者ならばそうした子供たちが集まったコミュニティなどに所属しているが、そこに居る仲間も同様に字が読めないのだから、手紙を送っても意味がない。今を生きるのに精一杯の少年達に、即座に実利へと結びつかないタカキの言葉は無力だった。

「ん、今日は元気だな。順調に学んでいるかね、ガキ共」

騒がしきによってほぼ全ての子供たちが手を止めてしまった会議室にそう言いながら入ってきたのは、彼らにこの新しい訓練を指示した男だった。手には大荷物を抱えていて、そこからは甘い匂いが漂ってくる。夜間に行われるこの訓練に対し、ノルマを熟した者には追加手当と称して毎回彼かトドが甘味を配っていた。尤も全員が終わる事が前提のノルマなので、貰い損ねる子供は居ない。けれど大人の気分次第で報酬が支払われなくなる事を当たり前前に経験している彼らは、慌てて手を動かし始めた。そのなかで唯一手が止まっていたライドに男が気づき、声を掛ける。

「どうした、何かわからない事があるのかね？」

「この訓練に何の意味があるんですか？」

タカキに発した質問をライドは繰り返した。

「ほう、意味かね」

そう口にする男に、ライドは自分の思いを口にした。

「俺、字は読めなくてもモビルワーカーなら動かせます。ならそつちの訓練をした方がよくないですか？」

適材適所。それは目の前の男が口にした言葉だ。そして彼の行動でCGSの状況は良くなっている。ならばその言葉に従って動く方が正しいのではないかとライドは訴えた。しかし返ってきたのは予

想に反して肯定でも否定の言葉でもなかった。

「ライド、君が嘘を吐くとして、ビスケットとアキヒロのどちらに吐く？」

「俺、嘘なんて吐きませんよ」

「たとえ話だよ、嘘がばれないように吐かねばいけないとして、どちらに吐く？」

男の言葉にライドは暫し沈黙した後、恐る恐るといった様子で口を開いた。

「…アキヒロです」

「何故だね？」

「ビスケットは頭がいいから、俺の嘘じゃすぐばれるから」

「うん、そうだな。私もそう思う」

そう言うのと荷物を下ろし、男は全員に聞こえるように話し始める。

「ビスケットとアキヒロならビスケットの方が頭がいい。じゃあ、なんでビスケットの方が頭がいいのか？最初から出来が違った？ビスケットが特別だから？そうじゃない。ビスケットは勉強が出来て、アキヒロは勉強をすることが出来なかったからだ」

「今ライドが言ったな？頭が悪いと嘘が見抜けない。つまり騙されるという事だ」

言いながら取り出した端末に男は書類を表示する。

「これは会社が用意した契約書だ。皆入社した時にサインしただろうか？読めない者は社の人間が読み上げて同意するか聞いてきた筈だ」

実際にはサインすら書けないので代筆まで社員がしたのだが。

「でも君たちは字が読めないから、彼らが本当にこの契約書の内容を正しく読んだのか判断できない。仮に字が読めても意味を知らなければ解らない。頭が悪い人間というのは、そういう悪い人間にとって格好のカモになる」

言い切ると男はライドを正面から見据え、真剣な表情で言葉が続ける。

「今はまだ難しい事を他の連中が考えてくれる。だが私も、他の大人も、若いオルガ達だって、絶対にお前より先に死ぬ。ライド、その時

はお前が考えなきやいけない。お前が仲間を守らなきやいけない。でも、字が読めないお前は騙されても解らない」

騙され、いいように使われるのが日常化していた彼らに、その言葉は重くのしかかる。男は更に意地の悪い表情で続ける。

「それにそんな遠い話じゃないぞ？もうお前たちは社員として働いている。お前たちが行った先で客に騙されれば、会社が損をする。会社が損をすればお前たちの給料が減る。ほら、勉強しないと直ぐに困るだろ？」

男の言葉に、ライドは頬を膨らませながら、それでも頷いた。

わかるわー、超わかるわー。実生活に直結しない知識って、子供には学ぶ理由が解らないんだよね。俺も中学の数学で同じ沼に嵌ったわ。だから、諭すなら簡単だ。これはお前の生活に関係しているんだぞと教えればいい。好き好んで損したい奴なんて居ないんだから、それで十分だ。特に読み書き計算ははつきり言って出来なきや詰むんだから、全員に身に付けさせるなんて確定事項である。

「マっちゃん！終わったー！」

元気よくそう言っただタブレットを突き出してきたのは、年少組の中でも一番幼い子だ。

「うん、出来ているな。では受け取りたまえ」

そう言っただ俺は運んできた段ボールから自作の菓子を取り出す。蓋を開けた事で広がる甘い匂いにつられてか、全員の手の動きが速くなった。頭脳労働の後は甘いもの。大事である。

「終わったー！」

「俺もー！」

次々に差し出されるタブレットを確認して、受け取るのと同時に菓子を配る。見慣れない食い物に皆思い思いに嚙り付いた。

「うめえー！」

「うーん、俺はトドさんが持って来てくれたチョコのが好きだなあ」

「でもこっちの方がでかいぜ」

ふっふっふ、それだけではないのだぞ少年達よ。

「味は負けるかもしれないが、これは凄いなだぞ？何せこの菓子はお前たちが作ったんだからな」

俺の言葉の意味が解らなかつたらしく、皆首をかしげる。確かに直接菓子を作った訳ではないからな。だから俺はこの菓子の出所を教える。

「この菓子の材料はな。お前たちが耕した第三演習場の作物だけで作られている。つまりお前たちは、もう金が無くても甘いものが食えるようになったんだ」

その事実に驚きの声上がる。作ったのは大根と大豆、それにトウモロコシだからな。普段食っているスープの材料が甘味に変身するなど夢にも思えない。

「これも畑の耕し方を、作物の育て方を覚えたからだ。そしてこの菓子の作り方はここに書いてある。勉強すれば全員絶対に覚えられる。だから、頑張れ」

おれは作り方の書かれたメモを振りながらそう告げる。幾人かは感情が振り切れたのか涙ぐんでいる。やっぱり勉強は必要だな。悪い大人に簡単に懐柔されている。

「すっげー！すっげー！！マっちゃん！俺もこれ作れるようになるの！？」

最年少の少年、シエロが興奮気味にそう聞いてくる。頷いてやれば彼は大はしやぎで飛び回る。それを見ていたタカキが俺に近づいてきた。

「ありがとうございます。マさん」

「お礼を言われるようなことはしてないさ。巡り巡れば会社のためだ、社長相談役の当然の仕事だよ」

そう言い返すが、何故かタカキは嬉しそうに笑う。いやほんとこの子達大丈夫か？絶対悪い大人に騙されるだろ。

「それにしてもこのお菓子、すごいですね。本当にあの畑の作物だけで作ったんですか？」

「本当だとも、タカキは字が読めるだろう？このレシピと材料を分け

てやるから作ってみると良い。ああ、折角だから余ったのを持ってい
け、確か妹さんがいただろう?」

「いいんですか!？」

驚くタカキに笑いながら返事をする。

「教育係補佐の特別手当と思えば安いものさ」

「ありがとうございます。ところで、これってなんていう食べ物なん
ですか?」

「ああ、これは……」

そこまで言っただけは不意に言いよどんでしまった。はて、俺が作っ
たこれはいったい何なのだろう?最初はドラ焼きを作ろうと思っ
たんだ。けど小麦粉も卵も手に入らないので生地はトウモロコシ粉で
代用した。中に入れる餡も小豆が手に入らないから大豆をすり潰し
たものに水あめを混ぜたものに変更、当然ドラ焼きみたいに挟めない
から焼いた生地の片面に塗って、丸めてみた。流石にこれをドラ焼き
とは言い張れないし、かと言ってクレープとも違う。甘いからいいや
と自分を誤魔化していたが、そう聞かれると返答に困る。そんな俺を
不思議そうに見つめるタカキ、おいやめろ、そんな信頼しきった目で
俺を見るんじゃない。

「べ」

「べ?」

「ベイクド・モチヨチヨ、かな?」

視線を逸らしそう告げる。この嘘が見破られない事を俺は神に祈
るのだった。

4. 人間は欲求が満たされていれば、多少の不満は許容できる

「もー！ササイさんのエッチ！」

「おさわりは禁止ですっ！」

「かたい事言うなよりザ、ミルダ」

鼻の下が伸びきった表情でササイ・ヤンカスは猫なで声を出す。その間も両脇に侍らせた少女たちの体を無遠慮にまさぐる。それを止めたのは意外にも同僚のハエダ・グンネルだった。

「その辺にしとけ、ササイ。また出禁にされるぞ？」

「うへ、そいつは勘弁」

言うと同時にササイは両手を上げて降参のポーズを取る。そのお道化た雰囲気、両脇の少女が笑い、淫靡さよりも和やかさが勝る空気になる。

「ここを知っちゃったら街の店なんかで飲めねえよ。悪かったな、リザ、ミルダ」

「ササイさんはちゃんと時間と場所を弁えられる人だもんね？」

「そっちのサービスは後で個人的に、ね？」

親子ほど離れた年に見える娘にそう上目遣いで告げられ、ササイは再び鼻の下を伸ばす。それを見てハエダは眉を寄せながら再び苦言を呈した。

「明日もあるんだ。程ほどにな」

CGS本社の一隅。元は倉庫だったその場所は、現在社員用の慰安施設として作り替えられていた。酒と女を格安で提供してくれるこの施設は男性社員、特にそうした欲が旺盛な1・2番隊の人間に非常に好評を博していた。

「しっかし、訓練じゃ鬼みてえな奴ですが、中々粋な事もしてくれるじゃねえですか」

「あの訓練とつり合いが取れてるかは微妙なところだな」

上機嫌で社長相談役を持ち上げるササイに苦虫を噛み潰したよう

な表情でハエダが応じる。

「どうせ払った金は酒と女に消えるんだろう？なら用意してやるからここで済ませろ」

訓練の過酷化、3番隊への体罰禁止、更に職務の増加でCGSに所属する大人たちの不満は増加していた。そんな状況を打開するため彼らを選んだのは、社長であるマルバへの賃上げ要求だった。元々吝嗇家で賃上げをしない代わりに状況を放置していた社長にそう詰りめ寄ることで交渉を行うつもりだったのだ。

賃上げが出来ないならあの相談役を追い出すか、最低でも現場への口出しをさせないよう要求する。それなりの勝算を持って挑んだその交渉は、社長相談役の言い放ったその言葉で頓挫した。元々ハエダ達は知恵が回る方ではなかったし、そうした方面に強かったトドが真っ先にあちらへ付いてしまったためにそこから再交渉につながる事すらできずに彼らは引き下がってしまった。そして交渉から一か月後に開放された慰安施設は、彼らの想像を凌駕していた。まず酒、店で飲めば倍では済まない金額の酒が当たり前のように手ごろな金額で並んでいる。提供されるつまみは種類こそ少ないがどれも味が良く、やはり金額は良心的だ。

だが何よりも彼らの心を驚掴んだのは、愛らしく若々しい娘達の存在だ。表向き彼女たちはCGSの社員であり、施設も偶然相席しているだけの仲という事になっている。事前に示し合わせて施設で合流するためのアプリが全員の支給端末に入っているが、福利厚生の一環として端末のプライベートでの使用が社員同士では許可されているので何らやましい事は無い。断じて事前にお目当ての子を予約するようなアプリではないのだ。ちなみにCGSは社内恋愛について一切禁止をしていないし、プレゼントの贈与に関しても個人の自由を尊重している。致して懸想した相手に、不器用な男が何を送ってよいか解らず、現金を渡したとしても当局は一切関知しない姿勢である。ただし行き過ぎたトラブルは社に損失を与えるとして報告義務と制裁措置が設定されているが。

とにかくこの慰安施設の設置により、社員は安価に良い酒にありつ

き、それまで暴力で発散していたストレスを性的に処理する事が出来るようになったのである。今やこの施設を利用していないのは年齢制限により利用できない年少組とごく一部の変わり者だけである。そして欲望が満たされれば、人間は多少の不満は許容出来るし、その環境の提供者を憎み続ける事は難しい。たとえそれがマッチポンプのような関係であつたとしてもだ。結論からすれば、1番隊と2番隊のメンバーはこの施設によつて社長相談役に完全に掌握されてしまった。

「隊長も素直になりやいいのに」

「馬鹿野郎！俺はちゃんとタイミングを見計らつてんだよ！」

卑猥な笑みを浮かべつつ茶化してくるササイにハエダは怒鳴り返す。存外初心なハエダだった。

「問題はないようだね」

報告書を眺めながら、俺は目の前の女性に声を掛けた。

「まあ、あたしらにとつちや、ここは天国みたいなところですからね。これで不満を言つたら罰が当たりますよ」

答えた彼女は慰安施設の統括責任者兼新設された4番隊の隊長だ。もつともこの部隊は女性だけで編成された完全なペーパー部隊であり、内容は慰安施設の従業員の身分を保証するだけの存在に過ぎない。参加者も全員が浮浪児やヒューマンデブリという3番隊とほとんど変わらない人員構成である。

「ひどい天国もあつたものだ。社員の福利厚生は社の義務だし、君たちはわが社の社員なんだ。不調の場合は遠慮なく申し出るように」

「…そこで壊れたら用済みと放り出されないだけでも、信じられない厚遇ですよ」

そう言つて彼女は自分の頬を撫でた。彼女の左頬には目から口元にかけて大きな切り傷がある。彼女はヒューマンデブリである。幼い頃海賊に誘拐され、変態の金持ちに売り払われた。そこで変態の倒錯した趣味により全身に傷を負い、死にかけてところを飽きて捨てら

れたのだそう。路地裏で拾ったときは本当に死体だと思ったからな。

因みに火星の性風俗ははっきり言って滅茶苦茶質が低い。何せ若い女が簡単に手に入る環境だ、客も経営者も風俗嬢を割り箸かポケッツトティッシュ並みの消耗品感覚で扱っている。短期間で壊されることが前提だから店側は研修なんて余計な費用を掛けないし、寧ろド変態に高値で売ってポイ捨てが効率が良いと考えている節すらある。そんな状況だから嬢も性技なんて持ち合わせて居ない。だから客も技術で気持ちよくなれない分、自分の楽しめる使い方をするという、最悪の循環が生まれているわけだ。まあ、おかげでちよつとしたレクチャーだけで社員共を骨抜きに出来たので、俺的には美味しい状況だった訳だが。

「君たちから十分搾取している人間に恩など感じる必要はないと言っているだけさ。手に負えない程壊れてしまったら私だって捨てる。だから壊れる前に言うように」

前の世界と異なり、この世界は子供が酷く飽和している。当然彼らの価値は安く、買ったたかれることになる。それが常識の世界に、気に入らないと唾を吐くのは簡単だ。だがそんなことをしても誰の腹も膨れない。

「まったく、ないもの尽くしで嫌になるね」

今の俺には金がない、力がない、権力も持っていない。そんな奴が世界を批判しても、間違っていると嘆いて見せても何も変わらない。だから変えるためにはそれが要る。

「相談役は火星の王様になるんですか？」

「王様？」

そう聞いてくる彼女の言葉の意味が解らず俺は聞き返してしまっ

た。
「だって、相談役はこの会社のナンバー2です。お金だったたくさんあります。1番隊との訓練も見ましたがすごく強かった。けれど足りないかと仰る」

「……」

「だから、もつとすぐくなるのなら、王様かなって」

王様、王様ね。

「いいね、王様。けどそれじゃまだ足りない」

俺の言葉に彼女は目を見開く。

「王様でも足りないんですか？」

うん、足りない。

「火星の王様じゃ変えられるのは火星だけだろう。俺はこの世界が気に入らない、酷く気に入らない。この世界を変えてしまいたい。だから、目指すなら世界の大王様だろうかね？」

滅茶苦茶な事を口にする男の前に、スピカ・ネーデルは言葉を失った。目の前の命の恩人は、嘯くように世界の王になりたいと口にした。一見すれば、スピカの言った火星の王様という言葉に応じた言葉遊びの類だ。彼女が任されている慰安施設という名の社内売春小屋に足繁く通う男たちが口にしたならば、笑って茶化していたことだろう。

(だって、あれは本気の目だ)

浮かべていたのはいつもの軽薄な笑み。口ぶりだって普段通り周囲を煙に巻くような言い回し。だがその中で、目だけは全く笑わず、その言葉がどこまでも本気だと雄弁に語っていた。

「大王様になって、相談役はどんな世界にしたいんですか？」

それを理解した瞬間、スピカの口からそんな言葉が飛び出した。何処までも胡散臭い男が口にする安っぽい法螺話。けれどヒューマンデブリと呼ばれる少女はその続きがどうしても聞きたかった。

「そうだな、誰もが明日が来るのが当たり前で、そんな不安を口にすれば笑われる。そんな世界がいいな」

それは一人の人間が見るには、あまりにも壮大すぎる夢物語。けれど絵空事と笑い飛ばすには眩しすぎて。もつとその先を聞きたくなって。だから、彼女の口は熱に浮かされたように言葉を紡ぐ。

「そこには、その世界には、私の居場所もあるのでしょいか？」

彼女の言葉に男は一瞬目を見開いた後、少し怒った口調で語り出す。

「当然じゃないか。私は皆と言った。皆だぞ？皆とは全員という意味だ。地球に住んでいる奴だけだとか、コイツは例外なんてものがあるのは全員とは言わない。第一世界を変えるんだ、そんなみみっちい夢を叶えてどうする？今度こそ俺は——」

男が熱く語るが、スピカは殆ど聞き取ることが出来なかった。溢れてこぼれそうになる涙を堪えるのに必死だったから。

5. 成功には才覚が要る、そして才覚のある者は少ない

マルバ・アーケイは良くも悪くも凡人である。彼の不幸は言ってしまうと凡人でありながら幸運だった事だ。クリユセのそれなりの家庭に生まれた彼は、多くの恵まれた若者がそうであるように良識と常識を身に付け社会へと巣立つ。彼の不幸の始まりと言える最初の幸運は、個人商の真似事をしてる最中に、悪魔の名を持つMSを発見してしまった事だろう。教えられてきた正義と遙かに乖離した現実を憤っていた彼にとつて、この出会いは運命に感じられたのだ。もちろんそれは運命だったのだろう、尤もそれが良いか悪いかは別として。もし彼が根つかからの悪人だったならば、手にした幸運を悪用するに留まり、もつと平穩に惨めな終わりを迎えられるかもしれない。しかし若かりし頃の彼は、この力で不条理な世界に抗えるのではないかと考えた、考えてしまった。なけなしの財産に親の遺産までつぎ込んで会社を設立。社会の弱者として扱われる者たちの受け皿になると、彼は本気でそう思っていた。だが幸運は永遠には続かない。会社の運営に対する知識を持っていても、彼にはそれを大過なく運用する才覚は持ち合わせていなかったのだ。当初は彼の熱心な態度に乗り気であった出資者達も、業績が上がらないと見ると、一人また一人と手を引いていった。知識のない者、未熟な者を扱う事の難しさをマルバが痛感した時には、CGSは投げ捨てるには大所帯であり、マルバのなけなしの才覚とコネで何とか自転車操業を続けているという有様だった。

そして人は貧すれば鈍する。能力がない従業員は扱えない、ならば使えるようにすればよい。

どちらにせよこのまま放置すれば衰弱して死にゆくのだ。ならば多少の犠牲は出るにしても多くの命が明日へつながるだけの力が入るなら、使わない事はない。

自らをそう欺瞞して、マルバは浮浪児達へ阿頼耶識システムの施術

を指示する。最初は能力の低い者だけだったそれが、全員に植え付ける事が当たり前になるまでそれ程時間はかからなかった。

「声かけに応じたのは10人か」

「ウチは悪名高い人さらいのCGSですからね。むしろ10人集まっただけ上出来でしょう」

そう言ったのは2番隊を纏めているサブード・カタンだった。元は最近変死した金持ちの私兵をやっていたとのことだが、詳しい経歴は聞いていない。ある日埃まみれで帰ってきた相談役が戦利品と称して連れてきた人間の一人である。

「予定通り体力テストの後、配属を決めます。まあ、半分は5番行きだと思います」

そう続いたのはヤスネル・ハンクだ。彼も同じく戦利品の一人であり、マルバは経歴について目を瞑っている。彼の口にした5番隊は4番隊とほぼ同時期に編成された新設の隊で、主に基地内の雑務全般を取り扱う隊である。年齢性別すべて不問のこの隊は言ってしまうばマルバが最初に目指した弱者救済用の隊だ。表向きは経験豊富な老人の技術吸収並びに若手の育成と言う事になっているが、内容が文字通り子供の手伝い程度で衣食住を提供しているのだから。設立当時は古参の大人達から不満の声も上がったが、相談役の、

「ならばすべて自分でやれ（意識）」

と言う非常に解りやすい説得と、雑務の拘束時間が減ることで慰安施設の利用時間が増える実利の前に沈黙した。

「施術無しならそんなもんだらう。全員満足に雇えるだけ気楽なもんだ」

阿頼耶識システムの施術成功率は決して低くない。だがそれは施している側の理屈であり、施される側からすれば何人かに一人は必ず発生するリスクだ。マルバはその成功率の低さから目を背けるために次第に施術に立ち会わなくなったが、それでも浮浪児達を運んできたトラックが再び何かを載せて走り去るのを何度も見送っている。そう溢すと二人が驚いた表情を作っている事に気づき、マルバは不機嫌そうに睨みつける。

「なんだ、悪名高い人さらいの親玉が浮浪児の事を心配するなんぞ滑稽か？」

「はつきり申し上げれば、驚いています。まあ、良い方の驚きですが」「…俺だって正論だけで生きられるならそうしていたさ」

会社を興し人を雇えば、そこには必然的に彼らに対する責任が発生する。凡人のマルバには綺麗ごとだけで彼らへの責任を果たせるだけの能力がなかった。だが同時にそれが出来るならば、綺麗ごとを優先する程度に彼は平凡な男だった。

「あの馬鹿のおかげで資金繰りは順調なんだ、経営拡大を狙うなら今だろう。引き続き人員の募集を——」

そう今後の方針をマルバが告げていると、遠雷のような地響きと共にオフィスが僅かに揺れる。不審に思ったヤスネルがブラインドの隙間から外を見ると、巨大なトレーラーが格納庫へ向けて移動していた。

「トレーラー？」

「また何かしでかしやがったか!？」

ヤスネルの言葉にマルバはそう叫ぶと格納庫へ向けて走り出す。暫くしたら社長の中年太りが解消しそうだななどと、どうでもよい事を考えながら二人は肩をすくめるのだった。

「おまつーこれ!?なあ!？」

搬入作業に立ち会っていたら、息を切らせたマルバが走り寄るなりそう叫んだ。うむ、中々の反応速度だな。別に大したことじゃないからどっしり構えてればいいのに。

「お前、いったいこれは何なんだ?と言うところか?」

見ての通りですよ?格納庫でも一番奥のスペースに移動したトレーラーの荷台からシートがはがされる。そこには仰向けに寝かされたMSが鎮座していた。

「どーよお、マっさん。ご注文の品だぜい!」

トレーラーの助手席から降りてきたトドがどや顔でそう告げてき

た。俺は笑顔でサムズアップし、トドに伝える。

「パーフェクトだ、流石だよトドさん」

注文した通りの満額回答に思わず頬も緩むというものである。入ってきたトレーラーは4台。内3台にはMS、そして残りの1台には武装や補修用の装甲材などが積まれている。

「ご要望通り全部ロゲイ・フレーム！ちゃんと交換用のシートもセット！まあ、ちよつとばかし値は超えちゃったけどね？」

そう言っただけはタブレットの画面をこちらに見せてくる。うむ、想定より30%程高いが、十分許容範囲だ。同じようにタブレットを見ていたマルバが目を見開くとトドからそれを引っ手繰り、わなわなと肩を震わせた。

「こ、こ、この、こ!?!」

うん流石に何言いたいか解んねえや。

「鶏の真似かね？あまり似ていないぞ、社長」

「これ、おま、この額!?!」

そんなに驚く額か？たかだかわが社の年間運営費4年分じゃないか。知ってんだぞ、内部留保が大分貯まってんの。

「そろそろ所帯もでかくなってきたからな、事業拡大の時期だろう？その為の投資だ」

もつとも、この事業が上手くいくかはマルバ次第だったりするので。状況がまだ呑み込めないのか、酸欠の鯉みたいに口を開け閉めするマルバの肩を強く叩き、正面から見据える。頼むぜ社長、こんな程度で怖気づいてもらっちゃ困るんだよ。

「しっかりしろ、社長。もう買ってしまったんだから後には引けん。この事業の成否はお前の双肩にかかっている」

「お、俺の双肩だあ？適当な事を言っただけで誤魔化そうだったって」

失敬なやつだね。

「面白半分でMSを買う馬鹿が居るか。ちゃんと収益を考えて買っている」

「ほう？ギャラルホルンに喧嘩でも売って火星の独立でも勝ち取るのか?」

何を馬鹿なことを。

「それは追々だ、今は戦力が足りらんから手近なところから始める。差し当たって火星周辺のデブリ掃除だな」

「とてつもなく不穏な発言が聞こえた気がするんだが」

マルバの言葉を無視して話を進める。

「デブリ帯の原因はエイハブリアクターだ。こいつを回収する」

「馬鹿か、儲けが出せるなら誰でもやってんだ。脳みそ気な相談役様に教えて差し上げるがな、宇宙つてのは滅茶苦茶広いんだ。てめえが言ってるのは砂漠で一粒の砂金を探して儲けようつて話なんだよ！それもその砂漠は縄張りになっている海賊どもがわんさと居るんだ。そんな所で呑気にデブリ拾いだ？命がいくつあっても足りねえよ!!」

「そらそうよ、小遣い稼ぎにやリスクが高い。何せ大抵の連中は持っているても作業用のMS、大半はモビルワーカーだ。」

だがここで重要なのは、実のところリアクターの回収そのものはそこまで確率の低い話じゃないということだ。何せデブリの濃いところならばほぼ確実に存在しているし、そうした宙域の位置は粗方マップピングされている。じゃあなんでジャンク屋が群がらないかと言えば、大きく分けて二つの理由がある。第一がエイハブリアクターの使い道だ。保護されていない電子機器を破壊してしまうこの動力は都市部での起動どころか持ち込みすら禁止されている。つまり拾ってきても売る相手が極端に限定される。もう一つがマルバが言う通り、デブリ帯は海賊どもが根城にしているため、相応の自衛手段がなければ自分がデブリの仲間入りをしてしまう事だ。そしてこの世界はギヤラルホルンによって戦力の保有が厳しく制限されている。真つ当な手段で海賊に対応可能な戦力を整えるなど、それこそギヤラルホルン以外には出来ないのだ。

「はっはっは、言われんでも承知の上だ。だが問題ない」

「どこがだよ！ああ…、折角まともに会社が回せるって矢先にこんな…」

前にも言ったと思ったけどなあ。この会社の資産はちゃんと把握しているって。

「むしろ海賊が来るなら大歓迎だ。稼働状態のリアクターが向こうからわざわざ来てくれるんだぞ？探す手間が省けるじゃないか」

「本気で馬鹿か、たった3機やそこらのMSで海賊を返り討ちにするってのか？」

勿論大真面目にそのつもりだ。

「行けるさ。何せこちらには悪魔が味方についているんだからね？」

俺の言葉の意味を理解したマルバが顔を青くする。しかし俺は気にせずに話を続けた。何せ本当にお前さんが青くなるのはここからだからな。

「問題はリアクターを確保した後だ。特殊な分利率も期待できるが、如何せん買手手確保できなければ意味がない」

「そ、そうだ！肝心のそこが抜けてる！やっぱりこんなのは——」

止めろと口にする前にマルバの肩を強くつかんで黙らせる。悪いが俺はもう覚悟しちまったんだよ。

「そこで社長の出番だよ。君の知人にはリアクターを喜んで買ってくれそうな人がいるだろう？」

「そんな奴知らねえよ!!」

嘘は良くないなあ。

「そうかい？名瀬・タービン辺りは欲しがると思うのだけれどね？」

俺の言葉に青を通り越して土気色になるマルバ。だがこのマ、最早引かぬ。

「リアクターの製造をギャラルホルンが独占している以上、彼らが戦力を拡充するには鹵獲か発掘品を使うしかない。欲しがる人間に欲しいものを売りつけるのが商売の基本だよ？」

俺は笑顔でそう言い切った。

6. 悪評は一瞬で広まるが、払拭には莫大な時間と金を必要とする

ガンダム、かつての世界でぶっ壊したり、仲間にしたたり、乗ったり、ぶっ壊したりぶっ壊したりあとぶっ壊したりした因縁のある機体である。こちらの世界でもMSがある以上当然存在しているわけだが、その存在は宇宙世紀のそれとは一線を画している。

一言で表せば、対MA用決戦兵器。かつて何がどーなって起こったのか解らん厄祭戦なる大戦で、人類と敵対した自律兵器であるMAを狩るために生み出されたMS、その中でも別格の性能を有し、戦争を終結へと導いた伝説の機体である。72機が生産されたとされていて、しかもその全てが別の機体だったという。正直兵器の運用経験がある人間にしてみれば、ふざけているのかと問い詰めたくなる仕様だが、何せ耐用年数が300年を超える上に文字通り人類の旗頭として運用される機体なのだ。そうした工業製品的なチャチな概念とは無縁なのかもしれん。まあ、そうなる并希望の象徴に悪魔の名前を付けるのはどうなんだと言いたくなるが。

「どうだね、ミカヅキ」

『ん、平気』

目の前に鎮座するガンダム、そのコックピットに収まったミカヅキ・オーガスに向けてそう問うと、彼は素っ気なく返事をした。

「おい、ミカー」

その態度に慌てた様子で、隣に居たオルガ・イツカが声を上げる。了見の狭い大人の中で生きてきた彼等だ。俺の機嫌を損ねるとでも思ったのだろう。

「構わんよ、ここに居るのは身内だけだ。ミカヅキがああなのは知っ
ているしね」

そもそも口数が少なく表情もあまり変わらないから誤解されがちだが、ミカヅキはよく考えているし気も使っている。惜しむらくは礼儀作法を覚える機会が無かったために、それを彼なりのやり方でやつ

ていることだ。その所為で大半の人間に彼の真面目さが伝わっていない。

「すみません、マさん」

「謝罪するのはこちらだよ、オルガ。社員教育の不備だ、読み書きが一段落したらマナー方面も追加しよう」

お客様の印象はリピート率に直結する。同じ金額で同じ仕事を頼むなら、好印象な方に依頼することは当然だからだ。まあ、暫くは忙しくなるだろうしこれも年少組からかなあ。そんな事を考えていたら、同期が済んだのかガンダム頭部が僅かに動き、特徴的な双眸がこちらを捉えた。

『俺が悪いのに、なんでオルガが謝るの?』

苛立ちを滲ませた声が響く。強い口調なのでまるでこちらを責めているように聞こえるがそうではない。あれはオルガに謝らせてしまった自分への怒りと、何故そうなってしまったのかが解らない事への苛立ちだ。こんな事も解らない子供をMSに乗せて殺しをさせる。こりゃ次も地獄行き確定だな。

「それはな、ミカツキ。オルガがお前を仲間だと思っているからだ。仲間というのは素晴らしいものだが、同時にとても厄介なものでもある」

『厄介?なんで?』

「自分の行いが自分だけのものではなくなるからさ。一人で生きていけば出来る事は少ない。けれど自分のやったことの報いは全て自分に返ってくるだけだ。それは解るか?」

返事を待っていると、暫くしてガンダムが首肯した。なんか変な気分だが今はおいておこう。

「仲間と居ればやれることはでかく、多くなる。畑を耕しながらモビルワーカーを整備して警備の仕事に行くなんて、一人では無理だろう?でも仲間が居るから私達はそれが出来る」

再び頷くのを確認したら、いよいよミカツキの知りたいことを教える。

「仲間は素晴らしい。だが仲間を持った瞬間、我々は他の奴らから見

ればミカヅキやオルガ、マではなくなる。全員CGSの社員と見られるようになる」

『どう違うの？』

「全然違うさ。例えば私が誰かを気に入らず殴ったとしよう。一人なら暴力を振るう危ない馬鹿で済む。だが社員の私が殴ったならば、他の連中はこう思う。ああ、CGSの連中は平気で暴力を振るうような奴らだとね」

『おっちゃんが殴っただけなの？』

「仲間というのはそいつと一緒に居ても構わない、そいつのやることを認めている連中だと思われると言う事だ。つまり仲間の誰がやったことでも、全員がその報いを受ける事になる。ミカヅキはさつき私に敬語を使わなかったな？我々は仲間だから構わない。けれど他の連中は違う。何故なら年上には敬語を使うのが当たり前だからだ」

長々と喋るが、反応は薄い。くそ、上手く伝えるって難しいな。

「世界にはそうした皆が当たり前だと思っているルールがある。そしてそれを破るのは悪い連中のする事だと思っている。そして悪い奴が仲間にいる奴らは、悪い連中だと思われる。だからさつきオルガは謝ったんだ。俺達は悪い連中ではありません、俺の仲間が悪いことをしてすみませんとな」

『…なんか、面倒』

素直すぎるその言葉に思わず苦笑する。けれど同時に俺は安堵した。面倒だと思えるという事は、理解出来たと言う事だからだ。

「そうだな、けれど大事なことだ。凡そ全ての人間は誰かの仲間だからな。誰かに悪い連中と思われるということは、その仲間からも悪い連中と思われる事になる。するといつの間にか信じられないくらい多くの人が敵になる」

「…おっかない話ですね」

世界が敵になる事の怖さが解るオルガがそう言って顔を顰めた。少し脅かしすぎたかな？

「そう構える事はない。何故ならその逆もあるからだ。我々が良い連中だと思われれば、助けてくれる人も増える。助けてくれる人が増え

れば、私達はやれることがもつと増える。小難しいことを言ったが、要は他の奴らに気に入られるように振る舞った方が得だと言う話だ。覚えておいて損はないぞ?」

『ん』

ミカツキの気のない返事を聞きながら、俺達はガンダムのチエックを進めた。

「相談役は一体何モンなんすかね?」

休憩のためにベンチに腰を下ろして息を整えていたハエダに、ササイがそう聞いてきた。

「あん?」

搬入されたMSの内、2機は阿頼耶識システムを用いていない通常シートのものであった。困惑している1番隊と2番隊のメンバーの前に、相談役はリストを見ながら事もなげに言い放った。

「ハエダ、ササイ。貴様らを当面この機体のパイロットにする。慣れしておくように」

MSは貴重と言うだけではない。極めて強力な戦力でもある。ハエダ達は当初、この機体は全て3番隊が運用すると考えていた。運び込まれた当初は全て阿頼耶識システム対応機であったし、何より3番隊の連中は相談役に良く懐いている。強力な武器を渡すならば、彼に反抗的だったハエダ達より従順な彼等だろうと自然に考えていた。ところが蓋を開けてみれば、1機は予備機として動力室に運び込まれ、残った二機は全て1番隊預かりとするという指示だ。その後、3番隊には基地の動力源としていたガンダムタイプという強力な機体が回されると説明を受け、大半のメンバーは納得したものの、ハエダ達は釈然としない思いだった。何故なら各隊の戦力をバランス良く編成する必要性はないのだ。例えば3番隊に強力な機体があるとしても、MSを独占させない理由は無い。しかも阿頼耶識システムすら取り外しているから、万一の場合にも3番隊で動かせる人員はごく僅かになってしまっている。

「訓練すりゃ鬼のように強えし、相談役が来て以来仕事が途切れねえ。拳句MSの操縦ですよ」

「少し試してみようか」

そう言うと、相談役は手慣れた様子でMSに乗り込み、見事に操つてみせた。自分達が乗っているからこそ、ササイにはあの動きのすごさが理解出来た。求められている水準の高さに青くなりながら、ハエダとササイは必死に訓練をしている。

「さてな。火星は訳ありの吹きだまりでもあるんだ、どんな経歴の奴がいても不思議じゃねえさ。ただまあ、後ろ暗いモンはねえんだろう」

「何ですか?」

「悪事を働いて逃げてきたなら、隠れようとするのが普通だろう。目を付けられるような事は極力避けるはずだ。アレがそんな事を気にしているように見えるか?」

「ああ…」

気の抜けた表情で納得するササイ。恐らくあれが来てからの乱行を思い出していたのだろう。何しろ法律すれすれどころか明らかに脱法まがいの事まで手を出している男だ。クリユセの役人が来たのも2度や3度ではない。今度こそ終わりだと嘆くマルバの姿は、既にCGSの日常風景になっている。

「取敢えず後ろ暗い云々はともかく、頭がイカレてるのは確かだろう。じゃなきゃこんな事は思いつかねえだろうさ」

「上手く行くと思いますか?」

ハエダの台詞で訓練の本来の目的を思い出したササイが、そう不安げに尋ねてくる。それに対してハエダ自身も明確な答えは持っていない。何しろ彼とてMSに乗るのはこれが初めての経験であるし、更に海賊の規模や戦力などの情報も持っていないのだ。答えられるはずがない。しかし、ササイのようにこの計画自体の成否についてはあまり不安視していなかった。

「相談役はイカレちやいるが馬鹿じゃない。これまでだって彼奴がやったことで失敗した計画がねえのがその証拠だ。尤も、今回ばかり

は簡単にとは行かねえんだろう」

「それじゃ」

恐らく中止を訴えるべきだとササイは考えている。それを理解した上でハエダは続きを制した。

「慌てんな。だからMSと訓練なんだろう。それに海賊共は襲うのは慣れていても戦いには慣れていねえ」

そもそも海賊は商船を襲撃するのが目的だ。武装して待ち構えている戦う事を前提とした連中とやり合った経験は決して多くない。

「まあ、それでも相談役が動かした位の腕は期待されんだろう。気張れよササイ、これで上手くいきやあ俺等がCGSのエースだ」

「へへっ、いいっすね。そりゃ本気でやらんとすね」

ボトルの水を飲み干し、二人は腰を上げる。機体を見上げて気合を入れ直した二人の耳に、聞き覚えのある怒声が届いたのはその時だった。

「マあ!!てめえまた勝手に会社の金を!!」

「投資だと言ってるだろうマルバ!儲けるにはあの船じゃ手狭すぎるんだ!大体勝手にではない。ちゃんと改造費用は依頼書を上げただろう?お前のサインも有るじゃないか」

「消耗品の購入書類の中に紛れ込ませてサインさせたんじゃないか!?!」

「はっはっは、ちゃんと書類は確認すべきだったな。大体ごねた所でいずれ改造が必要な以上、早いか遅いかの差でしかないぞ」

「だからって相談無しにするんじゃないやねえ!失敗したら会社を畳むことになるぞ!?!」

「大丈夫だ。成功させれば問題無い」

怒鳴り合いながら第3演習場へ向かっていく二人を見送りながら、ハエダは嫌な汗が背中を伝うのを自覚した。

「やっぱりダメかもしれないねえな」

彼の呟きは、幸いにして誰にも聞かれることは無かった。

7. 悪人にも人権はある、考慮する必要はない

「どこのどいつか知らねえが、間抜けもいたもんだぜ」

火星に最も近いデブリ帯。その外縁近くに身を潜めていた彼等は、暢気に航行する獲物を見て下卑た笑い声を上げた。

『案内人も護衛も無し。素人か？馬鹿な奴らだ』

この時代厄祭戦の名残によって、惑星間の航行は大きく制限されている。戦争で大量に放棄されたエイハブリアクターによって引き起こされた重力異常宙域は多くのデブリ帯を形成しただけでなく、艦艇の航路そのものを歪めてしまう。そのため現在の惑星間航行はアリアドネと呼ばれる位置情報を発信し続けるマイルストーンを目印に、それに沿う形で進むというのが常識だ。だが物事には何事も例外が存在する。アリアドネはギャラルホルンによって管理運営されている装置である。当然定期的な点検や航路の掃海なども彼等が行っており、不審な艦艇などの臨検なども業務に含まれている。そして惑星間の荷物は合法のものだけとは限らない。そうした後ろ暗い荷物を運んでいる連中はアリアドネの位置情報を受け取れるギリギリの範囲を通り、ギャラルホルンの目を掻い潜ろうと試みる。

だがそれは別のリスクに繋がる選択だ。当然ながらそのような場所は掃海などされていないから、デブリ帯に接近、最悪その中へ突っ込む事になる。エイハブリアクターの影響で電波機器が有効に使えない状況で多数のデブリが残留した場所を通り抜けるのは、目隠しをして岩だらけの海に飛び込むに等しい行為だし、その海には海賊という海蛇たちが巣を作って獲物を待ち構えているのだ。ギャラルホルンが海賊の摘発に積極的でないのもこの辺りが起因している。どうせ被害に遭うのは法に触れる連中なのだ、そのような連中の手助けなどする必要は無いというのが彼等の偽らざる気持ちだろう。

故にこのような場所を使う連中は、一般的に自衛可能なだけの護衛を用意するか、或いは海賊の目をくぐり抜けられる案内人を用意するのが一般的だ。だが今海賊達の前を暢気に進む船は、そのどちらも伴っていない。警戒心の強い者ならば手出しを控えたかもしれない。

しかし、年に1〜2度はそうした無謀な連中が居るといふ事実が彼等の判断を鈍らせた。船そのものが厄祭戦時代の軍艦を転用したものであったから、船の性能を過信しているのだろうと言う思いも、それに拍車をかけさせたのだ。

「よし、やるぞ。鼠共を突っ込ませろ！」

海賊と言ってもその規模は様々だ。ブルワーズと名乗る海賊のよ
うに、MSを10機以上運用しているような大組織もあれば、艦艇す
ら満足に整えられていない零細もある。そのような中で彼等は2機
のMSとヒューマンデブリによるモビルワーカー部隊を運用するそ
れなりの規模だった。だから海賊達が獲物に感謝していたその時、獲
物側も神に感謝していた。

「はっは、見たまえ！ 実に手頃な相手じゃないか。我々は運が良い！」

襲い来る海賊に対してそう本気で笑い声を上げる男を見て、ユージ
ン・セブンスタークは男の口車に乗って計画に参加したことを激しく
後悔した。そもそも当初の想定はあくまでデブリからのエイハブリ
アクター発掘が主であり、海賊討伐は想定されるが副次的な目標のは
ずだ。だが、嬉々としてMSに乗り込もうとしている相談役は、明ら
かにこちらを目的にしている口ぶりだ。

「ミカヅキ、ササイ、準備はいいか？」

『うん』

『お、おうよ！』

「ハエダ、アキヒロ。連中が降伏を受け入れない場合もある。準備だ
けはしておけ」

『わかった』

『了解』

手慣れた様子で矢継ぎ早に戦闘指示を出した相談役は躊躇無くM
Sのコックピットへ収まると、最後の確認とばかりに作戦を説明しだ
す。

『では分担の最終確認だ。敵の旗艦はミカヅキ、モビルワーカーと本

艦の防衛はササイ。相手のMSは私が受け持つ。ユージン、ミカヅキの説得が失敗したら白兵戦に持ち込む、合図の信号弾の色は覚えているな？見逃すなよ』

「は、はいー」

急に話を振られ、ユージンは慌てて返事をする。上擦った声が出たことで羞恥に顔が赤くなるが、それを指摘する者は居ない。否、誰も彼もが緊張していてそんな余裕はないのだ。

『ミカヅキ、ササイ。なるだけ殺すなよ』

『なるだけでいいの?』

『殺すな、と本当は言いたいがね。そこまでの余裕はまだ無い。敵よりもまず味方の安全確保が大切だ』

『…じゃあなんでこんな計画立ててんだよお』

『儲かるからだ。腹をくくれ』

情けない声でそうぼやくササイの不満を相談役はあっさりと切つて捨てる。そして不敵な声音で開戦を告げた。

『では諸君。仕事の時間だ』

『ひい!!』

耳障りな悲鳴が聞こえると同時に、MSを操っていた海賊の視界が白く染まる。それが獲物である船から発射された閃光弾だと理解すると、頭に血がのぼるのを男は自覚する。食い殺すだけの筈の相手から受けた痛みのない反撃は本当の反撃よりも男を苛立たせたのだ。

「ただの閃光弾だ！さっさと突っ込め鼠共!!」

海賊の戦術は至ってシンプルだ。ヒューマンデブリで構成された部隊をけしかけ、相手の疲弊を狙う。デブリ達だけで船に取り付けられれば儲けもの、失敗しても本命である部隊が後詰めをかける。一見すれば戦力の逐次投入という愚策でしかないのだが、当人達にとってはこれが最も理に適った戦術である。スクラップと同額程度のはした金で買い込める消耗品と自分達では命の価値が違う。彼等は本気でそう考えているし、阿頼耶識を施術されたデブリ達の動きは俊敏でこの

ような雑な扱いであつても一定の戦果が上げられてしまうことから、見直しを考へるような奴はいなかつた。尤も、だからこそ組織を今以上拡大出来ていないのだが。

『ぎゃつ!?!』

獲物の船は退避行動に移りつつ対空砲をばらまく。その射撃はお世辞にも良いとは言えず、弾幕も薄い。やはりものを知らぬ馬鹿な獲物、そう確信した所で不幸にも1機のモビルワーカーが被弾する。直撃こそ免れたものの、被弾で制御用の推進器が損傷したその機体はよろよろと戦域から外れていく。

「ちつ!あの程度の対空砲に当たりやがつて…ん!?!」

部隊の後方に陣取り、様子を見ていた海賊はそれを眺め舌打ちをする。相手を完全に侮っていた彼は、デブリよりも遥かに高価なモビルワーカーを損傷させた罰をどう与えるかなどという事に意識が向き、その僅かな時間で起きた変化への対応に致命的な後れを取る。

『も、MS!?!』

『う、うわあ?!?!』

船の後部、本来備わっている格納庫から3機ものMSが飛び出してくる。

「マン・ロディ!?!それになんだアイツは!?!」

安っぽい白色で塗装されたそれらは見るからに統制の取れた動きでこちらを迎撃する。だが愚かにも彼はそんな動きよりも、特徴的なデザインを持つ敵のMSに注意を引かれてしまう。

『邪魔』

「がつ!?!」

通り抜け様に振られたメイスが掠り、右肩の装甲がはじけ飛ぶ。何とか姿勢を立て直した頃には、件の機体は自分達の母船へ向けて突進していた。

「野郎!舐めた真似を!?!」

想定外の事態が連続したことで、彼は完全に冷静さを失っていた。もし彼が多少でも戦術を学んでいたならば、即座に撤退を指示し損害を最小限度に抑える事も出来たかもしれない。しかし悲しいかな、所

詮ならず者である彼にはそのような知識はなく、戦場を把握すべき指揮官でありながら、指示も出さずに敵機を追撃するという愚行を冒す。先ほど敵が3機出てきた事も忘れて。

『ヘキサフレームとは珍しいな』

その事実を彼が思い出したのは、唐突に聞こえた接触回線とあらぬ方向へ自機が振り回された事による急激なGを受けた瞬間だった。同時に衝撃が走り、手にしていたマシンガンが破壊される。

「なっ！ぐが!？」

『野郎！』

「止めろお!？」

それを見ていた僚機がマシンガンを放つが、砲弾の殆どは敵のマ
ン・ロデイに盾として構えられた彼の機体に当たる。弾丸が装甲を叩く不快な音に思わずそう叫ぶが、返ってきたのは場違いな程平静な敵の声だった。

『ふむ、戦術も腕も酷いものだ。やはりこの方法で正解だな』

声と同時に機体が再び加速する。彼の機体を押さえ込んだまま、敵機が僚機に向かって突っ込んだからだ。襲う事には慣れていても、自分がMSに襲われた経験など皆無に等しい僚機は、宇宙空間にもかかわらずその場に留まりマシンガンを乱射した。

『来るな！来るんじやねえ!!』

連続の射撃で瞬く間にマガジンの弾を撃ち尽くしたマシンガンが沈黙すると同時に、抱えられていた男の機体が僚機へと投げつけられぶつかる。もつれ合うように回転する彼等が機体を立て直すより早く艦艇用の曳航ワイヤーが二機を縛り上げた。ワイヤーを手繰っていたマン・ロデイが悠然と近づいてくると、手にしたチョップパーでコックピットの装甲を小突いてくる。

『降伏するか、このまま潰れるか。好きな方を選びたまえ』

そもそも何よりも自分の命が大切という価値観の人間である。相手が本気である事に気付いた彼は、即座に降伏を選択する。白色の信号弾が打ち上げられたのは、それからすぐ後の事だった。

8. 礼節を語れるのは裕福な者だけである

「久しぶりだな、マルバ。随分羽振り良くやっってるみたいじゃねえか」
「え、ええ。お陰様で何とかやってます」

女をしなだれかからせた優男が、親しげな様子でマルバへそう話し掛ける。俺はその横で出された茶を暢気に啜っていた。

「お前さんから話があるなんて連絡がまさか来るとはなあ。輸送業からは手を引いたもんだと思っていたが」

勿論男が言う輸送は真つ当なものではない。彼の名は、名瀬・タービン。タービンスと呼ばれる、所謂御法に触れる運び屋のトップだ。ついでに言えばタービンスは木星圏に一大勢力を築き上げている、テイズという反社会勢力直轄の組織という肩書きも持っている。真面目に生きようと思えるならば、まずお近づきにはなりたくない、ならない方が賢明なお相手と言えよう。

「さ、最近事業を拡大しまして。その、良ければご相談をと」

震える声でそう告げるマルバを、彼は愉快そうに目を細めて眺めつつ口を開く。

「へえ、そいつは最近噂になってる海賊狩りと関係があるのかい？」

その言葉に音が聞こえてきそうな程身を強張らせるマルバ。おいおい頼むぜ社長。相手はこの辺りを縄張りに行っている運び屋、商人だぞ？その位の情報収集はしていて当たり前だろう。冷や汗を掻くマルバの脇を小突いて再起動させる。彼はポケットからハンカチを出し、頻りに額を拭くと、真面目な表情で名瀬を見た。

「我が社も全く無関係とは言い難いですね。最近ウチはサルベージ業に手を出しています」

「そいつはまた博打に出たな」

「少々会社がでかくなりすぎましてね。警備や人材派遣だけでは人が余っちゃいます。そんな時に以前、名瀬さん達から買わせて頂いた船のことを思い出しましてね？遊ばせておくくらいなら、何か使えやしないかと」

「それでゴミ拾いって訳かい？普通に輸送業じゃなく？」

「そ、それはその…」

言葉に詰まるマルバを見て、俺はカップを机に戻すと努めて友好的な表情を作りながら名瀬に話し掛けた。

「失礼、私から説明させて頂いても？」

「ああ、アンタは？」

「申し遅れました。私はCGS社長相談役を任じられておりますマ・クベと申します。以後お見知りおきを」

「へえ、噂の相談役さんか。聞いていたより普通の人間だな」

普通って、一体俺は世間で何と言われているんだ。咳払いをして俺は説明を始める。

「火星から地球圏への貿易の殆どはオルクス商會が担っています。つまり今更大口の顧客を捕まえる事は難しい上に、例え捕まえられても応じきりだけの輸送能力を我が社は持ち合わせておりません。そこで目を付けたのが、デブリ帯のエイハブリアクターでした」

「はは、誰もが一度は考える一攫千金だな。実行する馬鹿は初めて見たが」

「本気でやろうと考える者がいなかったというだけです。それなりの投資と準備はしましたが実際に成果は上がっています」

「…へえ？」

「ですが如何せん物が物です。欲しがる連中には事欠きませんが、安易に流して世を乱すのも本意ではない」

俺の言葉に、名瀬は目の笑っていない笑顔で返事をしてきた。

「ならギャラルホルンに届けりゃ良い」

「それこそ冗談でしょう。持っていったところで回収されて終わりです、礼の一言があるかすら怪しい。我々は営利団体であってボランティアではありません」

「つまりアンタは俺にこう言っているのかい？海賊共にリアクターを流されたくなけりゃ、タービンスで買い取れと」

「別に本社でも関連企業の方でも構いませんよ」

俺がそう返せば名瀬はこちらを睨み付けてきた。なんだよ、もつとフレンドリーに行こうぜ。

「成程、成程な。お前さん達の言い分はよく解った。そっちの態度次第じゃウチが引き取るのも吝かじゃない」

名瀬の言葉にマルバが喜色を浮かべる。馬鹿、まだ早い。

「だが、付き合うとなりや相手をちゃんとは知らなきゃならねえ。こんな時代だ、背中を見せた途端ズブリといかれちゃたまったもんじゃないからな」

「企業のトップならば当然の判断ですな」

そう応じれば名瀬は口角を上げる。

「ありがとよ。じゃあ、腹を割って話そうじゃねえか、最近の海賊狩りはお前さん達の仕業か？」

「あくまで本業はサルベージですがね。降りかかる火の粉は払っています」

「よく言うぜ。ならもう一点。お前さん達が使っているMSの中に二つ目のヤツがあるって聞いたが、事実か？」

ちっ、もうそこまで漏れてるか。まあ、毎度全滅させられてるわけじゃない。逃げ延びたヤツもいるだろうからある程度覚悟してはいたが。

「…ええ、色々幸運が重なりました。戦力として使っています」

俺の言葉に名瀬の瞳に剣呑さが宿る。

「ほう、俺の知っている限りありや相当古い機体でな、阿頼耶識を使わねえと動かせない筈なんだが」

「そ、それはー」

何かを言おうと立ち上がるマルバを手で制して俺が答える。

「はい、我が社には阿頼耶識システムの被術者が在籍しており、彼等が運用しております」

「在籍？お前達が無理矢理受けさせたんだらう？」

「否定は致しません」

俺の言葉で名瀬から殺気があふれ出す。何だ、ヤクザ者の割には良い奴じゃねえか。

「つまりてめえ等は弱い者を食い物にして儲けているわけだ。マルバ、てめえ良くも俺の前にツラ出せたな？」

睨め付ける名瀬に対して、俺は再びカップを取り中身を飲み干す。

「良い茶だ。タービンスは随分と儲けているようですね」

「あ？何が言いたい？」

「まずは純粹な称賛。貴方は商売の才覚をお持ちのようだ、きれいな事を吐けるだけのやり方でここまで組織を大きくして見せた。正に素晴らしい手腕です」

「今更おべっかで——」

そう名瀬が遮る前に、気持ち大きな声で続きを言い放つ。

「次にその視野の狭さへの諫言。誰もが貴方と同様の才覚を持つわけではない。貴方に出来る事は誰でも出来るなどと思つて貰つては困る。申し訳無いが、ウチの社長は良くて凡人止まりの平凡な男なのだよ。しかし」

俺の声に名瀬が押し黙る。

「その凡人があがいて見せたのだ。何もかもが普通の男が、それでも弱者を拾い上げようと、彼等に生き残る術を与えようと。認めよう、彼等のおかげで我々は儲けている。儲けようとしている。だが、断じてそれだけで動いた訳ではない」

「てめえ等は何とでも言えるさ。だがやられた側はどう思う。食い物にされている奴らとお前達は本当に向き合っていると胸を張つて言えるのか」

「言うさ。言うために私達はここに來たのだ。彼等が文字通り命がけで手にしてくれた希望を明日の糧に変えるために、私達はここに居る。そしてこの商談を成功させて大手を振つて彼等に伝えてやるとも。お前達は自らの手で明日を勝ち取つたとな」

「俺は、弱い奴を食い物にする奴らが嫌いだ。女子供をちり紙感覚で使い捨てる連中を見ていると虫唾が走る。だから、ガキを都合良く使うために、自分達の勝手な理屈で阿頼耶識なんかを埋め込みやがつたお前達は絶対に許さねえ」

奇遇だね、俺もだよ。

「だが、お前達をこのまま返すと、ガキ共がもつと不幸になるつて事も良く解つた。だから、商談は受けてやる」

「十分です。感謝します、タービン氏」

「勘違いするなよ。てめえ等がガキを食い物にしていたら、俺はお前達の敵に回るぜ」

「ええ、是非そうしてください。そして我々が道を外れぬよう、しっかりと見張って頂きたい」

そう言つて俺は立ち上がると、彼に向かって深々とお辞儀をした。

「有り難うございます。どうぞ今後とも宜しくお願い致します」

男達が部屋から去つて三分、船内の監視モニターでその姿が確実に離れた事を確認して、アミダ・アルカは漸く腕を解いた。彼女の夫にして頼れる社長である名瀬は男達が置いて行つた販売品のリストを難しげな顔で眺めている。

「どうなるかと思つたけど、何とか丸く収まつたかね？」

アミダの言葉に名瀬は漸く難しい顔を解き、いつもの優男に戻つた。

「どうかな、まあでかいヤマだつて事は間違い無いな。後は連中次第つて所か」

そう言つて名瀬は懐から自身の端末を取り出す。

「あのマとか言う相談役が入つて以降、人さらいも廃棄処分もピタリと止んだ。それどころかガキや老人を積極的に雇つていやがる。ああ、ヒューマンデブリもか。それで会社の業績は右肩上がりだつてんだから、どんな汚え事してるかと思つたんだがな」

自分をにらみ返してきた男の顔を思い出し、名瀬は笑う。

「思つた以上にヤベエ奴だったな。しかも特大の馬鹿と来た」

「そうだね」

話し合いの間、アミダが名瀬から離れなかつたのは意味がある。離れなかつたのではなく離れられなかつたのだ。万一の場合は身を挺して名瀬を庇う必要を感じた彼女はすぐに二人の間へ割り込めるよう、常に体に力を溜めていた。

「だがまあ、あれとやる商売は中々楽しくなりそうだ」

「一体何を考えているのかね？」

「さてな、取敢えずこれは親父に相談する必要があるだろうな」

そう言っつて机の上に置かれたタブレットへ名瀬は視線を戻す。

(さて、マ・クベだったか。アイツは一体、何処へ行こうとしているのかね?)

久しぶりに出会った、器の大きい男を思い、名瀬は自然と笑みを浮かべた。

9. 武力を背景にした為政者の発言は恣意的な情報改竄を疑うべきである

「んんー！埃っぽい！率直に言っただけで最悪ですわねえ！」

長身痩躯の男が車から降りるなりそう有り難いコメントをしてくれる。

「空調効きっぱなしのコロニーとは違うさ。慣れてくれたまえよ」

「研究をさせて頂けるなら文句なんて言いませんとも。あ、でも出来れば部屋は奥の方にして貰えますか？人体を扱う都合上やはり異物は宜しくありませんので」

「取敢えずは食料庫用だった部屋を使ってくれ。あそこなら温度管理も出来るしね。他に必要な物は？」

「取敢えず医療用のポッドがあるなら、後はそのうちで構いませんよ。あ、でも」

「ん？」

「弄って良い検体は何時都合してくれますか？」

朗らかに笑う青年に俺は溜息を吐いた。こいつ全然懲りてねえな。まあ懲りるような奴ならギヤラルホルンに追われてこんな所までやって来ないか。

彼の名はフレデリック・ハーバー。元ギヤラルホルンの科学者だ。タービンスとの取引の際にお願いしていた、阿頼耶識システムに精通した人材の派遣によって我が社へ送り込まれてきた人物である。ぶつちやけすつごいMADっぽいので体のいい厄介払いをされたのではと俺は睨んでいる。

「大体ギヤラルホルンもテイワズもひどいんですよ。僕の研究の意義が全く解ってない。やれ禁忌だ人道だって。人類の進歩を前にそんな些細な事を…？」

饒舌に語るフレデリックの首根っこを掴み、強引に体を寄せる。ホント学者って連中は世間体という常識をなくした奴ばっかだな。

「フレデリック。私は君の研究に理解を示しているつもりだし、有意

義だとも認識している。だが阿頼耶識被術者を誰であれ二度と検体などと呼ぶな」

「……」

「君にとつては弄り甲斐のあるサンプル程度の存在かもしれない。けれどそのサンプルは誰かのかけがえのない人でもあるんだ、それを忘れるな。命の保障はしかねるぞ」

大体お前を呼んだのはその被術者の身体の安全を考えてなんだぞ？ 知識のために研究が必要である事は認めるが、目的と手段をはき違えて貰つては困る。

「喫緊で治療が必要な者は何名か既に運び込まれている。急ぐ必要は無い、代わりに絶対に死なせるな。いいな？」

「は、はい」

ホント大丈夫かな、こやつ。

フレデリック・ハーバーの家は地球でも上流階級に含まれる家だった。実家の異常さに気がついたのは、間抜けにもギャラルホルンの高等教育校に入学してからだった。初等部や中等部は一般的な教育機関とあまり差のないカリキュラムだったが、流石に高等部となると将来の進路に沿って内容が細分化してくる。この時多くの若者は、家を継ぐ為に家業としていた学科を選択するのが一般的なのだが、フレデリックは自身の家の家業を知らなかった。漠然とギャラルホルンに所属しているのだから軍務についていると安易に考えていたのだが、父は毎日帰宅していたし、長期の遠征などに出かけたこともない。そもそも同じ家格の学生と話せば、自然と出てくるセブンスターズの中でどの家の傘下かという事すら彼は知らされていない事にその時漸く気がついたのだ。生来好奇心が強かった彼は、一度疑問を覚えてしまったら、それを解決せずにはいられなかった。そして彼は知ることになる。ハーバー家の最奥、誰も普段近寄らない父の書斎の更に奥に眠っていた旧世代のコンピューター。そこに記されていたのは膨大な量の阿頼耶識システムに関する資料だった。

何という事はない。ハーバー家はギヤラルホルンに貢献した名家ではない。名家としての特権をエサに、永劫監視されることを選んだ学者の末裔だったのだ。不幸であったのは、長年の忘却により薄れていたはずの学術的好奇心をフレデリックが先祖返りのごとく持ち合わせて居たことだろう。元々実技は壊滅的だが、座学は優秀だった彼は、好奇心の赴くまま、貪るようにデータベースを読みあさった。そして阿頼耶識システムの真実を知る。

「なんて愚かなんだ！恐怖に負けて進歩を投げ捨てるとは！」

阿頼耶識システムは、元来宇宙空間における機体制御システムとして研究されていた技術だった。当時はナノマシン技術の発達により、ナノマシンによる視覚補正や神経系疾患の補助、事故による不随部の再生と広く普及した技術だった。事実大戦中のMSパイロットは例外なく阿頼耶識システムの施術を受けており、大きな混乱が起こっていなかった事からも、こうした処置が一般的であったと推察出来る。ならば今日の認識はどの様にして形成されたのか。それはギヤラルホルンと言う組織と密接に関わっている。

人類の4分の1を死に至らしめた厄祭戦。この数は実のところ数字以上に深刻な意味を持っていた。当時の先進国同士の戦いは徹底した機械化、自動化が進められていた。これは人の死なないクリーンな戦争を目指した故の到着点であったのだが、同時に問題も生み出した。

戦争が終わらないのだ。

当時の先進国は国力が拮抗しており、技術面においても極端な差は無かった。故に人命を消耗しない戦争は、長期化による経済基盤への圧迫が勝敗を決める事になる。しかし、例え一時的に勝敗が決しても、即座に別の理由で戦争が勃発する。人的損害を出さないと、事は、各国の経済的再建も短期間で完了することを意味し、更には相手も自分も傷つかないという心理的ハードルの低下は、戦争を安易な手段へと変貌させたのだ。そして長引く戦争の中で勝者と敗者が漸く明確になり始めると、人類はしてはいけない選択肢を採り始める。

「我が国の経済基盤では、敵国の経済に太刀打ちできない。ならば、敵

国の経済基盤を破壊すれば良い」

こうして当時の先進国は、互いに敵国の経済基盤。即ち人口密集地を優先的に襲撃する自律兵器を建造し、互いの国へと差し向ける。それがどれ程愚かな行為であったか、当時の為政者達はその身がMAのビームに焼かれるまで自覚出来なかった。こうして当時先進国と呼ばれていた国家が軒並み文字通り壊滅し、残された人類はMSと言うMAに対抗する為だけの兵器をもって、辛うじて戦乱を終結させた。今日の技術レベルの衰退は、ここに大きく起因している。何しろ残った人類の多くは当時途上国と呼ばれていた、人口こそ多いが、経済・技術力では大きく遅れていた国家なのだ。先進国が独占していた技術の多くは失われる事となり、その中にはMAの製造技術も含まれていた。

一見すれば人類は消せない傷を受けたものの死んではおらず、また傷の原因となった脅威は文字通り失われたのだから平和を勝ち取ったように思える。しかしそうは考えない、否考えられない人々がいた。

ギヤラルホルンである。

国家という枠組みを超えて集まった彼等はMAの討伐を終えた後、ある事に気付く。それはMSとそのパイロットと言う存在だ。当時の人類は追い込まれていたこともあり、早急な戦力の確保が求められた。阿頼耶識システムはこの問題を良く解決してくれたが、その優秀な機能が新たな脅威を生み出す可能性に、彼等は気付いてしまう。即ち、文字も読めない者ですらMAと交戦可能な兵器を運用可能とする技術が拡散すれば、第二第三の厄祭戦が勃発しかねないという懸念である。戦後直後の今は良い。多くの人が戦争の恐怖を刻みつけられているし、復興にリソースをつぎ込んでいるから誰もMSで戦争をしようなどとは考えない。だが10年後、100年後は？人類の愚かしさを十分に理解した彼等が選んだ選択は、阿頼耶識システムと言う技術そのものの封印だった。

彼等の努力は功を奏し阿頼耶識システムは忌避すべき技術という社会認識は醸成される。だが、墮落したギヤラルホルンの中で生きて

きたフレデリックにはMSという軍事力をギャラルホルンが独占するための方便にしか見えなかった。

「この技術があれば人はもつと発展できる。自らの権力維持のためにそれを妨げるなど、あつてはならないことだ」

若さ故の狭窄した正義感と自らの学術的欲求を満たすために、彼は阿頼耶識システムについて貪欲に学ぶ。その行動が実物への実験に至るまでそう時間は掛からず。事が露見するのもまた同様であった。ギャラルホルンから追われる身となった彼はテイワズを頼り、歳星に身を寄せるが、そこでも待っていたのは異端者への冷ややかな視線だった。三百年という月日の重みは彼の想像を遙かに超えており、その現実には彼が打ちのめされているまさにその時、今回の依頼が舞い込んだのだ。そして止まっていた時は動き出す。それが人類の新たな夜明けとなるか、黄昏を呼ぶかはまだ誰も知らない。

「そろそろ、頃合いかな」

資料を眺めていた相談役がそう呟くのをマルバは聞き逃さなかった。社長室があるにもかかわらず、最近のマルバは事務職が集まっているオフィスで仕事をしている。専らこの様な事態に対して迅速に対応するためだ。

「おい、何が頃合いなんだ？」

「大分ウチの所帯も大きくなったからね。そろそろ一度くらい本気で掃除をする頃合いかなと」

確かに現在のCGSは急速に拡大していた、主に軍事的な意味で。運用している艦艇は3隻に増えたし、MSも全て合わせれば10機にもなる。社で雇用しているヒューマンデブリの数は以前の実に10倍以上に膨れ上がっており、基地内の至る所にブラックが増設されている有様だ。儲けは出ているがそれと同じ速度で増大していく運営資金によって、今日もCGSは絶賛自転車操業中だ。

「もったいぶった言い回しなんかしてんじゃねえよ。報連相は明確にしゃがれ」

マルバが睨み付けると、相談役は肩を竦めて口を開く。

「ここ2ヶ月程海賊共の襲撃が減っている。連中の情報網に私達の事が知れ渡ったんだろう。と言う事は、そろそろ大物気取りがブチ切れる頃合いだ」

何しろCGSのサルベージ部門は海賊に襲われようが襲われまいが、定期的に船を出し自称本業であるデブリ帯での回収作業を行っている。

「暴力と面子だけで生きているような連中だ。目の前で挑発を繰り返せば、巣穴から出てこざるを得ないよ」

意外に思われるかもしれないが、海賊でも大所帯の連中というのは慎重だ。正確には冷静に獲物を見極め、彼我の戦力を勘案できる程度の臆病さと慎重さがなければ組織を大きく出来ないのだが。それだけに彼等は容易には姿を現わさない。普段は自ら作り上げた堅牢な巢に籠もりしっかりと身を守っているのだ。だが、身代が大きくなった連中はそんな理だけでは行動できない。

「勝手気儘に振るまっている我々を放置すれば、彼等はどう思われる。ああ、奴らはゴミ拾いにすらびびって手を出せない臆病者共だとね」

元々海賊に身をやつすような人間は、多くが思慮に欠け自身の都合の良い現実を信じたがる。民間船すら恐れる連中の縄張りなど、切り取ってやろうと考える連中が出てきても何ら不思議ではないと相談役は笑いながら言う。

「そうは言うが、上手く行くのか？大体根本の部分が噂話に頼るなんてあやふやなもので…」

「問題無いよ、既にそうした噂はばらまいている。ついでに言えばオルクス商会経由で物資を買い込んでいるのも確認済みだ。次の定期便辺りで襲ってくる腹つもりだろうさ」

「オルクスなんざ信じて大丈夫かよ？」

その言葉に皮肉げな笑顔で近くに座っていたトドが答える。

「連中は何処までも商人ですからね。金払いの良い方の味方ですよ。それに海賊共は物も買いますが、殆どは雀つていく厄介者です。あちらさんにしても航路を塞いでいる奴が消えりやあ清々するって事で

しようよ」

「おい、まさか掃除するってのは」

会話の中からマルバは一つの集団を思い浮かべる。その連中は、火星と地球間を縄張りとする武闘派で知られる海賊だ。一縷の望みを掛けて問いかけるが、返ってきたのは無情な答えだった。

「ああ、次のサルベージでブルワーズを狩る。連中は随分と大きな縄張りを持っているようだし、これで本業の手も広げられると言うものさ」

マルバは静かに俯くと、机から胃薬を取り出し二粒程口に放り込む。次はもう少し強力な物を買うことを誓いながら。

10. 戦いとはそれまでにどれだけ準備をしたかで
勝敗が決まる

「揃っているな?では作戦の説明を始める」

CGS本社の会議室。むさい野郎がすし詰めになった空間で俺は
パネルを眺めながらそう口を開いた。

「今回の目的地はN8デブリ帯。火星周辺では最大規模のデブリ帯
だ。滞留物の濃度も高いから接触には注意するように」

デブリ帯には正確な名前なんて無いから、こちらで勝手に近場から
番号を振らせて貰った。

「本デブリ帯での作業は初めてになる。が、幸いにも善意の協力者か
ら主要な回廊のMAPを入手した。彼等の商売道具だ、記録は残せな
いから頭にたたき込め」

前回の取引で名瀬・タービンが面白い話とかあるかなんて聞いてき
たから、近々ブルワーズ滅ぼすよって答えたら、呆けた顔になった後
暫し爆笑。その後連中の縄張りになっているデブリ帯の情報あるけど
買うかなんて言うからその場で即決した次第である。連中テイワズ
直轄のタービンスに手出しする程愚かでは無かったが、顔見知りや取
引相手なんかを襲われていて腹に据えかねていたらしい。

「今回の目標はブルワーズ。今までの最大規模の相手になる。艦艇3
隻、更にMSを最低でも10機は運用している事が判明している」

MSを最低10機、その言葉に少し部屋がざわつく。まあ、最近ほ
鹵獲した機体が増えてMSの数で優勢な戦いばかりしてたからな。
特に3番隊の奴らは後から参加させたから、数的不利での経験が乏し
い。とは言えそこまで怯える要素じゃない。

「確かに侮れない相手ではあるが、そう身構える必要はない。所詮連
中の強みは数だけだ。そうだなササイ?」

俺に振られて一瞬驚いた顔をしたササイは、咳払いをしつつ不敵な
表情を浮かべながら考えを述べる。

「ああ、相談役の言うとおりで。お前等も戦ったから解るだろう?連

中は碌な連携もしてこねえ。数が増えてもそこが変わってねえんだ。敵じゃねえよ」

横で腕を組んで座っていたハエダも静かに頷き肯定してみせる。この二人は対海賊戦皆勤だからな。最近はMSの腕もそれなりになったし、十分戦力に数えられる。と言うか正直技量が不足している分を数を活かす事で補う訓練を重点的にさせているから、単純な連携という面で見ればウチのMSパイロットの中では一番のコンビかもしれない。

「そう言うことだ。それに少なくともミカヅキ程のパイロットはまず居ないから安心して良い」

俺がそう言うのと笑い声が響く。この所の訓練では主に俺とミカヅキがアグレッサ―役を務めている。はつきり言おう。ミカヅキは間違い無く天才だ。MSの操縦技能もさることながら、各種装備の扱いても直に習得してしまう。乗機にしているバルバトスとの相性も良いのか複数人を相手にしても全く引けを取らない規格外の戦闘能力を持っている。少なくとも正面から殴り合う戦闘と言う事ならば、ミカヅキと訓練をしていればそうそうそれ以上の相手とぶつかることはないだろう。

「とは言え、注意すべき点が無いわけでもない。未確認の情報だが、連中もガンダムフレームを運用しているとのことだ」

そう言うって俺は解像度の荒い写真をパネルに映す。

「写真中央のやや大型の機体が恐らく該当のガンダムフレームと思われる。装甲の形状及び外装品から推察するに、基本的な運用はマン・ロデイと同様であると考えられる。つまり装甲頼みの強引な肉薄だ」説明を続けながら、俺は写真を切り替えた。

「運用している武器はハンマーが確認されているようだ。見ての通りかなりの大型だ。これを振り回すというのだから、機体の出力は最低でもバルバトスと互角と見た方が無難だろう。つまり装甲もそれに準じて堅牢な筈だ」

厄介な相手の情報にパイロットの何人かが顔を顰めた。素晴らし、相手の特性を聞いて交戦時の状況を想定できる程度には皆知識が

付いてきたという事だ。

「これの相手はミカツキに任せる事になる。行けるな?」

「おっちゃんみたいにやれば良いんでしょ? 多分平気」

頼もしいね、ウチのエース様は。

「ああ、重装甲で高推力の機体など自分から活動時間は短いと自白しているようなものだ。精々遊んでやれ。ユージン」

「はい」

「MSの活動時間が短いという事は、どう言うことか解るな?」

「はい。すぐ近くに母艦が居るって事ツス」

「宜しい。ウィル・オー・ザ・ウィスプの突入タイミングはお前に任せろ。サブードとヤスネルは制圧隊の指揮。船は幾ら傷付けても良いが、隊員は全員連れて帰れ。貴様等なら出来るな?」

「お任せください」

真剣な表情で応じる二人に頷いて見せる。いいね、ここも漸くらしくなってきた。

「この掃除が終わればやっと本業に専念出来る。少々手間だが一つ頑張るとしよう」

俺はそうブリーフィングを締めくくった。

「あ、クベさん!」

ノックに気付いたハツシュがドアを開けると、そこには見知った男が立っていた。

「やあ、ハツシュ。ビルスの調子はどうか」

「こんにちは、マさん。お陰様で悪くないですよ」

その言葉にベッドで本を読んでいたビルスが顔を上げ笑顔で応じる。

「それは良かった。ハツシュ、すまないがビルスと二人で話したいんだが、良いかな?」

「ええ、構いませんよ。俺、少し出て来ます」

「ああ、有り難う。そうだこれで何か飲み物を買ってきてくれないか

？」

そう言つて差し出された紙幣は三人で飲むにしても多すぎた。

「残りは子供達の土産にでも使つてくれ」

その言葉に頷くと、ハツシユは部屋から出て近くの雑貨店へと向かう。その表情に不安は無い。あの男が、ビルスに害を加えるなど絶対に無いとハツシユは理解しているからだ。

「おっさん、何してんの」

彼等の出会いは、正しく偶然だった。その日ハツシユは幸運にもパン屋の手伝いでありつき、駄賃としてパンの耳を手に入れて仲間の待つ家へと帰る途中だった。話し掛けたのは偶然では無く警戒心からだ。家の程近くに見知らぬ大人の男が寝そべっていたのだ。彼と仲間の家がある場所は、お世辞にも治安の良い場所とは言えない。危険な相手ならば素早く対応する必要があった。特に大人の男となれば尚更だ。

「おなががすいてちからがでない」

それは本当に気まぐれ、妙なことを言う男の口に、ハツシユは手の中にあつたパンの耳を一つ差し込んだ。瞬く間に消えるそれを見て、ハツシユは再びパンを差し込もうとする。

「それは、君の大事な食べ物ではないのかい」

「でも、腹減つてるんだらう？食いなよ」

袋の中身が半分程になったところで、男は起き上がり奇妙な座り方をすると、ハツシユへ向けて頭を下げた。

「ありがとう、少年。おかげで命を繋ぐことが出来た」

「良いつてことさ、男は弱い奴を助けるもんだろ？」

それは彼の親友がよく口にしていた言葉だった。そんな彼をハツシユは慕っていたし、その彼が弱くなつた今は、自分が助ける番だと張り切っていた。だから弱い目の前の男を助けるのも、彼の中でなんら矛盾した行為ではなかったのだ。彼の兄貴分である親友も、自分達をそうして助けてくれたのだから。

「そうだ、おっさん良かったらウチに来いよ。こんな所で寝てたつて

事は、どうせ家もないんだろ?」

幼いハツシユが発したその言葉が、この世界の歯車を大きく狂わせることになる。

「ビルスー! たいま! 今日にはパンが手に入ったんだ!」

「……」

返事をしないビルスへ向けて、明るい声でハツシユは懸命に話し掛ける。それを見ていた男が、疑問を口にした。

「彼は病気、なのかね?」

その視線の先は、阿頼耶識システムの施術失敗痕に注がれていた。どう答えて良いか解らないハツシユに代わって答えたのは、それまで無反応だったビルスだった。

「誰だ、アンタ?」

「君の友人に助けられた幸運な男だよ。これは一体?」

男の声にビルスは力なく笑う。

「産廃を見るのは初めてかい? まさか阿頼耶識を知らない訳じゃ無いだろう?」

「あら、やしき?…: そうか、そう言うことか」

「一体何を?」

唐突に呟き出す男を不審な目でビルスが眺める。どうすべきかハツシユが悩んでいると、男が突然顔を上げ、ビルスに向けて口を開いた。

「ビルス君といったかな。今君は産廃と言ったが、それはどう言うことだろうか?」

その言葉に対し、諦観の表情を浮かべたビルスがハツシユに向けて以前呟いた言葉を繰り返す。

「見ての通りだよ。手術に失敗した俺は使い物にならない。だから産廃だ」

「…: 成程、所でビルス君。私はこの辺りの事に疎くてね。出来れば色々教えて欲しいんだが」

「ハツシユに聞けば良いだろう?」

「彼は幼い。君は彼よりも色々な経験をしているはずだ。どうか教え

て欲しい。この通りだ」

頭を下げる男に対して沈黙が続いた後、折れるようにビルスが小さい声で促した。

「何が知りたいの？」

「そうだな、まずは——」

その後ハツシユは労働の疲れから眠ってしまったが二人は遅くまで話し込んでいたようだ。翌朝、ビルスは久しぶりに食べ物を口にする時、ハツシユに自棄になつていたことを謝罪してきた。だからハツシユは笑顔で応じた。

「いいって！仲間だろ！」

それから本当に色々あった。助けたその男がビルスに酷い事をしたCGSに入ると言い出した事には驚いたし反対もしたが、彼の言葉で送り出すことを決める。

「ビルスにはハツシユがいた。けれどハツシユが居ないビルスが、どこかでまたCGSに捕まっているかもしれない。それは変えなくちゃいけない事だ」

そして現在。言葉通りにCGSを変えた男は、相変わらずマメにビルスの元へ通っている。更にビルスを病院へと入れる事までしてくれた。それについて感謝の言葉をハツシユが伝えると、彼は笑つてこう言つたのだ。

「二宿一飯どころではない上に、命まで救つてくれた恩はまだまだ返せていない。このくらいは受け取ってくれよ」

その日、ハツシユは尊敬する人物が一人増えた事を今でも鮮明に覚えていてる。

「それにしても、二人つきりで話つてなんだ？」

飲み物を持って部屋へ戻ると、ビルスが阿頼耶識研究のためにCGSに入社することを聞かされハツシユは大いに驚くことになる。そして翌月には彼も務めていた職場を辞し、CGSの門を叩くことになるのだが。それはまだ少し先の話である。

11. 解り合うのは命が助かった後でも遅くはない

「ゴミ漁り共があ、調子に乗りやがってえ……」

苛立ちを紛らわすようにブルック・カバヤンは手の中の缶を握りつぶした。勢い中身がこぼれ手をぬらす。

「ちっ、おい！」

「……」

潰れた缶を投げ捨て手をかぎす。すると横で傳っていた扇情的な衣装に身を包んでいる少女が恭しく其の手を取り、舌を這わせた。

「遅えー！」

そうブルックは叫ぶと少女を殴りつける。それでも気が済まなかったのか、倒れ伏す少女を蹴りつけた。

「何奴も此奴も馬鹿にしゃがって！この俺を誰だと思っていやがる!!ブルワーズのブルック様だぞ！ああ!？」

派手に吹き飛び動かなくなった少女を睨み付けながら、ブルックが吠え立てる。壁にもたれかかりながら爪を磨いていたクダル・カデルが笑いながら声を掛けた。

「少し落ち着け、ブルック」

「落ち着けだあ？ここまでコケにされてどう落ち着けてんだ!!」

赤ら顔で叫ぶブルックにクダルは近づくと、笑みを消し真剣な表情で諭す。

「露骨な挑発に乗るんじゃないって言うてんのよ。連中は今俺達をこの城から引きずり出そうとしているの、態々付き合ってやる必要はないわ」

「ならどうする、連中を黙って見過ごせってのか？」

そう問い返すブルックに、笑みを浮かべたクダルがタブレットを取り出してその内容を見せる。

「搦手が見えるのは連中だけじゃねえさ」

そこには対ブルワーズを想定した作戦内容の詳細なデータが映されていた。

「クダルこりゃあ」

「でかい会社だけあってコロツとなびく奴も簡単に見つかったぜ。航路も居場所も解つてんなら後は食い散らすだけよ」

嗜虐的な笑みを浮かべながらクダルは舌なめずりをした。それを見て、ブルックも漸く落ち着きを取り戻す。

「やっぱり御前は最高だぜ、クダル。ゴミ漁り共め、皆殺しにしてやる」

「簡単には殺すなよ。ブルワーズを舐めた奴の末路をしつかり宣伝しなきゃならないんだからねえ?」

二人の下卑た笑い声がブリッジに響き渡った。

「とまあ、今頃間抜け共はご機嫌に襲撃準備をしてるだろうよ」

愉快そうにトドがそう口にする。本当な、この程度の策が上手く行くとか本気で脳が足りないと思えん。あいつらどうやって組織をでかくしたんだ?

「えつと、つまり?こないだの会議は?」

混乱するノルバ・シノに対してトドが溜息を吐きながら苦言を呈する。

「シノよお。だから筋トレばっかじゃなくてオツムも鍛えろって言ってんだろ?本社でやった会議はブラフ、ニセモノ、嘘っぱちなもの!その情報をわざと流して、連中を巢から誘い出すんだよ」

「流すって、どうやってそんなの知らせるんだよ?」

「そこはこのトド様の名演ってヤツよ。待遇に不満を持つてるフリをちよいとすりゃあ、連中すーぐに引つかかったぜ。あ、マっさん、これそんな時の報酬ね」

「名男優への報酬だ、有り難く貰つときなさい」

「さっすがマっさん!聞いたなお前等?帰ったらぱーつとやるぜ!勿論俺のオゴリだあ!」

トドの言葉に歓声上がる。ほほう、中々の人心掌握術。案外部隊長とか向いてるかもしれん。頭も回るし今度新設の隊とか任せてみようかな。急激に人員は増えたけど、ウチって幹部候補が滅茶苦茶手

薄なんだよな。

「皆聞いたな？我が社の酒蔵は準備万端、一人残らず酒の海に沈めてやることをお約束しよう。しかも支払いはトドさんがしてくれる。これに乗らない手はあるまい。だから、ちゃんと全員で帰ってくるぞ」

「はいっ！」

うん。

「結構。では諸君、仕事の時間だ」

「来た、情報通りだ」

マサヒロ・アルトランドの呟きは、すぐさま仲間の機体へと伝えられ、各機が目配せを返してくる。情報通りに進むサルベージ屋の船団を見て、全員が襲撃態勢に入る。

『よし、行くぞ』

そう言つて最初に飛び出したのはペドロだった。即座にビトーとマサヒロも続く。だが、その動きに警告を発する声が届いた。

『おい待て、様子がおかしい！』

デルマの叫びは、しかし残念ながら僅かに遅かった。既に三人の機体に釣られるように、別働隊の機体も動き出していたからだ。

『畜生！俺達も行くぞ！』

作戦は失敗、しかしこのまま帰る事は叶わない。何しろ彼等の母艦は、通常の作戦域より後方に配置されていて、襲撃成功後に回収される予定だからだ。最悪ヒューマンデブリが使用しているMSを全機喪失する可能性のあるリスクな作戦が実行されたのは、情報の信用度が極めて高かった事と、万が一ある程度の損害が出ても、ゴミ漁りの機体を鹵獲すれば補填できるという安易な思考からだった。

失敗を確信したのだろう、アストンが吐き捨てるように叫びながら機体を加速させる。戦わずに逃げ帰ったら、何の道使えない道具として殺される。明確にその未来が想像出来る故に、彼等は勝ち目の無い戦いへと自らを駆り立てる。

『クソ！奴ら感づいて!?!』

『話が違うぞ?!』

別働隊も気がついたのだろう。ノイズ混じりの叫びや悲鳴が次々とコックピットに響き渡る。それらを強引にかき消すようにマサヒロは叫んだ。

「取り付け！それしかない!!」

彼等の駆るマン・ロディは装甲と運動性に特化した機体だ。彼等の主が扱うガンダムグシオンほどではないが対空砲程度ならば完全に防ぎきるし、加速性も良好なため弾幕に晒される時間も僅かだ。一方で武装は標準的な格闘用のチョツパーと90ミリのマシンガンなので、艦艇に損害を与えるならば接近以外の選択肢を持ち合わせていない機体でもある。その為彼等の対艦攻撃は、その運動性に反し、装甲に物を言わせて最短距離で突っ込むというものだった。もし彼等が多少でも戦闘というものを理解していたならば、勝つとまで行かなくとも多少の手傷を負わせることが出来たかもしれない。しかしMSを操っているとしても、彼等は本質的に替えの利く消耗品であり、阿頼耶識システムを組み込んでしまえば最低限の教育すら不要でMSを操れる彼等に戦い方を教えるなどという酔狂な海賊は存在しない。例えそれが比較的大きな組織であるブルワーズであつてもだ。

『貫ったあー!』

対空砲の網を強引に突き破ったその先で、マサヒロが聞いたのは知らない男の叫び声だった。阿頼耶識によって拡張された知覚能力が、敵船に増設されていたコンテナが弾けるのを教えてくる。そしてコンテナが有った場所には、砲身をこちらに向けて構える敵MSの姿があつた。

回避の間に合わない場所に突如現れた砲に、マサヒロは自分の死を自覚する。同時にせめて仲間が同じ目に遭わぬよう、自身の機体を敵機へとぶつけるべく更に加速させる。しかしそれを許してくれる程甘い敵では無かった。

『あめえってー!』

「があ!?!」

叫び声と同時に吐き出された砲弾が目の前で網状に広がり機体を包む。強引な急制動を掛けられ、マサヒロは苦悶の声を上げる。その間にも次々と放たれた砲弾により、彼の機体は雁字搦めにされていく。

『へ、へいつらー!』

『捕まえる気か!?!』

一瞬のレッドアウトから復帰したマサヒロの視界に飛び込んだのは、同じように砲弾に絡め取られる仲間の機体達だった。敵のMSは明らかに慣れた動きで連携し、次々と仲間のMSを捕まえていく。思考が追いつかず、それを呆然と眺めていると、機体に僅かに振動が走り、先ほどとは違う男の声が響いた。

『死にたくなければ投降しろ。ウチなら命の保障はしてやる』

「え?」

その聞き覚えのある声に、マサヒロは目を見開く。そんなことはあり得ないとヒューマンデブリに落ちて以来染みついた後ろ向きな思考が否定する。だが、忘れられない記憶が衝動的にその口を動かした。

「兄貴?...アキヒロ兄貴?」

『!?!』

その言葉に目の前の機体が明らかに動揺した動きを見せた。

何故今、今更、こんな場所で? 混乱した思考がマサヒロを支配し、言葉も行動も奪い取る。

『マサヒロ、マサヒロなのか!?!』

その呼びかけに意味を成す言葉が僅かなりとも返せたのは、ある意味奇跡だったかもしれない。だが彼の口から飛び出したのは、喜びではなく、怨嗟の言葉だった。

「なん、なんで?...なんで今更!?!」

『マサヒロ!?!マサヒロオ!!』

混乱した兄の言葉が、更に彼の精神を追い詰める。その口からは漏れ出る物は最早言葉ではなかった。

「ああああああ!!!」

慟哭が響く中、戦闘終了を告げる寒々とした青色の信号弾の光が二人の機体を照らしていた。

12. 弱肉強食を嘯くものは自らが弱者になる事を想定しない短慮な人間である

「クソ、クソ、クソが！連中俺たちを嵌めやがった!!」

怒りに口から泡を飛ばし、叫びながらクダルは機体を操っていた。普段からヒューマンデブリ達を先行させる戦術を取っていた彼は、幸運にも敵の罠であることを看破したデルマの声で止まることが出来たのだ。そして、目の前で行われた一方的な戦いを前に、自分たちが見事に嵌められたことに気づくと、激昂しながらもすぐさま逃亡を図っていた。

「使えねえゴミ共がっ、貴重なMSがパアじゃないの!」

襲撃に投入した機体は10機。これはブルワーズの保有している戦力の6割に相当する数だ。幾らクダルの駆るガンダムグシオンが残っているとはいえ、半数以上の機体喪失が組織に甚大な影響を与える事は間違いない。今後の仕事における手間の増加、起こりうる縄張り争いを想像しクダルは頭を掻きむしる。

「舐めやがってゴミ漁り共があ。必ず、必ずこの報いは受けさせてやる——」

人間は衝撃的な事が起こると思考力が低下する。それが自身の想定外でかつ極めて不利益な事であれば尚の事だ。それは善人であれ悪人であれ逃れられない人間の生物的特徴と言えるが、この時ばかりは状況が悪すぎた。デブリを縫うように進み、母船が見えたその瞬間、唐突にコクピットに声が響いた。

『ふむ、思ったより随分奥に隠れていたな。ではミカツキ、こちらは頼むぞ』

『了解』
声と共に接近警報ががなり立て、間を置かずグシオンに衝撃が走る。

『硬い』

頭を巡らし、クダルが周囲を見渡せば、こちらに向かってくる安っ

ぽい白色のガンダムフレームと、母船に向けて突っ込んでいくヘキサ・フレームが目に入った。

(こいつら俺を泳がせて!?)

まんまと母船までの案内役にされたことに気づき、クダルは歯噛みする。沸騰しかける脳を唇をかみしめる事で強引に引き戻し、状況を再確認した。

(敵の数は2機、母船にはまだMSが残ってる。そっちはブルツクに期待するしかねえ。問題はコイツ!)

デザインこそかけ離れているが、クダルは目の前の機体が自らの駆るグシオンと同族であることを即座に看破した。そしてそれ故に彼は焦りを覚える。

(動きからしてネズミが使っているのは間違いねえ。それなのになんだコイツは?えらく戦い慣れしてやがる!?)

混沌とした時代である。荒事を生業とする人間は決して少なくなない。中にはギャラルホルン崩れのMS戦経験者だって皆無とは言わないのだから、それなりに腕の立つMSパイロットという存在が居ない訳ではないのだ。だが、目の前の機体を駆るのは宇宙ネズミ。阿頼耶識システムを施術されるような、そうでもしなければ使い物にならない連中だ。そもそもヒューマンデブリという潜在的に反乱の可能性がある存在を多用する彼らの常識からすれば、それらを強化すると言うのは自分の首を絞めるのと同義である。そんな事を行うなど馬鹿のすることだ。だが、その馬鹿な行いがどのような結果を生むのか、彼は身をもって知ることになる。

『硬いけど、それだけだね』

マン・マシン・インターフェイスとして見た場合、倫理的観点を無視すれば阿頼耶識システムは極めて優秀なシステムである。空間把握能力の向上は通常センサーが検知、警告、それをパイロットが認識し確認し対応するという極めて煩雑な作業を一瞬で完了させることが出来る。加えてパイロットが自らの肉体を動かし、操縦桿に伝え機体を動作させるといふ何重にもタイムラグが存在する操縦も、思考と

同時に実行されるのだから比べる事すらおこがましい。これらの差は、パイロットの多少の技量差など容易に覆すし、互角あるいは格上ならば絶望的な差として立ちほだかる事になる。

硬いだけ、そう口にした内容が事実であるように、敵機はクダルの駆るグシオンを翻弄する。手にした片刃のロングソードが美しさすら感じさせる弧を描くたびに自慢の装甲に明確な傷を刻みつける。それが文字通り目に留まらない速度で振るわれ続けるのだから、クダルはたまったものではなかった。

「て、てめえ！殺しを楽しんでいやがるな!？」

『は？何言ってるの?』

苦し紛れに放った言葉は、何の効果も発揮しなかった。否。

『もういいや、死ねよ』

苛立ちの混じった声音でそう敵が告げつつ、左手に握られていた杖のような道具がコクピット付近に押し付けられる。同時に激しい閃光が杖の先の瘤から放たれ、コクピット周辺のナノラミネートを焼きはがした。

「ま、待っ——!!」

クダルが言い終わるより早く、ナノラミネートが焼きはがされた装甲に刃が突き立てられる。それはグシオンの分厚い装甲をもものともせず突き進み、コクピットを正確に貫いた。

『おっちゃんからお前は殺せて言われてるんだよね』

その眩きに応える者は居なかった。

『皆の仇!』

『死ねえ!!』

殺意満点の叫び声を上げつつ迫るマン・ロディ。随分な誤解をされているようだが、それを今指摘しても意味は無いだろう。彼らからすれば仲間の機体が一機も帰還しておらず、代わりに敵の機体が来たのだ。ヒューマンデブリの扱いを思えばつまりそういう事だと思うだろうし、それを覆せるだけの証拠も持っていない。捕獲している画像

くらいならあるけど、こんなもんCGで幾らでも細工出来ちゃうしなあ。

「悪いがその望みは叶えてやれん」

そう言つて俺は機体の腰に付けられていた球を取り外して投げつける。やはりまともな教育もしていない子供なんて戦闘ではものの役に立たねえな。重装甲と運動性がウリの機体なのに一直線に突っ込んでくるわ、接近するせいで仲間の射線を塞ぐわで、まるでなつちやいない。現に突っ込んできた一機は俺の投げつけた特殊弾を回避できずに正面からもろに喰らつた。

『な、なんだ!?!』

割れた球から飛び出した泡みたいなのが、爆発的に広がつて機体を包む。そしてそれは即座に固まつて四肢の動きを奪つた。うん、装甲補修材製トリモチ弾、大成功である。作つてくれたヤマギには特別ボーナスを支給せねばなるまい。

『ナタル!? チックシヨオオ!!』

友軍がやられても戦意が低下しないのは大したものだと言いたいが、怒りに吞まれてしまつては駄目だ。俺は素早く機体を上へと加速させ回避する。俺の背後にはMS大のデブリがあつたために、突っ込んできたマン・ロディは慌てて急制動を掛ける羽目になる。

「そういう場合はベクトルをずらして回避するんだ」

機動兵器同士の戦場で足を止めるのは余程の事がない限り下策だ。振り返り切れていない機体に再びトリモチ弾を投げて拘束する。後で剥がすナディが悲鳴を上げるかもしれないが、そこは酒の差し入れでもして許してもらおう。

『なんだよ、何なんだよコイツ!?!』

あつという間に2機を下したのが功を奏したのだろう。残つていた3機は動揺するように距離を取る。丁度良いから警告してみるか。「敵MSに告げる。降伏しろ、そうすれば助けてやる。降伏したければ武器を捨てろ」

俺の言葉に露骨に動揺する敵機。その迷いを一喝するように怒声が響く。

『ふざけるな鼠共！さっさとコイツを殺せ!!』

うるせえな。

「と言っているがどうする？戦うなら手加減はもうしないぞ？君たちをゴミのように扱う主人気取りに義理立てして死んでみるかね？それとも私に降って生き残るかね？」

『お、お前たち！今まで誰が生かしてやったと!?!』

「ここで助けてもコイツは感謝などしないぞ。また君たちを死ぬまで良い様に使うだけだ。それでも助ける価値があると言うなら掛かってきたまえ」

俺の言葉に一番先頭に居た機体が、恐る恐るマシンガンを手放す。そこからは早く、左右に居た機体も手にしていた武器を放り投げた。うん、実に重畳。残るは後始末だけだな。

『ま、待て判った、俺たちが悪かった！ここらで手打ちにしよう!』
俺がブリッジに接近すると、そんな狼狽えた声がコックピットに響く。

『お前たちには二度と手を出さねえ！約束する!!だから助けてくれ』
「……」

黙って手にした刀を向けると、汚い悲鳴のあとに早口で懇願が続く。

『わ、解った！MSか？船か!?!好きなものを渡す！鼠共だっけてくれてやる!』

こいつ何もわかってねえな。

「馬鹿か、お前は」

『へ?』

間拔けな声を上げるそいつに、俺は優しく教えてやる。

「この戦争の勝者は我々だ。つまりお前の手元に残っているものなど何もない。もう全て我々の物だからだ。それを差し出す？だから見逃せ？冗談にしても笑えんな」

『な、なっ……』

それにさあ。

「そうして命乞いをした連中をお前たちはどれだけ殺してきた？自分

たちの番だけ飛ばそうなど、筋が通らないだろう」

そう言つて俺は刀を構える。

『いい嫌だ！死にたくない!!』

「次は気の利いた台詞が吐けるように練習しておくんだな。先に行つて待っている」

そう言つて俺はブリッジの窓に刀を突き立て、即座に捻りながら引き抜く。突然空いた破孔から命乞いをしていた男が放り出されるまで、それ程時間はかからなかった。

13. 悩むのは若者の特権であり、答えるのは大人の特権である

「うむ。大漁大漁」

二番艦シラヌイと三番艦ジャックオーランタンに曳航されて移動する三隻の船を眺めながら、俺は満ち足りた気持ちで頷いた。ブルワーズはトップ二人を同時に失ったことで戦意を喪失。援軍としてこちらのウイル・オー・ザ・ウィスプが現れた時点で降伏の信号弾を乱射していた。突入部隊が侵入し掃討を行ったが、然したる抵抗もなく大人しく皆捕まった。

「大漁は解りますけど、どうすんです？こいつ等」

困った表情でそう聞いてきたのは、3番隊のビスケット・グリフオンド。浮浪児やヒューマンデブリで構成されている3番隊の中では珍しく、家族も居れば修学経験もあるという異色の存在だ。いや、こつちが異色とかやっぱりこの世界ふざけてるわ。

彼が指示したのはタブレットに並んでいる捕虜のリスト。それもヒューマンデブリではなく、大人の海賊達だ。これまでは多くても2〜3人だったが、今回は一気に20人位捕まえたからな。流石にこの人数をクリュセの警察に突き出しても、向こうが困ってしまうだろう。

「うーん。いつそ売ってしまうか？」

「…ヒューマンデブリにするんですか？」

俺の言葉にビスケットが顔をしかめる。彼は優しいから、仲間と同じ境遇の人間が増える事が気持ちとして整理出来ないのだろう。

「いや、どちらかと言えば派遣社員というところだな。確かテイワズが資源衛星で使う鋤夫を探していたから、そこに送ってしまったおう」

タービンス辺りに買ってもらって、その後は自分の人生をタービンスから買い戻して貰おう。彼らの今までの所業からすればぬる過ぎる判断ではあるが、ここで苛烈さを見せつけては教育上宜しくない。敵は誰彼構わず皆殺しなんて最悪の選択である。

「で、他の連中はどうしてる？」

3番隊は先に休憩に入らせている。これはまだ若すぎる連中も編成されているからだ。一部からブーイングが出たが、

「子供より体力がないクソ雑魚ナメクジだと認めるなら、彼らより先に休むといい」

と説得したら全員沈黙した。うん、意地張れる大人はいい大人だぞ。

「それがちよつと変な雰囲気でした」

「どういう事だ？」

俺が聞き返すとビスケットは一度深呼吸をすると状況を教えてくれた。

「ミカツキは何だかピリピリしています。オルガは部屋から出てきません。それと、アキヒロが…」

「アキヒロがどうしたんだ？」

「すぐく落ち込んでいます。なんだか、捕まえた連中と何かあったみたいで」

なにかって何だ。意味がわからん。

「俺たちが聞いても、罰が当たったとか俺が悪いとか言い続けてて会話にならないんですよ」

そいつは良くねえな。

「解った。少し様子を見てみよう。ああ、ビスケットももう休め」

「いえ、俺は戦ってた訳じゃないですし」

「休んでいる時に仲間が働いていたら落ち着かないだろう。自分の為に休めなくても、彼奴らの為に休め。いいな？」

「…はい、解りました」

宜しい。さて、それじゃ一つ部下とコミュニケーションと洒落込みますか。

「罰が、当たったんです」

訪ねてきた相談役にアキヒロはそう答えた。

「最近、俺はずっと楽しかった。仲間と騒いだり、相談役とバカやったり。だから勘違いしちまったんです」

「勘違い？」

「俺はヒューマンデブリだ、人間じゃねえ。人間と同じに楽しんだり笑ったりしていいはずがねえ。なのに俺がそんなことをしたから、罰が当たった」

沈黙している相談役に、アキヒロは自らに起こったことを打ち明けた。

「敵に、今日捕まえた敵に弟がいたんです。もう死んじゃったと、生きていねえと諦めてた」

「それとお前の罰がどう関わってくる？」

「あいつはずっと俺を待ってたんだ！なのに俺は諦めて、放り出して笑ってた！その間もあいつはずっと苦しんでいたのに！俺は、俺がもっとな！」

そう口にしながらも、どうすれば良かったのか、アキヒロには解らなかつた。もつと鍛えていれば良かったのか？もつと金を稼いでいれば？相談役が来てからは変わったが、それでも人生を買いとられているヒューマンデブリに出来る事は圧倒的に少ない。人間ですら生き別れた家族を探すなどと言うのは困難な事だ。遥かに制限されたヒューマンデブリならば尚のことである。自分たちは社の備品。大切に扱われようと、その事實は覆らない。それを大切にされたことを勘違いして、自分が人間になったような気がしていた。だから、罰が当たった。自分がなんであるかを思い出させる為に。あふれ出る感情が、目から零れ落ちる。とつくの昔に無くなったと思っていたそれが、未練がましく人のふりをさせてくる。アキヒロはどうして良いか解らず、下を向いた。零れた感情が、床を濡らす。

「そうか、すまなかつたな。アキヒロ」

「なんで、相談役が謝るんだ？」

視線を戻さぬまま、そうアキヒロは聞き返す。おかしい人だと思う。何故この人は備品と言いつつ相手には謝罪するのか。例えば自分のミスで道具を壊したとしても、その道具に謝る人間は居ないだろ

う。

「お前が人間じゃないと思ひ込んでいるのは、私のせいだからさ。私
が力及ばなかったから、私が頑張らなかつたから、お前は自分を人だ
と思えないでいる」

「違う、アンタは悪くねえ！」

「いいや、お前たちが人間だと思えないのは、あの馬鹿らしい紙切れの
せいだ。そしてその紙はわが社が管理している。そして私は会社を
動かす側の人間だ。ならばその責任は私にある。だからな、アキヒ
ロ。お前は悪くないんだ」

「そんな、だって俺は」

「諦めた？ 違うだろう。お前は精一杯今日まで生きていた。弟と会う
というのは、何よりお前が生き延びなければできない事だ。そして、
今日までお前は生きる以外に気を割けるほど余裕があつたのか？」

沈黙するアキヒロに男は畳みかける。

「楽しかった？ それは私に気に入られる必要があつたからそうしたん
だ。嬉しかった？ 生きる上で喜びを感じない者が明日へ進もうと思
える訳がない。アキヒロお前はな、今日まで精一杯生きてきたんだ。
そんなお前に当たる罰などあるものか」

「だけど、その間もマサヒロは苦しんでた」

「そんなのはお前のせいじゃない。苦しめた奴と、それを助ける方法
があつたのに助けなかつた奴だけが負うべき責任だ」

だから、と男は続ける。やらなかつたのではない、やれなかつたお
前がそんなものを背負う必要はないのだと。

「だいたい、お前の背中そんなものを背負う余裕などないだろう。
兄弟とは出会えば終わりか？ 違うだろう？ ならお前が背負うべきも
のが解るはずだ。ここからが大変だぞ、兄貴ってというのはな」

そう言つて男はアキヒロの背中をたたく。

「この再会は、神様とやらがくれた幸運じゃない。お前達兄弟が生き
るのを諦めなかつたから勝ち取った成果だ。だから、ちゃんと話し
て、そして勝利をしっかりと噛みしめてこい」

それだけ言ふと男は立ち上がり歩き出す。それを暫く見送つた後、

アキヒロも立ち上がり別の方向へと歩き出した。

「どうした、何か違和感があるのか？」

通路で自分の右手をぼんやりと眺めていたミカヅキにそう声をかける。俺の声に気づき、振り返るミカヅキに向かってドリンクの入った容器を俺は放った。

「ん、何でもない」

ドリンクを受け取りつつそう返すミカヅキに肩をすくめた後、俺は近づいてすぐ横の手すりにもたれかかった。

「そうか？帰ってきてから随分苛立っているように見えたが」

「苛立つ？なんで？」

そう不思議そうに聞いてくるミカヅキ。自覚すらなかったか。

「それが皆目見当がつかんからこうして様子を見に来たのさ。お前さんは顔も口も人より動かさんからな」

「別に、苛立ってなんかいないけど」

「でも何か違和感がある」

「…ん」

俺が指摘すると、ミカヅキは目を少し見開いて俺の顔を見た。

「何があったのか話してみろ、話しても解決はしないかもしれないが。口に出すことで自分の中に納まることもある」

ミカヅキは少し間をおいてから、今日起きたことを話した。同じガンダムフレームと戦った事、その中で投げかけられた言葉。そして、その言葉を聞いた時の苛立ち。

「硬かったけど、それだけ。おっちゃんより全然弱くて、まあ取り敢えずずっと切ってれば死ぬかなってやってたら、そう言われて」

「頭にきた？」

そう聞くと、ミカヅキは頷く。

「すぐくイライラして、すぐに殺そうって思ったんだ」

ミカヅキの言葉に俺は一度大きいため息を吐いた後問いかける。

「なあ、ミカヅキ。お前はなんで戦っている？」

その問いに対するミカツキの答えはシンプルだった。

「俺は戦うしか出来ないから」

おいおい、違うだろ。

「それは戦う理由じゃない。それしか出来なくても、それをしないという事だつて選べる。だけどお前は戦う事を選んでいるだろう？それは何故だ？」

再び問うと、ミカツキは沈黙した。多分同じ質問は今までもされたが、ミカツキの答えに納得しなかった者が居なかったんだろう。何しろ俺と彼らでは生きてきた環境が違う。浮浪児であるミカツキやその周囲の人間は、出来る事をしなければ生きていけない世界に住んでいる。故にミカツキの答えである「戦うしか出来ない」に納得する、してしまう。だが俺は違う。子供が戦うなんてふざけた世界を俺は認めない、だからミカツキの答えに納得しない。暫く沈黙した後、ミカツキは口を開く。彼は考える事を放棄しているくらいがあるが、愚かではない、むしろ聡明とすら言える。そんな彼は、以前俺が言った言葉を必ず覚えていて、そしてそれを怠つたために仲間が頭を下げたことも。故に同じ間違いを彼は犯さない。

「俺はオルガに命を貰った。だから俺の命はオルガの為に全部使う。俺は戦うしか出来ないから、オルガの邪魔をする奴を全部殺す。だから戦つてる」

「……」

「オルガは凄いな。俺にたくさんの事を教えてくれた。あのクソみたいな所から連れ出してくれたのもオルガ。オルガが言ったんだ。俺達の本当の居場所に連れてつてくれるつて。だから俺は役に立たなきゃいけない。オルガの為に出来る事をしなきゃいけない。だから、俺が出来る事をする」

凄いな。この子は。

「あくまでこれは私の感想だ。ミカツキ、お前は戦いが悪い事だと解っているな？」

「そんなこと」

「思っていない？嘘だな。お前が戦う理由は常に誰かの為にある。お

前はいけない事だと理解しながら、一番自分が上手くできるから戦っている。そんなお前に戦いを楽しんでいるなどと言えば、腹を立てられて当然だ。そして」

「……」

黙って聞いているミカツキに俺は覚悟を決めてそれを告げる。

「お前の苛立ちは多分もう一つ。その言葉に思い当たる節があったからじゃないか？」

「俺は」

そう言っただけ顔をしめるミカツキ。多分彼はそれが楽しいという感情なのかすら整理できていない。けれど似たような感情で分けるならば、その敵から言われた言葉通りの位置に納まるのだろう。俺はそう悩むミカツキに対して言葉を続ける。

「ミカツキ、それは異常な事ではない。誰だって力を振るえば興奮して体が喜ぶ。それは人間の体に備わった至極当たり前の反応なんだ。そして、それを肯定せずそれでも悪い事だと思えるお前はとても凄いな奴だ」

「俺が、すごい？」

そう聞き返してくるミカツキに笑いながら言ってやる。

「ああ、凄い。その欲望に負けて暴力を振るう人間の多さをお前たちは良く知っているはずだ。だからそれに怒れる、間違いだと思えるお前はとても凄い奴だ」

だからこれだけは伝えなきゃいけない。

「だからその苛立ちを忘れるな。そしていつかお前のその思いが当たり前に口にできる世界が来た時の為に、お前は戦う以外も出来る男になれ」

「戦う以外。出来るかな、俺に」

そう口にするミカツキに俺は堂々と言い放つ。

「当たり前だ。何しろお前は凄い奴だからな」

照明の消えた暗い部屋で、オルガは俯いてベッドに腰を掛けてい

た。

(やつぱミカはすげえよ。MSを任されて、そんで相手の親玉までやつちまう)

オルガ・イツカは幼少のころから目端の利く子供だった。他の連中よりも機転が利き、頭も悪くない彼は常に誰かの兄貴分として生きてきた。その中で運命的なものがあるとすれば、間違いなくミカヅキ・オーガスとの出会いだろう。周囲の浮浪児から金を巻き上げていた破落戸に抵抗し殺されかけていたミカヅキをオルガが救った明確な理由は彼自身にも説明できない。ただ確かだったのは、こんな所で自分もミカヅキも終われない、終わらせたくないという強い思いだった。破落戸を二人で返り討ちにしたあの日、オルガはミカヅキと約束をした。それは子供の口から出た他愛もない夢物語。しかし、ミカヅキという力を得たことでオルガはその道を進むだけの理由と力を手にしてしまう。それが多少目端が利く程度の少年には余りにも大きすぎる夢だったとしても。

「邪魔するぞ」

部屋の扉が開け放たれ無遠慮に誰かが入ってくる。その声から、入ってきたのが相談役だと解り、オルガは慌てて顔を上げる。

「マさん！あの、何か？」

「3番隊の隊長殿がしよげ返っていると聞いてな。散歩がてら様子見だ」

「べ、別に俺はしよげでなんか」

「暗い部屋に一人で俯いて座っていてか？」

意地悪い笑みを浮かべてそう聞いてくる男に、オルガはそつぽを向きながら口を尖らせた。

「それで、どうした？悩みがあるなら聞いてやるくらいは出来るぞ？」

そう笑う男に、オルガはぽつぽつと内心を吐露しだした。

「なんて言うか、やつぱミカはすげえなって。強くて、クールで、それでいて度胸もある。MSだって乗りこなすし、最近じゃ読み書きだって出来るようになってる。ガキの頃から、振り返るとあいつの目があるんです。そして目で聞いてくる、次はどうする？次はどんな

ワクワクする事を見せてくれるって。あの目は裏切れねえと思ってるんです。けど」

一拍置き、オルガはきまり悪そうに口を開く。

「最近思うんです。俺はミカの期待に応えられているのかって。アイツの目に映る俺はいつだって最高に粋がつて格好よくなくちやいけない。そうじゃなきゃ…」

そうでなければ、余りにもミカヅキに申し訳が立たない。自分の口にした夢に向かうため、人を撃ち殺したミカ。自分の力になるために、死ぬような阿頼耶識の施術を三度も受けたミカ。どの行動も全て、オルガの口にした本当の居場所へ向かうために支払われた代償だ。ならば、行き先を示す自分が格好悪くて良いわけがない。

「だってのに、今の俺は全然格好よくねえ。今日だって俺はブリッジでふんぞり返ってただけだ。ミカは敵の大將を討ち取ってるってのに。こんなんじや俺は…」

その何処か互いに互いを思いながら呪いを掛け合うかのように生きる少年達に、男はため息を吐き、そして笑う。

「出来る弟がいると兄貴は辛いな」

「マさん」

「今日のお前はちゃんとやれていたさ。お前はミカヅキと自分を比べているが、今日の仕事で言えば、どちらもちゃんと役割を熟していたよ」

そう言うと男は向いのベッドへ腰を下ろす。

「それにオルガ、お前は重大な勘違いをしている。ミカヅキはお前に連れて行って欲しいんじゃない。お前と一緒にいきたいんだ」

「そりゃ、どういう意味ですか？」

「さっきミカヅキが言っていたよ。俺は戦うしか出来ないから、出来る事でオルガの役に立ちたいとな。誰かにすがってただ後ろを付いていこうなんて思う奴が口にする台詞じゃない。ミカヅキもお前に置いて行かれないよう必死に走ってるのさ。なあ、オルガ」

落ち着いた声音で男が諭す。

「約束を早く果たしたい、一秒でも早くミカヅキを本当の居場所へ連

れて行ってやりたい。その気持ちはとても素晴らしくて大切なものだ。けれどな、いつも全力で走っていたら大事なものを見落とすかもしれない。もしかしたら石に躓いて大きな怪我をするかもしれない。事実お前は、一緒に走っている者が必死で喰らいついている事に気付かなかつただろう？」

それに、と続けて男は笑う。

「今のお前は仲間も増えた。その中には走れない者やゆっくり行きたい奴だっている。そいつらを放り出して走れる奴だけ付いてこい、生き残った奴だけたどり着くなんて選択は、あまりにも小さく格好悪いと思わんかね？」

14. 凡夫の勇は英傑の勇に勝る

終業時間のアラームが鳴り響くのを聞き、マルバ・アーケイはため息を吐いた。数時間前、作戦成功の報告を聞くまでは気が気でなかったが、どうやらCGSの悪運は尽きていないようだ。厄介者が居ないおかげで平穩無事に終わった今日という時間に惜しみながら別れを告げ、マルバは社長室へと向かう。

「社長の目があつたら社員が帰りづらいだろう。残業は社長室でやれ」

誰のせいでオフィスに居る羽目になったのか小一時間問い詰めてやりたかったが、どうせ効果がないのでマルバは止めた。無駄な事はしない。マルバは賢いのである。

「それにしても、ブルワーズを喰っちまうか」

お前の会社は近いうちブルワーズに喧嘩を売って壊滅させるぞ。もし奴に出会う前の自分にそう聞かせたらどういう反応をするだろうか。恐らく与太話と鼻で笑って、相手が詐欺師ではないかと疑うだろう。あの頃のCGSは警備会社を名乗りつつも士気、練度共に海賊以下の集団だったからだ。決裁の書類を入念に確認しながらマルバは自嘲気味に笑う。

「そう言えば、こうしてちゃんと書類仕事をするようになったのもあいつが来て以来か」

事務職としてデクスター・キュラスターを雇って以降、書類は碌に目も通さずサインを書くだけの存在に成り下がっていた。その頃のマルバは全てをあきらめていて、会社運営よりも私財を如何に増やすかの方に関心が向いていたからだ。もしデクスターがあと少し無能か、善良な人間でなかったなら、とつくの昔にCGSは消えていた事だろう。

「まあ、今の状況が順調とは口が裂けても言いたかないが」

そう言つてマルバは顔を顰める。ブルワーズを下したことは喜ばしい事ではあるが、流石にこれだけ話がでかくなれば、隠し通せるものではない。間違いなくギャラルホルンには目を付けられるだろう

し、裏社会の連中からも警戒されるだろう。何しろ自分達は今を時めく“海賊狩り”だ。倒して名を上げようなどと言う馬鹿は少ないだろうが、武力と言うのは存在するだけでも他者を威圧するものだ。火星を拠点に突如現れた武装集団など、どの方向からも歓迎されないのは明白だ。

「テイワズの動きも消極的だし、味方と見るのは早計だな」

タービンを通して交流はあるものの、所謂そちらの話は全くないし、そもそも本社側からアクションもない。つまりテイワズとしてもCGSは距離を取っておきたい相手と認識されている訳だ。

「まあ、あんな要求したらなあ」

テイワズの下部組織は幾つもあるが、その中には自衛用のMS製造部門がある。外向けにはあくまで作業用MSのレストアを行う部門となっているが、オリジナルのフレームを製造し、あまつさえMS用の武装まで開発、同組織内にばら撒いている企業を額面通りに受け取る馬鹿はいないだろう。木星圏という距離的な問題と、エイハブリアクターを自力供給出来ないという点からギャラルホルンからは警戒されつつも実力行使には至っていないというデリケートな存在だ。その組織に対し、MSのライセンス生産をCGSは申し込んでいる。無論非公式の事であり、仲介を頼まれた名瀬・タービンは顔を引きつらせていたが、その心労について同情はするがマルバの考慮すべき事ではない。

「しかし、話を通ったとしてもアイツはどうするつもりなんだ」

仮に全てが上手くいったとして、火星にMSの製造拠点など設ければギャラルホルンが黙っていないのは明白であるし、何よりMSを造ったところで購入先など非合法組織くらいしか存在しないのだ。

「いや、まさか、な？」

そんな事を考えているうちに、相談役が何気なく言い放った言葉をマルバは思い出すが、意図的に頭を振る事でその考えを追い出す。確かにあの男は途轍もない馬鹿ではあるが、流星に世界を相手に喧嘩をしようなどとは思わないだろうからだ。そんなものはただの自殺ではない。

「……」

ずしりと胃に重みを感じマルバは机から胃薬を取り出す。ため息と共に蓋をひねった瞬間、ドアがノックされた。

「ん？誰だ？」

「私だ。今良いだろうか？」

「…まあ、取り敢えず入れ」

了承の言葉にドアを開けたのは、件の相談役だった。予定よりも早い帰りに疑問を持ち、マルバは問いかける。

「随分早いな。他の奴らと明日帰ってくるものと思っていたが」

何しろブルワーズ相手の喧嘩だ。戦利品も今までの比ではない。当然それらの処分を目立つところとするわけにも行かないので、ギャラルホルンの監視が行き届いていない場所でタービンスと落ち合う手はずになっている。

「ああ、急ぎの用事が出来てな。私だけ先に帰ってきた」

そう言って相談役は手にしていたアタツシユケースから紙の束を取り出す。

「今回獲得したヒューマンデブリの権利書だ。30程ある」

「ん」

差し出されたそれをマルバが受け取る。何時ものように金庫に仕舞おうとしたところで、相談役が手を離さない事に気が付いた。

「おい？」

「マルバ、頼みがある」

「あ？頼み？殊勝な事を言うじゃねえか。いつもは勝手気ままにするくせに」

そう皮肉を口にするが、相談役は真剣な表情を崩さない。

「これでも私は、我が社に貢献してきたつもりだ。言い方は悪いが、それなりに儲けさせることが出来たと思う」

「それで？」

「今までの事は利益が出ると踏んでの事だ。だが今回は違う」

その言葉にマルバは目を細めた。

「今以上に利益を出すと約束する。足りんと言うなら幾らでも俺に借

金を背負わせてもいい。テイワズなりなんなり好きなどころに売り払ってくれて構わん。だから」

捲し立てた相談役は、そこで息を吸い込むと頭を下げた。

「我が社のヒューマンデブリを、全て解放して欲しい。頼む」

短い沈黙を破つたのは、マルバだった。

「マ、ためえウチが今何人ヒューマンデブリを抱えてると思ってる」

「211人だ」

「バカヤロウ241人だよ、今日お前が30増やしたからな。そいつら全員に普通の社員待遇を与えたら、どうなるか解ってんだろうな」
「解っている」

CGSが大所帯になっても回せていたのは新規の雇用対象においてヒューマンデブリの率が多くを占めているからだ。自身の買い取りという名目でタダ働きをしている彼らに最低限だとしても支払いが発生する事は少なくない負担になる。更に社の備品ではなく社員となれば企業として求められる保障などの対象となるから、そちらで支払う金額も馬鹿にできない。

「利益を出すと言ったが具体的な内容は無え。つまりお前は空手形でこいつ等を自由にしろと言っている訳だ」

権利書の束から手を離すと、マルバは立ち上がる。

「マ、お前舐めるのも大概にしるよ?」

そう言つてマルバは壁に埋め込まれた金庫へ向かう。震える手で暗証番号を入力し、目的の物を手に掴む。

「気に入らねえ、実に気に入らねえ。何が気に入らねえつてな」

言いながらマルバは相談役に近づき手にしたものを相手の胸へと押し付けると、あらん限りの声で叫んだ。

「報酬だ何だと言わなけりや、俺がお前の頼みを聞かないと思ってる事だよ!お、お前、俺を誰だと思つていやがる!CGSの社長だぞ!社員の頼み一つ聞いてやるくれえ屁でもねえんだよ!!」

握っていた権利書の束から手を放し、マルバは荒く呼吸を繰り返す。暫しそれを呆然と見ていた相談役が、笑いながら告げてくる。
「声、震えているぞ」

「うるせえ馬鹿野郎！それ持ってとつと出てけ！俺あまだ仕事があるんだよ！」

マルバはそう言つてソファへと座り込む。相談役は渡された契約書を大切そうにアタツシユケースへ仕舞うと、静かに立ち上がりマルバへ頭を下げる。マルバが邪険に手を振ると、苦笑しながらドアへと近づき、そこで唐突に足を止めマルバへと振り返り口を開く。

「なあ、マルバ。以前私は君の事を凡人と称したな」

「あ？それがなんだよ？」

「訂正させてほしい。君は凄い奴だ」

それだけ言うと相談役は部屋を後にする。閉じたドアを眺めていたマルバはゆっくり体をソファに沈めると、笑いながら一人呟いた。

「へ、気付くのが遅えつての」

15. 夜明け前

まだ薄暗く肌寒さも感じる時間、大勢の人間が広場に集まっていた。その表情は様々であるが、多くは困惑、そして不安を宿している。無理もあるまい。集まっているのはCGSに所属する全ヒューマンデブリ。そして周囲は正社員に遠巻きとはいえ囲まれているのだ。落ち着いているのは最古参である3番隊の面々だけだ。その彼らにしても、その顔には困惑が浮かんでいるが。指定された集合時間ちようどになると相談役が現れ、設えられていた壇に登る。そして拡声器のスイッチを入れると、いつも通りの調子で話し始めた。

「諸君、おはよう。こんな時間から済まないね、夜勤の皆はご苦労様だ。けれど大事な話があるからもう少しだけ付き合ってほしい」

そう言うのと、相談役はゆっくりと集まった面々を見渡した。

「先日我が社は大きな転機を迎えた。とても幸運な事に火星周辺を荒らしまわっていた連中が最近居なくなつてね。おかげで我が社のサルービジ業は本格的に事業拡大を行う運びとなつた」

集められた者の内、半数近くが微妙な顔になる。恐らく居なくなつたときの事を思い出しているのだろう。虐げられていた相手から拾い上げてくれた恩人ではあるが、戦場において対峙した時の心理的外傷は簡単に拭えるものではないのだ。

「これも偏に諸君らの献身が実を結んだと私は確信している。そしてわが社がさらに大きくなるには更なる努力と献身を求める事になるだろう。まあ、それはそれとして。信賞必罰。会社が皆の努力で儲かったなら、その努力に会社も報いる事が健全な関係であると思は思っている。故に私は、君たちの献身に報いたいと思う」

そう言うのと相談役は、片手に吊るしていたアタツシケースを持ち上げる。

「ここには契約書が入っている。そう諸君を縛り付けている、忌まわしいあの保有権利書だ」

相談役はそのアタツシケースを段の下であきれ顔で立っているトドに手渡した。

「CGS社長、マルバ・アーケイの代理として諸君らに告げる。本日この時をもって、我がCGSは諸君らに権利書を返還する」

沈黙がその場を支配した。しかし言葉の意味を理解する者が現れ、それが周囲に共有されるにつれて沈黙はざわめきに代わり、ざわめきは大量の混沌へと代わる。喜び抱き合う者、手を空へと突き上げる者。反応は様々であったが、多くの者は喜びを自らのあらん限りで示している。それを遠巻きに眺めていたササイが皮肉気な表情で口を開く。

「あーあ、本当に言っちゃまいやんの」

ササイ達のような一般社員からすれば、目の前の光景は手放しに喜んでいいものではない事が解る。何せ組織の多くをほぼ無料で回していた労働力が、突然有償に置き換わるのだ。さらに言えば権利書を返還し、一個人として扱うならば就業の自由を認める必要があり、その中にはCGSから辞する事も含まれる。当然その権利は4番隊に所属している少女達も与えられるのだ。社の未来より遥かに喫緊の問題に焦燥感を募らせている隊員は少なくないだろう。

「心配するな。あの悪魔みてえな相談役が考えなしにする訳ねえだろう」

横で同じように眺めていたハエダはむしろ楽しげな笑みを浮かべつつそうササイに話しかけてきた。

「そもそもだぞ、今あいつらが人間に戻ったとしてもだ。学もなければ技術もねえような成り立てを律儀に一人前として雇ってくれる場所があると思うか？」

「…あっ」

「そういうこった。連中が今よりいい生活が出来るのは、結局CGSの中だけってことなのさ。大した悪人だぜ。ウチの相談役様はよ。でもまあ」

喜びに沸く元ヒューマンデブリ達を見ながら、ハエダは笑う。

「自分でも信じられねえが、悪くねえ。悪くねえ景色じゃねえか」

人間に戻れる。唐突に告げられた僥倖を友人と分かち合うべく振り返ったりザが見たのは、途方に暮れた顔で遠くを眺めるミルダだった。

「ミルダ？」

「リザ、私たち、人間に戻れるんだって」

「そうだよ！もう私たちは——」

デブリじゃない。そう告げようとしたリザの言葉は、友人によって遮られる。

「でも、人間に戻ってどうしたらいいの？」

「え？」

困惑するリザに、俯いたミルダが話し始める。

「私、ずっとデブリだったの。人間だった時なんて覚えてない頃から。知ってる？世界にはとんでもない変態なんて幾らでもいて、赤ん坊みたいに小さい子が好きなんて奴もいるの。私が最初に買われたのはそんな奴の所」

どう応じればよいのか解らずにいるリザに構わずミルダは続ける。「でもね、ちっちゃい子が好きだから、ちよつと大きくなっちゃうともうダメなの。賞味期限が切れた、なんて言って捨てちゃうんだ。でもね、世界って良くできてて、ちゃんと捨てる先があるの。運がよかつたんだ、私。最後の最後に壊すのが趣味の奴に当たったけど、壊される前に相談役が拾ってくれた。けどさ」

何も映さない目でリザを見ながら、ミルダが口を開く。

「男に媚びを売って、股を開く以外の生き方なんて私知らない。リザ、私、人間になってどう生きたらいいかなんて、わかんないよう」

迷子のように顔をくしゃくしゃにして涙を流すミルダを見て、リザは思わず抱きしめる。どうしたらいいかなど、リザにも勿論解らない。けれど、自分は少しだけ人間の先輩なのだ。だから、この大切な親友を何とかしてやりたいと、リザは思った。

「大丈夫、大丈夫だからー私が一緒に居るからー」

それはなんの保証もなければ、確信がある言葉でもない。けれどもリザはその時何故かそう言えるだけの自信があった。

「大丈夫、大丈夫だよ。ミルダ、一緒に私が探すから。それに…」

口にはせず、リザは思う。相談役は自分達に報いると言った。なら困っている私たちを見捨てたりしないはずだ。根拠などないのに、リザは何故かそう信じる事が出来た。

「だからちゃんと見つかるから、泣き止んで？ミルダ」

抱き合った少女達は、静かに涙を流し続けた。

手にした書類を呆然と眺めながら、マサヒロ・アルトランドは考える。所有権利書。字の読めないマサヒロには何が書いてあるのかさっぱりわからなかったが、どうもこれを持っていれば自分は人間であるらしい。

「なんだよ、それ？」

壇上の男の言葉を信じるならば、会社に貢献したヒューマンデブリ達に対する恩賞だと言う。ならばおかしな話だ。ほんの数日前に捕まった自分達は会社に貢献などしていない。つまりマサヒロ達は何もしていないのにデブリから人間に戻った事になる。そしてゴミと誹られていた時との違いは、手に持っている紙切れ一枚。自分でも解らない苛立ちを感じながら、マサヒロは視線をさまよわせる。最初に目に入ったのは、同じくブルワーズから連れてこられた仲間達。彼らの表情は、マサヒロと同じくやはり困惑したものだ。だからマサヒロは見知った別の顔を探し、そちらへ近づいていく。その先には笑顔で知らない連中と肩を叩きあう兄の姿があった。

「あ…」

声を掛けようとして、マサヒロは躊躇う。兄のアキヒロはこの会社の古株だ。つまり今回の恩賞を貰うだけの働きを支払った者なのだ。自ら人である事を勝ち取った兄に、マサヒロは強い劣等感を覚え、そして同時に恐怖した。

(こんな紙切れ一枚で、俺は本当に人間になったのか?)

かける言葉が見つからず、マサヒロは俯き唇を噛んだ。その様子にアキヒロと談笑していた赤髪の青年が気づき、彼に教える。喜びを隠

しきれない表情で、アキヒロは振り向くとマサヒロに向かつて話しかけてきた。

「マサヒロ！どうだ、これで誰からも文句無しに、俺たちは人間だ！」
興奮に満ちた兄の声がマサヒロの耳朵を打つ。

「CGSはもともともつとでかくなる。そうすりややる事だつて沢山増える。戦つて奪つて奪われてなんて情けねえ話じゃねえ。マサヒロ、俺はこの会社で農業を覚える。解るか？畑だ！食い物をいっぱい作つて、そんでお前と——」

「兄貴」

捲し立てる兄に向つて、マサヒロは口を開く。

「兄貴は凄いよ、人間になっちまったんだな。でも、俺は違う。だつてそうだろう？こんな紙切れ一枚で何が変わる？さつきまでの俺と何が違う？こんなのただ渡されたつて、紙切れを持つてるゴミになるだけじゃねえか！俺は、俺はやっぱりっ！」

そう叫ぶマサヒロに、アキヒロは近寄るとしつかりと肩を掴んだ。

「違うぞ、マサヒロ。お前はゴミなんかじゃねえ。俺の弟が、ゴミであるわけがねえ！」

「だつて、俺は、俺はっ」

そう涙を流す弟に、アキヒロはしつかりとした声で告げる。

「俺もな、お前と同じように考えてた。自分はゴミだつてな。けどな、あの人が言うんだ。お前たちはそう思い込まされただけのただの人間だつてな。マサヒロ、お前の言う通りだ。こんな紙切れ一枚で人間だゴミだ分けられるはずがねえ、そんな事許される訳がねえ。俺たちは騙されてたんだ。俺たちはな、ずっと人間だつたんだ」

人には、自らを守るために備わった機能が幾つもある。その中に自らの心を守るものがある。理不尽な扱いに心が壊れてしまわぬよう、自らを洗脳するのだ。自分はゴミだから虐げられるのが当たり前、自分はゴミだから不当に扱われるのが当然。自我の形成しきれない子供に施されるその悍ましい洗脳は、異常な世界で壊れずに生き残る為の手段だ。だが、更なる理不尽が、そんなマサヒロの世界を破壊する。

「よく見ろ、マサヒロ。お前の周りに居た奴らはゴミか？お前の兄貴はゴミか？そんな訳ねえ、俺も、お前も、お前の仲間だって、皆人間だ！」

「あ、ああ。アキヒロ、にいちゃん!!」

漸く再会した兄弟は、互いの存在を確かめるように強く、強く抱き合った。

「どうよ、マっさん。今の御気分は？」

俺が広場を眺めていると、書類を配り終わったトドがそう声を掛けてきた。

「そう言うそっちは不機嫌そうだね、トドさん」

「そりゃあそうよ。こんなの一銭の得にもならねえもの。241人分の人件費よ？そんだけありゃさあ」

そう言っつて肩を落とすトド。まあね、確かにそれだけあれば更に経営を拡大したり、新しい事業を始める事だって出来るかもしれない。でもそれは、少しばかり遠回りが過ぎるんだ。

「社員のモチベーションは大事だよ。今日よりいい明日が来ると思えるから人間は頑張れるし、それを期待させてくれる会社に貢献しようと思ってくれるものさ」

「よく言うよ、本当はあいつ等を解放してやりたかっただけのクセに」
半眼でそう責めてくるトドに、俺はただ肩をすくめて見せる。鼻を鳴らして、壇に肘をつきながら、俺と同じ方向へ視線を向け直し、トドが再び口を開く。

「んで、どうなのよ。お望みが叶った景色はさ」

んー。

「大昔の話だ」

「あ？」

「厄祭戦が起きるずっと昔、1200人もの哀れな人々を殺戮から救った男がいた。救ってくれたことに感謝する人々に向かって、その男は何と言ったと思う？」

「さあ？人として当然の事だ、とかかい？」

そう返すトドに俺は頭を振り否定する。

「まだもつと救えたはずなのに、そう嘆いたそうだよ。強欲な事だ。まあ私はもつと欲深いんだがね」

俺の言葉にトドは呆れた表情で応じる。

「つまり、まだまだ足りねえと？」

「ああ、200やそこらでは全然足りないね。何しろ、世界にはまだ救える人間が呆れるほど残っている」

そう言つて俺は笑う。夜明けはまだ遠い。

本編1期編

16. 権力者との接近は相手からの場合、特に警戒が必要である

「革命の乙女、年若い娘が健気な事だ。親として鼻が高いのではないかな？」

「は、いえ。世間知らずの不肖な娘でして」

投げかけられた言葉に、しきりに額の汗を拭きながらノーマン・バーンスタインは答える。

「火星独立に向けた経済交渉、か。確かに世界秩序を預かる身としては、この様なクーデターを放置は出来んな」

世界を遍く監視し、秩序と正義を司るギャラルホルン。そう自らを謳う彼らにも内部を見れば厳然たる格差が存在する。火星支部は本拠地から遠く離れた左遷先であり、その支部長の席はエリートコースから脱落した者に与えられる敗者の証だ。

「しかし、良いのかね？ 場合によっては穏便に済まない場合もあるが？」

「これも、世の秩序を守るためでございますれば」

状況次第ではお前の娘を殺す。そう告げられたにもかかわらず。そう言つてノーマンは頭を下げた。

「承知した。この件に関して貴殿に不利益が被らぬ事を約束しよう」

「は、ありがとうございます」

そう言つてノーマンは席を立ち、頭を下げるとそそくさと部屋から出ていく。それを見送つたコーラル・コンラッドは侮蔑の色を隠さずに吐き捨てた。

「ふん、保身の為に我が子売るか。まあ、いい」

所詮は火星人の内輪話である。そんなものよりも今回の一件でコーラルの懐にどれだけの金銭が入り込むかの方が彼には重要だった。何しろヴァインゴールヴの席は高いのだから。

「おいマルバ、大変だ。このお嬢さんが何を言っているのか解らない」
横に座っているマルバの脇を小突き、小声でそう伝える。すると向
こうも小声で返してきた。

「安心しろ、俺も解らん」

そうか、俺だけじゃなかったか、良かった。いや、全然よくねえけ
ど。

「あー、ミス・バーンスタイン？」

「はい、何でしょう？」

少し緊張しながらも目の前の娘さんは健気に笑顔を作って見せる。

「もう一度確認させて頂きたいのですが。ご依頼は護衛業務と言う事
で宜しいでしょうか？」

「はい、先ほど申しました通り、この度私は地球にてアーブラウ代表の
蒔苗氏と会談を行う運びとなりました。については地球までの移動並
びに護衛を御社にご依頼したく伺いました」

「真に有難うございます。しかし、この条件に加えられております護
衛は少年兵に限る、と言うのは？」

俺の問いに彼女は一点の曇りも無い瞳で口を開く。

「はい、私は経済格差の是正、そして貧困の撲滅を目指し活動しており
ます。今回の会談もその一環なのですが、その活動をより世に知らし
め、かつ私自身が本当の彼らを知ることので活動意義を高めようと考え
たのです」

へえ、そいつは立派だね。ところでウチは、そのあなたが言う経済
的弱者の少年兵やら元ヒューマンデブリを食い物にしている企業な
らんど大丈夫か？俺は再びマルバの脇を小突き耳打ちする。

「おい、マルバ。彼女は本当にバーンスタインの御令嬢か？どっかの
企業がウチのイメージダウンを狙って送り込んだ工作員じゃないの
か？」

「本物だよ。お前もノアキスの七月会議の中継は見ただろ。IDも本
人のもので間違いなかった。残念ながら」

あの革命家○達を集めて騒いでた決起集会な。そうかあ、本物

かあ。

「最悪断るつてのも手ではあるが、あまり賢明とは言えねえな。彼女の後ろにはノブリス・ゴールドンがいる」

「難儀な事だ」

俺はそう言つて溜息を吐く。ノブリス・ゴールドンと言えば火星圏どころか圏外圏とされる広域に名を馳せる武器商人兼大富豪だ。ウチで使っている戦闘用のモバイルワーカーの購入先も彼の会社だし、個人用の火器なんかもそうだ。そして何より彼は火星で現在大人気の革命家さんたちのパトロンなのだ。その影響力は強大と言わざるを得ず、安易に敵対してよい相手ではない。

断ればノブリス氏の心証悪化。受ければ社のイメージダウン。どっちもマイナスとかこの選択肢最悪だな！

「どうする、マルバ？」

「俺は受ける方がマシじゃねえかと思う。印象が悪くなるつたつてどうせ地球での話だ。こっからは遠い。それよりノブリスを手伝わなかった方が不味い」

「同感だ。思想家に経済支援をしている武器商人など字面だけでも厄介だ」

素早く話し合い、俺たちは笑顔でバーンスタイン嬢に告げる。

「解りました、ミス・バーンスタイン。ご依頼を承らせて頂きます。ご出発の予定は？」

「会談は2カ月後の予定です」

となると、出発は1カ月後。余裕を見るなら3週間後つて所か。

「承知しました。では出発は3週間後とさせて頂きたいです。それから」

「他にも何か？」

流石にね。

「護衛に関して未成年者のみと言うのは承知出来かねます。彼らは年齢通り経験も浅い。また長期の航海経験を持つ者もおりません。安全の観点から成人社員の随行は必須です。これはご承知おきください」

「私はそのリスクも覚悟の上で申し上げているつもりですが」

強い眼差しでそう訴えるお嬢さん。いや知らねえよ、アンタの覚悟なんて。

「貴女は良いかもしれないが、それに巻き込まれる我が社の社員はどうなりますか？それとも、金を払っているのだからその程度の危険は受け入れると仰るのかな？」

そう言っただけは目の前に座る彼女を睨む。

「崇高な理念も結構ですが、我々は企業だ。社員の安全を守る義務も責任もある。ご理解頂けないのであれば、お話をお受けする事は出来かねます」

俺の言葉に彼女は一瞬ひるむが、俺を睨み返しつつ口を開く。

「致し方ありません。私の我儘で誰かを傷つける訳にはまいりませんから。ただし、随行の成人社員は最低限にして頂きます」

俺はその言葉に小さな溜息と共に応じる。

「その辺りが妥協点でしょう。承知いたしました。ではまた3週間後に」

「ええ、宜しくお願ひしますね」

立ち上がり差し出された彼女の手を俺は握り返す。傷一つない綺麗な手だった。

「なあ聞いたか、今度の俺たちの仕事。あのクーデリア・藍那・バーンスタインさんの護衛らしいぜ！」

昼食時、テーブルを囲んだ仲間に向かってダンテ・モグロが興奮気味にそう話しかける。CGSに彼女が来訪してから1週間の時間が経ち、社員たちにも正式に通達されたのだ。

「いや皆聞いたし。それにしてもクーデリアさんってあれだろ？クリュセの代表んこの娘さんなんだろ？お嬢様じゃん」

その言葉に年少のライド・マツスが応じる。サンドイッチを頬張った際に付いた口端のソースを器用に舌で舐めとりながら、彼は首を傾げた。

「でも何でウチに頼むんだろ？」

「そりやおめえ、火星で一番頼りになるのが俺達だからだろ。なんせ海賊狩りのCGSだぜ！けど、お嬢様かあ…、いい匂いとかすんだろうなあ」

得意げにそう口にした後、鼻の下を伸ばすノルバ・シノに対してミカヅキ・オーガスが突っ込みを入れる。

「お嬢様って言っても人間でしょ？俺達と変わらないよ」

「馬鹿野郎ミカヅキ！汗くせえアキヒロと女の子が同じなわけねえだろ！」

「おい、何で俺なんだよ」

「そりや兄貴がいつも臭いからだろ。ちゃんと服も小まめに洗えっ
て」

急に飛び火したアキヒロ・アルトランドが半眼で呻き、それを見たマサヒロ・アルトランドが呆れた声音で突っ込む。その中で昼食を咀嚼していたミカヅキがそれを飲みこむとポツリと呟く。

「そう言われれば、アトラはいい匂いがする」

「こ、これが勝者の余裕っ！」

圧倒的戦力差に慄くシノ達を横目に、ユージン・セブンスタークは恨めしそうに溜息を吐いた。

「つたく、パイロット組は気楽なもんだぜ、こっちは長期航海で気が気じゃねえってのに」

「3番隊じゃあユージンが一番操艦に慣れてるからな。仕方ねえさ」

フォローするように向かいに座っていたオルガ・イツカが資料に視線を落しながら口を開くが、それに応じたのはユージンの意地の悪い声だった。

「言ってくれるぜ。オルガだって不安であんま寝れてねえだろ、知ってんだぞ」

その言葉に持ち上げていたマグカップがピタリと止まる。

「な、何でそれを」

「それだけ解りやすく隈を作っていれば誰でも解るよ。ほら、食事の時くらい休みなよ」

そう隣に座ったビスケット・グリフォンが苦笑する。

「クライアントの要望らしいからメインは任されるけど、1番隊からも応援が貰えるんだから大丈夫だよ。むしろ今からそんなと持たないよ?」

「そうは言うけどな。折角の機会に無様は晒せねえだろ?」

「なら猶更ちゃんとは体調管理もしなきゃ」

ビスケットの言葉にオルガは降参するようにタブレットを仕舞い、食事に手を付ける。今日もCGSは平和だった。

17. 暴力で問題を解決するのは下策だが、暴力を嫌って放置する事は更に下策である

「今日からお世話になります」

そう言つて頭を下げるバーンスタイン嬢。若くて行動力がある点は評価すべきなんだが、そこに世間知らずが追加されると迷惑度が跳ね上がるので正直褒めにくい。

「むさ苦しい所ではありませんが、どうぞ。危険な場所もありますから、先に施設をご案内しましょう。ミカヅキ」

「はい」

「済まないが彼女を案内してやってくれ。くれぐれも危ない場所へは行かせないように」

「はい」

心底面倒くさいという空気を醸し出しているものの、ミカヅキはそう素直に頷いてバーンスタイン嬢と部屋を出ていく。本当はオルガかビスケット、もしくはユージン辺りが適任なんだが今は出発の準備に追われていて手が離せない。後はチャドくらいだが、今日の彼は休日だ。流石に呼び出すわけにはいかん。まあ、ミカヅキならアトラのお嬢さんとも上手くやっているようだし、問題も起きんだら。

…と、思っていた時期が私にもありました。

「なんかさあ、ことう自然に見下されてる感じなんだよねえ」

「まあ、しょうがないよね。あつちは箱入りのお嬢様、こっちは元デブりだもん。むかつくけどね」

夕食時、社内を廻つて色々とやらかしたバーンスタイン嬢は現在落ち込んであてがわれた部屋に引き籠もっている。因みに不満を漏らしているのは4番隊の娘さん達だ。

ミカヅキに案内を命じた際、俺は危険な場所に行くなど指示した。これをミカヅキは危険でない場所は案内しろと解釈し実行した。つまり、4番隊の本当のお仕事関連の施設も案内してしまったのである。お陰で顔を真っ赤にしたバーンスタイン嬢とツンドラを想像さ

せる視線を送ってくるフミタン・アドモス女史の二人に責められると言う、得難い経験をさせてもらった。まあ専ら怒っていたのはバーンスタイン嬢だけだが。

まあ思春期の女の子には刺激が強いよね、と素直に責められていた俺であるが、それに憤慨したのがそれを聞いた4番隊の娘さん達だ。何しろ今残っている彼女達は、仕事に納得しプライドを持って当たっている。それは彼女達が自分の人生の中で初めて自らの意思で選んだ選択であり、仕事だからだ。もちろん他の仕事に就ける自信がないとか、不安だから知っている仕事で手を打ったという消極的な理由の者もいる。けれどそうだとでも自らの選択を頭ごなしに間違っていると否定されて愉快な人間が居るはずもないのだ。部隊長のスピカに至っては殺気まで放っていたからな。どうしよう、地球までの護衛を彼女にお願いしようと思つてたのに。

「聞いた？ミカ君にも酷い事言つたらしいよ」

「対等になりたいから握手しましょうってやつでしょ。それって対等じゃないって自分で言つてるじゃん。流石お嬢様は違うわ」

子供の言う事なんだから大目に見てやりなさいと言いたいが、それはそれで違う気がするんだよな。飛び級ではあるものの彼女は大学へ通っているし、既に多くの人を巻き込んで行動する側の人間だ。ならば安易に甘やかしてしまうのは違うだろう。そもそも、こうした実情を知りたいと願つたのは彼女なのだ。自分の思い描いた救済以外は認めないと言うのも些か傲慢に過ぎるだろう。

「ああ、やつぱりここか。ちよつといいか？」

そんな埒もない事を考えていたら急に声が掛けられる。視線を上げればそこには真面目な顔をしたマルバが立っていた。

「構わないが、ここでは話せない事か？」

出来ればこの後新作料理の研究がしたいんですけど。

「ああ、大事な話だ」

ふあつきんしつと。

「了解した、行こうか」

手早く残っていた食事を掻き込むと席を立つ。向かった先は社長

室の隣の休憩室だ。ここはちよつとした仕掛けがしてあって、内緒話に向いている。部屋に入ると即座にマルバが口を開いた。

「クーデリアのお嬢さんはこの所名を上げている独立運動家だ。有名処の運動家連中とは大体懇意にしているし、そいつらの支援者であるノブリス・ゴルドンとも繋がりがある」

「どうした、急に」

「一部じゃその若さと容姿で革命の乙女、なんて呼ばれてる」

「御大層な事だな」

そこでマルバは大きく息を吐いた。

「問題はここからだ、彼女の家族ははっきり言って彼女の活動に否定的だ。特に父親との関係はかなり悪化しているらしい。そして重要なのは、日程を繰り上げてウチで未成年達と共同生活を送るように仕向けたのはその親父だそうだ」

「…なんだと?」

「救う相手の事も良く知らず云々と彼女を食事の席で責めたらしい。それが今回の訪問に繋がってるんだが、おかしいと思わねえか?」

「因みにその情報は何処から?」

「バーンスタイン家のハウスキーパーからだよ。首相周りの情報は持ってて損はねえだろうと何人か金で抱き込んだ。んで、相談役様としてはどう考えるよ」

「胡散臭いどころか完璧に厄ネタだろう。仲が悪いとは言え父親で政治家の男が小娘一人の行動が読めないとは思えん。つまり彼女がここに居るのはノーマン氏の思惑だという事だ」

「やばいな」

「ああ、不味い」

「全隊に非常呼集をかける。非戦闘員は全員シエルターへ移動させるぞ。クーデリアの嬢ちゃんとおのお付きの姉ちゃんもだ」

「ナデイに連絡してMSを即応待機させよう。海賊残党にでも金を積まれていたら万が一がありうる」

「杞憂なら笑い話で済むが、多分無理だろうな」

最近めつきり荒事に慣れたマルバがそう溜息を吐く。同感だね、

往々にしてこういう場合は一番悪い札が来るものだ。

「私もMSで待機す——」

部屋を出てそう口にした瞬間、爆発音が響いてきた。マルバの端末が鳴ると同時、CGSでも最も目立つ建物である管制塔が吹き飛ばされた。

「ちっ、ガワ直すのだったってタダじゃねえってのに。おう俺だ、何処の馬鹿が来やがった？」

そう吐き捨てるマルバは端末に出た。管制塔は勿論ダミー、本当の監視員は近くの丘陵に掩蔽壕を作成してそこに詰めている。報告を受けているマルバの顔がだんだん引きつり真っ青に変化した。

「マジかよ」

あ、すっごい嫌な予感。俺が何かを言う前にマルバが振り返り口を開いた。

「ギヤラルホルンが、攻めてきた」

『どうした、クランク二尉。気分が優れないか？』

何処か嘲るような色の声音がスピーカ越しに響く。それに対しクランク・ゼントは生真面目に答えた。

「は、いいえ、問題ありません」

『そうか？君は随分この作戦が不満のようだったからな？なんなら新米と下がっていても構わんぞ？足手まといは少ない方が良い』

『っ！』

敢えて個別ではなく小隊用の共通チャンネルで投げられた言葉に、僚機のアイン・ダルトン三尉が息をのむ。彼が何かを言い出す前に、クランクは口を開く。

「問題ありません、隊長。アイン三尉もそうだな？」

『…はい、問題、ありません』

『ふん、ならばいい。他の隊も居るのだ、あまり無様な真似はしてくれなよ？それにしても司令も心配が過ぎる。賊の処分など私の隊だけで十分だと言うのに』

そう部隊長であるオーリス・ステンジャは鼻を鳴らした。現在投入されている戦力はモビルワーカー1個大隊とMSが2個小隊だ。確かに戦力として見たならば有力な部隊と言えるだろう。

「目標は複数のMSを保有しているとのことですよ。モビルワーカーも申請されているだけで30機、決して油断出来る相手では——」

『クランク・ゼント二尉、私が何時発言を求めた？そして貴様は数が同じ程度で我々が賊ごときに後れを取ると言いたいのか？』

「いえ、申し訳ありません」

苛立ちを隠さない口調でオーリスはクランクの発言を止める。これ以上の発言の無意味さを悟り、クランクは口を閉じた。そして彼はコックピットの中で目を閉じ思い悩む。

民間警備会社に偽装した軍事組織CGSに囚われているクーデリア・藍那・バーンスタインの身柄確保。以前から内偵が進められていた武装組織に、クリュセ代表の息女が誘拐されたとの連絡を受けたコーラル司令が救出部隊を臨時編成したというのが今回の筋書きである。MSの所持秘匿は違法であるから、それを行っている連中を制圧する事にクランクも不満はない。少年兵を使っているような者達ならば尚の事だ。しかし、このような奇襲を行えば、まず最初にそうした弱い者たちが犠牲になってしまう。せめて降伏勧告や事前に通告をしてはどうかとも訴えたが、それは隊長に切つて捨てられた。「そんなことをして賊が逃亡したらどうする!？」

火星支部は辺境であり、閑職だ。パイロットにすれば退屈な哨戒任務が殆どで、戦果も挙げ辛い。特にここの所は海賊が激減したこともあって、司令からの特別任務の機会も減っていた。戦う事を何処か娯楽としているオーリスにしてみれば鬱屈とした日々であっただろうから、彼の言葉の真意もクランクには良く解った。

（だが、こんな大人の都合で子供が死ぬことは間違っている！）

自然と操縦桿を強く握りしめていたクランクは痛みでそれに気づき、慌てて頭を振る。戦場で冷静さを失う事はとても危険だからだ。

『出たか！』

喜悦の混じった声がコックピットに響く、共有のモニターへ視線を

送れば、そこには格納庫から飛び出すMSの姿があった。

『モビルワーカーは左右に展開して牽制！MS隊、行くぞ！』

オーリスの言葉に応じて、6機のグレイズが青白い尾を引き飛翔する。ラグナロクを告げるギヤラルホルンが、火星の地で静かに鳴り響いた瞬間だった。

18. 命とは最も価値のあるものであり、最も値引きの効くものである

「モビルワーカーは防御陣地まで後退！支援に徹しろ！」

ハエダは叫びながら手にしたマシンガンをばら撒く。MS相手では牽制程度の意味しかない行為だが、モビルワーカー相手ならば十分に脅威だ。

『ギャラルホルンだかキャラメルだか知らねえが、誰に喧嘩売ったか教えてやる!!』

同じく出撃したササイがそう叫びながら両手のマシンガンで次々とモビルワーカーを破壊していく。普段、余りにも理不尽な連中が訓練相手であるため下に見られがちであるが、伊達にそのような連中と同じ訓練をしているわけではない。二人揃えばまともな戦力、などと社内では酷評されているが、それはあくまでCGS内における評価であり、世界と言う水準で見れば十分に優秀な部類だ。当然モビルワーカー程度では何機いようとも敵ではない。

「二手に分かれた？」

『包围する気か!』

『ハエダ隊長!上ぎやつ!?!』

2人の注意がモビルワーカーに逸らされた瞬間、後方の陣地に砲弾が降り注ぐ、何機かのモビルワーカーが被弾し真っ赤な炎を噴き上げた。

「くそがつー！」

『野郎!!』

即座に射点に対しマシンガンを二人が放つが、それはむなしく空を切る。そして曳光弾に照らされた敵を見て、ハエダは歯噛みをする。

「グレイズ…、それも6機もかよ」

『モビルワーカー隊は全速で基地まで下がれ!お前らじゃ手に負えねえー!』

『で、でも——』

『お前らじゃ足手まといだつて言つてんだよ！とつとと下がりやがれ！！』

ササイが即座にそう叫び、そしてハエダに個別のチャンネルを開いてきた。

『へへ、こりや少しばかり貧乏くじですかね？』

『ああ、後でボーナスを要求しないとな。覚悟はいいか？』

ギヤラルホルンからの目を避けるために、CGSは保有するMSの殆どを宇宙の艦艇内に置いている。常時本社に置かれているのは彼らが使っているランドマン・ロデイと言う陸戦対応型に改修されたマン・ロデイ2機のみであり、その他は定期的にメンテナンスの為に運び込まれるか、鹵獲あるいはサルベージした機体だけだ。だが、まだ彼らの悪運は尽きていない。

「あの二人が来るまで持ちこたえりやこつちの勝ちだ、気合入れろよササイ！」

『楽勝だあ！』

余裕のつもりか軟降下していたグレイズ達に二人は襲い掛かる。獲物と考えていた者たちに攻撃された事に慌てたのか、一機がバランスを崩す。

『頂く！』

「がら空きだ！」

ササイがマシンガンで頭部を撃ち視界を奪った隙に、接近したハエダがチョッパを叩きつける。露出している脇腹のシリンダーを破壊されたその機体は錐揉みをしながら地面に倒れた。

「次！」

『オラオラオラあ！！』

続けてもう一機。着地には成功したものの、僚機が倒された事で硬直していたグレイズに二人は再び襲い掛かる。慌てて回避をするために飛ばうとしたグレイズに連続して砲弾が降り注ぎ、浮かび上がった機体の脚部にチョッパが掬い上げる軌道で振られ、右足を膝から破碎する。だが、快進撃はここまでだった。

『調子に乗るなよ賊風情が！』

「ぐう!?!」

格闘の為に速度が落ちていたハエダの機体に砲弾が殺到する。H I I A P 弾頭が次々と着弾し、瞬く間にハエダのランドマン・ロディは緑がかった激しい炎によって包まれる。

『隊長!このっ!退きやがれ!!』

『落ち着いて2対1を維持しろ!』

『はいっ』

ササイが救援に向かおうとするが、そちらも体勢を立て直した2機のグレイズによって阻まれる。

(腕も連携もミカヅキ達よりも遥かに下だつてのに!!)

ハエダは纏わり付く炎を振り払いながらグレイズを睨み付け、同時に自身の無力さに歯噛みする。一般的に見れば、戦闘訓練を受けた正規軍に対し3分の1の戦力で挑み3割を即座に無力化、相手が対応し始めても2倍の戦力に対し応戦し続けられているなど用兵に多少でも明るい者ならば頭を抱えなくなる練度であるが、良くも悪くも常識な連中との訓練に慣れた二人は気付かない。

『死ねえ!』

熱損によりハエダ機のナノラミネートが剥がれたのを好機と見たのだろう。片方のグレイズがバトルアックスを手に距離を詰めてくる。ハエダが覚悟を決め、迎え撃つべくチョッパーを構えた瞬間、声が響いた。

『そのまま動くな』

声とほぼ同時に飛来した大口径の砲弾が迫っていたグレイズに直撃、振り上げていた右腕ごとバトルアックスを吹き飛ばす。フレームごと破碎する程の運動エネルギーを受けた機体は、その衝撃を殺しきれずに吹き飛ばされた。遅れてたどり着いた砲声に、思わずハエダが振り返ると、格納庫の上で大砲を構えたMSが素早く次の獲物を狙っていた。

『調整無しでは流石に直撃は無理か』

僚機が狙撃されたことでもう一機が慌てて回避行動に入るが、それを見てハエダは皮肉気に笑った。

「残念だな、もうそこは間合いだぜ？」

偽装されていた天板と土砂が盛大に吹き飛び、中から白いMSが飛び出す。手に握られているのはカタナと相談役が呼んでいた片刃のロングソード。左腕に握られたそれは、MSの爆発的な推力による突進の中でも正確にコックピットを捉え貫く。グレイズのパイロットは自らに何が起こったのかを理解する間も無く絶命した。

『伏兵だと！姑息な!!』

『どの口で言ってるの?』

ササイ機を抑えていた内の一機がそう叫び、苛立たしげにミカツキが応じる。その間も彼は淀みなく動き、倒れ伏していたグレイズのコックピットに刃を突き立てた。

『おのれえ!!』

『待てアイン！友軍の支援を優先しろ!』

『逃がすと思ってるの?』

『やらせん!!』

何とか起き上がり後退しようとするグレイズにガンダムバルバトスが迫る。脇構えから放たれた一撃は強引に割り込んだグレイズの腕を切り飛ばす。

『クランク二尉!』

『大丈夫だ！撤退するぞ!』

その叫びと同時にグレイズの腰から円筒状の装備が転がり落ち、煙を噴き出す。瞬く間に広がったそれは、視界だけでなくレーダーすらも遮った。

『スモーク!』

『全機動くな!!』

その声と同時に再び砲弾が空気を引き裂いて飛翔、胸部のシリンダーを損傷し後退していたグレイズを背後から撃ち抜き撃墜する。だがそれがこの戦闘における最後の一撃になった。

「失敗したただと!」

帰還したクランク・ゼント二尉からの報告を受け、コーラル・コンラッド三佐は声を荒げた。

『はっ、2割の兵とグレイズ3機を失い、やむを得ず撤退を——』
「巫山戯るな！MSを有するとは言えこちらの方が数で圧倒していたのだぞ！」

怒りを抑えきれず、コーラルは思わず机を叩いた。独立運動の旗頭となりつつある、クーデリア・藍那・バーンスタインを殺害する事で火星圏の混乱を誘発すると共に地球への憎しみを増大させ、独立運動をより過激な方向に舵を取らせる。戦争を望む武器商人らしいノブルス・ゴルドンの願いを聞き届け報酬を得ると同時に、蜂起を計画していた大規模武装勢力を鎮圧するという戦果を挙げる。その両方を持って本国へ栄転するというコーラルの目論見は出鼻をくじかれることになったからだ。

(しかもグレイズを3機も喪失だ?!大失態ではないか!!)

今回の作戦はコーラルの独断によって実行されている。当然だ、要人の暗殺など公に出来る訳が無いし、CGSに關してもこれまで報告を上げていなかったからだ。これは彼がCGSを過小評価していた事と、ギャラルホルン内の勤務内容に対する評価に原因がある。MSの不正保有摘発よりも武装勢力の鎮圧の方が高い評価を得られる為に、コーラルは今までわざとCGSを見逃し続けてきたのだ。多少戦力を揃えたところで、規模と練度で正規軍に敵う筈もないと彼は考えていたからだ。しかし現実はそのを凌駕する。

『…また、件の組織には少年兵が多数在籍しております。彼等が自らの意思で戦っているとは思えません。一度降伏を促し、改めて制圧すべきです』

「甘いことを言うな！既に連中はギャラルホルンに弓を引いた反乱勢力だ！女子供であろうと関係無い！一人残らず鎮圧しろ！これは命令だ!!」

そう言ってコーラルは通信を一方的に切断する。

「クランク・ゼント。それなりの駒だったが、潮時か」

クランク二尉は彼直属の部下であり、指導教官を務める程の操縦技

能を持つ兵士だ。同時に兵隊根性が染みついた人間で、世情に疎く考えも柔軟性に欠けるギャラルホルンの掲げるお題目を本気で信じている類いの希有な存在だ。今までも表向きさえ整えておけば、素直に任務をこなしていた為に都合良く彼は使っていたが、どうにも今回は彼の硬直した思考が悪い方向へと働いているようにコーラルは感じた。

(そもそも今更ではないか)

コーラルは皮肉気に頬を歪める。何故ならクランク二尉は彼の指示で幾度も海賊や武装組織の鎮圧を行っている。戦った戦力にヒューマンデブリが含まれているなど、考えるまでもない事の筈なのだ。

「馬鹿も使いよう、とは言うものの度を過ぎれば話は別か。クソ、時間がないと言うのに…」

そう呟き、彼は計画の修正を考え始める。だが既に全てが遅すぎたことを彼が身をもって知る事になるのはそれ程時を必要とはしなかった。

19. やらずに終えた後悔はやった後悔よりも大きい

「1番機の補修は後回しでいいのか？」

「バルバトスと2番機を優先してくれ。かなり深刻なんだろう？」

ナデイ・雪之丞・カッサパの質問にそう俺が返すと彼は腕を組みながら頷く。

「装甲自体は問題ねえが、ナノラミネートがまるっと剥げちゃったからなあ」

ナノラミネートはMSの防御力を担保する上で極めて重要な要素だ。エイハブリアクターの存在が必須であるものの、耐ビーム耐衝撃を塗料と同じ程度の厚さで飛躍的に高めるといふ魔法のような処理である。

「ウチの施設では難しいか」

「そもそもMS関連の技術は碌な記録がねえからな、正直どう手を付けていいやらさっぱりだ」

そう言つてナデイはこんがり丸焼きにされたランドマン・ロディを見上げる。

「フレームが無事なだけ僥倖だ。∴それで、パイロットの方はどうした？」

「機体置いたらモビルワーカーで防御陣地の方に行っちゃったよ」

「そうか」

「なあ、相談役。これからどうなる？」

俺が踵を返すと、後ろからナデイが何気ない声音で聞いてきた。どうなるか。さて、どうしてやろうかね？

「どうにかするさ、だから整備をよろしく頼む」

ハエダとササイは黙々と陣地の補修を行っていた。ガレキを退かし残骸となったモビルワーカーを移動させる。グレイズの放つてい

た砲弾は対ナノラミネート用の弾頭で、焼夷効果の高い砲弾だった。その為命中した機体は例外なく炎上、搭乗員は骨も残らずと言う有様だ。

「二人ともここに居たか」

作業用のモビルワーカーが近づいてきて、その荷台から相談役が降りてくる。二人は一瞬手を止めたが、返事もせずに作業を再開した。相談役はそれに気にした風もなく口を開く。

「機体の状況だが、2番機は問題ないようだ。補給が済み次第即応待機に移れ。1番機の方はナノラミネートの補修の目処がたん。ハエダは修復が終わるまで私のジルダを使え」

告げられた言葉に、二人は反応する事なく作業を続ける。それを見た相談役は腕を組み目を細めた。

「返事はどうした？」

その言葉にハエダが反応した。手にしていたガレキを放り投げると、振り向かず口を開く。

「何故責めねえ？」

「責める？」

聞き返された言葉に、ハエダは声を震わせながら続ける。

「今回の戦闘で何人死んだ？」

「21人だな」

「ああ、そうだ。21人、21人だ！俺のへボい指揮で死んだ！何で責めねえ!?お前のせいで社員が、仲間が死んだと何故言わねえ!？」

吠えるハエダを見ていた相談役が小さく溜息を吐き、応じた。

「まるで責めて欲しいと言った口ぶりだな。大人として責任感を持つことは良いが、あまり自惚れるな」

「自惚れだ?!？」

激昂したハエダが掴みかかるが、相談役は顔色一つ変えずに言い返す。

「彼等の死が自分の責任だなど思い上がりも甚だしい。それは、私達責任者のものだ」

相談役の言葉にハエダは目を見開く。

「ハエダ、貴様の職務は1番隊隊長とMSパイロットだ。成程、部隊の指揮に関して不備があつたならそれは貴様の責任だろう。だが、今回の一件は敵戦力に対し十分な装備が用意されていなかった事に起因する。つまりこれは、その準備を怠つた我々経営陣の責任だ」

「で、でもよう。お、俺達がもつと上手くやれりやあようっ!!」

そう座り込み、涙ぐみながら零すササイを相談役は睨み付ける。

「それが思い上がりだと言っている。3倍以上の敵に完勝しろなどというのは兵に求めて良い水準を遥かに超えたものだ。それこそ、そんな命令しか出せなかつた指揮官が無能だつたと言う事だ。…だから、お前達は気に病むな」

「…身勝手だつてのは、解つてんだ」

相談役の胸ぐらを掴みながらハエダは俯き、絞り出すように言葉を口にする。

「散々殴る蹴るをしてきてよ。でもアンタに止められて、少しだけ面倒を見るようになって。そしたらあのガキ共、笑いながら寄ってくるんだ。隊長、隊長つてよ」

こぼれた涙が頬を伝う。

「いい気になってたらこの様だ。なあ、相談役。なんであいつらが死ななきやいけねえ?何奴も此奴もすげえ奴だつたんだ。俺と同じくらいまで生きてりや、俺なんか足下にも及ばねえような奴になれるはずだつたんだ!それが、なんで、こんなつ!」

「そういう世界だからだ」

「そんなんで納得できつかよ!」

ササイがそう吐き捨て拳を地面に打ち付ける。そんな二人に視線を注ぎながら、相談役は溜息を吐く。

「そうだな、その通りだ。納得出来ん、出来る筈がない。だから、世界がそれを望むなら、抗うしかあるまい」

その言葉の意味を正確に受け止め、二人は顔を上げる。目の前にいたのは、正気とは思えない判断を本気で口に行っている男だつた。

「もう一度命令する。ハエダ、ササイの両名は30分の休息後MSに搭乗待機。次に備えろ」

「次、だと？」

ハエダの疑問に皮肉気な笑みを浮かべた相談役が応じる。

「連中の狙いはバーンスタイン嬢だ。彼女が死ぬまで攻撃は収まらない。そして、都合の悪い真実を知っている私達を連中が生かしておく筈がない」

息を呑む二人に相談役は告げる。

「正念場と言う奴だ。後悔しないように動け」

二人は目を合わせると、格納庫へ移動するべくモバイルワーカーに飛び乗った。

「申し訳ありませんな、少々ごたついております。取敢えず、ご無事で何よりです」

「いえ、お気遣いありがとうございます」

CGS社長のマルバ・アーケイを前に、クーデリア・藍那・バーンスタインは悄然としつつも、何とか口を開いた。部屋で落ち込んでいた所を砲声に揺さぶられ、意味も解らぬままフミタン・アドモスと共に地下シェルターに押し込められたのが昨日。断続的に響く振動に眠れぬ夜を過ごし、部屋から出る事が出来るようになったのは、日が頂点に昇る時間だった。

「率直に申し上げますが、あまり良い状況ではありません。昨日の襲撃は何とか凌ぎましたが」

「相手は、ギャラルホルンなのですよね」

クーデリアの言葉にマルバが首肯する。そして苦い表情で告げにくる。

「大変申し上げ難いのですが、ギャラルホルン相手は弊社では荷が重すぎます。御身の安全も保証出来かねます」

そこで言葉を句切ったことに気付き、クーデリアは悲しげな笑顔を浮かべた。

「お察しの通りだと思います。今回の地球行きは極秘にしています。知っている人間は限られます。そして…」

その中でギャラルホルンに働きかけられる人間など一人しか居ない。

「困りましたな」

そう言つてマルバは頭を掻いた。ギャラルホルンと事を構えるなど、リスクなどという言葉の範疇をとうに超えている。本来ならばお帰りを願う案件であるが、彼女を狙っているのがその帰宅先の家族であると知ってしまった故に、それを口にするのが憚られた。

「このような状況で心苦しいのですが、このまま依頼を継続頂く訳には行かないでしょうか？」

「お嬢様!？」

驚きの声を上げるフミタンを手で制し、クーデリアは言葉が続ける。

「真実は解りません。けれど、可能性がある以上お父様の元へ戻ることも出来ない。ならば、私は前に進むしかありません」

「いや、しかし」

言い淀むマルバにクーデリアは言い募る。

「報酬でしたら当てがあります。お願いできませんでしょうか？」

クーデリアの言葉にマルバは顔を顰め、溜息を吐く。

「21人。今回の襲撃で死んだ人数です」

「っ!?それは…」

「ヤクザな商売です。それに連中に武器を持たせて戦わせているのは俺等だ。貴女のような人からすれば、どの口が言うのかと思われるかもしれませんがね、それでも俺は社長であいつらは社員。俺にはあいつらを守る義務がある。死ぬと解っている依頼を受けるわけには行きません」

「と、社長は言わざるを得ないんですかね？」

そう突然口を挟んだのは、これまで部屋の隅で端末を弄っていたトド・ミルコネンだった。

「おい、トド」

睨み付けるマルバに対しひらひらと手を振っていないしながらトドは続ける。

「今回の襲撃がバーンスタインさんの暗殺が目的だとするのなら、一部の人間による実行の可能性が高え。何しろバーンスタインさんは火星独立を掲げる連中の旗頭だ。そんな人間をギャラルホルンが暗殺なんてすれば、最悪暴発を招くし、そうでなくても火星人の対地球感情の悪化は避けられねえ。治安維持を掲げる組織にすればとんでもない醜聞だ」

ギャラルホルンの腐敗については公にはされていないものの、それなりに情報を集めていれば十分にたどり着ける真実だ。トドの言葉にマルバは口に手を当て思案する。一部と言えど、ギャラルホルンは強大な相手だ。戦いを挑むにはリスクが高すぎる点に変わりはない。そして正式な軍事行動であったなら投降や降伏と言う選択肢も用意されているが、トドの言葉通りならば今回の襲撃は良くても独断、最悪極秘の任務である可能性が高い。だとすれば、関係者は綺麗さっぱり掃除されると見るのが妥当である。

「このままじゃあジリ貧確定、逆転の目があるとすりゃあ、そいつあ自分お嬢さんだ」

真剣な顔でトドが意見を述べる。

「ギャラルホルンの行動に異議を唱えるのに、火星の人間じゃ力不足だ。だが地球の経済圏の人間、それも代表の言葉なら？」

「それは！」

「トド、それをやったら本当にギャラルホルンが全部敵に回りかねえぞ？」

外向けの仮面を外して問うマルバにトドは肩を竦めながら返す。

「でも黙ってたら今殺される。俺あ少しでも可能性が高い方に賭けるべきだと思いますがね？」

その言葉にマルバが応じるべく口を開きかけた時、警報が鳴り響きアナウンスが流れた。

「監視班より報告！MSが接近中！数1！機種はグレイズです！」

20. 正義とはその人間の価値観によって定められる不確かなものである

「私はギャラルホルン実働部隊所属、クランク・ゼント！そちらの代表との1対1の決闘を望む！」

「決闘だあ？一方的に襲ってきた奴らが今更何言ってやがる！」

左腕の盾に赤い布を纏わせたグレイズは、本社から少し離れた場所で静止すると、そんな事を告げてきた。それにシノが怒りを隠そうともせずに吐き捨てた。

「私が勝利したら、そちらが鹵獲したグレイズとクーデリア・藍那・バーンスタインの身柄を引き渡して貰う。勝負が付き、グレイズとクーデリア・藍那・バーンスタインの引き渡しは済んだ後は、全てこの私が預かる。ギャラルホルンとCGSの因縁は、この場で断ち切ると約束しよう！」

一方的な物言いにミカツキが目を細める。

『どうする相談役？今なら仕掛けられるぜ』

『態々乗ってやる必要もねえよな？』

MSで待機しているハエダとササイからも好戦的な言葉が漏れた。

いかな、皆殺気立っている。

「わ、私が行きます！無駄な争いをする必要はありません！」

皆の後ろから現れたバーンスタイン嬢が声を震わせながらそう言い放つ。責任感もあるしそれを取ろうと言う気概もある。なんだ、良い娘さんじゃないか。

「俺は反対だね、実働部隊の人間なんて下っ端じゃねえの。そいつの口約束なんて信用できる要素が何処にもねえよ」

「ここは是非相談役のぐ高説を賜りてえ所だな？」

トドが半眼で呻き、マルバが口角を上げてそう口にする。言うまでもないと思うんだけどなあ。

「ハエダ、悪いが降りてくれ。私が出る」

「俺がやるよ？」

そう俺がハエダに通信を入れてみるとミカツキが剣呑な目つきで
そう提案してくる。そんな彼を諭すために口を開く。

「駄目だミカツキ、まだお前さんは手加減が下手だからな。うっかり
殺してしまう訳にはいかんから、今回は私に譲れ」

「なんで？」

なんで、かあ。見れば他の連中も大体同じ表情だ。無理もないよ
な、一方的に襲われて仲間を殺されたんだ。そんな相手が今更正々
堂々戦おうなんて出てきて、律儀に話に乗ってやろうと思う方が異常
だろう。殺し合いならば。

「奴は今決闘を申し込んできた。つまり殺し合いじゃない、戦争をし
に来たんだ」

「どう違うの？」

全然違うよ。

「殺し合いは命のやり取りそのものが目的だ、だが戦争は目的の為に
命のやり取りを行う。やることは一緒だが、求めているものが違う。
そして」

眉を寄せるミカツキに俺は諭すように告げる。

「目的が果たされるなら、戦争は相手を殺さなくてもいい。つまりア
イツは少なくとも私達を殺すために来たんじゃない」

「散々しておいて今更？」

そうだよな、俺もそう思うよ。

「ああ、今更だよ。でもなミカツキ、前にも言った通りここでアイツを
殺したら、一度でも戦えば我々は話し合いなどには応じない連中だと
奴の仲間に思われることになる。そして奴はギャラルホルン、この世
界で最大の軍事組織の一員だ」

俺はミカツキの肩を叩くと、倉庫へ向けて歩き出す。

「恨むなど言わん、許す必要など無い。だがそういう連中を全て殺し
ていたら、私たちは戦いが間違っている世界になど、一生たどり着け
ん。あんな連中の為に諦めてしまうのは少々もったいないだろう？」

コックピットで瞑目し返答を待っていたクランク・ゼントの耳に、接近警報の音が入る。静かに目を開けると、基地から1機のMSが進み出てきていた。律儀に向こうも腕に赤い布を巻き、決闘に応じる姿勢を見せていた。

「承諾感謝する。ギャラルホルン火星支部実働部隊所属、クランク・ゼント二尉だ」

『CGS所属、マ・クベだ。先ほどの言葉、相違なからうな?』
「無論。しかしあのガンダムフレームが出てくるかと思つたが」

そう言つてクランクは目の前の機体に目を細める。IPP-0032 “ジルダ”、厄祭戦中期に製造された量産フレームであるヘキサフレームを使用したMSだ。軽量で運動性の高い良い機体ではあるが、ガンダムフレームと比較すれば性能不足は否めない。しかし返つてきたのは静かな笑いとは不敵な台詞だった。

『結構。子供相手では本気が出せまい?そのせいで負けたなどと言われては困るのでね』

ジルダが奇妙な構えを取り、クランクのグレイズが半身に体を引く。一瞬の沈黙、そして二人の言葉が重なつた。

『参る!!』

MSの大推力をもつての突進は、刹那の時間で双方の距離を0にする。振り上げられたハンドアックスと弾丸と見紛う速度で振りぬかれた刀がぶつかり、派手な火花を散らした。

「それ程の力があつて、何故子供を戦いに巻き込んだ!」

『他に食わせる方法を知らんからさ。そもそも殴り掛かつてきた者の台詞かね!』

打ち合う事3合、それだけでクランクは相手の技量に舌を巻いた。グレイズはギャラルホルンの主力機である。300年という長期に渡り有力な敵対組織を持たなかつたギャラルホルンは、同機を非対称戦を前提とした機体として設計していた。つまり対MS戦を想定していないのだが、元々の汎用性がそれを十分に補っている上に、リアクター出力以外はガンダムフレームと同等の性能を持つ本機は、当代で運用されている量産型MSでは傑出した機体である。そして目の

前のジルダは中距離支援用のフレームを用いた機体であり、本来集団での砲戦を前提としているのだ。白兵戦における優位がどちらにあるかなど、比べるべくもない。だが目の前のジルダはグレイズと互角に切り結んで、否、克蘭クは明確に自身が押されていることを自覚する。

「ぬ、うううー！」

『流石にミカツキの様にはいかんか』

戦いの最中とは思えない落ち着いた声音が響いたかと思うと、ジルダがその動きを変える。足を大きく開き腰を落とした姿勢から、素早い突きを連続して放ってくる。そしてそれは、正確にグレイズの可動部を捉えていた。

「なんだ!? その動きは!!?」

介者剣法というものがある。それは遙か昔、人がまだ自ら鎧を纏い刃を手に戦っていた時代に考案された、装甲を纏った者と戦う為の技術だ。火砲の発達と共に忘れ去られたはずのその技術は、火砲が決定打たりえないMS戦において再び目の目を見る。

響き渡る損傷警告に克蘭クが堪らず機体を後退させるが、それは完全に下策だった。推進器の配置上、MSは前進よりも後退する速度の方が遅いし、何より彼が相対している機体は軽量で加速性に優れているのだ。盾ごと貫き、左肩を破壊する突きを受け、克蘭クは諦めの笑みを浮かべる。もし決闘の初めから彼が自分と同じく剣を抜いた状態で、一合目からこの突きをコックピットへ向けて放っていたら。克蘭クは自らに何が起きたかすら理解する間もなく絶命していただろう。そうしなかつたのは偏に彼が、正々堂々の決闘を正しく言葉通りに受けてくれたからだ。

『私の勝ち。で宜しいかな?』

倒れ伏すグレイズのコックピットへ刃が付きつけられ、そんな声が響く。

「ああ。私の、負けだ」

負けられぬ戦いに敗北した克蘭クは、そう言って静かに目を閉じる。だが予想していた衝撃はいつまで経っても訪れる気配を見せず、

代わりに言葉が降りかかる。

『克蘭ク・ゼント二尉。君は戦う前の宣言を覚えているかね?』

「...?無論だ」

『ならばそれを守ると宣言した事も?』

「くどい、二言はない」

そう口にして再び克蘭クは目を閉じかけるが、言いようのない悪寒に襲われ目を見開く。そしてそれは正しい反応であったことを、彼はすぐに知ることになる。

『いやあ、それは良かった。何しろ君は自分が負けた時の条件を何も言わなかったからね。つまりそれは、自分が負けたら勝者の要求をなんでも聞くと言う事だろう?』

「なっ!?!」

『と言うわけで貴様の命もその機体も、私が貰い受ける。今更無効だなどと見苦しい事は言うまいね?何せ先ほど、貴様は自分の口で負けを認めたのだから』

その言葉に克蘭クは慌ててコックピットを開ける。そして何とか翻意を促すべく目の前の機体に言葉を掛ける。

「ま、待て。待ってくれ!?!」

『軍人ならば負けられぬ戦いでも、負けた時の事は想定してしかるべきだったな?ほら、さっさと立て、社に戻るぞ』

そう言っって背を向けて動き出すジルダに向けて、克蘭クは懇願する。

「生き恥は晒せない!ここで殺してくれ!!」

その叫びにジルダが足を止め、振り返る。

『21人。先日貴様らが殺してくれた我が社の社員の数だ。彼らが迎えるはずだった今日を奪った貴様が、自分の生死を好きに出来るなどという贅沢が許されると思うな』

明確な怒気をはらんだ声で言い放つとジルダは再び動き出す。そして思い出したように付け加える。

『どうしても死にたいと言うなら、せめて100倍の人間を救ってからにしろ。そうしたら俺が殺してやる。とつとと来い。克蘭ク・ゼ

ント』

その日、ギャラルホルン火星支部実働部隊所属のクランク・ゼント二尉は死ぬことになった。

「やあ、遠路はるばるようこそ。ファリド特務三佐、ボードウィン特務三佐」

「お気遣いありがとうございます、コンラッド三佐」

そう笑顔でコーラル・コンラッドは二人の青年を迎え入れる。最悪のタイミングでやってきた監査部の人間に内心苛立ちつつも、それを押し殺して彼は続けた。

「この所少々立て込んでいてね。見苦しくて仕方がないだろうが許して欲しい」

予定より二日も早く到着した青年将校達は顔を見合わせた後、笑顔で応じる。

「いえ、お気遣いなく。どこでも似たようなものですので」

「ええ、我々が来る時はどこも皆忙しいようなのですよ」

露骨な当てこすりに湧き上がる怒気を強引に抑え込み、努めて陽気な声でコーラルは告げる。

「それは良かった。ああ、そうだ。仕事の手が必要だったら言ってくれ、部下を回そう。それから長旅で疲れただろう、何か入用な物はあるかな？手配しよう」

「コーラル三佐」

饒舌に語るコーラルの言葉を冷え切ったマクギリス・ファリド特務三佐の声が遮る。

「お心遣いは感謝いたします。ですがそれをされては三佐を拘束しなければならなくなる。どうかご自重下さい」

「あ、ああ。そうだな。私としたことが軽率だった。忘れてくれると助かる」

年不相応の凄みを感じさせる彼の言葉に思わずコーラルは怯み、そして自らの羞恥を紛らわせる為に意識をもう一つの案件へと向ける。

(可愛げのない若造共め！オーリスの馬鹿も失敗しおって！あの作戦で片付いていればこのような面倒は無かったと言うのに！…克蘭クめ、おめおめと帰ってきたのだ。せめて教え子の尻ぬぐいくらいはしてみせろよ？)

彼の下に克蘭ク二尉の作戦失敗と戦死の報告が届くのは、翌日の事だった。

2.1. 利益の供与は物事を円滑に進めるための必須条件である

「さて、これで我が社とクーデリアのお嬢さんは晴れて運命共同体と相成ったわけだ」

応接室に集まった面々を見ながらマルバがそう口を開いた。俺が黙って頷くと、マルバが続ける。

「当初の予定ではウィル・オー・ザ・ウイスプとシラヌイの二隻で通常の航路を移動。地球には1カ月で到着予定だった」

「クーデリア嬢の保護、いや、暗殺と言うべきか。その指示はギャラルホルン火星支部長であるコーラル・コンラッド三佐から直接言い渡された。少なくとも火星支部に所属する艦艇からの追撃は避けられないと見るべきだ。アリアドネ沿いの航路では振り切れない」

俺の後ろに立っていたロッド・ミライが静かにそう意見を出す。何か最初は名前変えろ、服もウチの社員のにしろって命令する度に、くっ！殺せ！とかほざいていたが、死ぬ死ぬ言うけどお前が無責任にくたばるとこの子達が危険な目に遭うぞ？それもお前の元職場のせいだ。それとも高潔な軍人様は子供の命より自分の名誉の方が大事なんか？って聞いたら大人しく協力的になった。成程、これが悪堕ちってやつか。

「となると抜け道って事になるが」

「この辺の抜け道は大抵オルクスが仕切ってる。ギャラルホルンと繋がってるのは間違いねえから、みつかりや確実に通報されんね」

マルバの言葉にしかめっ面のトドが応じる。

「動くならばこの数日が勝負だろう。確か今日から火星支部には監査が入っているはずだ。その間はコーラルも派手に艦隊を動かす事は出来まい」

「問題はバーンスタイン嬢を送り届けている間、本社を如何にして守り通すかだな」

「…それについてなんだが、ちよつとした案がある」

「聞かせてくれ」

真剣な顔でそう口にするマルバに、俺は続きを促した。

「現実問題として、社にいる全員で移動は不可能だ。人数が人数だし、何より非戦闘員が多すぎる」

その意見に全員が頷く。

「そこで、社を二つに分ける。一つは今のまま火星に残る組、そしてもう一つはクーデリアの嬢ちゃんと地球に向かう組だ」

「いやいや。違う会社になったから無関係、なんて聞いてくれる相手じゃねえでしょ」

呆れたようにトドが突っ込むが、マルバの表情は変わらない。

「だから本当に社を分ける。クーデリアの嬢ちゃんに同調した過激派が社を離反、残っているのは装備を持ち逃げされた老人や女子供連中だ。当然会社経営もままならんからこっちは別の企業に身売りをする」

「おい、まさか」

「ああ、CGSをテイワズに売る。と言っても残るのはどうせこの社屋くらいなもんだ。大した資産じゃねえ、だから借金をする」

「借金、ですか?」

話について行けていないバーンスタイン嬢がそう訝しげに聞いた。まさかその借金が自分に今から降りかかるなんて思いもしていないだろう。

「そうだ、クーデリアの嬢ちゃんはアープラウ代表にハーフメタルの貿易自由化を求めに行くんだろう? つまりそれが成功すれば火星のハーフメタル採掘っていう利権が生まれる。その権利を同行する会社で貰いてえ」

その言葉でトドは得心したのか腕を組んで唸る。

「成程ね。テイワズに身売りする会社は、いずれそのハーフメタルの利権で分社が買い戻す手形ってわけだ。当然身売りしたまんまでなけりゃ買い戻しの話はなくなる。利権が欲しければ連中はしっかりと残った連中を守らなきゃなんねえ」

「火星支部のみでテイワズと事を構えることは難しいだろう。だが

ギヤラルホルン全体が動けばその限りではないぞ?」

ロツドの言葉に、マルバは笑う。

「動かねえよ。火星の独立性が強まって困るのは経済圏の連中だ。何しろ植民地を失って弱体化するんだからな。ギヤラルホルンとすれば、資金提供するパトロンが増える上に、各経済圏の影響力が低下するんだ。パワーゲームがしたい連中にすれば願ったり叶ったりなんだよ」

「離反組の人選は?」

俺がそう聞くとマルバは覚悟を決めた顔で告げてくる。

「革命家に煽動されるならそれらしいのが必要だ。若くて社会に不満がある奴や、会社の乗っ取りに失敗した奴とかな?」

俺はその言葉に深々と溜息を吐く。

「つまり、私と3番隊か。そうになると全てのMSを持つていくのは無理だな。売り払うか?」

「今からじゃ不自然だし買い叩かれるのがオチだ。箱舟に戻るのが無難だろう」

「やはりそうなるか。移動には予定通りウィル・オー・ザ・ウィスプとシラヌイを使うぞ?」

「あ、あのー!」

俺達がそう進めていると、バーンスタイン嬢がそう声を上げた。

「その、私にも解るようにご説明頂けませんか?」

彼女の願いに困った顔でこちらを見るマルバ。おいきたねえぞ社長。釣られてこちらを見つめるバーンスタイン嬢に対し、俺は渋い顔になるのを自覚しつつ警告する。

「ここから先は完全に我が社の話です。聞いてしまえば我々は貴女を解放出来なくなる」

何しろ箱舟の件は我が社の命綱の一つだ、露見することは絶対に避けねばならない。そしてどんなに義理堅く信用に値する人間であっても、そこから情報を引き出す方法が存在する以上、完全に手放すことは出来なくなってしまう。そうなれば今だけの話ではなく、今後も永久に彼女と我々は不可分になってしまふのだ。その意味は彼女自

身が考えているよりも遙かに重く、危険な事だ。

「か、構いません。私達は運命共同体なのでしょう？なら、私はちゃんと全てを知りたい！」

そう言い切る彼女に俺は釘を刺す。

「構わないなどと軽々しく口にするものではないよ。君と我々は現在利益が一致しているが、今後もそうだとは限らない。知ってしまった貴女を我々は利益を護る為に殺す可能性だってあるのです。それでも知りたいと？」

「それはっ、でも！」

「ままま、まあまあ、二人ともちよつと抑えなつて！」

慌てた様子でトドが割つて入ると、バーンスタイン嬢の方を見て口を開く。

「お嬢さん鉄火場は初めてだろ？寝不足だし飯でも食つて少し落ち着きな。そんで冷静になつても知りたいって言うならそんときや改めて聞きやあいい」

その一言で一先ず解散という流れになる。と言つても部隊の編制は進めてしまうが。バーンスタイン嬢が頭を下げ退出したのを確認したロツドがこちらを見て口を開く。

「私には話しても構わないだろう？箱舟とは何だ？軌道ステーションの事ではあるまい？」

火星において一般的に箱舟と言えば、静止軌道上に存在する共同宇宙港を指す。ここには艦艇の係留のほかにも物資の保管用の借用スペースがある。なので公にしたくない物資や装備のやり取りについての隠語として、敢えて同じ名称を使っていたのだ。俺は頭を掻きつつロツドに俺達の箱舟について説明する。

「以前、この辺りを縄張りにしていたブルワーズと言う海賊とやりあつたんだが」

「名前は聞いたことがある。確かMSを大量に保有する武闘派だったか。コーラルは放置していたが」

海賊は密貿易船をよく襲つてるからな。特にあいつ等は武闘派と呼ばれる程考え無しにやっていたから、凶らずも密貿易の抑止になつ

ていたんだろう。

「不思議だったんだ。あんなに馬鹿な連中が何故MSを大量に運用できるのかとね」

やってみれば解るが、MSを真面に運用しようと思えば、モビルワーカーの比ではないコストがかかる。何せ装甲一枚直すのだって専用の設備が要るのだ、外部に頼んでいたらそれこそ幾ら金があっても足りないだろう。

「…まさか、MSの生産設備を持っていたのか!？」

当たらずとも遠からぬ答えを出すロッドに俺は正解を告げた。

「正確にはロデイ・フレームの製造設備と装甲の生産設備だな。ついでに言えばリアクターの製造能力は無いから新規で生産するならリアクターの確保が必要になる」

「海賊が、そのような…」

ロッドはそう絶句するが、これはブルワーズが途轍もない幸運に恵まれたというのが正解だろう。捕縛した連中の残党をテイワズに売り渡すことを告げたら、一人の海賊が命乞いをしてきた。何でも元々は民間の技術者で、モビルワーカーに対する知識があった為にブルワーズに脅迫されて従っていたとか。その彼が自分の対価として提示してきたのが、彼らの拠点としていた大型艦の存在だった。んで、この大型艦と言うのが、半壊した工作艦だったのである。しかも製造設備が生きたままの。

「待て、確かお前たちはサルベージ業でっ!？」

お、察しがいいね。けどそう簡単には行かんのだよなあ。

「製造済みの分は確保したんだがね」

ウツキウキで工作機械を確認したら、全て阿頼耶識システムで操作する方式だった。じゃあ誰かに試してもらおうかって話したら件の海賊に慌てて止められた。何でも工作機械の負荷はMSの比じゃないとの事。

「製造過程の一切を丸ごと脳に詰め込むんです。大抵の奴じゃ廃人になって終わりですよ」

ブルワーズではヒューマンデブリを使い捨てる事でその問題を無

理やり解決していたらしい。無論ウチではそんなことは出来ないの
で、製造設備は絶賛休業中である。ただデブリ帯の奥まった位置か
つ、工作艦故か大出力のリアクターのおかげで周辺のデブリ密度も濃
く、更に艦自体がMSの保管輸送を前提としているため、MSの秘匿
整備にこれ程向いている場所もない。距離が遠いので頻繁に通うの
は難しいが。

「つまり、持っていけない機体の隠し場所も問題ないという事か」

「地上にある分も上げてしまう方が無難だろう。問題はテイワズが
乗ってくるかだが」

「オルクスを出し抜くには道案内も要る。となりやあ可能性があるの
はタービンスだ。そこから突っついてみての出方次第だな」

「あの任侠屋が慕っている相手なら、上手くいくと信じたいがね」

取敢えず、やれることはやっておこう。

「へえ、ウチに身売ったあ中々面白れえ事を思いつくな」

「どうでしょう、親父。俺としちゃあ乗りたいんですけど」

名瀬の言葉に古参の幹部達が不快さを隠さない視線を送る。名瀬・
タービンはテイワズの中では新参だ。トップであるマクマード・バリ
ストンのお気に入りかつ、新航路開拓による利益供与によって一気に
幹部会に顔を出すようになった彼を疎ましく思う人間も少なくない。
特に彼が女を食い物にしていると放言する事で、確実に収益に影響が
出ている風俗関連を扱っている人間はその傾向が顕著だ。そんな緊
迫した空気を破ったのは、マクマードのすぐ近くに座っていた派手な
男だった。

「いいんじゃないやねえの？俺は賛成だぜ」

「叔父貴!？」

注目を集めなおしたジャスレイ・ドノミコルスは口角を上げながら
持論を口にする。

「ウチは火星に本格的な拠点を持ってねえ。地球とのやり取りをする
にも中継点が出来るのは歓迎だし、成功すりゃ恩を売れる上にハーフ

メタルの利権だ。失敗してもはした金で火星に支部が持てると思えば悪くねえ取引だ」

「ですがギャラルホルンを刺激する事に！それに守るとなりや戦力を送る必要だつて！」

そう立ち上がって力説する幹部に向かってジャスレイは手を振りながら答える。

「テイワズの看板相手に簡単に喧嘩なんざ吹っ掛けてこねえよ。そんなことしたら圏外圏が大荒れになるのがギャラルホルンの奴らは解つてるからな。面倒だけで金にやならねえ事を向こうもしねえさ。だからウチの下に居るって事実だけで十分守れる、戦力を送る必要もねえ。それでも欲しいってんなら俺の所が出してやるよ」

不敵に笑いながらそうジャスレイが口にする、立ち上がっていた幹部は黙って席に座りなおす。それを見届けたジャスレイは視線を名瀬に移し、言葉を続ける。

「ただ、傘下に入れるのは結構だが盃を交わすのはナシだ」

「ですが、それじゃあウチの身内とギャラルホルンが判断するか」

「オイオイ、名瀬よ。ウチは企業、営利団体だぜ？儲け以上のリスクは背負えねえ。第一後から買い戻されてえなんて言ってるやつらを身内なんて引き込めるわけねえじゃねえの？」

そう肩を竦めるジャスレイを名瀬が睨むが、別方向からの言葉に彼は驚きの表情となる。

「俺もジャスレイの意見に賛成だ。傘下に入れるのは構わねえが、懐までしまい込むのはナシだ」

「そんな！親父!!連中はリアクターの供給でテイワズに貢献してくれてる！ここで見捨てちゃ不義理つてもんじゃないのか!」

そう懇願する名瀬をマクマードは苦い表情で説得する。

「それが問題なんだよ。ウチがギャラルホルンから本気で目の敵にされてねえのは圏外圏の治安維持もあるが、ウチのMSがリアクターの供給を外部に頼っているからだ。身内にしまえば例え連中が買い戻してもはいさようならとはいかねえ。そうなりやギャラルホルンも黙っちゃいらねえだろう。だから傘下にや入れてやるし、お前ん

ところが手助けするのも認める。だがそれ以上は認められねえ」

断言された名瀬は俯き唇を嚙む。だが、直ぐに顔を上げると真剣な顔で言い放った。

「解った、今の内容で先方には伝える。あと、タービンスが助ける分には構わないんだな?」

「構わねえが常識の範囲内にしておけよ。入れ込み過ぎるとお前も庇いきれなくなる」

「肝に銘じておくよ」

マクマードの言葉に名瀬はいつも通りの笑みを浮かべて応えた。

「親父、名瀬の野郎入れ込み過ぎだぜ。もう一度釘を刺すべきじゃねえか?」

私室に戻ったマクマードに付いてきたジャスレイがそう苦言を呈する。価値観の相違から反発しあう仲ではあるが、ジャスレイ自身名瀬の商才は認めるところであるし、何より彼が下手を打てば被害はテイズ全体に波及する。それは名瀬と同じく運輸を生業としているジャスレイにとっては文字通り死活問題だ。

「なあジャスレイ、お前はCGSの連中をどう思う?」

ジャスレイの言葉には答えず、マクマードはそう聞き返して来た。その事を不満に思いながらも、ジャスレイは自らの意見を述べる。

「訳が解らねえ連中だよ。利益にならねえならお近づきにもなりたくねえや」

「ほう?」

彼も伊達にテイズのナンバー2に座っている訳ではない。事実マクマードは彼の鑑識眼の確かさを高く評価していた。

「博打みてえな方法で荒稼ぎしたかと思えば、いきなりヒューマンデブリを解放して大損をして見せる。真面目に仕事をしてるように見せかけて、抜け抜けと違法行為にも手を染める。何がしてえのか解らねえ、だから予想がつかねえし、何処に逆鱗があるかも解ったもんじゃねえ。おまけにギャラルホルンと喧嘩するだけの力まであるときた。そんなの次の瞬間爆発するかもしれねえ特大の爆弾みてえなものだ。近くに居てえ訳がねえわな」

「…おめえらがもうちよつと仲が良けりやなあ」

自身とほぼ同じ評価を下すジャスレイを見て、マクマードはそう呟く。名瀬は誠実だがその分清濁併せ呑むという才覚がない。ジャスレイは世渡りに明るくその辺りは上手いが、野心が過ぎて内に敵を抱えやすすぎる。二人がそれぞれを認めて折り合いをつけてくれれば直ぐにでも地位を明け渡せるというのに。マクマードは内心そう溜息を吐く。

「あ？何だって、親父？」

「何でもねえ、ついでに言えば博打を打つ度胸もあれば、それに勝つちまう運なり実力なりもあるってわけだ。軒を貸したつもりが母屋を取られちゃたまねえやな？」

親の気持ちも解らずに呑気に問うてくるジャスレイにマクマードはそう返す。この一件が彼らの成長につながることを密かに期待しながら。

2.2. 運命とは都合の良い錯覚である

「あー！ミカヅキ来たー！」

「クーデリアもだ！ミカヅキ、他は？モチヨチヨさんは？」

「相談役は仕事が忙しくて今日は無理だつて」

「お兄ちゃん!!」

「ミカヅキ…とクーデリアさん？」

元気の良い双子が駆け回り兄であるビスケットに抱き着く。その様子を目を白黒させながら見ていたクーデリアが疑問を口にした。

「もちよ？」

「ああ、相談役の事ですよ。以前、ベイクト・モチヨチヨつてお菓子を作ってくれました」

そうビスケットが困った顔で笑った。失礼だから呼び方を改めるよう注意したが、逆に相談役が許してしまったのだという。それ以来双子の妹達は彼の事をモチヨチヨさんと呼ぶのだという。そのような説明を受けていると、初老の女性が近づいてきてぶつきらぼうに言い放つ。

「ふん、揃ったみたいだね。じゃあ始めるよ」

「うん、サクラちゃん」

そう頷くと籠を持ってミカヅキが歩き出す。クーデリアはその後を慌てて追った。

「あの、これは？」

「サクラちゃんはビスケットのおばあちゃん、ここはサクラちゃんの農園。ウチは良く収穫の手伝いをしているんだ」

言いながらミカヅキはコンバインによって刈られた畑の中へと入り、足元のコーンを拾う。クーデリアも見よう見まねで続くが、段々とその作業に熱中し始める。学業においては大学まで飛び級で進むほど修めているクーデリアであるが、一方でこうした畑仕事や市井での生活には全くと言って良いほど触れていない。彼女にとって体を動かしての収穫作業はとても新鮮で楽しい行為だった。

「ん、んんー!!きゃっ!!」

まだ刈られていない枝からコーンをもぎ取ろうとした彼女はバランスを崩して倒れかける。それをミカヅキが咄嗟に支えた。

「大丈夫？」

「え、ええ。ありがとうございます」

コーンを抱えたまま礼を言うクーデリアに、ミカヅキが変わらぬ表情で問うてきた。

「それ、幾らだと思う？」

手の中のコーンを指され、クーデリアは少し考えた後口にする。

「200ギヤラーでしょうか？」

一般的に市販されているコーンの値段が3000〜3200ギヤラー程、そこから導き出した答えだが、ミカヅキは頭を振って否定する。

「10キロで50ギヤラー、この辺りの農場で穫れるのは殆ど食用じゃなくてバイオ燃料として買ったたかされてる。食用は企業が雇った契約農家を作って卸してるから普通の農家が作っても買い取って貰えないんだって」

「……」

「この辺はまだ運がいいんだってサクラちゃんが言ってた。CGSが食用として買い取ってくれる分があるから、全部燃料用にするよりは儲かってるって。ビスケットの給料も上がって、クッキーとクラッカーも学校へ行かせてやれるかもしれないんだって」

言いながら遠くを見ていたミカヅキが振り返り、クーデリアへ頭を下げた。

「だから、会社がなくならないように頑張ってくれてありがとう。バースタインさんが無事に地球にたどり着けるよう、俺も頑張るよ」

その言葉にクーデリアは顔を背けた。自分が来たからCGSは襲われた、そしてその結果として命が奪われたと言う気持ちがぬぐい切れなかったからだ。

「自分のせい、なんて思わなくていいよ」

「え？」

「おっちゃんが言ってた。バースタインさんは丁度良かったから利

用されただけだって。バースタインさんが来なくても、いずれ何か理由をつけて襲ってきただろうって。だから、気にしなくていい。それに」

「それに、なんででしょうか？」

「俺も、俺の仲間も自分達の居場所を守るために戦ったんだ。そこにバースタインさんもたまたま居ただけでしょ。俺の仲間は、誰かの犠牲になったんじゃない。だから自分のせいで死んだなんて、誰かのおまけで死んだなんて、馬鹿にしないで欲しい」

そう真直ぐに告げてくるミカヅキを見て、クーデリアは自らを恥じた。彼の言う通り、何という傲慢だろう。自分のせいで死んだ、それは一見彼らの死に責任を負っているように聞こえる。無論クーデリアもそのつもりで発していたが、それは見方によれば、彼らの死は自分の巻き添えで起きた無意味なものだと言っているに等しい言葉だ。それは正しく、自らの為に、そして仲間の為に死んだ人間に対する侮辱にほかならない。

(彼らは、文字通り命がけで自らの居場所を守っている)

明日が来ることに疑問を持たず、その環境をただ与えられていたクーデリアには想像すら出来なかった思考。その一端に触れ、クーデリアの中で何かが叫んだ。こんなのは間違っていると。

「私は——」

言いかけた彼女の言葉は、唐突に響いたブレーキ音と悲鳴にかき消された。

時間は少しだけ巻き戻る。荒涼とした大地に一台の車が止まり、そこから二人の青年が下りてくる。

「正に不毛の大地、だな」

「植民地政策の名残だな、入植初期の水量制限が未だに尾を引いているんだろう」

テラフォーミング初期の火星は現在のように人為的に惑星全土が1Gに保たれておらず、そのため大気や水が定着しない環境だった。

都市と呼ばれるアーコロジを建造し、そこに住む人間は一日に使用する水や空気の使用量が厳格に定められていて、解放後もこれに則つた量が地球から供給され続けた。このため解放後も多くは旧アーコロジの循環システムに依存した生活が営まれることになり、現在の火星は地球に負けないだけの水資源を有しているにもかかわらず大地の緑化は進んでいない。そこに住む人々が困窮でそんな事に気を割くだけの余裕がないと言うのも大きな理由だが。

「それで、こんな所に態々降りてきてまで欲しかった目当てのものは見つかりそうか？」

「…ああ、見ろ」

そう言つてマクギリス・フアリドは手にしていた双眼鏡をガエリオ・ボードウインへ手渡した。

「あれは、砲撃跡か？」

「数日前からクーデリア・藍那・バースタインが行方不明だそうだが、彼女の父親がコーラルに直接会つて伝えている。そしてその直後にこの辺りで戦闘があつたという通報が入っている」

「つまりコーラルが彼女の身柄を狙つて襲撃を？」

「彼女の身柄を確保出来れば統制局の覚えもめでたいだろうからな。火星独立を助長するにしろ、頭を押さえて意のままに操るにしろ、使い道には事欠かない」

「我々の監査などどうという事も無いほどに、か？」

ガエリオの言葉にマクギリスは頷く。

「だが、計画は順調とは言えないようだ。出撃した大隊の内1個中隊が消息不明になっている。コーラルは転戦したなどと言っているが、記録に改ざんの跡があつた上に、向かつた先の都市ではデモなど起きていない。となれば」

「交戦して撃破されたと？ 幾ら火星支部が辺境とはいえギャラルホルンの正規兵だぞ？ それを返り討ちに出来るような武装組織となれば事前に報告があつてしかるべきだろう？」

その言葉にマクギリスは冷たい笑みを浮かべる。

「そんな真面目で勤勉な男なら、とつくに本国に召還されているさ」

「成程な」

肩を締めガエリオは同意すると二人は移動を開始する。

「最寄りの都市はアープラウのクリュセか」

「大隊規模の戦力を投入した戦闘ならば、何か目撃情報があるかもしれない」

「やれやれ、監査部などなるものじゃないな。ギャラルホルン一働いている自信がある。ああ、そうだマクギリス。今夜妹に連絡をするんだ、お前も一緒にどうだ？」

「いいのか？せつかく兄妹水入らずの時間だろう？」

そう返すマクギリスにガエリオが苦笑する。

「むしろお前を呼ばなかったらアルミアに俺が叱られる」

「そういう事ならお邪魔させて貰おう」

薄く笑うマクギリスにガエリオは眉を寄せて口を開く。

「家同士の話とはいえ、許嫁が9歳の娘とは。苦勞をかけるな、マクギリス」

「構わない、親友の妹だ」

「無理はするなよ？」

「無理なんてしていないさ、お義兄様」

「な!？」

それは悪魔のような偶然だった。荒野を走っていると言う認識から友人のジョークに思わずガエリオは視線を助手席へ向ける。しかし正にその瞬間、トウモロコシ畑から二人の少女が飛び出してきた。

「ガエリオー！」

「うお?！」

マクギリスの声に事態を即座に理解したガエリオがブレーキを踏むと共にハンドルを切る。彼がMSパイロットであることも幸いし、車は少女たちに掠ることもなく停止する。しかし、驚いた拍子に少女たちは地面に倒れてしまった。

「お、おい。お前達大丈夫か？」

ミカツキの目に最初に飛び込んだのは倒れ伏したクツキー、クラツカ姉妹の姿だった。阿頼耶識システムによつて拡張された空間認識が、同時に彼女達のすぐ横で停止している車の存在を告げてくる。運転席のドアが開き、中から何者かが出てくることもミカツキは認識したが、そんな事は無視して彼は二人の元へと駆け寄る。

「クツキー！クラツカ！」

体には先ず触れずにそう大声で呼びかける。要救護者への対応についてCGSの隊員たちは徹底的に叩き込まれていたからだ。

「ミカツキ？」

直ぐに顔を上げたクツキーが返事をし、その声に釣られるようにクラツカも顔を上げる。ミカツキは真剣な表情で二人に問いかける。

「大丈夫？痛いところはない？」

「びっくりして、転んじやっただけ」

「私たちが急に飛び出しちゃって」

二人の言葉に嘘がない事を理解して、ミカツキは息を吐く。

「な、なあ。大丈夫か？」

そこで漸く問題のもう片方の当事者に向き直る。年齢はオルガと同じか、少し上だろうか身なりも良く清潔であることからそれなりの社会的地位の人間である事も窺える。ミカツキは立ち上がると彼に向かつて頭を下げた。

「二人がすみません」

「ああ、いや、こちらも不注意だった。怪我がなくて…ん？お前それは？」

ミカツキは腰を折って頭を下げていたために、自然背中が彼の視界に露になる。そこには特徴的な突起が生えていた。

「…阿頼耶識システムか。火星の一部で使われているとは聞いていたが」

「阿頼耶識!?!、人体に機械を埋め込むなんて…うぷっ」

助手席から降りてきたもう一人の青年がそう呟くや、青い髪の青年は顔色を悪くして車の蔭へ消えてしまう。その様子を困った表情で見送った金髪の青年が向き直り、クツキーとクラツカへと近づくと近づく。

「怖い思いをさせてしまつてすまない。こんなものしかなくて申し訳ないが、お詫びに受け取つてほしい」

そう言つてラッピングされたチョコレートを青年は少女達に手渡す。キラキラと輝くラッピングに彼女たちが目を奪われている間に、青年は立ち上がると、ミカツキに向かつて謝罪する。

「連れが済まない。彼はその手の話が苦手だね」

「いや、いいですけど」

「クツキー！クラツカ!？」

微妙な空気が流れそうになるのを碎いたのはビスケット・グリフオンだった。離れた場所で作業をしていた彼は漸くたどり着いたのだ。そして目の前の車両に書かれたマークを見て、わずかに目を見開く。

「ああ、そうだ。もし知つていたら教えて欲しいのだが、この辺りで最近戦闘があつたかな？」

「えっと」

「ああ！そういうえば何日前にドカドカ煩かつたような！夜中に迷惑だなつて思つたんですよ」

ミカツキがどう答えるべきか逡巡していると、ビスケットがそう笑顔で答えた。

「ほう？」

「近所に警備会社があつて、そこがよく訓練してるものだからつきりそれだと。戦闘があつたんですか？」

不安そうな顔でそうビスケットが尋ねると、青年は穏やかな笑顔で応じる。

「いや、あつたかどうかを現在調査中でね。だから気が付いた事があつたら教えて欲しい。私はギャラルホルンのマクギリス・ファリド、火星支部に私の名前宛に連絡をくれればありがたい。そちらのお嬢さん達に何かあつても遠慮なく言つて欲しい」

「あ、ありがとうございます！」

「ありがとうございます」

「ああ、ほら、ガエリオ。行くぞ」

頭を下げる二人にマクギリスと名乗つた青年は手を上げて応じる

と、青髪の青年と共に車へと乗りこむ。走り去る彼らをビスケットの
険しい目が追いかけていた。

2.3. 強者の論理、弱者の論理

「ギャラルホルンの人間と接触したただと？」

「はい、社の周辺で起きた戦闘について調査している」と

「何を調べるって言うんだよ、戦闘を仕掛けてきたのはそつちじゃねえか」

急ぎの報告があると駆け込んで来たバスケットの言葉に、皆顔を顰める。その中で思案顔だったロッドがバスケットに問うた。

「調べていた人物の特徴は？」

「金髪碧眼の青年と青髪碧眼の青年でした。服装は一般的なスーツ姿だったので階級とかは解りませんでした。あ、けど金髪の方はマクギリス・ファリドと名乗りました」

その言葉にロッドが得心したように頷く。

「マクギリス・ファリドは監査部の人間だ。恐らくコーラルの行動を内偵していたのだろう。社長、これは好機ではないだろうか？彼らに事情を話せば」

「ギャラルホルンが手打ちにしてくれるって？そいつは少しばかり樂觀が過ぎるぜ、ロッドさんよ」

「監査部はギャラルホルンの綱紀粛正を司る部門だ。その彼らがコーラルと対立した動きを見せている、それにファリドと言えばセブンスターズ。彼らなら信頼できるのではないか？」

元とは言え自分が所属していた組織だ。その正当性や健全性を信じたいたい気持ちは解らないでもないんだけどね。

「私もマルバの意見に賛成だな。敵の敵は味方、と言いたいがまだ彼らが敵対しているとは限らない。それにだ、ロッド。コーラルがこのタイミングでバースタイン嬢を襲撃した意味を考えてみる」

「それは、単純に好機だったからではないのか？」

そう返してくるロッドに俺は眉を寄せながら言い返す。

「戦術的には好機かもしれないが、戦略的に考えれば最悪だろう。戦力を独断で動かし、民間人に被害が出るような作戦を実行するのだぞ？監査が入ると解っていてそんなタイミングで不正に手を染めるな

ど完全に悪手ではないか」

「……」

「つまりコーラルはバーンスタイン嬢を確保ないし殺傷すれば、監査結果程度容易に覆せると判断している訳だ。更に否定的な事を言わせてもらえば、コーラルと対立しているからと言って、バーンスタイン嬢の身柄を監査部の人間が欲しがらない保証はどこにもない。そもそもその監査部とやらが正常に機能しているなら、監査結果を覆せるなんて事は起きるはずがないからだ」

ギャラルホルンにとつての正義とは、現状構築されている世界秩序の維持継続だ。しかしこれは大きな矛盾を孕んでいるとも言える。何しろ彼らは政治とは独立した武装組織である。世界が平和であればあるほど、自らの存在理由と権能を失っていく集団なのだ。初期の理念がどの様なものであったかは知らないが、組織とは存在する時間が長くなればなるほど、その組織自体を維持しようとする力が発生するようになる。そして彼らが存続し続けるのは、世界は程々に混乱し不満があつた方が都合がよい。更に出資している勢力に影響力があつた人間を抑えられれば最高だろう。

「はつきり言ってしまうえば、組織としてのギャラルホルンは誰であれ信用するに値しない。残念ながら我々の計画は継続だな」

俺の言葉にマルバが溜息を吐いて口を開く。

「名瀬から連絡が来た。こちらの申し出を受けてくれるそうだ。オルガ」

「はいっ！」

「基本的に分けた社の代表はお前って事になる。この馬鹿は付けるがあんまり信用するな。経営者じゃなくて博徒の類だからな。腕だけはいいいからこき使つてやれ」

「お手柔らかに頼むよ」

俺がそう言つて手を上げると、不敵な笑みを浮かべたオルガが口を開く。

「ええ、鍛えてもらった成果を見せるいい機会です。目一杯使わせてもらいます」

「次の教育内容が決まったな。敬老精神だ」

部屋に笑い声が響き、それが静まるとバーンスタイン嬢が真剣な表情で口を開く。

「ノブリス・ゴルドン氏より資金援助の承諾を頂きました。ただ、そのかわり条件が」

「条件？」

「地球圏のドルトコロニーに私と同じくノブリス氏から支援を受けている組織があるそうです、そこへ物資を運んでほしいと」

「どうする？」

「CGSの資産が使えない以上、資金はなるだけ確保したいな。ついでに言えばバーンスタイン嬢の後ろに彼が居る事のアピールにもなる。受けておこう」

俺がそう言うのとマルバが頷き、それから思い出したように告げてきた。

「荷物と言えば、アキヒロ達が合流出来るそうだ。タービズが運んできてくれるそうだから、その辺りの受け入れも頼むぞ」

アキヒロ達はテイワズにガンダムフレームのレストアを依頼する為に出かけていた。今後を考えれば戦力の強化は必須であったことから、売却せずに手元に残す方向で話がまとまったからだ。おかげでそれなりに宥られたが必要経費と割り切るしかあるまい。

「私も同行させてほしい。グレイズは持っていくのだろうか？」

「元よりそのつもりだ。ギャラルホルンの戦術に最も詳しいのは貴様だからな。それに普通の教官も経験させてやりたい」

ロツドの申し出を素直に受ける。なんせ俺の指導は少々厳しいらしいからな。大体枕詞に鬼とか悪魔とか付けられる。まあ慣れてるからその程度で手は緩めんが。

「ハエダとササイには留守を任せる。サブードとヤスネル、それから2番隊の何名かは欲しい」

「戦利品組を連れてけ。あいつ等ならお前の子飼いだって言い訳が立つ。ああ、それからスピカがクーデリアの嬢ちゃんの護衛に志願してる。一緒に持ってけ」

「助かるよ」

4番隊の面々は医療関係の知識をつけさせていたからな。なんせ仕事の仕事だ。防疫が必須だったからそれならばとついでに応急処置なんかを教えておいた。見込みがありそうな数人は出入りしていた医者に金を握らせて専門的な知識を覚えさせている。流石にそこらは今回間に合わなかったが。

「専門の医療関係者が居ないのは心細いですね」

オルガがそう顔を顰めた。この時代多少の怪我程度なら医療ポツドに放り込んでおけば治ってしまう。だが臓器の損傷などの専門的な外科手術を要するような内容は未だ医者頼りだ。だけど、医療関係者かあ。流石に産業医とはいえ、外部の人間を巻き込む訳にもいかなしなあ。

「お話し中失礼します。ちょっと相談役をお借りしたいんですけど、何です皆さん？」

頭を悩ませている皆の前に、空気の読めない声が響く。彼の顔を見て一同は顔を見合わせ、そして邪悪に笑ったのは言うまでもない事だった。

(クラランクの無能めが!!)

怒りの感情を御しきれず、コーラル・コンラッドは机に額を打ち付けた。そうしなければ絶叫してしまう確信があったからだ。

(単独出撃の上にMIAだ?!誰がそんな命令を出した!?)

監査の二人が地上に降りたことは確認している。つまり誤魔化していた部隊の損耗は最早誤魔化しきれない所に来ている。今更グレイズ一機と士官一人程度の損失は大した事ではないが、目的であるクーデリア・藍那・バースタインの殺害に失敗したことは大きい。例え監査によって今回の件が露見したとしても、武装組織と結託しての武力蜂起を未然に防いだ功績と、ノブリス・ゴールドンより得た報酬による賄賂で十分地球での地位を獲得出来る筈だったのだ。

「…いや、まだまだ。まだ逆転の目が無いわけではない」

既に隠蔽できないと言うのなら、隠蔽せずに自らの望む方向へ状況を誘導するしかない。破綻してしまった最良の計画を惜しんで続けなくても待ち受けているのは計画の失敗でしかないのだから。

「すまない、ファリド特務三佐とボードウィン特務三佐を呼んでくれないか？」

連絡から数分でやってきた二人に対し、コーラルは沈痛な表情でそれを告げる。

「実は、二人にお話ししたい事が出来た」

その言葉にマクギリスは僅かに微笑み、ガエリオは皮肉気な笑みを浮かべる。その挑発的な表情に怒りを覚えるが、コーラルは表情を崩す事無く告げる。

「クリュセ自治区を治めているバーンスタイン家の令嬢、クーデリア・藍那・バーンスタインが武装組織と結託し、武力蜂起を計画しているとの密告があった。調査の結果、CGSを名乗る民兵組織が協力者である事を確認した。私は早期解決のため地上に展開していた各隊を呼集、彼等の拠点へと派遣した。これが先日の話だ」

「…ほう？」

「何故今まで黙っていたのです？」

目を細め問い質してくる青年達に、コーラルは悲しみを湛えた表情が崩れぬよう、細心の注意を払いながら言葉を紡ぐ。

「身内の恥を晒すようで汗顔の至りだが、彼女の掲げる火星独立を支持する隊員も少なくない。経済圏の影響力が低下すれば相対的にギャラルホルンの権力が増すからな。そうした彼等から情報が漏洩する可能性があったからだ」

「成程、それで極秘裏に鎮圧を？」

その言葉にコーラルは頭を振る。

「最初は説得を試みたのだ。我々は人間だ、獣ではない。言葉を尽くせば無用な争いは避けられると私は確信していたのだ。それが、この様な事態を招くとは」

「交渉は決裂したのですか？」

憤りを滲ませつつコーラルは手を組み、額を乗せる。表情を見せな

いまま、彼は答えた。

「交渉にもならなかったよ。取り囲んだ我が方に対し、連中は奇襲を仕掛けてきた。信じられない事にMSを4機も保有していたのだ。襲撃を受けたモビルワーカー隊を援護する為に盾となったMS隊は4機を失う大損害を被った。最早ここに至っては穏便に事態を収束できないと私は考え、君たちに打ち明けることにしたのだ」

僅かな沈黙の後、口を開いたのはマクギリスだった。

「大変興味深いお話でした。コンラッド三佐。しかし、少々遅かったようだ」

「っ!？」

「通信記録の改竄は徹底すべきでしたね。地上側にしっかりと貴方本人の通話記録が残っていましたよ」

「ば、馬鹿な、駐屯地には立ち寄っていないなかった筈だ!？」

狼狽するコーラルを、ガエリオが冷笑する。

「火星支部には、ギャラルホルンの正義を貫こうと言う人間も多かったですよ。貴方が想像する以上にね」

「ま、待ってくれ!連中がMSを秘匿していた事は事実なんだ!更にクーデリア・藍那・バーンスタインがこの後に――」

「アーブラウ代表である蒔苗氏と極秘に会談を行う、でしょうか?既に本部でも確認済みの情報です」

マクギリスの放った言葉で、コーラルは自身の計画が潰えたことを自覚する。しかし救いの手は意外なところから差し伸べられる。

「本部としてもこの会談が実現する事は望まないでしょう。ですが、彼女の殺害は波紋が大きすぎる。どうでしょう、我々に彼女の身柄を預けてはいただけませんか?」

お前の罪を見逃す代わりに今回の功績を譲れ。発言の意味を正確に理解したコーラルは内心でほくそ笑む。提案に同意すれば大手を振って部隊を動かせる。そして部隊さえ動かせるなら小娘一人を殺害する方法など幾らでもあるのだ。後は先に自分が功績を立ててしまえば、彼等が脅しの材料にしている内容すらもみ消せるのだ。賭けに勝ったことを確信したコーラルは、それを曖にも出さず神妙な顔で

頷いて見せる。

「解った。だが部下の手前もある。作戦には私も参加させて欲しい」

二人が退出した後の司令室に、コーラルの高笑いが響くまでさほど時間は掛からなかった。

2.4. 解り合えたと思う瞬間こそ最大の誤解である

「以前からそうじゃないかなとは思ってましたけど、相談役って鬼ですよね。僕、ギャラルホルンに追われる身ですよ？それなのに地球行きに付き合えとか」

「船から降りなければそうそう見つかるものでもないだろう。第一本社でも何時も引き籠もっているんだ。大した違いではあるまい」

フレデリックは抗議したものの相手はまともに取り合ってくれなかった。他者ならば追加で嫌味の一つも口にするのだが、フレデリックは沈黙を選ぶ。何しろ相手は大事なパトロンだからだ。

「それで、知らせたい事と言うのは例の件かな？」

「ええ、取り敢えず試作一号が出来たので報告をと。ただ、実際に使うまで保証が出来ません」

阿頼耶識システムの研究者である彼に相談役が最初に依頼したことが、施術に失敗した者たちの治療だった。正直に言えばあまり関心の無い要求であったが、研究環境の継続的確保を望んだ彼はそれを実施する。幸いにしてサンプルは幾らでも居たし、比較対象となる成功例にも事欠かなかったため、研究の進捗は順調だった。

「それにしても酷いものです。よくまあこんなものがまかり通っていましたね？」

そう言って彼は、施術用のナノマシン注入器を弄ぶ。それを見ていた相談役も困った顔で同意する。

「確かにな。だが仕方あるまい。ナノマシンを解析する技術も設備も持ち合わせていない者が殆どだ、中身の精査などしたくても出来まいよ」

阿頼耶識システムの施術は法的には罰則が設けられていないものの、社会的倫理観において悪しきものとされている。そのため全ての施術用ナノマシンは裏社会で生産流通しているのだが、これには根本的な概念が欠落していた。即ち、品質である。何しろ流通させている側ですら機材の質がピンキリであるし、知識だって差が激しい。中には生産設備だけを延々受け継いで流しているような、全く知識のな

い者までいる始末だ。

「施術の失敗は被術者の適合失敗や施術自体の杜撰さに起因するものではなく、そもそも注入しているナノマシン側に問題があるなど想像もしなかっただろうね」

「中には半分以上ただの水で薄められているのまでありましたからね。よく今までばれなかったなと」

「捌く側も買う側もロット管理なんて真似はしていないからね。それこそ何処から買ったものに粗悪品が交ざっているかも把握できない状況だ。特定のしようがなかったのだろうさ」

その言葉にフレデリックは溜息と共にタブレットを取りだす。

「ビルス君をはじめ、所謂施術失敗者に注入されていたナノマシンは全て同一のものでした。これは端的に言えば、コネクタへの生体信号の伝達並びに切り替えを行うナノマシンが只管増えるだけと言う、とんでもない粗悪品です。こんなもの打ち込まれたらどんな人間でも同じ状態になりますよ」

「そんなものが全体の4割近くを占めているというのだからな。まあ、今後は多少減るだろうさ」

「減らした張本人の言葉は重みが違いますねえ」

研究用のナノマシン精製機などをフレデリックが欲した結果、相談役はサルベージのついでにこうした粗悪品を流している業者を特定、生産拠点の襲撃を繰り返した。このためCGS本社の地下にはギヤラルホルンも真っ青というレベルのナノマシンプラントが出来上がっている。

「二応、脊椎動物での試験は成功しました、けれど人体では誰かが試さないかぎり確実な保証にはなりません」

「だろうな。彼なのだろう？ 志願者は」

念を押すフレデリックに悟った顔で相談役が応じる。彼は素直に首肯し告げる。

「はい。ビルス君は失敗者の中でも健康状態が良く、施術の負担に最も耐えられる可能性が高い。率直に申し上げて彼が適任でしょう」

タブレットの画面をスライドし、フレデリックは続ける。

「施術自体は単純です。本来あるべき制御用を含む正規のナノマシンを追加で注入、異常化した状態を修正させます。ただ」

「ただ？」

「おそらくこのナノマシンもオリジナルとは異なります。僕の家で保管されていたデータによればナノマシンの定着に年齢制限はありませんでしたし、何よりMSの操縦負荷程度で人体に悪影響が出るなんておかしいんですよ」

大戦初期に起きた知識層の大量喪失により、あらゆる工業、軍事関連が阿頼耶識システムに依存することとなった。当然その中にはMSの操縦を遥かに超える負荷の職業もあったが、問題なく運用されていたのだ。

「事実我が社で確保している製造システムは既存の施術成功者でも廃人にしてしまう訳だからな。となると、オリジナルはもっと高負荷に耐えられるものだったと言うのが自然だな」

「ただ、それが何だったのかが解りません。プログラムもさっぱり消えていますから正直お手上げです」

「…案外、単純だったりしないだろうか？」

そう肩を竦めるフレデリックに、顎へ手を当て考え込んだ相談役が突然そう呟いた。

「へ？」

「要は人間の脳みそで直接処理している情報が多いから負担が大きい訳だろうか？ならば情報量を減らしてやればいい」

「え？いや？どうやって？」

「専門外だから具体的にはどうするとは言えないが、例えばそうだな。コンピュータのOSのように、動作の際に発生する情報を監視隠蔽して解りやすく纏めたものだけをパイロットへ送るとか、あるいは補助輪を設けるとかか？」

「補助輪？」

「例えば阿頼耶識では空間認識能力を高めるが、常時それを脳に伝達している訳だろうか？激しく動き回る状況では当然大きな負担になるが、大部分は常時監視など必要ない情報だ。それを取捨選択して連絡

するよな、そうだな、補助脳とでも言うのか？そういうものがあれば――」

「それだあ!!!」

相談役の思い付きにフレデリックは叫び、指さした。

「補助脳！そゆうですよ！なんで思いつかなかつたんだ!?!」

人体側で処理しきれないのであれば、処理できるように補ってやればよい。その思考は同じ結果であるとしても、被術者の負担を避ける事を優先する相談役の望みとは致命的に異なっていたが彼は気にしない。平然とその事実を隠蔽し、笑顔で相談役へ告げる。

「素晴らしい考えです。現行の施術者達の負担も間違いなく緩和される。相談役、これは一刻も早く実現すべき技術です！」

「少し落ち着け。それに研究するにしてもまずは現状の改善からだろう」

悠長な事を言う相談役にフレデリックは苛立ちを覚えるが、それを笑顔で隠して同意する。

「そうでした、すみません。悪い癖だとは解っているんですが」

「いや、構わないよ。その向学心が人々の助けになるのだからね」

相談役の言葉に頷きつつ、フレデリックは研究室の扉をくぐる。既に処置用のベッドで待機していたビルスと脇で心配そうに彼を見ていたハツシユの二人が振り向いて声を掛けてきた。

「先生、それにマさん」

「ビルス。解っていると思うが、これは危険な行為だ。それでもいいのか?」

真剣な表情でそう問いながら、相談役はフレデリックに視線を送ってくる。その意味を理解したフレデリックは素直に答える。

「うん、本当に保証できるのは死なない事くらいだ。理論上は正常になるはずだし、動物実験も済ませてはいるが、それでも絶対とは言えない」

そう告げる大人たちにビルスは柔らかい笑顔で答えた。

「構いませんよ。可能性があるなら俺はそれに賭けてみたい。失敗したとしても失敗したっていうデータは取れるんでしょ?なら無駄に

はならない。俺は誰かの役に立てる」

「ビルス」

心配した表情でハツシユが声を掛けるが、ビルスは笑いながら続ける。

「それに最悪このままだとしても、俺は俺のやり方で役に立てる。そう教えてもらったから」

「…そんな事の為に教えたわけじゃないんだがね」

そう言うのと相談役は壁際に寄り、静かに立ち尽くす。これから起る全てを見逃さないとも言いたげな動きに、フレデリックは内心肩を竦める。

（そんなにビビらなくても平気さ。十分研究はさせてもらったからね）

「ではビルス。処置を始めるよ」

そう宣言し、フレデリックは自身がプログラミングを施したナノマシンの入りのインジェクションガンを持つ。頷いたビルスはハツシユの助けを借りてうつ伏せになった。醜く腫れ上がったその背に、フレデリックは躊躇なくナノマシンを注入した。

「違和感はあるかい？」

「いえ、特に…。いえ、なんか、痒い。うわ、これ痒いです!？」

その反応にフレデリックは満足して頷く。

「ちゃんとナノマシンが動作している証拠だ。体に負担がない最大の速度で書き換えるとしても痒みが出る」

「ちなみに、速くするとどうなるんです？」

悶えるビルスを見ながらハツシユがそう聞いてくる。

「普通に激痛で悶絶する。最悪ショック死の可能性もあるからおすすめしないな。速度を落とせば痒みは多少マシンになるが、書き換えまで年単位になってしまう。それはそれで拷問に近いから止めておいた方が無難だね」

「いや、先生!?!これ、大分!!いつまで続くんですか!?!」

「ビルス君くらい増えちゃつてると大体1〜2週間くらいかなあ？」

「いちに!?!」

フレデリックは実験の成功に満足しながら、薬棚から貼り薬と錠剤を取り出しハッシュュへ渡す。

「時間と共に治まるだろうけど最低2〜3日は今の痒みが続くはずだ。患部にこれを貼って、夜はこっちの睡眠剤を飲ませてやって。多めにストックしてあるけど、足りないようなら社長に言えば追加で買ってもらえるから」

素直に聞いて頷いていたハッシュュが違和感に気付き疑問を口にす
る。

「あの、先生何処かへ行くんですか？」

「うん、ちよつと地球まで出張。その相談役の付き添いでね。ナノマシンの生産方法は覚えてるよね？特に設定で弄る所はないから、このまま製造して他の子にも打ってあげて」

「え、いや、俺がするんですか!?!」

驚くハッシュュにフレデリックは不思議そうに応じる。

「だってウチで僕の次に阿頼耶識に詳しいのハッシュュ君じゃん。君以外に任せる方が危ないと思うんだけど」

「いや、俺ただの事務員すよ!?!」

そんな彼らの会話に助け船を出したのは相談役だった。

「すまないハッシュュ。私からも頼む。今回の計画は長期かつ荒事前提だ。どうしても医者がいる」

するとハッシュュは今までの狼狽が嘘のように顔を顰めつつも同意する。

「クベさんに頼まれたら断れないじゃないですか。いいですよ、やり
ます、やればいいんですよ?」

世の理不尽を感じるフレデリックだった。

25. 思いだけで報われる程世界は優しくないが、思
いがなければ世界は優しくならない

「何故あのような提案をしたんだ？」

監査部の艦艇に戻るなり、ガエリオはマクギリスにそう問うた。
ボードウィン家の嫡男として育ってきた彼は、当然世界が綺麗事だけ
では回らないと知っている。しかしそれに憤る程度には正義感が強
く、自らも進んで腐敗に飛びこもうなどは考えもしなかった。

「ガエリオ、俺達は弱い」

「マクギリス？」

執務室に入り、人払いが済んでいる事を確認したマクギリスが真剣
な表情でそう口にする。

「今回の件で痛感した。監査部程度の権限では腐敗に立ち向かう事は
出来ない。正義を成すにはもっと大きな力が必要だ」

「そのために腐敗に手を貸すというのか？」

「違うな、これはコーラルの計画を潰すためだ」

「どういう事だ？ 奴の行動を容認するように俺には聞こえたが」

ガエリオは素直にそう口にする。ガエリオ自身決して研鑽を怠っ
ているわけではないが、それでも目の前の友人はガエリオよりも高み
にいと理解できる。その彼が計画を潰すというのだから本当にそ
の通りなのだろうという無条件の信頼はあるが、だからといって理解
しないまま付き従うのは彼のプライドが許さなかった。

「CGS襲撃の部隊編成を見て違和感を覚えなかったか？ 身柄の確保
を考えるなら陸戦隊が随伴しなければ不自然だ。だというのにコー
ラルはモビルワーカーとMSにしか指示を出していない。つまり奴
は最初からクーデリア・藍那・バーンスタインの身柄の確保など考え
ていなかったという事だ」

「奴は彼女の身柄を使って火星の情勢を操るのが目的じゃないのか
？」

「我々が考えるよりも遥かに短絡的かつ浅慮な人間だったという事

さ。奴の個人口座宛に幾度かノブリス・ゴルドンから金が流れている」

「ノブリス・ゴルドン？確か火星の富豪だったか？」

「ああ、そして独立運動家達のパトロンにして武器商人だな」

「おい、待て。まさか」

「クーデリア・藍那・バーンスタインは経済圏との交渉を勝ち取った独立運動の象徴のような存在だ。その彼女が地球の治安維持組織であるギャラルホルンによつて殺害されたなら、火星の人々は思うだろうか？」

マクギリスの真剣な表情にガエリオは頭を掻きながら応じる。

「少なくとも言葉による独立などは不可能だと考えるだろうな。なにせそれをしようとした人物が武力によつて排除されたんだ、これ以上ないほど解りやすい回答だろう」

「更に言えば独立など認めないと明言しているに等しい行動だ。最早自由を手に入れるには武器を持って立ち上がるしかない、民衆をそう扇動するのに十分な理由だ」

「つまりそのノブリス某の懐が潤うと言う訳か。無能とは思っていたがそんな言葉で片付けられない内容だぞ。コーラルは馬鹿なのか？」

「地球に戻ってしまえばどうとでもなると考えているのだろうか。バラ色の未来が見えているようで羨ましい限りだ。続こうという気は起きんがね」

いくら腐敗が横行しているとはいえギャラルホルンにも体裁はある。火星の地球に対する心証悪化とそれに付随する武装化を引き起こした元凶を放置するなどありえない。恐らく賄賂で乗り切る腹積もりなのだろうが、そのような人物から金を受け取れば連座されかねないのだから、まず受け取る人物は居ないだろうし、仮に受け取るとするならば守る価値があると思わせるだけの金額が必要になる。これから地球に基盤を作ろうという人物が準備出来るようなものではない。

「つまり我々が彼女を保護する事ではた迷惑な未来を消し去ると。しかしそうなるとコーラルも助かることにならないか？」

そう疑問をガエリオが口にする、マクギリスは何時もの笑みを浮かべた。

「何を言っている、ガエリオ。我々は監査に来たのだぞ？その結果は正しく報告する義務がある」

その言葉を聞きガエリオもつられて笑顔になると、忌憚のない意見を口にした。

「奴の失敗は最初から決まっていたな。何しろマクギリス・ファリドを敵に回していたのだから」

「お願いします！私も連れて行ってください!!」

声の方向へ視線を向けると、ちっちゃいのに囲まれて狼狽えているオルガが目に入った。

「俺だって役に立ってみせます！オルガ隊長！だから連れてってくださいー！」

「おい、お前ら」

オルガの正面に居たアトラ・ミクスタ嬢が音の出そうな勢いで頭を下げると、それにつられた様に周囲のガキンチョ共も頭を下げる。

「何してんだよ？」

とりあえず声を掛けようかと思ったところで別の声が上がった。

「ライドー！」

癖のついた茶髪の少年が険しい目で彼らを睨んでいた。睨まれたダンジはと言えば、そんなライドの表情に気付かずに言葉を続ける。

「お前も一緒に頼もうぜ！俺達も地球行に連れてって貰うんだよ！」

そう捲し立て、ダンジは真剣な表情でオルガに懇願する。

「お願いです隊長！必ず役に立って見せます！だから俺も連れてって下さいー！」

再び頭を下げるダンジをどう説得するべきかオルガが悩んでいる間に、険しい顔をしたライドが動く。ダンジの前に立ったかと思うと、思い切り胸倉をつかみ上げたのだ。

「何すんだよー！」

「いい加減にしろよダンジ、隊長が困ってるだろうが」

苦言を呈するライドを睨みダンジが怒鳴る。

「俺らだって3番隊だろ!? なのになんで俺らは残らなくちゃいけないんだよ! 俺は一緒に行くためだったら何だって——」

「何だつて? 何だつてやるつて? ダンジ、お前に何が出来るんだよ?」
興奮するダンジに冷や水を浴びせるような突き放した声音でライドが問い返す。

「MSにも乗れねえ、CQCだつてロクに出来ねえ、機体の整備だつてまともに手伝えねえ俺らが! 隊長達にくつついてつて何が出来んだよ!」

「っ!」

「荷物運びでもすんのか? アキヒロ達なら俺らの何倍も運べる。戦闘にモビルワーカーで行くのか? MS同士がドンパチやつてるとどこで何する気だよ? お前、この間の戦闘の事忘れちゃったのか?」

「わすれつ、てねえ、けど」

「いいや、忘れてるね。じゃなきゃそんなこと言える訳がねえ。仲間が21人も、手も足も出ずに殺されて、残った奴を逃がすためにハエダの隊長とササイのおっさんが死にかけたのを忘れてなきゃ、足手まといと解つてて連れてけなんて言えるはずがねえ!」

「ライドは悔しくねえのかよ! マサヒロ達は俺達より後に入ったのに連れてつて貰えるんだぞ!」

「悔しくねえ訳がねえだろうが!!」

とうとう大粒の涙をこぼしライドが叫んだ。

「でも俺達は弱い! 弱い奴は仲間を危険に晒す! 弱い奴は弱点になる! 俺はっ! 俺が行きたいつて我儘で! 仲間を死なせたくねえ!」

しゃくりあげるライドの肩にオルガが手を置いて、周囲を見渡す。そしてはつきりとした声で告げた。

「3番隊隊長として言う。お前たちは連れていけねえ。悪いなアトラ、お前も駄目だ。今回の仕事は本気で危ねえ橋を渡る事になる。だから、俺は隊長として少しでも成功率を上げるために行く連中を選んだ。その判断は間違つてねえと思つてる。けど、お前達の気持ちまで

は汲んでやれなかった。悪かったな」

「……」

「ライド、ダンジ。焦なくていいんだ。俺達は必ず帰ってくる。ここを絶対に取り戻して、また皆で馬鹿やって、騒いで……。そんでいつかはお前たちの番になる。お前達が皆の居場所を守る番がくる。だから、今回は俺らに譲つとけ。シノなんて見てみる、お前らの何倍も食うんだぞ？その分働かせなきゃ、割に合わねえだろう？」

先ほどの喧騒が嘘のように静かになった食堂で、所在なげにアトラ嬢が視線をさまよわせる。丁度その時、ミカヅキとバーンスタイン嬢が食堂へ入ってきた。

「あつ……。ミカヅキ」

「アトラ？どうしたの？」

ゆつくりと彼女はミカヅキに近づくと、口を開いた。

「えっとね、一緒に行こうと思ったんだけど、断られちゃった」

「その方がいいよ」

「そつか……。そうだよね」

ミカヅキの言葉にアトラ嬢は一瞬傷ついた表情を浮かべるも、気丈に笑顔を作ってそう応じる。しかしそんなセンチメンタルな雰囲気が続いたのはそこまでだった。

「今回の仕事は危ないって、おつちゃんもオルガも言ってる。だから本当に危ないんだと思う。俺、アトラには危ない目に遭ってほしくないな」

火の玉ストレートにも程がある言葉に、一瞬で真っ赤に染まるアトラ嬢。ついでに飛び火したように周囲の連中も赤くなっている。因みに一番の被弾先は隣にいたバーンスタイン嬢だ。だが、その言葉もアトラ嬢の次の行動で即座に上書きされる。

「ミカヅキー」

「んむっ」

名前を呼ぶのと同時にミカヅキを抱きしめるアトラ嬢、そしてさすが自らの唇をミカヅキのそれへと押し当てた。電光石火の早業に全員が言葉を失うなか、たつぷりと10秒に渡って続いた接吻は終わ

りを告げる。途中水音すら響かせていたそれは、最後に二人の間に名残惜し気な唾液の橋を築いた。それが僅かな時間で崩壊すると、顔を真っ赤にしたアトラ嬢がミカヅキに上目遣いで伝える。

「私、待ってるから。ちゃんと帰ってきてね。約束だよ?」

「うん、待ってる」

さりげなく手を握り合い、指を絡ませあう二人。先ほどまでのシリアスな空気を完全に吹き飛ばすゲロ甘な空気に、思わず飲んでいたスープを見つめてしまう。おかしいな、塩気が感じられないぞ?」

「やったぜアトラちゃん、練習の成果は上々だね」

「後は部屋まで一直線だね。あ、ミカ君の相部屋って誰だっけ? 追い出さなきゃ」

その様子を良い笑顔とサムズアップで監修している4番隊の娘さん達。うむ、原因は貴様らか。

「君達、後でお説教」

「何故に!?!」

火星出立の最後の夜は、こうして更けていった。

26. 臆病である事は恥ずべき事ではない

「おい、アイン！あの連中の捕縛作戦が行われる！お前にも出撃指示が出ているぞー！」

興奮気味な同僚から告げられた言葉にアイン・ダルトンは顔を上げ、思わず聞き返す。

「本当か!？」

「ああ、間違い無い。お前のグレイズにも補給作業が行われている。…良かったな」

そう言っつて肩を叩く同僚に、アインはぎこちないながらも笑顔を返した。任務の失敗と上官の独断を知りながら報告を怠ったとして、彼は現在謹慎を言い渡されていた。声を掛けて来た同僚は、アインと同じく克蘭ク・ゼントの教え子であり、かつギャラルホルンでは珍しい、火星へへの偏見のない者の一人だ。

「やつと、克蘭ク二尉の仇が取つてやれるな」

「ああ、けれど油断は出来ない。特に角の付いたMSは相当の手練れだった」

「コーラル司令も十分承知しているさ。何せ監査部の連中にも助太刀を頼んだらしいからな。久方振りの大規模戦闘になるぞ」

ギャラルホルン火星支部の保有するMSは1個大隊。その内1個中隊が地上の駐屯地3カ所に分散配置され、残りの2個中隊が本部待機となっている。ただし即応待機しているのは1個中隊のみで、もう片方は整備や訓練、或いは隊員の休息となっている。これらに加え、司令直轄の1個小隊で大隊が構成されていて、今回はこの内本部に存在する全部隊に出撃指示が下ったとの事だった。

(本部の戦力だけでも22機。監査部が1個小隊だとしても大兵力だ)

MSの完全な生産体制を有するのがギャラルホルンのみという現状は、MS同士の大規模戦闘が発生しにくい環境となっている。この為、例えば大規模な作戦であってもMSは中隊規模の投入が精々であり、パイロットはおろか指揮官がこの規模の戦力を指揮した経験があ

る事すら希だった。だがその程度の事を不安に思う隊員はいなかった。何しろ彼等は常に圧倒的戦力で相手を押しつぶす戦いしか経験していない。彼等にとってMSの戦闘とは個人の技量が試される場であり、友軍機との連携と言うのは技量の未熟な新兵や能力が劣る者の戦い方であると言うのが大多数の認識だった。

「いや、それでも気をつけた方がいい。クランク二尉が討たれる程の相手なんだぞ?」

「っ! そうだな。慢心して無様を晒してはクランク二尉の顔に泥を塗る事になる」

頷き合う彼等は知らない。これから対する相手が、その様な規模の戦いを呆れる程繰り返してきた人間であり、その知識を部下に惜しみなく与えていると言う事を。後にギヤラルホルンの権勢を大きく揺るがすこととなる一戦の火蓋が切られようとしていた。

「なんか随分久しぶりな気がするぜ」

「前の仕事以来だから、シノは1ヶ月ぶり? 結構開いてるよね」

窓の外を眺めながら暢気に言うシノに対し、ビスケットがそう声を掛けた。

「あー。最近は護衛が要らなくなっちゃったからなあ」

ブルワーズ壊滅直後はまだそれなりに残っていた海賊であったが、その後のサルベージ部門拡大に伴う作業現場の現地調査(という名目の掃討戦)によって火星近傍のデブリ帯から姿を消してしまった。結果護衛部隊も数を縮小したことに加えMSに搭乗可能な新人社員も増加したことで、古参組の出撃回数は目に見えて減っていた。

「腕が鈍っちゃう?」

笑いながらそう尋ねるビスケットにシノは真顔で返す。

「馬鹿言うなよ。マっさんの訓練に比べたら海賊退治の方が天国だ。ガキ共には優しいのに、オレには滅茶苦茶厳しいんだぞ?」

「そんだけお前が目を掛けて貰ってるってこったよ。ありがてえ事じゃねえか」

着席指示が解除された事で、シャトルに乗り込んでいた面々は自由
に行動している。二人の会話を聞きつけたオルガがそう言いながら
近づいてきた。

「だけども、もうちょつと優しくしてくれても良いんじゃないやねえ?」

「それは何度言っても同じ間違いをするシノが悪い。相談役が言つて
たぞ? 頭で解らんから体に覚えさせるって」

苦笑しながら、後ろの席でタブレットを操作していたチャド・チャ
ダーンが指摘する。

「つまり相談役はシノにそれだけ期待してるって事だな。MSに乗れ
る奴も大分増えたが、その中で時間が掛かってでも鍛えようってして
くれてるって事だぜ?」

「そうかあ?」

納得のいかない表情で首を傾げるシノに向かって、チャドが再び口
を開く。

「出来るようになるまで教えて貰えるなんて、凄く幸せな事じゃない
か」

少し前までヒューマンデブリであった彼のその言葉はとても重い
ものだ。出来なければ捨てられる、捨てられれば死んでしまう。だが
幾らでも替えが利くからと教育など一切受けられない境遇にいた彼
等は懸命に覚えなければならなかった。覚えるまで根気よく指導し
て貰えるなど、まして覚えが悪いからと覚えやすい方法を模索して
くれるなどというのは正しく贅沢すぎる環境だ。

「それに出来ないからって他の奴より優しくされて、お情けでMS乗
り続ける方がずつと恰好悪いじゃねえか? 期待に応えてこそ胸張つ
て乗れるってもんだらう?」

そんな普段通りの会話を続ける彼等を見て、クーデリアはその強さ
に強く胸を揺さぶられた。

「お嬢様?」

隣に座っていたフミタンがその様子に気づき声を掛けて来た。

「大丈夫です。少し彼等の強さが羨ましくなっちゃってしまっ」

現在彼等はギャラルホルンに追われる身だ。文字通り世界最大の

軍事組織を相手にしていると言うのに、彼等の表情には怯えどころか緊張すら見受けられない。その姿は彼女にとってとても頼もしく、同時に強い憧憬を感じるものだった。

「駄目ですね、私は。覚悟を決めたつもりでしたが、それでも私は死がとても恐ろしい」

そう言つて震えそうになる肩を自ら抱きしめる彼女に向かって声を掛けて来たのはビスケットだった。

「怖くて良いんじゃないでしょうか？」

「え？」

「理不尽に振るわれる暴力が怖い、死ぬのが怖い。それって普通のことだと思います。そして、それが解らない人は力を持った時、それを平気で他人に使えてしまう。だからバーンスタインさんは今のままでいい。いえ、今のままじゃなきやいけないだと思います」

「ビスケットさん」

「それに俺達だって怖いんですよ。だから必死に普段通りに振る舞つて怖さと戦っているんです」

そう言つてビスケットが笑いかけたところで、隊員の一人が声を上げた。

「来たぞー！」

その言葉に機内の空気が一瞬にして変わる。

「三時方向、上方艦影2！MSと思しき発光9！」

「八時方向上方にも艦影！数同じく2！MSは13!？」

「大盤振る舞いじゃねえか。たかが民間警備会社相手に大人げねえな。針路そのまま、予定通り低軌道ステーションへの着陸はしねえ！最大加速で進め！」

素早くヘッドセットを取り出したオルガがそう叫び、それに呼応するようにシャトルが加速する。しかしその動きはMSに比べあまりにも緩慢だ。

「ちつきしようやっぱ速ええなあー！」

「ヤバイヤバイヤバイ！隊長！先頭のMSが銃構えてるぜ！」

「やらせつかよ！スモーク！」

オルガが叫び、シャトルのコンテナハッチが開く。同時に幾つもの球体が宇宙空間へと放り出され、それらが次々と炸裂、濃密な煙幕を作り出す。その煙幕へ先頭を進んでいたグレイズが躊躇無く突入する。それを見た隊員が笑いながら呟く。

「俺等は弱えけどよ？ あんま舐めてると痛い目見るぜ？ 兵隊さんよ」

煙幕の中で火花が散る。飛び出してきたグレイズにはワイヤーが複雑に絡まり、その動きを阻害している。姿勢制御を著しく制限されたグレイズは見る間に速度を落とし追撃から落伍していく。それを見た後続の機体が慌てて進路を変更し煙幕を避ける。それにより詰まりかけていた距離が再び開く。そしてそれは、十分な時間を稼ぎ出した。

『待たせたなあ！隊長!!』

叫び声と共に、減速と煙幕の迂回で隊列の乱れたグレイズ達に弾丸が降り注ぐ、慌てて回避を始めたグレイズ達が見たのは、2機のガンダムフレームに率いられた20機以上のMSの集団だった。更にその後方から現れた装甲艦が降下しつつシャトルへと近づく。

「良いタイミングだぜ。アキヒロ、ミカ!」

『喋ってねえでさっさと収容作業に移れよ! 慣性がキツイんだよ!』

ユージンの切羽詰まった悲鳴が響き、シャトルに笑い声が響く。

「よし、お前等! マヌケが餌に食いついた! 反撃の時間だ!」

それは追い詰められた哀れな獲物などではなく、戦いを挑む兵士の顔だった。

「何を狼狽えている! 数は多くとも所詮旧式ではないか! さっさと蹴散らせ!!」

想定外である敵機の襲撃に浮き足立つ部下達をコーラルは叱責する。見慣れない機体が交じってはいるが、その殆どはロディ・フレームの骨董品だ。彼の判断基準からすれば、非正規兵の操る旧式機など同じMSと括るのさえ烏滸がましい存在だ。だが現実には彼の常識を上回る。正規兵以上の動きで素早く2機編隊を組んだ旧式機達が、混

乱から立ち直れていない友軍機に次々と襲いかかる。常識的に考えればこの様な戦法は成り立つはずがない。何しろ敵機の数は友軍機とほぼ同数なのだ。2機で1機に掛つていては半数のグレイズは自由に動けてしまう。その機体達が攻勢に出れば容易く瓦解する、そんな杜撰とすら思わせる行動は、しかし確実に友軍機を討ち取つていつた。

『クソ！何だこの動きは!?!』

『おい射線に入るな!』

『こ、こいつらスラスターを!?!』

『た、助けてくれ!高度が維持出来ない!?!』

コーラルの誤算、その最大の要因は阿頼耶識システムを有する正規兵並みの訓練を受けたMSパイロットという存在を理解していなかった事だ。だがそれを責めるのは酷というものだろう。何しろその様な異常な集団は、厄祭戦以降一度たりとも編成されたことが無いのだから。だがこの世界の常識の埒外からやってきた男によつて再び人類の前へ姿を現わしたそれは、かつて人類を救つたそのままの猛威をもつてコーラル達へ襲いかかる。

『ええい!このままでは…、貴様等付いてこい!先に船を沈める!』

『沈める!?!ファリド特務三佐の指示はクーデリア・藍那・バーンスタインの身柄拘束では?』

『アイン・ダルトン三尉、貴様の上官はいつからあの若造になった?良いから命令に従え!』

狼狽する部下に苛立ちをぶつけながらコーラルは機体を加速させる。乱戦になった宙域を迂回することで彼等は友軍を囮に敵艦への肉薄を成功させた。

『クソっ!4機も抜けた!!』

『大丈夫、あつちにはおつちゃんがいるでしょ』

混線した敵の通信の意味は、直にコーラル達の眼前に立ち塞がった。

『こちらを狙うのは戦術的に正しい。が、味方を見捨ててでは無能の誹りは免れんな』

飛び出してきた2機のグレイズの片方からその様な嘲りが響く。だがそれにコーラルが反応するよりも早く、アイン・ダルトン三尉が激昂した。

『このリアクター反応っ、クランク二尉の機体か！』

『っ!?!』

叫びと共にアインの駆るグレイズが敵に向かって突っ込んで行く。「ちっ！かかれ!!」

同じ機体に乗人数はこちらが倍。即座に無力化出来るとコーラルは判断する。グレイズならば忌々しい阿頼耶識システムも使えない。突っ込んだアインの機体が一機を抑え込んだ事もその判断を助長した。その判断は常識的に考えれば間違っていない、しかしたった今日の前で自身の常識が覆されたことをコーラルは深刻に受け止めるべきだった。

『話にならない、正規兵が聞いて呆れる練度だ』

コーラルの命令に、咄嗟に動いた僚機達は白兵戦を選択してしまう。射撃兵器が決定打になり辛いMS戦において、それが敵機を撃破する最も確実な方法だからだ。だが如何せん相手が悪すぎた。

『技量と連携を鍛えて出直してきたまえ』

二機が動くと同時に敵機も動く、連携を意識していない単純な同時攻撃は、敵が片方に急接近すると言う選択だけで簡単に崩れ去る。更にスラストを吹かして接近した機体の背後に回り込んだ敵機は容赦なくハンドアックスをその背に向けて叩き付けると、機体を火星に向けて蹴り飛ばした。

『ひっ!?!た、助けてっ!』

グレイズは優秀な機体だ、しかし当然ながら完全無欠な訳ではない。単独での大気圏突入能力など持ち合わせていないし、メインスラストが破壊された状態で火星の重力に抗えるだけの推力も無い。

『放っておくと大切な仲間が燃え尽きるぞ?』

切り結んでいたもう片方はその言葉に動揺し、その隙を突かれて片腕を破碎される。

『後退も友軍機を回収する言い訳もそれで十分だろう、帰リたまえ。』

さてと』

狙ったように墜落しつつある友軍機の方向へもう一機を蹴り飛ばした敵機が、ハンドアックスをコーラルへ向けて突きつける。

『暢気に見学とは良いご身分だ。その角は飾りかね?』

安い挑発であるが、コーラルの最後の理性を奪い去るには十分過ぎる言葉だった。

「貴様あ!!」

『指揮官としてだけでなく兵士としても無能とは、付き従った兵が浮かばれん』

振りかぶったハンドアックスは容易くいなされ、逆に見舞われたハンドアックスによって頭部が破壊される。その事実をコーラルが認識するよりも早く続けざまに衝撃が機体を襲った。

「ひ、ひい!?!」

頭部損傷、腕部欠損、脚部応答無し、スラスタ脱落、加速度的に悪化していく機体パラメーターに彼が悲鳴を上げるとほぼ同時に、相手の攻撃が唐突に止んだ。だがそれはコーラルにとって別の死刑宣告でしかなかったが。

『我々を出し抜こうとしてこの様とは』

ガエリオ・ボードウィン特務三佐の声を聞くに至り、コーラルは遂に自身の未来が完全に閉ざされたことを、漸く理解した。

27. 言葉が通じることと理解して貰うのには大きな隔たりがある

『克蘭ク二尉は、貴様達を救おうとしていた！それを、貴様らは!!』
「くっ！」

感情を露わにしながらハンドアックスを振るうグレイズに、出かけた声をロッドは懸命に堪えた。出撃前から、既にリアクター反応で戦場にアイン・ダルトンが居る事は解っていた。

「袂を分かつて日も浅い。無理に出る必要は無いぞ」

そうこちらを気遣ってみせる相談役に出撃を申し出たのはロッド自身だった。

「ギャラルホルンのあり方を間違いとしておきながら、情でまみえぬなど筋が通らん。元ギャラルホルンだからこそ、私は出なければならぬのだ」

真剣にそう告げるロッドへ相談役は眉を寄せながら溜息を吐きながら応じる。

「お前のような奴を何人も見てきた。まったく、真面目な軍人と言う奴は死にたがりで困る」

そう言つて相談役はロッドを睨むと釘を刺してくる。

「出撃は許可してやるが、一言たりとも喋るな。お前はもう死んだ事になっているはずだ。生きてしかも我々に協力しているなどとなればお前の関係者にどの様な累が及ぶか解らん。それから間違つても死ぬな。貴様はまだやらねばならぬ事が山程残っているのだからな」
『命を奪うだけに飽き足らず、形見すら嬲るとは！最早容赦などしない!!』

ハンドアックスが交錯し、衝撃がコックピットへ響く。

(アイン！)

ロッドは呼びかけたくなる衝動を懸命に堪える。アイン・ダルトンは彼の教え子の中でも真面目で正義感が強く、そして逆境であっても腐らない強さがあつた。ロッドから見ても視野の狭さが気になつた

が、それでも好青年と呼べる人間であった。故にロッドの中に淡い期待が生まれる。彼ならば秘密を打ち明けても良いのではないか？片親が火星出身だと言うだけで不当な扱いを受けた経験もある彼ならば、それを正そうとしているこの行いに賛同するのでは？立場を捨てられずとも、見逃してくれるのではないか？そのような思いが膨れ上がり、口から飛び出そうとするのを彼は唇を噛みしめて堪えた。

（いい加減にしろロッド・ミライ！貴様はその短慮で何をしでかしたか忘れたのか!?）

沈黙を続けながらロッドは機体を操る。命じられるままに多くの作戦に参加してきた。今回のように事前に人員構成まで把握できていた例は無かったが、顧みればその中にヒューマンデブリと呼ばれる者達が含まれているなど容易に想像が付いた。そんな者達を散々殺しておいて、偶然知れたからと憤り自分勝手に動いた結果がこの様だ。

（上手く立ち回っていれば、コーラルの不正を証言する機会だった。あつた。この様な危険を事前に避けられた筈だ！）

自らの衝動的な行動が現在の結果に繋がっていると信じている彼は、出撃前に相談役が口にした可能性について強く意識していた。グレイズに装備されている短距離レーザー通信システムは極めて単純な構造である。常に全方向に通信用レーザーを発信し、相互の回線を構築しているのだ。これはエイハブリアクターによって電波に依存したあらゆる手段が妨害されてしまうためである。残る方法はアンカーを使用した有線通信であるが、戦場で敵対者と有線通信で繋がっていたなど不審この上ない。そもそも戦闘中のデータは全て戦闘後に確認されるのだから、通信ログが残っている時点で終わりだ。生存を知らせたいと思う気持ちと同じだけ、アイン・ダルトンを巻き込んでほならないと言う思いがロッドの口を頑なにする。しかし、彼の予想以上にアイン・ダルトンは優秀で聡かった。

『その動き！』

MSの動作は膨大な動作パターンの中からパイロットの操縦に合わせて瞬時に最適なモーションが選択される。故に動きそのものは

誰が扱っていようと均一化されるが、行動そのものにはパイロットの癖が出る。射撃を受けた時どちらへ回避するか、攻撃を仕掛けるタイミングは？そうした選択や動作の呼吸と言うものには、どうしてもその人物の特徴が出てしまう。勿論多くの人間はそこまで気がつかない。しかし長く訓練を共にし、克蘭クの教えを真面目に実行していたアイン・ダルトンは、良く見た恩師の動きを理解する、出来てしまう。

『克蘭ク二尉？克蘭ク二尉なのですか!?!そんな、どうして!?!』

動揺したアインの機体が硬直するのを見逃さず、ロッドは素早く、それでいてパイロットに危害が及ばない位置を蹴り飛ばす。大きく2機が離れた瞬間を見逃さず、ロッドは機体を翻し逃亡を選択する。

『待つて！待つてください！なんで、貴方がどうして!?!』

アイン・ダルトンの悲痛な叫びが、宇宙空間へ木霊した。

「我々に向けてグレイズを使うか！盗人猛々しい事だな！」

『色違い?』

「ギャラルホルン、セブンスターズがボードウィン家のガエリオ・ボードウィンだ。大人しく投降しクーデリア・藍那・バーンスタインの身柄を引き渡せば、然るべき手段で貴様等を処罰してやるぞ?」

『成程、つまり貴様も彼女を駒として使いたい輩の一人か。ならば遠慮は要るまい』

セブンスターズの名を前に躊躇なく交戦を選択する相手に、ガエリオは若干の驚きを隠せなかった。文字通りギャラルホルンの頂点に君臨している7家を敵に回すなど、常人であればその意味が理解出来ないはずがない。

「抵抗するか！」

『問答無用で殴りかかってきた野蛮人共の台詞かね?』

絶対的権力者に生まれた故に身につけた傲慢でガエリオは叫ぶ。だが相手は寧ろ皮肉を返してきた。挑発に対する耐性など持ち合わ

せていない彼は直に頭へと血を上らせた。

「犯罪者が！」

『犯罪者？犯罪だと？笑わせるなギャラルホルン！現状に胡座を掻き、自らの繁栄のみに注力し！弱者を救おうともしない貴様等が正義だ秩序だを語るなど、滑稽を通り越して不愉快だ！』

ガエリオの搭乗するシュヴァルベ・グレイズはエース向けの高性能機だ。操作難易度の上昇や、リアクター出力の低出力時に機体動作が大きく低下すると言った問題は抱えているものの、その性能は確実にグレイズを越えている。

「何故避けられる!?何故当てられる!!」

機体のステータスは全て正常を告げている。敵機の動きも特異な点は見受けられない。

(いや、回避のタイミングが早い！こちらの動きが解るとでも言うのか!?)

ガエリオの背に悪寒が走る。そんな馬鹿な事があるのか。無論幾度も相手をした間柄ならばその様なこともあり得るかもしれない。しかし目の前の敵と相対するのは初めてであると断言出来るし、ここに自分が居る事も多くの偶然の結果なのだ。少なくとも事前に情報を収集、対策する対象に含まれていたなどとは考えにくい。

「純粹に技量で劣ると言うのか!?そんな屈辱!!」

『そんなことを屈辱と感じているウチはただのガキだ、出直してこい』
鋭い弧を描いたハンドアックスが、すり抜け様にシュヴァルベ・グレイズのスラストを切り飛ばす。圧倒的な加速性を担保するそれは、同時に一部が失われれば途端に機体の制御難易度を跳ね上げる要因となる。自らの手綱を離れて暴れようとする自機を懸命に抑え込みながら、敗北の不快感をガエリオは思わず言葉として吐き出す。

「火星人が！」

『罵りにまるで品がない。名家を気取りたいならその辺りも学びたまえよ』

皮肉と共に放たれた砲弾を回避したことで、ガエリオの機体と敵艦とは大きく距離が開いてしまう。それでも追いつがろうとする彼を

止めたのは、友人の声だった。

『ここまでだ、ガエリオ』

『マクギリス！俺はまだやれる！』

『お前が良くても他の者達が無理だ』

その言葉にガエリオは周囲を見渡す。そこには信じられない光景が広がっていた。無傷の機体は一機として無く、それでいて周囲に討ち取った敵機の姿は無い。それはつまりこちらが一方的に捌られたという事だ。

「馬鹿な。辺境と言ってもギャラルホルンの部隊が、こうも一方的に……」

『連中の練度は海賊共などとは比べ物にならない。それにあの二機のガンダムだ』

「ガンダム？」

『そうだ、人類史の転換期に現れ、多大な影響を与えた存在。我々には厄祭戦を勝利に導いた伝説のMS、と言った方が通じが良いか。クーデリア・藍那・バーンスタインはその二機を従えている』

「…厄介な話になりそうだな」

そう呟くガエリオの言葉に、マクギリスが即座に応じた。

『なりそう、ではなく既になっている。まずはアレの回収と、火星支部の掃除を済ませねばな』

そうマクギリスの機体が指さした先には、無残な姿のコーラル機が漂流していた。

「ああ、うん。そうか、そうか。コーラルは失脚したか。無能とは思っていたが想像以上だったね。毛程も役に立たなかった」

温厚な声音で辛辣な台詞を放った男は、吸っていた葉巻を口から離し笑って見せる。

「それに比べてCGS、ああ、今は鉄華団と名乗っているのだったかな？連中は大したものじゃないか、見事にクーデリアを守って見せた。革命の乙女を守る若き騎士、実に大衆好みの物語だ」

しかし報告書をめくり読み進める内に、彼は困り顔になり唸る。

「ううん、参ったなあ。これは早まったかもしれない」

彼にとってクーデリア・藍那・バーンスタインは理想的な投資先の筈だった。組織を持たず裕福な家庭に生まれた彼女は、その影響力に対して驚く程少額で扱うことが出来た。今回の地球行きに關しての資金援助すら、彼女が師と崇めるアリウム・ギョウジャンが要求してくる活動資金の半年分にも満たない。そんな彼女に彼が求めていた役割は悲劇のヒロインであった。うら若き火星の乙女が地球の権力者によつて惨たらしく殺される。それによつて両者の対立は深まり、対立は武力の衝突へと発展すると言うのが彼の筋書きであった。

「彼女の周辺を固める戦力は想定以上かもしれない」

無論コーラルが度を越した無能であった可能性もゼロではない。だとしてもそれを理由にギャラルホルン火星支部の有する大半の戦力相手に勝ちきった事実から目を背けるべきではないと男は考えた。「うん、作戦を少し変えるのでしょうか。これを抜けられるなら、彼女はもつと大きな役割に付けることにしよう」

ノブリス・ゴルドンはそう笑い指示を出す。時代は少しずつ、しかし確実に混迷の度合いを深めていった。

28. 子供にとって理想に見える大人は、年を取っただけの子供である

「俺はコーラル・コンラッドを過小評価していたかもしれない」

机に突っ伏しながら呻くガエリオを見ながらマクギリスは苦笑を浮かべた。

「ああ、確かに。これ程の強敵を準備しているとはな」

危うく宇宙漂流をする羽目になりかけたコーラル・コンラッドが、泣きわめいている中救助されたのが3日前。救助と同時に不正な金品の受領並びに部隊の私的運用が発覚、即時拘束され現在火星支部内の独房にて本部へ移送待ちをしている。勸善懲悪もののストーリーならばこれで一件落着と閉められる所であるが、実際はそうではない。支部長というトップが汚職を行っていたのだから、その調査対象は火星支部に勤める隊員全員におよぶ。加えて過日の戦闘により損傷した機体の修理、パーツの補給、喪失した部隊の補填を行う必要があったわけだが、何しろ支部長が不在であり、本部から交代を派遣するにしても、軍の高速艇ですら半月はかかるという距離だ。当然その間放置しておくわけにも行かないギャラルホルンは、当面の対応として火星支部に駐留している最も階級の高い人間にその任務を与える事にした。つまり、マクギリスとガエリオである。

「装備と人的損害が軽微だったのが不幸中の幸いだな」

コーラルの起こした一連の戦闘に関する事後処理を担当しているガエリオはため息を吐きながらそう評した。CGS本社襲撃時は多数の死傷者を出したものの、その後の衛星軌道で行われた戦いではほぼ全ての機体が損傷したが、復旧不能な程破壊されたのはコーラルの機体だけであったし、何より人的被害はゼロという奇跡のような数字だった。特に戦闘後の検証において確認されたガンダムフレームの戦闘能力は規格外と言っても差し支えなく、よくぞこれで人死にが出なかったものだとは皆で驚いたものだ。

「違うな、この程度の損害で済ませてくれたのさ」

「手加減されたと?」

「どの機体も推進器と武装を集中して狙われている。白兵戦を仕掛けているにもかかわらず、コックピット周辺に損傷を受けた機体すら一機として居ない。これ程露骨なメッセージもあるまい?」

「お前たちなどいつでも殺せる。か?」

顔を屈辱に歪めるガエリオに対し、マクギリスは微笑みながら否定する。

「いや、これは我々と敵対する気はないと言う意思表示だろう。無論ガエリオの言った意味の警告も含まれているだろうがな」

「何故そう言い切れる?」

「コーラル・コンラッドすら生かして返しているからさ。彼らからすれば理不尽に仲間を殺した張本人だぞ? 報復に殺しても不思議ではない。だが彼は生きている。つまりギャラルホルンが公正な組織であるならば、人的被害を与えないよう配慮している相手に、本気で仕掛ける無様は出来まいと彼らは言っているのさ。それもあちらは仲間の死を流した上でね」

マクギリスの説明にガエリオは鼻を鳴らして嘲る。

「マフィアの理屈だな。我々は人類社会の治安維持を担うギャラルホルンだぞ?」

「そうだ、民主主義の政治体制を持つ経済圏に資本を依存したな?」
「……」

「既に各経済圏でギャラルホルンという存在に対し疑問を持つ声は大きくなっていく。しかも今回の襲撃は経済圏と火星との交渉に対する軍事的干渉だ。これを容認してしまったら、各経済圏はギャラルホルンと言う軍事組織に隷属する事になる。我々が追撃すれば、彼らは間違いなくこの情報をリークするだろうな」

「だが、このまま逃しても同じ事になるぞ?」

アーブラウ代表と火星代表の会談という歴史的事態が、秘密裡に終わるはずがない。それどころか世界中へ発信されると考えるのが妥当だろう。その場でクーデリア・藍那・バーンスタインが、自らの身に起きたことを訴えないなどと言う保証はどこにもないのだ。

「ああ、だから我々は動かない。だが、MSで武装した集団の移動に関して報告を上げない訳にもいくまい?」

「アリアンロッド艦隊か!」

「最精鋭の名に恥じぬ働きを期待するでしょう。それからガエリオには一足先に地球へ戻ってもらう」

「何故だ?」

「表向きはコーラルの護送、本音は保険だ」

「保険?」

「万一アリアンロッドが抜かれれば、その先には地球外縁軌道統制統合艦隊しかいない」

「つまり、俺にカルタの助力をしろと?」

困った顔でマクギリスが応じる。

「カルタはあれで責任感が強い。取り逃がしなどしたら何をしでかすか解らんと思わないか?」

「しかも部下はどいつも実戦経験がない連中ばかりだな、解った。頼まれよう」

「助かる、ああそれと」

「どうした?」

安堵の表情を浮かべるも、直ぐに真顔に戻り視線をモニターへ移したマクギリスは冷静にガエリオへ告げた。

「先ほど受け取った書類だが、何ヶ所か間違いがある。修正して再提出してくれ」

「お前は鬼か!?!」

「そんなじゃ、これが依頼されていた物資と、ノブリス・ゴルドンからの依頼品だ」

「はい、確認します」

名瀬が差し出したタブレットをオルガ・イツカが受け取ると、隣に立っていたビスケット・グリフォンに手渡す。それを眺めながら、名瀬は愉快そうに口を開いた。

「本当に任せてんだな？」

「鉄華団は彼らの組織ですのぞ」

ビスケットとは反対の方向に立っている男は平然と言いつつ。どう見ても黒幕にしか見えないが、それを指摘するのは野暮だろう。

「地球、正確に言えばドルトコロニーまでの案内は確かに請け負った。しかし、無理に言えばドルトコロニーまでの案内は確かに請け負った。しかし、無理に言えばドルトコロニーまでの案内は確かに請け負った。」

「とんでもありません。こういう時だからこそちゃんとしなきゃいけない。弱るとたかりに来るなんて噂が立ったら、他の連中に申し訳が立ちません。それに」

真面目な表情でそう口にするオルガを名瀬は目を細めながら愉快そうに眺める。

「それに？」

「タービンスにはもう返しきれねえ恩を貰ってます。せめて料金くらいちゃんと払わなきゃ筋が通りません」

「と、言っているぜ？」

「社長が決めた事ですので」

そうもう一度水を向けるが、男は素っ気無い態度でそう返事をするのみだった。

（成程ね。俺への礼儀の為に出席はするが、内容は本気でガキ共に任せるって事かい。相変わらずの博打野郎だな）

「了解だ。それから紹介したい奴がいる」

そう名瀬が前置きし、自身の後ろへ視線を送る。

「メリビット・ステープルトンさんだ。ティワズからの監査役になる」

「メリビットと申します。宜しく願います」

「本社じゃなくて、ウチらにですか？」

「ちゃんと利益を引っ張ってこれるかはお前さん達次第なわけだろ？ ティワズとしちゃあ、ちゃんと言った通りに出来るか監視しときたわいてわけさ」

「ちよつと、名瀬さん」

「いえ、当然の判断です。幾ら大人がいるって言っても、大半は学も無いガキの集団。手綱を付けたわいて思われても何もおかしなこと

じゃない。メリビットさん。ウチはこの通りなんで色々ご不便おかけすると思いますが、宜しく願います」

「え、あ、はい。宜しく願います」

慌てて応じるメリビットを見ながら、名瀬は更に口を開いた。

「んで、こつからはタービンスからの依頼だ。ウチで護衛機を任せてるパイロットがいるんだが、こいつらをお前達の所で鍛えて欲しい」
「名瀬さん、それは」

「勿論こんな時だ、機体はこつちで用意するし整備の人間もつける。まあぶっちゃけると、アキヒロ達にボロ負けしたあいつらがどうしても付いてって負かすと聞かなくてな。頼まれちゃくれねえか？」

鉄華団が運用している機体の大半は鹵獲したマン・ロデイだ。順次改造し地上戦も可能なランドマン・ロデイに更新しているものの、それでも全部で6機というのが現状である。他の機体を合わせても地上で運用できる機体は10機のみという状況は、ギャラルホルンの庭先で遊ぶには心もとない数である。一機でも多く護衛をつけてやりたいという、名瀬の気持ちから出た提案だった。無論、先ほど言った本人たちの思いも本当に含まれているのだが。

「しかし…」

「宜しいのではないでしょうか、社長。独立直後で経営状態は正直宜しくありません。頂ける仕事は受けるべきでしょう。ああ、ただ確認しておきたいのですが、名瀬氏」

「なんだい」

「鍛えろと仰りますが、実地訓練は許容頂けませんか？」

「構わねえよ。むしろ望むところだ」

「承知しました。どうでしょうか社長」

「ありがとうございます。名瀬さん。このご恩は必ずお返しします」

「ああ、ちゃんと儲けさせてもらうさ。だから死ぬなよ」

そう頭を下げるオルガに名瀬は笑いながら答えた。

「っしやあ！勝負だアキヒロ!!マサヒロ!!」

「ラフタさん!？」

「ラフタ姉ちゃん?なんで？」

「勝ち逃げなんてさせらんないからね、ペドロ達も覚悟しなよ」

「アジーさんまで」

「つつても俺ら機体無いんだけど」

「なんだと!？」

「俺ら予備パイロットですよ」

「マン・ロディはジャックオーランタンと一緒に隠しちゃったし」

「なら正規パイロットの連中を出しなさいよ!ぶっ飛ばしてやるんだから!」

吠えるラフタを見てアキヒロが慌てるが、それはあまりにも遅かった。

「ほう、テイワズのパイロットか。興味深い」

「んあ?ねーちゃん達誰だ?」

通りかかったロットとシノがそう声を掛けてくれば、後は芋づる式にパイロットが集まってくる。そして最後に現れた人物が呟いた。

「これは天下一武道会だな」

後に鉄華団の狂気の代名詞となる訓練が産声を上げた瞬間だった。

29. 料理に求められるのは愛情でも独創性でもなく、美味しく食べられることである

「芋なんて焼きや食べるじゃねえかよ」

「シノ、次に同じことしたら裸で船から放り出すからな？」

鉄華団一番艦、イサリビの厨房では数人の若者が車座になって芋を剥いていた。因みに文句を言ったノルバ・シノ以外はかなり殺気立っている。

「任せろなんて言ったこいつを素直に信じた俺達が間抜けだったんだ。耐えろ」

「バーンスタインさんなんて絶句してたよ」

因みにメンバーはシノを始め、オルガ、ユージン、ビスケットにミカヅキという豪華ラインナップだ。俺は鍋の中の芋を潰しながらそちらへ声を掛ける。

「世間話が良いが手も動かさせ。カレーの無い夕食を私は断固として認めん。もしそうなつたら、解っているな？」

金曜の夕食はカレー、これは鉄則である。俺の言葉にミカヅキを除く全員の手の速度が上がった。

「でもおっちゃん、昼食のあれはどうすんの？」

昼のあれとは、シノが制作した自称ベイクドポテトの事だ。適当に洗ってそのままオーブンに放り込むというワイルドな調理の結果、表面は炭化し中身は生という素敵な一品に仕上がっている。因みに昼食を任されたシノが用意したのはこの一品だけだった。

「食い物を粗末にするなど絶対に許さん。ちゃんと食べるようになる」

「どんな魔法？」

ただの調理だよ。

「それにしても随分と俺らも贅沢になったよな。食い物に美味しい不味いが言えるなんてよ」

「食えるだけマシ、なんてのが遠い昔に思えるぜ」

「昔は酷かったからねえ、アトラが来てくれた時のごはんが唯一の楽しみだったよ」

「そんな過去を掘り起こす食事を出した奴がいるけどね」

「ちよ、ミカツキ!? せっつかくい話で流れが変わろうとしてんのに!」

「相談役く、玉ねぎ切り終わったよ」

「他に何かお手伝いする事はありますでしょうか?」

再び騒ぎ出すシノ達の声を遮ったのは、ミリーとスピカの二人だった。

「ああ、ありがとう。そうだな、もしよければこちらでその玉ねぎを炒めてくれないかね?」

「はい」

「承知しました」

ミリーは以前ブルワーズに囚われていたヒューマンデブリの一人だ。宇宙遊泳させた肌色オークの悪趣味に付き合わされていた彼女は5番隊に所属していたのだが、今回の仕事にあたり非戦闘員でありながら同行を求められた数少ない人材である。

「イサリビの厨房は綺麗だから使いやすいですよ」

ブルワーズ時代に給仕の真似事もさせられていた彼女は、装甲艦の厨房を熟知している上に調理技術を有していたのだ。スピカはあまり経験が無いとのことだったが、ナイフの扱いが妙に上手いので専ら食材のカットで助けて貰っている。

「……」

女人度が上がり、急に無口になる野郎共。全く初心な奴らだぜ。ここは俺が一肌脱いでやるとするか。

「そういえば、二人は料理が出来る男ってどう思う?」

「?」

「料理ですか?」

「サバイバル技能の一環として覚えさせようと考えているのだが中々浸透しづらいものでね、もしかして料理というものに何か悪いイメージがあるのかと思ったという訳さ」

そう聞くと二人は首を傾げながら答えてくれた。

「確かに料理している男の人ってあまり見ませんか？でも出来る出来ないなら、出来る方がいいんじゃないでしょうか？」

「一般論かは保証いたしかねますが、私は出来た方が好みですね。自分の為に手間暇を掛けてくれるという事自体が嬉しく感じます」

「成程、参考になったよ。となると料理が出来る男の方が、やはり異性としては好ましいのか」

わざとらしく大きな声で言ってやる。野郎のモチベーションを上げる手っ取り早い方法はこれに限るからな。

「あ、でもそういう事なら私は作ってもらうより作ってあげたいですかねー？」

ほほう？

「ミリーは尽くすタイプか」

「んー、尽くすって言うか。こう、仕えているとか、所有されてるってというのがゾクゾクするというか」

え？

「そういう意味ではブルワーズも悪くない環境だったんですけどねー。ブタさん殴るのが下手で、痛くないのに傷がでやすい殴り方だったんですよ。あれはいただけませんでした」

まって、まって、まって？

「相談役がブタさん達を容赦なく殺したって聞いたときは、新しいご主人様はすごいいおっかない人だってワクワク、もといドキドキしてたんですけど、ふたを開けたらただの人の良い紳士さんですし、4番隊の所に通ってらっしゃる皆さんもどっちかと言うとプラトニック？な雰囲気じゃないですか。ちよつと違うなって」

誰だ、この子がトラウマで4番隊は無理だって言った奴。彼女の報告書上げてきた本人であるスピカを見たら、即座に視線を逸らされた。あ、これは確信犯ですね。

「スピカ？」

「流石に、彼女の面倒を見るのは、ちよつと」

世界には様々な人がいる。それを垣間見る事が出来た貴重な経験だった。因みに聞いていた連中は暫く女性から距離を置いていた。

頑張れ、若造。

「んっ！ふう」

大量のシートを取り出し、籠へと運ぶ。水を使う都合上、重力区画にある洗濯場での作業は意外にも重労働だ。

「バーンスタインさんはやらなくてもいいのに」

そう言うミカヅキに対して、クーデリア・藍那・バーンスタインは頭を振った。

「これも、私が知りたかった事ですから」

「そっか」

文字通り朝から晩まで働き通しの生活。それはクーデリアの想像していた通りの過酷な環境。それが何と甘い考えであったかを彼女は学んでいた。後方の安全な場所で一日働いているなど、彼らの生活においては幸運な部類なのだ。一步間違えば即座に死を迎えるような世界。そんな場所で生きている彼らを、何も知らない小娘の自分が本当に救えるのだろうか。

「また悩んでるの？」

ミカヅキの言葉に、クーデリアは自嘲の笑みを浮かべる。短い付き合いではあるがミカヅキがこちらを案じてくれていると解つたからだ。

「私はいつも皆さんに心配をかけてばかりですね」

そう言つて彼女は益々自身の無力さを実感する。シャトルで死の恐怖に怯えていた自分、圧倒的な暴力を前に、成す術もなくただ守られていた自分。まるでピエロの様だとクーデリアは思う。救う、苦楽を分か合うなどと意気込んで見せたところで、結局自分はその屋敷の中に居た時と変わらず誰かに守られてばかりいる。そんな自分が息巻いて見せるのはさぞかし滑稽に映つた事だろう。いつそ母のように外の世界を見ずに閉じこもっていた方が、誰も不幸にせず済んだのではないか。

「別にいいんじゃないの？」

沈み込む彼女の心にミカヅキの言葉が投げかけられる。それは慰めでも、まして軽蔑では断じてない肯定の言葉だった。

「でも、私は」

「バースタインさんは戦えないんだから怖くて当たり前だし、そんな人が戦場にいれば心配して当然でしょ」

「それは、けれど私の我儘で」

「じゃあ、俺らはその我儘に感謝しないとだね」

自らの望みと真逆の言葉をかけられ、クーデリアは混乱した。ミカヅキはそんな彼女の様子など気にした風もなく言葉を続ける。

「バースタインさんが我儘を言ってくれたから、火星は豊かになるかもしれない。我儘を言ってくれたから、潰されるだけだったウチの会社が助かるかもしれない。戦場なんて来る必要がないバースタインさんが、怖くても、怯えても、我儘を言ってくれたから、俺達は助かった」

その言葉に、クーデリアの感情は簡単に決壊した。制御できない衝動が目から雫となつて零れ落ちる。

「私は、何も知らない小娘でっ！本当に、何も解っていないくて！」

「……」

「二人では何も出来ないくせに！大口を叩いてっ、守られてばかりいて！」

静かに見つめてくるミカヅキの前で、クーデリアは絞り出すように言葉を吐き出す。

「私は、私は。こんなにも弱い。こんな弱い私が、誰かを救うだなんて――」

「社長達がさ、言ってた」

出来るはずがない。そう続けようとした言葉は、ミカヅキによって遮られた。

「バースタインさんと俺達はイチレンタクシヨウだつて。良く解んなかったから、おっちゃんに聞いたんだ。どういう意味かって」

「それは」

出発前にマルバ社長が何気なく口にした言葉。

「いい事も、悪い事も、みんな一緒に受け止める事だって。それってさ、もうバーンスタインさんは、俺達の仲間って事でしょ？じゃあ、助け合うなんて当たり前じゃん」

「でも、私は、皆さんと違って」

たった数日前、自らが放った傲慢な台詞と行動がクーデリアの脳裏を過ぎる。そして、その時に告げられた言葉も。自らの手のひらを見つつそう吐露するクーデリアを見て、ミカヅキもその事に思い至ったのだろう。困った表情で頭を搔くと、再び口を開く。

「あの時、バーンスタインさんは対等になりたいって言った。それは対等じゃないって意味だ。今でも俺はそうだと思ってる」

「っ！」

「バーンスタインさんが言った対等って、同じになるって事でしょ？同じように働いて、同じ物を食べて、同じに眠る。でもそんなの無理だ。だって俺達は違う人間だから」

「…はい」

クーデリアは力なく頷いた。心のどこかで期待していたのだ。同じことをしていれば、いつか同じと認められるのではと。しかしそれをミカヅキは否定した。それが彼女には明確な拒絶に聞こえたが、それは続く言葉で否定される。

「オルガと俺だって違う、ビスケットやユージン、シノ、アキヒロも。誰も同じじゃない。でも俺達は対等じゃないなんて思わない、同じじゃないから仲間じゃないなんてことはない」

恐る恐る顔を上げるクーデリアの目に映ったのは、真剣な表情でこちらを見るミカヅキだった。

「おっちゃんが言ってた。違って当たり前だって、違って良いんだって。地球の偉い人と会う事も、話すことも俺達には出来ない。バーンスタインさんにしか出来ない。バーンスタインさんにとって、同じことが出来ない俺達は仲間じゃない？」

「そんなことはありません！」

思いのほか力強く出た否定に、クーデリアは思わず頬を赤らめる。ミカヅキはと言えば、そんなクーデリアを見て視線を和らげる。

「バーンスタインさんが出来ない事は、俺達が助ける。俺達が出来ない事は、バーンスタインさんが助けてくれる。これって、対等な仲間なんじゃないかな」

とつくに認められていた。その事実が再び目頭を熱くさせるが、クーデリアはそれを抑え込んで口を開く。

「握手をしてくれませんか？ミカヅキ」

そう言つてクーデリアが手を差し出す。対するミカヅキは、一度自分の手を見て笑いながら答える。

「俺の手、汚れてるよ？」

先ほどまで洗濯をしていたのだ。そんなはずはない。直ぐに以前の会話をなぞっている事が解つたクーデリアは勝気な笑顔で応じた。

「大したことではありません。それとも、綺麗な手とは握手できませんか？」

ミカヅキはその言葉に笑いながらクーデリアの手を握つた。硬く、力強い感触を手のひらに感じながら、クーデリアは少しだけ近づいたミカヅキに告げる。

「クーデリア」

「え？」

「バーンスタインさんなんて呼び方は、他人行儀で嫌です。これからクーデリアと呼んでくれませんか？」

そう提案するとミカヅキは一瞬驚いた顔をするが、笑いながらそれに応じた。

「わかつた。宜しく、クーデリア」

因みに、早速その日の夕食でミカヅキがクーデリア呼びを全員の前でしたことで、様々な憶測が飛び交う事になるのであるが、今はまだ邪推の域を出ない話なのであった。

30. 猜疑心は時に人を助ける

『気味が悪いくらい順調だったな。まあ、いい事なんだろうが』
何処か落ち着かない調子で画面越しの名瀬がそう口にした。

「アリアンロッドはそれなりに勤勉らしいですな」

『まあ、残ってる海賊と言えば、夜明けの地平線団くらいなものだが、アイツらは流石にブルワーズ程馬鹿じゃないだろうからな』

そもそも襲つても旨味の少ない集団ですからね、俺ら。一番高価な装備は艦そのものとMSだからこの辺りを鹵獲できないと赤字確定なのに、それが全部戦闘用なのだ。うむ、やはり海賊など美味しくない商売だな、変な連中に襲われても権力に助けも求められんし、ウチもだけど。

『俺達が案内出来るのはここまでだ。アリアンロッドは分艦隊でも火星支部の比じゃねえ、気をつけるよ?』

「大事な嫁さんを預けて貰ってるんです。無茶はしませんよ」

オルガがそう笑って言うが、名瀬の表情は優れない。

『∴お前達の考える無茶しないは全然信用ならねえんだよなあ』

「え、なんですか?」

聞き返すオルガに名瀬は何とも言えない表情を作り答える。

『いや、お前たちの無事な帰還を願っているよ』

その言葉と共に通信が切れ、タービンスの艦が遠ざかっていく。それを見送りながら俺は息を吐くとオルガに話しかける。

「ドルトコロニーの入管とは話が通っている。2隻とも3番貨物ゲートからか」

「状況次第ですが、半舷上陸も考えてます。出来れば食糧や水の補給もしておきたいですし」

「そうだな。地球ではアープラウの宇宙港が使えたと聞いているが、ギャラルホルンの権限がどこまで及ぶか解らん。最悪降下組以外は何処かに潜伏させる必要もあるかもしれん」

「地球外縁軌道統制統合艦隊は地球全土へ緊急展開出来る権限を有している。曲解すれば静止軌道の宇宙港も地球の内だからな。不審船

の追撃という名目ならば経済圏も拒否しにくい」

俺の言葉に続いて難しい顔でロッドが告げる。

「つまり事実上最後の補給って考えた方がいいって事か、ユージン」
「おう」

「悪いが物資の調達班を指揮してくれ。ビスケット、ユージンの補佐を頼む。チャドとダンテは艦の面倒を見てくれ」

「解った、サブードさんかヤスネルさんを連れていきてえから連絡頼む」

「フェイにも連絡してカガリビの方の補給リストも準備しなきや。向こうの人選はどうする?」

「その辺りの判断はフェイとジルバに任せる。ただアキヒロは艦に残すように言つとけ、グシオンはすぐ動かせるようにしておきたい」

フェイとジルバは3番隊の元ヒューマンデブリ組だ。アキヒロを筆頭にチャドやダンテに隠れがちであるが、フェイは落ち着いた性格で堅実な行動を取る事から周囲の信頼は厚い。ジルバは少し能天気だが人当たりが良く細かい事にも気が付くので2番艦の副長に任命されていた。

「ん、了解」

「宜しいでしょうか?」

俺達がそう話し合っていると、フミタン・アドモスが声を掛けてくる。

「なんででしょう?」

「申し上げにくいのですが、お嬢様の身の回りの物について幾らか調達したいのですが」

「ああ、そうか。そつちも準備しなきやだよな」

オルガが頭を掻き唸る。俺達としては彼女を送り届けるのが仕事であるが、バーンスタイン嬢の仕事はそこからなのだ。人間内面が重要であるが、同じくらい外面だって重要だ。相手へ誠意を伝える上で、身だしなみはこの上なく解りやすい指標といえる。それに交渉ともなればスーツや化粧は戦闘装備だ、手を抜いてよい訳がない。

「どの程度になりますか? 流石に衣類までとなると厳しいかもしれ

ません」

流石に代表との会談で吊るしのスーツと言う訳にはいくまい。

「スーツや靴などは良いのですが、化粧品などが少々。それと、そのインナーが」

あー。

「しかしそうなりますと、バーンスタイン嬢もコロニーに行く必要がありませんか」

「どちらにせよゴールドン氏の依頼関連で向こうの代表がクーデリアさんに会いたいって打診が来てます。その時に一緒に済ませられませんかね？」

オルガがそう提案するが、それは横にいたビスケットによって否定される。

「それは難しいかな、クーデリアさんが使うような化粧品とかだとドルト3の商業区に行かないと。会いたいって言うのは労働者組織の人だから、会合は入港するドルト2になるだろうし」

「詳しいな、ビスケット」

「昔、少しだけドルトに住んでたんですよ。兄が今も住んでいるんです」

俺がそう聞くと、寂しそうに笑いながらビスケットはそう言った。

「両親が事故で死んでしまつて。兄さんの稼ぎだけじゃどうにもならないからって妹達と僕はばあちゃんに引き取られたんです」

「じゃあ、少し自由時間をやるから兄貴と会ってきたらどうだ？せつかくここまで来たんだしよ」

オルガがそう提案するが、ビスケットは頭を振る。

「今はリスクが高すぎるよ。どこまで情報が伝わっているか解らないけど、ギャラルホルンの駐屯地だってあるんだ。余計な事はすべきじゃない。兄さんには、落ち着いたらゆっくり会いに行くさ」

「お前の判断なら、俺はそれを尊重する。会合の時間なんかはこちらで調整しますから、先に商業区での買い物を済ませて貰っていいですか？」

「護衛にスピカを連れて行ってください。準備させます」

俺達の言葉に頷き、フミタン・アドモスは退出する。十分な時間が経ち、ダンテが無言で手を挙げたのを確認してから話し始める。

「問題はこの荷物だな」

「こんなもん届けて、ノブリスってのは何する気だったんですかね?」
ノブリス・ゴルドンから輸送依頼を受けた物資。タービンスは運び屋の矜持なのか中身を確認していなかったようだが、そんな事は知つたこつちやない俺達はさっさと中身を検めていた。

「武器屋が武器を売るのは当然と言えば当然だがな。余りにもきな臭い」

「相談役としては、彼女は黒か?」

ロツドの問いに俺は溜息と共に頷く。

「残念だが間違いないだろう。航海中バーンスタイン嬢は殆ど化粧をしていなかったし、何よりタービンスから物資を確保できる状況で言い出さなかったのに、今になって言い出すのは不自然すぎる。それにしても」

「それにしても、なんです?」

聞いてくるオルガについ皮肉気な声音で言ってしまう。

「大した忠誠心だと思つてね。ギャラルホルンの襲撃を受けた段階でバーンスタイン嬢諸共殺されていてもおかしくなかった。いや、仮に生き延びても真実を知っている彼女が処分されない訳がない。死人は何も喋れないのだからね。だと言うのに、彼女はまだノブリスに忠義を尽くしている。大したものだ」

「何がそこまでさせるんでしょうか?」

「さてね」

俺はそう言つてはぐらかしたが、本当は心当たりがある。フミタン・アドモスはとても真面目な女性だ。そして恐らくバーンスタイン嬢を嫌っていた。ノブリスの手駒になったのは多分ここ最近の話ではない。むしろ彼女はノブリスの手駒であるのが前提で、バーンスタイン嬢に近づいたと考える方が妥当だろうか。バーンスタイン嬢はあのような性格だ。幼少期も相当にお転婆だった事だろう、今と変わらぬ信念で周囲を、フミタン・アドモスを振り回したに違いない。そ

して真面目で優しい彼女は、バーンスタイン嬢の影響を強く受けたのだろう。だから彼女は任務と忠義を両立させる為に、バーンスタイン嬢と共に死ぬことを選んでいるのだろう。だが、それは困る。バーンスタイン嬢にこんなところで死んでもらう訳にはいかんだ。

「火星の件といい、今回といいノブリスは脚本家にはなれんな。こんな安っぽいシナリオでは客も興ざめしてしまう」

「ならそんなのに付き合う必要は無いですね？」

愉快そうに笑うオルガに俺は肩を竦めて応じる。

「脚本が悪い分はキャストが努力するしかあるまい。早く雇われの身からは抜け出したいところだな」

「すまねえ、ラフタ姉さん」

「いいよ、私も気分転換したかったしね」

頭を下げながら謝罪してくるアキヒロにラフタはそう笑いながら答えた。半舷上陸の許可が出たものの、ガンダムのパイロットであるミカヅキとアキヒロは万一の場合を考慮して艦内待機を命じられた。ならばと居残りを申し出る元ブルワーズ組に少しでも色々な事を知ってほしいと考えたアキヒロはラフタに頼み込んで彼らを引率してもらおう事にしたのだ。

「それにしても、ちゃんと兄貴してるじゃない」

そう笑うラフタにアキヒロは真面目な顔で口を開いた。

「あいつ等は外を知らねえ。俺もだ。けどそれは良くねえ事だつてことくらいは解る。だから、少しでもあいつ等に何かしてやりてえんだ」

「うん、いいんじゃないの。そういうの」

そう彼女は柔らかく微笑み、アキヒロを見つめる。そんな二人にマサヒロの元気な声が届いた。

「ラフタねえちゃん！もう船港に入るよ！」

「ドルト3にはシャトルで移動するんだから、焦るなよ」

「そう言うビトーだつてソワソワしっぱなしじゃん」

「はいはい！今行くわよガキンチヨ共！じゃあね、アキヒロ！」
大きな声で返事をすると、ラフタは彼らへ向かって歩き出す。その胸中に名瀬と愛し合うのとは違う、温かい何かを感じていたが、彼女ははまだそれに気づかなかった。

31. 時と相手を選ばずに発揮されるのは勇気ではなく蛮勇である

「よくいらして下さいました。鉄華団の皆さん」

「は、はあ、どうも」

入港するなり熱烈な歓迎を受ける事となったオルガは顔を引きつらせながら握手に応じる。一緒に降りていた俺やシノの周囲にも人だかりができていく。ドルトコロニーはアフリカユニオンという経済圏が所有しているコロニーだ。中でもこのドルト2は所謂工業用コロニーで、ドルトカンパニーと言う企業が占有している。当然生産物の出荷や資材の搬入で輸送船などの民間船舶の出入りが激しい上に、入港管理そのものを企業の労働組合が管理しているという杜撰な対応であるため、俺達のような連中も潜り込めてしまう。まあ、そんな連中相手に企業側もぼったくり値段で物資を流しているようなので案外わざとやっているのかもしれない。

「すみません、取り敢えず入港の手続きを。荷物も降ろさなきゃいけませんし」

「ああ、すみません！火星の英雄に会えてすっかり興奮してしまってます、こちらです」

笑顔で案内してくれる職員の後ろを付いて移動を始めると、すぐ横に並んだオルガが嫌そうな顔で話しかけてきた。

「ギャラルホルンに喧嘩を売った俺達が英雄だそうですよ」

「素晴らしい情報収集能力だな、鉄華団の名前などごく一部にしか名乗っていないと言うのに」

「…仕込みは万全と言う訳ですか。じゃあ、俺達が持って来ている物の事も知っているんでしょうね」

「あの、何か？」

小声で話していたら、案内役の人がそう振り返って聞いてくる。

「いえ、何でもありません。コロニーは初めてのものですから、いろいろと珍しくて」

「ああ、そうでしたか。といつてもこの辺りは殺風景なものですよ。富裕層が使っているドルト3なら色々揃っていますけどね」

「そうですか」

言葉に滲み出る嫌悪感を敏感に察したオルガがそう言つて話題を打ち切ろうとする。だがそこで唐突に重要な事柄が告げられる。

「安心してください。流石にロイヤルスイートとは行きませんでした。が、ちゃんとクーデリアさんのホテルも用意させていただいています。場所はドルト3ですから、買い物なども不便はないと思います」
は？

「お待ち頂きたい。バースタイン嬢のホテルとは？」

「あれ？補給で2、3日は滞在されるはずなので、ホテルをお取りするよう連絡を受けていたのですが」

ノブリスの野郎、本気でバースタイン嬢を始末する気か？

「…お心遣い感謝します。しかし彼女には艦内で過ごして頂く予定なのですが」

「とんでもありません！革命の乙女を船に押し込めたまま放置したなどと言われては、私たちの沽券に関わりません！是非ホテルに滞在くださいー」

「警護の観点から同意いたしかねる。申し訳ないが…」

「一体何の騒ぎですか？」

「ナボナさん！」

立ち止まって案内役の人と問答をしていると、中年の男性が声を掛けてきた。彼を見て案内役の人は安堵した表情でそう名前を呼ぶ。

「失礼します。ナボナ・ミンゴと申します。ここで組合のリーダーをしている者です」

「鉄華団のオルガ・イツカです」

「同じく、マ・クベと申します」

俺達が頭を下げると、ナボナ氏は笑顔で応じてきた。

「クーデリアさんの護衛の方々ですよ。如何なさいましたか？」

「ええ、実はバースタイン嬢の処遇で少々」

「それは、立ち話で済ませるものではありませんね」

ナボナ氏の言葉にオルガが頷く。

「はい、入港の手続きもまだですから、終わり次第一度お話しさせていただきます」

「承知しました、では後程」

そう言つて去つていくナボナ氏を見ながら、俺は溜息を吐いた。これは少々面倒な交渉になりそうだ。

ナボナの下に緊急の報告が告げられたのは、クーデリア・藍那・バーンスタインの滞在中の処遇について話をしている最中だった。

「な、ナボナさん！積み荷が！」

「どうしました？まさか事故ですか？」

ノブリス・ゴルドンからの支援物資。それはこれから行う会社側との交渉において重要な役割を果たす物だ。そして万一の場合非常に危険なものでもある。

「それが、中身が違っているんです！どのコンテナも食糧と生活雑貨ばかりなんです！」

その言葉にナボナは思わず立ち上がり、先ほどまで会話をしていた男達を見る。そこには何食わぬ顔でこちらを見返す青年と、出された茶を飲む顔色の悪い男が平然と座っていた。

「どうかされましたか？」

ぬけぬけとそう聞いてくる青年を、ナボナは思わず睨んでしまう。そして問いただすべく口を開いた。

「積み荷の中身が違っています。どういうことですか？」

「どういふと言われましても。我々は受け取った荷を運んできただけですから」

「そんなはずはありません。ノブリスさんは確かに我々に——」

「武器の供与を約束でもしてくれましたかな？」

カップを置いた男の言葉と同時に、壁際に立っていた護衛と思しき青年が静かにドアの前へ移動する。ナボナはこの時になつて今更彼らが戦闘を生業にしている集団である事を思い出した。渴く喉を唾

を飲み込んで強引に潤し言葉を続ける。

「そうです。あれは会社との交渉に使う我々の希望です。返して頂きたい」

「交渉、それに希望ですか。宜しいですか、ナボナ氏」

爬虫類のような男が目を細めながら、ゆつくりと口を開く。

「武力を背景に行う交渉は戦争と言います。そして戦争は命のやり取りが含まれている。それを理解した上での選択ですか？」

「わ、我々は本当に使う気など！」

それは咄嗟に出た言葉ではない。ナボナ達はあくまで示威として武装するつもりだったのだ。

「通常の話し合いでは会社は全く応じようとしませんよ!?我々も意思を示す必要がある！」

「馬鹿を仰らないで頂きたい。いざとなったら使うつもりだから用意するのです。貴方達が本気かどうかなどというのは関係ない。武器を持った時点で相手はそう解釈します」

そう言いながら男は指先で机を叩く。

「そして武器を持ち出すという事は、武力による交渉に同意したと見做されます。私が会社ならば、喜んで応じるでしょうな。何せ向こうにはギャラルホルンという素晴らしい武力がある。必ず勝てると解っている交渉程楽なものはないのですから」

「そんな、馬鹿な」

「その御様子ですとノブリス辺りに吹き込まれたのではないですか？例えばそう、社と対峙するならば断固たる姿勢を見せねばならないか」

「そんなことはありません、これは我々の意見だ！」

即座に否定するが、目の前の男は愉快そうに口元を歪めた。

「本当に？それを言い出したのは誰ですか？その人物はどうしてそう思ったのです？その人物がノブリスの影響を、もっと言えばノブリスの手先ではないという証拠は？」

ナボナが想像すらしなかった事を平然と言い放つ男は肩を竦めながら続ける。

「私に言わせれば、貴方もバーンスタイン嬢も武器商人を信用しすぎている。彼らは破壊と混乱にこそ利益を見いだす人間です。そんな彼らが平和的な解決など望む訳がない」

「しかし、彼が我々を支援してくれたのも事実です」

「当然でしょう。対立とは両者が拮抗すればするほど長く続くのです。そして長期の闘争はそれ自体が争いの火種になりうる。彼からすれば今後の収穫に向けての投資ですよ」

「そう言い切る男に、ナボナは拳を机に振り下ろしながら叫ぶ。

「ならばどうしろと言うんだ!?!このまま食い物にされて我々に死ねと言うのか!?!」

「そんな事は言っていないません。武器を使うなら覚悟を持って、必ず勝てる戦いをしなければならぬと言っているのですよ。何しろこれは文字通り最後の手段です。負ければ最早交渉の余地はない」

「そう言って男は鼻を鳴らす。

「そして付け加えるならば、今は絶対に勝てません」

「なぜ、そう言い切れるのです?」

「聞き返すナボナに男は獰猛な笑みを浮かべながら答える。

「ノブリスの目的がこの地の混乱に乗じてのクーデリア・藍那・バーンスタインの殺害だからだよ。悲劇は大きければ大きいほど新たな混乱の火種になる。君達はそのスケープゴートと言う訳さ」

「カップの冷めた茶を男は飲み干すと、真剣な表情で口を開く。

「我々は彼女をここで死なせる訳にはいかない。そしてそれは貴方達にとっても希望に繋がる話だ」

「なんですって?」

「彼女は今火星の経済的自立の為に、アーブラウ代表との交渉に向かう最中です。これがなされれば、各地の不平等条約や経済格差は大きく取り上げられるでしょう」

「何故、そう言い切れますか?」

「人間は本質的に自分が悪者にはなりたくないですし、同時に自分だけ損をするのは嫌うからですよ。火星との不平等貿易を是正すれば、アーブラウは必ず他の経済圏の現状を問題として投げかける。そう

なれば悪者になりたくない多くの人は、多少の不便さを受け入れてでも善人であろうとする。その時こそが貴方達の立つべき時だ」

3.2. 不完全な人間が目指す未来に正解はない

フミタン・アドモスは現状に窮していた。ドルト3に滞在して2日、先ほどノブリス・ゴルドンより支援を受けている労働者組合の会長とクーデリアの会談も恙無く終了し、時刻は午後へと移っている。当初の予定では今日の午前中には労働者組合のデモが発生し、その中でクーデリアは凶弾に倒れるはずだった。想定外の状況にノブリスと連絡を取る事も考えたが、警護を理由にクーデリアと行動を共にする事を求められ、しかも離れる際も万一に備えるとの理由から護衛がフミタンにも付けられている。

(これは、私の事は露見しているという事ですね)

事実彼女に護衛という名目で付いているスピカ・ネーデルの仕草は監視者のそれだ。行動に移せば、彼女は即座に自身を拘束するであろう事は容易に想像できた。

「もう残り1日ですか。あつと言う間でしたね」

「それだけ充実していたと言う事でしょう。良い経験になりましたかな?」

「はい、とても」

そう笑うクーデリアの向かいに座っているのは途中から合流したCGSの社長相談役だ。想像以上に様々な方面に精通している彼の会話はクーデリアにとって大変良い刺激となるようで、昨夜などかなり遅くまで話し込んでいた様子だった。

「お茶のお替りをお願いしてきます」

そう言いながら部屋を出たフミタンは、あらぬ妄想を抱く。このまま無事ドルトを出発し、クーデリアは地球に降り立つ。そしてアーブラウ代表との会談に成功し、火星へと凱旋する。自分は一人の従者として、それに静かに付き従うのだ。そんな甘い夢を見ていたせいだろうか、彼女は声を掛けられるまで、目の前の人物に気が付かなかった。「従者のふりはまだ続けるのかな、フミタン・アドモス」

ホテルの廊下である。利用者はそれ程多くなかったが、それでもそれ違わぬ程ではない。だが、明確に自分へ向けた言葉に、フミタンは

体を強張らせ相手を見て眉を寄せた。

「貴方は？」

率直に言えば目の前にいるのは不審者だった。背格好と声から男性、それも青年と呼べる年齢であろうと推察するが、顔立ちには解らない。何しろ目元はマスクに覆われ、頭部はそこから延びるかつらで覆われているからだ。人の服装にとやかく言う趣味はフミタンにはなかったが、少なくともこんな人物はホテルに入れる前にそんなものを外すよう注意すべきだと彼女は思った。

「私はモンターク。しがない商人だよ、今日は君の主に耳寄りな商談を持って来てね」

「素性も不確かな方をお嬢様にご紹介する訳にはまいりません」

「これは手厳しい。けれど、素性に関してならば君も人の事を言えた義理ではないだろう？」

モンタークと名乗った男はそう笑う。フミタンはその笑顔の意味を理解し背が粟立つのを感じた。何故なら、彼の視線はフミタンに向いておらず、その後ろを見ながら笑っているのだ。

「フミタン？そちらの方は？」

今最も聞きたくない声がフミタンの耳朶を打つ。そして彼女が振り返るより先に、目の前の男が首を垂れる。

「初めまして、ミス・バーンスタイン。私はモンターク、商人をしておりません。本日は耳寄りな情報をお持ちしました」

「それは興味深いですね。けれど私は今持ち合わせがありませんが？」

「問題ありません。私としてはこの一件をテイワズと同じく投資と考えておりますから」

「…随分と良い耳をお持ちなのですね」

警戒心をにじませた声音ではあるものの、クーデリアは会話を止める意思は示さなかった。その事実にはフミタンは諦めから、体の力を抜いた。

「商人ですからね、どうでしょうか。私の商品にご興味を持っていただけでしたか？」

「伺います」

はつきりとそうクーデリアが口にし、モンタークは笑みを浮かべる。そして彼は決定的な一言を口にした。

「お持ちしました商品は2つ、一つはギャラルホルンのアリアンロツド分遣艦隊がドルトへ向かっています。武装蜂起した労働者を鎮圧するためね」

「武装蜂起!? 一体何を仰っているのです?」

「そちらについては私から説明しよう。ノブリス・ゴルドンから依頼された輸送物資だ。あれの中身は歩兵用の火器とモビルワーカーだった。勿論戦闘用のね」

そうフミタンの後ろで別の男が喋った。その声はCGSの相談役のものだった。

「どう言う事ですか!」

「そのままの意味ですよ、ミス・バーンスタイン。ノブリスは武器を労働者に供与し武装蜂起というお膳立てをし、その情報をギャラルホルンにリークする事で武力衝突を誘発させようとしている。そしてその場へ手駒を使って貴女を誘導し、ギャラルホルンに貴女を殺害させ更なる対立を生む。それが彼の計画です」

「……」

「そしてもう一つの情報は、彼の手駒が誰であるか」

限界だった。フミタンは言葉が告げられるより早く走りだす。それが何よりも雄弁に裏切り者が誰であるかを示す行為であると自覚しながらも。後ろから聞こえてくる、悲痛な呼び声に彼女は応える事が出来なかった。

「フミタンー!」

叫んで走り去るアドモス女史を追いかけようとするバーンスタイン嬢の肩を掴んで強引に止める。そしてすぐ横に控えていてくれたスピカに目配せすると、彼女は領いて直ぐに走り出した。

「ふむ、告げる前に姿を消したか」

そうアドモス女史の背を見送っていたモンタークとやらに俺は声を掛けた。

「情報提供感謝するよ。急ぎの用事も出来た事だし我々は失礼させてもらおうかな」

俺の言葉にモンタークは不思議そうに問いかけてくる。

「おや、ギャラルホルンの横暴をお止めにならないのですか？」

「仰っている事を理解しかねる。ギャラルホルンの何を止めるのだね？」

俺の返事にモンタークは声を硬くして応じる。

「殺戮される民間人を見殺しにするのですか？ 貴方達の正義はその程度のものなのですか？」

何言ってるんだこいつ。

「正義の味方だなどと名乗った記憶は一度もないのだけけどね。そもそも聞きたいのだが、起きもしない武装蜂起を鎮圧に来ると言うギャラルホルンの何をどう止めろと言うのかね？」

「武装蜂起が、起きない？ 馬鹿な、貴方達は確かに武器を運んできた筈だ！」

「武器を運んでいるのは否定しないがね。何かの手違いで入れ替わっていた、ゴルドン氏が届けるつもりだった食料品や生活物資ならば彼らに渡したとも」

俺の言葉にモンタークは暫し呆然とした後、腹を抱えて笑い出した。

「成程！ 武器を持たぬ人間が武装蜂起など出来るはずがない！ そんな無力な民間人を武力鎮圧などすれば、ギャラルホルンの名声は地に落ちる！」

その様子を見て俺は肩を竦める。

「尤も我々が彼らに追われる身である事は変わらない。だから早々にお暇させてもらいたいんだがね？」

「失敬、ですが彼女の件はどうするのです？ 確かに貴方がたは窮地を切り抜けた、しかし彼女が内通者であると言う事実は変わらない」
「話します」

俺の前に立っていたバーンスタイン嬢が毅然と言い放つ。

「まずフミタンから話を聞きます。そして話し合ってこれからを決めます」

「彼女が真実を語るとは限らない」

「そうですね、けれどそれは貴方も同じでしょう？モンタークさん。貴方が真実を話している保証なんてどこにもない。けれど、私たちは貴方を信じる。ならば同じようにフミタンの言葉を信じるのにどれだけの困難があると言うのですか？」

言いながら彼女は笑う。それはもう火星で見た少女の笑顔ではなかった。だから俺も彼女に続く。

「だそうだよ。クライアントがそう仰るならば是非もない。我々はその要望に応えるだけだ。ではモンターク殿、ごきげんよう」

そう言っただけ俺達は彼の横を通り過ぎる。黙って見送る彼に俺はつい一言だけ付け加える。

「ああ、言い忘れていた。バーンスタイン嬢はともかく、私は人生の教訓から仮面で顔を隠している輩の事は信用しない事しているんだ。本当に我々と話したいと思うなら、まずそれを外す事をお勧めしよう。ではな」

ホテルの裏口から飛び出し、とにかくこの場から離れるために表通りへと出ようとした瞬間、フミタンは腕を掴まれ強引に路地へと引き戻される。襲撃してきた人物はそのまま慣れた手つきで関節を極めつつ、口元を手で覆い声も封じる。

「騒がない。それから表通りには出るな、殺されるぞ」

視線だけを動かして確認した相手は、あの傷だらけのCGS4番隊隊長の娘だった。

「目標は確保、そちらは？成程、所詮素人ね」

何事かを話していたスピカ・ネーデルが視線をフミタンへと向ける。

「暴れない、逃げないと約束出来るなら拘束を解く。どうする？」

フミタンは僅かに逡巡するが、結局領き拘束から逃れる。油断なくこちらを監視しているスピカに対し、フミタンは頭を下げた。

「助けて頂きありがとうございます」

「気にしなくていい。ドルトにいる間にこうなる事はある程度予想されていた」

「予想？どういう事でしょうか」

「アンタの本当のご主人様は随分と強欲だという事よ。火星での襲撃に耐えきった貴女とバーンスタイン様はより大きな火種になる可能性が出てきた。だからドルトでも試練を与える事にしたのよ」

「試練？それは」

フミタンの言葉にスピカは冷たい笑みを浮かべる。

「まずは労働者の武装蜂起。それで駄目なら混乱に乗じての暗殺。それすらも上手くいかなかったら、身近な人間の死を乗り越える悲劇のヒロインに配役される予定だったみたいね？」

身近な人物、そして表通りに出れば殺されるという警告。馬鹿でも理解できるような繋がりには、フミタンは体から力が抜けてしまう。路地裏に座り込む彼女に向かって、スピカが話しかけてくる。

「どうする？ノブリスはアンタを捨てたわよ。正直面倒なのは嫌いなもの、まだアレに義理立てすると言うのなら、私たちとしても相応の対応を——」

「私は、お嬢様が嫌いでした」

今まで誰にも打ち明けた事のない胸中を、フミタンは漏らす。

「汚い事なんて何も知らない箱入りの小娘。真直ぐに向いている瞳も、現実を知ればすぐ曇ると思っていました」

「そう」

フミタンの言葉に、スピカが相槌を打つ。彼女も元ヒューマンデブりであるが故に、そういった類の人間に対する敢意が理解できたからだ。

「でも、お嬢様は違いました。どんな現実突き当たっても、曇らず、曲がらず。そう、まるであの絵本の少女のように——」

「フミタン!!」

少女の叫び声と同時に、フミタンの胸元にぶつかる様にしてクーデリアが飛び込んできた。肩を震わせながら、決して離すまいと服を握りしめる彼女へ、フミタンは声をかける。

「お嬢様？」

「どうしてー！」

フミタンの言葉にクーデリアが叫ぶ。

「どうして、いなくなるのですかっ！どうして、何も言ってくれないのですかっ！私は、貴女にとってその程度の存在なのですか!？」

それに動かされるように、フミタンは言葉を紡ぐ。

「私は、貴女を裏切りました」

「だから何です」

「死ぬと解っていて、貴女をここまでお連れして」

「だから何ですっ！」

「ずっと、ずっと昔から、私は貴女を欺いて」

「だから何だと言うのですかっ！そんな事で私が貴女を嫌うと思ったのですか!?!そんな程度で貴女を許さないと思ったのですかっ！そのくらいの事で壊れてしまうような安い間柄だと、貴女は言うのですか!？」

「私は、お嬢様にお仕えするには相応しくない人間です」

「勝手に決めないで！」

フミタンの言葉を拒絶するようにクーデリアが叫ぶ。

「いつもフミタンがそばにいてくれた。私だけじゃここまで来れなかった、違う、フミタンがいてくれたから、私はここまで来れた。だから、相応しくないとか、いちやいけないとか、そんな、こと、言わないでよ……」

絞り出すように紡がれた言葉は、次第に泣き声に変わる。腕の中で震える少女を見て、フミタンは笑いながら涙をこぼした。

「立派になられたと思いましたが、まるで弱い乙女です」

ゆっくりと持ち上げた腕で、フミタンは彼女をしつかりと抱きしめる。そして彼女ははつきりと、自らに言い聞かせるように言葉を紡ぐ。

「誓わせていただきます。フミタン・アドモスは、命ある限りクーデリア・藍那・バーンスタイン様に仕え続けると」

3.3. 責任感のみで職務に当たるものは周囲を不幸にする

「宜しいのですか？イオク様」

部下の言葉に、過ぎ去っていく二隻の装甲艦を見送ったイオク・クジヤンは鷹揚に頷きながら答える。

「宜しいとも。我々の任務はドルトコロニーの武装蜂起を鎮圧する事だ、それ以外は何もすると言うのがエリオン公の御指示なのだから、それ以外はするな」

「しかし、コロニーで武装蜂起は起きておりません」

つまりそれは分遣艦隊の行動が徒労に終わったという事を指す。さらに言えばなんの成果も挙げていないのだから、功績にもならない。イオクにクジヤン家に相応しい実績を積ませたい部下たちは忸怩たる思いであったが、当人はそのような事にまるで気づかず笑顔で応じる。

「我らの威光の前に愚かな考えと思いとどまったのだろう。戦わずして反乱を鎮める。我ながら自らの才が恐ろしくなるな！」

「せめて彼らを臨検しては？MSで武装しているとすれば、捕縛の大義名分も」

部下の言葉にイオクは煩わし気に手を振った。

「安易に情報を鵜呑みにするな。あの艦艇は旧式、どう見てもMSを20も運べるものではない。そもそも情報源はあのマクギリス・フリドなのだろう？自身の功績を上積みするために誇張したに決まっている。あのような小物は地球外縁軌道統制統合艦隊に任せればよい。たまには連中にも手柄を立てさせてやるべきだろう」

イオク・クジヤンは今日も絶好調であった。

『余計な手出しは無用だと言ったはずだぞ、ガエリオ坊や！』

厳しい目で睨みつけてくるカルタ・イシユーを見ながら、ガエリオ・

ボードウインは内心溜息を吐いた。

(手出ししなくても平気ならば、態々怒鳴られになど来るものか)

地球外縁軌道統制統合艦隊。セブンスターズの第一席、厄祭戦において最も功績大とされたイシュー家が預かるこの艦隊は、文字通り地球軌道上に拠点を構える地球最後の守護者である。とは言うものの、更に外周である月外縁を活動範囲としているアリアンロッド艦隊の活躍により、出番と言える出番はほぼ存在せず、規模や装備に対して、その練度はお世辞にも高いとは言えない。カルタ自身も才能はともかくとして経験不足は否めず、施している訓練についてもギャラルホルン創立期に制定されたものをそのまま使っている。儀仗兵、口さがない者からはお飾り部隊などと揶揄されているというのが実情だ。

「そう邪険にしてくれるな。マクギリスがどうしてもお前が心配だと言うから来たんだ。友の顔を立ててくれても良いだろう?」

『ふ、ふん!そういう事ならば仕方あるまい、だが、あくまでこちらの指揮に従ってもらうぞ!』

解りやすすぎる反応を示すカルタにガエリオは今度こそ溜息を吐きかけるが、それを強引に呑み込み口を開く。

「了解した。それと、繰り返すが連中は恐ろしく練度が高い。個としての技量もだが、何よりも乱戦で無類の強さを誇る。油断するなよ」
『ふん、連携ならば我々に及ぶ者などおるまい。我々は地球外縁軌道統制統合艦隊!』

『面壁九年!堅牢堅固!』

「…そうだな」

通信を切ると、即座にガエリオから重い溜息が漏れる。その不安は同じく通信を見ていた者も感じたらしく、率直にそれを口に出して来た。

「ボードウイン特務三佐、その、彼らは大丈夫なのでありませうか?」

「言うな、アイン。数合わせくらいにはなる事を期待しよう。連中が殺さずを貫くならば、数はそれだけで価値がある」

それでも浮かない表情の部下にガエリオは努めて明るく振る舞う。

「それに今回はこちらも切り札を用意している。前のような無様はせんさ。貴様もシユヴァルベには慣れたようだしな」

「ありがとうございます。ご期待に添えますよう、全力を尽くさせていただきます」

「期待しているよ」

そう言つてガエリオは私室へと戻る。ボードウィン家所有のハーブビーク級戦艦、スレイプニルには家族それぞれの個室が用意されている。その中で彼は火星で相まみえたグレイズとの戦闘記録を幾度も再生していた。

『弱者を救おうともしない貴様等が正義だ秩序だを語るなど、滑稽を通り越して不愉快だ!』

内容が犯罪者と罵った相手に面罵された場所になるたびに、ガエリオの表情は僅かに沈んだ。堂々とギャラルホルンを非難する相手に興味がわいた彼は、つい彼らの事を調べてしまった。弱者どころか社会の不要物と認識していたヒューマンデブリの成り立ち、悍ましい行為としか思っていなかった阿頼耶識システムを埋め込む行為の必然性。それらはコーラルと言う自らが寄つて立つギャラルホルンの明確な不義を直視した後の彼には余りにも刺激の強いものだった。

「弱者を救う、か」

ガエリオは視野が狭く、独善的な人間だ。だがその視界に守るべき弱者が入ってしまったら、それを捨て置けるほど冷酷ではなかったし、一度でも相手を守るべき者と認識してしまえば、敵だと簡単に割り切れるほど単純でもなかった。

「俺は、どうしたらいい?」

彼の問いに答える者はここには居ない。

「クーデリア?」

「あ、ミカヅキ」

ドルトを離れて半日、月の欠片によって生まれたデブリ帯を船はゆつくりと進んでいる。

「大丈夫?」

「ええ、もう平気ですよ。フミタンとも沢山話しましたし」

そう彼女は笑うが、それは何処かぎこちないものだった。無理もないだろう。後援者だと思っていた人物は、自らをただの商売の種としか見ておらず、最も信頼していた相手はその手先だった。そして彼女の価値を高めるなどというふざけた理由で、危うくその命を失うところだったのだ。ほんの数日で少女にのしかかった現実には、余りにも重い。

「ここまでくれば、あともう少し、もう少しです。会談を成功させて皆で火星に帰りましょう」

「うん」

頷きながら近づいたミカヅキは、クーデリアが震えている事に気が付く。ミカヅキの視線から気づかれた事を感じ取ったのだろう。クーデリアは慌てて体を手すりから起こすと、ミカヅキに向かって言い訳を口にする。

「ち、違うんですこれは、その、む、武者震いというやつ…で」

その顔は、ミカヅキにとつてごくありふれた表情だった。幼少の頃から周囲に溢れていた顔。追い詰められて余裕をなくした者の浮かべるそれは、大抵数日のうちに浮かべた者を物言わぬ軀へと変える合図だった。無論ここは火星のスラムとは違う。襲ってくる破落戸もいなければ、あそこにいた連中よりもクーデリアは聡明で経済的にも余裕がある。けれどそんなものが何の保障にもならない事をミカヅキは良く知っていた。だから彼は一步踏み出す。

「あ、ミ、ミカヅキ!」

無重力区画であることを利用してミカヅキは少し飛ぶと、クーデリアの頭をその胸元へ抱きしめる。それが相手を安心させる方法だと彼は経験上知っていたからだ。

「大丈夫、大丈夫だから。クーデリアは上手くやれる。だから、大丈夫」

驚いて暴れかけたクーデリアはその言葉を聞くと大人しくなった。ミカヅキはゆつくりと頭を撫でながら言葉を続ける。

は微笑みながらクーデリアを抱きしめる。既に色々と根こそぎ奪われた彼女はされるがままにそれを受け入れた。更にもう一度頭を撫でながら、ミカヅキはクーデリアへ向かって優しく話しかける。

「良かった、不安になったらいつでも言つてよ。俺、これくらいしか出来ないけど、頑張るから」

「ひゃい…」

後日、顔を赤くしながらミカヅキの後ろを彼の上着の裾を掴まみながら付いて回るクーデリアがイサリビのあらゆる場所で目撃されることとなり、男性社員を戦慄させる事になる。

「倫理観については、もう世界次第だから」

オルガから相談を受けた某社長相談役がそう言つて目を逸らすに至り、この問題は放置される事が決定。どうやらミカヅキは火星に戻っても更なる戦いの渦中に居続ける事になりそうである。

3.4. 過程が同じでも目指す先が同じとは限らない

「何でチョココの人がここに居るの?」

片腕でバースタイン嬢を庇いながら、ミカツキが拳銃を油断なく構える。その言葉に反応したのはオルガの横に居たビスケットだった。

「チョココ? ああっ! ギャ、ギャラルホルンのマクギリス・ファリド!」

「ふむ、こうも簡単にばれてしまうとは」

そう言つてモニターと名乗った男はマスクを外す。おや、金髪碧眼のイケメンじゃねえか。これで家柄も良いとかちよつと神様与え過ぎてませんか?

「単身で乗り込んでくるとはいい度胸だな?」

そう顔を顰めるオルガに対し、男は笑顔で応じる。

「今日はギャラルホルンのマクギリス・ファリドではなく、モニタークとして来たからね。尤も、正体が露見しても無事に帰ることが出来ると確信しているが」

俺に向かって視線を送りながらそんな事を言うモニター改めマクギリス氏。俺は厄介な事になりそうだと思いつつ、取り敢えず口を開く。

「立っているのも何だし、食堂へ行かないかね? 丁度昼だしね」

彼の船がこちらへ接近してきたのは、月のデブリ帯に隠れて1日が経過した頃だ。幸か不幸かこの辺りも厄祭戦の影響が残っていて艦を隠せていたから、見つかった時は肝が冷えた。因みにこんな所で何故隠れていたかと言えば、実に単純な話だった。

「アーブラウの宇宙港がギャラルホルンによって監視されている以上、艦を迂闊に向かわせる訳にはいかな」

「かと言つて持つて来ているシャトルは低軌道用のものです。最低でも静止軌道付近までは接近しないと」

「なあ、指定してきた合流ポイント、おかしくねえか? 俺達はアーブラウの代表に会いに来てるんだろ?」

「シャトルじゃMSは載せられて2機、それも丸腰だ。何かあった時

には心許ねえな」

そんな訳で地球に降りる手段が封じられ、侃々諤々と話し合いをしているさなかに商談を持ってきたと接近してきたのがマクギリス氏の船だった。

「持ってきた商品は単純です。貴方方を地球に降ろすための降下艇。それをこちらで用意できます」

そりゃ天下のギャラルホルン様なら楽勝だろうね。

「それは素晴らしい。でもどうせならあの宇宙港を監視しているギャラルホルンを退かしてくれた方が助かるのだが？」

「それは無理な相談だ。ギャラルホルンとしての私は君たちを捕縛しなければならぬ立場だし、そもそもあの艦隊への指揮権を持っていない。だからそちらに協力できるのはモンタークとしての私だ」

公私は分けるタイプにも程があるな。

「信用できる要素が見当たらねえな。そもそもアンタが個人的にでも俺達に協力する理由はなんだ？」

「クーデリア・藍那・バースタインの革命を支援したい。では通じないかな？」

「そう言って近づいてきた者に私は家族を奪われかけました。よくご存じかと思いますが？」

バースタイン嬢が睨むが、彼は笑ってそれをいなしで見せた。さて、どんなもんかね？正直俺達を見逃すどころか手助けなどしても彼にメリットがあるとは思えない。可能性としては降下艇に細工をして、バースタイン嬢の身柄を確保するとかだろうか。それにしてもこんな回りくどい事をせずに、あの艦隊に連絡するなりなんなりで解決できる。彼の本心が解らない。

「では火星でのハーフメタル利権ではどうだろうか？」

「それこそ面白くない冗談というやつだ。手に入るか解らない利権の為に危ない橋を渡る？そんな事をするくらいなら、私達を捕縛する方がよっぽど君にとって利益になるだろう。本心を語れないと言うならば交渉の余地はない、お引き取り願おう」

「だそうだが、社長殿の考えは如何かな？」

「俺は全部が全部話せるとは思わねえ。仲間にとって隠し事の二つはあるもんだ」

オルガの言葉にマクギリスは笑みを深める。だがオルガの言葉には続きがあった。

「だけど、アンタの話はアンタにとってでかいリスクを孕んだ話だ。つまり見合うだけのリターンが無いのに話を持ってくるはずがねえ、商人なら猶更な」

「その人物は、損だと解っていてヒューマンデブリを解放したようだが？」

「それは、私のしたかったことがそれだからだよ。君の場合、そのしたい事が不明瞭なのにリスクを受け入れて支援すると言う。警戒されて然るべきだろう」

不敵な笑みを浮かべながらそうこちらへ水を向けるマクギリスに鼻を鳴らしながら応じてやる。すると何故かより深い笑みになった彼は口を開いた。

「では私の目的が明らかで、かつリスクに見合うものであれば納得する？」

「そらそうだろうよ。別に俺達は好き嫌いで判断してるわけじゃないからな。オルガが頷くと彼は楽しそうに口を開いた。

「現在蒔苗氏はオセアニア連邦へ亡命している。贈収賄疑惑で代表を退いた上でね。そして代わりに代表になろうとしているのがアンリ・フリユウと言う人物だが、彼女はファリド家と強いつながりを持っていてね。はつきり言ってしまうえば、ファリド家は彼女を通してアーブラウに干渉出来る立場を構築し、自身の地位を固めようとしているんだが」

「おい、待てよ。ファリドってのはアンタの家だろう」

「その通り、公正な番人の最高機関たるセブンスターズの一家がそのような不義を働こうとしている訳だ」

「それを止めたいってことですか？」

「違うな。これを公にすることで、イズナリオ・ファリドを失脚させ、私がファリド家を掌握したい」

「意味が解んねえ。そのイズナリオってのはアンタの親父だろう？それを失脚させて家を掌握？そんな事しなくたってほつときやあアンタの手に転がり込んで来るだろう。それもその固まった地位とやらのオマケつきで」

オルガがそう問えば、彼は真剣な表情で答えた。

「私はこれでもギャラルホルンの正義を信じている口でね。腐敗した組織を正したいと考えている。そんな私にとって不正な癒着によって固まった地位などむしろ足手まといだ」

「組織を正すにも力が必要。その為に家督がいるが、それが汚れていては不都合と。成程、筋は通っている」

「どうだろうか、ギャラルホルンの改革は貴方達にとっても有益だと考えるが」

何故か俺を見ながらそうマクギリス氏は問うてくる。なんだよ、俺そっちの趣味はねえぞ。

「確かに。そしてそこまで話させた以上、ここで乗らねばあまり楽しい明日は来そうにないな？」

「協力頂けると判断してよいか？」

いや、そいつはまだだね。

「いや、まだだ。まず君がファリド家当主になったなら我々への容疑が解かれる確約がない」

そもそもMSの違法所持は擁護のしようがないしな。

「その点については既にコーラルの不正から解除の流れが出来ている。もう一つ、君たちが犯しているMSの不正所持に関しても考えがある」

「なんだと？」

「現在のギャラルホルンが中立性を維持できていないのは、ギャラルホルンのみが軍事力を保有しそれを背景に各経済圏を恫喝できてしまうからだ。故にMSの保有並びに軍組織に関する制限を緩和する」

「成程、上手い手だ」

「でもそんなことをしたら、紛争が激化するのでは？」

懸念を示すバーンスタイン嬢に俺が笑いながら答える。

「解除してもMSという最大戦力の根源であるエイハブリアクターはギヤラルホルンの独占状態、今と大して変わらない。むしろ各経済圏が正式に武装化出来る分、小競り合いは減るだろうな。そして大規模な紛争になればそれこそギヤラルホルンが調停に乗り出せる」

ならばもう一つ。

「成程、確かに実行できるなら我々は晴れて自由の身だな。だが、ギヤラルホルンはセブンスターズの合議制だろう？君に賛同する家はどれだけある？」

「そちらも解決の手段はある」

成程、成程ね。

「マクギリス・ファリド。悪い事は言わん、それは止めておけ」

「何故かな？」

俺がそう言うのとマクギリス氏は一瞬目を見開いた後、即座にいつもの表情に戻る。他の連中も俺の言葉の意味が解らないのかこちらを見ている。そんなに難しい事じゃねえと思うけどね。

「君は先ほど、私が賛同する家があるのかと言う問いに解決の手段があると言ったな？つまりそれは現在賛同する家は無く、そして何らかの方法でそれを覆すという意味だ」

「単純に説得をするとは考えないのかな？」

「それなら最初から説得出来そうな家を挙げればいい。そうしなかったし嘘を吐かない事は評価するが、そこから導ける答えは簡単だ。他の家を潰すか、ファリド家に取り込むつもりだろう？それも自身に権限が集まるようにだとすれば、当主の座を奪う形で」

セブンスターズの力関係は把握できていないが、合議制ならば4議席分の権力を集めれば好き放題出来るという事だ。ファリド家を掌握したなら残り3家何処かを潰して乗っ取れば完了だ。けど絶対上手くないぞ。

「父親を失脚させて家督を篡奪した人間が他の家の権力にまで手を伸ばしてみる。一つ二つは落とせるかもしれないが、残りは必ず団結してお前を潰しにかかる、絶対だ。だから貴様の案は成功しないと断言できる」

「私には不可能だと?」

「貴様の語る内容には大義がある。にもかかわらず賛同者を増やせないという事は、貴様は組織を作ることが出来ない人間だという事だ。たとえ貴様が卓越した人間であっても一個人で組織に勝利する事は不可能だ」

「……」

「そもそも貴様はギャラルホルンを正常な組織に戻したいと言っていたな? 一個人の価値観や判断で意思が決定される組織が正常な組織だと本気で考えているのか?」

「ならば、どうしろと?」

「は? 簡単じゃねえか。」

「仲間をつくれよ、マクギリス・フアリド。一人では事を成せないと考えたから、私達に声を掛けたのだろう? 同じことをギャラルホルンでもやってみせろ」

それが出来ないと言うのなら、お前は俺達を利用して権力を得たいだけの他の連中と変わらない。そしてそんな連中に遠慮をしてやるほど俺は大人しい人間じゃない。

「…降下艇は用意させて貰う。後の事は少し、時間が欲しい」

「良い返事が聞けるのを期待しているよ」

そう言つて立ち上がる彼を、シノとダンテが送る。それを腕を組みながら見送り、完全に気配が消えた所で、俺はオルガに向けて頭を下げた。

「ごめん、社長。勝手に決めちゃった」

「いや、今更そこですか!」

何言つてんだ、大事な事だろう。

「社の命運を分ける判断だぞ? 勝手に決めて良い訳がないだろう」

「おっちゃんて変なところに拘るよね。俺達おっちゃんの指示なら従うのに」

「馬鹿を言うなミカツキ。私がさっき言ったことを忘れたのか? 一個人が組織の全てを決定するなど正気の沙汰ではない」

「あおう、結局どうなるのでしょうか?」

さて、そいつは彼の判断次第だね。

「先ず降下艇は手に入ったんだ。取敢えず蒔苗氏とやらにあいさつに行こう。そこから先は高度な柔軟性を維持しつつ臨機応変に、だな」
「つまり行き当たりばったりってことですね？」

ビスケットが俺を見て溜息を吐く。まあ、そうとも言うね。

「今までだって何とかなったんだ。これからだって何とかするさ。幸い、荒っぽい事は得意だしな」

オルガがそう言って笑い、他の連中もつられて笑う。そうだな、笑って前を向いてりや、大体何とかなるもんだ。俺は手をはたき、そしていつも通りに口を動かす。

「宜しい。では諸君、仕事の時間だ」

35. 不変の価値観の中で生きる者は幸福であるが愚かである

『うわ、すっげえ数』

『あれを維持するの、相当掛かるよね。飾りにそんなお金が出せるなんて、羨ましさを超えて呆れちゃうよ』

コックピットに響くエンジンとビスキットの声に俺はつい笑ってしまう。あの大艦隊を見てビビるより先に維持費に目が行くとはね。ちよつと鍛え過ぎたかもしれん。

『配置に就きました、いつでも行けます』

うん、じゃあ始めようか。

「呐喊」

俺の号令を合図に、イサリビとカガリビの二隻から出撃したMSが正面の艦隊へ向けて突撃する。相手は情報通り練度が低いらしく、まだ満足にMSを展開すらしていない。

『まじか、本当に潜り込めちまった』

呆れた声で呟いたのはダンテだ。まあ陣形からしてコンバットボックスすらとってなかったからな、尤もこれは彼らの技量不足というよりは、考え方の違いだろう。MSより大出力のエイハブリアクターで稼働している艦艇は当然のように装甲も分厚く、ナノラミネートの性能も上だ。どこぞの宇宙世紀のようにMSごときが保有する携行火器ごときであっさり沈められる兵器ではないのである。だから艦艇に対応するのは当然艦艇という考えが浸透しており、MSに対する防空やそれに付随する陣形などは殆ど研究されていない。そもそも彼らが主力としている艦艇なんて艦底方向に碌な武装がないという、いったいお前は何処でこれを使うつもりだったのかと聞きたくなる設計だ。連邦軍のあの馬鹿みたいな防空網に比べたらザルも良い所である。

「あまり壊し過ぎるなよ！後で損害請求されてはたまらん」

『了解！』

俺の注意に笑い声と共に応じるMSパイロット達。俺達はそのまま艦隊の後方を占位すると推進器へ向けて手持ちの火器を放った。

「どうした!?!」

艦を襲う振動にカルタが叫ぶ。即座にオペレーターが動揺しながらも答えた。

「で、敵MSの攻撃です! 奴ら推進器を狙っています!」

ナノラミネートは熱で損耗してしまつたため、どうしても推進器周辺は劣化が激しくなる。特にノズルそのものなどは顕著であり、艦にとって唯一の泣き所とも言えた。尤も艦対艦戦闘において敵艦に後方を取られるなどという事態はまず発生しない事から大きな問題とは見なされていない。そもそも艦隊同士の戦いの前にMSを突入させるなどと言う戦術自体が異常なのだ。艦艇を沈められるのは艦艇のみという思考からすれば、友軍機が敵の周りを飛び回っているのは誤射の可能性から砲戦に躊躇いが生まれるからだ。彼らの常識で言えば、MSと言うのは艦隊決戦後の損傷艦艇へ白兵戦を仕掛ける友軍の護衛か、そもそも装甲化されていないエイハブリアクター未搭載艦への襲撃に用いられる存在だった。

「すぐMSを出撃させろ! 艦隊は位置を維持し敵艦を牽制! 私も出撃する! 戦の道理も弁えぬネズミ共め!」

カルタはそう吐き捨てMSデッキへと向かう。その間も艦を揺れが襲っていたが、彼女がMSに乗り込んだ辺りで、敵の攻撃が急に減った。外部に繋がるモニターを確認すると、そこにはスレイプニル——ボードウィン家専用のハーブビーク級戦艦だ——から出撃したMSが敵と交戦しているところだった。

「ガエリオ坊やか? 全機急げ! 監査部などに後れをとるな!」

『はっ! カルタ様!』

カルタの発破に応じてグレイズリッターが次々と出撃する。それらは宇宙空間であるにもかかわらず一糸乱れぬ編隊を組むと艦上に姿を現したカルタ機の後方に整列する。

「我ら、地球外縁軌道統制統合艦隊！鋒矢の陣!!」

『『一点突破!!』』

カルタ機を中心に雁行陣を敷いたグレイズリッターが最寄の敵機へと肉薄する。

『うおっ!?!』

大量の敵機に急接近されたランドマン・ロデイが驚きの声を上げるが、即座に上昇して回避する。ついでとばかりに手にしていたトリモチグレネードを投げつけ、陣形の右端を担っていた機体を行動不能にする。

『な、なんだこれは!?!』

「くっ、小癩な！各機2機連携！数はこちらが多い！踏みつぶせ！」

『『はっ!』』

集団での襲撃は効果が薄いと判断したカルタは即座に隊を分ける。しかし数で圧倒しているにもかかわらず、敵機は一向に減る気配を見せない。それどころか友軍機の損傷は増え、あまつさえMSを掻い潜り艦への攻撃を再開する機体までいる始末だ。

「ネズミ共があ！」

激高し益々攻撃の手を強めるカルタは敵機が少ない事にも、敵艦が不自然に距離を取り続けている事にも気づかなかった。

「今日はガンダムはお休みか!?!」

『金持ちの貴様等とは違ってね。いつでも全員で掛かるような贅沢は出来んのだよ』

振るったスピアはグレイズの手にした刀にいなされる。出会った時とそのままの濃緑色のグレイズからは相変わらず人を喰ったような物言いが返ってきた。

「せっかく切り札を用意してやったと言うのに甲斐のない事だ！」

『ガンダムにはガンダムをかね？機体性能を埋める程度で倒せるほど彼らは甘くないぞ』

「ならばまず貴様を倒して腕試しをさせてもらおう！」

『宜しい、MS同士の白兵戦とはどういうものか教育してやろう』

ガンダムキマリス、ボードウィン家の所有するガンダムフレーム機は受け継がれてきた戦法と合致した突撃仕様の機体だ。機体以上の長さを誇るランスによる突撃は戦艦の装甲すら穿つ事が出来る威力を誇る。

『当たらなければどうと言う事はない』

繰り返す突進をそう評し、グレイズはまたも容易に躲してみせる。

『選択を誤ったな。機体の膂力は上がっているようだが肝心の加速性は以前のままでし旋回性は低下している。その戦法に固執するならば以前の機体の方がマシだな』

相手の言う通りであった。シュヴァルベグレイズに比べ機体重量が増加しているため、キマリスのランスチャージは打撃力と言う面は向上しているものの、扱いやすさと言う面ではむしろ低下していると言えた。

「その油断が!」

5度目の突撃、同じ様に回避したグレイズに向かってランスを強引に振るう。愚直な突進はこの一撃の為の布石だったのだ。しかし相手はあっさりとそれすらも超えて見せる。

『戦場で油断する馬鹿がいるか』

突進による加速が加わらなければランスは大した威力を発揮しない。正確に合わせられた刀によって勢いを殺された上に、強引にベクトルを変えたことで失速した機体の眼前に球状の爆弾が放られる。

「しまっ!?!」

破裂すると共に広がったそれはキマリスの上半身を包み込むと即座に硬化する。

『ボードウィン特務三佐!!』

アイン・ダルトンがその様子に気づき叫び声を上げるが、彼も相手取ったロディ・フレームの敵機に手一杯で、こちらに助力する余裕は無い。

(いや、この場合都合と言うべきか)

「一度引く!アイン、援護を頼む!!」

『くっ、承知しました!』

「すまん!」

そう言つて二人は戦域から離脱を図る。その二人に対し敵機は追撃する素振りすら見せず別機体へと向かつていく。その行動を確信していたとは言え、堂々と見せつけられると、ガエリオは怒りより自らに対する笑いが先に来る。

(相変わらずの余裕。いや、アレは俺達への問いかけか)

ギャラルホルンは正義を司る組織だ。だがその正義とは、現在構築されている社会秩序を守ると言うだけのものでしかなく、その外に位置づけられた人々には無価値な存在である。

(いや、無価値なだけならば、彼等も遠慮はするまい)

価値がなく、必要なければ滅ぼしてしまつて構わないのだ。そうしないという事は、彼等はギャラルホルンに一定の価値を認めつつ、その在り方を問うているとみるべきだろう。そしてその行動は間違いなく大きな波紋に繋がるとガエリオは確信していた。何故なら腐敗が進んだが故に、今のギャラルホルンに疑問を持つ者の多さも彼は実感していたからだ。

「さて、どうするか」

『ボードウィン特務三佐?』

こちらの呟きに反応したアイン・ダルトンの声に、ガエリオはまだ自分が戦場に居たことを思い出し苦笑した。どうやら自分は、完全に彼等を信頼してしまつていゝらしい。

「いや、キマリスの再出撃には少々時間が掛かりそうだと思つただけだ」

母艦へと帰還した彼等に鉄華団の降下艇を取り逃がしたとの連絡が入るのは、再出撃の準備が整つた直後だった。

「小賢しい真似を!すぐに降下装備の準備を!それから地上部隊に連絡!降下位置が特定出来次第急行出来るよう準備させなさい!」

「り、了解しました!」

「イシュー一佐」

「何!？」

「その、ボードウィン特務三佐より通信が」

「今更何の用なの!あの役立たず!」

苛立ちながらもカルタは通信に応じる。

『イシュー一佐、力及ばず申し訳無い』

「殊勝な物言いが出来るようになったようね?それで何の用かしら?」

カルタはそう嫌味を口にするが、ガエリオは真剣な表情を崩さぬまま頭を下げてきた。

『恥を重ねる事を承知でお願いする。どうか追撃に我々も加えて頂きたい』

「幾ら我々に降下権限があるとは言え、経済圏の領域に投入出来る戦力には制限がつく。それを知った上での申し出かしら?」

『ああ、そうだ。頼む。逃亡した連中の装甲艦の搜索を考えれば、手は多い方が良いはずだ』

「駄目よ。公域である軌道上ならばまだしも、経済圏内での作戦に監査局の貴方達が参加するのは事が大きくなりすぎる」

一瞬だけ迷うが、それでもカルタはそう拒絶した。先の戦闘から、カルタは敵の脅威の本質が極めて高い連携であると考えていた。ならば多少の個人の技量差よりも日頃の連携を重視すべきであるし、MS部隊は多少の負傷者は出たが、出撃が困難な者は居ない現状ならばそちらを優先するのが道理だ。同時に彼に語った言葉も本心である。経済圏での作戦行動に監査局の部隊が同行するなどとなれば、同行された部隊に何かやましいことがあるのではないかとあらぬ疑いを持たれることになりかねない。ただでさえ独自の降下権限によって経済圏から厳しい目を向けられている以上、余計なリスクは抱え込むべきでは無いとカルタは判断した。

『…そうか、連中は地上での戦闘経験も豊富だ。注意してくれ』
「言われずとも解っているわ」

一方的に通信を切り、カルタは地球を睨み付ける。

「火星の鼠め、身の程を弁えさせてあげるわ」

36. 交渉が巧みな者とは、相手の思考を誘導するの
に長けた者である

「ふむ、お前さん達が鉄華団、でよいのかの?」

降下艇から物資を降ろしている最中、それを指揮していたオルガに
そう話し掛けてきた人物は禿頭の老人だった。視線をそちらに送っ
たオルガは一瞬目を見開くと、素早く頭を下げた。

「はい、お初にお目にかかります。蒔苗先生」

その態度に声をかけた蒔苗は残念そうな声を出す。

「なんじやい、ワシの顔を知っておったのか。折角驚かせてやろうと
したのにの」

「重要な相手の顔はちゃんと覚えろと教えられていました」

「成程の。若い連中にしては上手く立ち回るものだと思っと思ったが、
そう言うからくりか。着いてすぐに悪いが、少々話したい事がある。
いいかの?」

「はい、直に向かいます。チャド、悪いがクーデリアさんとメリビット
さんと呼んできてくれないか?それからこの後を頼む」

「了解」

その様子を見ていた蒔苗が呟く。

「ふうむ。良く訓練されておる。まるで軍隊じやの?」

「え?」

「いや、何でもない。では待っておるぞい」

そう言つて歩き去る蒔苗の背をオルガは見送る。彼の元にクーデ
リアとメリビットが来たのは、その背が完全に見えなくなつてから
だった。

「よう来た。だが少しばかり遅かったのう」

「遅れましたことは謝罪致します」

髭を扱きながらそう暢気な口調で話す蒔苗に対して、クーデリアは

視線を逸らすこと無く応じる。既に交渉という戦場に自らが居ることを自覚したからだ。

「あの、蒔苗先生。遅かったと言うのは？それに、何故オセアニア連邦に？」

クーデリアの隣に座ったメリビットが、予定通りに困惑した声音でそう問いかける。

「ああ、そっちは移動中で解らんかったか。ワシは今贈賄疑惑で失脚、オセアニア連邦に亡命中なんじゃよ」

「それはっ!？」

声を上げかけるメリビットを手で制し、クーデリアが問いかける。

「先生も容易ならざるご状況である事は理解致しました。一つお伺いしても？」

「なになかな？」

「今回の地球訪問の目的は、先生との会談を通してアブラウとの火星ハーフメタル資源の規制解除をお願いすることです——」

「おお、覚えているとも。ワシとしても実現したいと常々考えている事だったからの」

そう頷く蒔苗にクーデリアは笑顔で告げる。

「ですが今のご様子ですと実現は難しく思われるのですが？」

「うむ、今は無理だな」

「今は、ですか。では、いつなら？」

「三週間後にエドモントンで開かれる全体会議、そこで代表の指名選挙がある。そこに行けばワシは再び代表に返り咲ける」

「つまり三週間以内に先生をエドモントンへお連れする必要があると言うわけですね？」

沈黙を保っていたオルガがそう口を開く。対して蒔苗は一度片目を開くと愉快そうに彼へ問い返す。

「疑わんのかね？」

「先生に再選の可能性がなければ、こんな所にいないでしょう？」

そう言つてオルガは笑い返す。それは降下前に話し合った際に出した結論だった。一経済圏の代表が公式な会談を他の経済圏で行う

のは不自然である。ならば彼は何らかの理由で亡命中である可能性が高い。そして最後のピースであった理由が事前情報と一致した事で、クーデリア達の次の行動は決まった。故に笑顔のままクーデリアはオルガの言葉に続く。

「たかが贈賄疑惑程度で亡命しなければならない。即ちそれは対立候補に命を狙われているから。つまり対立候補から、物理的に排除しなければ自身が代表になれないと認識されているという事に他なりません」

「ほう？」

「ですから先生をエドモントンへお連れする事自体に問題はありません。尤も、全く無償というわけにはいきませんが」

「酷いのう、こんな老いぼれからまだ峯るつもりかね？」

「ええ、ですから遅参の分はサービスさせて頂きます。如何でしょう？」

「承知した。再選の暁には鉄華団に相応の謝礼を用意する。何なら証文を認めるかね？」

「問題ありません。我々は先生を信じておりますので」

「やれやれ、小娘とそれに乗せられた跳ねっ返り共と聞いておつたのに、中々どうして」

「宜しかったのですか？彼の様な約束を」

「可愛いものじゃないか。あの時助けてやったと延々集る気はないと言つとるんじやよ、大人の付き合い方を心得ておる」

そう言つて蒔苗は髭を弄る。

「ハーフメタル利権の為にはワシをエドモントンへ送らねばならぬ。底の浅い連中ならば目先の利益のためにタダでワシを連れていっただろうが、あやつらははっきりと手間賃を取る上に、ワシに願われて連れて行くという体裁を整えおつた。それもこちらが許容出来る線の内でな」

目を細めつつ、更に蒔苗は思考する。

(しかもギャラルホルンと一戦交えた上での事、それでもあの自信。いや、あの練度ならばあながち過信とは言えないな)

アープラウ代表という立場にあった蒔苗はギャラルホルンの式典に参加することも少なくなかった。そんな彼から見ても鉄華団を名乗る子供達の動きは、極めて統制された集団だったのだ。

(毒をもって毒を制す。とは言うものの、これは少々刺激が強すぎる) 多少賢い猛犬ならば飼い慣らすという選択肢も存在しただろう。しかしあれは狼の群れ、それも飛切り悪辣な頭に率いられた連中だ。体よく使おうなどとすればこちらを躊躇いなく食い殺し、その皮を使って化ける位のことではしかねない。

「ま、良い商い相手くらいが丁度良からうて」

そう言つて蒔苗は好々爺然として笑うのだった。

「カルタは軌道上での迎撃に失敗したか。まあ彼等相手では難しいだろうな」

直属の部下には技量に優れた者も何名かいるが、それでもガンダムフレームを抑え込めるような水準ではないし、自信の抛り所としている連携は対MS戦闘を想定したもので無いのだから話にならない。

(出自に拘らず、技量を鑑みての抜擢。問題は彼女の忠誠心の向かっている先か)

彼の当初の予定ではカルタ・イシユーは死ぬ筈だった。現当主は病床にあり代行しているカルタは若輩の身、ファリド家の後見を受けてお飾りの艦隊を預かっていると言うのが現状だ。ギャラルホルン内の権力掌握を目論んでいたマクギリスからすれば、排除しても家間の力関係に大きな影響を与えず、ファリド家が後見していたという実績から勢力を取り込みやすい、手頃な相手であったのだ。しかし計画の修正を余儀なくされた彼に、彼女を排除するという選択肢は残されていない。

「現状家の誇を守ることに注力しているだけに、義理堅さと生真面目さが悪い方向へ向かっているか」

現当主が倒れ、急遽カルタが代行となった際に真つ先に後見人に名乗りを上げたのがイズナリオ・ファリド、現ファリド家当主だ。閑職とは言えセブンスターズの体面を保てる役職に彼女を推したのもイズナリオであり、カルタが並々ならぬ感謝の念を抱いているのは想像に難くない。何しろ彼女はイシュー家の現当主と同じく高潔であるのと引き換えに政治的バランス感覚を持たない人間だからだ。

(他家への影響力を確保するためだけに後見されているなど、考えもしていないのだろうか)

そんな彼の脳裏に、幼少の頃の記憶が甦る。何かにつけては彼を連れ回したカルタ。ファリド家の嫡男とは言え、妾の子であると公表されていたマクギリスは当然のように好奇や蔑みの視線の中で生きていた。その中で他へ向ける視線と変わらぬ目で彼を見ていたのはカルタとガエリオだけで――。

(違う、俺は俺の目的を果たすために奴らを利用するのだ)

変わり始める思考を、頭を振って強引にマクギリスは修正する。

(そうだ、鉄華団という有効な駒を利用するために利用方法を変えるだけに過ぎない)

「失礼します、モンターク様。クーデリア・藍那・バースタインからメッセージが届いています」

「ああ、有り難う。ほう？」

メッセージの内容を見て、マクギリスは口角を上げる。

「鉄華団は、進む事を止めないか」

そう呟いた瞬間、ブリッジに警報音が鳴り響き、オペレーターが緊張した声を上げる。

「エイハブウェーブの接近を感知、これはMSです！数1！」

マクギリスが有効な指示を出すよりも早く船体が揺れ、接触回線が開く。送りつけられてきた文章は巫山戯たもので、もしマクギリスでなければ激昂していた事だろう。

「失礼、モンターク商会の船と見受けるが、相違無いかね？ 鉄華団社長相談役」

37. 何をもつて仲間とするかは個人の主観による

「間違っていたらどうしようかと思ったよ、如何せん似たような船はそこそこ見るのでね」

笑顔で迎えてくれたマクギリス君にそう言つて俺も笑顔で握手する。残念ながら彼はモニターク中なので仮面で表情の半分は見えないが、まあ口元が笑っているなら笑顔でいいだろう。

「今まで色々なお客様を相手にしてきましたが、MSで乗り込まれたのは初めてです」

「それは随分と真つ当な商いをしてきたのだね。私なんて結婚式にMSが乱入してきたよ」

それも複数。あの時は流石に死を覚悟したわ、かみさんが何故かMS用意してて迎撃したから事なきを得たけど。

「おや、ゴ結婚なされていたのですか？」

「昔のことさ、面白い話でもないよ」

だからそんなに興味深そうにこつち見るな、目元のシャッターも開けなくていい。

「そうですか、それで本日はどの様なゴ用件でしょう？」

うん、ちよつとね。

「MSを単独で降下させる装備などは扱っていないかと思つてね。まあ無ければ適当なシャトルの残骸でも良いんだが」

「…失礼ですが、今、何と？」

え、だからあ。

「大気圏にMSで単独突入出来る装備が欲しい。無ければシャトルの残骸、可能な限り底面の状態が良いものがないな」

俺がもう一度繰り返すと、彼は顔と腹に手を当てて肩を震わせ始めた。

「今まで様々な商いをしてまいりましたが、その様な注文を受けたのは初めてです。用意出来なくはありませんが、性能は保証致しかねます。貴方がお使いのグレイズは本来そのように使う機体ではありませんので」

「問題ないよ、MSで無茶をするのは慣れている」

まあ、後で雪之丞にキレられる可能性はあるが仕方あるまいて。

「彼らに任せるのが不安ですか？」

んー。

「不安、と言えば不安だね。あの子達は真面目で責任感が強く、それでいて大抵の無茶を通せる實力もある。だから直ぐに無茶をするんだ、ちよつと無理をすれば大抵の事が出来てしまうからね。なかなか目を離せんよ」

そう返すとマクギリス君は笑顔を作る。

「成程、彼らを高く評価されているのですね。ご依頼の件ですが、この船にも在庫がございます。そのままお持ち帰りになりますか？」

「それは僥倖、ぜひそうさせてくれ。ああ、ラッピングは要らないよ、直ぐ使うのでね」

「承知しました。それで、本当の御用件はなんでしょう？」

おお、流石に鋭い。いや、まあバレバレか。この程度の事は通信でも十分対応できるもんな。態々船に乗り込んでまでする話じゃない。

「モニターではない方の君に用事なんだが」

「…暫しお待ちを」

そう言つて彼は艦内を歩き出す、しばらく無言での移動が続き、連れ込まれたのは執務室と思しき部屋だった。

「失礼、部下には同一人物と教えていない者もいるので」

仮面を脱ぎながらマクギリス君はそう話す。まあ人間秘密の一つや二つはあるもんだからね。俺だって皆に話してない事なんて幾らでもある。

「構わんさ。さてそれでは本題だ、例の件の進捗は如何かな？」

「芳しくない。ギャラルホルンの選民思想は若手にまで広がっている。それも全く無自覚な位に」

「君の御友人もそうだったね、ボードウィン家のガエリオ君だったかな？」

「あれでもまだマシンな部類だよ。彼らにとって人間とは即ちギャラルホルンに属している存在だけを指す。経済圏の人間ですら人と認識

出来ているか怪しい。なにせ彼らにとって民衆は守るべき弱き民草だからね」

中世の貴族かな？まあ、軍事力を独占してりやそうもなるか。宇宙世紀にも貴族馬鹿は居たしな。

「成程、では難しいかね？」

「困難ではあるが不可能ではない。ボードウィン家の人間は少なくとも善良だし現状を憂いだけの思考能力もある。もう一家、イシュー家の当主代理も人柄は真面だ。ついでに言えば単純な分思想の誘導は容易だ。問題は残る一家、クジャン家のイオク・クジャンは善良ではあるが、頭が悪い」

「……」

「残るエリオン家はファリド家と権力争いの真つ最中、バクラザン家とファルク家は風見鶏だ、交渉する価値があるかも怪しい」

「マクギリス・ファリド」

説明を続ける彼を俺は名を呼んで制する。

「…なんだろうか？」

うん、いや前から気になってはいたんだよね。でも今ので確信したわ。

「何故君は年上の男性にそれ程まで敵意を向けているのかな？」

「……」

「君が引き込む側として口にした相手は全て年が近い者達だ。賛同は得やすいだろうが組織内での影響力には疑問が残る。対して敵と認識している者たちは全て年上だ。偶然と言うには少々偏りが過ぎていると思うのだがね？」

加えて彼の言葉が正しいならば、懐柔が容易と言える相手でもある。イズナリオ・ファリドの失脚は最大の敵と認識しているエリオン家の追い風となるのだから、それを手土産に関係の改善を図ることは困難ではない。風見鶏と評した2家だって有利な方へ付くと言えるのだから、自分達が有利であると積極的な主張をするだけで味方になる可能性があるし、最悪でも中立を保たせることが出来る。少なくとも没交渉にはするべきではない。だが彼はそれらの家との関わり合

いを積極的に避けているように見受けられた。そして、何より気になつたのは俺を見る目だ。オルガやミカツキ達を見る目は何処か気を許しているような雰囲気があつたが、俺に対してのみ隠しきれない敵愾心みたいなものを感じたのだ。最初はオルガ達をいいように使っている俺への義憤かと思つていたのだが、その割には怒りの質が何と云うか嫌悪に近い気がするのだ。

「それを聞いて、貴方はどうするのかな？」

どうするって、そりやお前さん。

「どうもしないな」

「何？」

「仮に君が極めて私的な内容で憎んでいても、大きな志を持つて遠ざけているのだとしてもだ。君がそう決めてしまつて意思を私がどうこう出来るとは思えないし、するべきだとも思わない。何故ならその選択は君が君の人生において決定したものだ。それを横からしゃしゃり出て変えろなど余計な世話と言うものだ」

「彼らにはあれこれと口を出しているようだが？」

「アドバイスクらいはするさ、それが先に生まれた人間の特権だからね。間違つていると思えば忠告だつてする。まあだからこそ知りたいのさ、私には今の君の選択が正しい様には見えない。けれど君にとっては正しい選択なのだろう？その根底を知らぬままに言葉を幾ら重ねた所で、妥協点は探れない」

「妥協だと？」

「誰にだつて譲れない部分なんてものはあるものだ。そこを強引に抑えた協力関係など絶対に成功しない。そして、今の我々は弱い」

険しい表情のマクギリス君に構わず俺は続ける。

「弱い者が強い者に抗おうとするならば、数を束ねる他に方法はない。正に選り好みなどしている余裕は無いほどにね。だから、味方にできそうな相手とは出来る限り互いに納得できる協力関係を築きたいと考えている」

「私にとって、協力者を作ること自体が妥協できない点であるならどうするのかね？」

獯猛な笑みを浮かべるマクギリス君に俺は肩を竦めて応じる。

「それはもう協力関係になれないという答えしかないね。それはつまり君は私達も協力者と見ていないという事だろう？そういう相手に背を預けるほど私は博徒ではないよ」

「信用ならない相手の船に乗り込んで言う台詞ではないな」

そう口にするると彼は表情を緩め、とんでもない爆弾を放り投げてきた。

「私が彼らを嫌悪していると言う貴方の判断は正しい。何故なら私は年上の男性と言う存在に生理的嫌悪感を抱いているからね」

「それはまた、随分と広く嫌ったものだな？」

「私はイズナリオ・フアリドの妾の子という事になっているが、実は養子でね」

「君程優秀なら御父上の気持ちも解らなくてはな——」

「彼の稚児趣味で集められた者の中で、偶々優秀だった私が選ばれた。養子となった後も随分彼の趣味には付き合わされたよ」

とんでもねえ事さらつと暴露すんなや！脳の処理が追い付かんわ！

「…それは」

「奴は中々いい趣味をしていてね、養子になる前は品評会に出された事もある。随分と同好の者が居るものだと子供心に驚いたよ。どうしたのかな？話せと言ったのは貴方だったと記憶しているが？」

悪かった、悪かったよ。

「成程、だから男性、それも年上には生理的嫌悪感か」

そいつは如何ともし難いね。

「どうするね？はつきりと言えば、貴方と二人きりの空間に居るだけで吐き気を感じる私に彼らとの交渉を求めるかね？」

その言葉に俺は頭を振る。

「いや、必要ない。その代わりにボードウィン家とイシュー家を確実に確保する方がいいだろう」

「いいのかな？貴方達への嫌疑解除が失敗するかもしれないぞ？」

かもね。

「私達の利益を追求するならばそうだろうな。けれど私は我儘でね」
「我儘？」

「君を犠牲にして他の連中が助かっても、私はちっとも嬉しくない。だから君も助かる道があるなら、そちらを選ぶさ」

「驚いたな、私の為に仲間を危険に晒すと言うのかね？」

は？・何言ってるんだ？

「協力するとなった時点で、君はもう仲間だろう？仲間が犠牲にならないようにするのは当然の事だ」

我ながら随分と歪んだ思考だと思う。けれどこのくらい手を広げないで、どうやって皆で笑える世界など創れると言うのか。欲を掻くと決めたんだ。どこまでだって掻いてやる。

俺がそう言うと、マクギリス君は暫し呆然とこちらを見ていた。

38. 楽しめる食事は人生を豊かにする

「あの、すみません。蒔苗先生に言われまして、こちらを皆さんでと」
年若い男性がそう言いながら大きな鍋を地面に置いた。時刻は夕暮れ時に差し掛かっており、太平洋へ沈み行く太陽が、周囲を赤く染めている。

「え、ナニナニ?」

「失礼します」

ラフタが興味深そうに声を上げ、フミタンが中身を確認するべく近づいて蓋を開けた。次の瞬間鍋が揺れ、中に閉じ込められていたものが飛び跳ねた。

「きゃつ!」

「うわつ!」

「魚、か?」

皿のように扁平なそれは、地面に飛び出した後も懸命に体を跳ねさせ逃走を試みる。その様子を見たオルガがそう口にする、シノが微妙な顔になる。

「うえ、魚かあ」

「なんだ、アンタ達食べた事あるのかい?」

思わずといった様子で漏らすシノにアジーが意外なものを見る目で問いかけた。この時代、タンパク質を得る手段は専ら植物性のものやそれにアミノ酸を添加して動物性タンパク質に近づけたものを食べるのが一般的だ。特に火星や圏外圏といった地域では酪農が行われておらず、更に海も存在しない。代用品の方が安価で入手可能な事もあり、積極的にこれらを導入しようという動きも少ない。こうした地域では肉や魚は完全に財力を示すステータスであり、孤児である彼等だけでなく一般的な家庭であつても生涯口にしないことも珍しくないのだ。

「ええ、まあ色々。有り難うございます、先生にもお伝えください」
そうオルガが言葉を濁した後、若い秘書の男に向かって頭を下げる。

「え、ええ。では私はこれで…」

それに応じた秘書は、僅かに顔を歪ませながらそそくさと車を操り去って行く。

「なんだあ?」

「お前等の背中に付いてるもんが気持ち悪いってよ、地球じゃ阿頼耶識なんてやってる奴は居ねえからな。俺のコイツだってそうだ」

笑いながらそう教え、雪之丞は自らの足を振ってみせる。過去の事故で機械製の義肢になっている彼の足が、金属のすれる音を立てた。「全くもって度し難い愚かさだよねえ、自分がどれだけ機械に生かされてるかを理解もせず、少しばかり体に付いていると言うだけで気味悪がる。まるで原始人だよ」

「いや、流石にそこまで言えるのは先生だけだと思っぜ?」

蔑んだ目で車を追いながらそう毒を吐くフレデリックに対し、シノが苦笑しながら突っ込む。何しろフレデリックは阿頼耶識の研究が止められなかったという理由でギャラルホルンに追われる身になつた男だ。間違い無く一般的な感性からは逸脱しているだろう。

「まあいいじゃねえか。気味悪いって言っても石を投げてくるわけじゃねえ、誠意をもって付き合おうとしてくれんなら俺らからとやかに言う事はねえさ。それより折角の頂きもんだ。有難く食わせてもらおうぜ。アキヒロ、頼めるか?」

「ああ」

笑いながらオルガがシノとフレデリックの肩を叩きながらアキヒロへ話を振る。難し気な表情で魚を見ていたアキヒロは即座に承知の声を上げた。

「え!?!アキヒロ料理できんの!?!」

「魚だよ?大丈夫なのかい?」

驚きの声を上げるラフタとアジーに対し、表情を変えぬままアキヒロは頷く。

「魚は何度か調理したことがある」

その言葉に首を傾げたのはクーデリアだった。

「火星には魚なんて居ないですよね?」

「いえ、そうでもありません」

彼女の疑問にフミタンが答える。

「水資源の浄化用に一部の都市では淡水魚を使用した処理槽を導入しています。また富裕層が飼育している個体が逃げ出し繁殖しているものもおりますから、皆無と言う訳ではありません。尤も、どちらも食用に向いているとは口が裂けても言えませんが」

因みに浄化槽での役目を終えた個体は合成タンパク質に添加される必須アミノ酸の供給源になっていたりする。

「アレ匂いがすげえんだよなあ」

嫌そうな顔でそう口にするシノをアキヒロが睨む。

「大分ましなんだぞ。最初なんてひでえもんだった」

「と言うか何でそんなの食べてんのよ?」

「おつちゃんが魚居たら食うだろ普通って言って捕ってくるんだよね」

「そんでアキヒロは調理実習兼試食係。お陰でウチじゃ相談役に次いで魚料理が出来る。な?」

「へえー、じゃあ折角だからリクエストさせてよ!」

「いや、そんな大した事が出来る訳じゃあ…」

「大丈夫、アタシ等も手伝うからさ。そうだねえ、これならアクアパッツアかね?」

ラフタとアジー、更にはエーコに囲まれるアキヒロを胡乱な目で見ていたシノの肩を引き寄せると、オルガは耳元でささやいた。

「どうよシノ、やっぱ料理が出来た方がいいと思わねえか?」

「ここに居たのか、アイン」

「ボードウィン特務三佐」

地上戦用に調整を済まされた機体の前で佇むアイン・ダルトンに向かってガエリオは声を掛けつつキャットウォークから飛び降りた。ハーフビーク級戦艦の格納庫は整備性の観点から重力区画より離されている。ゆつくりと降下したがガエリオはアインの横に並び立ち、彼

へと譲ったシユヴァルベを見上げる。

「真面目なのは貴様の美点だが、あまり根を詰め過ぎるな。いざと言う時がいつ来るかもわからないのだからな」

「は、申し訳、ありません」

その返事にガエリオは言葉の選択を誤った事を自覚する。

「すまん、どうにも俺は人を使うのに慣れていなくてな」

「いえ、謝らなければならぬのは私の方です！ご厚意で引き立てて頂いたにもかかわらず、私は何の戦果も上げておりません！」

「大げさだ、そもそも実戦経験の豊富な士官を俺達も求めていたのだ。決してお前の為だけと言う訳じゃない」

「それでも私は両特務三佐に機会を与えて頂きました。あのまま火星に残っても、私は近くギャラルホルンを去る事になっていたでしょう」

そう確信をもって告げてくるアインにガエリオは眉を顰めて応じる。

「何故そうなる？確かに連中を取り逃しはしたが、それは火星支部全体での失態だろう。貴様が責任を負うような事は無いはずだ」

「普通の隊員であれば、そうでしょう。ですが私には火星の血が流れています。父がギャラルホルンの人間であつたため入隊こそできましたが、私はずっと薄汚い火星の血が流れる半端者として扱われてきました。克蘭ク二尉を除いて」

「……」

「蔑まれ、腐る私に隊員としての矜持と誇り、そして何より自分がここにあつて良いのだと思えるように克蘭ク二尉はしてくれました」

「貴様が克蘭ク・ゼントに拘る理由はそれか」

「私は克蘭ク二尉ほどギャラルホルンの正義を体現している方を知りません！あのような連中と共に居る事も、何か、何かあるはずなのです！私はその真実が知りたい！」

「それが貴様にとって、認めたくない真実であつてもか？」

「どういう意味でありましょう？」

ガエリオが真剣な表情でそう問うと、アインは瞳を揺らしながら聞

き返して来た。

「そのままの意味だ、アイン。今、貴様自身が口にしただろう？火星に生まれたと言うだけで不当な扱いを受けてきたと。それがギャラルホルンの標準的な考えである事を俺はよく知っている。何しろ俺自身がそうだったのだから」

「そんな！ボードウィン特務三佐は私を引き上げて下さったではないですか!？」

アインの悲鳴のような声に、ガエリオは顔を伏せながら答えた。

「それは貴様が既にギャラルホルンの人間だったからだ。もしお前がただの火星の住人だったなら、例えば助けを求められても以前の俺は無視しただろう」

これまでのガエリオの世界において、環境へ不平不満を口にする連中とは自助努力の足りていない墮落した者であつた。故に彼はギャラルホルン内の浄化には肯定的であつたし、同時にギャラルホルンへ刃向かう連中やそうした人間に踊らされた者達を悪、或いは愚か者と切り捨てていた。だがそれが余りにも狭い世界の傲慢な理屈であつたと彼は知る。

当たり前前に食事をし、大切な人々と語らい、働き、眠る。そんなガエリオの当たり前はこの世界にとつて全く当たり前では無いのだ。今日の食事にすら事欠き、大切な人や自分自身が何時理不尽にその命を奪われるか知れず、働ける場所も無く、明日の朝は迎えられるかと怯えながら瞳を閉じる。圧倒的多数の、そんな当たり前の中で生きる人々を踏みつけた先にある世界でガエリオは生きていたのだ。

「正義や悪などと言つた単純なものではない。生きるためには戦わねばならない人々も存在する」

顔を上げ、ガエリオはアインを見据えながら言葉を続ける。

「クランク・ゼント二尉が貴様の言う通りの人物なら。果たして彼はそんな人々を踏み躪つてまで、今のギャラルホルンの正義を貫くか？」

「それ、は」

喘ぐように口を開き返事に窮するアインに対し、ガエリオは肩を叩

きながら口を開く。

「俺達は一度ヴィーンゴールヴに戻る事になる。状況が許せば、彼と地上で再びまみえることになるだろう。その時どうするのか、貴様自身も答えを出しておけ」

39. 戦争のルールとは、強者が勝つために決めた不平等なものである

「彼等が来て5日か、もう少し持つかと思ったがのう」

手にした端末の画面を見ながら蒔苗・東護ノ介は眉を寄せながら髭を弄った。遂にギャラルホルンが鉄華団の位置を特定、オセアニア連邦に対して彼等の引き渡しを要求してきたのだ。蒔苗の口添えで通報こそ免れてはいたものの、鉄華団に対し何の義理もないオセアニア連邦にしてみれば、ギャラルホルンに渡せと要求されたなら否応無いのは当然の対応と言えた。

「如何なさいましょう?」

「如何もなにもなからう。連中を差し出せば、後は邪魔な儂等も殺されて終わりじゃよ。彼等の手腕を信じて任せる他あるまい。すぐに連絡せい」

「は、はいっ!」

慌てて部屋を出て行く若い秘書を見て、蒔苗は溜息を吐いた。経験を積ませるために連れてきた男だったが、それにしても能力が不足し過ぎていると感じたからだ。平素は頭も回り気の使える人間であるが、想定外の事に直面した際の対処能力が低すぎる。そもそもたかが背中に機械が生えている程度の事で、相手に露見する程感情を見せるなど政治家として落第も良いところだ。

「まあ、後50年もすれば多少は見られるようになるじやろう。生きておればの」

そう言つて彼は笑うと、湯飲みの中身を一息で飲み干した。

「思っていたよりも遅かったな」

地図を眺めながらアキヒロがそう呟くと、オルガが笑いながら応じた。

「ああ、もう2〜3日は早いかと思つていたんだが。まあおかげで十

分休めたんだし文句を言うのも筋違いか。チャド、モバイルワーカーの組み立て状況は？」

「持ち込んだ機体は全部終わってる、今雪之丞のおやつさんが最終点検をしてきているよ」

「よし、なら終わり次第輸送の準備に入るよう伝えてくれ」

「使わないの？」

「この島は碌な防御陣地もねえからな。艦砲射撃を喰らったらモバイルワーカーじゃひとたまりもねえ。MS相手にや火力不足だし、手加減に向いてねえからな」

ミカヅキの疑問にオルガが答える。

「連中が言葉通りにクーデリアさんの身柄を押さえるつもりなら、上陸部隊が来るはずだ。そっちの対応はガットに任せる。やれるな？歩兵部隊の指揮はサブードさんに任せる」

その言葉にガット・ゼオとサブード・カタンが黙って頷いた。

「今回の目的は島からの脱出、それから追撃部隊の戦力低下を狙う。具体的に言えばMS部隊の撃破と移動用艦艇の破壊だな」

「MSはともかく船の撃沈ってなると、殺さずって難しくねえ？」

シノがそう顔を顰めると、すかさずロッドが口を開いた。

「そうでもない。水上艦艇は自動化が進んでいて殆ど人が乗っておらん。艦橋や格納庫に直撃でもせんかぎり簡単には人死には出ん。更に言えばギャラルホルンの海上艦艇はナノラミネット処理がされていらないから砲戦でもダメージを与えられる。喫水線下に幾らか穴を開けてやれば行動不能に追い込めるだろう」

「なら、アキヒロとシノに船は任せる。どうせ近づいてこねえだろうからな」

そう指示をしながらオルガはガットとサブードへ再び視線を戻した。

「贅沢を言うなら連中の揚陸艇を確保したいが、まあこっちは努力目標だ、無理はしなくていい。歩兵同士の撃ち合いじゃあ阿頼耶識の支援も受けにくいからな」

その言葉に頷いて同意を示すサブードの通信器が音をたて、彼の視

線が僅かに動いた。

「社長、偵察班から連絡。B班が敵艦隊を目視したそうだ」

「数は？」

「空母と思われる艦影が3、それ以外は確認出来ていないそうだ」

「その距離まで近づいているとなれば、揚陸用舟艇も搭載している艦だ、射程も短いが主砲も備えている筈だから、恐らくその艦隊はそれで全てだろう。後は別働隊がいるかだな」

「引つかかりますかね？こんな単純な手に」

「正直引つかかって欲しくないのだがな、間違い無くかかるだろう」

ロツドは苦虫を噛み潰した顔でそう答えた。

「治安活動で出撃することはあっても、地上で大規模な軍事作戦を展開する機会は殆ど無い。ついでに言えば、策を練ってギャラルホルンと戦おうなどという勢力もな」

「そいつは有り難いですが、かえって怖いですね」

「怖い？」

顔を顰めたオルガに対し、ロツドが問い返す。それに対し、オルガは大真面目な表情で答えた。

「ええ、つまり相手はこんな手に引つかかるような馬鹿って事でしょう？馬鹿は次に何をしてくるか解らねえ、頭が良い敵よりずっと厄介だ」

「別働隊の移動は済んでいるのだな？」

目の前の島を睨みながら、コーリス・ステンジャは部下にもう一度確認した。未だ夜は明けておらず、太平洋上の孤島は静かに息を潜めている。

「はっ、艦隊の揚陸部隊を集結後、島の反対側へ移動させております」

「明朝、日の出を待つて艦砲射撃を実施、制圧射撃後にMS部隊を突入させる。フライトユニットのチェックは念入りにさせておけ、カルタ様の前で無様を晒すなよ」

「あの、隊長」

「なんだ？」

指示を出すコーリスに対し、気まずげな顔で指示を受けていた隊員が口を開いた。

「目標は我々に気付いていないように思われます。今ならば奇襲も可能ではないでしょうか？」

その提案に対し、コーリスは目を見開くと大声で叫んだ。

「馬鹿者！夜討ち朝駆けなどというのは卑怯者のやることだ！貴様はカルタ様の正道に泥を塗るつもりかっ!？」

「い、いえその様なつもりは」

「お前達も聞け！いいか、ギャラルホルンの正義とは我々の行動そのものが示すのだ！例え敵が卑怯非道の輩でも、我々は正々堂々戦う義務がある。それを忘れるな！降伏勧告は出しているな？」

「はい、明朝0600を刻限として発信済みです」

その言葉にコーリスは大きく溜息を吐く。

「宜しい。獣とは言え我らは慈悲を示さねばならん…尤も、乗ってくるなど言うのが本音だがな」

コーリスはそう呟くと目を閉じる。

「オーリス。出来ない弟だったが、死んで良い人間ではなかった。いずれはカルタ様の下で轡を並べられると。その未来を奪ってくれたのだ、報いは受けてもらわねば釣り合いがとれん」

夜明けはすぐそこに迫っていた。

『よう、なんか見えるか？』

ぼんやりと夜空を眺めていたミカヅキの耳にオルガの声が届いた。

「ん、月見てたんだ」

『ああ、ミカの名前の由来だったか？』

「うん、なんか綺麗だなんて。良いところだね、地球」

『…ああ、良い場所だな。地球は』

周囲には樹木が茂り、海には魚が泳ぐ。暖かい太陽の日差しは暑いとすら感じられ、夜の寒さに震えることもない。少年達が初めて経験

した地球は、彼等が思い描いていた理想のような場所だった。

「オルガ、おっちゃんがさ」

『あ?』

「おっちゃんがさ、言ったんだ。俺は凄いや奴だって。でも俺、何がしたいって考えた事無かった。だって、俺の命はオルガに貰った。だから俺の命は全部オルガの為に使うって決めた。その気持ちは今でも変わらない」

『ミカ…』

「でも、俺やりたい事が出来たんだ。やり方は知らないし、出来るかも解らない。それでも俺、やってみたいと思ってる。ねえ、オルガ。俺どうしたらいいのかな?」

『ミカ、悪いが俺はそれに答えられねえ』

オルガの言葉にミカヅキは目を見開いた。何故ならオルガはいつでもミカヅキに伝えてくれたからだ。だから今回の事も尋ねた。彼に否と言われればミカヅキは自分の思いを簡単に諦めただろう、それがどれ程重要な事であったとしても。何故ならミカヅキにとってオルガの判断こそが絶対の基準であり、正しい判断だからだ。だがその論理は他ならぬオルガ自身によって覆される。

『昔、お前に言ったよな?俺達の居場所へ連れて行くって』

「うん」

『その約束は忘れてねえ。お前を俺達の居場所へ連れて行く、それは俺のやらなきゃいけない仕事だからな。けどよ、ミカ。その場所ってのは着いたらはいお終いとはいかねえ。そらそうだろ、たどり着いたって俺達は死ぬわけじゃねえ、その場所で生きるために俺達は向かってるんだからよ』

「…うん」

『なあ、ミカ。お前のやりたい事は、そのたどり着いた先でお前がやるべき事なんだと俺は思う。だから、そこに俺の考えは入っちゃいけない。俺達は人間だ、ものじゃねえ。例え苦しくたって、自分のことは自分で決める。そうじゃなきゃいけない。だからミカヅキ・オーガスは、いつまでもオルガ・イツカのものであっちゃなんねえんだ』

はつきりとした言葉でオルガは告げてくる。それに対し、ミカヅキは小さく笑った。

「厳しいな、オルガは」

『馬鹿言うな、お前が決めたことなら俺は応援するって言ってんだ。こんなに優しい相棒が居るかよ』

「うん、そうか、そうだね」

噛みしめるように口にして、ミカヅキは空を見た。もうすぐ夜が明けける。

40. 勇将の下に弱卒無し

『時間だな』

オルガの言葉と共に敵艦の主砲が光る。僅かに間を置いて島のあちこちで爆炎が上がる。

『ちゃんと時間を守るなんて、ギャラルホルンにも真面目な指揮官がいるんだね』

『お決まりの飽和攻撃な辺り教科書至上主義って感じ』

アジーが皮肉気にそう口にし、ラフタが辛口の評価を付ける。その姿には余裕すら感じられた。

『とは言えいつまでもバカスカ撃たれて楽しいもんじゃねえ。アキヒロ、シノいけるか?』

『おう』

『ま、こんくくれえなら』

オルガの言葉に応じてグシオンとビビッドピンクに染められたジルドが滑腔砲を構える。僅かな間を置いて2機はほぼ同時に発砲、重い砲声と共に飛翔した砲弾は最も島に近づいていた敵艦の艦首に連続して命中した。巨大な破孔を開けられた敵艦は急速に速度を減じ艦隊から離脱していく。

『はっ！逃がすかよ!!』

離脱の為に側面を晒した敵艦に、シノがそう叫びながら砲撃を繰り返す。側面に新たな破孔を追加された敵艦は徐々に傾斜を始めると、搭載されていたMSを慌てて発進させ始めた。

『アキヒロとシノはこのまま敵艦への砲撃を継続！アジーさんとラフタさんは揚陸してくるMSを水際で叩いてくれ!』

『了解!』

『本当に真つ直ぐ突っ込んで来るんだ』

『経験不足だな、準備の出来ておらん相手を襲撃する事しかやっておらんのだろう。そもそも地球ではギャラルホルンと戦える者がおらんしな』

突入してくる敵機を眺めていたミカツキがそう呟くと、ロッドが溜

息交じりにそう評した。

「無駄になんなかったから、こつちとしては良いけどね」

ミカヅキの言葉に反応するように、海面が盛り上がり巨大な水柱を作る。目の前に突如として現れたそれに対応しきれず、先頭を進んでいたグレイズが水柱へフライトユニットを引っかけ派手に転倒した。

『ほらほらあー動きが止まってるよ!!』

その様子を見て動揺した後続の機体が慌てて減速するも、それを狙っていたラフタとアジーの駆る漏影の砲撃が襲う。続けざまに2機を失ったことで動揺した敵部隊が漸く回避行動を始めるが、その先でまた1機が水柱に呑み込まれた。

『進路上の啓開しねえとか、マジかよ』

水中にIEDをばらまき即席の機雷原を作った張本人であるオルガが、その様子を見て露骨に呆れた声を上げた。これについては敵兵士側の油断もあるが、そもそもMSという兵器が極めて堅牢であることの方が大きな要因である。生半可な攻撃では傷すらつかず、むしろ目障りな攻撃をすれば余計な恨みを買って執拗に攻撃される事を熟知している地上の武装勢力は、MSに対して殆どが遅滞行動すらとらない逃走を選択する。その様な状況が恒常化しているために、MSパイロットへの教育課程においてすら啓開について全く触れられないというのが現状である。事実水柱に突っ込んだ機体もフライトユニットが損傷こそしたものの、機体は無傷で十分戦線に復帰できる状態なのだ。尤も、パイロットの心理状態を考慮しなければという但書きは付くが。

『楽勝と言っていてえが、そう簡単にやいかねえか!』

弾倉の交換を行っていたシノがそう叫ぶや、頭上へ砲口を向ける。そしてすぐさま発砲すると同時に周囲へ警戒を促す。

『敵機直上!突っ込んできやがる!』

『MSでの単独降下!連中、これを狙っていたのか!?!』

『アキヒロ、シノ、ロッドとミカヅキは降下してくる敵機を迎撃!アジーさんとラフタさんは海岸線から後退して戦線を縮小してくれ!』
『島に入り込んでやうよ!』

『二人がそこで孤立する方が不味い。それに乱戦はこっちの得意分野だ』

『了解。ラフタ、下がるよ』

ラフタの驚いた声にオルガが平然と言い返す。それにラフタが何かを言う前にアジーが返事をして機体を下げ始めた。

『ちよつと、アジー!?!』

『降下してきてるのは7機。後ろから襲われたら阿頼耶識の無いあたしらじゃ確かに不味い。悔しいけどね』

『やつぱ阿頼耶識つてずっこい!』

アジーの言葉にラフタは唇を尖らせた。個々の技量において彼女はテイワズでも上位に食い込む能力の持ち主だ。その彼女達ですら鉄華団の中では予備パイロットと良い勝負であり、阿頼耶識の恩恵を最大限に受ける事が出来る乱戦においては手も足も出ないと言うのが本音だ。

「なにあれ?」

そんな姦しい通信を聞きながら、空を見上げていたミカツキは降下してくる敵の変化に気付く。明らかに先行していた機体より速いスピードで降りてくる一機が、突然目の前の機体へ向かって発砲したのだ。

『なんだあ?仲間割れか?』

射撃の手を止めずにそう漏らすシノの言葉を否定したのは、高性能な長距離カメラを装備したグシオンを操っていたアキヒロだった。

『ちげえぞ。ありや相談役だ!』

愉快的な速度で大気圏に突入すれば、視界は一気に真っ赤に染まった。そうそう、おつちゃん小さい頃は、この熱は大気との摩擦で教えられてたが、実際は加圧された空気の断熱圧縮による熱なんだってね。などともうでも良い事を考えながら見る間に迫った敵機に向かって減速をかけながらトリガーを引いた。

『!?!』

はっはっは、誰かを頭上から攻撃したことはあっても、自分は初めてかね？慌てるのはいいが、ちゃんと機体を制御しないと地面まで真っ逆さまだぞう？

『奇襲だ…卑怯っ…!?』

ノイズ混じりの怒声が届く。時々思うのだが、この手の連中は自分がやっている事を他の者がやると卑怯だと罵ってくるが、客観性とかは何処に置いてきているのだろうか。

「寝言は寝てから言いたまえよ。そら、もう地表だぞ」

健気にも指揮官機と思われる機体との間に割って入ってきた敵機に降下ユニット——耐熱タイルを金属フレームに張り付けただけの簡素なものだ——を減速ついでに蹴り飛ばしぶつけてやる。真後ろに指揮官機がいたために回避する訳にもいかない敵機は、甘んじてそれを受け止めて吹っ飛ばされていった。なんだろう、この忠誠心も技量もあるはずなのにそこはかたなく漂う残念臭は？

『私の大切な部下を、よくも!!』

声から察するに指揮官はどうも女性らしい。地上に降り立つやMSに仁王立ちをさせて手にしたロングソードを突き付けてくる。実戦経験が不足しているとは思っていたが、どうも彼女達は戦争を勘違いしているようだ。実に羨ましい。

「覚えておくと良い。部下の喪失は敵が悪いのではない、指揮官の無能だ」

言いながら俺は指揮官機に向けて躊躇なく発砲する。既に降下した敵機は態勢を整える余裕も与えられずにミカツキを筆頭とした地上組に襲われて無力化されている。ミカツキに至っては器用にコックピット周辺の装甲を切り飛ばしコックピットを強制排出させて機体に殆ど傷つける事無く無力化するなんて離れ業をやったのけている。タツジンかな？

『か、カルタ様!』

ピンクのド派手なジルダに絡まれている機体のパイロットがそう悲鳴を上げた。それにしてもシノは射撃武器を持ちたがる割にはすぐ格闘戦に切り替えるんだよな。しかもジルダで大型のアックスな

んで使うから動きが単調になっている。はたから見ると狂ったように斧を叩きつけているようにしか見えん。

「降伏するなら命くらいは保証するぞ？それ以外は諦めてもらうが」

なんせ軌道上から地球まで追っかけてくるような連中だからな。暫く動けんように色々奪っておきたい。

『私は誇りあるイシュー家の人間！降伏などしない！』

うわ、めんどくせえ!?切り掛かってきた彼女を適当にいなしつつ、叫びそうになるのを懸命にこらえる。確かイシュー家ってマクギリス君が取り込もうとしている家だよな？よりによってその関係者がこんな所にMSで出張してくんなよ！と思っただけどよく考えたらマクギリス君もボードウィンさん家の子も戦場に出てたな。あれか、中世の貴族的なやつか？成人すると初陣もするみたいなやつか？だつたらせめてもう少し真面に教育しておけよと声を大にして言いたい。「殊勝な物言いだな、つまり君は家の誇りの為に部下を道連れに死ぬという訳だ。君の可愛い部下たちも君の家の誇りを守れてさぞ本望だろうな？」

『貴様！脅すつもりか!』

「脅す？何を言っている。殺し合いの最中に降伏を蹴るという事は、死ぬまで戦うと宣言しているのだと馬鹿でも解る事だぞ？そして君は指揮官、部下の命を預かる身だ。その発言が全員の命運を左右するなど当然ではないか」

俺の言葉に動揺したのか、僅かに剣先が揺れる。ふむ、あと一押しって感じか。既の上陸したMSは彼女を除いて制圧済み。更に混線してきた通信から、別働隊もこちらに制圧された事が伝わってきた。はつきり言ってもう勝負はついているが、ここで精神的に敗北を植え付けておかないとこの娘っ子はどこまでも追いかけてきそうだなんとなくそんな気がする。

「手を出すな！」

さっさと終わらせようと思ったのだろう、ミカツキが背後へ移動したのを見て俺は叫ぶ。そして目の前の機体に向けて提案を口にした。「提案がある。戦闘で降伏出来ないというならば、私と1対1の決闘

をしないかね」

『何!?!』

「君が勝ったなら、そちらの要求を呑もう。だが負けたなら私達の要求を呑んでもらう。嫌ならばここで皆殺しだ、どうするね?」

無論皆殺しなんてつもりはさらさら無いのだが、敢えてそう口にする。決闘を受けなければ部下が殺される、そう思考を誘導するためだ。

『決闘を受ければ、部下の命は保証してくれるのね?』

「ああ、約束しよう。それとも火星の野蛮人の言葉は信用出来んかね?」

『っ!』

俺の言葉に彼女は大きく飛び退くと、ロングソードを眼前に構え儀礼的な立ち姿を機体に取りらせる。俺も機体を僅かに下がらせ、刀を腰だめに構えさせた。

「決闘を承知したと受け取る。全員武器を下ろせ、そしてどんな結果であつても受け入れろ」

『そんな!?!なんで!?!』

俺の言葉にラフタ嬢が叫ぶ。まあ、効率的でも合理的でもないからね。でもそういったものの外の理屈で戦っている連中を解らせるには、こつちがそこまで歩み寄ってやる必要があるんだ。

『大丈夫だ、ラフタさん。聞こえたな!全員武器を下ろせ!』

オルガが指示を飛ばし、全員がそれに従う。奇妙な静寂が生まれた戦場で、俺達のMSは向き合い名乗りを上げた。

『地球外縁軌道統制統合艦隊司令!カルタ・イシユ一佐!』

「鉄華団社長相談役、マ・クベだ」

『「参る!」』

敵の機体はグレイズリッター、簡単に言ってしまうえばグレイズの姉妹機で低軌道や地球上での運用を前提に機動力を向上させた機体らしい。見た所単純に推進器の出力を上げているだけだが、こと突進からの刺突であれば俺が使っているグレイズよりも強力だろう。だから正面からは付き合わない。

『なっ!?!』

MSは人型の兵器だ。だから多くの人間がそこに思考を引つ張られる。まあ、最初の訓練として人間側にやりたい機動を覚え込ませ、それを機体に再現させているのだから人体の延長として捉えるのも無理はない。けれど、MSは機械であり、人体が持ちえない器官も有している。

「失礼」

間合いに入る刹那、蹴り出していた足を地面に接触させると同時にスラスターを噴射、回転方向の運動エネルギーを得た機体はその場で丁度一機分左に逸れながら回転し突進してきていた敵機の背後を取る。そして彼女が避ける時間を与えずに、健気に進行方向を変えようとしている推進器へと俺は刀を逆袈裟に振り抜いた。

『うっ、あああああ!?!』

推力の均衡が崩れたグレイズリッターが、衝撃に負け転倒する。俺は即座に近寄ると肩の隙間へ刀を潜り込ませ両腕を切り飛ばし、ついでに腰部へ刃を突き立て敵機を地面に縫い止める。動ける内は負けてないなんて言い訳はさせてやらん。

『そ、んな。こんな、私は…』

『カルタ様!?!』

敗者に鞭打つような行動になったのは否めないが、まあここまでやれば大丈夫だろう。

「さて、決着はついたと思うのだが、まだやるかね?」

俺の問掛けに弱々しい降参の言葉が返ってきたのはすぐのことだった。

41. 自らが正しいと思えることを行える事は幸福なことである

「カルタ・イシュー。呼ばれた意味は解っているな？」

「…はい」

オセアニア連邦領内における作戦行動から5日が経過していた。ヴィーンゴールヴの司令室に呼び出されたカルタ・イシューは跪き、視線を床へと落としてしている。その立ち振る舞いが、部屋の主と彼女との力関係を如実に現わしていた。

「君の軽率な行動によって蒔苗東護ノ介は行方をくらし、彼の手足となつてゐる鉄華団なる武装組織は未だ地球上を闊歩している。言い訳のしようのない失態だ。君はイシュー家に泥を塗つた」

「申し訳、ありません」

「謝罪する相手が違うな。尤も、後見人である私も忸怩たる思いだが」
「……」

「本来ならば君には謹慎を言い渡すべき所であるが、事態はその猶予を与えてはくれない。既に連中が消息を絶つて5日、早急に手を打たねば地球は更なる混乱を招く事となるだろう」

窓の外へ視線を向けたまま、イズナリオ・ファリドは言葉を続ける。「故にカルタ、お前に名誉挽回の機会を与える。ここまでの情報を精査した結果、連中はアープラウ領エドモンソンを目指していると思われる。これを追撃し、蒔苗の企みを阻止するのだ」

「イズナリオ様、お聞かせください。蒔苗の企みとは一体？」

カルタの言葉に、イズナリオが今日初めて彼女へ向けて視線を送る。細められた目に込められていた感情は明らかに非友好的なものだ。

「それを知つてどうする。お前に出来る事は肅々と任務を果たし汚名を雪ぐ事だけだ」

議論の余地など最初から存在しない。そしてお前は頭など使わずにただ命じられるままに動けば良い。明確にそう告げられ、カルタは

唇を噛みしめながら、辛うじて頭を垂れると部屋を後にする。足早に部屋から離れた先の廊下で、彼女は今最も出会いたくない人物と遭遇した。

「…マクギリス」

「久しぶりだな、カルタ。残念ながら壮健とは言い難いようだな」

その言葉に、カルタは苦虫を噛み潰した様な表情になる。そしていつものごとく憎まれ口を彼女は放つ。

「そうやって涼しげな顔で無様な私を笑いに来たの？優秀な貴方からすれば今の私はさぞ滑稽でしょうね!？」

それは何度も繰り返してきたやりとり。彼女の言葉に微笑みを浮かべながら優しい言葉をマクギリスが返してくる。不器用な彼女の遠回しな甘えに、しかしこの日のマクギリスは応じなかった。

「ああ、そうだな。今の君には哀れみすら感じる」
「なっ!？」

思い人からの予想外の言葉に驚くカルタに向かって、マクギリスは視線で付いてくるように促す。訳も解らぬままに彼の後を追うと、監査局が管理しているエリアでも人気のない部屋へとマクギリスは入っていった。カルタが慌ててその後を追うと、閑散とした部屋の中で、マクギリスがこちらを向き静かに立っていた。

「一体何だと言うの!？」

「あの場所では誰に聞かれているかも知れないからな。ここならば多少はマシだ、油断は出来ないがね」

「どう言うこと?説明なさい」

苛立たしげに尋ねるカルタに向けて、マクギリスはギャラルホルンに入ってから殆ど見せる事がなくなった冷たい表情で言葉を紡ぐ。

「ギャラルホルンの腐敗はどうしようもない所まで進んでいるという話だ。カルタ、君はイズナリオからどのような命令を受けた？」

「それを言う必要があるのかしら?マクギリス・ファリド特務三佐」

お飾りなどと揶揄されたとしても、カルタは地球外縁軌道統制統合艦隊司令であり、ギャラルホルン一佐の地位にある人間である。いくら馴染みの間柄だと言っても安易に任務の内容を漏らすことは出来

ない。

「喋りたくないと言うなら構わない。私としてはイズナリオと同様に君にも然るべき対応をするだけだ。だが喋れないのならば、まだ君を助ける事が出来る」

迂遠な言い回しであるが、カルタは彼の言葉が最後通牒であることを直感で理解する。同時に彼の対応と言うのが決して穏便なものではない事も。

（マクギリスはイズナリオ様の事を常に父上と呼んでいたはず。呼び捨てにするなど余程の事だわ）

緊張に喉を鳴らしつつカルタは考える。イズナリオには大恩がある。病床の父に代わり当主として家を守らねばならなくなったカルタを後見人として支持してくれただけでなく、統制局に働きかけて地球外縁軌道統制統合艦隊の装備や人員についても便宜を図ってくれた。プライベートでも家の運営や父の入院に関する手配など、文字通り公私に渡って今のカルタを支えてくれている存在だ。対してマクギリスは、憎からず思っているものあくまで良い友人がせいぜいで、それどころか最近所属する局が違う事もあってやや疎遠だ。カルタの人間関係においてどちらが比重を占めているかなど考えるまでもないはずなのだ。それでも彼女は悩む。何故なら彼はカルタが知る中でも飛び切り優秀な人間で、監査局に所属しているからだ。ギャラルホルン内部の事情に関して確実にカルタより通じているし、何より先ほどのイズナリオの態度が、カルタの心境に大きな影響を与えていた。

（イズナリオ様は私の問いに答えて下さらなかつた。もちろん軍人には知らなくてよい事は知らされない。けれど、もしイズナリオ様が私の問いに答えられない、いえ、答えたくなかったのだとしたら？）

「…監査局の人間に質問されたなら、答える義務があるわね」

幼馴染という間柄では話すことは難しい。しかしマクギリスは監査局の人間だ。彼らの調査にギャラルホルンに所属する人間は協力の義務があるし、質問された内容に答える義務もある。その事実を利用しカルタは口を開いた。

「アーブラウ領エドモントンへ向かっていると思われる蒔苗東護ノ介並びに鉄華団の追撃及び捕獲が私に与えられた任務よ」

「成程、それが重大な内政干渉になっている事を君は理解しているか？」

「勿論だわ。けれど彼らの企みを許せば、地球圏は更なる混乱を招くことになる」

「ほう、その企みとはいったい何だ？」

「っ、それは…」

そこで詰まるカルタに対し、マクギリスは冷たい笑みを浮かべながら口を開く。

「答えられないだろうか？当然だ、何しろ彼らにそんな企みなど無いのだから」

反論も出来ずに黙り込むカルタに対し、マクギリスは言葉を続ける。

「彼らがエドモントンを目指している理由は簡単だ。アーブラウの代表指名選に蒔苗氏を送り出すために他ならない。そもそも鉄華団が地球に来たのは、彼と火星のアーブラウ自治区を代表したクーデリア・藍那・バーンスタインの会合を実現するためだ。私としては、その会合が地球圏にどのような混乱を齎すというのか是非聞いてみたいところだよ」

「なら、なぜイズナリオ様は私に追撃の命令を出したの？」
「知ってどうする？」

そう聞いてくるマクギリスにカルタは決然と言い返す。

「私はイシュー家の当主代行として恥ずべき行いは出来ない。それがたとえ大恩ある方からの命令であったとしてもよ」

その言葉にマクギリスは頷くと真剣な表情で口を開いた。

「君が家名を口にするならば信用に値する。イズナリオが命じた理由は至極単純だ。彼が蒔苗氏と敵対する派閥と繋がっているからだ。代表選で自身の協力者を確実に勝たせる為に、蒔苗氏を物理的に代表選の場から排そうというわけさ」

「そんな！それはっ!？」

声を上げるカルタに対し、笑顔のままマクギリスは頷く。

「まさに絵に描いたような内政干渉だな。それもセブンスターズに名を連ねる家が、自らの利益の為に行っているというのだから話にならない」

激高し部屋を飛び出そうとしたカルタの腕をマクギリスがつかむ。

「離しなさいマクギリス！」

「どうするつもりだ？」

「イズナリオ様を問いたです！そしてあなたの言葉が真実ならばお諫めするのよ!!」

「冷静になれ。ここまで監査局すら欺いてきた男だぞ。君が問いただしたところではぐらかされて終わるだけだ。そして適当な僻地にでも飛ばして君を飼殺すだろう。その程度は造作もないだけの力がイズナリオにはある」

その言葉にカルタは涙を浮かべながら叫んだ。

「ならばどうしろと貴方は言うの!?セブンスターズともあろう者が、簡単に騙され不義に手を貸していたなど！家の者に、部下たちに私はなんと詫びればっ」

「無謀な突撃などそれこそ君の自己満足になるだけだ。セブンスターズならば、本当に汚名を雪ぐならば、君がすべきは不義を正す事だろう」

「そんなことが…」

うなだれるカルタに向かって、マクギリスが真剣な表情で語りかけてくる。

「出来る。だがそれにはもつと力が要る。君だけでも私だけでも不可能だ。だからカルタ、力を貸してくれ」

孤島を脱出して早5日、俺達は太平洋を順調に航海中だ。

「ミカヅキに感謝しろよ？おめえはMSの使い方が荒っぼくていけねえや」

カルタ嬢との戦いで流し斬りを完全に決めてやったのだが、その代

償に軸足にした右足のフレームに歪みが出てしまったのだ。うむむ、功夫が足らぬ。幸いにしてミカヅキが新鮮なグレイズリッターの体を手に入れてくれたので、現在グレイズのコックピットを絶賛移植中である。

「なあ、おやつさん。これもう一機くらい直らねえ?」

暇なのか作業を眺めていたシノが雪之丞に対してそう問いかける。今回の戦闘でグレイズは1機、グレイズリッターは3機程強奪した。他にも程度の良い部分とエイハブリアクターは奪ってきた。自分の機体をバラされるのを見ていたギャラルホルンのパイロットが半泣きになっていたが、敗者は全てを奪われるのが戦場の習いであるからして、素直に諦めて頂いた。一番すげえ目で見たのはカルタ嬢だったが。

「無茶言うんじゃねえよ。まともな設備もねえこんな所じやコックピットの移植でも大騒ぎなんだぞ? 阿頼耶識用になんか入れ替えられねえよ」

「いつそ阿頼耶識無しで使うか?」

俺がそう聞くとシノは少しだけ悩んでみせるが、結局頭を振った。

「今の俺じゃあ、阿頼耶識無しだと無理かなあ」

フレデリックのおかげで阿頼耶識組、特に今回の仕事に参加しているメンバーは全員阿頼耶識の性能が向上している。特に複数の処置を受けているミカヅキとアキヒロは顕著で、彼らの操る機体は最早人体のそれと遜色ない程だ。それでもまだオリジナルの性能には届いていないというのだから、フレデリックの研究が完成した暁には文字通り一騎当千の兵士に彼らはなるだろう。それが良いか悪いかは別にして。

「これから考えると阿頼耶識無しにも慣れてもらわねば困るぞ。特にお前やアキヒロは部隊長になるだろうからな」

「うえっ!? 俺が?」

変な声を出すシノに向かって俺は笑いながら告げる。

「シノは周りを良く見ているからな」

「俺はMSパイロットでいいかなあーって」

馬鹿言うんじゃないやありません。

「年功序列というやつだ。年の分だけ荷物を背負え。それとも年下の奴らにお前が嫌なものを早めに背負わせるか？」

「その言い方は汚ねえって、マッさん」

口を尖らせながら退散するシノを笑いながら見送っていると、雪之丞が何やら言いたげにこちらを見てくる。

「どうした？」

「ああ、いや、シノに隊長任せるってのは本気か？」

心配な気持ちは解るけどな。

「シノは責任感が強いからな」

「だからよ、仲間が死んだらアイツ押しつぶされちまうんじゃないやねえか？」

雪之丞の心配ももつともだ。けど、このままの方がアイツやばそうなんだよなあ。

「隊長を任せれば仲間が死ぬような無茶をシノはしないだろう。だが一兵士としてMSに乗せていたら、アイツは仲間の為に平気で死ぬぞ」

元ヒューマンデブリの奴らもそうだが、ウチの若い連中はとにかく自分の評価が低い。常に死んで死なせて、殺して殺されての日常を送ってきたのだから無理もない話であるが。

「価値観は一朝一夕では変えられん、ならばせめて環境で強引にでも繋ぎ止めておかねばならん」

命をチップにする日々から抜け出すその日を、一人でも多くの子供たちに迎えさせるために。

「そんな訳で、大人としてはまだまだ無茶をする必要がある。頼むぞ、ナデイ」

「おめえはそれさえなけりや良い奴なんだがなあ」

俺がそう笑い、雪之丞が溜息を吐く。船は確実に目的地に近づいていた。

42. 冷水ごときで低体温症になる服が宇宙服に使える訳がない

「さみい」

そう言ったきり、アキヒロは微動だにしなくなった。外気温は－20℃、火星の夜もそれなりに寒かったが、流石北国の冬はレベルが違う。

「動かんと末端が凍るぞ。動けんなら車内に戻れ」

「けど、見張りが」

「そんなでは見張りも何も出来んだろう、代わってやるから温まってく」

「こいつら体を鍛えてる分体脂肪率がビツクリするくらい低いからな。寒さには滅茶苦茶弱いんだよな。」

「すみません」

そう言つてアキヒロはそのそと車内に逃げ込んでいく。俺は通信機を取り出しオルガに連絡を入れた。

「社長、余っているパイロットスーツがあつたら見張りに着せてやれ、多少はマシになるはずだ。このままでは戦う以前に皆凍ってしまう」

列車の速度は凡そ100キロくらいだろうか？テイワズが運営しているこの定期列車はアンカレッジを出発し、北米大陸の主要な都市を避けながら北周りにエドモントンへと向かう列車だ。この列車を使うことを提案してきたのはクーデリア嬢で、複線の大型貨物車であることに加え主要都市を避ける路線なので、エイハブリアクターを持ち歩いて露見しにくいという事と、定期便なのでこの状況下でも怪しまれずにエドモントンまで向かえるという正に俺達の望む移動手段だった。フミタン女史に手伝って貰っているとはいえこれを見つけて出し、更にはテイワズのマクマードから俺達の紹介があつたとはいえ使用权をもぎ取る手腕は、彼女の高い政治力を窺わせた。

「警告！2時方向に機影らしきものを発見！数不明！」

俺の横で警戒に当たっていたテイノスがそう叫んだ。手にした双

眼鏡で彼の指し示す方向を探すと、確かに雪煙の向こうにMSらしき姿が見える。

「待ち伏せか。ミカツキ、ラフタ嬢、アジー嬢出撃準備！」

『いつでもいいよ』

『同じく！』

『右に同じ』

これはある程度予想出来たことだ。何しろ艦艇用のエイハブリアクターとは異なり、MSに搭載されている物は停止が出来ない。厳密に言えば停止は出来るが専用の外部装置を用いなければ再起動が出来ないのだ。当然そんな装備は持ち運んでいないからMSごと俺達が飛ばれずに移動できるルートは限られる。だから当然それには備えていたんだが。

『マさん、本当に敵ですか？エイハブリアクターの反応がありませんよ？』

困惑した声でオルガがそう告げてくる。そうなのだ、今日は吹雪いていて視界が悪い。双眼鏡を使っているとはいっても目視で確認出来るような距離ならば、既にリアクターの反応をミカツキ達の機体が拾っているはずだ。

「間違い無い。グレイズリッターが6、いや、7機だ。あのマークはカルタ嬢か？」

特徴的な赤い差し色を施されたグレイズリッターを先頭に綺麗に整列している。その振る舞いに俺も違和感を覚えた。

「何故進路を塞がない？」

堂々と突っ立っているから奇襲するつもりは無いにしても、せめて進路上に立ち塞がるくらいしななければこちらの足止めも出来ない。なのに連中は線路の横にまるでこちらを見送るように立っている。

『何だあ？』

『おい、どうすんだ社長？』

モニター越しに外の様子を見たのだろう。シノとアキヒロが戸惑った声を出す。

『パイロットは全員機体で待機、いいな？待機だ。ただし何かあった

ら直に動けるようにしておけ!」

オルガがそう指示する間にも列車は彼女達へどんどん近づいて行き、

「っ!」

そして目の前を通り過ぎる。目を凝らせば機体の上に態々立つてこちらを見ているカルタ嬢の姿があった。

「全員絶対に動くな!」

俺が叫ぶ間にも景色は流れ、カルタ嬢達は後方へと小さくなっていく。あれは完全に戦うつもりが無い仕草だ。

「社長、警戒解除を」

『まだ近いですよ?』

硬い声でそう聞いてくるオルガに俺は断定した口調で告げる。

「いや、彼女達の機体は完全にリアクターが止まっていた。追撃は無い」

『訳が解りませんよ。連中一体何がしたかったんだ?』

だが俺には心当たりがあった。おそらくではあるが、彼が説得したのだろう。

「あちらにも都合があるのだろうさ。見逃してくれると言うなら我々は有り難く進ませて貰うだけだ」

俺の言葉に応じた訳では無いが、列車は速度を緩める事無く進んでいく。エドモントンはもうすぐそこまで迫っていた。

「本当に彼等を見逃すのですか、カルタ様。今ならば、まだ」
「機体がトラブルを起したのです。仕方がないでしょう」

小さくなつていく列車を見送りながら、カルタはそう聞いてくる部下に返事をした。

「しかし」

アーブラウ領にも駐留しているギャラルホルンの部隊は存在する。その中には数こそ少ないがMSを配備している部隊もあるし、何より先行してエドモントン近郊に仮設基地を設営中のコーリス・ステン

ジヤが率いる部隊もいる。彼等へ連絡すらしないのは、最早任務の放棄に等しい。もしこのことがイズナリオ・ファリドの耳に入ったなら、カルタは間違い無く何らかの処罰を受けることになるだろう。それを案じてくれる部下に彼女は感謝をしつつも口を開く。

「機材が不調のため目視にて確認しましたが当該の車両に不審な点は見受けられませんでした。地上における臨検の権限を持たない我々にはこれが精一杯です」

もし彼等がこちらの意図を察せずMSを見せたならこの言い訳は通じなかった。外に出ていた男、確か相談役などと巫山戯た役職を名乗ったマとか言う輩がこちらを見て叫んでいたようだから、おそらく彼がくみ取って伝えたのだろう。

（察しが良くて口も立つ。嫌な男）

更にはパイロットとしての技量も並外れていて、相手の事情を慮る度量まで見せてくる。金髪碧眼でもう少し年が若ければ色々危ないところだったとカルタは明後日の方向な事を考えながら指示を出す。

「今回の一件は全て私が責任を取ります」

彼女達が機体のトラブルをアーブラウ駐留部隊に連絡し回収されたのは、列車が通過して6時間後、エドモントンまで列車が1時間の位置まで迫った時だった。

「話が違うではないですか！ 時苗がすぐそこまで迫っていると聞きましたよ!？」

ヒステリックに騒ぐ女から視線を逸らし、イズナリオ・ファリドは目を閉じた。

（カルタめ、まさかここまで役に立たぬとは）

一通りの罵声が脳裏を駆け巡る中、彼は声だけは冷静に言葉を紡ぐ。

「騒ぎ立てる必要は無い。エドモントンに着いたとしても、連中は議事堂までたどり着けんよ」

「随分な自信ですね。蒔苗派のラスカー・アレジが精力的に動いています。万一があればこれまでの準備が台無しになるのですよ?」

落ち着き無くまくし立てながら部屋の中をうろつくアンリ・フリユウの足音にイズナリオは溜息を堪えた。アンリ・フリユウは蒔苗が不在の現在、アーブラウの次期代表だと目されている。だが率直に言えば彼女は全ての能力面で蒔苗に劣っていた。特に想定外の事態に対する対応能力の低さや、その場合に他者へ当たると言った行動は大きなマイナスとして周囲に映っている事に気付けていない点などは致命的とすら言える。だからこそイズナリオの甘言に簡単にたぶらかされてくれるのだが。

(愚かな人間は引き入れるのは容易でも後が役に立たん)

ゆつくりと目を開け、不愉快な女を視界に入れるとイズナリオは口を開く。

「既にエドモントン市はギャラルホルンの部隊が展開し終えている。MSは強力な戦力ではあるが、市街地では使えない」

「火星の野蛮人共にそのような常識が通じると?」

その野蛮人に良いように感情を振り回されているお前よりは遙かに話を通じるだろうと内心思いながらイズナリオは続ける。

「連中がMSを持ち込めば君の勝利は確実になる。市街地に甚大な被害を与えた人間を代表に選ぶわけにはいくまい」

「しかしっ!」

「君は落ち着いて堂々としていたまえ。その様に齷齪しては周りの者に不安を与えるぞ」

そう言つて彼は立ち上がると、一方的に会話を打ち切るように部屋を出る。静まりかえった廊下を歩きながら、想定外の状況が起き続けている現状に彼は顔を顰めた。

(蒔苗の排除までは順調だった。だがその後だ。あの鉄華団とやらが関わり始めてから予定が大きく狂いだしている)

待たせていた車に乗り込み、いつものように瞳を閉じる。これは彼が深く考える時の癖だった。連れてきていた新しい愛人の存在も、今だけは思考の外へと追いやる。

(状況はあまり良いとは言えない。カルタもどうやらイシュー家の悪癖が出ているようだ)

ギャラルホルンの正義などという存在しない物を懸命に守ろうとするイシュー家をイズナリオは内心馬鹿にしていた。カルタの後見人に収まったのもこのまま放置して他の家に取り込まれるのを防ぐためであり、彼女に対する評価は、言った事くらいは出来れば良いという低いものだ。故に彼は早々に彼女に見切りをつけ、次の手を打つ。

「ああ、私だ。部隊司令に繋いでくれ」

アーブラウ代表指名選まで後4日。世界は大きく動くこうとしていた。

43. 悪が栄えないのは勝った者が正義だからである

「うわ、面倒臭え」

双眼鏡を覗いていたオルガが、そう嫌そうに漏らす。同じく横で見ていた俺もそれに同意した。

「河川を挟んで対峙、しかもご丁寧に橋は一つを残して破壊済みとはな」

「川の水量は大した事無さそうですが、モバイルワーカーはともかく車両での突破は厳しそうですね」

「それこそんびり渡河していたら蜂の巣だろうな。仮に突破しても直に市街地だ、少し下がられれば撃破の難易度は跳ね上がる」

都市への損害を気にしなくて良いのなら幾らでもやりようはあるのだが、そんな事をしたら選挙に出る前に蒔苗氏の政治生命を終わらせてしまう。

「釣り出したい所ではあるが流石にそこまで馬鹿では無いだろうしな。そうなると、残念だが正攻法だな」

「モバイルワーカーの数が圧倒的に足りませんか？」

火星から持って来たのが6台に、ノブリスからかつぱらったのが2台。オセアニア連邦の島で強奪したのが6台で、テイワズから買い付けたのが20台。ちよつとした数ではあるのだが、相手は正規軍の上に見えるだけでも30を越えている。あれで全戦力とは考えにくいし、俺達が拠点にしているのは郊外の廃駅だ。市街地への影響を気にせずにMSで襲撃し放題である。割と最悪な条件だな。

「その分は経験と腕で補うしかないだろうな。装備の点検が済み次第全員を集めて作戦会議だ」

「モバイルワーカーの動作チェック急げよ！特にノブリスの所のとギヤラルホルンの奴は入念にな！」

大声で指示を出して居る雪之丞にエーコ・タービンが駆け寄る。

「MSのチェック終わったんで、こっち手伝います！」

「おう、助かる！テイワズ製の奴を見てくんねえか」

「はいー」

慌ただしく動き回る整備班の間をすり抜けてオルガが雪之丞に近づいてきた。

「おやっさん、どうです？」

「持って来た6台はともかく、他のは頼りねえってのが本音だな。ギャラルホルンの奴はともかく他のは性能的にも向こうより下だろうし、何より阿頼耶識がついてねえ」

「それなんだが、おやっさん。テイワズ製のやつには外部操作機能がついてましたよね？」

オルガの言葉に雪之丞は顔を顰めた。

「あることあるが、ありや本当に外から操作出来るだけって代物だぞ？真面に動かせるもんじゃねえ」

「十分です、重要なのは中に人が乗ってねえって事ですからね。取敢えず1台、出来れば10台を操作出来るようにしておいてください」

悪戯を思いついた子供のような顔でそう告げてくるオルガを見て、雪之丞は溜息を吐く。

「おめえのそういう所、だんだんマの奴に似てきてやがるなあ」

「褒め言葉として受け取るとききます。どの位かかりますかね？」

「試しで1台弄ってみて次第だな。一時間もありやセツティングだけはできんだろ」

「じゃあそれで。あと30分後に作戦会議をするんで、手の空いた奴を会議室に來させてください。たのんます」

「おうよ、オルガ」

「はい？」

「ちゃんと全員で火星に帰ろうぜ」

雪之丞の言葉にオルガは頭を下げて走り去っていく。雪之丞はそれを見送ること無く手の中のタブレットを操作し始めた。今の彼等にとって、時間はとても貴重なものだったからだ。

「急に呼び出したかと思えば、宇宙に上がってこいとは人使いが荒いんじゃないか？」

「おや、なら声をかけずに留守番を言いつけた方が良かったかな？」

そう返してくる友人に対し、ガエリオ・ボードウインは肩を竦めて笑った。

「それは勘弁願いたいな。で、アインも呼び出したとなると連中絡みか？」

キマリスを搬入する際に見たマクギリスのシュヴァルベ・グレイズは地上用に調整を受けていた。その理由は考えるまでもないだろう。ガエリオの思考を肯定するように、マクギリスが首肯し口を開く。

「オセアニア連邦領で交戦した後、彼等はアープブラウ領に移動した。追撃に当たったカルタに確認した所、彼等はアープブラウの前代表、蒔苗東護ノ介と行動を共にしている。目的は4日後に行われる代表指名選に蒔苗氏を送り届ける事と見て間違い無いだろう」

「彼等が地球に來た理由が蒔苗との交渉だったか。ならば何も不思議じゃないな」

「ああ、むしろ不自然なのはギャラルホルンの動きだ」

「……」

沈黙するガエリオに構わずマクギリスは言葉を続ける。

「不法侵入した鉄華団を地球外縁軌道統制統合艦隊が追撃するのは職務の範疇だろう。だが、アープブラウ駐留部隊が防衛出動しているのは辻褄が合わない」

「蒔苗が鉄華団の武力で議事堂へ向かおうとしている。と言いたいところだが、それは俺達にとって都合の良いすぎる解釈だろうな」

自宅に帰ると言うのに嚴重に身を固めて玄関をくぐる者は居ないだろう。家に不埒な輩が居座ってでもいなければの話であるが。

「命令自体は統制局からの正式なものだ。だが辿っていけば大本は異なる」

「誰だ？」

ガエリオの問いに、マクギリスは皮肉気に口元を歪めた。

「ヴィーンゴールヴ司令、イズナリオ・ファリドだ」

その答えにガエリオは目を見開くが、そんな彼の事など構わずにマクギリスは話し続ける。

「調べてみれば単純な話だったよ。蒔苗氏の贈賄疑惑からの国外逃亡は敵対派閥の追求を逃れるためだとされていたが、実際は違う。政敵であるアンリ・フリユウと繋がり、ギヤラルホルンと言う軍事力を運用出来る人物から身を守るための行動だった」

マクギリスの言葉の意味が察せ無い程ガエリオは馬鹿ではない。

「つまり、イズナリオ様がそのアンリ・フリユウと繋がり蒔苗を追い落とした。アンリとやらはさぞかしファリド公に恩を感じるだろうな。あるいは弱みを握られたと言うべきか。そしてそこにつけ込めば、ファリド公は容易にアブラウに対し影響力を發揮出来る」

そこまで言うと、ガエリオはマクギリスの座る机へと歩み寄り、手のひらを打ち付けた。

「これが範を示すべきセブンスターズの行いか!？」

「落ち着け、ガエリオ」

「お前にとっても他人事では無いだろうマクギリス!いや、ファリド家の人間であるお前こそ!」

「そうだ、だからこそ冷静に事を進めねばならない」

そうやって彼は立ち上がりガエリオと視線を交わす。

「以前私が話した事を覚えているか、ガエリオ?」

二人は幾度となく言葉を重ねてきた間柄である。だがこの瞬間、この状況で指し示す話と言えは一つしか無い。

「ギヤラルホルンを正す。お前はそう言った」

「そうだ、そう考えるならば今は決して悪い状況では無い。大きな不義が鉄華団という外的要因を受けその身を晒しつつあるのだ。むしろ我々にとつては奇貨と言え」

「だが無傷では済まない」

「そうだろうな。セブンスターズが起す不祥事だ、ギヤラルホルンの信用は大きく揺らぐだろう。だがガエリオ。我々にとつて都合の良い

い程々の不義を待ちこれを見逃すと言うならば、私達に正義を語る資格が有ると思うか？」

視線を逸らすことなく問いかけてくるマクギリスを見て、ガエリオもまた腹を括る。

「本気なんだな？」

「ああ」

即座に返ってきた言葉にガエリオは力強く頷くと拳を突き出し宣言した。

「ならば今、ガエリオ・ボードウインはここに誓おう。セブンスターズがボードウイン家の一人として。そしてマクギリス・ファリドの友として、共にギャラルホルンの不義と戦うと」

ガエリオの宣言にマクギリスは一瞬眩しそうに目を細めた後、いつもの笑顔で突き出していたガエリオの拳に自らの拳を合わせてきた。

「後悔するなよ？私もここに誓おう、どの様なことがあってもギャラルホルンを正すと」

そう口にするマクギリスに向かってガエリオは挑発的な笑みを浮かべ言い返す。

「後悔などするものか。第一、俺にそんな思いをさせる男にアルミアが託せるか」

「困ったな。これからファリド家は厳しい立場になる。それこそ最悪セブンスターズの席を返上する事態になるやもしれん。当然嫁いできた妻にも辛い思いをさせることになるだろう。その時お前が後悔しないとは限らない。ここは一度アルミアとの婚約は白紙に戻して…」

顎に手を当て、マクギリスは不穏な事を口にします。

「友を後悔させる訳にはいかないからな。私としても断腸の思いだが、涙を吞んでアルミアの事は諦めるしかないか。ガエリオを後悔させる訳にはいかないからな」

「おい馬鹿止めろ。俺の言葉が原因で婚約が破棄されたなどと知られたらアルミアに何をされるか解らん。あれであいつもボードウインの娘だぞ？お前は俺を後悔する前に死なせるつもりか？」

その物言いに半眼になりながらガエリオが言い返せば、マクギリスは悪戯に成功した子供の顔で口を開いた。

「冗談だ、アルミアと約束もしている。彼女は私が幸せにする。この役目を誰かに譲るつもりはない。さあガエリオ、準備をしよう。そろそろ古く淀んだ空気は吐き出す時だ」

4.4. 物事の終わりが劇的に始まることは希である

その始まりは、実に奇妙なものだった。

『我々は鉄華団、アーブラウに認定された民間軍事企業である。現在我々は蒔苗前アーブラウ代表を護送中である。前方に展開するギャラルホルン部隊に告げる。即刻進路を開けられたし、貴官らの行為は蒔苗氏の行動を著しく阻害するものであり、これはアーブラウに対する重大な内政干渉である。繰り返す、ギャラルホルン部隊は即刻進路上より退去せよ。聞き入れられない場合、内政干渉と見なし実力をもつて貴官らを排除する』

その言葉を聞いた部隊長の男は困惑した。無論言葉が通じないというわけではない。むしろ十分理解出来たからこそ彼はどう行動すべきか迷ったと言えるだろう。

「た、隊長。どうすれば?」

歩兵用装備に身を包んだ若い隊員が震えた声音でそう尋ねて来る。

「:現在本部に問い合わせている。我々の勝手な判断で持ち場を離れるわけにはいかんからな」

「は、はい。その、隊長」

「まだ何かあるのか?」

「連中の言っている事は本当でしょうか?その、我々が内政干渉をしていると」

「それも含めて本部に確認している。良いから持ち場に戻れ!」

強めの語気で新人を追い払うと、男はバイザーを上げ熱を持った顔を外気に晒した。

(内政干渉か、だど?これがそうでなかったら何がそうだと言うんだ!)

口に出さずそう彼は罵りつつ、周囲をそれとなく見回す。鉄華団を名乗る武装組織からの通告は今も続いており、それを耳にした多くの隊員が動揺している。無理もない。モビルワーカーや歩兵部隊に配属される隊員は一般募集によって集められた所謂“家無し”と呼ばれる人間で、更にその中でも特にコロニー出身者といったコネを持た

ず、実力も示せなかつた者達で構成されている。

「いかな」

男は顔を顰めながらそう呟く。元々ギャラルホルン内でもこれらは士気の低い部隊であるが、自分達の行動を明確に批難される事で更に士気を低下させられている。加えて部隊長クラスの中にも今回の任務に対し懐疑的どころか否定的な者も少なくない。足並みが揃わない状況では数の優位が生かし切れるとは思えない。

(そもそも連中はMSを持っていないじゃないか。それを歩兵とモビルワーカーでどう止めろと言うんだ!?)

今は行儀良くしているが、追い詰められればどうなるかなど解つたものではない。対応するために地球外縁軌道統制統合艦隊のMS部隊が増援として来ていた筈だが、今のところ動いた様子は無い。

「まさか、連中が痺れを切らすのを待っているのか?」

嫌な予感が男の脳裏を過ぎる。何しろ今こちら側には彼等を止める正当な理由が無い。MSの保有を理由に武装解除を迫る事が出来るが、それでは本来の目的である蒔苗東護ノ介の拘束が叶わない。護衛であると明言された以上鉄華団との繋がりを理由にギャラルホルンが身柄を確保するのは、誰の目から見ても越権行為だからだ。だがもし彼等が武力をもって強引に突破を凶れば、更にその為にMSまで持ち出したなら?

治安維持の大義名分を掲げ、ギャラルホルンは大手を振って蒔苗ごと彼等を鎮圧するだろう。その為にはギャラルホルン側が先に撃たれ、被害を出す必要がある。そしてその担当は、現在鉄華団の進路を塞いでいる彼の部隊になるだろう。

「冗談じゃないぞ」

今まで鎮圧してきた暴徒などとは比較にならない暴力を目の前にして男は顔を顰めた。そして万一の場合は独断で行動する事を心に決める。上層部の政治など末端である彼には関係の無い話であったし、部下達の命を巻き込んでまで理不尽な任務に従事するだけの忠誠心を彼は持ち合わせていなかったからだ。

「随分暢気なものだのう」

スピーカーでギャラルホルンの部隊に警告を続けているウチのモビルワーカー隊を遠巻きに眺めながら、蒔苗氏が髭を弄りつつそう口にした。どうでもいいけどすげえ髭だな。それ癖毛なの？

「これで退けば儲けもの、そうでなくても彼等の正当性を攻撃する事で士気の低下、連携の齟齬を狙える。加えてギャラルホルンによって貴方が不当に抑え込まれていると言う喧伝にもなりますから、議会でロビー活動をしてきている貴方の派閥の人間には追い風になるでしょう」

「そんなことは解っておるよ。だがその努力も儂が議事堂にたどり着いてこそ意味が生まれる。こんな悠長なやり方で間に合うのかね？」

長生きの割には忙しねえジジイだな。まだ3日もあるだろうが。

「無論間に合わせますとも、そういう約束ですからな」

「口ではどうとでも言えるの、だが儂は納得できる成果を見せて欲しい。あの様子でたどり着けるとは儂には思えん」

まあスピーカー越しに好き放題喋ってるだけで距離としては1ミリも進んでねえからな。けどな、爺さん。アンタが満足したい1ミリにはウチの社員の命が懸かっているんだぜ？

「失礼ですが、蒔苗氏。部隊を指揮したご経験は？」

「そうした機会には恵まれなかったの」

この世界の地球は随分平和みたいだからな、当然そうだろうよ。連邦みたいに軍属経験が無きや大統領になれないなんて事も、こんな体制じゃまず無いだろうしな。

「我々も政治は素人です、貴方がもう一度アープラウ代表に確実に就けるかなど解りませんし、貴方の行動からそうと納得できるだけのものなど頂いていない。ですが我々はそんな口先だけの爺を命がけでここまでお連れしています」

俺がそう言い返すと蒔苗の爺様は髭を弄っていた手を止め睨み付けてきた。そこらの若造ならびびらせられたかもしれんが、相手が悪

かったな。いつでも簡単にくびり殺せる相手に睨まれたところで屁でもねえよ。ついでに言えば殺気も足りん、出直してこい。俺は目を細め爺様を睨みながら言葉を続ける。

「何故なら我々は貴方の口にした約束を信じているからです。たとえ目に見える成果を出していなくても、貴方は我々が契約を果たした暁には必ず約束を守ると思っているのです。そんな我々を貴方も多少は信じてほしいものですな」

「信じろか、それを政治家の儂に言うのかね？」

化かし合い、だまし合いが当たり前前の世界に住んでいるとまあそうなるよね。

「言うとも。勘違いしているようだから訂正させてもらうが、我々は貴方の商談相手であつて部下でも走狗でもない。要望に可能な限り応える努力はするが、貴方の満足のために社員の命を無駄に危険に晒すわけにはいかん」

「無駄にか。商談相手の心証は考慮せんのかね？」

「勿論考慮しているとも。それでも呑めんと言っているのだ。貴様にとって記録上の数字に過ぎない損失は、我々にとって無視出来ない喪失なのだよ。素人のご機嫌取りに付き合つて出して良いものではない」

「言つてくれる。そこまで言うのなら、必ず間に合わせてみせろよう。」

そう言つて踵を返す爺様に向けて、俺は言い放つた。

「当然です、我々はプロですからな」

『コーリス隊長、アーブラウ駐留部隊の司令より出撃の指示が』

コックピットに収まり腕を組み瞑想していたコーリス・ステンジャの耳にオペレーターからの通信が入る。彼は目を開くことすらせず短く告げた。

「無視しろ」

『はっ！』

彼の言葉に逡巡も見せずにオペレーターは応じる。だが暫くする

と、今度は彼の乗機に直接通信が入った。

『コーリス・ステンジャ三佐！何故出撃しない!?』

アーブラウ駐留部隊の司令である三佐がそう怒鳴る。それに対しコーリスは静かな口調で応じた。

「出撃命令が出ていないからだ」

『巫山戯るな！何度もこちらから——』

「こちらから、なんだ？」

『っ!?!』

相手に言い切らせることなく、コーリスが告げる。

「我々は地球外縁軌道統制統合艦隊に所属する部隊だ。我々の地球における行動権限は司令であらせられるカルタ・イシュー一佐に一任されている。何故我々が貴官の指示に従って出撃せねばならないのかね？」

既にコーリスには、カルタを通してアーブラウ駐留部隊の司令がイズナリオ・ファリドの私兵として部隊を私物化していることが伝えられている。そしてそれは、ギャラルホルンの正義に対し誇りを持つて任務に当たっている彼等にとつて許しがたい背任行為であった。もし許可が出ていたならば、コーリスは躊躇無く駐留部隊司令部を強襲し背任者達を拘束していただろう。

「そんな事よりも我々としては君たちの部隊展開こそ危惧している。彼の様な配置では万一戦端が開かれた場合、市街地に被害が出る恐れがある」

『わ、我々は戦術的に適切な用兵をしているだけだ!』

馬鹿か貴様は。そう出かけた言葉をコーリスは呑み込む。しかし感情までは抑えることが出来なかった。

「治安維持の為に展開している部隊が、戦闘時に防衛対象へ被害が出る配置で適切だと？連中は貴官が懸念するMSも装備しているのか？私には市街地を盾にしているようにしか見えんがね」

そのおかげで武装勢力が攻めあぐねていると言うのだから、どちらが市民に配慮しているかなど一目瞭然である。そしてこの司令官殿はそんな事も理解出来ない程頭が悪いようだ。

(所詮不正に手を出す輩などその程度と言う事か。しかし、そんな者が三佐と言う地位に就ける。これは深刻過ぎる事態だ)

何かをまくし立てている駐留部隊司令からの通信を一方的に切断すると、コーリスは溜息を吐きながら眉間を揉む。

「ギャラルホルンの正義、それそのものを守らねばならぬ日が来るとはな」

彼の呟きは誰にも聞かれず、コックピットの中に溶けて消えた。

45. 自らの欲望の為に他者を踏みにじる者を悪魔と呼ぶ

「火星人風情が、煩わせてくれる」

会議まで残り1日となった朝、イズナリオ・ファリドはアーブラウ駐留部隊司令の泣き言によって起こされていた。蒔苗東護ノ介を市内に入れるよう繰り返し要求してくる鉄華団。その行動は初日の夕方には蒔苗派の議員達に届いており、彼らから駐留部隊に対し批難が発せられるまで大した時間はかからなかった。中には行動的な人間もおり、件の警告が続いている前線に赴いて隊員に直接抗議を行う者まで出る始末だ。更にその様子をメディアが取り上げた事で、ギヤラルホルンへの風当たりは非常に厳しいものとなっている。そこに加えて地球外縁軌道統制統合艦隊の部隊が露骨なボイコットに及んだことで、駐留部隊司令の容量は完全に飽和してしまったらしく、朝食も済ませていないような時間からイズナリオに連絡を入れてきたのだ。因みに同じようにアンリ・フリユウからもひっきりなしに連絡が入っている。

(どいつもこいつも浮足立ちおって、それこそが連中の狙いだと解らんのか)

「ひっ」

抑えきれない感情が手にした杖を軋ませると、その音を聞いた愛人が小さく悲鳴を上げた。ここの所苛立ちから、少々手荒に扱ってしまった為の反応だったが、その怯えた表情がイズナリオの精神を満たす。

「部屋に行っていないかい」

頭に手を載せ、優しくそう告げる。一見すれば怯える子を宥める紳士に見えるが、勿論そのような健全な間柄ではない。怯えた表情のまま少年は一度頷くと足早に与えられた部屋へと戻っていく。それを満ち足りた表情で見送った後、イズナリオはいつも通りの鉄面皮を被り直し廊下を進む。そして執務室にたどり着くと、専用の回線を起動

させた。

「私だ、君が役に立つときが来たようだ。頑張り給え」

名乗らず、聞かず、必要な事だけを告げて通信を切る。高く昇りつつある太陽に照らされる木々を眺めながら、イズナリオは静かに笑う。

「所詮は悪あがきである事を教えてやろう」

その醜悪な笑顔を見る者は、幸運な事に誰一人いなかった。

「大分良い感じじゃねえか」

双眼鏡越しに対岸を見ていたオルガがそう言って口元に笑みを浮かべる。彼自身も当初この案を聞いたときには懐疑的であったが、その効果は彼らの想像を遥かに上回るものだった。

『すげえよ。弾の一発だって使ってねえのに、向こうはもうグダグダだぜ』

オルガの乗るモビルワーカーの操縦を受け持っているシバ・アミーが感嘆の声を上げた。

『ああ、こういう戦い方もあるんだな』

そう応じたのはモビルワーカー隊を取りまとめているライナ・フローラルだった。彼らとて三番隊の古参であり、相談役とは長く接しているので戦場における心理状態が戦闘に影響を与える事は理解していた。それでも情報の操作と心理的圧力のみで相手の抵抗を奪い去る事が出来るなど想像の埒外だったのだ。

「よおし、お前ら！道を開けるぞ！」

そう叫んでオルガは車内に引っ込むと、スピーカーから流していた放送の内容を切り替える。勿論近くのビルに報道陣が居る事を確認した上でだ。

『ギャラルホルンの部隊に告ぐ。度重なる警告に対し、貴官らは悉く沈黙を続けた。故に我々は交渉の意思は無いと判断する。これより我々は実力をもって、蒔苗氏を議事堂までお連れする』

その宣言は場の空気を一変させた。どこか浮ついた雰囲気であっ

たギャラルホルンの部隊は慌てて持ち場に就き始め、実力と言う言葉から想像される衝突をカメラに収めんと報道陣も身を乗り出す。だが、彼らの目の前に出てきたのは、その言葉とはかけ離れた代物だった。

『おーおー、混乱してる混乱してる』

愉快そうなシバの声に背を押されて進んでいくのはテイワズから買い付けたモビルワーカーだ。しかしその姿はとてもギャラルホルンが喧伝しているならず者の武装集団が運用している装備には見えなかった。足回りこそそのままであるが、車体周辺は追加で取り付けられた装甲板で覆われている。それだけならば装甲を強化しただけと言いつ張れなくもないが、一方で肝心の武装であるはずの主砲は取り外され、代わりにアームが付いたクレーンが鎮座している。その姿はどうも鼻屑目に見ても作業車だった。

「よし、やれー!」

誰もが硬直する中、順調に橋を守っている部隊の前まで辿り着いたクレーン車はアームを伸ばし、バリケードの一つを掴むと橋の外へ放り投げた。コンクリートと鋼板を重ねて作られたバリケードは、重々しい音を響かせながら地面に落下する。呆然とギャラルホルンの隊員が見守る中、更に追加で送り込まれた作業車が別のバリケードに取り付き、再び持ち上げて放り捨てる。

『と、止めろお!』

駐留部隊の指揮官らしき人物がそう叫ぶが、部下たちはどうして良いのか解らないらしく右往左往している。それはそうだろう。動き回っている重機を生身で止められる訳がないし、かといって武装もしていない相手をメディアの前で攻撃するのも問題だ。結局彼らが、鉄華団が人間に危害を加えられない事に着目し、人間でバリケードを作り作業車の行動を阻むまでに、三層分のバリケードが突破されていた。

『クソー後ちょっとだったのに!』

ライナがそう叫ぶが、その声は何処か弾んでいる。武力で脅してくる連中を手玉に取るのが楽しくてしょうがないのだろう。その声を

聴いた他の連中も同じような反応である。そしてオルガもその一人だった。

「はは、すげえ」

彼らの世界はシンプルだった。殴って殴られて、奪って奪われて、そして殺し殺される。暴力とは最も身近で手軽で、何より解りやすい彼らの手段だった。しかし学ぶことを覚えた今の彼らは、それが如何に危険な選択肢であるかを十分に認識させられていた。

（あの防衛線を暴力で突破しようとしていたら、どれだけの武器や弾薬が必要だ？そして、突破しきるまでに一体何人が死ぬことになった？）

成程、暴力と言うのはとても簡単な解決方法だ。何せ馬鹿でも出来る。だが逆に言えば暴力で解決する人間は、他の方法で問題を解決できない馬鹿だという事だ。最初から殴り掛かるような馬鹿に言葉で応じようとする人間は居ない。暴力に返ってくるのは暴力だ。そして振るわれた暴力はその場限りで終わるのではなく、その先まで影響を与え続ける。それも大抵は悪い方向でだ。一度でもこいつらは話の通じない、暴力でしか物事を解決しない連中だと認識されれば。そんな奴と真面に付き合おうとする奴は居ないだろうし、取引をしようなどと考える人間もいなくなる。そんな状況でも生き延びようとするならば、誰かを襲って奪うくらいしか方法は無い。そんなものは最早人間ではなく獣か何かだろう。否、道具を使い人間を積極的に襲う分、それよりも醜悪な何かかもしれない。そんな未来をオルガは幻視する。それは学ばぬまま、ただミカツキの力だけを頼りに先を目指していた自分がたどり着いたであろう未来だ。

「もつと、もつと色んなことを覚えなきゃなんねえな」

今の彼には仲間がいる。あの頃ミカツキと約束した場所を目指しているのは、もう二人だけではない。そんな彼らの前を歩くなら、もつと自分は賢くあらねばならないとオルガは強く思った。

『おい、社長見ろー！』

シバの声でオルガは現実には引き戻される。そして彼の言葉の意味を直ぐに理解した。最後のバリケードの前、ギャラルホルンの隊員達

に対し詰め寄って交渉しているのはアンカレジで出会った蒔苗派の議員であるラスカー・アレジ議員だった。つまり彼の目の前に蒔苗氏を届ければ作戦は成功するのだ。

「輸送班に連絡しろ……ここしか——」

ない。そう言おうとしたオルガの言葉が、在り得ない音でかき消された。驚愕にオルガが目を見開き、何かの間違いではないかと計器を確認する。しかし機器は正常に作動しており、今日の前で起きている事がどうしようもない現実であることを彼に突き付けてくる。

「冗談だろう!？」

橋の向こうで、その事実を追従するように異常が発生する。灯りの灯っていたビルが次々とその灯を消し、電子機器を抱えていた報道陣が突然故障した機器に困惑の表情を浮かべる。そしてギャラルホルンの隊員は、砲口をこちらへ向けて戦闘態勢に入っていた。

「全機後退しろ！」

オルガの怒鳴り声に反応の遅れていたモバイルワーカーが慌てて敵モバイルワーカーの射線から退避する。彼らにとつて幸運だったのは、ギャラルホルンの最寄りに作業用に改造した無人機があった事だろう。何の被害も受けないままに陣地の大半を無力化してくれたそれらに対し、ギャラルホルンは躊躇なく発砲し、そしてスピーカーを通して大声で宣言してきた。

『鉄華団のMSが市内に侵入！繰り返す、鉄華団のMSが市内に侵入！各隊は所定の作戦要綱に基づき対象を鎮圧せよ！』

「これも想定内かの？」

「勿論、と言いたいところですが、残念ながら予定外です」

市街地に侵入したMSを双眼鏡で確認しながら、俺は蒔苗氏の皮肉に付き合った。入り込んだ機体はロディ・フレーム。あり合わせの装甲を取り付けているらしく、どうにもちぐはぐな印象を受ける。問題は無駄にでかい肩の装甲に鉄華団のマークがこれ見よがしにペイントされていることだろう。

「少々敵を過大評価していたようです」

そりゃ勿論そんな可能性がゼロではないとは考えてはいただき。けどさ、仮にもここは守るべき市民が居る都市なんだぜ？お前達など知るかと放り捨てた火星の人間でも奴隷のように扱っているコロニーの人間でもない。自分達を食わせるために働いてくれている、絶対に守らなきゃならない人間の筈だ。そんな人々の生活を、俺達を貶める為だけに破壊する？そんなこととした日には、間違い無く自分達の首も絞める事になる。だって、侵入した俺達を批難する前に、人々は侵入を防げなかったギャラルホルンを責めるはずだからだ。だから俺は、想定の中でこれは一番あり得ない状況として考えていたんだ。

「なんじゃ、プロも大した事がないのう？」

言ってくれるじゃねえか、爺。

「予定外ではありませんが、対処出来ないとは申しておりませんよ。まあ、力攻めになってしまいうのが残念ですが」

そもそもこちらのMSが市街地には入れなかったのは、エイハブウェーブによる損害を考慮しての事だ。先に破壊されてしまっているなら、遠慮する必要はない。問題は時間だ、俺達が身の潔白を示すには、あの偽物がギャラルホルンに撃墜される前に確保する必要がある。

「ミカツキ、アキヒロ。悪いが追加の仕事だ。ミカツキはあの偽物の確保、アキヒロはモバイルワーカー隊の支援だ」

『了解』

通信機にそう話し掛ければ、即座に応じる声と共に、丘陵の裏側に待機していた二機のガンダムが飛び出して行く。それを見送りながら俺は爺に話し掛けた。

「蒔苗氏は移動用の車両でお待ちください。こうなってしまうとすぐにも議事堂までお連れ出来てしまうでしょう」

「お主はどうするのかね？」

大義名分が出来てしまった以上、連中が狙うのは俺達の殲滅。ならば確実にこちらの本陣を狙ってくるだろう。

「本陣を守らねばなりません。ご安心を、そちらにはちゃんと護衛を

付けますとも」

さあ、ここからが正念場だ。

46. たとえ笑われようとも、誰かの不幸を無くすために戦う姿は尊い

震える手で操縦桿を握りながら、コーラル・コンラッドは機体を進める。その表情は屈辱に歪んでいる。

(私が、この様な汚れ役をつ！)

火星での一件により拘束された彼に取引を持ちかけたのは、誰であろうヴィーンゴールヴ司令その人であった。罪をもみ消す代わりに、名前と地位を捨て司令官の私兵となる。普通の人間ならばまず呑まない提案を、コーラルは即座に了承した。何しろ彼は言い訳のしようがない犯罪者だ。当然ギャラルホルン内での再起など望むべくもないし、最悪極刑すらもあり得る。否、むしろこの様な取引を耳にしてしまった時点で拒否すれば口を封じられるのは確定したと言って良い。そうとなれば彼に選択肢など存在せず、言われるがままにMSを駆り、エドモントンの市内を歩き回る。その心中は体の良い使い走り にされている事への苛立ちはあるけれど、巻き込み被害を受ける人々に対する感情は何も無かった。そう、弱者を罵る暗い喜びすらも彼は覚えていない。彼にとってこの地に住む人々は好悪以前の無関心な存在なのだ。それが彼にとっては幸運だったと言える。余計な感情を挟まなかったために、この戦場において彼は十分に余裕を持って行動出来ていたからだ。

「ぬっ!？」

鳴り響く警告音と同時にビルの陰から白い機体が飛び出す。低い姿勢で獣のように走り寄ってきたそれは、両手に携えていたショートソードの片方で、すくい上げるように切りつけてきた。その攻撃を彼は上半身を仰げ反らせつつ、左腕のバックラーでいなしてみせた。耳障りな金属が擦れ合う音と共に派手に火花が飛び散るが、機体は無傷だ。

「白い機体、ガンダムという奴か！」

『上手い』

コーラルの叫びに対し、返ってきたのは驚きを多分に含んだ少年の声だった。だがその様なことに拘泥せず、咄嗟に彼は外部スピーカーを入れて叫んだ。

「味方を攻撃するとは、どういうつもりだ！」

『はあ？知らないよ、アンタなんか』

当然の反応だがコーラルは構わず続ける。何しろ本来は適当なところでギャラルホルンの部隊に撃破され、回収される予定なのだ。予定の部隊が到着するまで倒されるわけにはいかないのだ。

「ふざけるな！まさか俺を捨て駒にするつもりか!？」

ついでとばかりに、自分が鉄華団の人間だという主張も入れていく。対するガンダムは平坦な声音で応じる。

『じゃあ、素直に投降しなよ。そしたら命くらいは助けるけど』

言い切ると同時に再びガンダムが距離を詰めてきて、ショートソードを連続して振るった。

「おおおっ!？」

息も吐かぬ連撃にバックラーは見る間に削られ吹き飛ばされる。そしてコーラルの使っているロディ・フレームは偽装のために様々な装甲を接いだ機体であったため、その勢いにバランスを崩され転倒してしまう。即座にガンダムは馬乗りになるとショートソードを振りかぶった。

『そこまでだ』

刃が正に突き立てられるその瞬間、落ち着いた声がガンダムを制止する。声のした方へコーラルは目を向け、自分の賭けが成功した事を確信した。

(この小僧に助けられるのは業腹だが、贅沢は言っていないらまい)

空から舞い降りてきたのは、濃紺の装甲を纏ったシュヴァルベ・グレイズ。この機体のパイロットはギャラルホルンには一人しかおらず、そして彼はコーラルの飼い主の息子なのだ。故に彼は次に放たれた言葉に驚愕する事になる。

『その男はギャラルホルンの不正を知る重要参考人だ。どうかこちらへ引き渡してはもらえないだろうか?』

「なっ!？」

思わず出た声に、マクギリス・ファリドが反応する。

『おや、どうやら随分と見知った人物の様だ。さて、どうかね?』

『アンタもギャラルホルンだろ?』

そう問うマクギリスに対し、ガンダムのパイロットは淡々と聞き返す。だがマクギリスは堂々と返事をした。

『確かに私はギャラルホルンだ。だが相談役の仲間でもある。それでは信用出来ないかね?』

『…いいよ、信じる』

『助かる。では早急に市外へ移動するでしょう。勿論、その男も一緒にね』

シユヴァルベ・グレイズとガンダムに両脇を挟まれる形で、コーラルの機体が引つ立てられる。コーラルは自らの人生が完全に終わったことを自覚し、コックピットで項垂れた。

『監査局のガエリオ・ボードウィン特務三佐だ! 双方武器を収めろ!』

アキヒロのグシオンとギャラルホルンのモビルワーカー隊との間に降り立ったガンダム・キマリスからそう声が響く。同じく傍らに降り立った紫色のシユヴァルベ・グレイズがこちらを向いてはいるものの、武器は抜かずに盾だけを構えている。

『どういうことだ?』

混乱するアキヒロの言葉に応じる様に、ガエリオ・ボードウィンと名乗ったキマリスのパイロットは言葉を続ける。

『今回の治安維持活動の内容及び、その指示者に重大な背信行為の容疑が掛っている! 故に監査局権限により現時点をもって任務を一時凍結する! ギャラルホルンアールブラウ駐留部隊は指示に従い駐屯地へ帰還せよ!』

その言葉の力は絶大だった。武器を構えていた歩兵とモビルワーカーが、先ほどまでの戦闘が嘘のように整列すると、整然と基地へと引き返していく。その様子を鉄華団の面々が呆然とみていると、橋か

らキマリスとシュヴァルベ・グレイズが飛び降り、道を空けた。

『通れ。…これで借りは返したぞ』

『蒔苗さんと呼べ！道が空いたぞ！』

その言葉に我に返ったオルガが即座に指示を飛ばす。言葉に応じる様に軍用の四駆が滑り込んできて、橋を渡って行く。それを呆然と眺めていたアキヒロにガエリオが声を掛けて来た。

『そこに居ては市街地の復旧の邪魔だ。さっさと帰れ』

橋を渡りきった四駆に隠れていたスーツの男が駆け寄る。その人物がラスカー・アレジである事を確認したアキヒロは自らの仕事が終わったことを確認し、機体を翻した。

『どうやら、終わりましたようね』

拠点として使っていた廃駅を取り囲んでいた機体の内、唯一こちらを向いていたグレイズリッターから、そんな声がスピーカー越しに伝えられた。

「そのようだね、これからどうするのか？」

俺が問い返すと、彼女はロングソードを地面に突き立てたままに、溜息交じりで言葉を紡ぐ。

『理由はなんであれ、貴方達が正規の手続きを踏まずに地球に降りたという事実は変わりません。地球外縁軌道統制統合艦隊としては、ここで捕縛しないという選択肢は無いのです』

だよなあ。お役所仕事と言えば聞こえは悪いが、そもそも治安を守る側が個人の裁量や感情で行動したからこそ今回のような事が起きているのだ。それを否定したのだから、俺達を見逃す訳にはいくまい。

『上等じゃん、返り討ちにしたげるわよ』

そう言っつて獰猛に笑うラフタ嬢を、俺は手で制する。

「少し落ち着きたまえ。殴ってでも捕まえるつもりなら、あの様な態度は取るまい」

何しろ彼女達は先ほど言ったとおりカルタ嬢の機体を除き全て外

側、本来ならば味方であるアークブラウ駐留部隊のMSへ正面を向けているのだ。いくら正義に拘ると言っても、本気でこちらを制圧するつもりなら、まずあり得ない行動だ。

『私としても、素直に投降していただけると大変助かるのですが』

そうは言うものの、どこか歯切れの悪いカルタ嬢。おそらく自身の中にある正義と今の俺達を捕まえるべき法の乖離に悩んでいるのだろう。なればこそ、俺がすべき事は押し通る事ではない。MSに持たせていた刀をゆっくりと地面に置く、更に機体を正座させ他の装備も外して置いた。

「投降する」

『ちよつとおじさん!?』

『ラフタ、よしな！指揮官はあの人だよ!』

うむうむ、ナイスフォローと言う奴だよアジー嬢。後ろのシノやディオス、ガットの機体も俺に倣って武器を手放した。それを確認し、俺はカルタ嬢に告げる。

「見ての通り、彼等は私に煽動されたに過ぎん。寛大な沙汰をお願いしたい。全ての責任は私にある」

『それで、貴方は良いのですか?』

好き好んで捕まるような変態じゃねえよ。

「悪法もまた法なり。間違っていると声を上げること、正すべく行動する事も大切だ。しかし、間違っているから守らなくて良いとはいかん。人が人として生きるには、どうしてもルールが必要だ。それを気に入らんと守らなくなれば、人はあつという間に獣に成り下がるだろう」

だから彼等に俺は示さなきゃならない。ルールを守らなかつた者の末路を、そして悪法を放置することの理不尽を。

『承知しました。：鉄華団のマ・クベ、貴方を不法侵入及びMS不正所持の容疑で拘束致します。他の者達も、MSを降りて指示に従うように』

硬い声音でカルタ嬢がそう告げる。俺は機体を操作してコックピットを開放する。抜けるような青空の下でも冬のエドモンソンは

肌寒く、外気は肌を刺すようだ。ゆつくりと近づいてきたギャラルホルンの隊員に、俺は両手を上げ降伏の意思を示す。

『彼等は投降しました、手荒なまねはしないように』

カルタ嬢の声が響き、取り押さえようとしていた隊員は、俺を立たせたままに手錠をかけた。はっはっは、人生色々あったが、流石に犯罪者として捕まるのは初めての経験だな。

「こちらへ」

そう丁寧に対応してくれる隊員に頷いて彼の後ろを歩く。蒔苗氏の代表再選を俺が知ったのは、ギャラルホルンアープラウ駐留部隊の留置所での事だった。

47. 火星の王様

『いや、大概慣れたけどよ、良いのか?』

インカム越しに聞こえてくるアキヒロの声は、既に諦めの色が出ている。だというのに一々聞いてくるとか、ガタイの割に相変わらず肝が小さい奴である。

「構わん、やれ」

『知らねえからな?』

躊躇無くそう言つてやれば、目の前に居たロディ・フレームが手にしていたスコップを地面に突き立て、次いで大量の土砂を巻き上げた。

「ふははは! 大変結構! その調子でどんどん掘れ!」

伊達に人型をしとらん。人間の道具と同じ物を与えれば作業機械に早変わりだ。作ってくれた雪之丞には後で旨い物でも持つてつてやろう。高笑いをしながらアキヒロの作業風景を眺めていたら、モビルワーカーが走つてきて横滑りをしながら停止、荷台からスーツにCGSの制服を羽織った男が飛び降りるや、こちらに向かつて怒鳴つてきた。

「てめえ、マ! この野郎帰つて来て早々何してやがる!」

「見ての通り、池を造っている」

「あ、これ池だったんだ?」

「うむ、アーブラウで品種改良された淡水魚がいてな、折角だから火星で育たんか試してみようと思つたんだ」

モビルワーカーの操縦席から顔を出して聞いてきたライドにそう答えると、マルバがこちらに詰め寄つてきた。

「ここは! 第四演習場だぞ?」

「大丈夫だ、今回は土地改造の申請は済んでいるから役所の連中も襲つてこない」

「ちげえよそうじゃねえ!」

ウチの社長はテンション高えなあ。

「自治権拡大に伴つて再開発が決定しただろう? 今後河川や貯水池と

いった施設での活動も増える。そういう場所での行動について学べる環境を用意するのは重要な事だ」

俺が施工図に目を落としながらそう言うと、マルバとライドがチベットスナギツネ——信じられない奇跡でこの世界でも生存している——みたいな顔でこちらを見ながら口を開く。

「で、本音は？」

「だって美味しい魚食いたいじゃん。あ、アキヒロ、右に逸れているぞ」「ロデイ・フレームは力が足りねえ」

ガンダムフレームと比べるんじゃないよ。出てきた岩の位置などを書込みながら視線を送れば、ライドは愉快そうな笑顔で、マルバはまるで胃が痛むような苦悶の表情で突っ立っている。何、暇なん？首を傾げているとマルバが俺の手から施工図をひったくり、モバイルワーカーの荷台を親指で指しながら口を開いた。

「上から呼び出した。さっさと行ってこい馬鹿野郎」

えー。

「先週呼び出されたばかりなのだが」

「おう馬鹿野郎。忘れてるかも知れねえがお前今観察処分だからな？呼び出されたらすぐ行くんだよ馬鹿野郎。今度ギャラルホルンに睨まれたら100%てめえのせいだからな？判ったか、この馬鹿野郎」

三回も言った！前世でもそこまで言われたこと…結構あったな。

「ならば仕方ない。ライド、帰りにマサヒロとアストン達に声をかけてくれ、あいつらならここの施工が解るから、アキヒロのナビを任せたい」

「はい、了解ッす」

「来るまでは俺が見といてやるよ。おら、インカム寄越せ」

仏頂面でそう手を出してくるマルバを見て、俺は笑う。ああ、帰ってきたんだなあ。

「まだなの？全く、男というのは何故こうも女性を待たせるのかしら

？」

ギャラルホルン火星支部の本部である宇宙ステーション、アーレスの執務室でカルタ・イシュー一佐はそう口を尖らせる。それを見て、近くに立っていたコーリスが苦笑しながら応じる。

「出頭指示を出したのは今朝方です。シャトルの都合もありますから、最低でも出向くのは昼過ぎでしょう」

「だから専用のシャトルを常駐させるべきだと言ったのよ」

その言葉に周囲に居た他の青年達も困った顔になる。実情はどうであれ、今の彼は保護観察処分中の身である。そんな相手を特別扱いするのは一般的に見て異常であるし、その様なことをすれば対立派閥の良い攻撃材料になってしまう。特にエドモントンにおける一件でフアリド家が大きな失態をおかしている現状で、これ以上の余計な弱味は作るべきでは無い。そう彼に説得され、カルタも一度は頷いたものの、やはり納得とはほど遠い状況だったようだ。

「仕方ありません。個人向けの教練は午後に戻して午前は集団戦の訓練を中心に行います。それからコーリス、都市部で活動家達の運動が活発化しています。地上部隊の行動は暫く要請に対応するのみに留めなさい。余計な刺激をしたくないわ」

溜息を一つ吐いた後、カルタはそう部下達に指示を出す。彼がギャラルホルンに拘束されている間、捕縛した責任者として監査局より監視を要請されたカルタは長く彼と接していた。おかげでギャラルホルン内で最も彼の影響を受けてしまった人物と言える。それは彼女に足りていなかった現状に即した軍事知識を補填した一方で、思想や信条と言う面でも多くの変化を見せていた。尤も最大の変化は失恋の経験と次の恋を見つけた事だろうが。おかげで今まで彼女の周囲を固めていた有能な人材が、それぞれ部隊長として機能する事で、カルタの率いる部隊は飛躍的にその戦闘能力を高めつつある。

「それと、本国に要請している艦艇の配備についてはどうなっているかしら？」

彼女の問いにコーリスが答える。

「地球外縁軌道統制統合艦隊の規模縮小に伴う余剰艦艇の内2隻の

ハーフビークを回して貰えます。残りはアリアンロッド艦隊預かりに」

「つまり手に余る事態が起きた際はアリアンロッドの支援を受けろ、と言う事ですね。：エリオン公はともかく、クジヤン公は心許ありませんわね」

アーブラウ内政干渉問題以降、ギャラルホルン内では大がかりな再編が行われている。本部施設であるヴィーンゴールヴ司令が実刑から逃れるために亡命、その後失踪などしたのだから無理もない話だ。カルタ自身も今回の責任をとって地球外縁軌道統制統合艦隊司令の職を辞している。火星支部の支部長に納まったのはセブンスターズの当主が無職では問題であると言う政治的判断と本人の希望によるもので、これにファリド家現当主とボードウィン家の後押しがあれば異を唱える者はいなかった。

更に鉄華団への対応から地球外縁軌道統制統合艦隊はその規模とその任務内容を見直される事となる。最終防衛線を守護する部隊としての性格よりも、アリアンロッド艦隊をすり抜けた小規模な戦力に対応するために、規模を縮小してでも即応性と柔軟性が必要であるとの結論から、大幅に戦力を削減するのと同時に訓練内容の見直しを計っている。

当初は艦隊運用の経験を持つイオク・クジヤンが後任に推薦されたが、本人が固辞したため現在はボードウィン当主であるガルス・ボードウィンが受け持つ事になった。ヴィーンゴールヴ司令の地位も当初はファリド家が引き続き担当するという案も出ていたが、イオクと同じくマクギリス・ファリドがこれを固辞、現在はバクラザン公とファルク公が共同管理する事で一応の決着を見ている。

「クジヤン家の連中は少々ご当主に甘すぎますからな」

「あら、貴方達も随分私を甘やかしていると思うのだけれど？」

そう評するコーリスに、カルタは愉快そうに問い返す。彼女が火星支部へ異動すると言った際、コーリスを含めて多くの者がそれに付き従う形で異動を希望、特に旗艦に所属していた者に至っては全員が付いてきた程だ。左遷にも等しい人事に自ら好き好んで付き従うなど、

カルタからすれば随分過保護に映ったのだ。

「甘やかされていると御自覚があるなら問題ないでしょう。それにカルタ様には指南役がおりますからな。甘やかす人材も必要でしょう」
そう涼やかに笑うコーリスに、カルタは素直に笑顔を向ける。

「ならば皆の期待に応えられるよう励むとしましょう」

そう言つて彼女は執務に取りかかる。火星支部長の席は決して疎かに出来るものではないのだから。

「やれやれ、やつと息が吐ける」

襟元を緩めながらイオク・クジヤンは乗艦の司令席でそう溜息を吐く。それを見ていたジュリエッタ・ジュリスが半眼になりつつ口を開く。

「イオク様はもう少し絞られた方が宜しかったのでは？」

「ぐ、相変わらず口の悪い山猿め」

「諫言する部下に対してその物言い、壺の人の言つた暗愚な君主の典型例ですね」

「お前のは諫言では無くただの悪口ではないか！まあしかし、ラストル様に言われたから会つてはみたが、正直そこまでの人物とは思えなかつたな。あれならばラストル様の方が余程大人物だろう」

その物言い、ジュリエッタは気付かれぬよう静かに溜息を吐いた。彼女の主であるラストル・エリオンが大人物である事は疑いようのない事実だ。孤児であるジュリエッタを見いだし、取り立ててくれたと言う大恩もある。アリアンロッド艦隊をまとめ上げる手腕やイオクなどからも解るように人心の掌握にも長けている。だがそれらを十分に振るえるだけの地位に彼がいるのは、セブンスターズのエリオン家であると言う事が大きい。幼い頃に真面目な教育を受けられなかつた事によるハンディキャップを身を以て知っているジュリエッタにしてみれば、むしろ戸籍すらも曖昧な壺の人がラストルと比較になる程の才覚を見せている方が異常なのだ。

（在野、それも蔑まれる火星出身者ですらあれだけの才覚を示す者が

いる。血統主義の現状に少しでも疑問を持ってと言う配慮だろうに、この盆暗は)

ラスタルの意図も読めず、貴重な識者との面会からも学べぬ事に、ジュリエッタは自身の中でイオクの株が更に下がるのを自覚する。

「いっそ、イオク様が火星支部に赴任した方が良かったかもしれないね」

「何を馬鹿な、この私が学ぶべき相手はラスタル様を措いて他にはいない」

その思考が既にラスタル様から何も学べていない証拠ですよ。ジュリエッタは内心そう思ったが、それを口に出す事は無かった。言っても無駄なことを口にする程、彼女は愚かではなかったからだ。

本編2期編

48. リスク管理は社会人の持つべき大切な技能である

「良かったんですか、親父？」

名瀬の問いにマクマードは葉巻をくゆらせながら問い返す。

「良かったって、何がだよ？」

「鉄華団との交渉ですよ。アーブラウの軍事顧問なんて、地球に食い込むならいい話だと思うんですが」

「おいおい、名瀬よ。お前にしちや随分危ねえ橋を渡ろうとするじゃねえの」

二人の会話に口を挟んだのはジャスレイ・ドノミコルスだった。

「危ない、ですか？」

「おうよ、確かに経済圏の軍事顧問なんていやあでつかいやマだ。それこそ火星でのハーフメタル利権よりよっぽど未来があらあな。けどな、あそこは俺等が生まれるずっと前、それこそ文明なんて呼ばれるモンが出来たところから騙し合い化かし合いをしてきた連中の巣窟よ。そんな連中が再軍備をこれからしようって時なんだぜ？ただの商売相手ならともかく、軍事で一国に肩入れすりゃあ確実に他からはそいつの身内だと思われる。まかり間違って戦争なんか起きた日には、他の経済圏からそっぽ向かれるだけなら儲けもの、最悪一緒にたに殴られちまわあ」

「ジャスレイの言うとおりだ。確かに商売を広げる良い機会じゃあるんだが、しくじった時が火傷じゃ済まねえ。だから連中もこっちに投げてきたのさ」

そう言ってマクマードは皮肉気に頬を歪めた。

「それに地球周辺の軍事関係はタントテンポとの兼ね合いもあるからな。下手に荒らして難癖付けられてもつまらねえ、ここは大人しく地道に穴掘りといこうや」

「はい、出過ぎた口をききました」

頭を下げる名瀬に、雰囲気を変えるように口を開いたのはジャスレイだった。

「そういや、名瀬よ。おめえんとこの女が随分火星に入り浸ってるそうじゃねえか？」

「ええ、回して貰ったイオフレームのテストをCGSとやっています。別にやましい事はしてませんが？」

元々反りの合わない二人である。つい棘のある返事を名瀬はするが、ジャスレイは気にした風もなく話を続ける。

「別に疑っちゃいねえよ。そうじゃなくてな、ウチも結構な数のデブリが居るんだが、連中に稽古を付けてもらえねえかと思ってよ」

ジャスレイの率いるJPTトラストは輸送部門であると同時にテイワズ内でも有数のMS保有数を誇る暴力装置である。しかしその内情はお世辞にも良いとは言い難い。金で雇っている傭兵はそれなりの技量であるが、組織の為に命がけで戦えるような連中ではないし、命がけで戦うデブリ達は技量が未熟だ。

「デブリ達に教育を、ですか？」

彼から出た意外な提案に名瀬は驚いた表情になる。ジャスレイは社会的弱者を平然と食い物にしてきた男だ。だからこそ名瀬や彼の身内であるタービンスから嫌われている。そんな男の口からヒューマンデブリの待遇を改善するような提案が出るとは考えもなかったのだ。名瀬の表情にジャスレイは溜息を吐きながら答えた。

「連中のおかげでデブリ共に駆け込み寺が出来ちまったからな。今まてみたいに扱ってちや、どいつもこいつも逃げ出しちゃう。それこそMSごと逃げ出されでもしたら大損だ、それならちよつとくらい飴を与えてウチに居つかせた方が得ってもんだろ？ついでにデブリの腕があがりやあ、傭兵連中を放り出すなり値引きするなり出来るからな。懐自体は大して痛みやしねえって寸法さ」

あくまで自身の利益を優先する姿勢に名瀬は顔を顰める、それを見たマクマードが苦笑しながらジャスレイの言葉を継いだ。

「こいつの言い方は悪いが、デブリ達にとっても悪い話じゃねえ。ウチ全体としても抱え込んでるデブリの質が上がるのはいい事だ。こ

の一件はお前に任せようと思うんだが、やつちやくんねえか?」

「その言い方は狡いですよ、親父。解りました、けど教育つて言うなら幾らかかかりますが」

「そいつは必要経費だ、仕方ねえよ」

マクマードの返事に名瀬は頭を下げて部屋を出ていく。それを見送った二人は、名瀬が屋敷から出たのを確認して漸く口を開いた。

「で、あっちの方はどうなんだ?」

「裏ルートを探ってみたが、間違いねえよ。例のキットは全部火星から出回ってる」

「ノブリスん所か?」

マクマードの言葉にジャスレイは首を横に振った。

「あそこも随分扱っちゃいるが仲卸だな。大本はまだ解んねえが、かなりでかい組織だぜ」

「効果は確かなんだな?」

神妙な顔でジャスレイは頷く。

「ああ、売り文句通りだったよ。ウチのデブリ20人で試したが、本当に失敗は一人も出なかった」

「…100%成功する阿頼耶識、ねえ」

そんな売り文句の施術キットが出回り始めたのは、アーブラウと火星の一件が終わってから暫くしての事だった。面白い商品を仕入れたとノブリス・ゴルドンが持ち込んできたそれは、現在圏外圏に急速に広まりつつある。

「捌いてる連中は笑いが止まらねえだろうな。何せコイツのおかげで以前のキットは不良品扱いだ。まあ無理もねえよな」

ヒューマンデブリも阿頼耶識施術キットもはした金である、しかしそれは同時にただでは無いという事だ。それに消耗品と言っても、使わぬうちから半数が駄目になるよりは全てが使える方が買い替えの頻度が減るし無駄がない。しかもキットの値段が変わらぬとなれば費用は半分に節約できる。これに飛びつかない馬鹿は居ない。更に可笑しな事態まで引き起こしている。

「従来品の方を扱ってたバイヤーは不良品を掴ませたつつって海賊や

犯罪者共に掃除されちゃった。おかげで今や阿頼耶識の施術キットはコイツに独占されてきてる」

元々正規の市場で扱われるような品ではないから、独占禁止法も何もあつたものではない。マクマードとジャスレイは施術キットの市場が確実にこの新キットに独占されると確信していた。

「荒れるな」

マクマードはそう呟く。CGSの活動によって、ヒューマンデブリの有用性を圏外圏の無法者達は身に染みて理解している。そして追い散らされた彼らが戦力を容易に回復する手段を与えられたなら、その先は想像に難くない。圏外圏の安定はまだまだ時間を要するようだった。

『クツソ！振り切れねえ！』

『ペドロ、シザース！』

2機のランドマン・ロデイが虚空をスラスター炎の尾を引きながら駆ける、複雑に絡まる様に動くそれを、やはり2機の機体が追いかける。

『貫つた！』

連続して放たれた砲弾がペドロ機のメインスラスターを正確に捉え、大破させる。推力の均衡を崩された上に出力まで奪われたペドロ機は見る間に距離を詰められる。

『そう簡単に！』

止めの刺突を見舞う敵機に対しペドロは左腕の装甲を犠牲にマシンガンを接射、損傷は与えたものの撃破には至らず、再び振るわれたロングソードをコックピットに受けて撃破される。もう1機を相手取っていたビトーも一対二では如何ともし難く、程なく撃墜された。二人が撃破されると信号弾が上がり、演習の終了が告げられた。

「すげえなあ、ギャラルホルンの新型」

「ランドマン・ロデイでも引き離せないって、もう無理じゃん」

ハーフビーク級に帰還し、コックピットから降りたペドロとビトー

が感想を言い合う。その視線の先には、先ほどまで戦っていたギヤラルホルンの新型MS、レギンレイズが駐機されていた。その足元で整備員と話し込んでいたパイロットが二人に気付き、近寄ってくる。

「訓練の相手をしてくれてありがとう。デブリーフィングを行うから、さっきの部屋で待っていてちょうだい」

そう言って笑う年上の女性に二人は顔を赤くしながら頷き、慌てた様子で通路へと駆けて行った。それを見送っていた女性に対し、近づいてきた整備員が口を開く。

「ああしていると、ただの子供にしか見えませんね」

その感想に、カルタ・イシューは眉を寄せながら応じる。

「彼らはただの子供です。そうでないと言うなら、それは私達の責任でしょう」

彼らの境遇について、カルタは指南役と呼んでいる男から聞き及んでいる。当初こそ阿頼耶識に対する生理的嫌悪感を覚えていたが、交流を深めるうちにそうした忌避感も薄れていった。何しろ話してみれば、本当にただの子供なのだ。立ち振る舞いや言動に粗野な部分は見られるが、それらはカルタとて幼い頃から教育されて身に着けたものだ。元々弱い者を放っておけない気質であるカルタにしてみれば、一度理解してしまえば後は早かった。既に彼女にとって、ヒューマンデブリーの子供達は守らねばならぬ存在である。

「失言でした。申し訳ありません」

「いいのです。私もそう思えるようになったのは、ほんの最近なのですから。ですが変えていかねばなりません、以後は気をつけるように」

「はい。それにしても、レギンレイズは素晴らしい機体です」

カルタが火星支部に赴任して1年ほどが経過している。その間に非常に高い頻度で演習を行っているが、ここまで一方的な戦果を挙げるのは初めてだった。

「ええ、グレイズリッターも悪い機体ではなかったけれど、レギンレイズは一段上とはつきり感じます」

そう言って機体を見るカルタの頬は上気していた。その理由を

知っている機付きの整備員は密かに苦笑する。レギンレイズは本格的な対MS戦闘を想定して開発された初の量産機である。根本的なフレームから設計を見直し、更に性能を向上させたエイハブリアクターを搭載する事で、より重装甲高出力の機体となっている。本来ならばこのような機体は扱いが困難になるものだが、意外な所からこの問題の解決策がもたらされる。それが、アーブラウ事件の後に鉄華団から返還されたグレイズとグレイズリッターの存在だった。これらの機体には、阿頼耶識を用いて制作されたと思われる制御データが多数存在しており、これを解析あるいは転用する事で機体動作が大幅に改善したのだ。現在はレギンレイズに使用されているのみであるが、問題がなければ近くギャラルホルンの機体は全てこの新しいOSに置き換えられる予定である。

「問題は無いと思いますが、機体の確認をお願いします。特に手首周りは重点的に。私はデブリーフィングに行きます」

「了解しました。お気をつけて」

「はい、頼みましたよ」

何処かそわそわとした様子でブリーフィングルームへ向かう上官を整備員達は微笑ましい思いで見送った。

49. 殴って壊せるものが撃って壊せない訳がない

「圧倒的敗北じゃないか、わが軍は」

「ランドマン・ロディじゃ無理だつてー」

「グレイズもらって来てよ相談役。グレイズ」

机にへばりついて垂れているペドロとビトーが口々にそう不平を述べる。ええい、贅沢を言うんじゃありません。

「無茶を言うな、経済圏ですらフレック・グレイズが供給待ちなんだぞ？民間企業相手にグレイズを回せるわけがないだろう」

「正論なんて聞きたくなーい」

生意気に育ちおつてからに。

「まあしかし、やられっぱなしは確かに業腹であるな。どうしたものか」

「ガンダムを手に入れるー!」

「超凄い新型を開発する! テイワズみたいに!」

そんなもんホイホイ落ちてる訳ねえだろ、後我が社とテイワズの企業体力差を考えろ。

「不穏な悪だくみはせめてこの艦から出てからして下さいませ」

入口からそんな声が届き、そちらを見れば困った笑顔でこちらを見ているカルタ嬢がいた。ですよねー。

「お疲れ様でしたイシユウ一佐」

「ありがとうございます。レオン二尉が来次第デブリーフィングをしたいと考えております」

「はい、構いません」

俺がそう答えると彼女は笑いながら近づいてくる。

「それまでは休憩ですわね。どうでした? レギンレイズと戦ってみて?」

「は、はい! その、すげえ強かったです!」

「スピードもパワーもあるんですけど、なんて言うか動きが阿頼耶識に似ているって感じました」

「グレイズに比べて重心の移動が滑らかですな、それに動作が随分と

シームレスになったように感じます。旧世代、それも阿頼耶識無しではもう手に負えんでしよう」

「成程、私自身も手ごたえを感じていますが、やはりOSの更新が大きいようです。仰る様に以前は付いていくだけで精一杯だった機動も随分余裕があります」

そう言っただけでカルタ嬢。そうだなあ、確かに一対一でやりあうならせめてガンダムでも引つ張り出さなければ辛いだろう。

「当面注意すべきは他機種との連携ですな。レギンレイズはまだ数が少ない」

運動性能は互角になってもまだ反応速度には差があるし、何より阿頼耶識が無いから空間認識は機体の機器頼りだ。突出しやすい分一対多の状況に陥りやすいとも言えるから、数が揃うまでは注意が必要だろう。

「確かに。今回のような同数ならば問題ないでしょうが、複数と同時にとなれば話は全く変わりますね」

「あー、殴り合いになるとどうしても数が多い方が有利ですもんね」「マシンガンじゃMS撃墜出来ないもん。キャノンならいけるけど、あれ遠距離で当てられるのなんてミカヅキやアキヒロみたいなのへんたいだけだろうし」

ビトー、今何でこっち見た？そしてそんな言葉に真剣な表情で考え込むカルタ嬢。

「射撃武器の性能向上はギャラルホルンでも進められています。レギンレイズにも専用のレールガンが開発されていますが、MSの装甲を撃ち抜く程ではないですね」

射撃武器なあ。この世界に来てMS関連の知識を得た際に疑問だったのが、射撃武器の未発達さだった。成程ナノラミネートは極めて強力な性能を有している。光学兵器はほぼ完全に無力化出来るし、ちよつとやそつとの砲撃ではびくともしない。そう、ちよつとやそつとならだ。ビトーが言った通り、大口徑砲ならば十分損傷を与えられるし、対艦用なんて銘打たれている物を使えばちゃんと破壊できる。事実艦砲射撃の直撃を喰らえばMSは簡単に吹き飛ぶのだ。ならば

何故こんな事になっているかと言えば、恐らくギヤラルホルンによる意図的なものだろうと俺は推察している。彼らにとつてMSは絶対の優位の象徴であり、最強の軍事力である事が望ましかつた。なにせこの世界でMSを製造出来るのは彼らだけなのだから。だから彼らは、MSが容易に撃破される技術を意図的に制限したのだと思う、それこそ自分達が遠距離火力を失う事になつてもだ。現実問題としてナノラミネートの許容値を超える運動エネルギーをぶつけてやれば突破できるのだからして、射撃武器だけ無効に出来るなどという都合の良い素材が出来ようはずもない。そしてMSが振り回す近接武器程度のエネルギーならば、火砲で生み出すこともそれ程難しくない筈なのだ。

「お待たせして申し訳ありません」

思考が演習と違う方向へ飛び始めた所で、そんな声がかかる。見れば金髪碧眼のイケメンが部屋に入ってくる所だった。

「揃いましたね、ではデブリーフィングを始めましょう」

そんなカルタ嬢の言葉によつて俺の思考は中断され、そして何処か和気藹々としたデブリーフィングが始まったのだった。

「んー、携帯食も飽きましたねえ。ちゃんとしたものが食べたい」

「今日が定期補給の日ですから我慢して下さいよ、フレデリック先生」
フレデリックの愚痴に付き合いながらも、ビルスは手慣れた動きで工作機械を操作する。

「でもねビルス君、あの相談役、僕の扱いが雑だと思ふんだよね。地球の時なんか僕が居るのにギヤラルホルンに投降したんだよ？僕指名手配されてるのにー！」

「でも無事に帰つてきたじゃないですか」

「まあ、ねえ」

そう笑うビルスから椅子を回転させる事でフレデリックは表情を隠しつつ、内心で毒づいた。

(無事に帰つてこれるわけねえだろ、ばあーか)

彼を直接捕縛したカルタ・イシューこそ気付かなかったが、身柄を預かったマクギリス・ファリドはそうはいかなかった。何しろ彼とはギャラルホルンのデータベースで幾度も顔を合わせているのだ。騙しきれぬものではなかった。

(まあ、別に僕は困らないからいいけどね)

命の危機を感じていたフレデリックに対し、意外な事にマクギリスは取引を持ち掛けてきた。その内容は見逃す代わりに、今後彼の研究成果を定期的にマクギリスへと送ると言うものだった。

(ギャラルホルンでも阿頼耶識の研究を再開した？まあ、ウチのデータベースが閲覧出来ない以上、絶対に僕より研究は進まないだろうね)

皮肉気に頬を歪ませてフレデリックは嗤う。以前ブルワーズが本拠地としていた旧世代の工作艦、現在はCGSが秘密の拠点として運用しているそれは、順調に拡充されている。他の遺棄されていた艦艇の残骸や、輸送用コンテナを改造した簡易ステーションなどで増築。見られては困る設備を纏めて扱っているのだ。最近圏外圏で噂の「絶対に失敗しない阿頼耶識施術キット」の出所も、ここに集められたナノマシン施設である。

(相談役は僕の研究を止めるつもりはない、むしろ推奨している。ファリド家とこつちで繋がっている様子はないから、偶然利害が一致してるのか?)

「先生？」

不思議そうに声をかけてくるビルスにフレデリックはいつもの笑みを浮かべながら向き直る。下半身の不随を治療して以降ビルスはフレデリックを信頼しており、人体実験にも快く付き合ってくれている。戦闘に関しては間違い無く天才であるミカツキや経験豊富なアキヒロ達に劣るが、阿頼耶識の性能では間違い無くビルスが今現在生存している人間の中で最も優れている。何しろ今のビルスは単独でこの工作艦のシステムを問題無く扱えるのだ。

「いやあ、このエネルギーバー最悪だな。誰です、麻婆チョコ味なんて買ってきたの？」

本心を隠してそうフレデリックはおどけて見せた。尤も携帯食の味が酷いというのは偽らざる感想だったが。

(ビルス君に施した脳強化処理は概ね成功ですねえ。オリジナルとほぼほぼ同性能まではたどり着いた)

それは間違い無く歴史的快拳と言えるだろう。阿頼耶識の完全再現は戦後300年の間、誰一人として成し得なかった事だ。しかし彼の欲望はこの程度では止まらない。

(問題はここから。今の処理量でもガンダムフレームが要求する最高値には届かない。これをクリアするには、オリジナルを超える必要がある)

自然と彼は本当の笑みを浮かべながら思考を続ける。正にそれこそ、彼が求めているものに他ならないからだ。

(当面は大人しくしていきましょう。折角手に入れた環境だ、簡単に手放すのは少々惜しい)

全面的な理解にはほど遠いが、研究を止めない出資者に及第点の設備。何よりここならば、あの相談役の望みを叶えている限り命の危険が無い。そこまで考えたところで、彼は自身の生きる意味に対する思考を一時中断し、ビルスの様子を確認しながら声を掛ける。

「で、今は何をしているんですって？」

「この説明3回目ですよ？ロディ・フレームの拡張とアーカイブにあつた武装の試作です」

半眼で答えるビルスに対し、さして悪びれた様子もなく彼は肩を竦めながら口を開く。

「ああ、確か大戦中に製作されたレールガンだったっけ？」

「記録だとガンダムフレーム用のやつみたいですね」

ビルスの返事にフレデリックは苦笑しながら、以前自らが所属していた組織を評した。

「旧体制の維持も結構だけど、ちゃんと時代に沿って改善するべきだよねえ。間抜けな話だよ」

そう言ってモニターに映し出されるレールガンのデータを眺めた。ダインスレイヴ。魔剣の名を冠するその武器は、人類がモビルアー

マーを撃破するために創り出したものだ。高出力のレールガンと特殊弾頭の組み合わせによって運用されるそれは、その後の人類史においてMSを撃破可能な武器であった為に人類同士の争いでも使用され、多くの命を奪うこととなった。それ故にギヤラルホルンは使用禁止条約を制定するも、その内容は杜撰なものだった。

「どうせ制定当時は自分達だけ上手く使ってやろうとか考えたんだらうね」

高出力レールガンを用いて、ダインスレイヴ専用弾頭の投射を禁ずる。ここで杜撰と評したのは、この組み合わせだけが明確に禁止された条約であり、高出力のレールガン自体は保有も使用も制限されていない事である。つまり、実質この条約は専用弾頭に関する禁止条約でしかなく、高出力なレールガンの出力に対する制限もなければ、それに使用できる新型弾頭の設計製造に関する禁止事項も存在しないのだ。

「エイハブリアクターをギヤラルホルンが独占しているからってのもありそうですけど」

ダインスレイヴの運用には莫大なエネルギーを必要とする。それこそ標準的なシングルリアクターのMSでは出力が不足する程だ。運用を考えるなら当然相応の機体を用意する必要があるのだが、MSの開発に関してもギヤラルホルンがほぼ独占していたという経緯がある。つまり事実上、ダインスレイヴないしそれ以上の武装を開発できるのはギヤラルホルンだけだったのだ。ほんの2年前までは。

「こんな物が出来たら、既存の戦術が完全に覆っちゃいますねえ。怖い怖い」

フレデリックは心底楽しそうな表情を浮かべながら、そう口にした。

50. 思想家が自らの正当性を疑う事は無い

「いやあ私も鼻が高い。あのノアキスの七月会議にまだ無名だった貴女を登壇させた甲斐があったというものです。革命の乙女、クーデリア・藍那・バーンスタイン」

「その節はお世話になりました。ギョウジャンさん」

目の前の男に視線を合わせる事無く、事務的にクーデリア・藍那・バーンスタインはそう口にした。

「いえいえ、それで今日伺ったのは外でもない。来月再びクリュセでこのアリウム・ギョウジャンが主催する大きな集会を開くのですが、是非再びそこで——」

クーデリアの様子を気に掛ける素振りも見せずに、ギョウジャンは自らの要求を口にする。それを言い切られる前に彼女は再び口を開いた。

「申し訳ありませんが、今は公の場での発言は控えたいと考えています」

「ふむ。今は、ですか」

「はい、あの頃と違い、私も立場と言うものが出来ました。そうした者が、公の場で特定の誰かと懇意にし発言すると言う意味を私も理解しています」

そう言つて、クーデリアはその日初めてアリウム・ギョウジャンと目を合わせた。彼は微笑んだまま眼鏡の位置を直すと、気にした風もなく話題を変えた。

「そうですね、残念です。ああ、それならば月末にアーブラウ以外の植民地の方を招いて行うハーフメタル採掘現場の視察。そちらをクリュセの思想家代表として私が同行しましょう」

「え？」

「貴女のご思想は私の影響を強く受けている。その私が隣に立てば、必ず力になれるでしょう」

「失礼します。社長、そろそろ次の時間の予定です」

クーデリアが我慢出来ずに口を開きかけた瞬間、入り口のドアが

ノックされ、部屋に入ってきた女性が落ち着いた声音でそう告げてきた。

「なんだ君は、失礼じゃないか。まだ私が――」

「有り難う、フミタン」

席を立ち、フミタン・アドモスに対しそうギョウジャンが何かを言いかけるがそれを制してクーデリアは言葉を紡ぐ。そして目の前の男に解るように自らの意思を告げた。

「ギョウジャンさん、先ほどのお話はお断りします。今の私に特定の思想は必要ありません」

そう言つて彼女はブラインドの隙間から窓の外を眺める。クリュセの商業区に近いオフィスから見える景色は十分に手入れが行き届き、歩く人々は皆身なりの良い者だ。だがそれは彼女が幼少期を過ごしたバーンスタイン家の邸宅と同じ、箱庭の中の存在である事を彼女は既に知っている。

「今私に必要なのは、行動する事です。口先だけで変わる世界など無いのですから」

「…本日は失礼する」

全く笑えていない笑顔でギョウジャンはそう言うのと部屋から出て行った。黙つて見送つたクーデリアとフミタンはビルから彼が出たところで重々しく溜息を吐いた。

「ノブリスからの支援が打ち切られたことで、彼の団体は活動の資金繰りに手間取っているようです。お嬢様に近づく事で、支援の再開と新しいパトロンを得ようと言う腹積もりなのでしょう」

「ええ、でしょうね。悪いけれどククビータさんと呼んでくれるかしら」

「どうかなさいましたか?」

フミタンの言葉に表情を険しくしながらクーデリアは答える。

「隠していた訳ではありませんが、彼はハーフェタル採掘場視察の件を知っていました。一応警戒はすべきでしょう」

「おーしっ！お前等ラスト1周！気合入れろ！」

息を喘がせながら走る新人の横を併走しながらノルバ・シノは発破を掛ける。その言葉に遅れ気味だったザック・ロウが泣き言を漏らした。

「うえええ、違う地平が見えてきたっすうう」

「口開ける上に文句たあまだまだ元氣じゃねえかザック！追加で1周いっとくか!？」

「ひいいい…」

そんなザックの悲鳴は第一演習場から聞こえてきた騒音にかき消された、新人達は思わず足を止め、そちらを見る。

「すげえ」

「あれ、MSだろ？」

「おー、模擬戦やってんのか」

向かい合っているのはランドマン・ロデイと、タービンスから研修でCGSに来ているラフタとアジーが駆る獅電と呼ばれるテイワズのMSだ。双方激しく位置を変えながら手にした演習用のブレードで切り結んでいる。その動きはMSが18mを超える巨大兵器である事を無視したかのように俊敏で滑らかだ。

「すっげえ、アレが阿頼耶識ってやつかあ」

「違うよ。獅電には阿頼耶識は付いてないし、ランドマン・ロデイの方も非対応の機体。乗ってるのは阿頼耶識持ちだけだな」

そう感嘆の声を漏らすザックの言葉を否定したのは、ハツシュ・ミデイだった。

「おっどした、ハツシュ？」

最低限の体力維持は求められているが、事務職のハツシュは殆ど体力訓練には顔を出さない。そんな彼が来たことにシノが首を傾げる。するとハツシュは苦笑しながら返事をした。

「三番隊の皆さんに召集が掛ってます。シノさん、インカム外しちゃってるでしょ？呼びにきました。後は新兵の皆の確認ですな」

現在彼は事務職に身を置きつつ、医療関係の資格を習得中だ。既に簡単なバイタルチェックが出来る彼は、訓練生の体調管理も任されて

いた。

「うん、まだ余裕がありますね。もうちよつと厳しめで良いですよ」
そしてこの様に平然と訓練の引き上げを提案してくるため、新兵からは悪魔と認識されている。

「そうか？んじやお前等、休憩もしたしもう2周！終わったらクールダウンを忘れんなよ！」

そう言つて社屋へ戻つていくシノに新人達が力ない返事をする中、ザックはまだ続いている模擬戦を眺めていた。

「阿頼耶識無しでも、あんなにやれんだ」

「ありだともつと凄いいけどな」

ザックの呟きにハツシユが答える。

「あれよりつすか、そんなにすげえなら、ぱぱつと俺等にもしてくれりやいいのに」

その言葉に幾人かが同意の声を上げた。

「MSだけじゃなくてモビルワーカーとかも簡単に扱えるんだよな？
確か」

「宇宙での作業なんかでも使えるんだろ？ちよつと手術するだけで手に入るなら欲しいよな」

そんな事を口にする彼等に、ハツシユは笑いながら応じる。

「ああ、頼めばしてくれると思うぜ？失敗すると良くて半身不随、最悪その場で臓器不全を起こして死ぬけどな」

「うえ!？」

「あの人達が入社した頃は、未成年者は施術が必須だったんだつてよ。成功率は6割だったかな？10人受けりや、4人は廃人になる。流石に今はマシになってるみたいだけど、絶対安全なんて誰も保証できねえ。だから俺達は施術を自分で選ばせて貰えてる」

「なんでそんな詳しいんすか？」

壮絶な物言いに引きながらザックが尋ねると、ハツシユはそちらを向いて答える。

「俺の友達がその失敗に当たつて死にかけたからだよ。だからあの人達の前で、阿頼耶識を羨ましがるような発言は控えた方がいいぜ？」

「すみません、遅れました!」

そう言って慌てて席に座るシノに向かって、俺は笑いながら応じる。

「訓練中に呼び出して済まないな。全員揃ったので始めるぞ」

俺がそう宣言すると、オルガが頷き口を開いた。

「1時間程前に、アドモス商会から連絡があった。月末にあるハーフメタル採掘現場の視察について、良くない連中が嗅ぎ回っているそうだ」

アドモス商会というのは、クーデリア嬢が設立したハーフメタルの加工と流通を扱っている企業だ。アープラウから勝ち取った採掘権のおよそ30%を持っている。当初は彼女の家名であるバーンスタインを使うという案もあったが、家に良い感情の無いクーデリア嬢の意向でフミタン女史の家名を使う事にしたそうだ。

「良くないったって、あそこの殆どはテイワズとノブリスの所が仕切っているだろ? 喧嘩を吹っ掛ける馬鹿なんているのか?」

ユージンが疑問を口にした。彼の言う通り残りの採掘権はテイワズとノブリス・ゴルドンが丁度半分ずつ確保している。特にテイワズは直轄組織であるJPTトラストが仕切っていて、警備にMSまで持ち出している。圏外圏で生きている者なら、余程の馬鹿でない限り殴り掛るようなことはしないだろう。問題は海賊連中などの中にはその余程の馬鹿が交じっている事だが。

「そんな馬鹿は居ないだろうと樂觀するよりは、そんな馬鹿が万一いるかもしれないと備えておいた方がいい。取り越し苦労は笑い話で済むが、被害が出ちまったら問題だからな」

オルガがそう言って釘を刺したので、俺は同意するように頷いた。

「当日はモビルワーカーがメインになるが、一応MSも1個小隊待機させる。新人も参加させるので留意するように」

「機体はランドマン・ロディですか?」

アストンの質問に俺が答える。

「そうだ、またJPTトラストからの要請で現在研修中のタービンス二名が同じく待機となる。万一の場合は我々がフォローする事になるだろうから、その点も頭に入れておけ」

「因みに相談役。吹っ掛けてくるとしたらどこですかね？」

「そうだなあ。小さい所は粗方平らげたから、残っている馬鹿はと言えば。」

「夜明けの地平線団辺りかな」

連中最近小規模な勢力を糾合して更に規模を拡大しているから、遠からず身代がでかくなり過ぎて首が回らなくなるはずだ。だから口減らしに仕掛けてくるなんて事も十分あり得る。もしそうなれば、戦力を使い捨てるつもりで来るだろうから少々厄介なことになりそうだ。俺と同じ事を考えたのか、指揮官組の連中は顔を顰めている。

「マさん。待機のMS小隊ですけど、2隊に増やしませんか？」

「寧ろモビルワーカーは止めて、MSのみで対応すべきじゃ？」

「言いたいことは解るんだけどね。」

「そうしたいのは山々だが、今回の仕事はVIP、それも他の自治区の間人だ。露骨に武力をちらつかせれば、クーデリア嬢の交渉に悪影響を与えかねん」

ただでさえCGSとアドモス商会は共同出資で農地開発をしたり、孤児院なんかも運営しているんだ。俺達をクーデリア嬢の私兵と見ている連中も少なくないだろう。そんな奴らが大量のMSで取り囲めば、軍事的な恫喝と取られても不思議ではない。

「でしたらせめてギャラルホルンに連絡しときましょう。軌道上を抑えられれば、連中も派手に戦力は送り込めない筈だ」

オルガの提案に俺は頷き、全員に告げる。

「今回の内容は相手を潰せば良いという単純なものじゃない。その事を十分留意するように、解ったな？」

頷く皆を見て、俺は笑みを浮かべつつ言い放った。

「宜しい。では諸君、仕事の時間だ」

51. 抗う為の暴力を恐れてはならない

「成程な、夜明けの地平線団についてはこちらでも対処を考えていたところだ」

『非正規航路利用の抑止に一役買っていることは理解しております。ですが真つ当な民間船への襲撃が増加している現在、野放しにすれば健全な人類発展の妨げとなる事は明白です』

「しかし連中は数のわりに臆病ですぐ逃げるのですよ、イシユウ公。こちらが数を揃えれば現れもしないでしょう」

ラストル・エリオンとカルタ・イシユウの会話に、眉を寄せながらそうイオク・クジヤンが口を挟んだ。アリアンロッド艦隊主導で過去幾度か夜明けの地平線団への討伐部隊は編成されたが、そのいずれも空振りに終わっている。イオク自身も指揮を執った事があったが、その時は彼の言うとおりの姿すら現わさなかったのだ。

『ギャラルホルンと事を構えると言う意味を十分理解しているのでしよう。ですが、面倒な相手だからと放置して良いという話にはなりません』

「それはそうですが」

イオクはカルタ・イシユウが苦手だった。以前は付き合いくらい程度の認識だったが、彼女は火星支部に赴任以降着実に実績を重ねている。またこれまで練度不足、お飾りなどと呼ばれていた地球外縁軌道統制統合艦隊が実のところ技量面では非常に優秀である事が後任のガルス・ボードウィンから報告されており、セブンスターズ内だけでなくギャラルホルン全体でカルタ・イシユウの評価は上がっている。その姿は早くに父を亡くし、若くして家を継いだものの実力を示せずにいるイオクの気持ち落ち着かなくさせるのだ。

「何か策があるのかな？」

ラストルが愉快そうに彼女へ問いかけると、すぐに彼女は答えた。『策と言う程の事ではありません。多数で掛かると逃げるといいうなら、逃げない程度の少数で当たれば良いのです』

「安直な、その程度で連中が捕まえられないなら苦労していない」

顔を顰めてイオクはそう否定する。アリアンロッドでもその程度は思い至り、実行していたからだ。結果は良いように手玉に取られ敗北。戦死者まで出てしまい、ラスタルが上手く立ち回らなければ大きな問題となっていただろう。だが、カルタはイオクの物言いに余裕の表情で応じてきた。

『勿論容易であるなどとは申し上げていません。肝要なのは火星支部とアリアンロッド艦隊がそれぞれ隊を派遣する事です』

「ふむ…」

彼女の言葉にラスタルが真剣な表情で考え込む。イオクも彼女の言わんとしている事は理解出来た。要するに逃げない程度の艦隊を複数用意し、合撃して叩こうという話だ。だが言うは易く行うは難い。何しろ連中が襲つても平気だと考える規模であるから、多くても一艦隊は2隻が限度だ。そして精強で鳴らすアリアンロッドであっても、そのような少数では友軍が来援するまで支えきれぬ保証はない。最悪各個撃破されてしまうだろう。

「哨戒任務であつてもアリアンロッドは最低3隻からの艦隊運用だ。囷として連中を食いつかせるのは難しいと思うが？」

ラスタルがそう口にするも、カルタは何ら問題ないといった表情で応じる。

『いえ、アリアンロッド艦隊は囷ではなく主力を務めて頂きたいです』

「つまり少数の囷は火星支部が買って出ると？危険だぞ？」

その言葉に大胆にもカルタは笑顔で切り返す。

『火星支部に配備されているハーフビーク級は現在4隻。ローテーションで運用していますから2隻の編成でも不自然ではありません。何よりセブンスターズの小娘が火星支部に左遷され、懸命に点数稼ぎをしている最中です。海賊討伐という大手柄に目が眩んで無謀な賭に出たとしても不思議ではないと思いませんか？』

「ふ、ははははっ！見事な覚悟だ。承知した、イシユウ公。貴殿の策に乗らせて頂こう」

大笑いしながら承諾するラスタルに対し、カルタは笑顔のまま頭を

垂れつつ口を開く。

『感謝致します。すぐに計画書を送らせて頂きますので、宜しく願
い致します』

「解った。確認次第折り返そう。詳細も詰めておきたいからな。こち
らこそよろしく頼むぞ、イシユール公」

上機嫌でラスタルがそう言うとう通信が切れ、程なくして作戦計画概
要が送られてくる。その内容は神算鬼謀などとはお世辞にも言えず、
堅実で手堅いが平凡な作戦だとイオクは思った。

「つまらない作戦だ、と言いたい顔だな？イオク」

「…はい。大見得を切った割にはただの分散合撃、使い古された作戦
です」

「ほう、ではお前ならどうする？」

その質問にイオクは言葉を詰まらせた。平凡と評したは良いが、咄
嗟にそれを上回る策など思いつかなかったからだ。それを見透かす
ようにラスタルは苦笑しながらイオクを諭してくる。

「効果的で有効だからこそ多用され使い古されるのだ。それに今回の
作戦はアリアンロッドだけで当たるわけではない。そうなればいつ
もより遥かに連携の難易度は上がる。複雑な策を用意した所で実行
できねば意味がない」

タブレットを振りながらラスタルは続ける。

「それに手柄を欲している娘が、それを譲ってでも成したいと願うの
だ。応えてやらねば男が廃るといふものだ。派遣する艦隊の指揮は
イオク、貴様に任せる。ジュリエッタを護衛に連れて行け」

話は終わりだと、ラスタルは視線をイオクから外し執務を再開す
る。彼は一礼した後、自身の指揮する艦へと戻るべく執務室を出る。
その表情は悔しさに歪んでいた。

「なあおい、こりやなんの冗談だ？」

設計図を持って行ったら雪之丞がそんな言葉と共にこちらを半眼
で睨んできた。冗談？馬鹿言っちゃいけねえよ。

「私は大真面目だ」

「余計悪いわ。おめえこんなもん造って何するつもりだよ?」

なについて、兵器を造る理由なんて一個しかねえべさ?」

「普通に戦力の拡充だが」

何が気に入らないのか雪之丞は深々と溜息を吐く。あ、なんかすつげえ馬鹿にされてる気分。仕方ないな、丁寧に説明するでしょう。

「MSの保有が正式に認められたとは言え、保有数には制限があるし資産税も馬鹿にならない。ならばどうするか?簡単だ、MS以外に戦える戦力を増やせば良い」

CGSは地球支社も含めて50機程運用している。正直真つ当な仕事ではこの辺りが精一杯の数字だ。本当はもつとあったのだが、税金が高すぎて話にならないから程度の悪い機体は色々取り外してアブラウへ払い下げた。幸いにして秘密工廠の準備も順調に進んでいるから、隠し機体の方は順調に増えている。おまけに先日サルベージ組がとんでもないものを見つけてくれたので、今後も機体の確保は難しくない。しかしである。良くも悪くも武闘派と見なされているCGSであるから、MSを素直に手放し大人しくしては疑いをかけられる心配がある。まあその疑心は極めて正しいのであるが、我々とすれば歓迎できない。なのでそうした目を欺くためにも、表面きに見せられる追加戦力が必要なのだ。

「それでモビルワーカーって訳か?いや、コイツをモビルワーカーって呼んで良いのか?」

「良いとも、何故ならMSはモビルアーマーを倒すために製造された人型兵器の事だ。ならばフレームにレアアロイを使おうが、エイハブリアクターを積もうが人型でないこいつはモビルワーカーなのだ」

メーカー向けにギャラルホルンが発行している製造規約も読んだが、それらの使用禁止という文言は存在しなかった。ならば文句を言われる筋合いはあるまい。

「じゃあそこは譲るがよ。何だよこのレールガンってのは?」

いや、まんまですけど?」

「文字通り手も足も無いのだから白兵戦をやらせる訳にはいくまい。

故に遠距離からの射撃で撃破を狙う」

「いや狙うって」

「厄祭戦時代のレールガンをベースに再設計したものだ。使用する弾頭は専用のもことになるが、こちらの製造器も現在準備しているから補給の心配もいずれ解消される。まあ、暫くは適当な弾丸を転用する事になるだろう」

専用弾頭の重量は本家ダインスレイヴの約30%程、その代わり初速は脅威の2倍だ。総合的な威力はざっくり2割増しといったところだろうか？問題はエイハブリアクター1器では発射に必要なエネルギーを賄い切れない事だが、我が社にとってそれは些末な問題である。何せリアクターなら売れる程あるからな。

「……」

「問題は発射速度の調整機能が無いことだな。特に宇宙では射線に十分注意する必要があるだろう」

地上みために障害物で止まったり大気での減速も見込めんからな、味方に当ててもしたら大惨事だ。

「基本的には複数機を同時に運用、かつMSの後方支援機として扱う。OSに関しては取敢えず現行のものを流用し、阿頼耶識組にブラッシユアアップを頼もうと思ってる」

「足回りは大型化による負荷の軽減と、射撃時の安定性を向上させるために履帯を採用する。センサーはロディ・フレームのものを流用だ、あれなら市場に随分流れているから怪しまれる心配はあるまい」
何故だろう、説明すればするほど雪之丞の表情が険しくなっていく。

「なあマの字よ、もう一度聞くんぞ？おめえこんなモン造って何をしてくすつもりだ？」

「そうだな、巻き込もうというんだからちゃんと話しておくべきだろう。」

「アーブラウとの一件で今後火星は独立の機運が高まるだろう。クーデリア嬢もそのように動いているしな。問題は各経済圏が再軍備を進める中で、それが穏便に認められるのかという事だ」

「おめえ」

呻くようにそう口にする雪之丞に構わず、俺は言葉を続ける。

「言葉で済めば良いが、そうならなければ必ず武力衝突が起こる。所謂独立戦争と言う奴だな。経済圏の相手だけならばともかく、武力闘争となればギャラルホルンの介入は必ずある。その時までには健全化が済んでいれば良いが、そうでなければ俺達は連中を敵に回す事になるだろう」

武装した分離主義者なんて治安維持組織の天敵みたいなものだからな。だがその程度で諦めていたら、火星はいつまでもこのままだ。そんな世界なんて、俺は御免蒙る。

「悪いな、ナデイ。軍人というのは、常に最悪を想定して動く生き物なんだ」

俺はそう笑ったが、雪之丞の表情が晴れることはなかった。

52. 正しさだけで動ける程、人間は強くない

「え!?!じゃあCGSの人が迎えに来るの?」

「多分ね」

「きつとね!」

驚きの声を上げる級友に、クツキーとクラツカの二人が答える。数人の男子は驚いているものの、多くは不思議そうな顔である。

「CGS?」

「クリュセ・ガード・セキュリティ!知らないのかよ、MSを何十台も持ってるすごい会社なんだぜ!」

「聞いた事ある。クーデリア・藍那・バーンスタインさんを守って地球に行った人たちだよな?」

「それって鉄華団っていう人達じゃなかった?」

「鉄華団はCGSから分かれた会社だったの。クーデリアさんを守るのは危険な仕事だったから、戦えない人達が困らないようにって名前を分けたんだって。だから仕事が終わった時にまた一つになったんだよ」

疑問を口にする級友にクラツカが得意げな表情で説明する。

「でもそんな人達が何で二人を迎えに来るの?」

「ウチの農園がCGSと業務提携しているの。それにお兄ちゃんがCGSの社員なんだけど、今は地球にお仕事で行ってるから」

「社員に対するふくりコーサー?なんだって!」

その言葉に更に大きなどよめきが起こる。寄宿学校に在籍する生徒の中には、比較的裕福な家の子供も存在する。そんな彼らの両親でも仕事とはいえ地球に滞在するなど一生に一度あるかないかなのだ。多くの子供たちが憧憬の眼差しを送ってくる。それを見て、クツキーは困った顔で付け足した。

「でも私達は普通に農園の子だし」

「長期休暇も帰って畑仕事だしね。あーあ、私も地球へ行ってみたい!」

そうクラツカが頬を膨らませると、廊下に笑い声が響く。そんな中

で窓の外を見ていた友人が二人に声を掛けた。

「あ、ねえねえ。迎えの人ってあの車じゃない？」

その声に反応して二人は窓へと近づく。そして車から降りてきた男を見て、嬉しそうに声を上げた。

「モチヨチヨさんだ！」

荷物を持って二人は教室を飛び出していく。それを見送りながら、クラスメート達の心はある意味一つになっていた。そう、モチヨチヨってなんだ？と。

「迎えがこんなおっさんで済まないね。他の連中は別件で少々立て込んでいるんだ」

「そんな…」

「いいよ！許したげる！他ならないモチヨチヨさんだから特別だよ！」

困ったようなクツキーの声を、元気なクラツカの声が吹き飛ばす。

「ありがとうクラツカ、クツキーもね。どうだい、学校は楽しいかな？」

「はい、いろいろな事が知れて楽しいです」

「クツキーなんてすっごい難しい本読んでるんだよ！私も字がいつぱい書けるようになったんだ！」

得意げにそう自慢するクラツカを見て、俺も思わず笑顔になる。やっぱ子供は笑ってるのが一番だな。

「それは凄い。そうだ、なら休み中に手紙を書いたらどうかかな？機密もあるから直接話させてあげる訳にはいかないが、メールならばビスケットに届けられる」

「いいの!？」

「勿論だ。二人が元気な事を知ればビスケットも喜ぶ——」

そんな話をしていると、突然衝撃が車を襲った。直ぐに急ブレーキと共に運転席のサブードが険しい表情でこちらを振り向いた。

「申し訳ありません。お怪我は？」

「ああ、こちらは問題ない」

そう返事をしている間に、助手席にいた2番隊の隊員が外に出て周囲を確認、報告してくれる。

「停められていた車両が爆発した様です、周囲に怪我人は確認出来ません」

そう言っている間に野次馬が集まり始める、だが彼らが爆発した車両に近づくより早くギャラルホルンの隊員が現れ、対応し始めた。

「怪我人は居ないか!?居たら直ぐに申し出るように!」

「危険だから離れて、離れて!!」

「…上手く機能しているようですね」

その様子を見てサブードが目を細めながら笑う。そうだな、以前のギャラルホルンと言えば、デモ隊を鎮圧するか、思想家を逮捕するくらいしか働いていなかった印象だ。特に火星の地上部隊はやる気がなく、住民などに横柄な態度も取っていた。だから民衆側もこんな時にはギャラルホルンを悪し様に罵っていたりしたものだ。

「カルタ嬢は良くやってきている」

今だって隊員の誘導に従って集まりかけていた野次馬も解散しているし、その事に文句を付けている連中も居ない。まあ地上部隊のこうした即応要員に現地の人間を契約職員として雇っているのも大きいだろう。最初の頃こそ弾圧者に尻尾を振った裏切り者みたいに住動家連中に罵られもしていたが、市民からすれば、本当に治安維持に励んでくれている頼りになる存在なのだ。そのおかげでウチみたいな民間軍事企業は警備関係の業績が右肩下がりだったりするのだが。

「それにしても、こんな場所で車爆弾など何を考えているんだ?」

再び走り始めた車の中で、クッキーとクラツカを餌付けしながら俺は首を傾げた。因みに今日のおやつはプリンモドキ、コーンスターチと植物性クリームを使って作ってみた。切実に卵と牛乳が欲しい。

「とろとろ」

「ひやひや」

この子達にいつか絶対本物のプリンを食わせる事を固く誓いながら、先ほどの疑問に思考を移した。先ほどの車爆弾はクリュセのキャ

ンパス区画、学校などの施設が集められた地区の外れに置かれていた。しかも爆発したのは下校時間帯。幸い被害は出ていなかったよ。うだが、まかり間違えば多数の児童が被害者になっていただろう。その不快さを強引に押し込めながら、実行した連中は何を考えているのかが解らず俺は顔を顰めた。工業施設やギャラルホルンの駐屯地を狙うならまだ解る。未だ多くの工場はアーブラウ本国の企業が保有しているから、活動家の言う所の搾取の証拠であるし、駐屯地は彼らにしてみれば自らの活動を妨げる忌むべき者であるからだ。対して学童を狙った場合、敵対者に対する武力的制裁としての意味合いは完全に無くなる。何故なら子供達とその親は彼らと共に独立を勝ち取る側であり、味方にすべき存在だからだ。社会不安を醸成しその不満を政府に向けると言うのは、本国内でのみ通用する手段であり、植民地の独立を狙うならば悪手に他ならない。

(ギャラルホルンのマッチポンプ？だが、カルタ嬢がそのような手段を取るとは考えにくい)

そもそもそんな事をしなくても、彼女は十分に火星におけるギャラルホルンへの認識を改善している。それに爆弾テロなど起こらない日常を維持する方が、余程民衆に好印象を与えることが出来るだろう。

「となると、相手はとんでもない大馬鹿者か」

ヤバイな。日頃の不満を車爆弾で晴らすような連中とか、敵だとしても関わりたくない。けどなあ。

「モチョチョコさん？」

「どしたの？お腹すいたの？食べる？」

そう言って渡したプリンモドキを差し出してくるクツキーとクラツカ。うん、決めた。

「いや、何でもないよ。それはサクラ女史の所で穫れたコーンを使っているんだ、いずれは商品化も狙っているから、しっかり食べて意見をくれると嬉しい」

彼女達の安全のためだ。頭の足りない連中もちゃんと相手をしてやろう。

(幸い尻尾を掴むのは、そう遠い話ではなさそうだしね)

俺はそう思いながら、二人を農園まで送り届けるのだった。

「しつれーしまーす。今日の日報でーす」

やる気を感じられない口調と共にザックは事務室に入る。新人には全員その日の日報をつける事が義務付けられているためだ。因みに文字が書けない者は音声データでの提出も認められているが、同時に読み書き計算の時間外労働が言い渡されている。修学経験のあるザックはこの残業が無い数少ない新人のため、取り纏めた日報の提出係になっていた。

「お疲れ様、ここに置いておいて」

「ウス、あの、今日は相談役居ないんですか？」

メリビットが指定した机にタブレットの束を置きながらザックはそう尋ねた。3番隊の隊長であり、解散した鉄華団の社長だったオルガ・イツカや新人訓練で世話になっているノルバ・シノといった面々はザックにとって少々野性味が強く、むしろデスクワークが主で時折料理などをしている相談役の方が彼は親しみを感じていた。舐めているとも言いが。

「ああ、今日はビスケットの所の妹さんを迎えに行っているよ。サクラ農園は提携先だからってね」

「そうなんすか」

釈然としない顔でザックはそう答えた。CGSは今や火星でも有数の組織だ。クーデリア・藍那・バーンスタインを通して政界にもパイプを持ち、更にギャラルホルンの火星支部とも懇意にしている。火星のたかだか一企業の間人をギャラルホルンの隊員が迎えに来た時などザックは目を？いた程だ。連れていかれた相談役に対する畏敬の念は、翌日の養殖池脇で魚を炙っている姿を目撃することで消え去ったが。ともかくCGSは大企業と言って差し支えない規模であり、サクラ農園は提携と言っても所詮幾つかの農場を経営する零細だ。少なくとも相談役が直接送り迎えをしなければならない程重要

な相手とは彼には思えない。だが、事務所の人間はその事に疑問は無いようで、特に気にした風もなく業務を続けている。

「ビスケットさんって、3番隊の人ですよね？」

「ああ、お前さん達が入社した頃は、もう地球支社に出向してたか。そうだよ、ついでに鉄華団の参謀役だった奴だ」

「へー。あれ、でも3番隊って事はビスケットさんも結構若いですよね？」

「うん？ああ、まだ19だったかな。それがどうした？」

「え、いや、その」

本来ならば出張する必要のない迎えに参加、妹、兄は部下。適当に切り取られたピースが、ザックの中で音を立てて結合する。

「なんだ、はつきり言えよ」

「いや、相談役、もしかして妹さんに会いたくて迎えに行つたのかなあって」

その瞬間、ザックの背を悪寒が走り抜けた。そしてそれは勘違いでない事を、周囲の者が表情で伝えてくれた。尤もそんな必要もなく、すぐに彼は実感できたのだが。

「面白い事を言っているわね？新人」

優しく肩に置かれた手。しかしそこには信じられない程の力が伴っており、ザックの体をその場に縫い留める。

「訳の解らない妄想をたれ流せるなんて、シノは随分温い訓練をしているのね。後であの子も再訓練かしら？」

脂汗を流しながらザックはゆっくりと振り返り、手の主を確認する。そこにはとても良い笑顔のスピカ・ネーデル4番隊隊長が立っていた。

「上司を貶めるような発言をする部下には教育が必要よね。そうは思わない？答えろ、新人」

泣きそうになりながらザックは助けを求めるべく室内を見渡す。しかし大半が視線を逸らし、逸らさなかつた者達は神妙な顔でスピカに同意するように首肯していた。

「返事も出来ないのかしら？これは教育よりも先に躰が必要ね。来

い」

悲鳴を上げる間もなく、ザツクは物凄い力で部屋の外へ引きずり出される。その日は深夜まで鍛錬室から悲鳴が途切れなかったが、誰一人救助に向かう者は居なかった。

5.3. 想定外に陥った時こそ、その人物の力量が解る

「おい、話が違うぞー！」

「降下してくるMSは8機のはずだろう！」

声を荒げながら詰め寄ってくるモビルワーカー隊の連中に、男は忌々し気に応じた。

「ギャラルホルンの警戒が強すぎて船が近づけられんのだ」

男は夜明けの地平線団に所属しているものの、表向きはPMCを名乗るパーパーカンパニーの代表だった。略奪だけでは限界のある弾薬や補修物資といったものを買い付ける役割だったのである。そのためMSの保有も申請していたために正規のルートで火星へMSを持ち込むことが出来たのだが、それは登録済みの3機だけだった。

「ふざけるなよ？小娘はCGSとも繋がりがあるし、なにより襲撃場所にはテイワズも居る。こんな数で仕掛けるのは自殺行為だ！」

「馬鹿が、逃げ帰っても死ぬだけだ」

「なっ!？」

「考えてみる、この状況で地上に降ろされている意味を。俺達は捨て駒にされているんだよ、どうせ帰った所で殺されるのがオチだ」

アリアンロッド艦隊が増強されたことで地球と火星間の密貿易は難しくなっている。何しろ終着点に厳重な網が張られているのだ。しかも火星支部が精力的に活動しているために、仮に火星側でギャラルホルンを撒いても即座に地球側へ連絡が行くようになってしまった。おかげで最大の収入源であった違法業者が減り、海賊の多くは真つ当な航路を使っている民間船や共食いで糊口を凌いでいる。夜明けの地平線団も例外ではなく、むしろ身代が大きい分切実だった。(サンドバルは俺の事を煙たがっていたしな)

軍人崩れであった男は、MSの補給や運用でしばしば団長であるサンドバル・ロイターと意見をぶつけ合う事があった。特に最近は襲撃のリスクが増大しているにもかかわらず、MSの整備や補給が絞られており、その傾向は顕著と言えた。

「な、ならどうすんだよ？」

どちらにしても未来がない。そんな現実を突きつけられたモビルワーカー隊の男達が、露骨に動揺した声でそう尋ねてくる。それに溜息を吐きつつ男は答えた。

「頭を使えよ。襲えねえし帰れねえなら、襲わずに帰らなきやいいんだ」

「はあ？それでどうやって食ってくんだよ？」

そう聞き返され、男はニヤリと顔を歪ませた。

「手切れ金を貰って再就職だよ。火星にや仏のCGSが居るんだぜ？」

「ど、どういう事だね!？」

『言ったそのままだ。残念だが襲撃は失敗した』

「失敗!? 失敗だど!? してもいない癖にふざけた事を言わないでくれたまえー!」

月末に開かれたハーフメタル採掘場の視察は恙無く終了していた。各地区の代表と笑顔で握手を交わすクーデリアの姿を民間放送越しに見たアリウム・ギョウジャンは、自らの計画が失敗したことをそんな段階になって知ったのだ。

『戦力は送った。だが、考えていた以上に腰抜けだったようだな』

『そんな言い訳が通じると思っているのかね!』

『ならばどうする? ギャラルホルンにでも訴えてみるか? 雇った海賊がちゃんとクーデリア・藍那・バースタインを始末してくれなかった』

嘲りを含ませた声にギョウジャンは齒噛みするも、指摘通りどうにもならない事を理解する。

(くそ、どいつもこいつもこの私を馬鹿にして!!)

革命の乙女クーデリア・藍那・バースタイン。彼女に向けられる称賛は師である自身にも浴びせられて然るべきものである。なぜなら彼女を見出し、教え導いたのは自分なのだから。だというのに民衆は愚鈍にも目先の功績にのみ着目し弟子だけを持て囃す。調子に

乗った彼女はギョウジャンに説教までしてくる始末だ。出資者であつたノブリス・ゴルドンもこの所そんな小娘に入れ込んでいて、挙句こちらの活動支援を停止すると言つてきた。目先の欲ばかり追う商人ごときでは、自身の理念は理解できないようだった。現在は粘り強く論じているが状況は芳しくない。そしてついには海賊などと言う犯罪者が彼を虚仮にする。彼の理性は限界を迎え、通信を一方的に切る。そしてノブリスに連絡を取るべく再び受話器を握りしめた。今後をどの様にするにせよ、金は必要だったからだ。

「ノブリス様、アリウム・ギョウジャンより連絡が入っております」

「報告してきた秘書を一瞥し、ノブリス・ゴルドンはアイスを口に運んでいたスプーンをゆつくりと口から抜き取った。

「またか、無視しろ」

「かしこまりました」

綺麗な礼をした秘書がタブレットを素早く操作する。クレーム担当に通信が回された事を確認した彼女が再びいつもの姿勢でノブリスの言葉を待つ。その様子に満足しながら、ノブリスは穏やかな笑顔で口を開いた。

「随分と投資をしたが、あれは毛ほども役に立たなかつたねえ。いや、クーデリア・藍那・バーンスタインを見つけたか？だが彼女ならあれが居なくてもいずれ頭角を現しただろうから、やはり何の役にも立たなかつたでいいのかな」

「そう言つて彼は手にしていたアイスの皿を机に置いた。そして窓の外へ視線を送りながら言葉を続ける。

「しかし思想家という奴はどうもこいつも馬鹿ばかりだね。まあ、だからこそ思想家にしかなれないのだろうけどね」

「ノブリスは思想家と呼ばれる人間たちを心底馬鹿にしていた。理想を語るなど子供にだつて出来る。彼らはそんな事も解らないよ
うだ」

「成程、理想は大事だ。ゴールを定めると言う意味でも、指標を立て

る上でも大きな意味を持つ。しかしそれは定めて終わりではなく、定めてからが本番なのだ。

「名のある思想家と呼ばれる人間は、皆それ以外の実績を持っていた。思想家だけなどと言うのは妄言を垂れ流すスピーカーでしかない」

理想へ向かうためには様々なものが必要になる。弱者を救うために物が要ると考えれば商人になり金を稼ごうとするだろう。人々の意識を変えようとするならば教育者に。より良い制度が必要だと考えたなら政治家に。本来世界を変えたいと願うなら、理想を定めた後に現実との乖離を埋めるべく行動を起こすべきなのだ。だが、思想家と呼ばれる人種は致命的にその部分が欠落している。幾ら理想を語ろうとも、ではそこにたどり着くためにどのような事をすべきなのかを示せない。故に多くの人々は、彼らを地に足のついていない理想主義者と嗤うのだ。

「どちらにせよあれはもう要らん。以後連絡は受けんでいい。それから、アイスをお替りだ」

大して気にすることもなく。ノブリス・ゴルドンはアリウム・ギョウジャンをあっさり切り捨てた。

ありのままに起こったことを話すぜ？

夜明けの地平線団の襲撃を警戒していたら、戦う事もなく降伏された。うん、訳が解らねえよ。しかもご丁寧に本隊の良く使っている航路や潜伏先までゼロって下さる。成程、ますます解らん。

「なあ頼む。俺らは切り捨てられたんだ。降伏する、装備だつて持つて行ってくれて構わねえ、だから助けてくれ」

「と、言っているようですが？」

「あ？ウチに聞いてんのか？」

そらそうでしょ、彼らに一番最初に対応したのはJPTトラストなんだから。

「あいつらはおめえんここに降伏してえみたいだぜ？」

愉快そうに笑うジャスレイ・ドノミコルスに向けて肩をすくませ

る。

「それは彼らの都合でしょう？私が知った事ではない」

俺の言葉に何故か驚いた表情になる海賊達。え、何その反応。

「無理やり使役されているヒューマンデブリならばともかく、彼らは自らの意思で海賊業に手を染めているのです。別に我々が引き取っても構いませんが、その場合ギャラルホルンに突き出して終わりですね」

因みにギャラルホルンにおける海賊への罰則は一律で銃殺である。大航海時代並みのアバウトさだが、何せ海賊があほ程いたからな。ちゃんと刑務所に放り込んで刑罰なんて与えていたら、それだけでギャラルホルンの財政を圧迫する事は間違いなく、そしてそこまで犯罪者に温情を示せるほど寛容な世界ではないのだ。

「そ、そんな!?頼む!助けてくれ!!」

どんな自信があったのか、いきなり全員で降伏してきたからな。普通に今は周囲を取り囲まれてるから、逃げる事もMSで暴れる事も出来ない。ひよつとしなくてもこいつ等頭が弱いのではないだろうか。「助けてくれ?お前たちが今まで襲ってきた人々もそう言ったのではないかね?その方々は今どうしているのかな?自分の番だけ飛ばそうなどというのは、虫の良すぎる話だと思わんかね?」

「だとよ、どうするお前ら?」

「た、頼む!殺さないでくれ!何でもする!!」

あーあ、言っちゃった。

「よし解った、お前らの身柄はこのジャスレイ・ドノミコルスが預かる。それでいいな?」

その言葉を聞いた瞬間、ジャスレイは太い笑みを浮かべながらそう宣言した。こちらとしても異論はないので素直に頷いてみると、命を救ってもらったと思っっている海賊達は嬉しそうな顔で彼の事を見ていた。いや、なんて言うかさあ。君ら本当に考えが足りないな?その男はテイワズのナンバー2だぞ?反社集団の奴に何でもするなんて言っつて、何故自分達が無事で居られるなんて樂觀出来るんだ。

「モビルワーカーもMSも火星じゃ扱いに困るな、そつちはどうする

よ?。」

「連中の身柄を預かるのでしたら、装備もそちらの物では?。」

俺がそう言うと、ジャスレイは嫌そうな顔で口を開いた。

「総取りの代わりに今回の面倒全部押し付けようって腹積もりだろ? そうはいかねえよ。ゴールドンさんとこの兄さんも黙ってるのはそう言う事だろう? 装備は三等分、そのかわり面倒も三等分だ」

「それでは御社が少々利益を上げ過ぎでは?。」

「対応したのはJPTトラストです。その位の役得はあつて然るべきでしょう。本来なら人死にがでてもおおかしくなかったのですからね。CGSとしましては異存ありません」

俺がそう援護すると、ジャスレイはにんまりと笑ってノブリス氏の部下を見た。

「二対一だな、どうするよ?。」

「:致し方ありません。因みに弊社ではリアクターを高価で引き取らせて頂いておりますが。如何でしょうか?。」

「買ってくれるって言うならウチは構わねえよ」

「同じく。ああ、どうせならフレームも付けますから勉強していただけませんか?。」

居心地悪そうに座り込んでいる海賊達を前に、俺達は暫し交渉を続けたのだった。

54. 兵士を常に戦わせる事が出来るのが理想の指揮官である

「所詮は賊の浅知恵ね」

望遠で捉えた艦艇を見て、カルタ・イシユーは静かに笑った。敵艦の数は15隻、事前に報告のあった通りだ。敵の艦隊は現在デブリ帯、それも比較的地球側に位置するものに潜んでいた。それは昨日CGS経由でもたらされた航路、潜伏先から最も離れた位置だった。「切り捨てる人間が知っている場所に身を隠す馬鹿も居ないでしょう」

そう言いながらここを指定してきた男の顔を思い出し、カルタは頬が緩むのを懸命に抑えながら命令を発する。

「各艦対艦戦闘用意。アリアンロッド到着まで、1隻たりとも逃がしてはなりません」

「目標艦より通信、メインモニターへ回します！」

『勇敢なギャラルホルンの艦艇に告ぐ。今すぐ武装解除し、装備を明け渡すなら命だけは助けてやる』

不遜な態度で艦長席に座った男がそう口にする。それを見てカルタはありきたりで詰まらない台詞だと思いつつ、笑顔で応じる。

「それは実に寛容な事ですね。私達も今すぐ武装解除し降伏するならば、命だけで済ませて差し上げますよ?」

『威勢だけは一人前か。貴様の愚かな選択で死にゆく部下を見ながら後悔するがいい』

怒りを隠しきれない表情で海賊の男、サンドバル・ロイターはそう告げると通信が切られる。再び漆黒の宇宙を映し出すメインモニターを見ながら、カルタは困った表情で口を開いた。

「あの方は仕事を間違えましたわね。海賊ではなくコメディアンなら大成できたでしょう」

そう評すると艦橋に笑い声が響く。敵の戦力は7倍以上、しかし彼女に従う隊員達は悲壮とは無縁であった。敵の行動など歯牙にもか

けない速度で戦闘準備完了を各部署が伝えてくる。

「レギンレイズ各機、出撃完了。続いてバルバトス、グシオン発進します」

オペレーターという言葉に彼女は頷きながら命じる。

「ヒューマンデブリは可能な限り捕らえなさい。彼らに降伏勧告は通じません。確実に機体を無力化するように。オペレーター、ガンダムとは通信が繋がりますか？」

「はっ！」

短いコールの後、メインモニターに二人の若者が映る。その表情は戦場を前にしても普段通りだった。

「助力に感謝します。ミカツキ、アキヒロ」

『はい』

『おい、ミカツキ！すみませんインシュロー一佐。その』

素直に頷くミカツキと慌てるアキヒロを見ながらカルタは笑いながら応じる。

「構いませんよ。私は貴方達の上官ではありませんし、助勢を求めたのもこちらです。でも一つ宜しいかしら？」

『なんででしょう？』

「大将であるサンドバルは可能な限り生け捕りにしてください。もしかすれば隠れ家などに戦利品を隠している可能性があります」

『了解しました』

その戦利品にヒューマンデブリが含まれる事を十分承知している二人はすぐに首肯する。そして同時に艦から飛び出していく。

それを見送ると、カルタはコーリスに向き直り口を開いた。

「コーリス三佐、艦を任せます。私もレギンレイズで出撃します」

「はっ、お預かりいたします。格納庫に連絡、カルタ様が出撃する！」

一瞬の逡巡も見せずコーリス・ステンジャは返事をする、指示を飛ばす。その様子を確認しつつも、彼女は直ぐに指揮官室に入ると着ていた制服を脱ぎ、素早くパイロットスーツへと着替える。そして彼女が格納庫に着いた頃には、カルタの機体は最早乗り込むだけに準備がなされていた。機付きの整備員達に礼を言いコックピットに納ま

ると、カルタは落ち着いた声音でオペレーターに告げた。

「カルタ・イシユ、レギンレイズ。参る」

「急げ！戦場に遅参するなど武門の恥だぞ！」

「既に最大戦速です。落ち着いてくださいイオク様」

「イシユ公は既に戦っているのだぞ！落ち着いてなど居られるか！」

ハーフビーク級戦艦は戦後長らく運用されているギャラルホルンの主力艦艇だ。MSの運用と戦艦としての能力の両立を図った艦であり、大口径の主砲と10機のMS運用能力を持つ。これは戦前に建造され民間で広く運用されている強襲装甲艦と比較した場合、敵艦に有効な打撃力を持ちつつ、搭載機数で3倍以上という破格の性能を有している。だがそれは絶対的な優位を常に保証している訳ではない。

「夜明けの地平線団は戦い慣れしている連中だ。おまけに数も多い」

特に近年は周囲の弱った海賊などを糾合し、艦艇だけでも15隻と以前の1.5倍もの戦力に膨れ上がっているのだ。MSの搭載能力がハーフビーク級より劣っていると言ってもその総数は40を超えている。つまり火星支部艦隊はMSだけでも倍、艦艇に至っては7倍の数と戦っているのだ。

「とは言えこれ以上の速度は出せません」

「解っている！格納庫の機体は直ぐ出せるように準備しておけ！私の機体もだ！」

その言葉を聞き、ジュリエッタ・ジュリスが顔を顰めた。

「待ってください、まさかイオク様も出撃するのですか？」

「当然だ、私にはレギンレイズがあるのだぞ。これを遊ばせておく訳にはいくまい」

そう胸を張るイオク・クジャンに対し、ジュリエッタは半眼で応じる。

「やめてください。むしろ邪魔です」

「じゃっ!？」

「背後を警戒しつつ敵と戦うのは骨が折れるのです。だから出撃しないてください」

「人が支援してやっているのにその態度はなんだ!」

「とにかく出てこないてください」

そう激昂するイオクに対し、ジュリエッタは溜息を吐くと苛立たし気に言い放った。イオクに対しここまでものを言える存在はラスタル・エリオンとジュリエッタくらいのものである。問題はイオクがジュリエッタを馬鹿であると決めてかかっている事と、ジュリエッタが知識不足の為に自らの考えを上手く伝えられていない事だ。イオクのお守りをラスタルから言いつかる事の多いジュリエッタは、当然の様に前線に出撃したがるイオクの僚機を幾度も務めている。故に彼の技量の未熟さを最もよく知り、問題点を指摘できる立場でありながら、それを上手く言語化出来ないために諫める事が出来ないのである。彼女の最大限の語彙で表現した結果が「戦場に出てくるな」なのである。当然イオクには伝わっていないし、むしろ語彙の少なさを馬鹿にされる始末だ。

「ふん、猿に指図される謂れはない」

険悪な空気を醸し出したまま、艦隊は戦場へと突き進んでいく。

『な、なんだこいつ等!』

『動きが!』

交戦開始から数分、夜明けの地平線団の擁するMS部隊は大いに士気を下げていた。多勢に無勢、倍以上の数で掛かった彼らは、当初以前と同じく一方的に相手を撃破出来ると考えていた。しかしそれはMS同士がぶつかり合う前から崩れ去った。いつものごとく集団で襲うべく編隊を組んだMSが唐突に弾き飛ばされる。見れば敵艦が主砲を発砲していた。何の変哲もない時限信管式の散弾を使つての先制攻撃だったが、戦艦がMSを支援するという戦術自体に初めて出会った彼らは動揺し、とにかく攻撃を貰わぬよう散開する。その行動こそが敵の狙いであるなど考えもせずに。

『だ、誰か助ける!?!』

『畜生つ、ギャラルホルンは弱兵じゃないのかよ!?!』

相互に援護出来るような範囲に部隊が纏まれば、そこに砲弾が撃ち込まれる。故に大きく間を空けた彼らは、戦場で小隊あるいは個人単位で分散する事になる。それは戦域と言う限定された空間にかかわらず、部隊をそれぞれ孤立させる事になった。何しろMS同士では火器が牽制程度の役割しか果たせないのだから、集合していなければ満足に援護も出来ないのだ。そうして、更にその中で突出し過ぎてしまったり、位置を離し過ぎた機体がギャラルホルンのMSに襲われる。2個小隊6機で一つの部隊を編制する彼らは、危なげなく次々と海賊のMSを屠って行く。特に見た事のないギャラルホルンの新型MSの性能は凄まじく、一目で勝ち目がないと彼らが認識出来るほどだった。その上、見慣れたグレイズですらこれまで相手にしてきた敵とは一線を画す動きをしていた。これは彼らどころか火星支部の間以外知らない事であったが、火星支部のMSは全てレギンレイズに採用されている新OSへカルタ・イシユ一の独断で更新されており、その為既存の機体に比べ運動性面で1割近い性能向上を果たしている。更に扱っているパイロットが頻繁に頭のおかしな連中と模擬戦を繰り返している事も手伝って、相手からすれば比較するのも馬鹿らしい程に総合的な差が開くこととなっていた。MS同士の戦いが始まって僅か数分で10近い機体を失ったサンドバルは苛立たし気に命ずる。

「敵MSに艦砲射撃を行え」

元々仲間意識などは希薄な海賊、それもMS隊は殆どが傭兵やヒューマンデブリである。躊躇なく実行されたそれは、形勢を決めかけていた戦場を再び混沌へと傾け直す。しかしその代償に、不幸な何機かが砲弾を浴びてその体を吹き飛ばされる。

「撃ち続けろ」

以前の環境ならばサンドバルもここまで酷薄な命令を出さなかったかもしれない。無論それは部下の命を考慮してではなく、貴重な戦力であるMSを無駄に損耗させないためだ。故にMSの調達が容易

になった現在、彼は躊躇なくそれらを必要な犠牲だと割り切った。

『ひいつ、だずげっ』

『やめっ——』

放たれた砲弾が、降伏して動きを止めた傭兵や推進器を破壊され無力化されたデブリ達のMSに容赦なく降り注ぐ。散弾と異なり、十分な殺傷能力を有するそれは簡単に彼らの命を奪っていった。友軍への損害に頓着しない行動に、流石のギャラルホルンも動きが鈍る。

(この辺りが潮時だな)

サンドバルは副長を呼びつけ、密かに旗艦と古参だけ離脱するように指示を出す。そして側近の双子へ目配せすると、大声で宣言した。

「仲間に伝えろ！このサンドバルが出撃するとなー！」

サンドバルは元々MSの腕っ節でのし上がってきた男だ。今でこそ殆どを部下に任せているが、古参の者は彼の實力にほれ込んで下に付いた者や、その力を恐れて従った者が多い。そんな彼らにとって専用機を駆るサンドバルは力の象徴であり、大いに士気を上げる事に成功する。尤も、本人は既に負け戦を考えていたが。

(逃げ切れるのは良くて半数か？手痛い出費だが仕方あるまい)

圏外圏最大規模の海賊団。その名は耳心地こそ良いものの、その内情はお世辞にも良いとは言えない。そこそこの規模になるまでは襲える船団が増えると喜んだが、10を数えた辺りでそんな相手は頭打ちになった。動くだけで多くの資材を消費する上に、規模が大きい故にギャラルホルンもこちらの動きに目を光らせる。それでいて襲える相手はさして変わらないのだから、実入りを考えればむしろ以前の方が良かったほどだ。今の団はサンドバルからすれば無駄な肉を付けた肥満体であり、愚かな革命家気取りの依頼を受けたのも、少しばかり削り取って身軽になろうと考えての事だった。残念ながら多少本当の肉まで切らせねばなくなってしまうが、それを惜しんで自分まで死んでしまっただけは意味がない。彼の行動は何処までも利己的な思考によって決定されていた。

「こいつ……このサンドバル・ロイターが相手をしてやろう!!」

乗機の両手に武器を構えさせると、彼はそう叫び戦場へと飛び出し

た。

55. 過度の信頼は時に味方を危険に晒す

「いらつしやい、マツキー！」

花束を持って現れた婚約者の胸にアルミリア・ボードウインは飛び込んだ。以前は淑女らしくないと自制していたが、二年前の一件から彼女は婚約者への好意を素直に表すようになっていた。

「お邪魔するよ、アルミリア」

「あー、一応俺も居るんだけど？」

優しく微笑みながら抱きしめてくれるマクギリスの後ろで、頬を掻きながらガエリオ・ボードウインはそう主張する。そんな兄を半眼で見ながらアルミリアは口を開いた。

「兄さんはデリカシーが足りません、後気遣いも。そんなだからカルタ姉さまに振られたんですよ」

「振られてない。と言うか、カルタなんてこつちから願ひ下げだ」

「確かにその発言はデリカシーが足りないな、お義兄様？」

「俺に味方は居ないのか…」

大げさに肩を落として見せる兄に、アルミリアは笑いながら二人を家の中へ招き入れた。応接間に二人を通すと、お茶をメイドに頼んで用意してもらおう。部屋の中に視線を戻せば、二人はソファに座って寛いでいた。

「ヴィーンゴールヴ内の掃除は漸く一息つけそうだな、バクラザン公とファルク公が協力的で助かる」

「まだ気は抜けないさ。摘発した人員の多くはファリド家に近い者が大半だ。つまり彼らからすれば私が勝手に自分から弱っていくんだ、手を貸さない訳がない。それに彼らの家に近い者は迂遠ではあるが調査を妨害されている。決して善性だけの行動ではないよ」

「気の遠くなる作業だ。いつそ全てを壊してしまった方が早いんじゃないか？」

「組織の健全化だけ見ればそうかもしれないな。その場合世界は未曾有の混乱に陥るだろうが」

「何事も手間を惜しめば、その分は身に跳ね返ってくるという事か」

「それに時間は私達の味方だ。ファルク公はともかくバクラザン公はかなりの高齢、しかも双方後継者は幼い」

「たしか、バクラザン公の方はアルミリアと同年だったか？どんな子だ、アルミリア？」

婚約者の顔をのんびり眺めていたアルミリアは突然そう振られ、慌てて記憶を手繰る。だが彼らに話せるような鮮明なエピソードは残念がらなかった。彼女は首を傾げつつ、顎に指をあてながら思ったことを口にする。

「静かな方ですね。これと言って特別なお話は聞きません。学校でも特にこちらと関わってこようともしませんし。普通の男子より大人しい印象です」

アルミリアの言葉に二人は難しい顔になる。

「単純に大人しいだけか？案外目立たないように周到に爪を隠している可能性は？」

「あり得そうなのが嫌な所だ。なにしろバクラザン公が後継者に指名しているのだから。子供を疑わねばならないとは、嫌な仕事だな」

そう二人が溜息を吐いたところでメイドがティーセットを持ってきた。アルミリアは礼を言いながらそれを受け取り、それぞれの前へ茶の入ったカップと皿に盛られた見慣れない菓子を置いた。

「うん？これは？」

「カルタ姉さまから教えて頂いたバイクド・モチョチョコと言う焼き菓子だそうです」

「モチョチョコ？変わった名前だな」

そう言いながらガエリオは皿の上のそれを一つ摘まむと口に含んだ。セブンスターズという名家の出であるが、彼もマクギリスも訓練で携行食などを口にする機会も多い。そのため見慣れない物を口にすることにもあまり躊躇が無かった。

「へえ、素朴な味という感じだな。ストレートの茶と良く合いそうだな」

「ほう」

ガエリオに続いてマクギリスも口に含む、それをアルミリアは真剣な表情で確認する。

「ああ、確かに。柑橘の香りで後味もいいな」

そう言つて二つ目を手に取るマクギリスを見て、アルミリアは安堵の笑みを浮かべた。それに気付いたマクギリスが再び口を開いた。

「アルミリア、もしかしてこれは君が作つてくれたのかい？」

婚約者が気付いてくれた事に胸を高鳴らせつつ、アルミリアは頬を染めて頷く。

「いつも頑張つてるマツキーに何かしてあげたくて」

「ありがとう。とても美味しいよ、アルミリア」

「…なんだか急に甘さが増したな」

仲睦まじく笑顔を向けあう二人に対し、ガエリオがそう言つて茶を口に含む。そして思い出したように口を開いた。

「カルタと言えば、火星支部とアリアンロットの共同作戦は今日辺りだったか？」

「ん？ああ、そう聞いている。レギンレイズが揃うまで待つように言つたんだが」

そう眉を寄せるマクギリスにガエリオも顔を顰めながら応じる。

「仕方がないだろう。ヒューマンデブリの市場は今好景気だからな。連中を野放しにすればするほど被害者が増える。カルタが逸るのも無理はないさ」

「お前も行ききたそうだな、ガエリオ？」

マクギリスの言葉に、ガエリオは肩を竦めて応じる。

「本音を言えば政争よりもMSで暴れる方が好みだな。だがここにお前だけを置いていく訳にはいかないだろう」

ガエリオの言葉に、マクギリスは静かに微笑む。二人の様子を見て、アルミリアが不安げに口を開いた。

「カルタ姉さま、危ない任務をしているの？」

ファリド家が騒動を起こした一件で、アルミリアとマクギリスの婚約についても解消と言う話が浮かんた。これは周囲が元々彼らの婚約を政略結婚であると認識していた事と、弱ったファリド家に娘を送り込み、セブンスターズに影響力を持ちたいと考えている名家と呼ばれる家の人間達の思惑が一致したためだ。この状況を打開したのが、

現ボードウィン当主であるガルス・ボードウィンへマクギリス本人が婚約を解消しないで欲しいと嘆願した事に加え、新たな婚約先の有力候補の一人だったカルタ・イシューが二人を応援する旨の発言を積極的に行ったからだ。それまで本当は愛されていないのではないかと不安を募らせたアルミリアは以降素直に好意を示すようになり、同時にカルタ・イシューとの関係も大きく変わり、今では定期的に連絡を取り合う程親密な間柄である。そんな彼女が危険な任務に就いているとなれば、アルミリアが不安になるのも無理からぬことだった。

「心配するな、アルミリア。カルタはあれで指揮官としても兵士としても一流だ。そうそう危ない事になどならん」

「でも…」

「大丈夫だよ、アルミリア。ガエリオの言う通りカルタは強い。それに」

「それに？」

聞き返すアルミリアにマクギリスは笑顔で答えた。

「火星には、心強い仲間がいるからね」

「味方諸共ですかっ、外道が！」

迫りくる砲弾を躲しつつ、カルタ・イシューは思わず吐き捨てた。死んだ彼らは海賊だ。この戦闘に生き残っても、余程の事が無い限り極刑は免れない。そしてカルタ達が優勢に戦闘を進めていたのだから、彼らは既に死んだも同然と言えただろう。だとしてもだ。

「自らの命令に従い命を賭ける者を背後から撃つなど！」

世界には様々な事情を背負った者が居る。彼らの間柄はカルタ達とは異なり、もつとドライで打算的なものだったのかもしれない。それでもMSに乗り戦場に出た彼らは指揮官の命令に従い、信じて背を預けたのだ。指揮官と言う立場を同じくするカルタは、その立場を平然と汚した敵に対し激高する。

「お前のような存在は、断じて許しません！」

弾雨の中をカルタのレギンレイズが疾駆する。艦隊へと肉薄すると機銃が放たれるが、機体を捻り最小限の動きでそれを躲し、大見得を切つて現れたMSへと切りかからんとロングソードを振り上げる。『やらせん!』』

サンドバルが乗る特徴的なヘキサフレームと同型が2機、叫びながらアンカーをカルタ目がけて放つてきた。片方は機体の軌道を逸らして避け、もう片方はロングソードで打ち払う。しかしそうしたことで僅かに隙が生まれた。

『死ねえ!』

「そう簡単に!」

振り抜かれるシミターを、左腕で殴りつけ強引に逸らす。その衝撃を逃がしつづ、機体を回転させ放つた回し蹴りは敵がもう片方の手に握っていたシミターで防がれた。

『ぬ、ぐう!?!』

互角に見えたのは最初の一合のみ、応酬の数が増えるごとに天秤はカルタへ傾いていく。そもそもレギンレイズとヘキサフレームでは地力が違う上にパイロットの技量もカルタが上なのだ。それは当然の帰結と言えた。

『このっ!』

大将の劣勢に焦つた敵が加勢しようとカルタへ近づこうとするが、それは間に割り込んだ2機のMSに阻まれる。

『やらせないよ』

『一佐の邪魔はさせねえ!』

刀とハルバードを構えたガンダムのパイロット達が口々にそう言い、敵機へと襲い掛かる。その援護に感謝しつつ、カルタはより苛烈に敵を攻め立てた。

『がつ、ぐうっ!ぬあああ!?!』

ロングソードが左腕を切り飛ばした瞬間、戦いの趨勢は完全に決まったと誰もが考えた。しかし予想外の事態は唐突に起こる。

「うあっ!?!」

もう片方の腕を切り飛ばすべくカルタがロングソードを振り上げ

た瞬間、背後から衝撃が走る。振動でぶれた視界に入ったのはメインスラスターへの損傷警告。その意味を理解するよりも早くカルタは左腕を機体の前へ突き出す。しかし連続して酷使された左腕はわずかに動きが鈍っていて、そしてそれは敵の攻撃を防ぎきるには致命的に速度が不足していた。

「あああああ!?!」

迫り来るシミター、そして先程とは比べ物にならない衝撃。カルタが最後に見たのは、機体の装甲を破壊しながら自らに迫る刃だった。

56. 人の身で全ての問題を解決することは出来ない

夜明けの地平線団討伐作戦から2週間が経過した。表面上はCGSの面々もいつもの日常に戻れているように見える。俺は池で元気に泳ぐ魚を見ながら溜息を吐いた。

「しおらしい面してんじゃねえか」

そう声を掛けてきたマルバが横に並ぶとしゃがみ込み、手にしていたパンくずを池へと投げ込んだ。食欲旺盛な魚たちは我先にと飛びつき、水面を騒がせる。

「良くない状況だからな。オルガ達年長組が抑えてくれているが、そのオルガ達だって納得はしていまい。特にミカヅキとアキヒロはな」
この2週間、いつも終業後に通っていた第三演習場に二人は一度も顔を出していない。何処にいるかをオルガ達に聞いたら、トレーニングルームに籠っているとと言う。怒りを運動で強引に誤魔化しているのだろう。良くして貰っていた年少組もかなり殺気立っている。

「解ってると思うけどな？」

マルバは池から視線を逸らさぬまま、顔を顰めつつそう口にした。

ああ、言われなくても大丈夫だよ。

「これはギャラルホルン内の問題だ。余計な藪などつつかんよ」

言いながら俺は再び溜息を吐く。事のあらましはこうだ。掃討作戦の終盤、主力であるアリアンロッド艦隊が戦域に突入、この時点でカルタ嬢はミカヅキとアキヒロの支援を受けつつ、敵大将と交戦していた。ミカヅキ曰くもう勝っていた戦闘だったが、アリアンロッドの人間はそう思わなかったらしい。交戦中のカルタ嬢を見て、支援射撃を実行したそうだ。それが運悪くカルタ嬢の機体に被弾。態勢を崩された彼女は敵機からの反撃を受けてしまう。

「新型機が間に合っていて良かったよ」

レギンレイズと呼ばれている新型はグレイズに比べ出力が高く、その分重装備が可能だ。カルタ嬢の場合は、指揮官という事もあって防

御力に重点を置いた調整がされていたらしい。おかげで命に大事は無いらしい。

「一部じゃ暗殺なんて話も流れちゃってる」

二年前の一件でイシュー家当主に就いている。そして火星での実績に加え、彼女が訓練を施していた地球外縁軌道統制統合艦隊の内実が周知された事で彼女の評価は上がり続けている。落ち目であったセブンスターズ第一席が再び咲こうとしているのだ、面白くない人間が居る事は確かだろう。

「そんな訳があるか。暗殺だとして、それを当主が直々に行う理由がどこにある？これは事故だよ」

俺は早口でそう言い頭を振る。そうしなければ、俺に都合の良い考えを口にしてしまいそうだったからだ。例えばセブンスターズはギャラルホルン内で非常に大きな権限を持っている。それこそ前フリド家当主のように、戦力を私物化出来たりするほどだ。そんな連中ならば、機体に残るログの改竄だって可能かもしれない。あるいは一般兵と異なり、責任追及の場において権力で逃れられるかもしれない。だから、自らの手の者ではなく、確実に問題を有耶無耶に出来る自分が実行したのではないか。なんて妄想だ。いかん、俺も相当頭が茹っているようだ。

「とにかく今は余計な行動は慎もう。我々の軽拳が彼女の足手まといになっては申し訳ないからね」

俺の言葉に、マルバは黙って池を見続けるだけだった。

「何故そうなる？」

眉間をもみほぐしながら、ラストル・エリオンは思わずそう口にした。火星支部とアリアンロッドの合同作戦。担当区域が重なる二つが、そこで暴れる厄介な連中を共同で対処しようと言うのは別段不思議な話ではない。規模で勝るアリアンロッドが主力を務める事もおかしくないし、囿である火星支部艦隊が、敵と先に交戦するのも自然

の流れだ。

「夜明けの地平線団は壊滅。首魁であるサンドバル・ロイターも拘束。それは良い」

だがそこまでの過程でラスタルは頭を抱える事となる。海賊と交戦状態に入った火星支部艦隊は数的不利にありながら優勢に作戦を展開、アリアンロッド艦隊が合流する頃には既に海賊は敗走を始めていたという。この時点で逃さぬために艦隊に追撃を命じたイオクの判断は間違っていない。だがその次の行動が酷い。追撃の命令だけ出すと彼は自らMSに搭乗し出撃する。本人に理由を問えば、戦域には未だ敵MSが残留していたため、MSによる掃討が必要だと考えたのだそうだ。因みに戦域に残っていた海賊側のMSは火星支部艦隊に拘束されているか、降伏信号を発信しているものばかりだった。その中を移動中、イオクは未だ交戦を続ける友軍を確認。激しい応酬を繰り返す敵首魁のMSとレギンレイズを見て、援護しなければと考えレールガンで3発発砲。2発はそれぞれが移動していたこともあり外れたが、最後の1発が不幸にもレギンレイズに被弾。態勢を崩した友軍は、その隙を突いた敵機の攻撃を受け大破。不幸中の幸いは、パイロットが大きな怪我を負ったものの命に別状は無く、復帰も可能だという事だろう。問題はそのパイロットがセブンスターズ第一席、イシュー家の当主であるという事だが。

「どうにもならんな、こんなものは」

現在セブンスターズは3つの派閥に別れている。一つはラスタルが構成しているエリオン家とクジャン家、そしてもう一つはファリド家を中心にボードウィン家とイシュー家が纏まった派閥だ。ファルクとバクラザンは共同歩調ではあるが、積極的に動いていない風見鶏なので、派閥と数えるべきか微妙なところであるが、敵でも味方でもない勢力である事には違いない。アーブラウ事件以前はファリド家の行動によって水面下で対立していたラスタル達であったが、マクギリス・ファリドへの当主交代以降は比較的良好な関係を築けていると考えていた。無論幾つかの対立事項はあるので完全な派閥の統合は難しいが、それでも今後のギャラルホルンの在り方についての認識は

同じであるとラスタルは考えていたし、以前は危ういと感じていたマクギリス・ファリド個人もこの所は大人しい。そしてその変化にイシュー家の当主とボードウィン家の嫡男が関係している事は明白だった。

「余計な庇い立ては、むしろ状況を悪くするな」

イオク・クジャンを受け入れたのは、先代のクジャン公への恩もあるがセブンスターズ内で派閥を拡大するファリド家に取り込まれないうようにするという意味が強く、故にラスタルは彼へ自らが教育を施すという考えは希薄だった。それは先代に仕えた部下を多く持つクジャン家ならば、イオクへの教育も彼らが行えるだろうという希望的観測も多分に働いていた事は否めない。ラスタルからすればイオクは少々知識不足ではあるものの、こちらの言葉は素直に受け止めるし、任務にも誠実だ。特に潔癖とまでは言わないが、正しくあろうとする姿勢が強く、そこが人を引き付ける魅力になっていると評価していた。ラスタルの様に清濁併せ呑むと言った指導者にはなれないだろうが、部下達に好かれ支えられる王道の指導者になれる資質があると彼は考えていた。

「クジャン家の連中は何をしていたんだ」

彼の失敗は、イオクと言う人間が誰に対しても自分に見せるような態度で行動すると考えていた事だろう。ジュリエッタに対し悪態をつくことはままあるが、それも名家の人間には珍しい事では無い。むしろラスタルの様な考えの方が異質であると言う自覚もあつた事から、普通のギャラルホルンの人間に対しては違う態度なのだろうと勝手に考えていたのだ。それに加えて彼自身の境遇がその思考を助長していた。ラスタルは気安く社交的な性格であるため、セブンスターズの嫡男という立場でありながら、周囲から親しく接せられていた。それは彼ならば諫言しても受け止めてくれると言う信頼にも繋がっており、それ故に彼の周囲には遠慮なく意見を言ってくれる人間が多かった。それが普通であつた彼には、主人の不興を買えばどうなるか解らないので主人を注意出来ないと言う人間関係を知識として知ってはいても、そんな暗愚な行いをセブンスターズに名を連ねる家がし

ているなど想像出来なかったのだ。

「手に余るならば、扱いても考えねばなるまいな」

状況が状況である、今イオクをアリアンロッドから離したとしてもフアリド家に取り込まれる心配はない。ならば今のうちに数合わせをさせる戦力に変えておくことも悪くないとラストルは考えた。そしてそれは今後のギャラルホルンにとっても重要な事だ。このまま順調に進めば、次代のセブンスターズはフアリド家の意見のみで動くようになってしまいうだろう。マクギリス・フアリドが優秀である事は疑うべくもないが、合議制においてそのような環境が健全でない事は誰の目にも明らかだ。少なくとも一人はその意見に疑問を投げかける者が必要だろう。自分が居る内は良いが、それでも若い彼らより確実に先に引退する身としては、出来るだけ後顧の憂いは潰しておきたかった。

「となると、必要なのは教育係だが…、良さそうなのが居たな」

そう言って彼は口角を上げる。思い浮かべたのは、拘束中であつても何らこびへつらう事も無く、それどころかセブンスターズの当主相手にも平然と言いつ返す男の事だった。

独房の中でジュリエッタ・ジュリスは膝を抱えて座り込んでいた。アリアンロッド本隊と合流し作戦の報告をした後に、ラストルから直々に独房入りを言い渡されたからだ。命令には従い独房に入った彼女は酷く気落ちしていた。

（悪いのはあの馬鹿ではないですか）

出撃すると言つて聞かないイオク・クジャンにそれこそMSに乗る瞬間まで翻意を促したが、聞き入れられることは無く出撃してしまつた。仕方なく護衛として出撃したが、既に大勢は決していた事から、彼女にも油断が生まれていた。だから、そばにいた彼が突然発砲し始めたのを止める事が出来なかったのだ。

「いえ、言い訳ですな」

確かに大本となる原因はイオクのせいだろう。しかし自分は確か

に僚機として出撃していたし、あの場で彼を止められる唯一の人間だったのだ。そして何より、イオクがその様な行動に出る事を、唯一予想出来たのも自分だけだった。

「解っていたはずなんです。あの馬鹿はいつもそうなんですから」

彼女の知るイオク・クジャンという男は、信じられない程視野の狭い人間である。支援機に搭乗しているため、他の隊員よりも多く他者の動きを見ている筈なのに、自身の技量が劣っている事に気付かない。どころか、支援機を任されたのは自分の射撃の腕が優れているからだと勘違いしている節がある。尤もこれは、彼を後方に押し込めるためにあれこれと吹き込んだ部下達にも問題があるのだが。とにかくそれもあつてか、彼はジュリエッタが交戦している際にも頻繁に支援射撃を行う。その際も自身が当てられると思つた瞬間には躊躇なく発砲するので、連携などお構いなしだ。敵機ともつれ合っている際に撃たれた事も一度や二度ではない。撃つて当てられると考えた瞬間、彼の頭から友軍機という存在はすっぽりと抜け落ちるのだ。幸いと言うべきか、狙つた所へ弾が飛んでくる方が稀なため、今まで被弾した事は無かつたが。

「どうしよう」

謹慎を言い渡された瞬間、彼女は自分がとんでもない勘違いをしていたのではないかと考えた。ラスタルはイオクが行動する際、頻繁にジュリエッタを護衛と称して同行させていた。自分はその言葉を鵜呑みにしてただ彼が死なないように行動していたが、本当はそれ以上の事を求められていたのではないだろうか。思い返せば彼の部下達は、彼の行動を止めたり苦言を呈する事が無い。そんな中で自分はあれだけ暴言を吐いているにもかかわらず、それを注意されたりブリッジから追い出されたりもした事が無い。ラスタルの指示であるから強く出られないとも思えるが、それでも嫌味や陰口の一つくらい聞かなくても良かったはずだ。それが無かつたのは、彼らも密かにイオクに彼女が正しく諫言してくれる事を期待していたのではないだろうか。だというのに自分は馬鹿に言つても無駄だなどと考え、伝える努力を怠つた。その結果が今回に繋がっていると考えれば、ジュリエッタは

ラスタルの期待を裏切った事になる。

「どうしよう」

腹の底から冷たいなにかがせりあがってくる。ジュリエッタは孤児だ。幸運にもラスタルの友人に拾われ、才覚を認められたためにラスタルの下でギャラルホルンの隊員になることが出来た。それは逆に言えば、ラスタルが彼女の才覚に不満を感じたならいつ捨てられてもおかしくない立場であると彼女は考えていた。今の自分がその瀬戸際に居ると考え、彼女は恐怖する。温かい世界を一度でも知ってしまったが故に、あの冷たい世界に再び戻らねばならない事が恐ろしくて仕方がない。

「どう、しよう」

独房の中、一人呟く彼女に答えを示す者は居なかった。

57. 善意で舗装された道であつても、当事者が喜ぶとは限らない

「ミカツキ?」

久しぶりの行為を終えた気だるい感覚の中で、胸の中に居るミカツキが身動きしていない事に気付きアトラはそう声を掛けた。度重なる社員の増加に耐え切れなくなったCGSは、旧第二演習場を社宅区画に変更し、そこに多くの従業員を住まわせていた。アトラとミカツキの二人は共同でマンションタイプの一部屋を借りて暮らしている。決め手は本社までの距離と防音性の高さであつた。

「ん」

返事をするミカツキはアトラの胸元へ顔を擦り付ける。あの海賊討伐作戦から1カ月以上が経過していた。この所ミカツキは苛立っていて、少し前までアトラが誘っても応じてくれない状態が続いていた。曰く、

「今、イライラしてるから」

小柄ではあるものの、MSパイロットを務めているミカツキの体力は凄い。そう、とても凄い。普段から劣勢ではあつたがそれでも手加減されていたらしく、フラストレーションで抑えが利かない状態で及んだら、アトラを傷付けてしまいかねないからと言うのが彼の言い分だつた。全力のミカツキに大変興味を覚えた彼女だつたが無理を言う訳にもいかず、寂しく自分で慰めて我慢した。そんな彼から一カ月ぶりにお誘いがあり、先ほどまで彼女は愛しい男を堪能していたのだが。

「ちよつと考え事。ごめんね、アトラ」

「イシューさんのこと?」

謝罪してくるミカツキの頭を抱きしめながらアトラは問い返す。海賊討伐の際不幸な事故があり、カルタ・イシューが負傷した事は5番隊に就職していたアトラも聞き及んでいた。地上の視察のたびに少年兵の多いCGSを気かけ訪問してくれる彼女はセブンスター

ズの一家、それも当主とは思えない程温厚で気さくな人柄なため、CGS内でも人気者だ。唯一スピカだけが彼女を警戒しているもの、人間的には好感を持ってしていると話しているのを聞いた事があるから、事実上全員から好かれていると言えるだろう。そんな彼女が怪我、それも事故とは言え友軍に撃たれた事が原因だなどと聞けば、多くの者が殺気立つのも無理からぬことだった。

「そうなんだけど、ちよつと違うかな」

そうミカツキは眉を寄せると息を吐く。その様子にアトラは首を傾げた。先日カルタが医療ポッドから出た旨を相談役の口から聞いていた彼女は、まだカルタが本調子でない事をミカツキが気に病んでいるのかと考えたのだが、どうも違うらしい。

「ならどうしたの？」

基地内の雑務を担当している5番隊に比べ、実働部隊である3番隊に所属するミカツキの方がどうしてもその手の情報に詳しくなる。聞いてミカツキの憂いを解決出来るとまで自惚れてはいないが、それでも口にすれば気持ちの整理がつくかもしれないと考え、彼女はそう聞いた。

「うん、なんか面倒な事になりそうなんだよね」

そう言つてミカツキは、今日聞いた内容をアトラへ話し始めた。

ギャラルホルンの地球本部であるヴィーンゴールヴには、円卓と呼ばれる部屋が存在する。勿論本当に円卓があるわけではなく、セブンスターズの当主達が合議する部屋をそう誰かが呼び出したのだ。今ではすっかりギャラルホルン内でその名が定着した部屋は、現在剣呑な空気に包まれていた。

「揃いました事ですし、そろそろ始めましょう」

そう口を開いたのはファルク公だった。バクラザン公と共にヴィーンゴールヴを預かっている彼は、この場で進行役を受け持つことが多い。

「…そうですね、我々も時間が惜しい」

普段の穏やかさなど置き忘れてきたかのように、低い声音でガルス・ボードウィンが賛同した。部屋にはセブンスターズそれぞれの家紋が掲げられた椅子が用意されていて、その椅子には各家の当主が座っている。その中で一つだけ、イシュー家の椅子だけが空席だった。ただし、その椅子の前には通信端末が置かれている。

『この様な格好での会議への参加、平にご容赦下さい』

その端末から、申し訳なきようなカルタ・イシューの声が発せられる。ほんの3日前まで医療ポッドに納まっていた彼女は、現在火星支部の本部であるアールズに身を置いていた。故に全員が揃わねばならない会議であっても、簡単にヴィーンゴールヴまで来る事は難しかった。

「仕方ないでしょうな。かと言ってこれ以上この問題を放置も出来ない」

バクラザン公が痛ましげに首を横に振り、話を進めるよう促す。それに頷き、口を開いたのはマクギリス・フェアイドだった。

「では今回の一件について、当事者より何か言いたいことはありますか、クジヤン公？」

言葉使いこそ丁寧であるが、その声音は多分に険を含んでいる。だがこの場にそれをとがめる者は居ない。それどころかボードウィン公に至っては、クジヤン公を睨みつけている始末だ。

「わ、私は——」

「申し訳ない！全て私の監督不行き届きだ！」

イオク・クジヤンが口を開こうとした矢先に、大声で隣に居たラスタル・エリオンが謝罪し頭を下げる。それを冷たい目で見つめながら、マクギリスは口を開く。

「私はクジヤン公に聞いているのですか？」

「解っている、だが私にも謝罪の機会を与えて欲しい。本を正せば彼女の作戦に賛同し、クジヤン公を派遣したのは私の判断だ。現場での判断に問題があったとしても、その責任を負うのが上官の務めだと私は認識している」

「問題ですか。エリオン公はこう仰っていますが、クジヤン公はどの

様にお考えですか？」

「それはっ」

「無論クジャン公は猛省している。地球に戻るまでの間彼は独房で蟄居していたのだ」

イオクが喋る前に、再びラスタルが遮って答える。その様子に苛立った様子を隠すことなく、ガルス・ボードウインが責め立てた。

「私達はその反省の言葉を彼の口から直接聞きたいのだよ、エリオン公」

「一部ではここの所評価の高いイシユール公を妬んでの行動、などという流言も飛び交っている」

「戯言だ！なぜ私がその様な！」

立ち上がり叫ぶイオクに対し、マクギリスが手をかざし制する。

「無論、監査局の調査で今回の事が残念な事故であると言う事は解っています。それを公開し誤解を払拭する事も可能だ。しかし」

そう言つてマクギリスは手を静かに机の上に置く。

「しかしそれにはクジャン公、貴方からの誠意も必要だとは思いませんか？事故であれ何であれ、貴方が彼女を窮地に追いやった事は紛れもない事実だ。それとも事故なのだから謝罪の必要など無いとお考えかな？」

見れば机に置かれた手はきつく握りしめられ、僅かに震えている。その様子にイオクは動揺した。彼の中でマクギリス・フリイドと言う男は常に冷静で、それでいて他者を何処か見下している人間だった。妾の子と言う卑しい出自にありながら、才覚を見せてつけるその姿にイオクが不快感を覚えたのは一度や二度ではない。そんな男が近い友人の怪我に対し激しい感情を見せた事は、イオクのマクギリス・フリイドに対する印象を大きく揺るがせた。

「その、私は…」

『もう良いでしょう』

言うべき事は理解していた。だが躊躇ううちにその機会は失われることになる。

『事故である事が明白なのです。セブンスターズがこのような事では

和を見せるべきではありません。特に今は民衆も厳しく私達を見定めています。この件は水に流すという事で如何でしょうか？私はクジヤン公を許します』

イオクの口から謝罪の言葉が出るよりも早く、カルタ・イシユーが許しを与える。その言葉にマクギリスとガルス・ボードウイン、そしてラスタル・エリオンは苦い表情で、バクラザン公とファルク公は安堵しながら受け入れる。取り残されたイオクが脱力して席に座ると、ラスタルが難しい顔のまま口を開いた。

「イシユー公の寛大な心に感謝します。しかし信賞必罰は世の習いですし、許したとしてもそのままでは収まりも悪い。どうでしょうか、暫くクジヤン公をイシユー公の補佐として火星支部で働かせるというのは？」

「そ、私にはアリアンロッド艦隊の指揮官としての責務が!」

「そちらは私が何とかしよう。幸い目下最大の悩みであった海賊問題は沈静化しているのだ、貴公が抜けた穴を私が埋めるくらい余裕はある。それよりもイシユー公との間に確執が無い事を明確にするこの方が大切だ」

『成程、ありがたいお話ですがアーレスは少々手狭ですよ?』

ラスタルの言葉にそうカルタが応じる。それは言外に拒絶の意思を表していたが、ラスタルは引き下がらない。

「出向く人員は最小限度、更に監視として監査局から人員を派遣頂くならどうだろうか?」

ラスタルは視線をマクギリスに送りながら言葉を続ける。

「流言が既に流れている以上、否定材料を用意しなければ痛くもない腹を探られることになる。それは今のギャラルホルンにとって大きな痛手になるのは間違い無い、何せあの事件からまだたった2年しか経っていないのですから」

『…監査局から人員の派遣は問題無いのでしょうか?』

カルタの問いにマクギリスが口を開いた。

「人員は問題ありません。しかし、監視が居ては確執があると明言しているようなものでは?」

「だからこそその監査局からの派遣です。そもそもこの派遣には刑罰の意味も含まれるのだから、監視が居るのは不自然ではない。更にそれが双方に中立の立場ならば何ら問題とならないでしょう」

「私はエリオン公の意見に賛成です。セブンスターズの結末を見せる良い機会だ」

沈黙を守っていたバクラザン公がそう口を開くと、それにファルク公が首肯しつづつ続く。

「何よりイシユー公の火星での活動は非常に評価が高い。そこからクジャン公が学べることも多いでしょう」

半数が同意した事で、合議の流れは固まる。それを察したカルタが疲れを隠さぬ声で答えた。

『では、若輩非才の身ではありますが、精一杯務めさせて頂きます』

その言葉に部屋空気は少しだけ弛緩する。しかしイオク・クジャンは俯いたまま、その日の合議が終わるまで口を開くことはなかった。

58. 敵を知らず、己を知らず

「ラスタル様！申し訳ありません！」

夕日に照らされた廊下にイオクの声が響いた。前を歩いていたラスタル・エリオンは足を止めると、振り返ること無くそれに応じる。

「謝る相手が違うな。イオク・クジヤン」

突き放した物言いにイオクが怯んだのを感じながらも、ラスタルは構うこと無く言葉を続ける。

「合議の場で、問われるより先にイシユー公へ貴公は謝罪すべきだった。そうすればせめて謝らぬうちに許されるなどと言う無様を見せずに済んだだろう」

「その、イシユー公には後日正式にお詫びを」

未だにそのような悠長な事を言うイオク・クジヤンにラスタルは頭を痛めた。クジヤン家の席次はエリオン家より上である。個人の実績や勤続年数でラスタルが面倒を見る形になっているが、階級が同格になれば頭を下げるのはラスタルの側になる。そしてそれは決して遠い未来ではない。何故ならセブンスターズの席次はそのまま昇進速度にも影響しているからだ。溜息を吐いていると、騒ぎを聞きつけたのか、ジュリエッタ・ジュリスが近づいてくるのが見えた。普段は活発な彼女だが、今は大人しく廊下を歩いている。二週間以上蟄居が続いたのだから無理からぬ事だろう。しかしあれは周囲からの彼女への反感を抑える為には必要であったとラスタルは考えている。

「ラスタル様」

「丁度良い、ジュリエッタ。お前にはクジヤン公と共に火星へ行つて貰う」

その言葉に一瞬ジュリエッタが目を見開くが、彼女が何かを言う前にイオクが再び叫んだ。

「お待ちください！ラスタル様！どうかお考え直し下さい！私が学ぶべき方はラスタル様しかおりません！」

そう熱弁する彼に向き直り、ラスタルは正面から見据えながら口を開く。

「ほう、そうか。私から学ぶと。ところでクジャン公、貴公は私から何を学ぶのかね？」

「え？」

驚くイオクに対し、彼は皮肉気に口元を歪めながら更に問う。

「どうした？私も他のセブンスターズも、君が学ぶべき相手はイシュー公だと考えた。だが貴公はイシュー公ではなく、私でなければならぬと言う。つまりそれは、イシュー公に無く私からしか学べない何かがあると言う事だろう？それは何だと聞いている」

「それ、は…」

言い淀むイオクなどお構いなしに喋り続ける。

「知っての通り私は誰かにものを教えると言うのが不得手でな。何が学びたいのか解らぬ相手を教え導ける程の器量は無い。せめてその者の参考になりそうな人間を紹介してやるのが精々だ。しかもだ」

ラスタルは遠慮せずに更に言葉を叩き付けた。

「貴公はその教え方が不服だという。さてクジャン公、私の教え方が気に入らぬと言う貴公に、何をどう教えたら良いのだね？」

「……」

彼の問いに対してイオクが言い返せずに沈黙していると、思い詰めた表情のジュリエッタが口を開いた。

「ラスタル様。イオク様が火星に行かない場合、私はどうなりますか？」

「うん？」

質問の意図が解らずラスタルは首を傾げた。イオク・クジャンが火星に行くことは決定事項であり、覆るものではない。同行を命じているジュリエッタの扱いもそれに倣うのだから、行かない場合の処遇など存在しないのだ。それ故の行動だったのだが、どう受け取ったのかジュリエッタは勢いよく頭を下げると大声で懇願してきた。

「どうかその場合でも私を火星へ行かせてください！」

「言ってみろ、ジュリエッタ」

彼女の予想外の願いを聞き、ラスタルは即座にそう返した。ジュリエッタの言葉をイオクに聞かせるべきだと判断したからだ。

「私は、今回の事で自分の力不足を知りました。私はもつと学ばなければいけません。だから火星に行かせてください！」

その言葉を聞きラスタルは思わず頬を緩めた。ジュリエッタは彼の親友が才覚を見いだし拾い上げた孤児だ。出自によって採用の成否が決まってしまうギャラルホルンにおいて彼女はラスタルの私兵と言う扱いであり、その事に彼女は満足しているように彼には見えていた。故に相応の扱いをしてきたのだが、どうやらジュリエッタはその上を目指すつもりになったようだ。才能がありそれでいて向上心のある人間をラスタルは好んでいる。この瞬間、彼の中でジュリエッタの立ち位置が明確に変わった。

「お前はあくまで私の私兵と言う立場だ。そのお前が一人で火星に向かつてもありアンロッドでのような扱いは受けられん。それどころか学ぶ機会が与えられるかも解らんぞ?」

「いいえラスタル様。あの作戦の時火星支部の部隊は、数で負けたのに戦いでは勝っていました。個人の技量もあるのでしようが、それよりも彼等は一つになって戦っていたことがあの勝利に繋がっていたと私は思います。そしてそれが今の私には足りないものです。だから彼等の側に居るだけで、幾らでも学ぶことはあると思います」
彼女の返事にラスタルは頷く。

「よく言った。さて、クジヤン公。貴公はどうするかね?」
視線の先に居た、イオク・クジヤンは俯いたままだった。

「お久しぶりです、もうお加減は良いのですか?」

「ええ、随分とご心配をおかけしました。皆さんにも大事なことをお伝えください」

そう笑うカルタ嬢に俺は笑顔で頷いて見せる。

「良い話を持って帰れる私は運が良い。皆も聞けば喜ぶでしょう」

事実この所CGSの空気は控え目に言って最悪だったからな。彼女の無事を知ればかなり改善されるだろう。そんなことを考えていたら、何故かカルタ嬢は表情を曇らせながら口を開いた。

「ですが、悪いお知らせもあるのです」

「悪い、ですか。一体何が？」

聞き返した俺に、彼女は真剣な表情で告げてくる。

「今回の一件は偶発的な事故である事は証明されました。本来ならばそれだけで済むはずの話だったのでありますが、アリアンロッド艦隊の司令が信賞必罰は必要であると言い出しまして」

「道理ではありますが、それがどう悪い知らせになるのですか？」

「誤射をした隊員の再教育を火星支部でして欲しいと」

何でそうなる？

「再教育ならば地球本部で行えば良いのでは？何故態々ここでやる必要があるのです？」

そもそもガンダムに残っていた画像を確認したけど、あれどう考えても誤射で済ませて良い攻撃じゃねえぞ？格闘戦してる友軍MSの背後から射撃って、射撃の基本すら理解していない可能性がある。はつきり言って新兵訓練からやり直せと言うのが俺の意見なのだが。「発砲したのがセブンスターズの現当主である事はご存じでしたね？つまり、そう言うことです」

その言葉に俺は無言で頭を掻く。ギャラルホルンははつきり言っ
て歪な組織だ。俺から言わせれば世界で唯一——今ではだった、だが——の武装組織が、合議制と言いながらもごく一部の人間の意見で動いているなんて正気の沙汰ではない。これでせめて隊員達からの推挙なりなんなりで入れ替わりでもあれば多少はマシだが、300年前の戦争で功績の高かった7名の子孫が独占しているとか、一体いつの時代の話かと言いたくなる。無論目の前の彼女ののように名に恥じない働きをしようと努力し、更には才能に恵まれる人間もいることはいら
るだろう。けれど組織の運営や意思決定を努力せずとも与えられる立場にいる人間が、常に全員墮落せずに職務に当たれると思えるほど俺は人間が信じられない。そもそも功績順だって気に入らん。MAの討伐数が多い順？そんなので解るのはパイロットとしての技量くらいなもので、組織の運営能力なんて何も担保されてねえじゃねえかと声を大にして言いたい。

「面子と言うのも厄介ですな」

軍組織と言うよりギャラルホルンって武家社会なんだよな。だからセブンスターズの、しかも当主が再訓練なんて受けたら舐められると言う事なんだろう。そうなると暫くは合同訓練も休止だろうか？

「しかもまだ続きがあるのです」

なんですと？

「アリアンロッド艦隊では火星支部の訓練を非常に高く評価している。なので現地協力企業との合同訓練など通常行っている訓練を実施し、是非参加させて欲しいとのことなのです」

それはこつちの持ち出しが多すぎませんか？事故だって言ってもカルタ嬢は被害者だぞ？そこに馬鹿の再訓練を頼むのだけでも大概だと思っただけだ。

「…火星支部に対して、アリアンロッド艦隊に配備予定だったレギンレイズと艦艇を融通するそうです。それに掛かる運用費も受け持つと」

溜息を吐きながら、カルタ嬢は更に続ける。

「更にイシュー家が支援している火星企業を、エリオン家とクジャン家でも支援したいと提案されました。率直に申し上げて、これはかなりおいしい内容です」

貧困こそ治安維持の最も大きな障害であるとして、イシュー家名義でカルタ嬢は火星の企業、ウチみたいに浮浪児を雇っている所やアドモス商会みたいに孤児院なんかを経営している企業に出資してくれている。そうした人が増えることは純粹に助かるし、何より世界がそれを良い事だとか、メリットだと認識してくれる様になれば万々歳だ。成程、嫌らしい手を使ってくれる。

「ですな、そこまで言われては断れません。皆には上手く私から言いますし。しかし本当に良いのですか？普段通りと言われますと、その」

俺が言い淀むとカルタ嬢は良い笑顔で応じる。

「ええ、問題ありませんわ。何しろ普段通りと言われたのですから」

俺が苦笑し首肯して見せると、彼女は笑顔のままお辞儀をする。

「ご迷惑をおかけしますが、よろしくお願い致しますわ」

そう言った彼女の頭から珍しく付けていた髪留め、カチューシャと
言うのだろうか？そんな大きさのものがズレて落ちる。すると何故
か彼女は慌てて頭を押さえた。

「大丈夫ですか、カルタ一佐？」

「ふあいつ！大丈夫です！」

いや全然大丈夫に見えないんですけど。不思議な行動を取る彼女
に思わず近づいたら、もの凄い勢いで彼女が立ち上がり飛び退かれ
た。因みにその間も彼女の手は頭を押さえたままだ。その行為に俺
はなんとなく察する。そうだな、一月近くも医療ポッドに入ってい
るような怪我をしたんだ。頭部に大きな傷なんかがあっても不思議
じゃない。あの髪留めもそんな傷を隠すものだったのだろう。

「申し訳ありません。配慮に欠けていました」

俺はそう言って髪留めを拾うと机に置き、部屋を出ようとする。彼
女は軍人であるが同時に年頃の女性だ。特に容姿に関係する事なら
ば気にするななどと言うのは無神経な話だろう。ここはこのマ、大人
しく去るぜ。

「あ、ま、待って！待って下さい！」

思えば前世も女心が解らないとか鈍感とか朴念仁とか散々な評価
だったな、などと遠い目をしていたら、彼女が慌てて呼び止めてきた。
いや、いいんだカルタ嬢。俺のようなデリカシーの無い奴をフォロー
する必要なんてないんだ。

「重大な誤解をされておられます！大きな怪我などはしておりませ
んから!!」

いやでも、じゃあその仕草はなんですか。言いながらも頭から手
はなさない彼女に首を傾げると、カルタ嬢は顔を真っ赤にしなが
ら、恥ずかしそうに目に涙まで浮かべてゆっくりとその手を退けた。

「後遺症や傷跡は無いのですけれど、その、治療後に毛髪に変な癖が付
いてしまいました」

彼女の言葉を肯定するように、毛髪の一部が大きく跳ね上がって
いる。いや、跳ねすぎだろこれ。でもなんて言うか。

「無礼を承知の上で、敢えて言わせて下さい」

湧き上がる衝動を抑えきれず、俺は口を開く。

「大変愛らしいですよ、カルタ嬢」

「…本当ですか？」

俺の言葉に、狐耳を生やしたような髪型になった彼女は俯いて、小さな声で問うてくる。なんだ？彼女は俺を殺しにきているのか？

「嘘など言うものですか。それとも、こんな男の言葉は信じられませんか？」

俺の言葉に、彼女は顔を赤くしたまま、いつまでも俯いていた。

後日、彼女は髪留めを外して業務に当たるようになったのだが、彼女の部下達から大量の感謝のメールが俺宛に届く事になる。そしてCGSの4番隊でも暫くコスプレが流行る事になるのだが、まあそれは別の話である。

59. 新兵の身分は新兵のみである

「監査局より同行を命じられた、ガエリオ・ボードウィン三佐だ。世話になる」

「よろしく願います。アリアンロッド所属、ジュリエッタ・ジュリスです」

「……」

本社の応接室で目の前に座った三人がそう口にした。正確には二人だけだ。俺が柔やかに待っていたら、沈黙していたイオク君の脇腹にジュリエッタ嬢の肘鉄が刺さった。あれは鍛えていても痛いな。

「うぐっ！…イオク・クジャンだ」

「はい、よろしく願います。私はCGS社長相談役のマ・クベと申します、以後お見知りおきを。イシュー一佐より伺いました内容では弊社の新人研修をお受け頂くとの事でしたが」

「新人研修だと？たかが民間警備会社のそんなものを何故受けねば——うぐっ!?!」

苛立たしげに噛みついて来るイオク君の脇腹に再び肘鉄が突き刺さる。うん、別に良いのよ、受けてくれなくても。

「と仰っておりますが、受講なさるのはジュリス様のみと言う事で宜しいでしょうか？」

その言葉に首を横に振ったのはガエリオ君だった。

「いや、ここに居る三名全員での研修を希望する」

おや？

「ボードウィン三佐もですか？」

「御社の精強さは身に染みて理解しているのでな。折角なのだから是非体験したい」

そいつは物好きだな、だが研修費を頂けるなら何も問題無い。俺は笑顔で頷くと早速始める事にした。

「承りました。では、アキヒロ。三名を新兵コースだ」

「はっ！」

後ろに立っていたアキヒロが元気よく答える。その音量に驚いて

いる三人に俺は笑顔のまま告げた。

「何をしている？取敢えず、良いというまで走りたまえ」

俺はそう言つて外を指さした。

「なめてるのか！ジジイのマスかきでもまだ貴様等より元気があるぞ！！気合を入れろっ！」

ひつきりなしに飛んでくる罵声を聞きながら、ジュリエッタは黙々と走る。応接室での会話から僅か10分。既に準備されていた野戦服とブーツに着替えると、そこからは基地の周囲を延々と走っている。とはいうものの、ジュリエッタとその横を走るボードウィン三佐の顔に疲労は無い。火星の気温は過ごしやすく、彼女が新兵訓練を受けた地球のキャンプに比べれば遥かに走りやすい。何よりMSパイロットは体力勝負であるため、彼女は日頃から鍛えている。この程度は普通の準備運動と変わらない運動量だ。因みにイオクは2周目辺りから遅れ始めており、併走している教官から罵声を浴びせられている。

「あれでよくもレギンレイズに乗れたものだな」

振り返りそう呆れた声を出すガエリオにジュリエッタは視線を送らずに口を開いた。

「ボードウィン三佐は鍛えてらっしゃるのですね」

「監査局もMSには乗るから、多少はな」

そう返すガエリオを見て、ジュリエッタは彼の評価を上方修正する。火星に向かうシャトルの中では非常に軽薄な態度であったため、勝手にイオクと同程度と判断していたのだ。

「監査局にはまだレギンレイズは配備されていないのですよね？」

「実働部隊が優先だからな。もつとも、俺のように優遇されている人間には回ってきてるが」

その言葉にジュリエッタは少しだけ目を見開いた。レギンレイズを受領した日、イオクは周囲に散々自慢していたのだ。対してガエリオは、それが当然では無く優遇の結果だと認識している。

「どうした?」

「いえ、随分真面な方だなと。セブンスターズの若い男はイオク様しか見ていなかったものですから」

「いや、どちらかと言えばあっちの方が特殊な部類だろう…」

そう言つてガエリオが振り返つた先には、足を止めて教官に食つてかかるイオクの姿があつた。

「いい加減にしろ!私を誰だと思つているんだ!イオク・クジャンだぞ!」

そう言われた教官の青年、アキヒロ・アルトランドはそれよりも遙かに大きい怒声で応じた。

「誰が止まれと命じた!?発言をいつ許した!クソ虫がベラベラとクソを垂れるな!貴様に許された発言は、ハイとイイエと教官殿だけだ!そのクソよりも価値のない頭に詰まつたものにちやんと覚えさせておけ!」

「なっ!」

「貴様は誰なのか教えてやる!貴様はクソ虫だ!この世界で最も劣つた生物だ!戦場に出れば味方の足を引っ張るところか、後ろ弾で殺しかけた害悪だ!正に生きている価値のない存在だ!」

「あそこまで言うか」

引いた笑みを浮かべながらそう口にするガエリオに対し、冷めた目でジュリエッタは答えた。

「でも事実ですから言い返せません」

二人が呟く間もアキヒロの罵声は続く。

「訓練を受けている貴様がそれ以前は何であつたかなど重要じゃない!貴様は価値がないから訓練を受けているのだ!そんなことも解らんのが貴様がクソ虫である証拠だ!解つたか!」

「わ、私は」

「巫山戯ているのか!貴様が垂れて良いクソは!ハイとイイエと教官殿だけだと教えたはずだぞ!その大層な頭にはクソすら詰まつていないのか!」

「い、いいえ」

「声が小さい！」

「い、イイエ！教官殿！」

「だったら走れクソ虫！勝手な休憩を挟んだ分は2周追加で許してやるー！」

「な」

「返事はどうした！」

「ハイ！」

「よし、駆け足!!」

アキヒロの言葉に、イオクはのろのろと動き出す。つられて二人もランニングを再開した。

「懐かしいですね」

そう言つて微笑を浮かべるジュリエッタに、今度はガエリオが話し掛ける。

「以前もこんな訓練を？」

「はい、地球で少し。でも彼は優しいですね、私が受けた訓練では教官に刃向かったりしたら即座に殴られましたよ」

「君の人生も中々に壮絶そうだな」

彼の言葉にジュリエッタは頷く。

「はい、ですから私は頑張るのです。あんな思いは二度とごめんですから」

「おー、やってんね？」

アキヒロの様子を眺めていたら、愉快そうな笑みを浮かべたシノがそう言いながら近づいてきた。

「まだ走らせるだけなんだがね。前途多難と言ったところだな」

ギヤラルホルンつてもしかして新兵訓練が無いのかな？つて疑いなくなる行動を繰り返すイオク・クジャンに正直ハラハラさせられっぱなしである。教育係をアキヒロにして本当に良かった。

「あーあ、アキヒロの奴舐められてるなあ。マッさん。俺が代わろうか？」

愉快そうに口元を歪めながら、全く笑っていない目でシノがそう聞いてくる。俺は溜息交じりに答えた。

「気持ちは解るが駄目だ。これは訓練であって報復の場ではない」

シノ自身はカルタ嬢とそこまで深い親交が有ったわけではない。むしろミカツキやアキヒロの方が近いだろう。けれど彼は年少組の面倒をよく見ている分、彼等の悲しんだ姿を年長組の中で一番身近に見ていた人間だ。

「相手が理解出来ない報復はただの攻撃だ。敵を増やすだけにしかないらん」

「もう敵じゃねえの？」

そう冷たい目で走るイオク・クジャンを眺めながら、頭の後ろで腕を組むシノに俺は頭を振って見せる。

「あれはそれ以前の問題だ。自分の行いが敵を作っている自覚すら無い」

だから今俺達が彼に敵対するならば、イオク・クジャンはこう思うだろう。CGSは突然こちらに牙を剥いてきた、意味不明の連中だ。そして何より恐ろしいのは、そう言った馬鹿は一度敵だと認識したら話が一切通じない事だ。彼のような人間にとって、敵とは対立している人間ではなく自身を害する悪でしかない。故に相手の言い分も立場も考慮せずに躊躇無く正義を行えるのだ。

「最低限戦争を理解させん事には、危なくて味方どころか敵対も出来ない。すまないな」

「マッさんがそこまで言うなら、我慢するよ。けどさあ」

走ると言うよりも既に歩いている速度で動きながら、恨みがましい目でアキヒロを見つめるイオク・クジャンを見ながらシノがぼやく。

「あれ、本当に何とかなるのかね？」

その質問に答えられるだけの判断材料を持たない俺は、沈黙で応じるしかなかった。

60. 些細なきっかけでも人の意思は変わる

「へえ、じゃあくジャン家の御当主様が今火星にいるのかよ」

「ええ、どうしてそうなったのかは解りませんが、ウチで新人向けの訓練をしていますね」

ハーフメタル採掘場の定例会に出席していたオルガ・イツカは愉快そうに喋るジャスレイ・ドノミコルスにそう答えた。

「新人向けの訓練つてのはアレだろ？MSパイロット向けのだろう？あのガキンチョじゃあそうならあな」

「お知り合いなんですか？」

「んにや、知り合いって程じゃねえな。あそこの先代と何度か取引をさせてもらった仲ってだけだ」

そう言つて目を細めるジャスレイにオルガは疑問を口にした。

「セブンスターズって言えば、ギャラルホルンのトップでしょう？なんでMSに乗るんですかね？」

「お前さんとこの相談役だつて乗ってるじゃねえの」

「アレは普通じゃないでしょう。少なくともドノミコルスさんもゴルドンさんもMSなんて乗ってません。当然ウチの社長もです」

そう返すオルガにジャスレイは口角を上げて応じる。

「そこまで解つてんなら答えは出てるだろ。俺達は商売人だが、ギャラルホルンは違つてこつた」

ジャスレイの返事にオルガは納得した。商人は利益で動く、だから利益に見合わない事はしない。だが暴力を生業にする連中は違つ。彼らにとつて、面子や力そのものは時に利益を上回る程の意味を持つ。思えば鉄華団を率いた時がそうだった。暴力を振るう人間は、より強い力を持つものを信頼していたではないか。ならばギャラルホルンで人を従えると言うのも同じことなのだろう。

「ギャラルホルンも大変ですね」

「力の見せ方つてえのは人それぞれだけどな。まあ真面目にやろうとすりゃ割に合わない商売だあな」

その言い方に興味を覚えたオルガはジャスレイに疑問を投げかけ

た。

「それぞれですか。先代のクジヤン公って人はどうだったんですか？」

オルガの言葉にジャスレイは皮肉気な表情で口を開く。

「ありや変わり種の方だったな。世間じや名君扱いだが、まあ大した狸だったぜ？」

言いながら彼は紙巻を取り出し火をつける。

「金と物の力を知ってる爺さんだったな。あのやり方を先代から教えられてりや、まだ取引をしてたかもしれないねえな」

過ぎた話だと言ってジャスレイは紫煙を旨そうに吸い込むと、今の商売相手に忠告を送ってくる。

「それで、今お前さん達の所で修行中となりや、クジヤンの現当主様はどっちも知らねえ事になる。気を付けろよ、お前さんとこのガキより世間を知らねえヤツだ。何でどう転ぶかも解ったもんじゃねえ」

「それは、気の付けようがないんじゃない？」

困った顔で言うオルガを見て、ジャスレイは腹を抱えて笑った。

「ちげえねえな！」

チキンと豆のスープを睨みつけながら、イオク・クジヤンは己の境遇を嘆いていた。クジヤン家の当主にしてアリアンロッド艦隊の指揮官。輝かしい経歴の中に居たはずの自分が、今は火星の一民間企業の食堂で痛みを耐えながら食事を摂っているという現実。涙が浮かびそうになる。因みに同じ訓練を受けている二人は早々に食事を済ませ出て行ってしまった。その行動に、彼は自分が見捨てられたような気持になる。

「私は、何をしているんだ」

新人研修と言う名の訓練を受け始めて1週間。痛めつけられた体はボロボロで、連日浴びせられ続けた罵倒に心も弱っていた。そして今日新しく始まったMSによる訓練で、彼は完膚なきまでに叩きめされた。ジュリエツタやガエリオが勝てる相手であっても、彼は手も

足も出なかったのだ。それどころかCGSの正規パイロットである少年から、訓練にならないと不満をこぼされる始末だ。

「私は」

「あれ？まだ食ってないんすか、クジヤンさん」

眩きを遮って、遠慮無く彼の前に声の主が座る。そしてトレーに載せられている食事を口に運び始めた。心の折れ掛かっているイオクはそれに不満をぶつける気力すら湧かなかった。

「…ザックか」

「ウヒュ」

リスの様に頬を膨らませながら目の前の男、ザック・ロウは頷いてみせた。彼を見て、イオクはため息と共に料理に手を付け始める。ザックとは良く補習で顔を合わせる間柄だ。そのためイオクに対してよそよそしいCGSの隊員達の中で、数少ない真面に話が出来る相手である。

「なんか、悩みごとすか？」

口の中のものを飲み込み、ザックがそう尋ねて来る。スプーンを止めたイオクは、自分の思いを口にする。

「ああ、私はここで何をしているのかと考えていた」

「訓練じゃないんすか？」

そう返してくるザックにため息交じりで答える。

「その訓練の意味だ。この一週間ただ走らされていたただけだぞ？これでMSの腕が上達する訳がない」

「あー、ウチの人ら、強いっすからね」

今日の訓練を思い出したのだろう、そう言ってザックは苦笑する。因みにイオクはザックには辛勝している。機体はレギンレイズとランドマン・ロデイであったが。

「ラストル様は、何故私をこの様な場所に送ったのだ。私の理想は、あの方しか居ないのに」

その眩きにスープを飲み干したザックが聞いてきた。

「そんなに凄い人なんですか、ラストル様って」

ザックの言葉にイオクは顔を上げると笑顔で答える。

「ああ、あの方こそ私の理想とする人物だ」

イオクの圧倒的な信頼に興味を覚えたのか、ザックが問いかけてくる。

「どんな人なんです？」

「何？知らないのか？」

「忘れてませんか？ここ火星つすよ？」

「ならば、私が教えてやろう。ラスタル様は月外縁軌道統合艦隊リアンロッドの司令官だ。地球圏最大最強の艦隊を率い、日夜世を乱す不埒者共と戦っておられる」

「おー、最大最強つすか」

ザックの合いの手に、イオクは気分よく答える。

「主力艦艇であるハーフビーク級だけでもその数は60隻。これ程の数を揃える艦隊は他にはない、配備されるMSも最新鋭のレギンレイズだ。正に最強最大なのだ」

「でっけえ話つすね。じゃあ、クジャンさんはいずれリアンロッドを継ぐんすか？」

「何？」

ザックの放った言葉が理解できず、イオクは疑問を顔に浮かべる。するとザックが不思議そうに口を開いた。

「だって、クジャンさんはラスタル様みたいになりたいんすよね？それってリアンロッドを率いて悪い奴らをやっつけたってことでしょ？」

深く頷きながら、ザックは続ける。

「いやあ正直俺、ギャラルホルンって好きじゃなかったんすよ。いつも威張ってるけどなんもしてくんねーし、そのくせ街じゃ優遇されたりとかしてて。でもそうやって、クジャンさんみたくちやんと俺達の事を考えてくれる人も居るんすよね！」

そう笑うザックに、イオクは動揺した。確かに自分はラスタル・エリオンのようになりたいと願っている。彼の様に毅然と悪に立ち向かいたい。だが、それは何のためであるのかを彼は全く考えていなかった。悪に立ち向かう、悪を討つ。自らが憧れていたそれは、結果

ではなく過程なのだと思いの前で笑う男を見て、イオクは今更になって気付く。それは頭を金槌で殴られたような衝撃だった。

「…感謝するぞ、ザック」
「へ？」

唐突に涙を流しそう語りかけるイオクに、ザックは間の抜けた声で返事をする。しかし感動に打ち震えるイオクは、そんな事を全く気にせずに言葉を続ける。

「私は、今、本当になすべき事を見つけた！」

「ねえ、ガエリオ。一体何を食べさせたの？」

執務室から颯爽と出ていくイオク・クジャンを見送ったカルタ・イシューは、同じく横で困惑してるガエリオ・ボードウィンにそう尋ねた。

「CGSの食堂で出ているものだけだぞ。因みに俺も同じものを食べている」

「私はここで食事を摂っているから集団幻覚ではなさそうね。本当に何があったのかしら？」

「二日ほど前にCGSの相談役に何か頼み込んでいたが、まさかこうなるとはな」

イオクから会いたいと願われたカルタは、待遇に関する不満だろうと取り合わぬつもりだった。しかししつこく直接会って話が見たいとガエリオが頼み込まれ、彼からの救援要請を受けて仕方なく10分だけと言う制限付きで面会を承諾する。そして面会当日、イオク・クジャンは執務室に入るなりカルタに向かって土下座を敢行したのである。いきなり何かと問えば、CGSの相談役から教えられた最上級の陳謝の姿勢だと彼は言った。

「虫の良い事を口にはしているとは、理解しています。ですが、どうか謝らせて頂きたい！」

その件は既に終わったはずだとカルタが言えば、床に視線を向けたままイオクは答える。

「確かに私は、イシュー公の寛大なお心に許されました。しかし、それと私が謝るかは別の問題です！たとえ許されようと、悪事を働いたなら謝罪するのが道理！私はそんな事すら出来ていなかった！」

あまりの豹変にカルタは訓練に耐え切れず心が壊れたかと考えたが、どうやら違うらしい。

「私は今日まで、ただエリオン公の様になりたいと思っていました。そう、ただ思っていた。あの方が、なぜ素晴らしいのか、その本質を理解していなかったのです」

困惑し続ける二人を置いて、イオク・クジャンの独白は続く。

「武門とは、民を守る者。その手にした武器は彼らを守ってこそ価値がある。今更ながら、私は友に教えられたのです」

「成程。それではクジャン公。それに気付いた貴方はどうなさるおつもりですか？」

カルタの問いかけにイオクはすぐに答える。

「恥ずかしながら、今の私には何もかもが足りません。願わくば、今少しこの地での修行を続けさせて頂きたいです」

真剣な表情でそう告げるイオクに、カルタは微笑みながら応じる。

「解りました、CGSには私の方から言っておきましょう」

「ありがとうございます。お時間を頂き、感謝致します」

そう言つて、彼はカルタの許しを得て執務室から去つて行つた。残された二人の困惑は計り知れない。

「ま、まあ、これで素行が良くなるならば、儲けものだろうか？」

何とも言えない不気味さを払拭するようにガエリオがそう乾いた笑い声を上げた。それを聞いたカルタは眉間に皺を寄せ、溜息を吐く。

「本当に、一体何があったと言うの？」

彼がたつた一人の青年が放つた言葉で変わったなどと想像すら出来ない彼らは、そう思い悩むのだった。

61. 刮目して見ようとも、人間が数日で変わることはない

『踏み込みが足りんっ!』

『ぬあああっ!?!』

振り下ろされたロングソードをスウエーで躲し、ランドマン・ロデイがレギンレイズにサマーソルトを決める。それをくらい綺麗に弧を描きながら吹っ飛ぶレギンレイズ、格ゲーだったら「YOU WIN!」とかテロップが出そうな見事な動きである。

「まあ心を入れ替えたからと言って、劇的に能力が上がるなんて事はないな」

イオク君が俺の所にカルタ嬢に謝罪の時間を貰いに来たのが一週間程前。早乙女流奥義が一つ猛虎落地勢を伝授し送り出した所、どうやらちゃんと和解出来たようだ。カルタ嬢から何故か執拗に食事の献立やら試作料理を食わせなかったか聞かれたが。

「素直に言う事を聞くようになっただけでもすげえ進歩ですよ。アイツ等もおかげで大分落ち着いています」

あれで?

『へいへい!どうしたどうした!ギャラルホルンってのはこの程度かよ!?!』

『まだまだあ!!』

『だが踏み込みが足りん』

『ぬああああっ!?!』

安い挑発にレギンレイズが立ち上がり再びロングソードを振り上げるが、やはりあっさりと回避されて背中を蹴り飛ばされる。今度はドロップキックだった、ビトーの奴ノリノリだな。でも今の踏み込み云々関係無いぞ?その台詞流行ってんの?

「アキヒロ、ちゃんとデブリーフィングはしてやれよ。あれではただ転がされているだけだ」

そう俺が窘めると、アキヒロは渋い顔で口を開く。

「MSの操縦そのものがあまり向いてねえと思うんですが」

阿頼耶識組の君らから見ればそうかもしれんね。俺は苦笑しつつ言い返す。

「再訓練だと思えばな、だがMSに触ったことがある新人くらいならあの程度だろう？大目に見てやれ」

そう言つて俺は自分の番の準備に入る。たまのレクリエーションだ、楽しませて貰おう。

「本つ当にロディ・フレームですか!」

振るわれたショートソードは空しく空を切る。直後に襲つてきた射撃が左手を襲いマニピュレーターが損傷、武器を取り落とす。既に間合いの外に出ている丸い機体を恨みがましく睨み、ジュリエッタは機体を加速させた。

『悪くないが動きが直線的過ぎる』

フェイントを入れようとするより先に通信が飛んできたかと思えば、先ほどまで逃げていたはずのランドマン・ロディが反転、距離を詰められたと思つた次の瞬間には横をすり抜け様に右足を引っ掛けられ、ジュリエッタのレギンレイズが派手に転倒する。

(動きが速いわけじゃない、出だしが早いんだ!)

ジュリエッタは戦慄した。レギンレイズは対MS戦を想定して設計されたMSだ。その性能は出力以外ならばガンダムフレームすらも上回る。特に機体の反応速度と重心制御は大幅に改善されていて、グレイズでは絶対に勝てないとまで言わしめる程だ。その機体に乗つてすら、動きの出かかりを一方的に潰されているという事実は、ジュリエッタに彼我の圧倒的な技量差を否応なく見せつける。

「機体ではなく、人間の性能差!」

そう叫び彼女は口角を吊り上げる。ジュリエッタはただの人間だ。阿頼耶識を施術されている訳でもないし、かと言って幼少からMSに乗っていたというような特異な経歴もない。身体能力は高いもの、それでも人類を逸脱する程ではないし、知識に至ってはギャラルホル

ンの隊員として最低限という有様だ。だがそれ故に彼女は笑う。

「私は、まだまだ強くなるー!」

目の前で見せつけられる光景。彼女と同じく、何も持っていない男が繰り出すそれは、いずれ自らがたどり着ける境地にある。その事実
に彼女は興奮を覚えずにはいられなかった。

翻弄され土まみれにされる2機のレギンレイズを見ながら、ガエリオ・ボードウインは溜息を吐いた。

「違うだろう、イオク・クジャン。ジュリエッタ」

二人が努力しているのは理解できる。訓練中驚くほど従順になつたし、与えられた内容にも真摯に取り組んでいる。しかし、根本的な所がずれているとガエリオは思った。

「お前たちは指揮官になるんだぞ? MSの技量を磨き上げてどうする?」

勿論個人の武力を疎かにして良い訳ではない。特に実働部隊を率いるような立場となれば、部下に舐められない為にも相応の技量は必要だ。だが彼らが踏み込もうとしているのはそんな程度の話ではない。

(相談役殿は何を考えているんだ?)

ジュリエッタ機を派手に転ばせているランドマン・ロデイに乗り込んだ男を思い出し、ガエリオは頭を搔く。自分の価値観を変えてしま
う程の言葉を放った彼が、考え無しに訓練を施しているとも思えない。けれどこのまま続けても、生まれるのは凄腕のMSパイロットが
精々であり、彼らの望んでいる未来は難しいだろう。

「まさか、新人研修だからと本当にそこまで済ますつもりじゃない
だろうな?」

「どうしたんです、ガエリオ三佐?」

嫌な汗を掻きながらそう呟くガエリオに声が掛けられる。振り返るとそこには小柄な青年が立っていた。

「ああ、ミカツキか。休憩か?」

ガエリオの問いに彼は頷くと、籠から真っ赤なトマトを取り出し差し出してくる。

「第三演習場の整備が終わったんで。食べます？」

「頂こう」

以前数奇な縁で顔見知りになっていたミカツキとガエリオは短期間で良好な関係を構築している。特にガエリオがミカツキの技量に対し敬意を抱いており、積極的に関わった結果、ミカツキの方からも姿を見ればこのように話し掛けてくる間柄になっている。受け取ったトマトを服で適当に表面を擦ると二人はそれに齧り付く。十分に熟したトマトのしつかりとした甘みと爽やかな酸味を口いっぱいと感じながら、転げまわるレギンレイズを二人で眺める。暫く無言が続いたが、トマトを食べきった所でガエリオが口を開いた。

「ミカツキ、お前はあれをどう思う？」

ガエリオの質問にミカツキは一瞬疑問符を浮かべるも、直ぐに手を顎にあてて訓練の様子を見比べる。僅かな間を置いて彼は評価を下す。だがそれは、ガエリオの求めていた答えではなかった。

「ジュリエッタさんの方は良く戦ってる。おっちゃんがああいう戦い方をするのは余裕が無い時だから、結構追い込んでるよ。クジヤンさんの方はちよつとビトーが酷いな、あれじゃ訓練にならない。後でアキヒロに言つとかないと」

「ああいや、そうじゃなくてな？アイツ等はこの先指揮官になる人間だ。そんな彼らにあの訓練は適切かと思つてな」

そう質問の意図を口にする、ミカツキは不思議そうな顔で問い返して来た。

「でもカルタさんもガエリオさんも強いよ？ギャラルホルンの隊長つてそういうもんじゃないの？」

確かにそうだな、などと友人たちの顔を思い出しガエリオは納得しかけ、慌てて首を振る。

「強ければそれに越したことはないが、指揮官は指揮が執れてこそだろう？俺としてはそちらを優先すべきだと思うんだが」

技量も高いが、あの相談役は指揮官としての能力にも優れている。

そんな彼から学べる時間は少ないのだから、効率よく必要なものを学習すべきではないかとガエリオは考えたのだ。故にそう持論を口にすると、ミカツキは難しい顔をした後に返事をする。

「多分おつちゃんは、これからを考えてるんじゃないかな？」

「これから？」

「今MSがすごく増えてるでしょ？だからこれからの戦場って、今みたいに指揮官が船から細かく指示なんて出来なくなると思うんだよね。だからMSを有効に使いたかったら、優秀な指揮官を乗せて前線に出さなきゃいけない。でも、幾ら指揮が優秀でもMSの腕が悪かったら戦場で冷静な判断なんて難しいし、最悪狙われて指揮どころじゃなくなっちゃうから、最低限の技量くらいは持たせようって事だと思っ」

「これからの戦場」

ガエリオは自らに抜けていた点を指摘され思わず唖る。ギャラルホルンに対しても監視の目を。その題目の下各経済圏は再軍備を進めている。特に注目すべきは経済圏が公共事業として推進しているサルベージ業だろう。ギャラルホルンを通さないエイハブリアクターの争奪戦が活発化しているのだ。加えてこれらの技術研究が進められている事は明白であり、リアクターの製造施設が経済圏の手によつて生み出される可能性も否定できない。そうなれば希少品であったMSは今後主力兵器として戦場を闊歩することになる。当然部隊運用は複雑化するし、その際MSへの指示が増大する事は間違いない。相談役の懸念は全くの絵空事と断じるには現実味があり過ぎた。

「成程、確かにそれならばジュリエッタには必要だし、クジャン公も知っていて損はないな」

ガエリオは素直に自身が指揮官の技量を軽視していた事を認める。その上で二人の今後を考えるなら、確かに有益な訓練であると考えた。ジュリエッタは今後もMSパイロットを続けるはずである。今でこそラスタル・エリオンの私兵と言う扱いではあるが、今後ギャラルホルンの改革が進めば正式に士官として取り立てられるだろうし、

そうならば部下を持つ事になる。クジャン公の場合部下に委任する事も出来るが、その部下の技量を見極める為にもそれなりの実力を持っている事はプラスに働くだろう。

「しかし、最低限の技量か」

再び盛大な土煙と共に地面を転がるレギンレイズを眺めながら口にしたガエリオの呟きに、気にした風も無くミカツキが応じる。

「ジュリエッタさんは、あそこからおっちゃんに一本取れるようになればまあ。クジャンさんは要訓練かな」

お前たちはどんな水準を想定しているんだ。顔を引きつらせつつ、そう口にかけてガエリオはそれを呑み込んだ。何故なら彼らの指揮官は目の前の出鱈目な男なのだから。

62. 武力を持ちながら行使せずに居られるほど人は賢明ではない

『なんともむず痒い気分だよ』

別荘の個室で友人の声を聴いたラスタル・エリオンは自然と笑みを浮かべた。

「正義の味方もたまには良いだろう？もしかすれば、一生かもしれんがね」

『それは実に魅力的な話だな。：オセアニア連邦とアフリカユニオン間で緊張が高まっている。オセアニアの方が既成事実を作ろうと動いているな』

「中央アジアの係争地か。いい加減にして欲しいものだ」

厄祭戦以降4つに分割された地球の領土であったが、当然のように全てが丸く収まった訳ではない。戦争以前から続いていた領土問題は未だ多く残り続けている。

『ファリド家の新当主のやり口は案外上手く機能しているな。MSが主力になって以降軍事行動の秘匿が難しくなっている』

何しろ敵がMSを保有している以上、戦場にMSを持ち込まない訳にはいかない。しかし機能上停止が困難かつ、稼働中はまずもって位置が露見するMSは軍事行動を監視する上で非常に都合の良い存在だった。

「MSを投入するとなれば、ギャラルホルンの介入も容易になる。問題はこちらにも相応の戦力が要求される事だが」

2年前の一件で規模を縮小していた地球外縁軌道統制統合艦隊であるが、この所規模拡大をアフリカユニオンとSAUの二つが要請している。この背景にはアーブラウの急速な軍事規模拡大が存在していた。

『アーブラウはむしろ大人しいのが不気味だな。例の企業経由でかなりの数を揃えていると聞いているが？』

「ああ、テイワズから新型のMSまで購入している。尤も、本当に警戒

すべきは数よりも質だろう」

『随分と厄介な連中だな』

そう言つて通信先の相手は溜息を吐いた。あの事件以降アープラウの軍事顧問に納まったCGSは一部の人員と装備を地球に派遣。肩書通りにアープラウ防衛軍となる予定の組織を訓練している。その結果アープラウ防衛軍は発足前であるにもかかわらず極めて精強な組織として出来上がりつつあり、その様子を見た経済圏、特に係争地を抱えるSAUが強くギャラルホルンの規模拡大を望んだのだ。

「オセアニア連邦ではCGSを軍事顧問に招こうと言う意見も出ていそうさ。あそこはアープラウとも繋がりが深いからな、絵空事とは言い切れん。まあ、そうなれば益々我々は重要視される事になるわけだが」

アフリカユニオンとSAUは経済圏の中でも比較的工業力が低い。加えて火星の自治権拡大でアープラウに先んじられたために、圏外圏との関係も後れを取っていた。結果自力でのMS調達に不安を抱える彼らは、その分をギャラルホルンに頼りたいという事なのだろう。『痛し痒し、という奴だな。こちらの発言権が拡大するのは歓迎だが、敵が強大になるのは頂けん』

その言葉にラスタルは笑つて応じる。

「いや、敵と決めつけるのは早計だ。経済圏はともかくCGS自体はこちらに協力的だからな。火星支部など合同で訓練をするどころか、一部の作戦に協力を仰いでいる程だ。安易に敵と決めつけて対応するのは余計な藪を突くことになりかねん」

それにとラスタルは口にはせず思う。今でこそ蜜月関係に見えるアープラウとCGSだが、彼らは根本の部分で本来対立関係にある存在だ。何しろCGSは火星に拠点を置く組織であり、アープラウはその火星を植民地化しているのだ。段階的な規制緩和で表面的には良好に見えるが、完全な独立などアープラウは認めないだろうし、今後の発展を考えれば火星は独立が必須である。特にこの所は過激な活動家達や、昨今の情勢の立役者とも言えるクーデリア・藍那・パーンスタインが公的な場での活動や発言を控えている事がラスタルに

は不気味に映る。

(もし本格的に地球と火星で武力衝突が起きたなら、ギャラルホルンはどう動くべきだ?)

治安維持を謳うならば、経済圏への助力が妥当だろう。現在の社会秩序を壊さぬことこそがその本分であるからだ。しかし、人類の発展としての側面はどうか?

(300年抑え続けてきた結果が今だ)

広がる経済格差は対立や犯罪の温床となり、治安維持組織の肥大化を招いている。それを健全な状態であると考えられるほどラスタルは染まり切れてはおらず、かと言って安易に変えてしまえば良いと思えるほどには子供ではなかった。

「当面は情報提供を続けて、地球外縁軌道統制統合艦隊の信頼回復に努めるのが無難だろう。動かせる兵力が多くて困るという事はあるまい」

『了解した』

短い言葉を機に通信が切れる。自然と乗り出していた体をラスタルはゆつくりと背もたれに預けると、机の上に置かれたジャーキーを口に含んだ。

「穏やかに変わりゆくなら、それもまた良しとするが」

そうはならないであろう事を確信しながら、しかしラスタルはそう願わずにいらなかった。

「お疲れ様です、ハエダ隊長」

黙々と駐機場を走る兵士達を見ていたハエダにそう声を掛けて来たのはビスケット・グリフォンだった。そちらを一瞥して、ハエダは溜息を吐く。

「ビスケット、お前ウチの訓練受けてんのになんで丸いんだよ?」

「酷いなあ、これでも筋肉付いてるんですよ?」

そう言って力こぶを作って見せる彼に、ハエダは頭を掻きながら応じる。

「そこを疑ってんじや無くて見栄えの問題だ。お前を見るとあいつ等が不満そうにしゃがるんだよ」

そう言っただけでハエダは走っているアーブラウ防衛軍の兵士達を親指でさした。因みにCGSでは実働部隊である1〜3番隊に所属する人員に対して、全員問題無く動けるように訓練が行われている。当然ビスケットもそれを突破しているのだが、体質なのかぼっちゃりとした容姿をしている。

「あー、追加の人達ですか？また一緒に走りますか？」

軍事顧問として招かれた当初も同じトラブルが起きた。その際は同じ訓練を熟してみせる事で解決したのだ。そう提案されたハエダは顔を顰めて返事をする。

「お前をこつちで使うとトドの奴がうるせえから駄目だ」

「事務方が全然足りてませんからねえ」

ビスケットの言うとおり現在のCGSは、組織の規模に対しそうした間接員が大幅に不足していた。募集もしてはいるが、他の企業に比べ待遇が良い訳でもないため反応は悪い。3・5番隊の中から同じように募ってはいるものの即戦力とは行かず、現在は1・2番隊の転向希望者で何とか回しているというのが実情である。

「ミルダ達が来てくれていなくなったらやばかったな」

元4番隊のミルダはササイと結婚し除隊後専業主婦として暮らしていた。ササイの地球出向にも付いてきていたのだが、事務員の不足で連日残業が続く夫の状況を改善するべく一時的に復帰してくれている。

「タカキは頑張ってくれてますけど、やっぱり年少組の大半は実働部隊希望ですしね」

二人は揃って溜息を吐く。

「相談役が渋っていた理由が良く解るな。ウチじや2拠点、それもこの規模は荷が重い」

「増員が難しいなら、人員を引き上げて規模を縮小とかですかね？」

「そっちはもつと難しい。オセアニア連邦からも軍事顧問のオファアが来ているからな。アーブラウ防衛軍だって完全に手が離せる訳

じゃねえから、寧ろ手が足りなくなる」

「何処かに余ってる間接員って落ちてませんか?」

そう困り顔で言うビスケットにハエダが苦笑する。

「MSじゃねえんだぞ。まあ、もう暫くは踏ん張るしかねえだろうな。そーいやあ何か用じゃなかったのか?」

「そうでした。例の追加発注された機体が今月末に届くので、受け入れの準備をしておいて欲しいそうです。あと訓練生の訓練内容について相談したいと先方から連絡が」

「またか? 売れるのは結構だが、アーブラウの連中随分買い込むな?」

ハエダの言葉にビスケットが声を潜めて答える。

「ギヤラルホルンから提供されているフレックグレイズですけど、あまり評判が良くないみたいなんですよね。結構不満が出ているそうです」

「まあ、良くはねえやな」

試しに操縦した時の事を思い出しハエダはそう認める。フレックグレイズはアーブラウ事件以降に各経済圏が独自の自衛戦力を確保する中で、ギヤラルホルンが供給を開始した機体である。性能としてはグレイズを下回るためモンキーモデルと揶揄する者もいるが、それは正確な評価では無い。フレックグレイズはMSの運用能力に乏しい各経済圏が無理なく運用出来るようにパーツの簡略化や生産性を向上させているのだ。そのような意味ではギヤラルホルンは真面目に市場に合わせた機体を供給していると言えるだろう。

「操作性は出力の低さもあっていいことはいいんだが」

アーブラウで人気が無いのはそのせいだろうとハエダは考える。ギヤラルホルンは各経済圏がMSの運用を開始する際に、文字通り最初から体制を構築すると考えていた。しかしアーブラウは軍事顧問としてCGSを雇い入れたために、設備はともかくMSの運用について一足飛びに習得出来てしまった。当然その中にはパイロットの養成も含まれる。更に言えば、彼等はCGSから購入した機体も運用しているのだ。

「前から相談役がミカツキ達を使って動作パターンを修正してただろ

？あれのおかげでウチの卸してるMSはかなり扱いやすくてな。はつきり言って大差ねえ、そんで機体の性能はウチの方が上ときてる」

確実に負けているのは整備性と購入コストだけだとハエダは評する。その購入コストについても他の経済圏との兼ね合いで供給不足が起きている現状、大きな足かせにはなっていない。何せどこの経済圏でもMSは喉から手が出る程欲しているのだ。多少値が張ろうとも一機でも多く確保したいと言うのが本音だろう。

「ウチ、完全に死の商人ですね」

「少なくとも売ってるウチはギャラルホルンの監視下で真っ当にやってるんだ。後は売った相手を信用するしかねえやな」

ハエダがそう言うのとビスケツトは帽子の位置をなおしながら、ぽつりと呟く。

「あんまり、信用出来る相手じゃなさそうなんですよね」

ハエダは口を開きかけるが、結局何も言わずに視線を前へと戻す。その先ではアープラウの兵士達が訓練に励んでいた。

6.3. 知識の無い者ほど事故を起す

黄金のジャスレイ号、その艦橋にある艦長席でジャスレイはつまらなそうに頬杖をついていた。この所手をかけていた火星でのハーフメタル採掘が漸く軌道に乗ったため、その責任者であるジャスレイは報告の為に歳星に行つた帰りだった。

「…叔父貴」

「前見てろ」

側近の一人が声を掛けてくるが、ジャスレイは短く返すと盛大に溜息を吐き、そして慥然と言いつつ。

「やっぱり厄ネタだったじゃねえかよ畜生が」

ハーフメタルの採掘は極めて順調。火星の経済活性化も手伝ってJPTトラストの経営は好調と言えた。だがそれ以上に業績を伸ばしていたのがタービンスである。アーブラウ上層部と繋がりが出来ていた名瀬・タービンが大口のMS販売の契約を取ってきた事で、テイワズの重工部門は莫大な利益を得ている。更に名瀬は火星と木星の間にあるアステロイドベルトのサルベージをCGSと共同で行う事で、リアクターの供給事情を大幅に改善させている。故にそんな言葉がマクマードの口から出る事を、ジャスレイはある程度は覚悟していた。

「なあ、ジャスレイ。おめえ、名瀬を支えてやちやくんねえか？」

瞬間沸騰しかける脳髓を、ジャスレイは大きく息を吐き出す事で抑える。そしていつもの態度でマクマード・バリストンに対し口を開いた。

「そりやないでしよ、親父」

その言葉にマクマードは真剣な表情を崩さぬままに応じる。

「利に敏いお前なら解つてんだろう？今圏外圏は変わり始めてる。これまでみたいなのやり方は上手くいかねえ」

圏外圏に住むものの多くはならず者だ。そんな彼らの中でテイワズのしが上がってこれたのはその流儀でもって力を示してきたからだ。しかし、これからは違うとマクマードは口にし、そしてそれは

ジャスレイも感じている事だった。

「海賊やマフィアなんて連中が肩で風を切って歩くなんぞ、あと何年も続かねえ。これからは真つ当な商売を上手く転がす奴がのし上がる時代だ」

勿論暴力を筆頭とした後ろ暗い世界が消える訳ではない。だがそれは、今よりもずっと小さく深くなるだろう。ジャスレイは口角を吊り上げて同意する。

「アステロイドの海賊連中もCGSにかかりやあ何年持つか。既にウチと付き合いがあるような連中は泣きながら下に付けてくれつつ来るよ」

「そうなりや圏外圏との交易も盛んになる。木星の資源を押さえてる俺達にすりゃあ、正に黄金時代の到来だ。だがそれにゃあ」

「身綺麗な頭が要るって言うんだろ？それで俺は不適當だとも」
「おめえには悪いと思ってる」

「そう思うなら今すぐ席を譲ってくれよ？俺だって一度くらいはティワズのトップに納まってみたいんだぜ？」

そう肩を竦めるジャスレイに、ほろ苦い表情となったマクマードが答える。

「解って言うてるんだらう？名瀬をお気に入りにしている俺が指名すりゃあ、組織内の反発は最小限に抑えられる。だが、対立してるお前が指名しても従わねえどころか分裂の可能性だってある、悪けりや抗争だ」

「そんでそれを見逃すギャラルホルンじゃねえよな。なんせティワズは叩きやあ幾らでも埃が出る身だ」

ジャスレイの言葉にマクマードが溜息を吐く。

「一昔前ならいざ知らず、今なら連中も容赦しねえだろう」

以前の圏外圏に一定の秩序を築いたのは紛れもなくティワズだ。しかし今では火星に十分取って代わることが出来る勢力が存在している。それもギャラルホルンと密接な関係を持っているというおまけ付きでだ。この状況で抗争など起こせば、ギャラルホルンは喜んで治安維持活動に勤しむ事だろう。ジャスレイは深々と溜息を吐いた

後、草臥れた笑顔で不平を漏らす。

「ひどい話じゃないの、親父。俺がどれだけテイワズを儲けさせたと思ってるんだい？その俺にこれからも、いや一生ナンバー2で居ろって言うの？」

「そうだ、おめえがトップになっても名瀬は従わねえ、アイツは潔癖だからな。だから、お前に割を食って貰うしかテイワズが今後も発展していく道はねえ」

「ひでえ話だ」

そう言つてジャスレイは喉を鳴らすように笑つた。何故ならマクマードの信頼が心地よかつたからに他ならない。本来こんな話を他の幹部連中にすれば、例え名瀬であつても不満を口にしただろう。彼等は多少の違いはあれど皆面子に拘る人種であり、組織の頂点に立つ事を目的にしているからだ。名瀬の場合はタービンスが彼以外が弱い立場の女性ばかりという特異な組織であるために、自分が侮られればテイワズ内で食い物にされるといふ問題からではあるものの、やはり面子に拘らねばならない点では変わらない。ではジャスレイはどうか？

「だが、おめえにしか頼めねえ話だ」

ジャスレイにとつても面子は決して軽んじて良いものではない。だが同時に、何よりも優先すべきものでもなかつた。彼からすれば最も優先すべきは利益であり、面子も地位もそれを効率よく回収するための手段であつた。つまり彼にとつてテイワズのトップと言う地位は、現状よりも美味しい思いが出来てこそ価値があるものなのである。自身が頂点に立つた所で組織が衰退してしまえば意味が無いし、潰されてしまう可能性さえあるとなればその選択肢は最早論外とすら言える。ジャスレイはあくまでも暴力も使う商人なのだ。

「いいよ、解つた。儲けが減ると理解出来て拘れるほど俺は子供じゃねえ。けど、ちゃんと美味しい思いはさせて貰うぜ？」

「心配要らねえ。真つ当なやり方じゃおめえと名瀬に敵う奴あウチにはいねえからな。精々儲けろや」

そう言つて子供のようになつて笑うマクマードを見ながら、ジャスレイは

苦笑しつつカンノーリを頬張った。

「クソ、クソ、クソが！」

作業用のモバイルワーカーを扱いながら、男は延々と悪態を吐く。それを聞いていた現場監督が煩わしげに注意を促した。

『13番機、口では無く手を動かせ！』

「くっ！」

思わず反論しかけ、彼は慌てて口を噤む。彼の働く職場は火星のハーフメタル採掘場だ。元海賊である男にしてみれば、監督者の気分次第ではギャラルホルンへ突き出される可能性がある現状は悪態の一つもつきたくないものだが、不用意な行動は文字通り死を招く危険な職場だ。その上逃亡しようにも、周辺には野盗対策として武装した警備員達が常駐しているし、元海賊であれば殺傷した所でギャラルホルンや行政も精々注意を促す程度だ。つまり逃げれば躊躇無く殺される。彼に残された選択は、死ぬまで従順に働き続けるというものだけだった。

『あ？なんだあ？』

同じように捕まり、モバイルワーカーを隣で操作していた男が声を上げる。見れば彼の乗るモバイルワーカーに取り付けられた削岩機が岩盤に潜り込まず、その場で止まっている。

「また残骸でも引っかかったか？」

彼等の掘削している地域は昔戦場であつたらしく、MSの残骸が多く出土していた。今日などは珍しいMSが丸ごと出てきて、テイワズの歳星へ輸送する騒ぎになったほどだ。

『いや、なんかあるぞ？』

その言葉に男は機体を操作して周囲の土砂をエアダスターで吹き飛ばす。土煙がもうもうと上がり、その下から白い光沢が現れた。

「でかいな、おい周囲の土を退かすぞ」

それは何かのパーツのようだったが彼には何なのか判別が出来なかった。故にせめて形を把握しようと、掘削作業を続ける。

『いや、でかいなんてもんじゃねえぞ？MSよりでかい。船か？』

「かもしれないな。墜落したのが埋まったか？」

『取敢えず掘り出しちまおう、邪魔でいけねえや』

それがなんであるかよりも彼等の意識はそちらへと逸れる。値打ちものであつても自身の懐に入る訳でもなく、採掘作業が遅ればそれこそ死活問題になる彼等にとって、すぐにそれは邪魔な障害物に格下げされる。もし仮にこれがアドモス商会やノブリス・ゴルドンの経営している採掘所であつたなら、その後の状況は大きく変化していたことだろう。だが、歴史にもしもは存在しない。

「ああ、コイツはモバイルワーカーでは駄目だな。おいMSを呼んでこい、引つ張り上げよう」

手早く退かす事を優先し、彼はそう告げる。それに同意した仲間はずちにMSを用意するように連絡をとつた。それが古の悪夢を呼び覚ます事になるなど考えもせず。

『全く、今度は何を掘り当てたんだ？』

「知らんよ、さつさとコイツを退かして——」

そう言つた男は、違和感に気付く。周囲の土砂が僅かに振動しているのだ。

「なんだ？」

『おい、どうした？』

「いや、なにか——」

言い切る前に彼は衝撃と共に高く空へと放り上げられる。埋まっていたその一部が自由を求めて彼のモバイルワーカーを土砂ごと吹き飛ばした為だ。そんなことを理解する暇も無く、男は地面へと叩き付けられあつさりと絶命する。だがそれは、ある意味幸運と言えたかもしれない。

『ひつ?!は、はなぐべつ?!』

持ち上げられた足が近くに居た同僚のモバイルワーカーを掴み、躊躇無く握り潰す。異変に気付いた者達が確認しようと近寄るが、それは犠牲者を増やすだけの行為だつた。

『い、一体なんだつて?!』

動揺するMSに乗った作業者の前にゆっくりと姿を現わした鳥に似た物体は、その嘴をゆっくりと開く。

『へ?』

それに気を取られている隙に奇妙な音と共に放たれた鳥の尾が、コックピットを貫きMSをただの残骸へと変える。それに満足したように、地の底から這い出たそれは空へ向かって嘴を持ち上げ、その口内から光を放つ。厄祭の天使が、再び人類の前へと舞い戻った瞬間だった。

64. 死は誰にでも訪れるが、断じて平等などではない

「何があった？」

突然マルバから呼び出された俺は、そう言いながら会議室に入る。一緒に連れてこられたギャラルホルンの面々も戸惑いを隠せない表情だ。

「今、アーレスのイシュー一佐から連絡が入った。ハーフメタル採掘場で事故が起きたらしい」

「どう言うことだ？」

マルバの物言いに俺は疑問を覚える。ハーフメタル採掘場にはアドモス商会に依頼されて警備員を派遣している。だから襲撃やトラブルがあればウチの社員から連絡があるはずだし、それは事故であっても同様だ。そちらから連絡が無いのに事故があった？それもギャラルホルン経由で連絡？どう考えてもおかしな状況だ。

「待つてろ、すぐ説明して貰う」

そう言つてマルバが通信端末を操作すると、すぐにカルタ嬢に繋がる。どうやら慌てている上に執務室でも無いらしく、周囲の雑音が入っていた。これ、格納庫か？

『待つていました。そこにボードウィン三佐並びにクジャン二佐、それからジュリスさんは居ますわね？緊急事態です。火星地表面でMAの活動と思わしき痕跡が確認されました』

「MA!?!」

驚愕する俺達を置いて、あまり余裕の無い声音でカルタ嬢が続ける。

『20分程前です。クリュセ自治区内のハーフメタル採掘場でビームと思しき光線が観測されました。同時に同地区の広域に大規模な電波障害が発生しています。原因は恐らく大出力のエイハブリアクターが起動している影響だと観測班が結論付けました』

「間違い無いのか？」

『断言は難しいわ、最後に観測されたのが300年前ですもの。けれど、間違いかもしれないことよりも本当であつた場合を心配すべきだと考えるわ』

真剣な表情で問うガエリオに対して、返ってきたのは決然としたカルタ嬢の言葉だつた。

『現在アーレスに待機中の部隊が降下準備を進めています。三人には先行し現場の確認を命じます、マルバ社長』

「はい、何でしょうか」

『彼等の支援をお願いできませんでしょうか？』

「承知しました、すぐ準備させましょう」

即座に応じるマルバにギャラルホルンの三人が目を見開く。はっはっは、ウチの社長は凄いだらう？

「採掘場はクリユセにも近い、我々としても他人事ではありませんからな」

本当にその場で端末を取り出し指示を出し始めるマルバを見つつ、そう三人に説明する。

「何であれ助力に感謝する。クジヤン公、ジュリエッタ嬢、我々もすぐに準備を」

「承知した」

「はい」

しかし、MAか。

「イシユール一佐、発言を宜しいか？」

『何でしょう、クベ相談役』

「率直に伺わせて頂きます。原因がMAである場合、ギャラルホルンで対処可能ですか？」

俺の失礼な発言にカルタ嬢は一瞬沈黙し、その後苦しそうな声音で答えた。

『目標の種類にもよりますが、保証は致しかねます。勿論最善は尽くしますが』

過去のMAはその多くがガンダムフレームによって討伐されているが、現在のギャラルホルンはガンダムフレームを運用していない。

代わりに使用しているレギンレイズはカタログスペックこそガンダムフレームと同等であるが、その性能は対MSに重きを置いたものだ。MA討伐なんていう怪獣退治に使うには少々物足りないというのが本音だろう。あの歯切れの悪さと言い。多分切り札になるダインスレイヴなんかも用意が無いと見た方が良さそうだ。

「マルバ」

「あ?どうした」

怪訝そうな顔でこちらを向くマルバの耳元で俺はささやく。

「旗色があまり宜しくない。保険が必要だ」

「おい、お前まさか」

「出来れば隠しておきたかったが、背に腹はかえられん」

MAは効率良く人間を殺すために人口密集地へ向かう習性があるらしい。どんな理屈知らんがもし広域で人間を探知出来るような機能を有しているなら、その被害は文字通り火星全域に広がりがねない。なあに技術自体は法に触れてる訳じゃないんだ。ばれた所でどうでもなる。∴ならなかつたら戦争かもしれないがな。

「せっかくギャラルホルンともいい関係になれたかと思っただがなあ」

「そう悲観するな、まだ彼らが敵になると決まったわけではない」

俺がそう言えば、マルバは溜息を吐きつつ応じる。

「だと良いが。まあ先の心配は先の俺にしてもらおうか。∴ナデイか? 7番倉庫のヤツを使うぞ」

MAとやらがどんな化け物か知らんが、良いだろう相手をしてやる。

「この世で最も恐ろしい人間様を舐めるなよ、機械風情が」

「怖いのか?」

「ち、違う!これは武者震いというやつだ!」

パイロットスーツへの着替えに手間取るイオク・クジャンに対し、ガエリオ・ボードウインは何気ない調子で話しかける。返ってきたの

は何とも微笑ましい虚勢だった。

「そうか、凄いな。俺は怖くて仕方がない」

「随分と弱気ではないか、与えられたレギンレイズが泣くぞ？」

「レギンレイズを任されていればこそだ。もし本当にMAが居て、我々が足止めに失敗したらどうなる？」

ガエリオの問いにイオクは言葉を詰まらせる。

「火星支部にダインスレイヴは保管されていない。一撃で屠る事が出来ない以上、戦闘は数に任せての波状攻撃になる。問題は」

「プルーマ、か？」

イオクの言葉にガエリオが頷く。

「本体が居るならその子機も居ると考えるべきだろう。周辺の地図は頭に入っているか？あの辺りは平地で大軍が動くのに丁度良い。その上近くにはギャラルホルンの第三地上駐屯地がある」

真剣な表情でガエリオは続ける。

「カルタから連絡は行っているだろうが、あの辺りには最近開墾された農業プラントがかなりある」

当然そのような場所に緊急用の避難場所などあるはずもない。イオクは自らの肩に突然重しが乗ったような錯覚を受けた。それは彼が初めて感じた他者の重みだった。

「駐屯地が陥落でもすれば連中は更に数を増やすだろう。そうなればこちらの手に負えなくなる」

MAの厄介な特徴として、子機であるプルーマとの連携が挙げられる。プルーマそのものはナノラミネートも無く容易に撃破可能であるが、問題はこれらにMAの修復機能が備わっていることと、MA自体にプルーマの生産能力が備わっていることだ。侵攻した先の資源を略奪しながら数を増やし人を襲い続ける。それは正しく機械の姿をした厄災だ。

「つまり、増え出す前に叩き潰す必要があると」

「そしてその準備が整うまでの時間稼ぎが俺達の役目だ。どうだ、怖くなってきただろう？」

そう笑うガエリオを見て、イオクはゆつくりと深呼吸を一度した。

そして正面からガエリオへ向かって頭を下げた。

「感謝する、ボードウィン三佐。私はまた大切なものを見落とすところだった」

緊張していたイオクは、M Aと戦うことばかり考えていた。だが、それだけでは駄目なのだ。

「何のために戦うのか、その為にはどう戦うべきか。そこに考えが至らなかった。私はまだまだ未熟だ」

そう思い詰めた顔で口にするイオクの肩をガエリオは叩くと、口を開いた。

「今気付けたのなら、まだ取り返せるさ」

その言葉にイオクが顔を上げた瞬間、ドアが開き不機嫌そうなジュリエッタが怒鳴った。

「いつまで着替えているつもりですか！もうCGSの皆さんは準備ができていますよー！」

「悪い、すぐに行く」

ガエリオがそう応じイオクは黙って頷く。戦場はすぐそこまで迫っていた。

65. 辛い時こそ人は笑うべきである

その日、ダンジとライドはハーフメタル採掘場の警備に参加していた。アドモス商会が保有している区画は他の二社に比べると狭く、少し距離も空いていた。これは別にアドモス商会が割を食っている訳ではない。クリュセのハーフメタル加工メーカーの多くはアープラウの企業であり、ノブリス・ゴールドンの経営するマーズ・マイニング社やテイワズのJPTトラストは採掘したハーフメタルの原石をアドモス商会を通して加工を委託しているのだ。そのためアドモス商会の採掘場は掘削エリアが小さい分、鉱石の積み込みや輸送を意識した造りになっており、位置もクリュセに続く道路——邪魔になる巨石を退かしただけの簡易なものだが——に面した配置になっている。

「警備って言っても、正直やることないよなあ」

『最初の頃はバカしに来るやつらも居たけどな』

現在火星はクリュセ以外のアープラウ管区も規制緩和に伴う開発ラッシュが続いている。そのため採掘場で使われているような作業用モバイルワーカーはどこでも品薄で値が高騰している。そうなることから拝借しようとする輩が少なからず現れるものだ。CGSに捕まった幸運な連中はクリュセの警備部に突き出されるだけで済んでいるが、他の二社から奪おうとした不幸な者達は大抵が地面の赤い染みに転職していた。この話が広がるにつれて犯行も激減したため、今ではこの警備任務は非常に退屈なものとなっている。ただしそれと同時に安全な仕事でもあるので、ダンジやライドといった年の若い三番隊の隊員が割り当てられることが多かった。

『そういえば次の研修、ダンジも行くんだろ?』

「おう、またお土産はメープルクッキーでいいか?」

『お前あれ好きだよなあ。俺は甘すぎて苦手だわ』

「あのめっちゃ甘いのがいいんじゃないかよ」

そんな取り留めのない話をしている最中の事だった。二人の乗り込んでいたモバイルワーカーが僅かに揺れる、それと同時に警告音が鳴り響く。

『は？エイハブ反応？』

「さつき連絡があつたJPTトラストの機体：じゃねえよな？」

ダンジが緊張した声音でそう確認する。採掘現場ではMSも作業用として恒常的に運用されているが、これらの機体にはハーフメタルを利用したシートがリアクター周辺に巻かれているため、エイハブウェーブが大幅に抑えられている。使用する際には連絡は来るものの、採掘現場から離れているダンジ達の場所で観測できるだけの放出量は出ない筈なのだ。

「作業員に緊急連絡！すぐに避難するように伝えろ！通信が使えない！走れ！」

ライドが張り詰めた様子でモバイルワーカーから身を乗り出すと、近くに居た隊員にそう指示を出す。緊張した顔で頷いた彼らは事務所や倉庫のある方へと走っていった。

「俺は採掘現場の方へ連絡に行ってくる！」

「ああ気を付けろよ！クソ、本部に何とか連絡を……」

ダンジはライドにそう告げるとモバイルワーカーを走らせる。そして、彼はその先で厄災と邂逅する。

「なんだよ、こいつら!？」

避難指示を出し、状況を確認しようと更に先へ進んだダンジの眼前に姿を現したのは機械の群れだった。まず目についたのは巨大な白い鳥のような機械。MSと比較しても遥かに巨大なそれは、長い尾のようなものを煩わしげに振り回しながら周囲を睥睨している。そしてその足元にある採掘現場からは、まるで湧き出すように無数のモバイルワーカーのような機体が這い出してきていた。

「おい、おい！なにやる気だよ!？」

まるで考え込むように止まっていた白い機体が、その首を一点で止める。その先にはJPTトラストの使っている施設があつた。ダンジの問いに答えを示すようにゆっくりとそちらへ移動を開始する白い機体。その足元に居た紺色のモバイルワーカー達は我先にと施設へと突撃していく。

『な、なんだこいつ等!？』

『ひ、や、止め来るなっ!?!』

『たすけ、たすついぎっ!?!』

慌てて飛び出したJPTトラストのモビルワーカーとMSは混乱の中、次々と紺色のモビルワーカーに集られ撃破されていく。ダンジはそれらが正確にコックピットを狙っているのを目にしまった。(ヤバイ、こいつらはめっちゃくちゃヤバイ!?!)

それが何であるかをダンジは知らなかった。けれどそれが人間を必ず殺そうと動いている事は理解できてしまった。故に彼は即座に決断する。

(ここに居る戦力で止められる相手じゃない!すぐに皆を逃がさないと!)

彼のこの判断がアドモス商会に所属する面々を窮地から救う事になる。容姿こそ子供であるが、彼らの戦闘に関する判断はその場の誰よりも正しいと認識されていたからだ。同時に運も味方したと言えるだろう。彼らの施設はJPTトラストの施設から離れており、それよりも近い位置にマーズ・マイニングの施設があったからだ。

「良く生きて戻って来たな」

泣きながら報告をするダンジの頭に手を置きながら、オルガはそう言う。その視線の先にはダンジのモビルワーカーに収められていた敵の映像を確認したギャラルホルンの面々が渋い顔で唸っている。

「間違いなくMAですね」

「これは、ハシユマル、か?確か中期頃の機体だったか」

「それよりもプルーマの数だ。既にとんでもない数になっているじゃないか」

そんな彼らを見てライドが険しい表情になる。そしてオルガに向かって口を開いた。

「隊長、モビルワーカー隊にも出撃準備をさせるべきです」

「おい、ライド」

「聞いてください。あのちっこいのはMSの射撃やモビルワーカーの

攻撃でも壊れてました。なら手数は少しでも増やすべきです」

その言葉を聞いていたガエリオが眉を寄せながら声を掛けてくる。

「気持ちには解らないではないが。それは些か危険が過ぎる」

「あいつらは人を殺そうとしています！あんなのがクリュセにでも行つてしまつたらとんでもない事になる！その前に止めないと！」

「そうだとしてもだ、ライド」

ガエリオの言葉にイオクが続く。

「ブルーマはともかく問題はハシユマルなのだ。あれにはビーム兵器が搭載されている。MSならばともかく、モビルワーカーではとてもではないが耐えられん。死ぬと解っている者を戦場に出す訳にはいかない」

二人の言葉にライドは唇を噛みしめる。そんな彼にオルガは優しく声を掛けた。

「落ち着けよ、ライド。何も出番が無いって訳じゃねえんだ。あのデカブツを叩いた後の掃討には手が居る。そんな時まで少し待ってろっただけだ。それに、お前はまだ仕事があるだろう？避難した人達をちゃんとクリュセまで送り届ける。半端に仕事を放り出すなんざ、マさんが許しちやくんねえぞ？」

「…はい」

そう言つて俯くライドを見て、声を発したのはジュリエツタだった。

「もし貴方の分が残っていなくても許して下さいね。何しろ我々はギャラルホルン、対MA戦のプロフェッショナルですから」

その言葉にガエリオとイオクが頷きつつ笑う。

「確かに最近の訓練ばかりだったからな。加減を間違えてうっかり全滅させてしまうかもしれん」

「ガエリオとジュリエツタがこうもやる気では、MAの方が可哀想かもしれない。だからと言って容赦してやるつもりはないがね」

「だとき、ライド。安心しろよ、俺達とギャラルホルンが組んでるんだ、負ける相手を探す方が難しいさ」

「隊長」

「ほら、もう行け。アドモス商会の人らが、ゆつくり休めねえだろ？」
オルガの言葉にライドは頷くと、ダンジと共に自分のモビルワーカーへと走っていく。それを見送りながら、ジュリエッタは愉快そうに口を開いた。

「全滅とは大きく出ましたね、ボードウィン三佐殿？」

「そつちこそ、プロフェッショナルとはよく言ったものだ。何百年前の話をしているんだか」

「気楽なものだ。大言壮語とはいえ一度口に以上呑み込めんというのに」

「おや、イオク様は自信が無いのですか？」

「私は謙虚なのだ。まあ武門として己の発言に責任を取るつもりではあるがな」

そう笑い合う彼らを見て、オルガも苦笑する。確かに状況は良くない。だが、悲壮な顔をしたところで事態は好転しないどころか、指揮官がそんな顔をしていれば部下は不安になる。ならば例え空元気であったとしても笑っている方が遥かにマシと言うものだ。

「それに頼もしい味方も居る事だしな。あんなものをいつの間にも用意していたんだ？」

そうこちらに聞いてくるガエリオに対し、オルガは不敵に笑いながら答える。

「MSの保有に関する条約は見ましたが、何処にも改造してはいけな
いなんて項目はありませんでしたからね。使い勝手の良いように多少は弄りますよ」

「アレを多少と言うのか」

「大方壺のおじさんの仕業でしょう。CGSの悪だくみは大体あの人のせいです」

そう好き放題口にする彼らの視線の先には、オルガ曰く多少弄ったランドマン・ロデイが鎮座している。この機体は彼らの推論通り、どこぞの相談役がランドマン・ロデイの改良機として製造したものだ。外向けにはガンダムフレーム、特にグシオンからのリバースエンジンアリングとしているが、実際には相談役が一から再設計に携わった代

物である。実際に作成を担当したビルス曰く、まるで何度もMSを設計した経験があるかのような手際だったらしい。

内部ではスコルの名を与えられているこの機体は、現在の主流からすれば非常に異端と呼べる設計だ。外観として大きな違いは、背面に追加された一基のサブアームとハードポイントだろう。サブアームは射撃武器の保持と使用が可能となっていて、様々な携行火器が扱える。今回持ち出して来た機体は、全て330ミリ滑腔砲が装備されている。この他にも腕部が延長されていて格闘武器の運用能力の向上が図られているほか、外観からは解りにくいのが、装甲の内部が一部外され軽量化と推進剤の搭載量を増加させている。ただし問題がない訳ではなく、ランドマン・ロデイに比べバランスが悪く、阿頼耶識組でなければ性能を発揮する事が出来ない機体になっている。

「詳しい事が気になるなら、後で相談役に聞いてください。さてと」

そう言ってオルガは寧猛な笑みを浮かべると、ヘッドセットを身に着け口を開いた。

「お前ら、準備はいいな？ 仕事の時間だ」

66. 正解を選び続けられるほど人は強くない

「作戦と言う程大層なものではないが、一応確認だ。作戦目標はMAの撃破、最低でも現地点への足止めだ」

ガエリオの言葉に全員が頷く。

「まず先制としてイオク二佐がレールガンにて攻撃、MAの注意を引く。ノーマルのロディ部隊は二佐の直掩についてくれ。連中が釣れ次第、左右に展開したスコル・ロディ隊も射撃を開始。距離を保ちつつプルーマの漸減を行う、この間に俺とジュリエッタは左右より連中を迂回し背後を取る。そして第三駐屯地から発進しているグレイズ2個小隊と合流後、攻撃を加える。注意すべきはハシユマルのテイルブレードだ。有効射程は400m、当たれば確実に殺されるぞ」

「戦中の記録によれば、ハシユマルは100m/s程での運動が可能です。常に彼我の距離は1000以上確保するようにしてください」
ガエリオの言葉を補うようにジュリエッタが口を開く。更に眉を顰めながらイオクが付け足す。

「さらに言えばハシユマル本体はMS以上の防御能力を有している。レギンレイズのレールガンでも撃破はほぼ不可能だ。故に目をつけられたら兎に角逃げるのだ」

「そしてアーレスの部隊が到着次第彼らを主軸にMA本体への攻撃を掛ける。尤も戦力として一番頼りになるのはミカヅキとアキヒロだろう。悪いが頼らせてもらおうぞ」

「はい」

「了解です」

「偵察班から連絡が来ました、MAが移動を開始しました！」

オルガがそう叫び、全員の表情が引き締まる。およそ300年振りの厄祭戦が始まった。

「人に仇なす怪物め！相手にとって不足はない!!」

始まりを告げる砲声は実に小さなものだった。レギンレイズの装

備するレールガンから放たれたそれは、ハシユマルの左側のウイングユニットに命中するも、澄んだ音を立てて弾かれた。なんら痛痒を与えない一撃、しかしその攻撃は目的を十分に果たす。

『来た来た来た！』

『まじかよ、地面が見えねえ』

レギンレイズの左右に陣取ったランドマン・ロデイからそんな声が聞こえてくる。その間もイオクは躊躇なくプルーマへ射撃を加える。

「これはいいな、撃てば当たる」

そう嘯くもののイオクの攻撃は基本を忠実に守っている。それは彼自身が自らに課した戒めであるからだ。

「狙いもつけずに引き金を引く者を何と言うか知っているかね？馬鹿だ」

訓練を一目見た相談役にそう評されたのち、彼は射撃の基本を文字通り体で覚えさせられた。それでもその技量は平凡に留まったが、その不足分は支援型にカスタマイズされたレギンレイズが補ってくれる。結果、彼の射撃はその言葉通り確実にプルーマを屠り続ける。

『いいよなあ、レギンレイズ』

『マン・ロデイはもう飽きた』

不平を漏らしながら、構えたマシンガンで射撃を加えるビトーとペドロに対し、イオクが笑いながら話しかける。

「ならギャラルホルンに入るか？お前達ならすぐにでも受領出来るぞ？」

『あはは、そりやすげえや』

『元デブリがギャラルホルンか、大出世ってヤツ？』

ハシユマル本体の移動に合わせて、彼らはゆっくりと後退する。彼らからすればMAの戦い方は酷くお粗末に見えた。それはある意味仕方のない事だと言える。元々ハシユマルはMSが登場する以前に生み出された機体であり、当時の戦場において文字通り頂点となる兵器だった。天敵を持たなかったこの兵器は他の兵器を脅威と設定しておらず、最優先目標である人類駆除の障害程度にしか認識していない。故にプルーマの損耗を避けるために自機を先行させ、脅威度の高

い目標を優先して叩くなどといった初歩的な戦術すら実行しない。はずだった。

「なっ!？」

その変化は唐突に訪れた。見晴らしの良い平野部と言っても、文字通りに平坦な訳ではない。十字砲火が効率よく行える地点まで誘引するべく移動していたイオクたちが、目標地点まで100mを切ったその瞬間、ハシユマルが突然翼を広げると爆発的な速度で加速し距離を詰めてきた。

『あぶねえ!』

唐突な変化に対応出来ず、立ち尽くしていたイオクを救ったのはビトーだった。驚異的な速度で繰り出された尾のようなブレードが、レギンレイズのコックピットへと吸い込まれようとしたその瞬間、ランドマン・ロデイが強引に割り込みブレードをその身に受ける。

『あああああ!?!』

装甲を破壊されながら、ビトーのランドマン・ロデイがレギンレイズを巻き込んで吹き飛ばされる。

『野郎!』

『二人をカバーしろ!!』

焦りを滲ませた声で通信が満たされる。即座に動いたスコル・ロデイ達がハシユマルの注意を引くべく連続して砲弾を放つ。だがハシユマルはそれを意に介さぬように進み、転倒した二人のMSへと近づいていく。

『ビトー!イオクさん!!逃げろ!逃げろ!!』

『こつち向きやがれデカブ——がっ!?!』

『ペドロ!?!』

接近し過ぎたペドロ機に再びブレードが振るわれる。強引に体を捻ってコックピットへの直撃こそ免れるものの、躲しきれずに右腕をもぎ取られ、その余波でペドロの機体は吹き飛ばされる。そして彼の機体が落ちたのは、プルーマのど真ん中だった。

『話と違うじゃねえか!?!』

困惑したダンテが思わずそう叫んだ。強力過ぎる故に戦術行動を

取らない兵器。ギャラルホルンのデータベースは決して間違っていない訳ではない。事実製造直後の個体であれば、ハシユマルはそのように行動しただろう。しかし彼らの前に現れた機体は、厄祭戦で破壊されなかったのではなく、かの大戦を生き延びた個体だった。だからこのハシユマルはMSという存在が自身を破壊しうる脅威であると学習していたし、それを操る人間がどの様に動いて見せれば油断するかも熟知していた。そして、連携して戦いを挑んでくる人間の陣形をどうすれば効率よく崩せるかも。

『何しやがる!? やめろ、このっ!』

起き上がるのに手間取っていたペドロの機体にプルーマが取り付き、耳障りな音と共にドリルを突き立てる。ペドロは機体を振つてもがくが、押しつぶすかのように纏わりついたプルーマがそれを許さない。その間にハシユマルは倒れたビトーとイオクの機体へブレードを振るい、両機の足を破壊する。逃げられない味方を生み出すと人間は面白い様に陣形を乱すことを学習していたからだ。身動きの取れなくなつた二機にもプルーマが取り付きドリルを突き立て始める。だが周囲の人間は距離を取つたままだ。どうやら我慢強い連中であると判断したハシユマルは、次の行動を起こす。幸いにして餌は3つもあるからだ。特に選ぶ事も無く、最も近い位置にいた機体へブレードを突き立てるべく高々と持ち上げる。見せつけるように、しかし無慈悲に振り下ろされたそれがコックピットへと突き立つ刹那、圧倒的な速度で間合いへと飛び込んできたMSが刃を振るい軌道を逸らす。

『調子に乗るなよ、お前』

『ペドロ! 無事か!』

更にもう一機が、やや離れた位置で倒れていた機体に取り付いてたプルーマを次々と薙ぎ払い助け起こす。その特徴的な角とツインアイを持つMSを見た瞬間、ハシユマルは即座に最優先攻撃目標としてその二機を指定する。自らを封じたものと同じような形をしたそれを、ハシユマルは明確な脅威として認識していたからだ。蹴っていたプルーマさえも動員し、ハシユマルはガンダムへと襲い掛かる。しかし敵の直中にありながら、ガンダムは憎らしい程冷静にそれらを捌

く。

『人間様を舐めるなよ!』

『邪魔』

ブラウンの機体が槍を振るいプルーマを纏めて薙ぎ払えば、白い機体は刀で飛び掛かった機体を2体同時に空中で切り捨てる。更に周囲からの支援射撃は圧を増し、プルーマが加速度的に失われていく。無論MAに仲間の喪失を憂うなどという機能は存在しない。しかし、自己の保有する戦闘能力が低下する事は理解出来るし、その要因が目の前の宿敵である事も認識した。だからこそハシユマルはガンダムに集中し、その様子を彼らに嘲られる。

『所詮機械だな、お頭が足りてねえ』

突き出されたブレードをグシオンが槍で弾き、蹴り出した足はバルバトスに躲される。だがそれはあくまで牽制、背後から飛び掛かったプルーマが二機に取り付く事に遂に成功する。更に次々とプルーマが取り付くのを確認し、ハシユマルは勝利を確信した。しかしその瞬間、突如として頭上に新たなエイハブ反応を観測する。

『鋒矢の陣!薙ぎ払え!!』

大気圏外から降下してきた18機ものMSが速度もそのままに両手に構えたライフルを撃つ。上空を通り抜けるように移動する彼らが放つそれは正しく掃射であり、地面を覆っていたプルーマが次々とスクラップへと変えられた。

『撃ちまくれ!!』

更に背後から合流してきた五機のMSが猛然と射撃を始める。包囲されたハシユマルは離脱を選択し、残存するプルーマに遅滞戦闘を指示した。プルーマは所詮消耗品であり、資材さえあれば幾らでも再生が出来る。しかしハシユマルは違う。本体が機能停止に追い込まれれば、当然プルーマの補充など出来ないし、彼らによる再生もこの状況下では難しい。それは任務の達成不可能を意味しているのだから、ハシユマルの判断は当然と言えた。問題はどちらに離脱するかであったが、それも即座に決定し機首を向かってくるMSの方向へと向けた。

『突っ込んでくる!?!』

撃破したMSの方向はハシユマルが再起動した方向だ。既に周囲の資材は粗方調達し終えていたので戻っても補給は難しい。逆に今MSが現れた方向は未知数であるが、戦力が出てきたならばそれを維持運用するための拠点がある可能性が高い。そしてハシユマルにしてみれば忌まわしい二つ目のMS以外は自身を脅かす脅威ではないのだ。故に合理的判断に基づいて、ハシユマルはMSの群れへと突っ込む。

『鶴翼!』

降りてきたMSが陣を敷きつつ射撃を加えてくるが既に遅い。プルーマと連携時には抑えられているが、本来のハシユマルはエイハブリアクターに裏打ちされた圧倒的な高速性と機動力を有している。それは脆弱な人間という枷が存在するMSの動きを遥かに凌ぐものだ。更に周囲の機体には厄介な杭打ちも存在していない。ハシユマルは悠々とその包囲を突破するはずだった。

『どこに行こうと言うのかね?』

激しい衝撃と共に左側の翼に弾丸がめり込む。ナノラミネートを突き破り内部に達したそれは、その運動エネルギーを十全にハシユマルへと伝える。制御の許容値を超える圧倒的な暴力にハシユマルが転倒すると、遅れてやってきた衝撃波にプルーマの残骸が吹き飛び、まるで道の様に地面が掃き清められる。

『そうだ、大人しく頭を垂れていたまえよ。機械は人間に隷属するものぞ?』

ハシユマルのカメラが声の主を捉える。そこにはMSとは異なる異形が土煙と共に佇んでいた。

67. 物事には常に対価が求められる

「なんとか間に合ったか」

「嘘だろ？ ナノラミネートを撃ち抜いちまった」

俺が安堵の溜息を吐いていると、パイロットシートに座ったシノが呆然とそう呟いた。いや、そう言っておいただろうに。

「呆けるのは後にしろ。そら前進だ、あの機械を躡けねばならん」

「え？ 寄るのかよ!?!」

当然じゃないすか。

「弾速が速いと言っても撃った瞬間に当たる訳じゃない。さらに言えばコイツの照準は少々骨でな、出来れば絶対当たる距離で戦いたい」
なんせナノラミネートのせいでレーザー測距儀すら使えんから、完全に目視照準だ。幸いにしてアホみたいな弾速と高精度な砲身のおかげで誤差は少ないが、外乱の影響は少ない方が良いに決まっている。だから近づく。

「仕方ねえ、やってやんぜ!」

気合の入ったシノの叫びと共に履帯が地面へと噛み付き、愉快的速度で景色が流れ始める。体がシートに僅かに沈み込むが、加速のGは大したことは無い。流星にリアクターを4台も積み込んだだけはある。

「遠慮は要らんで、これもどうかね?」

背に取り付けられたランチャーから吐き出されたロケットが漸く起き上がったMAに次々と命中する。被弾した瞬間眩しい閃光を吐き出すロケット達。うむ、急造のテルミット弾だったがちゃんと動作しているな。

『せxdrthふゆhじおk!?!』

うるせえ何言ってるか解んねえよ、音出すなら人間に解る言語使いやがれ。

「全機攻撃しろ! 鎧を引き剥がす!」

この世界でMAは極めて強力な兵器だが、その理由の一つが彼らの圧倒的な防御力にある。大出力のリアクターとぶ厚く蒸着されたナ

ノラミネートは、文字通り戦艦と同等の防御力を発揮する。だがそれは無敵と言う意味では勿論ない。何せノラミネートは熱に弱く、ナーム程度の温度で損傷させることが可能だ。宇宙空間ならばまだしも、燃やす物に事欠かない大気中ならば幾らでもやりようはある。まあ、使っているロケットは宇宙でも使う事を考えたものだからどちらでも変わらないが。テルミット反応によつて得られた高温が奴の装甲を炙り、ノラミネートを急速に損傷させる。ついでに周囲から援護射撃を貰う事でさらにその速度は高まっている。

「旧世代の遺物が。今更起きてきても貴様の居場所はない、今度は永遠に寝ていたまえ」

必殺の間合い、そう考えた俺はレールガンをMAへと向ける。しかしそれを察知したのか、奴は飛び上がるとブレードを振り回しながらこちらへ接近して来た。

「うおっ!？」

激しい接触到シノが驚きの声を上げた。更に耳障りな金属同士の擦過音が機内に響く、見ればサブモニターが一つつぶれていた。どうやら左側の装甲を切り付けられたらしい。だが機体の各所は問題なく動作している。

「こいつの装甲は伊達ではないのだよ!」

そう叫びながら俺は至近距離からマシンガンを浴びせる。派手な音が響くが損傷を与えた様子はない。だが多少でもセンサーをくらませられれば十分だ。

「シノ!」

「おっしやあ!」

再加速して機体をぶつける、装甲を盛りに盛りまくったおかげでコイツは150t近い重量を誇っているから、そのぶちかましとなればさしものMAであってもよろめくのは免れない。そしてその瞬間を見逃すほど俺はお人良しではなく、シノも鈍くはない。シートベルトが食い込むほどのGを受けながら機体が急停止から後退、丁度レールガンのバレルを滑り込ませられるだけの隙間が出来る。

「くたばれ」

照準一杯に広がるMAへ向けて、躊躇なくトリガーを引く。やや見上げるような角度で吐き出された砲弾は嘴のような頭部を正面から穿った。だが浅い。

「シノー！」

「おうさ!!」

更に機体を後退させもう一基のレールガンも射線に捉えると俺は再びトリガーを引く。衝撃波とともに飛び出した砲弾は更に破孔を生み、3発目でMAの頭部を完全に吹き飛ばした。

『くえrちゅいお?!?!』

うるせえ!ゲ!ム!の人工智能じゃあるまいしゴチャゴチャ囁るな。

頭部を破壊されたMAが奇声を発しながらブレードを滅茶苦茶に振り回す。だが所詮悪あがきだ、そんなもので運命は覆らない。

『暴れんな!』

『もう黙れよ』

グシオンが槍でブレードを受け止めた瞬間、ブレードの根元部分のワイヤーをバルバトスの刀が貫き地面へと縫い留める、これで終いな。

「イシユール一佐!」

『呐喊!!』

俺が呼びかけると同時にカルタ嬢がそう叫ぶ。そしてその声に応じるように包囲していた9機のレギンレイズが構えていたロングソードを突き出し突撃、その刺突は次々とMAの胴体にあるエイハブリアクターへと吸い込まれていく。

『『鉄拳制裁!!』』

最後の一本が深々と刺さると、MAは大きくその身を震わせた後脱力する。同時に残存していた子機が統制を失ったように暴れ始めた。

『残敵を掃討なさい!MAは討ち取りました!』

どうやら母機が完全に機能停止を起こすと子機はとにかく暴れて被害を出させる仕様のようだ。迷惑この上ねえな。

「シノ、後退だ。あれの相手はハティには荷が重い。悪いが皆に任せよう」

俺はそう言つて溜息を吐く。何とか終わったが、さてここからどうなる事やら。

火星でのMA復活、そしてその討伐は即座に世界へと広まった。ギヤラルホルンは情報統制を検討したが、状況が悪すぎた。事の起きた場所は火星最大のハーフメタル採掘場であり、その供給量は地球圏の約30%にも達していたからだ。MSの配備拡大によって消費が拡大していた各経済圏は突然の供給停止に説明を求めたし、何より採掘をしていたのがアークブラウと深い繋がりを持つアドモス商会、火星経済に強い影響力を持つノブリス・ゴルドン傘下のマーズ・マイニング社、更に圏外圏を牛耳るテイワズの直轄であるJPTトラストと、情報の流出が止めようのない環境であった事も大きかった。結果、被害状況についてはぼかしつつ、大凡事実のままMAにまつわる一件は公式に発表されることとなる。そしてそれは変化しつつある世界に波紋を呼ぶこととなる。

「各経済圏がMSの供給を増やせと行って来ております」

「機体そのものもフレック・グレイズではなくグレイズにしろと」

円卓に集まっているのは4人の男、そして3台の通信ユニットだ。困り顔で口火を切ったファルク公に続き、バクラザン公が頭を振りながらそう続く。ヴィーンゴールヴを預かる彼等の職務には経済圏との折衝も含まれている。火星での一件で自分達が未だに戦後から抜け出していない事を知った各経済圏の首脳陣は、我先にと戦力の増強を願った。

『アブリ帯においても多数の残骸が発掘されております。幸い今の所再起動可能な個体は確認されていませんが』

「安全が確保出来るまでサルベージを禁止する、のは無理でしょうな」
疲れた声音で告げるエリオン公に溜息で応じるのはボードウィン公だった。戦争から300年が経過し、人類は安定した社会を再建している。しかしそれは地球に限った話であり、その地球は現在あらゆる面で飽和し始めている。無理もない、厄祭戦によって人類は経済や

技術、生活圏と多くのものを失ったが、その一方で人口は25%しか失わなかったのだ。これらの問題は人類社会復興を大義名分に圏外圏へしわ寄せを押しつける事で目を逸らし続けられていたが、それも限界に近い。故に人類にとって生活圏の拡大と消費の増加は社会発展の必須事項であり、その為にもデブリ帯の除去や現在圏外圏と呼称されている火星や木星といった地域の経済基盤拡大は必要とされている。

「ギャラルホルンは既にMAの撲滅宣言を出しています。体面を考慮するならば、今回の一件はあくまでイレギュラーである必要がある。しかし…」

『現実問題として休眠状態のMAは発見が極めて困難であると言わざるを得ません。更に即応したとしても、レギンレイズだけではかなりの損害を覚悟する必要があるかと』

『MAの戦闘能力は極めて高く、現在運用している武装での討伐は極めて難しかったのです。遠距離で対処出来ない分接近する必要があります。一撃を入れますし、仮に近づけても分厚い装甲とあの運動性です。一撃を入れるためだけに何人死ぬか解ったものではありません』

マクギリスが眉を寄せながらそう口にすれば、即座にカルタがMAの危険性を訴えた。更に同じく直接相対したイオクも続けてそう証言する。

「それは些か過大評価のしすぎでは？」

「然り、イシユウ公とクジャン公は一人も欠けること無く討伐しておられる」

そうファルク公とバクラザン公が口々に樂觀を述べるが、カルタはそれを否定する。

『対応に動き出した時点で3つのハーフメタル採掘場が壊滅し、100人以上の死者が出ています。更に言わせて頂けば、MA討伐は私達のみで成し遂げた訳ではありません。寧ろ彼等こそ本命でした』

「報告書にあったガンダムフレームと自称モビルワーカーかね？」

目を細めながら問うボードウィン公にイオクが応じる。

『MAを押さえ込むのにレギンレイズでは全く力不足でした。彼らが

居なかったなら、今頃私は火星の土になっていたでしょう」

『ガンダムフレームはともかく、問題はモビルワーカーの方だろう。射撃でMAに損傷を与えたと報告書にあったが?』

エリオン公の問いにカルタが返事をする。

『私も確認させて頂きましたが、ダインスレイヴではありませんでした。尤も、より強力な砲ではあったのですけれど』

「違法でないと言い切るには少々外連が過ぎているでしょう。一度正式に調査する必要があると考えます」

カルタの答えに溜息交じりにマクギリスがそう提案し、全員が頷く。それを見ながら彼は更に口を開いた。

「最悪ダインスレイヴに関する条約そのものを見直す必要があるでしょう。しかし、同時にこれはチャンスと言えるかもしれない」

「チャンス?」

訝しげな表情で視線を向けてくる者達に向かって、彼は言葉を続ける。

「仮にその砲が容易に量産出来るならば、ダインスレイヴの禁止自体が無意味になります。同時に民間組織でもMAを討伐可能な武装を運用出来るという事にもなる」

『さて、ファリド公。まさか』

「どちらにせよ既にダインスレイヴ以上の実物があるのです。禁止した所で密造されるだけでしようし、サルベージも採掘も止められない以上対抗手段は必要です。ならばMAを駆除しきれないギャラルホルンは、駆除の道具を配るしかないでしょう」

エリオン公の言葉にマクギリスは笑いながら応じた。

68. 利害関係とは当人以外にとって不明瞭な事が多い

「我が社としては御社が保有する採掘権の30%を要求するよ」

ノブリス・ゴルドンはまるで世間話のような気安さで目の前の男にそう告げた。

「ゴルドンさん、そりゃ幾らなんでも吹っ掛けすぎじゃないかい？」

クリュセのオフィス街。その一角に今回の騒動で被害を被った三社の代表が集まり、話し合いの場を設けていた。内容は騒動の一件に対する損害賠償。要求を突き付けられたジャスレイ・ドノミコルスは苦虫を噛み潰した顔でそう返事をする。だがノブリスは肩を竦めて言い返して来た。

「吹っ掛ける？とんでもない、これでも随分譲歩しているよ。あの一件で我が社は大切な社員を何人失ったと思っているのかな？残された遺族に対する責任が我が社にはあるし、おまけに彼らとは比べ物にならないが、機材や設備にも甚大な被害を受けている。はつきり言って採掘権を全部貰っても釣り合わないくらいさ」

無論ノブリスに死者へ対する哀悼の気持ちや、残された家族に対する補償を行う責任感など欠片も無い。しかし、そうした建前が相手からより多くの譲歩を引き出せる事を彼は熟知していたし、慈悲深く見える行動が信用として更なる利益につながる事も理解していた。

「ですがゴルドンさん、それでは設備が復旧するまで利益の回収が難しいのではないですか？大切な社員に多大な損失を被った御社ですから、再建も容易な事ではないでしょう。採掘権を獲得しても掘り出せなければただの荒れ地です」

そう口をはさんだのはもう一人の当事者、クーデリア・藍那・バーンスタインだった。

「確かにそれまでは懐が痛む事になるね。だが見舞金を送り付けてはいさようならでは如何にも薄情というやつじゃないか。だとしたら今は損でもいざれ彼らを養い続けられる稼ぎ口を確保しておきたい

と思うのが普通だろうか?」

「成程、ですがその為に損害を全てドノミコルスさんへ押し付けるのは違うのではありませんか? 今回の一件は誰にでも起き得た事故です」

「そうだね、痛ましい事故だ。だが彼の部下が起こした事故であることは確かで、それによって我が社の人間が犠牲になった事も動かしようのない事実だ。ならばその上司に責任の所在を求める事は何らおかしな事ではないと私は思うがね」

「責任を問うなどは言っておりません。責任だからと全ての損失を押し付けるのが正しくないと申しているのです。そもそも遺族の方を養うと仰いましたが、雇用契約はどのようなようになっていたのですか? 雇用期間以上の費用を負担する事が健全だとは私には思えませんし、更にそれを理由にそれ以上の資産価値を要求する事も正しいとは思えません。今回の一件ではJPTトラストでも多くの方が亡くなっています。彼らの遺族を困窮させるのは同じ経営者として余りにも薄情なのではないですか?」

畳みかけるように問いかけてくるクーデリアを見てノブリスは一瞬表情を強張らせるが、直ぐに元の飄々とした顔に戻ると口を開いた。

「ふっふ、そこまで言われてはしょうがないね。クーデリア君には腹案があるのだろうか? 聞こうじゃないか」

その言葉にクーデリアがジャスレイに向けて視線を送る。彼が無言で頷くのを見て、彼女は腹案を提示した。

「今回の設備損壊及び装備の破損についてはJPTトラストに補填して頂きます。また亡くなった方の遺族に対する養育費を雇用者の契約期間分の支払いをお願いします。これを受け入れて頂ける場合、支払期間中マーズ・マイニング社からのハーフメタル買取価格を10%上乗せさせて頂きます。そしてその分の補填を我が社はJPTトラストに要求したいと考えております」

その言葉にジャスレイは驚くように目を見開き、ノブリスは愉快そうに笑う。

「随分と慎ましい要求じゃないか。それだと君の会社は何も得られていない」

ノブリスの言葉にクーデリアが応じる。

「私は弱者救済の為にこの会社を立ち上げました。理想だけでは誰も救えないからです」

「……」

「けれど理想を忘れたわけでも、捨てたわけでもありません。困窮する方が一人でも減る事こそが我が社にとって最大の利益です」

挑みかかる様な笑顔でそう告げるクーデリアに、ノブリスは笑みを浮かべたまま頷いた。

「緊張しました」

会合を終えて自社へと戻る車の中で、クーデリアはそう言って大きく息を吐き出した。

「お疲れ様。でも上手くいったんじゃない？ ジャスレイさん随分機嫌良さそうだったし。ノブリスさんの方はピリピリしてたけど」

護衛として隣に座っているミカヅキがそう口にした。

「ええ、我が社としては成功ですね。ノブリス氏の独占を阻止できましたから」

JPTトラストの社員を困窮させない。それはクーデリアの紛れもない本心であったが、会合での発言が全てそれだけに即したものでなかった事も事実だ。既に採掘場の50%近くを獲得しているマーズ・マイニング社が更にJPTトラストが保有している採掘権の30%を獲得した場合、火星におけるハーフメタル採掘の大半を押さえられてしまう事になる。そうなれば彼の望むようにハーフメタルは価格操作を受ける事になる。それはハーフメタルの加工事業を手掛けているアドモス商会にとって看過出来るものではなかった。

「難しいですね」

そう言っただけでクーデリアはミカヅキの肩に頭を預けた。地球での経験以降、彼女はあまり正しいや正義という言葉が口にしなくなっていた。

それは彼女にとっての正義が他者にとっても同様ではないという事に気付いたという事もあるが、何よりも弱者を救いたいという自らの我儘で、誰かに不利益を与えている事も自覚しているからだ。無論それらは彼女からしてみれば不誠実に見える利益であったとしても、それを妨害する自らが彼らにとつての悪であるという事が理解出来てしまうからに他ならない。結果彼女の心は急速に摩耗している。「でもクーデリアは続けてる」

革命の乙女と持て囃され、会社のトップとして職務をこなす彼女にとつて、ミカヅキとの逢瀬は数少ない平穏で、誰かに甘える事の出来る時間だ。当初は彼の恋人であるアトラへの後ろめたさがあつたのだが、彼女からお墨付きをもらった事で、もう一人の恋人としてミカヅキとの関係を構築している。優しい声音でそう口にしながら頭を撫でてくれるミカヅキに対し、クーデリアは目を閉じて彼の大きな手の感触に集中する。こちらを労わる様に優しく続けられるそれに、気持ち落ち着いていくのと同時、彼女は強い睡魔に襲われた。

「いいよ、着いたら起こすから」

愛しい男にそう言われ、彼女は惜しみつつも意識を手放した。

呑気にトマトへ水をやりながら、俺は視線だけで同じように畑仕事をしているアトラ嬢を見た。基本的に演習場の整備は希望者がやることになっている。大体はアルトランド兄弟とミカヅキ、それからアストンとデルマ辺りだ。5番隊の子供組も手伝う事はあるが、畑の世話まではさせていない。

「マさん。水、このくらいいいですか？」

アトラ嬢はかなりの頻度で整備に顔を出す。ミカヅキと一緒に作業をしたいというのもあるのだろうが、同時にいざれ農業をやりたいというミカヅキを助けられるように知識を蓄えているようだ。事実今日の様にミカヅキが業務で参加できない場合でも積極的に顔を出している。

「ああ、トマトは水をやり過ぎててもいかなからな、その位でいいだろ

う」

あまりあげすぎると水っぽいトマトになってしまいうからな。俺の返事に頷いて作業に戻ったが、見続けていたのが悪かったのだろう。視線に気付いたアトラ嬢が首を傾げながら聞いてきた。

「どうかしましたか？」

「いや、付いていきたかったのではなかったのかと思ってね」

鉄華団解散後、ミカヅキとアトラ嬢はCGSの社宅で二人暮らしを始めた。それについてとやかく言える権利は無いが、取敢えず母体の安全性の問題からそれなりの指導だけはしておいた。そんな彼女の思い人は、現在もう一人の恋人の護衛でクリュセに居る。正直あれだけ執着しているのだから、目の届かない所で二人きりなど気分の良いものではないだろうと考えてしまったのだ。ぶっちゃけ、クーデリア嬢と交際を認める発言の時点で大分驚かされてはいるが。

「私も行くとクーデリアさんが寛げませんから」

そう言っアトラ嬢は苦笑する。なんでもクーデリア嬢はアトラ嬢からミカヅキを取っている気分になって、3人で居ると罪悪感から遠慮してしまうそう。なんだかなあ。

「正直に言えばそこまでアトラ嬢が譲ってやることは無いと思うのだが」

不用意な発言を俺は直後に後悔する事になる。

「私はミカヅキが好きですけど、クーデリアさんにはミカヅキが必要ですから」

アトラ嬢に言わせれば、クーデリア嬢は昔の店で見た余裕をなくしたお姉さん達と酷く雰囲気似ているそう。一見タフで強そうなタイプ程こうなった時は危なくて、ある日唐突に居なくなるならまだ良い方、最悪部屋で天井からぶら下がっていたなんて事もあるそう。

「私クーデリアさんの事も嫌いじゃないですし、それに会社にとっても大事な人じゃないですか」

確かにアドモス商会との取引はCGSにとってサルベージ業に次いで大きな収入源になっている。とは言え比率からすれば全体の数

%であつて、関係悪化が致命的と言う訳でもない。ついでに言えば良好な関係であるに越したことは無いが、向こうとしても付き合いが深い暴力組織などウチくらいのもものだから関係が悪化しても簡単に切ることが出来ない間柄だ。冷たい言い方をすればアトラ嬢に何らかの我慢を強いてまで良好な関係を築き続けるほどの関係では無い。けれど彼女はそう考えない。いや、考えられないと言うべきか。彼女を含め元浮浪児であつた彼らは我儘を言う事がとても危険な行為であると認識している。そして生きる事に精一杯だつた故に少しでも物的報酬が増えるならば、見合わない精神的負担を平然と受け入れてしまうようになっていた。ここに情操や倫理に関する教育の欠落が加われれば、社の利益の為に好きな男が別の女と逢瀬する事を我慢できる少女の出来上がりと言う訳だ。胸糞悪い事この上ない。

「あ、それにこれって私の為でもあるんですよ！」
俺の表情に何かを察したのだろう、アトラ嬢が明るい声音で告げてる。

「ミカツキって戦う理由は沢山あるけど、帰ってくる理由が全然ないじゃないですか。：赤ちゃんは止められちゃいましたし。だから少しでも沢山ミカツキが帰ってこなきゃいけない理由が必要だと思つたんです」

その言葉を聞いて、俺ははつきりと溜息を吐いてしまった。幼少期の食生活のせいだろうか、アトラ嬢は年齢の割には発育が悪い。そつち方面に関して俺は素人であるが、未成熟な体での出産が危険な事くらい知識はある。だから少なくとも現状では彼女の妊娠を許可することは出来ない。そして彼女は俺達が絶対に許可しない事を理解したからこそ、子供の代わりになる存在を望んだのだろう。

「この間、ラフタさん達を迎えに来たタービンさんが言つてたんですよ、男も女も最後に帰る場所は家族の所だつて。家族が沢山いたら、多分ミカツキも帰らなきゃって思つてくれるんじゃないかなつて。だから、これはミカツキに帰ってきて欲しい私の為でもあるんです」

そう笑う彼女に、俺は返すべき言葉が見つからなかつた。

69. 世界は常に変化する、それが良い方向とは限らない

「世話になった」

「はい、いいえクジヤン公。自分は職務を全うしただけです。お礼を言っていたくような事は何もありません」

握手を交わしながらそう真面目に答えるアキヒロに対し、イオク・クジヤンは柔らかく笑った。

「だとしても、私が君たちに多くを教えてもらった事、そしてそれに感謝をしている事に変わりはない。ならばそれは伝えるべきだ。だから改めて言おう。感謝する」

「勿体ないお言葉です」

男くさい笑みを浮かべながら、アキヒロが強く手を握り返す。その力強さを受けながら、イオクは苦笑した。

「尤もまだまだ学ばせてほしい事は山ほどある。いずれ折を見てまた世話になるだろう。その時は宜しく頼む」

「お任せ下さい。クジヤン公ならばいつでも歓迎です」

アキヒロの返事に頷くと、イオクは踵を返しシャトルに続く通路を歩き出した。その後ろを少し不満げな表情でジュリエッタが続き、その横には愉快そうに二人を眺めるガエリオの姿があった。

「納得いかんのは解るがあまり顔に出すな。折角の美人が台無しだぞ？」

「もう少しで一本取れるようになるんです。なのに召還だなんて！」

「仕方あるまい。イシューー一佐も呼び出されているのだ、我々だけ呑気に訓練とはいかん」

そうは言うものの、イオクの表情には確かな口惜しさが滲んでいた。

「イオクが惜しんでいるのは訓練だけではなさそうだな？」

「言ってくれるな、ガエリオ」

イオクは人目をはばからず溜息を吐いた。事はM Aの討伐から一

週間ほど経った日だった。

「どうだろうか二人とも。クジャン家に仕えてはくれないか?」

ギヤラルホルン火星支部、アーレスに設置されている医療ポッドは非常に優秀だ。喪失した四肢や機能を停止してしまった臓器などは無理だが、それ以外であれば大抵の事は治療できてしまう。尤も、多少強引な所はある様で、深手であるとそれなりの傷跡などは残ってしまうが。その日医療ポッドから解放され、ベッドで体の調子を確かめていたペドロとビトーに向かつて、イオクは真剣にそう提案した。M Aとの戦いの際イオクは真つ先に撃墜されたが、彼自身は無傷で生還している。無論それは彼の技量やまして幸運などと言う曖昧なものではなく、目の前の二人の献身によるものである事をイオクは十分に理解していた。そしてそれに報いる方法を考えた結果が、二人をクジャン家の家臣として迎え入れるという事だった。彼らは元ヒューマンデブリだ、当然そのような者を使用人ならばともかく、家臣として迎え入れるとなれば相応の反発もあるだろう。だが彼らに報いるためならばその程度の事は説き伏せるだけの覚悟もイオクは出来ていた。しかし返ってきたのは戸惑いを含んだ曖昧な微笑みを向ける二人だった。

「気にし過ぎだよ、イオクさん」

「そーそー。俺らも生きてるんだし、こうして治してもらったしき。それで良くね?」

「命がけで守ってもらったのだぞ? 治療を手配するなど当然ではないか。その程度では到底この恩は――」

「その程度じゃないよ」

とても返したとは言えない。そうイオクが続ける前に言葉が遮られる。

「デブリだった頃、俺達は治療なんて受けた事がなかった。当然だよな、だって俺らは幾らでも替えが利くMSの部品だったんだから。ちよつとした怪我ならまだいいけど、酷い怪我をした奴なんて悲惨だった、丸裸にされてき、宇宙に捨てられるんだ。直すより新しいのを捕まえてきた方が早いし簡単だからね」

「MSを壊すのもやばい。MSは俺達よりもずっと貴重で高いから壊すようなへぼい部品は殴られるなんて当たり前、下手すりやその場で撃ち殺される事もあった。そんなのを生かし続けるより鉛玉一発で済ませる方が安上がりだつてさ」

絶句するイオクを前に、そう語った二人は笑いながら続ける。

「だからさ、俺らイオクさんには十分返して貰ってるんだ」

「それに悪いけど、俺達も恩を返す側でさ。イオクさんが当たり前だと思ってる世界に俺達を連れてきてくれた人達に、俺らはまだ全然、何も返せてないんだ」

「だからごめん、イオクさんの家来にはなれねーわ」

「そうか」

二人の拒絶の言葉をイオクは静かに受け止める。目先の利益よりも恩義に報いようと考える彼らの言葉に好感を持ったからだ。だが、言いようのない感情に動かされ、彼は口を開く。

「残念だが、今回は諦めよう。だが、やはり私も恩を受けたままではいられない。何かして欲しいことなどはないか？そうだ、MSなどはどうだ？レギンレイズは難しいが、グレイズならばクジャン家の私用として割り当てられている機体を貸し出せる」

その言葉に二人は顔を見合わせた後、苦笑しながら答える。

「嬉しいけどいいよ、俺らにはロデイがあるからさ」

「道具は有効に使わなきゃだぜ、イオクさん。第一お礼にMS貰ったなんて言ったら、俺らが相談役に叱られちまうよ」

「そ、そうか、そうだな。浅慮だった」

落ち込むイオクを見て、ビトーが頬を掻いた後、苦笑しながら口を開く。

「どうしても俺らに恩返しがあったらいいというならさ。別の俺らを助けてやってよ」

「別の二人？」

意味が理解できないイオクに対し、ビトーの意図を察したペドロが口を開いた。

「俺らはCGSに運よく拾われて助かった。けど世界には助けて貰え

ずにいる俺達がまだ沢山居るだろ？だから、イオクさんが俺達に恩返しをしてくれるっていうなら、そいつらを助けてやって欲しい」

彼らの言葉にイオクは自らを恥じた。イオクは紛う事無くこの世界の名家と呼ばれる家の出である。彼は生まれながらに貴種として扱われ、それを当然のこととして受け入れていた。血が証明している事など、先達が積み上げた功績だけだというのに。そんな自分より遙かに恵まれない二人が見せた高潔は、彼の価値観を揺さぶるに十分過ぎるものだった。

「血ではなく、行いにこそ貴種が貴種たる所以はある…か」

シヤトルの席に座り、イオクは一人呟く。その目には確かな信念と覚悟が宿っていた。

「結論から申し上げますと、新型砲を運用するためだけの兵器です」

アリアンロッド艦隊から選出されたMA護送部隊、その中に含まれていたヤマジン・トーカは自らが出した結論をラスタル・エリオンに向けて報告していた。

『簡潔に言い過ぎだ、詳しい説明を』

苦笑と共にそう告げられトーカは一度頭を搔くと、再び口を開く。「機体の構造材や駆動方式、制御系に目新しいものはありません。どれも既存の技術を流用したものばかりです。それは新型砲についても同様です。構造やエネルギー効率で見ればレギンレイズ用のものの方が洗練されているくらいです」

『成程、つまりそれなりの設備があれば量産可能という事か』

ラスタルの言葉にトーカは肯定の言葉を返す。

「レアアロイ製のフレームが最も難易度の高い部品ですから推して知るべしと言うべきでしょうか。御大層にリアクターを4基も搭載しています。周波数の同調や個体差の選別を行っています。本当に4基載せたただけですね。ある意味ガンダムフレームよりも贅沢な機体と言えるでしょう」

機体の駆動用に1基、そして残り3基は全てレールガンへのエネルギー

ギー供給用というふざけた仕様だ。だがふざけてはいるが、理にかなっている。この方法ならばリアクターさえ確保出来れば、ダインスレイヴモドキを好き放題撃てる機体を大した技術力も必要とせずに量産出来るのだから。

「リアクターさえ揃えられれば、MSを独自生産出来ているテイワズどころかレストア程度が可能な組織なら何処でも製造可能です。普及した際の脅威度はMSの比ではないでしょう」

『厄介な物を造ってくれたものだ』

ラスタルのため息交じりの言葉にトーカも心中で同意する。海賊の大幅な弱体化と防衛戦力の拡充によって、各経済圏は積極的な掃海と言う名のデブリ帯のサルベージを行っている。経済の活発化自体は歓迎すべきではあるものの、同時にそれはギャラルホルンが把握出来ていないエイハブリアクターが更に出回る事を意味している。そこにリアクター以外は大抵の組織で造れてしまう、強力な砲を持った兵器が現れたとなれば、最強の兵器であるMSの存在が大きく揺らぐ事となる。

「封印が妥当かと」

技術者としてはあらゆる事に忌避感のないトーカであるが、それでもギャラルホルンの人間としての立場は弁えている。厄祭戦後人類が人同士の大戦を経験していないのは、良くも悪くもギャラルホルンが軍事的に一強だったからである。だが長きにわたる平穩に慣れ切った経済圏とギャラルホルンは、その関係に罅が入り始めている。

『難しいな。今更掃海を止めると言って経済圏が従う訳がない、既に投資の後だからな』

守護者としての立場から、経済圏が自らを養う事は当然であると驕ったギャラルホルン。長年の平和に守護者への敬意を失った経済圏。どちらが悪かったのかなど、問いただした所で今更の事だ。

『人類の発展に寄与出来ない組織の存在理由を疑問視する声も少なからず存在する。今回の一件は対応を見誤ればギャラルホルンの立場を間違はなく悪化させるだろう』

「では許可なさるのですか？」

『いや、それはあり得ない』

トーカの言葉をラスタルは即座に否定する。

『便宜を図ってでもこの兵器はあの連中だけに留めおくべきだろう。テロリストにでも流れたら目も当てられん』

そうラスタルが口にし、同時にトーカの端末へデータが送られて来る。

『だがMAの存在がある以上、各経済圏へ対抗手段を送らねばならないのも無視出来ん。故にギャラルホルンは次世代機の開発を決定した。トーカ、貴様にも携わってもらおう事になる』

ラスタルの言葉にトーカは驚きと共に端末へ視線を送る。そこにはダインスレイヴの運用を前提とした新型MSの仕様が記載されていた。

70. 歴史とは繰り返すものである

ギャラルホルンと共闘しMAを撃破したCGSは、その勇名を轟かせる事無く淡々とした日々を送っていた。尤もそれは表向きの事で、水面下では様々な交渉が各勢力と持たれているのだが、多くの社員は未だ蚊帳の外に置かれている状況だ。そしてその事を当然の様に不満に思う人間も存在する。

「ああ、クソ。わっかんねえ…」

日の落ちた後の社員食堂では、恒例となった残業が行われている。対象者は4・5番隊の子供や女性に加え3番隊の新人達も含まれていた。しかしここ数日3番隊の新人達は集中できておらず、その進みは目に見えて鈍化していた。

「どこが解らないんだい？ちよつと見せてごらん」

指導役の老婆——読み書きが出来ると5番隊に雇われている人物だ——が問いかけるが、返ってきたのは慥然とした顔と何も書かれていないタブレットだった。

「最初が解らないんなら飛ばして解りそうなのからやるんだよ、取敢えず手を付けて——」

そう丁寧に教えようとする老婆に対し、新人は不機嫌さを隠そうともせず舌打ちをすると、手にしていたペンを投げ出す。

「俺はチマチマ計算なんかするためにCGSに入ったんじゃないよ」

それは一人の言葉であったが、他の多くの新人も同じ気持ちのようだった。その言葉を皮切りに殆どの新人のペンが止まり、口々に不満を述べ始める。

「訓練ばっかだよな。俺海賊退治に憧れてCGSに入ったのにさ」

「仕事って言っても採掘場の警備だろ。MSどころかモビルワーカーにも触らせてもらえねえ」

「昔からいたってだけでガキですらMSに乗ってるのに不公平だよな」

「やっぱ阿頼耶識だろ？それがあれば俺らだって」

「今日は賑やかじゃん、何か良い事でもあったか？」

「良い雰囲気とは言えないんじゃないか？」

突然割り込んできた声に室内が静まり返る。声の主であるライドとハッシュは気にした様子も無く部屋に入ると、担いでいたコンテナを机へと降ろした。少しずれた蓋の間から強烈な甘い匂いが漏れ出す。

「ほい、いつものな。終わった奴から食ってよしだぜ」

「残業代で欲しい人はこっちに言ってくれな。纏めて申請するから」

「…あの」

「ん？」

二人がそういういつもの申し送りをしていると、最初に不満を口にしてきた新人が意を決した表情でハッシュへ話しかけてきた。本来であれば彼らの先輩はライドであるため、意見ならばそちらへ掛け合うのが筋であるが、年下へ不平不満を口にするのは憚られたのだろう。察した二人は静かに彼の言葉を待つ。

「こんな事、いつまで続くんですか？俺、早くMSに乗りたいんですけど」

その言葉にハッシュは落ち着いた表情で応じる。

「そのために勉強してるんだろ？字が読めなきゃマニュアルが読めない。どうやってMSの操縦を覚えるつもりなんだ？」

「推進剤の残量、残弾。計算だって出来なきゃ、普通に戦うなんて夢のまた夢だぜ？」

そうライドが付け足す。勿論戦闘中に複雑な計算などする機会はほぼ存在しない。だが全く計算もせずに戦えるほど戦場は甘くない。だがそれに対する新人の返事は素直な納得などではなかった。

「なら、俺にも阿頼耶識をつけてくださいよ。あれがあれば読み書きなんて出来なくてもMSに乗れるんでしょう？」

「おいっ——」

「ん？良いぜ」

その言葉にハッシュが何かを言いかけるが、それより先にライドが快諾する。あまりにも呆気なく認められた事に新人は訝しむが、ライ

ドは笑いながら続ける。

「別に会社側は強制してねえけど、本人達が受けたいって言うなら施術くらいしてくれるさ。ただ解ってるよな？」

「え？」

問い返され間抜けな声を上げる新人に、ライドは意地悪い笑顔で口を開いた。

「おいおい、契約書に書いてあっただろ？本人が希望した阿頼耶識手術は、会社側は一切責任を負わないって。お前らが廃人になろうがどうなろうがCGSは知らねえし、働けなくなった奴を雇ってなんておかないぜ？」

「!？」

目を見開く新人達にライドは更に追い打ちをかける。

「ああ、それから解雇されるときは違約金を払ってもらう事になるぜ、なんせお前らは訓練ばっかでロクに仕事をしてねえ。今のお前らって会社からすれば赤字なんだよ。それでも今後使えるようになるから投資してるわけだ。けどその今後が無くなるんだから追い出す前に出来る限り回収しとかないとな。確かこの辺りも入る前に渡された契約書に書いてあったはずだぜ？」

「心配するな、お前ら」

ライドの言葉に青くなっている新人達にハツシユがそう声を掛ける。だがそれは更なる恐怖を煽る事になる。

「幸いCGSには阿頼耶識を研究している学者さんがいてな。人体実験出来る相手をいつも待ち望んでる。だからCGSに残る事も出来るぞ、まあ実験次第じゃ死んだ方がマシって場合もあるけどな」

「いや、嘘でしょ。契約書にそんな内容書いてなかったっすよ」

タブレットに視線を向けたまま、そう突っ込みを入れたのはザックだった。その言葉に嘘のばれた二人は視線を交わらせ肩を竦める。漸く騙されていた事に気付いた新人達が剣呑な表情で二人を見るが、ライドとハツシユは平然と視線を受け止め笑って見せる。

「騙したのかよ!？」

「まだ解らないぜ？字が読めるザックだけ別の契約書かもしれない。

お前達の契約書には本当にそう書かれてるかもしれない。けどお前達には確かめようがないよな。だってお前らは字が読めない」

「ザックに読んでもらえば」

「会社がザックを買収したら？誰かに読んでもらってもそれはなんの保証にもならない」

そうハツシユが告げると、ライドが真面目な顔になり口を開く。

「MSってのはすげえ武器だ。お前たちが思ってるのより遥かに簡単に沢山の人を殺せちゃう。その意味が解るか？お前らがちよつと騙されるだけで、直ぐに人が死ぬって事だ。お前らはもうCGSの社員なんだ。もし騙されて人殺しをすれば、その責任はCGSにだって降りかかる。その事を良く考えた上でもう一度言ってみる。字も満足に読めない奴がMSをどうしたいって？」

「それと会社がお前らに金をかけているっていうのは本当だぜ。考えてみるよ、ただ突っ立っているだけの仕事で、お前らの給料が入ると思うか？訓練なんて文字通りギャラーにだってなりやしない。だけどお前さん達は給料を貰ってる。その金は何処から出てると思う？」

そのため息交じりにハツシユがライドの後に続けると、新人達は沈黙せざるを得なかった。今更になって、自分たちの環境が在り得ない好待遇である事に気付いたからだ。

「まあ、阿頼耶識が欲しいって気持ちは解らなくないからな、どうしてもって言うなら施術の申請はしてやるよ。ただし勉強は続ける。MSは馬鹿が持っていけないもんじゃないからな」

ライドの言葉に、新人達は黙って頷いた。

「あの一、相談役。俺の問題なんかおかしくないっすか？」

いつもの残業時間を少し過ぎた頃、ライドとハツシユがメールを送って来た。内容は3番隊新人の阿頼耶識施術希望について、まああの便宜さを考えれば無理もない事だと思う。

「そんなことは無い。ザックは読み書き計算が出来るからな。それに

合わせた問題というだけだ」

「ぜってえ嘘だ」

うむ、嘘だからな。でもザックは正直前線で戦うより幕僚としての能力の方が高いのだよなあ。なので彼には作戦立案とか戦局分析、ついでに兵站管理なんかの問題を押しつけている。まあ彼については追々説得していくとして、先にこっちを片付けるべきだろう。

「…相談役。その、やっぱり阿頼耶識ってヤバイんですか?」

「危険性が完全に払拭されている訳ではないな。以前に比べると遙かにマシだが」

取敢えず今の所は以前のような施術失敗についての報告は無い。とは言えこういうのは万単位で治験しなければ解らないからな、安易に絶対なんて言うわけにはいかない。まあビルス達の献身のおかげで万一が起こっても治療出来るからそれ程深刻に捉える必要は無いのだが。

「だから新人に施術しないんすか?」

いんや?」

「阿頼耶識についてはあくまで個人の自由を尊重しているだけだ。本人の希望があれば施術するのも許可するさ」

俺が問題だと考えているのは阿頼耶識システムではなくて、子供が施術しなければ生きていけないという社会そのものとそれを許容する連中だからな。第一遺伝子治療やインプラントなんざ前の世界では当たり前前の技術だったから、むしろそれに忌避感を覚える方が難しい。

「だから彼等が受けたいと言うなら吝かじゃ無い。だが解っているのかね?」

俺はそう言っつてつい難しい顔になってしまう。その意図が伝わらなかつたのかザックは不思議そうな表情でこちらを見ている。いや、だつてさ。

「君たちはまだ半人前だから軽い業務と訓練で済ませているんだ。施術をしたら繰り上がりで業務に携わって貰うし、並行して訓練も行って貰う。正直かなりハードなスケジュールになるんだがね」

言われて初めて気付いたようにザツクが目を丸くする。おいおい
ウチは企業、営利団体だぜ？

「まあ若い連中のやる気に水を差すのも気が引ける。存分に頑張って
貰うとしようじゃないか」

俺がそう笑うと、釣られてザツクが引きつった笑みを浮かべた。

71. 善人の顔をした悪人はよりたちが悪い

「レギンレイズの改良か、つい先日配備が始まったばかりだというのに技術部門も大変だな」

「存外喜んでいるかもしれないぞ。MSと言う兵器が正しく使われる為の苦勞だからな」

手渡された資料を眺めながらそうガエリオが言うと、マクギリスが笑いながら応じる。その言葉にガエリオは肩を竦めて見せた。

「確かに、権力闘争やその監視よりは遥かにギヤラルホルンの本分たる仕事だな」

「それで、貴重な実戦経験者としてはどう思うね？」

言いながら資料を追い続けるガエリオにマクギリスが問いかける。教育課程においてMAを知識としては習得するものの、現在のギヤラルホルンでMAと実際に戦った者は文字通り数えるほどしかない。その中でもセブンスターズであるカルタ・イシユ、イオク・クジャソそしてボードウィン家の嫡男であるガエリオは優先して意見を聞き取られる立場にある。尤もそこにはセブンスターズの心証を良くしたいと言う感情も透けて見えるのだが、それで現場が望むMSが出るならば許容すべきだと三人の意見は一致していた。

「欲を言えばガンダムフレームと同様にツインリアクターにして欲しいが、難しいだろうな」

ギヤラルホルン内でエイハブリアクターの研究は進められているが、その歩みは遅々としたものだった。そもそもガンダムフレームに採用されていた当初ですらリアクターの並列同期稼働は難易度の高い技術であった事や、戦後の環境下においてMS自体が高出力のリアクターを要求しなかったために優先度が低かったのだ。

「研究は進められるだろうが当面はただの2基載せだな。生産性から考えれば仕方ないだろう」

「ああ、そうだったとしても遠距離での打撃能力は必須だ。それも真面に動ける機体であることが大前提だから、こうなるのも無理はない」

条約において禁止されているダインスレイヴであるが、ギャラルホルン内には相当数が保管されており、それを運用する専用のグレイズも存在する。ただし、これらは本当にダインスレイヴを撃てるだけという機体だった。まず左腕を発射器に交換しなければならぬ上にMSに搭載できるサイズに砲身長を抑えた弊害で大電力を消費する。このためグレイズに搭載されるリアクターでは発射時に全てのエネルギーを消費するので自走すら覚束なくなってしまう。それこそMAの認識圏外から周辺ごと耕すような戦法ならば運用出来るだろうが、今後想定されるMAの出現場所はもれなく民間人が存在するのだ。討伐のたびに被害を出してはギャラルホルンの心証悪化は避けられない。

「経済圏向けのグレイズはバッテリーを増設するのだったか？」

「運動性に関しては何とか地上でも自走出来る程度だそうさ。弾頭についても供給が制限される。MS相手に使うには難儀するだろうな」

「難しい所だな」

そう言つてガエリオは唸つた。突発的に発生すると予想されるMAに対し、初期対応可能な戦力を持つなど経済圏に要求したとして、ではその分の完璧なフォローがギャラルホルンに可能かと問われれば困難と言わざるを得ない。何しろ経済圏の抱える領域に対し、ギャラルホルンに属する人員が圧倒的に不足しているからだ。そもそも足りているならばこの様な事態になる前に掃海やMAの発掘をギャラルホルンが実施出来ていただろう。故にそれを可能にするならば装備人員共に大幅な増強が必要になる。だがそれを言い出すにはギャラルホルンは些か信用を失い過ぎていた。

「認定外部組織の件もバクラザン公とファルク公が難色を示している。ガルス様もだ」

「父上が？」

「MA討伐はギャラルホルンの本来の任務だからな。外部委託などせず人員配置を見直してでもギャラルホルン単独で当たるべき、と言うのがガルス様の主張だ。軍事的優位性だけを気にしている両公とは違うから安心しろ」

「そうになると旗色が不鮮明なのはエリオン公だけか？」

「ああ、クジヤン公がこちらについてくれたのは僥倖だったな」

「あれと戦えばそうもなる」

ガエリオは顔を顰めつつそう口にした。周辺の資源を貪りながら無尽蔵に増え続け、そして只管人間を襲う。MAは襲う相手を区別などしないが、それでも逃げる人間側に経済や力の優劣が存在する以上、必ず弱い者達から犠牲になる事は明らかだ。それが許容出来るほどイオク・クジヤンと言う人間は腐っていない。当然ガエリオもだ。「では同じ意見の者として君にも一肌脱いでもらうとしよう」

そう言うときマクギリスは手にした端末を操作し、データをガエリオへと送る。

「…おい、マクギリス。お前、俺の事を便利屋か何かと勘違いしていないか？」

送られてきた改良機のテストパイロットへの着任指示を見て、ガエリオは胡乱な目でマクギリスを睨む。睨まれたマクギリスは気にした風も無く笑いながら答えた。

「カルタは火星支部、クジヤン公はアリアンロッドに戻っている。現状手が空いているのは君だけだ。エリオン公の所から例のお嬢さんが参加しているようだが、立場のせいかな技術者との折り合いが悪い。残念ながら一朝一夕で意識は変わらないからな」

親友の言葉を聞き、ガエリオは深々と溜息を吐くのだった。

「お、甘いな」

社長室の隣に設けられた談話室。茹でたコーンにマルバと二人で噛り付く。

「市販されている食用の奴だからな」

サクラ女史の所で作られているバイオ燃料用のものは収量が多い分食味は落ちる。食えない訳ではないが、やはり食用に品種改良を続けられたものには敵わない。

「幾つかの畑でこっちを栽培して貰えばどうだ？」

そうマルバが言うが俺は頭を振る。なんでもコーンは非常に交雑しやすい種らしく、数百メートル程度の距離では余裕で交雑してしまうそうだ。すると収量が半端で味も大して良くない微妙な物だらけになってしまっただとか。ちなみにこいつは第三演習場の輪作で作られたものだ。

「世の中思い通りには行かねえな」

マルバはそう言っ手の中のコーンに視線を落としながら言葉を続ける。

「ハティに関して正式に保有制限がかかった。2台までだよ」

「その辺りは外部委託の件がどうなるかだな。正直それまで保有禁止になるかと思っただが」

「制限に譲歩するから大人しくしてろってこっただろうさ」

「ふむ…、甘いな？」

コーンを弄びながら、俺は口角を吊り上げる。

「あんだだけ印象的に見せられりゃあな。おかげで全く警戒されてねえ、確認の一言も出なかつたぜ」

そう言うマルバは愉快そうにコーンへ囓り付く。

「所詮ロディフレームの改造機だからな。自力で新型を開発できる彼らにすれば取るに足らんのだろうさ」

まあそう見えるように演出したわけだが。ハティが早い段階で制限、あるいは禁止される事は容易に想像出来た。何せ改善点は多く残しているが、ダインスレイヴ以上の火力を叩き出せるのだ。明らかに条約の抜け道を突いたこいつの存在を許容してしまつたら、今後の地球圏は大いに荒れる事になるだろう。だから一度見せれば絶対に取引が出来る手札だった。

「MSの保有に関しちや要求通り緩和するってよ。全くありがてえ事じゃねえか」

「増やすのは慎重に、だがな」

保有できる枠が増えたからと言って、即座に補充しては確実に怪しまれるからな。

「しかし、本当にスコルにや見向きもしなかつたな」

「あれは一見すればただのバランスの悪いマン・ロディだからな。尤も彼らにもう少しMSに関する工学知識があれば別だったかもしれない」

強引な改造でトップヘビーになった機体は従来の機体より安定性に乏しく、追加した武装のせいで遠距離性能は向上している反面エネルギー供給が不安定になっている。射撃が決定打にならないMSにとってそれは改悪以外の何物でもないだろう。これで完成ならば。

「予定外の仕事も終わったし、本格的にミカツキとアキヒロにはスコルの調整をしてもらう。1号機と2号機の換装は完了しているからな」

「バルバトスとグシオンはどうする？」

「二機とも一度オーバーホールをしたいな。問題は頼む相手だが」

「テイワズしか居なくねえか？」

マルバの疑問に俺は素直に打ち明ける。

「カルタ嬢から今回の一件に関する補償と言う形で機体の整備について個人的に打診が来ている。穿ってみればガンダムフレームの情報が必要なのかもしれないが」

俺達が知っているギャラルホルンのガンダムフレームはガエリオ君の乗るキマリスだけだ。対MAに向けて戦力を拡充するなら、過去の実績品を精査したいという話が出てきても不思議ではない。それにウチの機体なら万一壊してしまったても金で黙らせられるからな。セブンスターズの持ち物ではそうはいかんだろう。

「お前としてはどう考える」

「変に断れば要らん疑心を植え付けかねん。だから出すべきだろう。ただし一機ずつ、グシオンからだ」

アキヒロには悪いが、万一の時手元に残しておくならばバルバトスの方が優先だ。それにギャラルホルンに機体を預けるならパイロットも連れていかれる可能性が高い。制御モーションの制作はミカツキの方が適任だから、出来るだけ拘束されるのも避けたい。

「アキヒロにやあ苦労かけるな」

俺の意図を悟ったのか、マルバが溜息を吐く。

「せめて出張費は奮発してやってくれ。他に何かあるか？」

言うべき事を言い切ったのでそう俺が聞くと、マルバは何とも言い難い表情で口を開いた。

「ああ、一つある。あの騒動でテイワズが世話になったつつつて礼がしたいとよ」

「ほう」

俺はそう言って思わず身を乗り出した。地球と取引をしているテイワズは植物なんかも観賞用として持ち出しを許可されている。先日はその伝手でテキラリユウゼツランを仕入れてもらい、現在絶賛培養中である。目指せセルフテキーラ。

「MSを一機、くれるってよ」

「それは剛毅な事だな」

途端興味を失って俺はコーンへ齧りついた。老いたな、テイワズ。顧客の欲する物も解らんとは。

「…例の、一緒に埋まっていた奴だ」

その言葉に俺は手にしていたコーンを落としてしまう。え、マジで？

72. 努力が報われるとは限らない、しかし報われる者は皆努力している

「良いんですか、叔父貴?」

積み込まれるMSを眺めながら名瀬・タービンはそう隣で手すりにもたれかかっている男に問うた。

「あ?良くなかったら渡さねえよ」

啜っていた葉巻を吸い、紫煙を吐き出しながらジャスレイ・ドノミコルスはそう返事をする。歳星に存在するテイワズのMS工廠、そこから運び出されているのは先日火星で発掘されたガンダムフレームだ。

「好事家にでも卸せば幾らか補填になるでしょう?」

「守銭奴の俺らしくねえってか?」

「そういう訳じゃ」

「顔に書いてあるんだよ、もうちょつと腹芸くらい覚えろってえの」

そう言いながらジャスレイは葉巻の火を消し懐にしまう。そして件のMSを横目で見ながら名瀬へと向き直るとしつかりと見据えて口を開いた。

「今回の一件でアドモス商会にやでつかい借りが出来ちまった。パーンスタインのお嬢さんはまだいい、儲けさせれば返せるからな。問題はCGSの連中だ、アイツ等にはMAの破壊って言うんでもねえ尻拭いをさせちまってる」

「けどそれはギャラルホルンの要請あつての事でしょう?正直そのままで叔父貴が気を遣うつてのが腑に落ちない」

「おめえはホント嫌な野郎だな」

半眼になって睨みながら、ジャスレイは溜息と共に心中を語る。

「まあ間違っちゃいねえけどな。すつかり仲良くやって忘れてるみてえだが、連中はちゃんと損得勘定が出来て、得の為ならギャラルホルンにも喧嘩が売れる奴らなんだぜ?そしてその得つてのは商売人ともやくざモンとも違う基準ときていやがる。今回の件でいやあ、

連中からすれば俺達がどれだけM Aを掘り起こしちまった事に責任を感じているかを態度で示す必要があるんだよ」

頭を掻きながらジャスレイはそう説明する。現在比較的友好的な関係にあると言えるC G Sとテイワズであるが、それはあくまでビジネス上での事だ。得られる利益よりもテイワズが自分達の目的に対して障害になると判断すれば、彼らは躊躇なく敵対するだろう。それはある種商人に通じる酷薄さであるが、それを強力な暴力装置が有していると言うのだから始末が悪い。それに加えて判断基準が自己の物的金銭的な利益でなければ権力や名声でもない、見ず知らずの誰かの幸福であると言うのだからジャスレイにしてみれば頭を抱えたくないような話である。経済と言う最低限の共通言語が存在していなければ、今頃テイワズは連中に食い殺されていただろう。

故にジャスレイは誰かを傷付けてしまいかねなかつた事態を未然に防いでくれた事に対し感謝を伝え、そしてそのような状況を招いた事を反省しているとC G Sに強くアピールする必要があると考えていた。

「ま、そんなに悪い話でもねえさ。こつちが仲良くしようとしていればあつちも無下にはしねえよ。逆鱗に触れでもしねえかぎりな」

地球と火星間のサルベージは順調に進んでいるが今後この規模が拡大しアステロイドベルト、更には木星を超えた宙域へ拡大する事は明らかだ。それは長期の経済活動になる事は間違いなく、同時に今回のような危険を多く孕んだ内容となるだろう。その時の為にM Aの討伐経験を持つ武装組織と懇意にしておくことは重要であるし、彼らの戦闘能力が向上する事は決してマイナスではない。後は敵対しないよう慎重に立ち回るだけの事である。

「その点でいやあ、ゴルドンの所とは距離を置いておくべきだろうな。年のせいかな、近くに何かあるのかあの爺良く見えなくなっていやがる」

2カ月程前にあつた会合の席を思い出し、ジャスレイは皮肉気に口角を上げた。口先ではあれこれ言いつつも自己の利益を最優先とした言動。揚げ足を取られた事で話自体は無難な着地を見せたが、その

後の態度から全く納得していない事は火を見るよりも明らかだった。
(まるで解つてねえ。ま、無理もねえ話か)

ノブリス・ゴルドンの取引相手は多岐にわたる。商人、ギャラルホルン、思想家、犯罪者。彼らと渡り合い財を成して来たという実績があればこそ、それらに通用した手法でノブリスはCGSにも臨んでいる。だがそれは大きな誤りだとジャスレイは考える。何故ならノブリスが相手にしてきた者は一様に、自己の経済的利益を至上とする者達だからだ。だから彼は、経済よりも自己の主義主張を優先する者を愚かだと切り捨てるし、ましてや損失を被つてでも何かを成し遂げようとする人間が理解できる日は永劫にこないだろう。故に近い未来、ノブリスが彼らの逆鱗に触れるとジャスレイは確信している。

「それなりに良い商売相手ではあったんだがな」

さして惜しむことなくそう口にするジャスレイを名瀬は複雑な表情で見つめていた。

アキヒロ・アルトランドは努力の人である。幼少の頃、不幸にも海賊に襲われ両親を失い弟と共にヒューマンデブリとして売り払われた彼は、しかしその境遇に絶望せず自らを鍛え生き延びた。奇跡的な幸運により二度の阿頼耶識手術に成功した彼であるが、その同僚には文字通りの天才が存在した。

ミカヅキ・オーガス。

常人よりも遥かに短期間で物事を習熟し、使いこなす彼は更に三度の阿頼耶識手術に成功してみせる。背格好こそ小柄で細身だが、その肉体は余計な無駄をそぎ落とした肉食獣のそれに近い。そこに人間でも類まれな器用さが加わるのだから、戦いにあつて正に神がかった活躍をしてみせる。

「ふっー」

身長の倍、普段扱っている長槍と同じサイズに切り飛ばした鉄棒をアキヒロは振るう。既にその回数は100を超えていて、体からは滝のように汗が流れている。しかし適当に布の巻かれた穂先は彼の腕

の動きに合わせ、ぴたりと止まる。

「しっ！」

すぐさま振り上げ、再び振り下ろす。愚直に繰り返されるそれがアキヒロの日課になったのは、彼がガンダムフレーム、今の愛機であるグシオンを任せられるようになってからだ。当時グシオンを任せられることはアキヒロにとって大きなプレッシャーでもあった。3番隊においてミカヅキに次ぐ実力を持っているという自負はあるものの、それは他者より多く施術された阿頼耶識システムの恩恵であるという気持ちが強かったし、何よりMSの技量に関して間違いなく自分より上だと思える人間が近くにいたからだ。尤も、彼をグシオンのパイロットに推薦したのはその男なのだが。

「俺がこいつのパイロットですか？」

テイワズによつてレストアされ、ガンダムらしい姿に戻ってきたグシオンを前にそう告げられた時、アキヒロは思わず問い返した。体力には自信がある、阿頼耶識システムの分、ほかの3番隊や1番隊の面々より多少は上手く使えるだろう。だがそれだけだ。自らを苛め抜いているからこそ、アキヒロは誰よりも自身が凡人であると自覚している。様々な武器を使いこなすような器用さはないし、かといって何か飛びぬけた才能を持つわけでもない。だから他よりも高性能なこの機体を扱うならば、相応しい人間が別にいると考えたのだ。

「やはりここか」

「どうしたんです、相談役？」

声に対して手を止めずにそうアキヒロは聞き返す。

「ちよつとした予定の変更があつてね、その連絡だ。例のギヤラルホルンでのオーバーホールの件だが、先にテイワズから貰った機体を送る事にした」

ギヤラルホルンからの厚意をそのまま鵜呑みに出来るほど彼らは心を許していない。無論カルタ・イシユーやガエリオ・ボードウィン、そしてマクギリス・フアリドやイオク・クジャンといった個人の善性や好意を否定しないし彼らに好感も持っているが、それと彼らの所属する組織が自分たちにとって友好的であるかは全く別の問題である

からだ。そして胡散臭いからといって安易に拒絶できないこともアキヒロ達は十分に承知している。

「パイロットは誰が乗るんです?」

「シノだな。ハティを取り上げられて拗ねているから丁度良いだろう」

相談役の言葉にアキヒロは苦笑を浮かべる。他のMSパイロットに比べシノの技術が突出していることはないが、その中で一番愛機と呼ぶ存在に強い執着を見せていた。その意味でシノが選ばれるのは適任と言えるだろう。他の面々はMSに対してあくまで道具という接し方であるし、1機のMSをローテーションで乗っている都合上、極端に性能や性質の異なる機体が存在すると、操縦感覚に狂いが出る可能性があるからだ。特に今回送られてくるガンダムフレームは随分と変わり種だと言うから、専属パイロット、それも喜んで特別な機体に乗るような人間が適している。

「ところであの機体をギャラルホルンに見せて良いんですか?」

300を数えたところでアキヒロは残心を解き、相談役に向かってそう問いかけた。譲渡されるガンダムフレームについては既にパイロット全員に資料が開示されている。だからその機体がダインスレイヴを運用可能な機体である事も知っていた。

「どうせリアクターの波形でどんな機体かはすぐに露見する。隠し続ける訳にもいかんからな。ならば先に見せておいたほうが余計な腹を探られずに済むというものだ」

それにダインスレイヴなど大した武器ではないからな。そう続けで悪い笑顔になる相談役を見て、アキヒロも笑った。禁止条約が施行される程の兵器を大したことはないと言い切る事も大概であるが、事実それを超える兵器を準備して見せるのだから目の前の男は厄介である。そして武装面で互角になってしまえば、後のことは今のCGSならばどうとでもなってしまう。

「本来の務めを果たすのに必要だというならば相応に協力は惜しまんさ。幸い次の世代は割と真面目な様だしね」

「下手に隠してカルタさん達に迷惑をかけるほうが良くないってこと

ですか？」

「せっかくこちら側に傾いている天秤だ、どうせなら精々利用させてもらおうじゃないか。まあ邪魔になつたらぶつ壊すが」

平然と言つてのける男にアキヒロは浮かべていた笑顔を引きつらせる。普段は他者の攻撃的な発言を諫める事が多い相談役であるが、その内面は誰よりも過激だ。そもそも彼が注意するのは短絡的に暴力を行使することであつて、十分に検討を重ねた結果武力的解決に達する事を否定していない。それは常にギャラルホルンと敵対する準備を整えている事からも明らかだ。

「そういう訳で悪いがアキヒロ、シノの代わりに新人達の訓練を受け持ってくれ」

その言葉にアキヒロは首を傾げた。

「そりゃ構いませんが、俺でいいんですか？」

新人達の訓練は入社当初からシノが面倒を見ていたから、だから誰が言ったわけでもないが新人の担当はシノだという認識が社内には出来ていた。加えて最近では、指導の仕方も板に付いているようにアキヒロには見えたための発言でもあつた。

「寧ろアキヒロでないと困る。シノには最終的に彼奴らの指揮を執らせるからな、恐れられすぎても支障が出る」

相談役の言葉にアキヒロは納得する。部隊長には部下を納得させるだけの実力も必要であるが、同時に頼れる存在でなくてはならない。恐怖だけでまとも上げた戦力はそれ以上の恐怖を前にすれば簡単に瓦解するし、何よりも指揮官に対し意見具申が困難な環境は思考の硬直化に繋がる。

「何よりそうやって愚直に鍛え続けられるお前は、誰よりも連中の気持ち解るだろう？」

アキヒロは間違い無くCGSにおけるエースの一人だ。しかし彼が才能に恵まれていたかと言えば、誰もが否と答えるだろう。そしてそれを誰よりも理解している彼自身が、相談役のその言葉に口角を吊り上げると、目の前の男に向かって口を開く。

「凡人の俺じゃ、あれこれと使い分けるなんて器用な真似は教えられ

「ませんよ？」

「使い分けが出来んと言うなら、何とでも戦える一つを極めれば良いだけだ。凡人の我々にはその位が身の丈に合っている。幸い、それを成した前例も居るんだ。存分に頼らせて貰うさ」

そう言つて相談役は笑う。後にアキヒロによつて鍛え上げられた新人達が特徴的な紅い槍を携えて戦場を駆ける事になるのだが、それはまだ暫く先の事である。

73. 正しい行動が最良の結果を招くとは限らない

エドモントン近郊、かつてのエドモントン事件の際に鉄華団が拠点とした旧鉄道駅は現在CGS地球支部の社屋として使用されている。そのオフィスにてトド・ミルコネンとビスケット・グリフォンは向かい合いながらタブレットの内容にため息をついた。そこに小脇にタブレットを抱えてロッド・ミライが入ってくる。

「失礼、今日の日報を持って来た。どうしたんだ、二人とも？」

二人の様子に怪訝な表情を浮かべたロッドがそう問えば、二人は何とも言い難い笑顔で口を開く。

「先日から打診があつた宇宙空間での教導の件。本格的に考えてくれつつアーブラウから連絡があつてね。どうもギャラルホルンの方も承知してるらしくって断れそうにねえんだわ」

「にもかかわらず事務員の増員は当面無いと本社から連絡が、ふ、ふふ。死にます」

その様子にロッドはため息をつく。夜明けの地平線団壊滅後、彼らにクーデリア・藍那・バーンスタイン暗殺を依頼したとして活動家団体テラ・リベリオスはギャラルホルンによって拘束されることとなった。とは言え捕まったのは代表を含む主要人物数名であり、その他多くの構成員は解散させられるに留まった。ところがその事で困窮する者が現れる。彼らに金銭で雇われていた事務職員達である。雇い主が捕まった以上、彼らの給金を保証してくれる存在はいなくなつたわけだが、クーデリアを暗殺しようとしたという悪名だけはしつかりとついて回ることになった。結果彼らは働き口どころか再就職先にも困ることとなり、見かねたCGSが受け入れる事となる。そのおかげで地球支部でも念願の事務員増員が叶い、漸く安定した組織運営が出来ると喜んでいたのがほんの3か月前の事である。

「MAの衝撃は大きいな。かといって経済圏全体が動き出してしまっている以上、ここで宇宙開発から手を引けないか」

問題の発端はロッドが口にした通り火星で発掘され再起動してしまつたMAだ。300年続いた平和に閉塞感を覚え文明再建を題目

として宇宙の再開発に乗り出した人類に対し、それは自らが未だ戦後を脱していない事を強く印象付けた。そしてそこで止まれるような生物ならば人類は厄祭戦になど突入していなかったと証明するように、各経済圏は再開発の停止よりも障害排除の為の力を望んだ。

「各経済圏の戦力保有に対する規制緩和がこうなると裏目に出ていますよ」

最低限の治安維持からギャラルホルンを切り離すことで、各経済圏との癒着を是正する。そして相互監視しうる戦力を経済圏が確保することで、ギャラルホルンそのものの暴走を抑制するのが規制緩和の当初の目的であった。そしてその目論見は成功していたように彼らには思えた。各経済圏はギャラルホルンに支払っていた莫大な駐留費用から解放されると共に、時には警察機構すら上回る強権を有していたギャラルホルンがいなくなったことで、贈賄や癒着によって歪められていた経済活動は相応の健全性を取り戻すことになった。尤も自らがMSを運用する事になったことで、MS運用のスペシャリストであるギャラルホルンの軍事的な存在感は陰るどころかむしろ増したのだから、この手を考えた人間は間違いなく政治的判断に優れているといえるだろう。問題はMAが出現することを全く想定していなかったということだが。

「最低限の治安維持にMAに対する初期対応が含まれるのは完全に想定外だろうな。そんなものが予測できていたら最初から駐留戦力の引き上げなど言い出さな」

今でこそ治安維持組織としての性格が強いが、そもそもギャラルホルンは人類をMAの脅威から守る為に編成された組織である。脅威が残存し、かつ突発的に発生すると解っていて自身の対応能力を低下させるような選択は普通に考えれば採らないし、それどころか他者に任せるともつての外だ。

「むしろ再配備に関しちや経済圏側がゴネたつてのが正解だろうね。一度手にした武器を手放せるのはよっぽどの聖人かただのバカだ」

トドがそう皮肉気に笑う。その様子にロッドはため息を吐くが否定しなかった。無理もない、事実経済圏は言葉通りの態度であるし、

彼の古巣もあれこれと理由をつけてはいるが結局のところ自らの戦力が低下することは最小限に留めている。各地から引き揚げられた戦力にしても当然解散したわけではなく、再編され各部隊に再配置されているだけだ。そんな自分たちにはどうにもならない事をロッドはひとまず放り投げ、質問を口にする。

「宇宙での教導と言うが、拠点はどうする?」

「港湾施設はアーブラウのもの借りる事になりますね、艦に関してはこちらはシラヌイを、向こうはテイワズから購入した改造艦を使う予定です」

急速に進んでいる宇宙開発によって必要となる物資は経済圏内だけで賄いきれるものではなく、結果的に圏外圏と呼ばれていた地域との流通を拡大させた。当然その恩恵は火星にも波及しており、それによってCGSも多くの利益を上げている。そうした観点からすれば、彼らもこの状況を継続させるべき人間の側と言えた。

「出来ればMSの方は追加できませんか?地上と宇宙ではセッティングが違う」

「今ある機体のうち1個小隊分を転用しようと考えていましたが、それでは問題ですか?」

怪訝そうな顔で聞いてくるビスケットにロッドは顔をしかめつつ近づき、耳打ちをした。

「アーブラウ防衛軍の動きが活発になっている。最悪厄介なことになるかもしれない、その時のために地上の戦力は減らしたくない」

「まさか戦争になるとでも!?!」

驚きの声を上げるビスケットにロッドは表情を崩さぬまま続ける。「少なくともアーブラウ側にその意思は薄い。だが他の経済圏はそうでもない」

「そんな、せっかくこれから…」

「だからだよ。このまま発展していくとして、既に圏外圏と強い繋がりがあがる上に軍事的にも悪意にしているアーブラウを放置すれば独り勝ちになっちまう。なら、まだ手が出せるうちに殴っちまおうって寸法さ」

二人のやり取りにトドがつまらなそうに口を挟む。

「自力じゃ勝てないから足を引っ張る。ま、解りやすい手だわな。しかもロッドの旦那がそう言うってこたあ、相手はSAUかい？」

「可能性が一番高いのはな。そこは旧世紀の頃に開発が進んでいた分、ほとんど鉱物資源を国内で確保出来なくなっている。再開発で後れを取れば間違いなく4大経済圏という枠組みから脱落するだろう」

だがそれ以外も決して順調とは言い難い。アーブラウ代表である蒔苗氏個人との繋がりが強く、協力関係にあるオセアニア連邦がアフリカユニオンと対立を深めているからそこから飛び火しないと言う保証はないし、万一再び蒔苗氏が失脚でもすれば、協力しているオセアニア連邦とてどのようななかじ取りを行うかは不透明なのだ。CGSからすれば迷惑以外の何物でもない他人事であるが、相手がどう考えるかは別問題だ。

「とにかく最悪も想定しておくのは必要だろう。存外それが抑止になるかもしれないな」

『どうだ、アイン？』

漆黒の宇宙に複雑な光跡を引きながら駆けるアインの元にそう通信が入る。

「シユヴァルベに比べれば遥かに御しやすいですね、ただし加速が重い気がします」

スロットルを素早く操作しながら、随伴する機体に向けてそう返事をする。

『仕方がないな、装備を追加している分どうしても機体の重量は増加する』

「はい」

返される苦笑にアインは素直に頷いた。ベースとなったレギンレイズが良い機体である分欲が出てしまうが、ここから推力を向上させるとすれば神経質な機体になってしまう。隊員の平均的な技量を考えればこの辺りが妥当だろうとアインも考えた。

『よし、では模擬戦に移るぞ!』

「はっ!」

上官の言葉に短く答え、機体をさらに加速させる。既に対戦相手は目視できる距離に迫っていた。

『マクギリスの奴、張り切っているな?』

愉快そうな声音と共に後方から上官、ガエリオ・ボードウィン三佐が搭乗するガンダムが加速しながらそちらへと突っ込む。

『ふっ、滾っているのはどちらだ?ガエリオ?』

迎え撃つのは白を基調とし、美しいコバルトブルーの差し色で彩色されたガンダム。その手には金色に輝くロングソードがそれぞれ握られている。

『こちらも行くぞ』

そしてその横に居た流麗なフォルムの青いMSはその身に似合わないバスターソードを両手持ちに構え、アインへ向けて突撃を開始する。この戦場において唯一遠距離攻撃能力を有しているアイン機の有利を潰そうという魂胆だろう。だが当然その様な事態は想定済みだ。

「ふっ!」

機体を大きく振ることでアインは加速方向を急激に変える。追従するように青いMSが進行方向を合わせるが、そのおかげで両機の速度は鈍る。そしてその一瞬を逃すことなくアインは機体背面に装備された武装を起動する。

『っ!厄介な!』

青いMSは即座に回避を選択する。当然だろう、元の兵器より随分と大人しい性能になったとは言えこの武装はMSの装甲程度なら容易に破壊しうる。その威力を担保するために弾速も尋常ではなく、狙いを定めてしまえば回避することはまず不可能だ。尤もこうした腕の良いパイロットの駆るMS同士の巴戦では、その狙いを定めることが困難であるのだが、それでも向けさえすれば牽制になるのだから十分価値がある。

「とは言え、これは中々!」

相対する青いMS、ヴァルキュリアフレームのそれは新鋭機であるレギンレイズと比較しても遜色ない運動性を誇っていて、むしろ加速性では勝っているほどだ。だが速度に特化させた機体はその分扱いが難しく、阿頼耶識を持たないパイロットが十全に動かすことは極めて困難であるはずだった。

『易々と負けるわけにはいかない!』

的を絞らせない細やかな動きを交えつつ青いMSが迫る。まるで人間のよう。否、協力者達によって正しく人間と同等の制御プログラムを手に入れたヴァルキュリアフレームは、機体の持つポテンシャルを完璧に引き出している。その動きは以前火星で相対したガンダムに勝るとも劣らない。

「それでも、負けられない!」

ブリュンヒルデ・リヴァイヴ、厄災を打ち払うために再び誕生したギヤラルホルンの新たな刃。怨敵の心臓を刺し穿つ魔剣を携えたギヤラルホルンのこれからを先導するこの機体をアインに預けてくれた上官の思いにこたえるためにも、そして出自や思想で立場が決まる古きギヤラルホルンに対する楔となるために、アインは気炎を吐く。手にした長槍を振るいヴァルキュリアフレームの姿勢を崩す。機体を操っている石動・カミーチエ二尉は重量武器を得意とするパイロットで、軽量高速なヴァルキュリアフレームとは相性が悪い。それを考えれば猶更負けるわけにはいかなかった。

『ぐっ!?!』

質量差という覆し難い力をもってブリュンヒルデはヴァルキュリアフレームを吹き飛ばす。姿勢が崩れたまま蹴り飛ばされては、さしもの制御プログラムも追いつかない。そんな相手をアインはガンカメラで捉え、素早くトリガーを引いた。

『お見事』

この模擬戦の1週間後、ギヤラルホルンより正式に各経済圏へ向けでダインスレイヴ運用型レイズが支給される事となる。それがどのような変化を世界にもたらすのか、まだ誰も知らない。

74. 物事を悲観的に捉える人間は心を病みやすい

「ギャラルホルンも随分と詰まらない組織になり果てたという所ですか」

届けられた機体を睨みつけながら、カルタ・イシユウはそう零した。白を基調としコバルトブルーの差し色、そして両肩はイシユウ家を象徴するように赤く染められたガンダムフレーム。その姿はかつて世界を救った英雄、アグニカ・カイエルの搭乗した機体に酷似していた。「万の言葉よりも一つの姿の方が雄弁に物を語りますな。ご老体達も必死なのでしょう、まがい物で着飾らねばならぬ程度に」

横で眺めていたコーリス・ステンジャがそう評する。彼の言葉通り、カルタの目の前に鎮座するその機体は英雄の乗機であったガンダムバエルの紛い物であった。外見こそよく似せているがフレームそのものはレギンレイズフレームを弄ったものであるし駆動系もそれに準じている。当然阿頼耶識システムは未装備だ。唯一ツイン・リアクターシステムを踏襲しているが、リアクターを同調させるために大幅なリミッターが設定されているため、その出力は従来のガンダムフレームに遠く及ばない。さらに頭部をガンダムに寄せたために光学センサーの性能が低下しているなど、むしろ一部の性能においては量産機であるブリュンヒルデに劣ってすらいる。

「これで整備の手間までかかっていたら突き返すところでした」

ギャラルホルンの新たななる象徴として、セブンスターズの当主全員に配備された新しい時代のガンダムフレーム。MAの脅威に対抗できるのはギャラルホルンであるという、実に安直なプロパガンダだ。当然大真面目に使うなどと考えている方が少数派で、性能に不満を漏らしているのは今のところカルタとイオクの二人だけだ。その代わり多くのパーツはレギンレイズと共通であるため整備面の不安は少ない。

「ルシフェル、でしたか？この程度の機体に随分と大仰な名前をつけましたこと」

「名には相応しい責任が付きまといます。大任ですな」

「コーリス、貴方楽しんでるでしょう？」

半眼でカルタがそう問えば、コーリスは視線を下げ喉で笑って見せた。

「申し訳ありません。ですが少し嬉しくもあるのです。まだギャラルホルンは自らの正義を忘れてはいないのだと思えますので」

「ただ意地を張っているだけかもしれないのだと思えますよ？」

「それこそが重要でしょう。誰かを守る意地が張れなければ、我々はならず者と変わりありません」

平然と言い切る部下に彼女はため息を吐く。CGSと交流する事を望んだのは自分だが些か部下たちには刺激が強すぎたかもしれない。すっかり汚染されて同じ様なことを嘯く様になった副官を見てカルタはそう思った。

「暫くは機体の慣熟に努めます。ブリュンヒルデ隊も選抜組が慣れるまでは固定に、それとCGSに訓練の要請をしておいてください」

「承知しました」

副官の返事を聞きながら、カルタは再びルシフェルを見上げた。その姿に言いようのない不安を感じるが、それを表には出さず、無機質な双眸を彼女は見つめ続けた。

「また暴動だと？ 今月に入って3件目だぞ」

送られてきた報告を読みながらイオク・クジャンは首を傾げた。リアンロッドに復帰後、再び分艦隊を任された彼であるが、その規模は以前よりも大きくなっていった。その為分艦隊全体で動くことはせず、複数の指揮官に更に小分けにした艦隊を預けパトロール艦隊として各コロニーの巡視を行わせているのだが、そこから上がってくる報告書に彼は疑問を覚えていた。

「今度はオセアニア連邦のコロニーですか」

横から報告書を覗き込んだジュリエッタ・ジュリスがそう口にする時、イオクは顔をしかめた。

「パトロール艦隊を編成して巡視の頻度も上げていると言うのに、何

故こうなる?」

「それは、まあイオク様が真面目に働いているからではないですか?」
「馬鹿にしているのか、真面目に働いているのに何故暴動が増える?」
「簡単な話だと思いますよ。ギャラルホルンが真面目に巡視をしているから、安心して暴動が起こせるのでしよう」

ジュリエッタの発言にイオクは目を丸くする。そんな彼にかまわずジュリエッタは言葉を続ける。

「以前とは違って、各コロニーには経済圏の軍が駐留しています。つまり暴動に一番最初に対応するのは彼らな訳ですが」

彼女の言葉で理解したイオクは顔を顰めた。軍の行う鎮圧は当然暴力を伴う。そして暴動を抑止するのに効果的な手段として、反抗した者を惨たらしく殺すと言う方法がある。逆らえば酷いことになるというのを見せつけることによつて他の反抗心を折るのだ。行動前の過剰な武力行使に対し監視する事はできても、発生し終わってしまった鎮圧に対してギャラルホルンが行える事は無い。MSの運用に対し警告する権限はあつても、国内で発生している諸問題に注意や自らの意向を伝えることは内政干渉とみなされるからだ。

「滅茶苦茶ではないか」

額を押さえイオクはため息を吐く。自国の軍隊から身を守るためにギャラルホルンを利用する。そうしなければデモすら命の危険が伴うなど凡そ健全な国家運営とは言えないだろう。

「それともう一つ気になる事があります」

「武器の出所、だな?」

報告書を睨みながら幾分声を落としてイオクはそう応じた。

「幾ら安価だと言つてもこの所押収しているモバイルワーカーの数が多すぎます。そして」

「その殆どはテイワズ製の戦闘用だ。作業用を改造したものの方が少ない。実にわざとらしいではないか」

テイワズは圏外圏におけるモバイルワーカー製造の最大手であり、特に戦闘用についてならば独壇場と言つてよい状態だ。黒い噂も絶えず、事実非合法的な輸送や後ろ暗い経歴を持つ者も多く所属している。

そして圏外圏の情勢がある勢力によって急速に安定へと向かっている現在、そのドル箱であった軍需関連が急速に冷え込んでいる。そう、圏外圏では。

「アーブラウとオセアニア連邦という大口の顧客を抱えているティワズが反体制派の組織に武器を供給？地球圏に火種を蒔いたところで手に入る儲けは僅かで失敗すれば大火傷では済まされん。その程度の勘定が出来ない馬鹿だと思っているのか、それとも」

「我々の目が節穴だと思っっているか、ですね。いい度胸です」

全く目の笑っていない笑顔でジュリエッタがそう呟き、イオクも口角を吊り上げる。

「各コロニーに出入りしている業者のリストを検める。おそらく愉快なものが見られるだろう」

そう計画を立てながら、イオク・クジャンは表情を引き締める。そこには抑えきれない怒気が宿っていた。

「弱者を食い物にし、挙句災禍を蒔こうなど、このイオク・クジャンが許さん」

「どうにかならないか？」

『するとなれば、相当に手荒い方法になる』

通信相手の言葉に、ラストル・エリオンは小さくため息を吐いた。彼の技量は疑うべくもない。そんな人物が手荒いと言うのだから、今その手段で止めたとしても、いずれ今回の歪みが別の形で噴き出す事になるだろう。

『長年のツケが回ってきたな』

通信相手は自嘲気味に呟いた。元々彼に頼んでいた仕事の大半は火付け役。小競り合いで経済圏が疲弊しない程度にガス抜きを行いつつ、それをギャラルホルンが仲裁する事で影響力を確保する。その仕事は最後のほんの一押しを行うことであるが、それだけに事前に大きな流れを止める事は不慣れだった。

「SAUは本格的に軍事行動を起こすつもりなのだな？」

『圏外圏との繋がり、特にCGSがアープラウ寄りなのがいかん。：連中はオセアニア連邦からのオファアースら断っているからな』

アープラウが最大ではあるものの、テイワズは各経済圏とも取引を行っている。対してCGSはそのテイワズと互角と目されるだけの戦力を保有しながら、未だにアープラウとのみ契約を結んでいる。内情を知るものからすれば後方人員の不足が原因でオファアースに比べられないというだけなのだが、アープラウが巧みに情報を操作しているため、他の経済圏からは完全に蜜月だと認識されている。ラスタルが通信相手、ガラン・モツサを通じて情報を流しているが効果は芳しくない。

「CGSからすればたまったものではないだろうな」

『ああ、大口とは言うもののCGSにしてみればアープラウは絶対の相手じゃない。インストラクター以外の業務を請け負っていないのが良い証拠だ。まああれだけの戦力だ、そこまで冷静に見ることができるやつらは少ないだろう』

彼らが鉄華団と名を偽り、ギャラルホルンを相手取って大立ち回りをしたことは記憶に新しい。そしてアープラウを除く経済圏は、敗北したギャラルホルンの更に落ちこぼれて追い出された様な連中が教導しているのだ。MSの性能と供給量こそ辛うじて互角と言いつ張れるが、肝心のパイロットが決定的な差となっている。その上教導用とは言えMSそのものもCGSは持ち込んでいる。

「これ以上待てば戦うことすら不可能になるか」

『宇宙用の演習名目でMSを増やしたのが決定的だ。強硬派は今後も理由をつけてCGSが戦力を運び込むと主張している』

「そちらが不穏な空気を出しているのが原因だろうに」

『人間は大なり小なり他者に不幸の原因を求めたがる生き物だ。誰でもお前のように強くは生きられん』

「……」

その言葉にラスタルは沈黙で応じる。強者としての振舞いを自らに課してきた自覚があった。それはつまり、彼自身もそうした弱い人間の一人であるという証左である。故に自らの窮状を誰かのせいに

したいという思考はよく理解できた。だが、それに共感し許容するかは別問題である。

『だからと言って、ここでCGSにアープラウと心中して貰うわけにはいかん、と言ったところか?』

「その通りだ」

ラストルにしてみれば、折角圏外圏に出来たテイワズを脅かす巨大勢力だ。テイワズと協調路線をとってはいるが、同時にギャラルホルンに対しても歩み寄りを見せている彼らをここで無駄に消耗させることはしたくない。彼らにはもつと重要な局面で役に立ってもらわねばならないのだから。

「分水嶺を越えたらまた連絡を。彼らにはこちらから伝えておく」

『承知した。つまり、我々はこの件には関わらんということだな?』

「そうだ、ギャラルホルンとして警告はするが当事者にはならない。そのつもりで動いてくれ」

ラストルの言葉を最後に通信が切れる。座った椅子の背をきしませながらラストルは再度ため息を吐く。彼自身以前のギャラルホルンには思うところがあり、改善すべきであるという認識はあった。しかしそれはもつと緩やかなもので、混乱の少ないものであるはずだった。だが今はどうか?世界はこちらの都合など考慮せず大きな変革を迎えている。その余波を受け、ギャラルホルンも変わらざるを得ない状況だ。

「誰もが笑える世界、お前の目にはこの混乱はどう映っているのかな? マ・クベ」

SAUとアープラウの開戦が現実であると彼が連絡を受けるのはそれから1週間後の事だった。

75. 人は善悪よりも好悪で動くでしょうもない生き物である

変態は何処にでもいる。

「おっほおっ！流石本家本元はいい仕事しやがるなあー！」

ギヤラルホルンから返還されたフラウロスにへばりつきながら、奇声を上げる白髪の男を見ながら俺はそう思った。彼の名はアラン・スミシー、テイワズのMS開発部門で整備長をしていた男だ。当然偽名である。なんでもMS、特にガンダムフレームに焦がれて整備員になったのだそうだが、テイワズに流れ着くまでに色々とやらかしているらしく、ギヤラルホルンに見つかる厄介なのだそうだ。それでもガンダムフレームを好き放題出来る環境に我慢が出来ず、前の職場を辞してまでCGSに入社するのだから大した変態である。一度フレデリック君にリスクマネジメントという言葉を教えてもらった方が良いと思う。

「どうかな、アラン整備長？」

「余計な物がつけられてる形跡は無いよ、アーレスの姫さんは真面目だね」

むしろその信頼が怖い。こちらを大した相手と認識していないのであれば平気だが、信用して何もつけていないのであれば注意が必要だ。進んで敵対したい訳ではないが、そうなる可能性がゼロではない。彼女のような人物は信用されればされるだけ、裏切った際に思いを攻撃性に転化させて襲ってくるからだ。はつきり言つてどこぞの白いのや赤いのよりよっぽど怖い。

「機体メンテナンスは向こうの詫びが大部分だからね。それに今戦争などすれば厄介な事は彼らも十分解っているさ」

規制緩和とギヤラルホルン認定企業の特別枠で現在のCGSは実に80機と言うMS保有枠を持っている。これは圏外圏最大の勢力であるテイワズに次ぐ機体数だ。まあ、そのテイワズは保有数がそろそろ200近い筈だし、ギヤラルホルンに至っては桁が二つは違うの

で、対抗組織となる双方から見れば吹けば飛ぶような零細と言うやつである。ただし全員が全部を持ち寄って殴り合えばである。各経済圏は以前から運用していた作業用を含めればそれぞれ最低100を超えるMSを保有しているし、海賊から看板を挿げ替えた民間軍事企業も随分経済圏に入り込んでいる。ウチもリアクターだけでなくフレームのみでの販売が好調な辺り、公称よりも随分多くの機体が地球圏に出回っていると見るべきだろう。だから本気でCGSを潰そうと考えれば、それなりに周到な準備がギャラルホルンでも必要になるし、その場合こちらだって素直に死んでやるつもりはない。

「そんなもんかね?」

「そんなものだよ」

首をかしげる整備長に俺はそう返す。そもそもギャラルホルンは近代以降の軍隊を構築する上で致命的な欠陥を孕んだ組織だ。大昔のように生活の間にちよつと殺し合いをしていた時代ならまだしも、何時でも何処でも殴り合い、高度で高額な兵器を消耗しあう今の戦争は、その能力を組織の生産力と経済力に依存する。何せ消費する資源が文字通り桁違いなのだ。それこそ経済圏のような規模の生産能力と購買能力が無ければ成り立たない。そういう意味では彼らにとってMAの出現は奇貨となる事だろう。アーブラウ事件の失態を補うために各経済圏で保有する軍事力の緩和を行ったのは短期的に見れば信頼回復に寄与するだろうが、長期的に見ればギャラルホルンという存在の否定要因になってしまう。何せ治安維持を名目に、ギャラルホルンは軍事力をもって各経済圏の行動を抑制する組織だからだ。好き勝手にやりたい権力者にとって目障りな存在であるのは子供でも解るだろう。だから軍事力を少しでも手放せば、後は確実に切り崩され続ける事になる。だがここでMAが存在していればどうなるか? 初期対応能力を与えられたとはいえ、各経済圏がMAを完全討伐する戦力を揃えるのは時間がかかるし、何時現れるかも解らない、それどころか現れることが未確定な相手に対し多額の予算を投じて戦力を維持し続ける事は非常に困難だ。だから各経済圏が共同で出資し、十分に対応できる戦力を低コストで維持したいと考えてもおかしく

はない。言ってしまうえば保険会社のようなものだ。

故にこのデリケートなタイミングで各経済圏がギャラルホルンと
言う存在に危機感を抱かせるような行動は慎むだろう。出来ればそ
の間に十分な戦力を揃えたい所だ。

「やれやれ、おつかないね。マクマードの親父さんだつてギャラルホ
ルンとやりあおうなんて考えていなかったぜ？」

そらそうだろう。

「彼は無頼である前に商人だからな」

儲けの為に危ない橋は渡つても、明らかに火傷の方がでかい事なん
てしないだろう。その点は信用できる。だからこそ信頼は出来ない
わけだが。

「ギャラルホルンを潰したとして、テイワズが得られる利益は無い。
むしろ無法化が進めば進むだけ真つ当な商売はやりにくくなる。つ
いでに言えば後ろ暗い商品だつて値崩れしてしまう。商売人にして
みれば良い事なんて何も無い。そういうった意味では——」

そんな高説を垂れようとしていると、格納庫にオルガが慌てた様子
で駆け込んでくる。そして俺を見るなり大声で叫んだ。

「マさん！大変です！SAUとアープラウが開戦しました！！」

は？

主要なメンバーを集めた会議室は重苦しい雰囲気だった。鉄火場
に慣れている筈の3番隊の面々も落ち着かない様子であるし、それは
1番隊や2番隊といった大人達も同様だ。

「すまん、遅れた」

「おう」

オルガに連れられて入室してきた相談役を一瞥した後、マルバは口
を開く。

「20分前に地球支部のトドから連絡があった。SAUとアフリカユ
ニオンが共同でアープラウに宣戦布告をしたとの事だ。アープラウ
側に確認もしたが間違いないらしい」

「ロッドさんの悪い予感が当たりましたか」

「SAUとアフリカユニオン。オセアニア連邦はどうしている？」

相談役の質問にマルバは答える。

「今のところなんの行動も見られないそうだ」

「アーブラウ側に事実確認の問い合わせもないのか？」

「ああ、いや、一度確認の連絡は来ているそうだ。短いやり取りだったそうだが」

マルバの返事に対し、相談役は顎へ手をやると唸るように言葉を零す。

「…だとすれば、オセアニア連邦はSAU達と取引をしているかもしれん」

「待つてください、オセアニア連邦はアーブラウ寄りじゃないんですか!？」

その爆弾発言に驚いた声でオルガが問いかける。

「オルガ、経済圏と言うのは基本的には全て敵同士なのだよ。対立していないのなら態々分かれている必要なんて無いのだからね。この所アーブラウは経済圏の中で一つ頭が抜けていたから、この辺りでブレーキをかけようという魂胆だろう」

「ブレーキ、ね」

思わずそうマルバは口にした。その声は多分に皮肉が籠っているのを彼自身自覚していた。CGSは民間軍事企業だ。起業当時の火星は経済圏との条約により様々な規制が設けられていたために、読み書きや計算の出来ない人間が就ける職業がこれくらいしかなかったのだ。その様な中で生きてきた彼からすれば、純粋な生存に関係のない闘争と言うものが酷く醜いものに見えたのだ。

「仮にSAUとアフリカユニオンが勝利すれば、アーブラウ領が幾らか切り取られる。報酬はアフリカユニオンとの係争地の譲渡あたりか」

「アーブラウ側に付けばもっと切り取れるんじゃないですか？」

オルガの言葉に相談役はゆるゆると首を振る。

「確かに得る領土だけで見ればな。だが占領地の統治というのは非常

に困難だ。平和的に割譲されるのでは雲泥の差だよ。ついでに言えばその場合アブラウも勝つのでから独走を防げない。今回のオセアニア連邦の狙いは、自国の戦力を損なわずに領土だけをかすめ取ることだ。アブラウとの国境沿いに部隊を駐留させておくだけでもプレッシャーになるからね」

アブラウ領内を通過してアフリカユニオンの部隊が侵攻してくる可能性を考慮して。そんな滅茶苦茶とも言える理由でも、建前があれば部隊を置ける。そして他国に軍事侵攻されているアブラウが呑気にそれを見逃せるとは考えにくいし、見逃したならそれはそれ、嬉々としてSAU側に立って参戦しアブラウ領を切り取るだろうと相談役は言った。

「友好相手なのにな？」

不思議そうな顔でミカツキがそう首をかしげる。家族や仲間という友愛を持つ相手に対して裏切りなどと言う選択肢が最初から存在しない彼には理解できない事だったのだろう。

「残念ながら国家に友情は存在しないし、成立もしない。何故ならそこに住む国民に最大限の利益を供与する事が国家の存在理由だからだ。他者の為に損得抜きで応じるという行為そのものと根本的に相入れないのだよ」

「つまり今回アブラウに肩入れするのは、短期的にも長期的にも他の経済圏にとっちゃ損だと判断されている訳だ。それで目下の問題はそんなアブラウにウチの社員が残っているってこったな」

「ギャラルホルンは動いていないのですか？」

サブードの問いにマルバは顔を顰めつつ答える。

「動いてはいるだろうが、直ぐにどうこうは出来ねえだろうな。暴動だなんだじゃなく経済圏同士の武力衝突だ。どちらかに肩入れするなんざもつての外だが、中立として止めても反感を買う。パトロン同士の喧嘩である以上、行動は慎重にならざるを得ねえ」

「じゃあウチも中立ですか？」

「……そのまま火星で慎ましくやっていくなら、それが無難だな」

シノの言葉に、相談役が不穏な言葉を口にする。マルバは直に彼を

見て、既に手遅れだと理解し額に手を当ててため息を吐いた。その間にも滑らかになった相談役の口は朗々と言葉を紡ぎ出していく。

「今から私は酷いことを言う。お前たちにとんでもない事を要求する。だから、付き合いきれないと思うなら乗る必要は一切ない。それで立場が悪くなるような事は無いと約束しよう」

そう前置き、言葉が続ける。

「言った通り、このまま火星だけでやっていくなら簡単だ。シノの言う通り、地球にいる皆を引き上げさせて今後関わらなければいい。暫く稼ぎは目減りするだろうが、それだつてサルベージ部門を拡大すれば取り返せるだろう。何せ今後MSもリアクターも需要が増える事はあつても減ることは絶対無いからね。商売として見るなら、それが賢い選択と言うやつだろう」

そこで相談役は一拍置き、そして良く通る声で言い放った。

「だがそれをすれば、俺達が売った武器が新しいお前達を生む」

全員が目を見開く中、相談役の言葉だけが響き続ける。

「国を挙げての戦争だ、圧倒的な消費は緩やかな経済停滞なぞ比ではない貧困を生む。それだけではない。戦火に巻き込まれれば住む家を失い、親が死ねば子は路頭に迷う。連中がやろうとしていて、俺達が傍観しようとしているのはそういうものだ、だから」

「長え」

熱弁を振るう相談役を前に、唐突にそうアキヒロが口を挟む。普段通りの顰め面に腕を組んだ姿勢でそう短く不満を口にする彼を見て、オルガは我慢出来ぬと肩を震わせ笑う。その様子を横目に、やはり普段と変わらぬ調子でミカヅキが口を開いた。

「難しい理屈は、今はいいよ。正しいかどうかもいい。おっちゃんは どうしたいの？」

「ミカヅキ」

「俺達は今まで散々助けてもらった、他でもないおっちゃんに。そのおっちゃんが本当にやりたい事を、俺達が損するからなんて理由で諦めて欲しくない」

「私は…」

「悪い癖ですよ、マさん。人には頼れとか教えといて、自分は全く頼ろうとしない。俺らは馬鹿だから、ちゃんと見本を見せてくれなきゃ困ります」

ミカツキの言葉を継ぐようにオルガがそう口にする。周囲にいた人間は、皆その言葉に苦笑しながら頷き、総意である事を示す。その様子を頼もしく思いながら、まだ踏ん切りの付かない様子のマ・クベに対し、マルバは最後の一押しを行う。

「良いから言っちゃまえよ馬鹿野郎。お前が滅茶苦茶言うんざ、ここに居る連中は全員慣れてんだ。今更こつちのせいにして行儀よくしようなんざ手遅れなんだよ馬鹿野郎」

驚いた表情でこちらを見る相談役に、マルバは堂々と言い切る事にする。

「俺らは国じゃねえからな。仲間の為なら、笑って損だっしてやるさ」

76. 誰もが最善を目指して動いている、それが最良の結果に繋がるとは限らない

「CGSはなんとやっているのですか」

「はっ、仲間を迎えに行く、とだけ」

アーレスに存在する第三埠頭。ハーブビーク級戦艦を10隻係留可能なこの場所から遠ざかっていく艦をモニター越しに見つつカルタ・イシユーは溜息を吐いた。

「ウィル・オー・ウィスプ以下5隻。どれも近代化改修を施したCGSの虎の子を全て持ち出して、ですか?」

「輸送艦の改造艦は残されております」

表情を変えぬままそう報告するコーリス・ステンジャにカルタは益々眉間の皺を深める。

「どう考えても後詰の輻重用ではないですか。ヴィーンゴールヴは何と言っているのです」

「戦争勃発に混乱しており指揮能力が低下しております。待機せよ、とだけ」

コーリスの言葉にカルタは思わず額を押さえた。待機命令が出てしまつては彼らに警告は出来ても止める事は出来ない。あれだけの事をしてかしたCGSをまた野放しにする気かとカルタは考え、そしてそれを望みそうな人物を即座に思い浮かべる。

「マクギリス、まさかこの状況を利用するつもりですか」

現在ギャラルホルンは三つの派閥に分かれている。旧来の体制維持を主眼においた保守派、情勢の変化に応じ組織の変革を望む改革派。そしてギャラルホルンの原点に戻りつつこれまでの家格などを廃却し、一からの再建を望む一新派だ。そんな各派閥の動きが、戦争を受けて加速している。

(確かに好機ではあります。けれど些か性急に過ぎる)

信条としては一新派に属するカルタであるが、その立ち位置は改革派と保守派の中間というのが現実だ。世界最大の暴力装置が統制を

失う事の危うさを彼女は十分理解していたし、それによって引き起こされる混乱がどれだけ弱者を痛めつけ、そして新たな弱者を生み出すがが想像出来てしまうからだ。

「…アリアンロッド艦隊に到達します。CGSが有力な戦力を保有するまま地球へ移動を開始したと」

「彼らの邪魔をする事になりかねませんが」

「コーリス・ステンジャ三佐、我々は治安維持組織です。地球圏に大きな混乱を齎す可能性があるならば、それに対処せねばなりません」

そう口にしたカルタの表情はいつまで経っても晴れる事は無かった。

「ラストル様、宜しいのですか？」

「何がだ？」

報告書から目を離さずにそう聞き返して来る上官に、オペレーターはどう言うべきか悩んだが、結局思ったままに口にした。

「カルタ・イシユ―一佐から連絡を受けております件です。5隻ともなれば立派な艦隊ですが」

火星支部から送られてきた情報は正確にアリアンロッド艦隊へ齎されている。近代化改修済みの装甲艦が5隻、それぞれがMSを満載した状態で地球圏に向けて移動中だと言う。近代化改修が施されているならば、搭載出来るMSは5機になる筈であり、そうならば戦闘艦艇5隻にMS25機と言う極めて有力な戦力になる。数だけならば過去討伐した夜明けの地平線団なる海賊が伍するものの、それを遥かに少ない手勢で圧倒してみせたアーレスの艦隊を鍛え上げたのがCGSである。数字以上の脅威である事は確実であり、だからこそ上官の判断に彼は疑問を覚えるのだ。

「それがどうした？提出されている書類に不備はないし、申請内容に誤りもない。出発前の職員による立ち合い検査もちやんと受けている。疚しいところのない彼らの行動を、一体どのような権限で止められるというのかね？」

成程言っていることは当然だ。幾ら治安維持組織と言えど、正規の手続きを取って行動している相手を怪しいからと拿捕しては健全な社会は保てないだろう。だが、そんな建前を騙しながら世の混乱を事前に収めてきたのがアリアンロッド艦隊である。その事実を通信手として理解している彼からすれば、どう見ても導火線に火のついた爆弾が地球へ向かおうとしているのに止めもしないのは明らかにおかしい。しかし艦隊の最高責任者がそうだと言うのであれば、従う以外に選択肢がない事も事実だった。

「出過ぎた事を申しました。申し訳ありません、失礼致します」

通信手の気配が遠のき、十分な時間が経つたのを見計らってラスタルは読んでもいないタブレットから目を離した。

「さて、どうしたものだろうな？」

中々に嫌らしい手を使うCGSに対し、ラスタルは苦虫を噛み潰したような表情で頬杖を突く。率直に言えば、今回の一件は通したと言うよりも、通さざるを得なかったという方が彼の正確な心境だ。止める事は不可能ではないが、その場合アリアンロッド艦隊に甚大な被害が出る事を覚悟しなければならぬと言うのがラスタルの分析だったからだ。

(MSは25機。これだけでも厄介だが、問題はここにガンダムが含まれていないという事だ)

これは明確なメッセージだとラスタルは考える。火星を出発する際に装備についてこちらまで情報が流れるのを承知した上で、彼らはいえ最高戦力であるガンダムフレームを残すという手を探ってきた。つまりこれは、足止めを受けた場合追加の戦力を投入して突破するつもりがあるというメッセージだ。そして想定しうる状況に陥った場合、彼らは躊躇なく実行するであろうとラスタルの勘が告げている。

(猛獣の方が余程可愛げがある)

もし仮に彼らが力を持っただけの存在であったなら、ラスタルは大

した苦勞もせず、CGSを容易に潰せただろう。自身より力のある獣たちを下してきたからこそ人類は地球の頂点に立ったのであり、その経験と実績はしっかりと受け継がれているからだ。その一方で、300年の平穩は軍事組織であるギャラルホルンから互角の戦力を有した人類同士の対決を奪ってきた。そのツケが今ラスタルに牙を？いている。

「……ここでアリアンロッドの力を削ぐわけにはいかん」

レギンレイズへの置き換えが始まった矢先に起きたMA復活騒動によつて更新速度は鈍化していた。代わりに少数ながらブリュンヒルデが回されてきているものの、全体を見れば殆どはグレイズのままだ。ここで徒に戦力を消耗した場合、一新派や保守派の動きに対応出来なくなる可能性が高い。

（それに地球に残っている戦力はほぼ保守派の部隊だ。連中にぶつくて削らねばならんのなら、押し付けてしまふのが良いだろう）

そう考えると彼は背もたれに体を預け、そしてこの戦後にどう動くべきかへと意識を切り替える。それは強者の驕った姿であったが窺める者はいない。事実彼は今日に至るまで強者であり、常に誰かを見定める側の人間だったからだ。

故に彼は、自身にどのような値がつけられたのかを知る由もなかった。

「老いたな、ワシも」

「蒔苗先生」

蒔苗・東護ノ介がそう呟くと傍に控えていたラスカー・アレジが氣遣わし気にそう呼びかけてくる。だがそれに対し蒔苗は首を振る事ので応じる。

「性急に事を進めすぎた。もう少し慎重さがあれば、この戦争は回避できたじやろう。無様よな」

それは自身の中に明確な焦りがあつたと自覚している故の発言だった。4年前の失脚から感じ始めていた老いはここの所明確な焦

燥となって蒔苗を襲っていたからだ。

「愚かな老いぼれだ。静かに枯れていけばよかつたものを、欲をかくからこの様なことになる」

180余年の月日を生きた蒔苗は自身の終わりを間近に感じた時、この世界に何の爪痕も残せていない自分に愕然とした。無論アブラウの代表という肩書は後の世で歴史書を紐解けば、誰もが目にするくらいの立派な痕跡である。しかし彼からすれば、それも歴史の中で現れるその他大勢の政治家の一人であり。人類史に自らを強く刻み付けたとはとても思えなかつた。だからこそ彼は、火星の不平等条約を撤回し、人類史の転換点を生み出すことを画策したのだ。勿論そのようなことをすれば、不平等条約の上に成り立っている地球の経済に打撃を与える事になる。故に規制緩和後、その行いが誤りでなかつた事を示すために、蒔苗はより積極的な経済政策を執ってきた。その結果が他の経済圏よりも一歩抜き出た経済成長であり、圏外圏との強い繋がりであつた。無論この躍進が他の経済圏に危機感を与える事は理解していた。しかし同時に楽観もしていたのだ。何せギャラルホルンに見とがめられない程度の小競り合いは経験していても、本格的な戦争などこの世界では誰も経験していない。だから例え戦力が増強されたとしても、本気で踏み切れる人間はまず居ないと考えていた。勿論油断はせず圧倒的な軍事力をアブラウが備えている事を示していたし、万一の保険とも両立させていた。

それがまさか、強大な敵に一撃入れられる内に入れてしまおうなどという博打のような判断を経済圏のトップが下すなどと思ひもしなかつたのだ。

「オセアニア連邦に協力の打診を…」

「無駄じゃよ、もう向こうで話がついておる。ここで寝返ればどの経済圏も二度とオセアニア連邦を信用せん」

既にアブラウを裏切っているのだ。2度裏切れば最早誰もオセアニア連邦を頼ろうとはしないだろうし、第一ここで裏切ればオセアニア連邦も戦争に巻き込まれることとなる。漁夫の利を得ようとしている連中が首を縦に振る訳がない。

「オセアニア連邦の国境沿いに展開している部隊を転用できれば…」
悔しそうにそう漏らすアレジを見て蒔苗は苦笑した。それこそが連中の狙いだからだ。他の全ての経済圏と国境が陸で面しているアーブラウは必然国境に張り付ける戦力が増える。その主張は受け入れられ、他の経済圏よりMSの配備数は優遇されていたが、それでも三方から同時にとなれば劣勢となるのは明白だ。かといってオセアニア連邦との国境から戦力を抽出すれば、これ幸いとオセアニア連邦は国境を押し上げ実効支配するだろう。

「彼らを使うほかあるまいな」

開戦直後から撤収準備に入っていたCGS地球支部であるが、蒔苗の手回しによって未だにアーブラウ領に留め置かれている。

「お言葉ですが、契約で彼らは直接戦闘に参加しない事になっております」

その言葉に対し即座にアレジが応じるが、その内容は否定的なものだった。アレジは彼らが直接ギャラルホルンとやり合う所は目撃していなかった事に加え、研修と称して青年とすら呼べない子供達が地球支部で勤務している事を知っていたからだ。だが彼らの戦闘能力を正しく理解している蒔苗は躊躇なく決断する。

「知つとるよ。じゃが彼らとて降りかかる火の粉は払わねばなるまいて」

「それは、そうでしょうか？」

どうやら良識ある人間のアレジには思いつけないと見て、蒔苗は腹案を告げる。

「エドモントン近郊の守備隊を全て別戦線に移せ。あそこには彼らの家族もいる、捨てて逃げられればそれまでだが、まあ彼らなら懸命に護るだろう」

「本気ですか！蒔苗先生!?!」

強引かつ人質を取るような指示にアレジが悲鳴じみた声を上げる。だがその声を聞き、蒔苗はむしろ決意を固めてしまう。

「勿論だとも、連中を巻き込めるならエドモントンを危険に晒すくらいはという事は無い。なにせ引き込めずに負ければ、それより遙

かに多くを失うのだからのう」
細められた彼の目は、沈みゆく夕日を眺め続けていた。

77. 戦争とは最も野蛮な外交手段である

「では、我が社の社員はお返し頂けないという事ですか？」

『返さんとは言っておらんよ。返せないと言っているんじや』

アリアドネ越しの長距離通信。飄々とした声音でそう応じるのはアーブラウの現代表、蒔苗・東護ノ介だ。

「過程など知ったことではありません。そもそもそうした状況を招いたのはそちらの落ち度だ。我々には正しく契約が履行される事を要求する権利がある」

『権利はあるじやろう。だがそれが行使できるかは別問題、そうじやろう？。どうしても返せと言うならシャツルを用意するのも吝かではないが、如何せん宇宙の戦力は各コロニーに張り付いているでな？。不幸な事故が起きてしまってもこちらではどうしようもないぞい』

ギヤラルホルンも中立の立場を崩さんからのう。そう言つて惚ける爺に色々とメーターが振り切れかけるが、小さく息を吐いて押しとどめる。キレ散らかしてアーブラウを灰燼に帰すのはいつでも出来る。まあやればオルフェンズ大量生産待たなしなのでやらんけどな。

「成程、あくまでアーブラウとしては契約を遵守する意思はあるが、状況的に困難だと仰りたいのですね？。では、何故エドモンソン周辺の部隊を移動させているのですかな？」

『自分の首都を戦場にする馬鹿はおるまい？。戦力を適切に使うために前線に配置換えするのがそんなに不思議な事かね？』

ああ、とても不思議だね。

「エドモンソン守備隊は名前こそ首都防衛部隊ですが、実態は北米大陸の予備戦力だ。これを吐き出してしまつては万一の事態に対応出来ない」

エドモンソンに集められている戦力は我が社に鍛えられた中でも特に技量に優れた精鋭だ。彼らには破綻しかけた戦線の立て直しや逆撃時の先鋒というような、決定的な場面での活躍が求められる。言つてしまえば開戦早々に、こちらの方が敵より数が少ない程度の事

で投入するような部隊ではない。

『如何せん戦争はてんで素人でのう。せめて前線の要請に精一杯応えようとした結果じゃよ』

のらりくらりと言い訳を続ける爺にいい加減苛立ってきた。どうせ人質と交換にこちらから支援を申し出させるつもりなんだろう。この状況でこちらの足元を見ようとするなんて余裕じゃないか。

「解りました。そう言うことでしたら弊社としては貴国との契約を打ち切らせて頂きます。ご安心ください、従業員はこちらで迎えに行きますから」

『脅迫するつもりかね?』

人質とつてるような奴が何言ってるやがる。

「何のことでしよう?我々は迎えに行くだけですよ。まあ途中邪魔なとどされれば、相手がなんであろうと身を守らせていただきますが」

『宇宙港は使えないと言ったはずじゃが?』

「仕方ありません。SAU辺りに問い合わせてみましょう、出費は覚悟しなければならぬでしょうが、大切な社員やその家族を失うより遥かにマシだ」

俺の言葉に漸くこちらの逆鱗を撫で回している事に気が付いた爺は、一度唸ると諦めた声音で降参を申し出る。

『すまん、俺が迂闊じゃった。どうか助けてほしい、この通り頼む』

なんだ、まだ立場が解ってねえな。

「地球に住んでいる政治家はみなそうなのですか?これならばクーデリア嬢の方が余程見込みがある。強引な手が駄目ならば泣き落とし、しかも対価も提示せずに。それとも貴方に頭を下げさせるのには命を懸ける程の価値があるとでも言うのですかな?」

俺にはとてもそうは思えんのだけどね?

『う、ぬ。契約の見直しと今回の件に関する賠償を約束する。それ以上に関しては俺の一存では...』

決められないってか?

「安く見られたものですか?」

思わず笑いながらそう言ってしまふ。その程度は巻き込んだ時点

で支払って然るべき対価だろう。その程度で済まそうなんて虫が良すぎると思わんか？

「それに加えて各経済圏が保有する火星領土の割譲、加えて火星における統治権の放棄で手を打ちましょう」

『な、なにを言っている!?!』

はあ？言わなきや解らねえのかよ。

「この戦争に勝たせてやるから火星を寄こせと言っている。他にどう聞こえたかね？」

「地球外縁軌道統制統合艦隊は、アリアンロットは何故連中を止めないのか!?!」

円卓の間にネモ・バクラザンの焦りを含んだ声が響く。その向かいに座るエレク・ファルクも腕を組み難しい表情をしていた。その二人に対し穏やかな表情を崩さぬままマクギリスは告げる。

「此度の混乱は経済圏同士の領土問題に端を発しています。この件に介入する事はアープラウ事件の愚を繰り返す事になりかねない。故に慎重な姿勢を見せるべきだと言うのが総意だったと記憶しております。だから開戦に踏み切ったSAU側を止めなかつたのではありませんか。彼らが傭兵を集めているのも内政干渉を理由に警告に留めています。ならば火星からアープラウが傭兵を雇ったとしても、我々に止めるだけの権限はありません」

「だが連中はアープラウの要請を受けずに動いているではありませんか。あれだけの戦力の移動を素通りさせるのは如何なものかと」

『勿論素通りなどさせておりません。提出されている航路を逸脱していないか定期的な確認はしておりますし、こちらの警備宙域に入り次第監視の艦隊を派遣します。それに確かにかかなりの大所帯ではありますが、艦艇もMSの数も誤魔化しておりません。紛争地域に救助へ行くというなら、妥当とも言える数でしょう』

「軍艦5隻にMS25機がかね？」

『彼らの機体は厄祭戦時代の旧式です。それに数ならばアリアンロッ

ドの分艦隊にも及びません。技量は確かですが、それを踏まえても万一の際十分に対応可能です。むしろ何故彼らだけを警戒するのでしょうか?』

皮肉気に混ぜ返すファルク公に挑むような声音で問いかけるのはイオク・クジャンだった。

「いや、アリアンロッドの技量に疑問があるわけではないのですよ。ですが、彼らは些か戦力として纏まり過ぎている。無用な混乱を地球圏に持ち込むのではと危惧した次第で」

『それこそ今更でしょう。第一地球圏は既に地球圏の人々によって混乱しているのです。彼らだけに原因を求めるのはフェアではない』
そうラスタル・エリオンはCGSを擁護しつつも、革新派を牽制する。

「確かに、こう見ると先のMS保有は時期尚早であったのは否めませんな」

彼の言葉を受けてバクラザン公も同様に革新派を牽制する。対してマクギリスは沈黙を保つが、その横に居たガルス・ボードウィンが代わりに口を開いた。

「だがあれが無ければ、ギャラルホルンの存在そのものすら懐疑の目を向けられていたことも事実、自らの不徳をまず恥じねばなりませんまい」

その様な人気回復を選ばねばならなかったのは、ギャラルホルンの腐敗があったからである。長期的に害を及ぼす決断であったとしても、それを取らねばならぬほどギャラルホルンの権威は失墜していたのだ。それぞれの派閥がけん制し合う中、唐突にマクギリスが耳に着けたインカムへ手を当てる。

「失礼、どうした?...そうか、解った。ご苦労」

短くやり取りをした後、マクギリスは全員に向けてはつきりと告げた。

「たった今、CGSがアブラウと再契約を結んだそうです。内容は本大戦におけるアブラウへの軍事支援とのこと」

その言葉にバクラザン公とファルク公が目を見開く。

『すぐに拘束すべきでは?』

カルタ・イシユールがやや緊張した声音でそう問うとラスタルが残念そうに答えた。

『難しいな。これがSAUやアフリカユニオンの増強は黙認しておいてアーブラウだけ妨害したとなればギャラルホルンの公平性は失われる。まして今のアーブラウは侵攻されている側だ』

「それでは地球圏の秩序はどうなります?」

苦々しい声音でファルク公がそう問いかけるが、それに応じたのはマクギリスの溜息だった。

「短期的な混乱は避けられないでしょう。ですが、どこまでが内政干渉であるのか明確にしてこなかった以上仕方ない事でしょう。残念ですが我々に出来るのは、戦後いち早く治安を回復させることくらいでしょうか」

事実上戦争への不介入を提案するその言葉にボードウィン公は頷くが、バクラザン公とファルク公は苦虫を噛み潰した表情を作る。そもそも内政干渉の線引きを曖昧にしてきたのは経済圏に影響力を残している両家だったからだ。

『いや、それまでにも出来る事があります』

「それは何でしょうか、クジヤン公?」

『現在圏外圏より大量の武器が地球圏へ送られています。これに歯止めをかけなければ戦争が長期化する事は必至。特に両陣営に武器をばら撒く様な行動は規制されて然るべきだと考えます。如何か?』

「しかしそれは商取引への干渉になるのではないかな?」

即座にバクラザン公が疑義を呈する。イオクの提案した内容は一見公平にも聞こえる内容だ。確かに両陣営はそれぞれ圏外圏と繋がりをもち武器弾薬を購入している。だがその比率が大きく異なるのだ。元々地球の北半球、それも高緯度を領土とするアーブラウは工業が盛んな地域であり、領内に軍事転用可能な重工業地帯を多く抱えている。対して他の3つの経済圏は食料生産が主で、工業に関してはコロニーに多くを依存している。当然圏外圏との貿易では軍需物資の比率も高い。武器に限った規制を設ければ、どちらが先に悲鳴を上げ

るかなど内情を知っていれば火を見るよりも明らかだ。

『それすらも受け入れられないと言うのであれば、最早反発した経済圏そのものが“地球圏の秩序を著しく損なう存在”なのではないでしょうか？その際限のない争いの先に起きたのが厄祭戦であると私は認識しておりますが』

際限のない闘争の終着点。それを歴史として刻み付けている彼らにとってその言葉は正に金科玉条である。二度とその愚を犯さないと誓ったからこそ存在するギャラルホルンであり、武力闘争においてその諫言を無視するというならば、イオクの言葉通りその組織は人類に再び厄災をもたらす者である。

イオクの痛烈な物言いに再び訪れた沈黙を破ったのはエリオン公だった。

『どうやら決まったようですね。ではギャラルホルンは今後各経済圏への介入は戦後を待って、そしてそれまでは圏外圏における武器輸出を規制すると。異議のある方はおりますかな？』

様々な思惑の渦巻く会議は、ギャラルホルンの不介入を決定し幕を閉じることになった。

78. 仲間であるからと言って皆が同じ目標を目指しているとは限らない

「随分と思い切ったな。大丈夫なのか？」

「私もボードウィン三佐の意見に同意します。少々性急に事を運びすぎているのでは？」

「その自覚はある。だが、それでもこの変化に応じる必要があると私は考える」

監査局の執務室、そこに集まった数名の仲間を見ながらマクギリス・ファリドはしっかりと言い切った。

「このタイミングを逃せばギャラルホルンの改革はなつても一新する事は叶わない。一時的な健全化は可能だろうが、エリオン公の目指す内容では根本的な解決に結びつくことはないだろう」

「家名や出自に囚われぬ人事、それだけでは不十分だとお前は言うのか？」

ガエリオの問いにマクギリスは頷く。

「そうだ。仮に今エリオン公の言うそれが実現したとしても、ギャラルホルンは変わらないだろう」

「何故そう言い切れる？」

「単純な話だ。現在のギャラルホルンに民主的な代表指名制を持ち込んでも、家名の代わりにただの人気投票になるだけだ。そして往々にして人気者とは有権者に利益をもたらす者、つまり現状で言えば最も大きな利益基盤を持っているセブンスターズの面々という事になる。そうした根底が覆されない限り、ギャラルホルンはいずれまた腐敗する。家名だけで意思決定機関が固定されている今よりは多少マシかもしれないがね」

「そこまで隊員達の意識が低いとは考えたくないが」

そう返すガエリオにマクギリスは頭を振って見せる。

「最上位たるセブンスターズが腐っているんだ、その下が真面で見られると考えるのは楽観が過ぎる。そもそも、既にテストは済んでい

る」

「テスト？」

「ルシフェルだ。バエルの模造品などを造って人気取りをしようなどという浅はかな行為にもかかわらず、それを諫言した者もいなければ、堂々と乗り回しても不満を口にする者すらいない。ギャラルホルンの理念に対し敬意を持っているならば、形だけの人気取りなど諫めて然るべきだろう？」

「それは、そうかもしれないが…」

言い淀むガエリオにマクギリスは眉を寄せながら言葉を続ける。

「運営方式を入れ替えた程度で腐敗が収まるならば人類はとうの昔に腐敗と無縁の政府を構築しているさ。第一代表指名制をとっている各経済圏とて汚職を無くせていない。真似たところで同じ結果になるのは明らかだよ」

「ならばお前はと言うんだ？」

「ギャラルホルンの正しい在り方、それは既に設立当初に示されていると私は考えている」

「何？」

「考えてみる、ガエリオ。我々セブンスターズは今でこそ名門と謳われているが、厄祭戦前はどこの誰だった？そして、創始者にして最大の功労者であるはずのカイエル家が何故存在しない？」

最後には人格化の域にまで達していたアグニカ・カイエル。厄祭戦における人類の頂点たる男の家が存在しない。当然ギャラルホルン内にはそれらしい家が残らなかった理由が記録されている。その中で最も支持されている内容は、アグニカ自身がそれを拒んだからだとするものだ。圧倒的な功績とカリスマ、二つを併せ持ったアグニカ・カイエルはギャラルホルンが自身の私兵となる事を避けるために、自ら指導者の地位を捨てたのだというものだ。

「ガンダムを任されていたとはいえ、我々の先祖はただの1パイロットに過ぎなかった。そして彼らの意見が尊重されたのは、MAを討伐する上でそれが効率的であったからだ。ならば再びその脅威が顕在化しつつある現状、我々は過去の功績などを考慮せず、純粋な武力に

よって指導者を選定すべきだ。そしてそれらは組織の運営には関わらない。政治と力を分離し、双方で監視し合う体制。それこそが次世代のギャラルホルンの在り方だと私は考える」

指導者が方針を決定し、運営者がそれに従い組織を経営する。権力を細分化する事、そして経営者から武力を取り上げる事で組織内の専横を防ぐ。言ってしまうえば彼の考えは、現在の地球圏の情勢をギャラルホルン内にも作り出すというものだ。

「随分と思いついた方針だな、そんな事が本当に出来るのか？」

「出来るさ、なんなら人類は300年も前にそれを実現している。つまりこの方法でも指導者と経営者が癒着してしまえば腐敗は避けられないという事だな」

遠慮のないマクギリスの言葉にガエリオがため息を吐く。

「つまりどうあっても組織が腐敗から逃れる術はないという事か」

「欲望を持つ人間が利便性を求めて作り出すのが組織だからな、そこを覆す事は難しい。だが現在や改革派の提示する民主化よりも権力が集中しない分長持ちくらいはするだろう。それに実力主義を持ち込むならばエリオン公の改革派ともすり合わせる事も出来る」

「確かに保守派と違って彼らは組織の健全化に前向きだからな」

（尤もそれは、ラスタル・エリオンに野心が無ければという前提がつくがね）

ガエリオの言葉に頷きつつ、マクギリスは内心でそう付け加える。そしてその可能性が限りなく低いとも彼は考えていた。

（ギャラルホルンの民主化。題目こそ美しいが、果たしてその中身はどうか？）

家格による不当な扱いの是正、実力のみを判断基準とした役職の任命。成程異議の挟みようのない真つ当な正論だ。さぞかし多くの人間の支持を得られることだろう。それこそ代表者指名の際にはこれまでの席次など関係なく選ばれる程に。セブンスターズは合議制であるが、決して全員が平等の立場にあるわけではない。特に最も実力と人望を集めながら、席次を理由に頭を抑え続けられていたエリオン家は随分と思うところがあるだろう。つまりラスタル・エリオンは自

身がギャラルホルンの頂点に立つ手段として民主化を望んだのではないかという事だ。

(おまけに一度は出し抜かれかけている。油断はするまい)

彼の義父であったイズナリオは最も低い席次でありながら、ボードウィン家との政略結婚で確実な仲間を増やしつつ、イシユウ家のカルタを押さえる事で第一席の発言にも影響を及ぼせる状況を整えた。人間としては何度殺しても飽き足りない相手であるが、その点だけは評価すべきだろうとマクギリスは考える。そしてこの状況こそ、彼の本当の願いを叶える最大の好機であるとも。

(ギャラルホルンが欲しいと言うならくれてやる、ラスタル・エリオン。だがバエルは渡さない)

いつも通りの笑顔の下で、彼は固く決意するのだった。

「話が違うではないですか!？」

前線から届けられる数々の凶報に耐え切れなくなったSAU代表は非公式の回線を用いて相手へと抗議の声を放った。

「投入できるMSの数はこちらが上、ならば前線で同数を拘束し、その間に少数を突破させ後方の都市機能を麻痺させる。そういう手筈でしたな?なのになんかこれはどういう事です!？」

三つの経済圏が共謀してのアーブラウ包围網。開戦から一週間は確かに想定通りに推移していた。事態が急変したのはたった二日前からだ。それまで此方の思惑通りにらみ合いに応じていたアーブラウから少数のMS部隊が攻勢に出てきたのだ。オレンジと白のツートンカラーに塗られた重装甲のロディ・フレーム。花をモチーフにしたと思しき赤いエンブレムを身に着けた僅か6機のMSは、前線に現れると同時にSAU側のMS部隊を瞬く間に撃破、戦線押し上げると即座に離脱していった。問題は、この二日間でそれが10回以上繰り返されており、SAU側のMSが次々と使用不能にされている点である。

『戦場において想定外の事とは起こりうるものですよ』

そう応じる通信相手にSAU代表は憤りを覚えた。これまでの襲撃で使用不能になったMSは10機になる。数字は小さく見えるがそれは間違いだ。何しろSAUは国家全体で保有するMSの数が500に届かないのだ。しかもこれは作業用などに改造されているものを含めた数字であり、更に戦闘用かつ完全にSAUが統制している戦力となれば300を切ってしまう。その虎の子であるMSを僅か2日で10機も失ったことは、極めて重大な損害と言えるだろう。故に彼の言葉に皮肉が交じった事は致し方のない事だろう。それが相手に通用するかは別として。

「成程、この程度は想定内という事ですか？では、私が次に発する言葉も想像出来ておられるのでしょうか？」

『勿論ですとも。ですが私共の懐も無限と言うわけではない。簡単に渡せるなどとは思っていただきたくありません？』

追加の戦力補充の要求に対し、通信相手であるエルク・ファルクは多分に嘲りの含まれた声音で言い返して来る。それは厳然たる事実であるのだが、今この時においては商品の値を吊り上げる性悪な商人の言葉でしかなかった。ギャラルホルンにおいて、かつてガンダムフレームを駆っていた名家は独自の戦力を保有する事が許されている。セブンスターズともなればその数は文字通り一国に匹敵する規模になるが、その枠が完全に充足する事はごく稀だ。維持費も要因の一つであるが、何より喪失する機体があるために大抵の家では補充と喪失が釣り合ってしまうからだ。特にバクラザン家とファルク家はその傾向が顕著で、年に数機が失われている。尤も代替わり後のイシユウ家のように、順調に数を増やしている家もあるのだが。そしてこの失われた機体がどうなっているかと言えば、公式には存在しない彼らの私兵や表向き繋がりのない武装勢力の貴重な戦力として運用されている。当然彼らの類まれな政治手腕によってリアクターの固有波形もデータベースから抹消済みであるから、万一の場合であっても知らぬふりを決め込めるといふ寸法だ。今回の戦争に際しても、そうした機体を随分とSAUやアフリカユニオンは買い付けて戦力を増強していたのだが。

「足元を見るつもりかな？此方は告発しても良いのだぞ?!」

『驚きましたな、何の証拠もないと言うのに告発？それもセブンスターズを？どうやら貴方を見誤っていたようですな。もう少し小心な方だと考えていたのですが、素晴らしい勇気をお持ちだ。この期に及んでギャラルホルンまで敵に回す気概がおありとは』
「っー」

その言葉にSAU代表は息を？む。ギャラルホルン内部が幾つかの派に分かれていることまでは知っていたが、それがどの程度の確執なのかまでは確認が取れていなかったからだ。その分裂が軽度なものであるならば、ファルク公の言う通り明確な証拠のない弾劾など、ギャラルホルンに対する侮辱と取られてもおかしくはない。そうなれば関係が悪化する事は間違い無いし、間違い無く今の話し相手は過去の取引を知っている自分を処分するべく動くだろう。

「…出来る限り急いで頂きたい。貴方がたとしてもアーブラウ一強となる状況は歓迎出来ないはず——」

そう言い切る前に胸元の端末が震え着信を告げる。即座に秘匿通信をミュートに変更すると、代表は苛立たしげに端末を取り出す。ディスプレイに表示されているのは彼の秘書だった。

「どうした？緊急の用件以外では連絡を控えるようにと言ったはずだぞ?。」

苛立ちを隠さずにそう告げた彼の表情は、秘書の言葉で驚愕へと変貌する。

『申し訳ありません、しかし事態は緊急を要するかと。先ほど我がSAUのコロニーがアーブラウの傭兵部隊によって制圧されました。配備されていた部隊は全滅との事です。い、如何致しましょう?。』

絶句した彼が事態を呑み込むまでには暫く時間を必要とした。

79. 戦争において当事者は短期決戦を夢想するが、成功させることは至難である

「本当にあっさり奪えちゃったよ」

コロニーの制圧が完了し、母艦へ帰還したビトーは困惑と喜悅の入り混じった声音でそう口にした。地球圏にたどり着くやアーブラウとの交渉を纏めた相談役が最初に発した命令は、各経済圏が保有しているコロニーの制圧だった。しかもそれぞれに艦艇1隻とMS5機のみで同時に襲撃をかけるという傍から聞けば頭を疑うような無謀とも言える内容だった。当然艦隊を預かっていたユージンから否定的な意見が発せられたが、相談役は笑いながらその懸念を切って捨てた。

「各経済圏のパイロットの練度はかなり低い、阿頼耶識もないしな。ついでに言えばコロニーに駐留しているのは労働者層に対する示威目的が強いから数も少なく士気も低い。何せどこの経済圏も主戦場である地球の正面戦力を充実させるために使える連中は限界まで地球に降ろしているからな」

「何を根拠にそう言っているんです?」

ユージンの問いに相談役は楽しそうに答える。

「経験則というやつだな。そもそも使える戦力が残っているなら地球外縁に我々が到達した時点で迎撃なりなんなりしている。ついでに私ならアーブラウのコロニーを襲撃しているな、あそこの食料を確保出来れば本国からの補給を減らせるし、何よりアーブラウの食料供給にダメージを与えられる。にもかかわらずコロニーどころか輸送航路すら襲撃されていないのは、連中がコロニーに引きこもっているからだ」

「つまり襲撃するだけの練度が無いってことですか?」

「そうだ。加えてユージン、各経済圏は今回の戦争をどう決着させるつもりだと思う?」

その問いにユージンは腕を組み、しばし考えると口を開いた。

「今回の戦争はアブラウの一人勝ちを潰すつてのが目的なんですよね？じゃあ、戦力で上回ってますから、同数の戦力を前線に張り付けて相手を拘束しているうちに主要な工業都市に襲撃をかけます。MSが1機でも入りこめればやりたい放題ですから。それで撤兵を条件に穀倉地帯の割譲を要求します」

「それは何故だ？」

ユージンの回答に相談役は笑顔を崩さぬまま再び問いかける。

「戦争は金が掛かるからです。武器弾薬の多くを購入に頼っているSAUやアフリカユニオンは長引くほどアブラウより戦費がかさみます。だから金を理由に戦争をするなら長期戦は避けたいんじゃないかと。工業地帯や資源地帯を割譲要求しても、それが生命線のアブラウに受け入れさせるとは圧倒的な優勢が必要になると思います。けれど比較的損失が低くて済む穀倉地帯の割譲なら、戦争を終わらせられるならと承知するかなと」

「経済損失が低ければ、一人勝ちを阻めないぞ？」

「そうですね？今後経済発展をしていくとして、手に入る領地や資源は工業に傾いています。何しろ工場の方が作る場所を選びませんから。対して農地は違います。火星ですらあの大騒ぎですよ？コロニーを造って土入れれば終わり、なんて訳にはいかないでしょう。そう考えれば長期的に見て既存の好適地を確保しておくのは大きなカードになります」

ユージンの答えに相談役は満面の笑みで頷いた。

「大変宜しい。つまり敵はアブラウを潰そうという気は更々なく、しかも金をかけない短期決戦で済ませようとしている訳だ。だから宇宙にはコロニーの守備隊しか残していないし、その戦力がお粗末でもなんとかないと考えている。何故ならアブラウも本国が攻められている状況で有力な戦力をコロニー襲撃に送り出せないから。各コロニーに戦力が居ると言うだけでアブラウ側の宇宙戦力を拘束できる訳だ。だが、残念なことここに我々が居る」

そう囁いた相談役の顔は、まるで獲物を呑み込もうとしている蛇のようだった。

『ビトー、補給が終わり次第もう一度出撃だ。コロニー内にMSを入れてくれ。残存部隊が立て籠もってる』

機体のチェックをしつつそんな事を思い出していたビトーに、オペレーターからそう指示が入る。

「残ってんのってモビルワーカーだけだろ？しぶといなあ」

『簡単に諦めたら本国でどんな扱いを受けるか解らないだろうからな。徹底して粘ったって証拠が欲しいんだろう。ま、そんなのに付き合ってやる必要はないからな。MSを入れて脅しつける』

既に戦闘用MSは全て行動不能にしているし、作業用機もトリモチで拘束済みだ。

「かわいそうだね、無能な指揮官の下に居る兵隊ってのはさ」

口調は軽いもののビトーの表情は優れなかった。MSとモビルワーカーでは覆し難い戦力差が存在する。自軍のMSが戦闘不能になった時点で降伏しないという事は、兵士がそれら絶望的な戦力でMSに挑まねばならないという事だ。これで自分達が海賊であつたならその選択も理解できない訳ではない。文字通り根こそぎ奪い尽くす海賊相手に降伏は無意味だからだ。けれど雇われの身とは言え、れっきとした軍隊相手にそれはあり得ない。では何故そんな選択をするのかと言えば、オペレーターが言う通り、上官が自身の失態を最小限に抑えるためなのだろう。最後まで戦って見せたという事実を作る為だけに兵士は無謀な戦いに駆り出されているのだ。

(結局何処でも弱い奴が割を食う)

ほんの少し前まで、ビトーもそれが普通だと思っていた。圏外圏は地球より遥かに解りやすい暴力という強弱に支配されていた。だから強い奴が何をしても許される。だからビトーも強くなりたかった。けれど今のビトーは本当に強い奴を知っている。

「補給完了。スコル・ロデイ、ビトー・アルトランド。出るぜ！」

本当に強い奴らは、弱い奴からただ奪うなんて馬鹿はしない。そんな獣みたいな生き方では、何処かで行き詰まる事を知っているからだ。彼らは弱い奴でも活躍できる方法を考え出して、奪うのではなく

皆でもっと大きな収穫を創り出す。だから。

「殺さねえし、死なせねえ。俺だって、強くなるんだ」

ビトーはそう呟き、機体をコロニーへと加速させた。

『せ、宣戦布告?! どういう事ですか!?!』

「どういう事も何も、そのままの意味じゃよ。こんな事になって残念じゃ」

顎髭を扱きながら、蒔苗は通信相手であるオセアニア連邦大使に聞こえるよう溜息を吐いた。

『我が国はこれまでアーブラウと協調路線を取ってきました。それが一体どうして!』

「それを儂に言わせるのかね? 開戦以降再三にわたってお願ひしている国境沿いの部隊撤収の件。誠意ある盟友相手のそれには儂には見えんの。まあ、貴国と我が国の間には軍事同盟は存在せぬし、類する条約も存在せん。ならばそちらがそちらの思う通り動くのであれば、こちらとてやりやすいように動かせてもらおうとも」

『そ、それはアフリカユニオンの侵攻に対する備えです。我々にアーブラウ侵攻の意図などありません!』

悲鳴じみた声音で弁明する大使の台詞を聞きつつ、蒔苗は皮肉気に頬を歪めた。そんな物言いが通用すると思われるとは自分は随分と耄碌しているように見えるらしい。

(いや、否定できんか)

事実SAUとアフリカユニオンの宣戦布告を読み切れず、オセアニア連邦が名ばかりの中立を取るなどという状況を想定していなかった。ならば通信相手の大使を笑う事は自分には出来まい。

「それはそうだろうの。侵攻せずともアーブラウは疲弊し、攻め込んだ両国とて傷は負う。高みの見物を洒落込んだオセアニア連邦のみが無傷で済む。これで沈黙の代わりに係争地の一つも手に入れば正に濡れ手に粟じゃからのう?」

蒔苗の言葉に大使は沈黙する。オセアニア連邦の意図がどうであ

れ、戦後そうなる可能性は確かに存在するからだ。

「不義理だなんだとは言わんよ、国家に真の友人は存在せんのだからな。なので貴国がそうするように我が国も自国の利益を最優先とさせてもらう」

『お待ちください蒔苗氏、どうか、お考え直しをっ』

「残念じゃったのう。もう既に議会が承認済みじゃよ、次に会えるのは停戦交渉かの。お互い、生き延びられるとよいの？」

そう言っつて蒔苗は通信を一方的に切ると外務官へ連絡し、オセアニア連邦へ宣戦布告を行う。その確認が取れ次第、直ぐに通信機を操作し、宣戦布告の元凶となった男を呼び出した。

「ああ、儂じゃよ。今宣戦布告を行っただぞ」

蒔苗氏からの通信を受けた俺は、即座にハンドサインで作戦開始を告げる。真剣な表情でそれを見ていたタカキが通信機を操作し、待機していた部隊へ攻撃指示を送る。タイミング的に他の2国のコロニー制圧の情報は入っているだろうから、多少抵抗は激しくなるかもしれない。まあそれも想定して第二部隊は2隻編成だから何とかなるだろう。あの隊にはチャドもダンテも居るしな。

「マさん。前線のハエダ隊からです。襲撃は成功、ただし行動不能は1機のみだそうです」

「了解した、無理せず下がるように伝えてくれ」

同じく通信機に囁り付いているビスケットからの報告に返しつつ、手元のタブレットに表示した地図に報告内容を書き込む。流石に三日目ともなると迎撃態勢が整いつつあるな。

「殺しちまった方が早くねえかい？」

消耗品の手配を一手に引き受ける羽目になったトドが若干据わりかけた目でそう提案してくる。気持ちは解らんでもないが却下だ。

「面倒ではあるがあまり人死にを出すわけにはいかんだよ。今後に差し障る」

戦争をしているのに何を悠長なと思うかもしれない。だがそれは、

ちやんとした戦争に対する理解と認識が教育されていて初めて罷り通る正しさなのだ。この世界の住人、特に地球に住む彼らは戦争を放り出して蓋をした人々だ。流石に指導者層には戦争が外交手段の一つであるという認識くらいは残っているが、大多数の国民はそうではない。突然現れた戦争という非日常で家族や親しい人間を奪われた際、その憎しみの矛先は必ず奪った敵へと向く。それ自体がおかしいとは言わないが、戦争がそういう物であり好悪とは別の判断基準で命のやり取りをしていると認識出来ているかいないかは致命的なまでに感情の差を生み出す。仮にここで遠慮呵責なく殺しまくったら、例えこの戦争に勝っても直ぐに次の戦争が怨恨によって引き起こされるだろう。

「根絶やしにするなら遠慮はいらんが、トドさんとしてはそちらの方が好みかな？」

「その言い方は狡いぜマっさん」

俺が聞き返すと溜息を吐きながらトドは頭を搔いて作業に戻る。悪いね、甘えて良いと言われたからには全力で甘えさせて貰う。

「第二部隊から連絡です！オセアニア連邦軍と交戦を開始！敵の抵抗は軽微だそうです！」

「大変結構」

短期決戦を想定するのは悪いとは言わない。誰だつて総力戦なんか続けたいもんじゃないからな。だが自軍の生命線である工業地帯の防備を怠るのは頂けないね。奪ってくれと言っているようなものだぞ？

「降ろしたスコルの準備はどうなっている？」

「2機が整備完了、午前中にはもう1機終わる見込みです。残り2機は今日中とのことですよ」

「3機目の準備が出来次第第八エダ隊を下がらせる。スコル隊はガットとデイノス、それからダンジだ。スコルは初めての地球だからな。最初は慣らす位でいい」

「了解です」

おっと、一応注意しておくか。

「ただしコロニーの制圧が伝われば敵が無理攻めをしてくる可能性がある。ササイ隊に後詰はさせるが、国境沿いのアープラウ軍は別戦線に移動を開始している。当てにするな。優先順位は理解できているな？」

「仲間の命で次がアープラウ、そんで最後が敵ですよね」

すぐに答えるダンジに頷いて見せる。よしよし、ちゃんと覚えているな。

「宜しい、特にダンジ。お前さんは若いからまだまだ働いてもらわねばならん。こんなつまらん戦争で死ぬなんて許さんからな。絶対に帰ってこい」

俺の言葉に力強く頷くと、ダンジは駆け足で部屋から出ていく。それを見送りながら、俺はゆっくりと息を吸い、呟いた。

「さて、地球人諸君。戦争を教えてやろう」

80. 奇妙な戦争

「A1から3区画まではトマトだったから2番肥料だ。混ぜ終えたら暫く馴染ませてから畝作りをするぞ」

手元のタブレットを操作しながらアキヒロはインカム越しにモバイルワーカーを操っているマサヒロに向かって指示を出す。昨日最後の収穫を終えた第3演習場の区画の一部を整備しているのだ。因みに収穫された作物は市場に卸せないため、社内で消費されるか近くの農園との物々交換に当てられている。市販品と違いしつかりと熟れさせてから収穫されるCGS印の野菜はご近所でも美味しいと評判である。

「芋も大分育ってきたなあ」

散水用のタンクを運んできたシノがアキヒロに向かってそう話しかけてきた。タブレットから目を離さずにアキヒロは頷きつつ口を開く。

「収穫はあと1か月先だな。暫くはトウモロコシの方が忙しいぞ。何せ人手が足りねえ」

「あー、ご近所への応援もあるしなあ。まあ思っていたより新人が使い物になってる分マシかね？」

顔を顰めるアキヒロに向かって、シノはそう言うと言顔で演習場の整備を行っている新人組へと視線を向けた。入社当初こうした雑務に対し露骨にやる気の感じられない態度だった新人達であるが、この所は積極的とまでは言わないものの真面目に作業に当たっている。特に阿頼耶識の施術を受けた面々はモバイルワーカーを使った農作業に従事出来るため、貴重な戦力になっている。

「こんな時期に戦争なんてしやがって、迷惑な話だ」
「戦争なんて、いつやられたって迷惑な話だろ？」

鼻を鳴らすアキヒロの横でシノがそう皮肉気に呟いた。これまで彼らは生きるために戦ってきた。手にしたものを奪われなかったために。あるいは何かを手にする、つまり奪うために。それが間違いだとは思えない。そうしなければ死んでいたのだから。けれどいざ自分達が

奪われるよりも奪う事が多くなった時、その生き方の危うさに彼らは気付いてしまった。否、気付かされたと言うべきか。奪われない程の強大な力と言うやつは、彼らが考えていたよりも遥かに大食らいだったのだ。成程、短期的に見れば奪うというのは魅力的な方法だ。農業やサルベージ業に従事してみれば、食料やMSを生み出すのに掛かる時間と労力が如何程のものが良くわかる。それらの収穫物をおすすめ取ってしまえば労力を支払う事なく確かに手に入れる事は出来るだろう。だがそんな事が何時までも続けられる訳がない。

当然の話だろう。全てを奪えば生産者が困窮するから次の収穫は得られない。ならば程々に奪えば良いと考えるのは楽観が過ぎる。誰だつて奪われたくなどないのだから、余裕を持たせれば身を護る為に力をつける。力をつけられれば、奪うために必要な暴力は更に大きくならねばならず、その力を維持するには更なる収奪が必要だ。しかも自分達で生産の計画を立てている訳ではないから程々の収奪で必要分が揃うかどうかすら解らない。そして一度でも弱れば奪われ続けた側は絶対に容赦などしない。海賊達と言う非常に解りやすい参考の末路を何度も見てきた彼らは、そんな生き方では大切な仲間と生き続ける事が到底出来ない事をしっかりと学んでいた。

「奪つて奪われてなんてやってりや、あつという間に干上がつちまうつてどうして解らねえ？」

貧すれば鈍する。圧倒的多数の人間は自らが飢えた際、他者に迷惑をかけずにひっそりと死のうなどとは考えない。戦争という大量消費と荒廃がギリギリで生きている人間の多くをそちら側へ追いやる事は明白であり、生産者の喪失と収奪者の大量発生を引き起こす事は想像に難くない。満足な教育を受けていない自分達ですら想像出来る事が、何故解らないのか。いらだち紛れの言葉がアキヒロの口から零れる。

「戦争をするつて決める奴は、死にそうなくれえ腹が減ったことなんてない連中だからだろ」

シノがしやがみ、足元の土を掬う。そして視線を空へと向け呟く。「俺らはよ。せめて俺達が作る世界は。そんなバカをしねえ世界にし

「ようや」

「そう言うとしノは立ち上がり、大きく背を伸ばす。そして明るい声音で口を開く。」

「取りあえずはしつかり畑仕事をしねえとな！どうせマっさんの事だから、腹空かせた連中をごまんと連れて帰って来るに違いねえ」

「澄み渡った空の先、遠く離れた地で戦う仲間たちを思いながら、アキヒロは苦笑しつつその言葉に同意する。」

「ちげえねえな」

「まだ火星には、砲声は聞こえてこない。」

「さあ、どんどんいこう」

「邪悪と形容するのがぴったりな表情で俺は机に広げた地図を前にそう宣言する。各経済圏のコロニーを制圧して一週間が経過した。一見すると戦場は膠着状態に見えたが、内実的にはアブラウが侵攻の準備を整えるまでの時間を各経済圏が手を拱いていたと言うのが正しい。SAU前線への襲撃を繰り返し生み出した戦力余剰を各戦線だけでなく、コロニーに送る事で防衛に従事していたCGSの部隊が地球へと降下。それぞれの戦線に10機ずつが送り込まれている。SAUだけは5機であるが、そもそも地球支部に配備されていた10機に加え戦争勃発前に規模拡大のために派遣されていた3機が存在していた事からむしろこちらの活動は活発であり、この一週間で更に被害を拡大させていた。既に喪失機が40に届きそうになっているし、士気も崩壊寸前だ。ぶっちゃけウチの機体を見ると逃げ出すらしいから既に崩壊している気もするがこのマ、容赦せん。」

「今回の戦争は楽でいいな。手加減してもお釣りがくる」

「既に最大の生産拠点は確保済み。更に最大の戦力であるMSの確保手段が無い相手は喪失機の補充どころか、損傷機の修復すら難しい。まあ事前に知っていた数よりも随分と持っているようだし、未だにパトロンから追加が送られてきているようだが、何も問題ない。数はともかくパイロットの練度がお粗末過ぎる。時たまギャラルホル

ン崩れと思われる動きの良いのが居るが、カルタ嬢の所の連中とは比べ物にならないくらい弱い上に使っている機体も旧式だ。無駄かもしれないが、一応そういった連中の機体は手足を破壊した後こちらで回収させて貰っている。マクギリス君へのちよつとしたプレゼントくらいにはなるかもしれないからな。ロッドⅡアイン君ホットライン経由で、敵にさー超ゲイレル居んの、一杯捕れたからお裾分けするね！って連絡したらとても良い笑みを浮かべていたらしい。因みにロッドの方は色々諦めたのか慣れたのか、疲れた表情で乾いた笑い声を上げていた。

「しかし大したものだ、あの事件から何も学んでいない」

皮肉気に口元を歪めながら俺は地図を眺め続ける。指示した通りアフリカユニオン、オセアニア連邦の各戦線に送り込んだ社員達は元気にMSを狩っているとの事だ。既にSAUからは和平交渉の連絡が来ているらしいが知ったことではない。何しろ俺は政治家ではないからな、和平が締結されるまで徹底的に戦力を狩り尽くしてやる。恨むならどつかのイズナリオ氏の猿真似に乗った自分達の愚かさを恨むといいと思う。

「あとう、相談役」

「どうした、ビスケット?」

「この戦争は、終わるんでしょうか?」

「不安か?」

俺の問いにビスケットは素直に頷くと口を開く。

「相談役に教えて頂いていましたから、全部とまでは言えませんがそれなりに戦争を理解しているつもりです」

「謙遜するな、お前は教え子の中でも優秀だよ。疑問があるなら聞こう」

そう俺が言えば、ビスケットは真剣な表情で言葉をつづけた。

「はい、今僕達はアープブラウに組して他の経済圏全てと戦争をしています。開戦直後はアープブラウが劣勢でしたが、現在は予断を許しません。優勢です」

「そうだな」

「既に敵にとって重要な拠点であるコロニーは押さえました。しかし各経済圏の工業地帯はコロニーだけじゃない。大きな痛手ではありませんが、致命的とはいえない。そうした状況下において、現在僕達が行っているのは消耗戦です。これは、教えられた戦術において最も双方に損害が増大すると同時に戦争解決までに長い時間を要するようには思えます」

「成程、道理だ、ではビスケットはどうするべきだと考える?」

「SAUに生贄になってもらいます。CGSの戦力を分散ではなく集中して戦線に投入。工業地帯、あるいは行政機関の中央を制圧し降伏させます。SAUが脱落すればアフリカユニオンは単独でアープラウに対抗できませんから降伏する可能性が高いですし、オセアニア連邦は最初から戦争には消極的です。損害が軽微ならば十分交渉に応じると思えます」

いやあ素晴らしいな、ウチの若い連中は。ここが宇宙世紀で所属がジオン軍だったら満点の回答だ。まあ、俺がそう教えてしまったんだけども。だつてしようがないじゃないか、仕込んでる時は地球の経済圏がここまでグダグダだなんて知らなかったんだもんよ。

「民主主義国家とその軍隊を相手にするならば満点の回答だ、花丸をやってもいいくらいだな。問題は前提条件が幾つか間違っている事だ、とは言えこれは教えた私の不手際だ」

すまんね、と前置きをして、このふざけた戦争の内容を語る。

「今回の問題は相手が民主主義国家の軍隊ではなく、更に総力戦に対応した戦力ではないという事だ」

「どう言う事でしょうか?」

「まず戦力の主軸としているMS。これの製造能力をどの国も有していない。文字通り戦局を左右する兵器が生産できないのだ。総力体制で製造出来る兵器群でMSを止められないとなると、戦力についての評価が大きく変わる」

俺の言葉にビスケットが目を見開く。流星に察しが良い。

「何故コロニーを襲撃したか。あそこが彼らの工業施設だからではない。唯一MSを供給出来る可能性がある拠点だったからだ。つまり、

逆説的に言えばここ以外の工業地帯は戦略的価値が極めて低い」

弾道ミサイルどころか長距離爆撃機すら保有していない軍隊だ。戦略爆撃が出来ない空軍なんぞ怖くも何ともないし、海軍は殆ど警備艇に毛が生えたようなものだ。陸に至っては推して知るべしというやつである。つまりこの世界における現代戦とはMSの多寡によって決定され、その上MSを満足に各陣営が自軍に供給できないという歪な環境になっているのだ。

「つまりコロニー以上に重要な戦略拠点は政治中枢を持つ首都くらいなものなわけだ。だがここでもう一つの問題、彼らが民主主義国家の軍隊ではない事がネックになる」

「そこが良く解りません。各経済圏は民主主義を標榜していますし、選挙によって代表を決めていますよね？そんな彼らが何故相談役の言う民主主義国家の軍隊に当たらないんですか？」

俺は笑いながらその事実を告げる。

「簡単だ、この戦争を望んでいる国民が居ないからだよ。いやそれよりも悪いかもしれないな。何故なら彼らは戦争に関心が無いからだ」

平和の代償とでも言うべきだろうか。軍事力から隔離され、その中で平和に育った彼らは驚くほど軍隊の行動を他人事のように考えている。彼らの知る対外的な戦争とは通常戦力やモビルワーカーを使った局地的な小競り合いが精々なのだ。同じ言葉で誤魔化せば経済圏同士の本気の殴り合いと知られずに戦争を実行できるという寸法だ。何せ彼等の知っている戦争とは大昔に沢山人が死んだ災害か、生活に何ら影響を与えない小競り合いだ。民衆が戦争に無関心になれる現状を構築出来たギャラルホルンと各経済圏の指導者の努力は称賛されるべきではあるのだが、それならば戦争という外交手段も選択肢から永遠に放棄しなければならなかった。

「係争地や国境付近で人知れず軍人同士が殺し合う分にはいい、だが斬首戦術などすればこちらが悪者にされてしまう。それでは占領した時に困るのだよ」

戦争が他人事であるのは、民間人に影響が出ないことが前提だ。自国の首都などという日常に突然そんなものが現れば、恐怖と混乱で

どんな結論に達するか想像もつかない。

「せ、占領？」

ああ、そうか、これは不味ったな。

「ビスケット、戦争を長期にわたって防ぐ方法は、究極的には3つだと私は考えている」

そう言うって俺は人差し指を立てる。

「二つ目は軍事的な均衡による相互確証破壊、殴れば絶対に敵も自分も死に絶えると言う状況を創り出す事。まあどちらか片方にとんでもないバカが居た瞬間破綻するんだがね」

更に中指を立てて言葉を続ける。

「二つ目は、人類すべてが仲良く涅槃を渡る事。人という存在が無ければ争いは存在しないからな。問題はそもそも戦争をしても達成すべき人類の存続を否定している事だな、故にこれは戦争は無くするが戦争という問題の解決にはならない」

俺はそう笑い、薬指を仲間に入れる。

「後は敵を無くしてしまう事。ここで言うならアブラウ以外の政権を全て打倒して統一してしまう事だ。その上で政治、司法と独立した治安維持組織を持てば犯罪は起きても戦争は起きん。後はアブラウの統治能力次第だな」

啞然とするビスケットに笑顔のまま俺は続ける。

「民主主義の何たるかさえ理解できていないような馬鹿共だ、怨恨さえ募らせなければ統治者がすぐ変わったところで何も気にしないだろう。後はゆっくりと反乱の芽を摘むだけで長期の平和が訪れると言う寸法だ。だから民間に被害を出さず敵の軍事力だけを削ぎ落すのさ。世界平和の為だ、一つ頑張るとしようじゃないか」

MSと言う抵抗できる能力を奪ってしまえばその後どんな酷い事が起きるのか、為政者だけは理解出来る。何せ攻め込んで実行しようとした事をそのままやられるのだから。だから戦う術を失った時点で彼等は生き延びる為に降伏せざるを得ないのだ。そう告げてやると、ビスケットは引きつった笑顔で頷いた。

81. 戦争は始めるよりも終わらせる方が難しいものである

「厄介な」

地図を睨みながらラスタル・エリオンはそう呟いた。世界大戦が勃発して1カ月が経過している。状況はアーブラウが圧倒的に優勢だ。

「いや、アーブラウではなくCGSと言うべきか」

他の経済圏に比べて練度は高いものの、開戦以降アーブラウ軍の行動と言えばCGSの部隊によって押し上げられた戦線を維持するだけだ。真面に戦闘をした回数など数える程だろう。何しろCGSの部隊が戦闘のイニシアチブを握り続ける為に積極的な攻撃を行っているものだから、それに追従するだけで手いっぱいなのだ。つまりこの戦争をコントロールしているのは現在CGSという事になる。

「…都市の一つも落としてくれれば介入のしようもあるのだが」

戦力に甚大な被害を受けている各経済圏からギャラルホルンに対し、アーブラウとの停戦交渉を仲介して欲しいという旨の連絡は届いている。だがギャラルホルン内でも意見が割れており交渉の準備は進んでいない。当然である。何しろ戦争を始めた際には内政干渉に当たるとしてアーブラウ側からの要請を蹴っているのだ。立場が逆転しただけで介入などすればギャラルホルンの公平性という建前は今度こそ完全に崩れ去る。もし仮にアーブラウ軍が民間人に被害の出る様な行動をしていれば言い訳も出来るが、彼らは徹底して軍のみを標的に行動しているためそれも難しい。

（ガラン達をアーブラウから離れたのは失敗だったか）

彼らが居ればアーブラウ軍として適当な都市を襲撃させることも出来たが、現在彼らは潜伏中である。アーブラウに売り込むのはリスクが高いし、かと言って他の経済圏ではCGSとやり合う事になる。ガラン達の技量は高いが、これまでの報告を見る限りCGSのそれは確実に上を行っている。彼らの隙についてアーブラウ側の都市を襲撃する事はまず不可能だろうというのが、ラスタルとガランの共通し

た認識だった。

「イシユール家は中立の立場を取っているが、心情的にはCGS寄りだろう。それに火星にも連中は十分戦力を残している」

ならば火星で混乱を起こしCGSの戦力を引き揚げさせるという手も脳裏を過るが即座に否定する。地球で確認されている機体は38機であり、火星にはまだ10機以上のMSが残っている上、その中にはガンダムフレームも含まれているからだ。第一混乱を起こそうと画策したところでイシユール家が同調するとはラスタルには思えなかった。

「目標を修正する必要があるか」

彼は当初、穏当なギャラルホルンの改革と現世界秩序の維持を目標としていた。実のところマクギリス・ファリドが予想していた様な権力に対する欲求は希薄で、寧ろ古臭い血統主義によって自分が重大な決定権を持つという重責が億劫とすら考えていた。もっと言えば、それによって重要な地位を占める無能の尻拭いに辟易しているというのが最大の行動原理であったが。

「既に世界秩序は変わりつつあり、ギャラルホルンの立ち位置も変容している」

特に現在紛糾している問題が、ファルク家とバクラザン家から流出したMSの存在だ。廃棄申請をしたMSを私物化するなどの家でも行われている公然の秘密である——そもそも300年前のMSが平然と動くのだ、戦後に製造された機体が廃棄せねばならぬほど損壊するなどまずあり得ない——が、当然ギャラルホルンの理念や倫理からすれば言語道断と言うべき行いだ。あろうことか両家はリアクターの偽装どころか機体そのものまでそのまま提供していた為に、不審な機体を発見したと完全に善意からの通報を受けては動かざるを得ない。結果、監査局から両家は厳しい追及を受けているが、それが他家に波及するのは時間の問題だろう。そうなればセブンスターズの支配体制にも罅が入る事は想像に難くない。

「統治者を気取るにはギャラルホルンは些か腐り過ぎた。この辺りが人の限界なのだろうな」

背もたれへと身を預け、ラスタルは目を閉じる。その思考は既に戦後に向けて動き出していた。

「また降伏かよ?」

手にしていた槍の石突を地面に突き立てるとダンジは口を尖らせた。彼の前には3機のフレックグレイズが地面に膝をつき、白旗を掲げていた。

『機体から降りて地面に伏せろ!』

『ダンジ、ガットのカバーに入れ』

「了解です」

デイノスからの通信に短く答え、ダンジは機体を慎重に進ませた。降伏した敵パイロットを拘束する必要があるが、この瞬間が最も緊張するやり取りだった。

『…大丈夫だな』

少し硬い声音でガットがそう呟き信号弾を放つ。暫くするとアーブラウのモビルワーカーに護衛されたトラックが近づいてきて、そこから兵隊が吐き出される。順調に拘束され後方へと帰っていく彼らを見送りながら、ダンジは安堵の溜息を吐いた。

「今回も無事に終わりましたね」

『ああ、毎回こうだと良いんだがな』

MSのパイロットとしては規格外を誇るCGSの社員達であるが、彼らは決して無敵の存在ではない。生身でも優秀ではあるのだが、それでもライフル弾に耐えられるような肉体は持ち合わせていないのだ。そして寡兵である事に注目した敵軍は彼らをMSから降ろして殺傷しようとする。降伏するふりをして機体から誘い出し狙撃する。ササイ隊がそんな攻撃を受け、この戦争で初めての犠牲者を出していた。以後どのような場合でも戦場でMSから降りる事は禁止されている。とは言え降伏してくる敵兵を無視するわけにもいかないため、現在はアーブラウ軍に協力してもらっている。

『降伏後の拘束と移送までは全てアーブラウにやってもらえるよう動

いてはいるらしいぞ。正直MSは勿体ないけどな』

戦地で鹵獲した機体に関しては、CGSの取り分とする事に契約上なっている。しかし、降伏した機体を一々移動させていては部隊の侵攻速度が鈍化してしまう事から、アーブラウにそのまま販売するという契約に変更されていた。相場よりも割高であるとはいえ、CGSにとっても無傷のリアクターは手放し難い資源だった。

『どちらにせよ後1カ月も続かんだろうさ。もう敵さんは100機以上喪失しているんだ。士気もガタガタだしな』

楽観的な感想を述べるデイノスに対しダンジは頷いた。正面からの戦いは圧倒しているし、打開の方法が思いつかないからこそ偽の降伏などで騙し討ちをしようとするのだ。油断はすべきではないが、ある程度緊張もほぐさなければ精神的に追い詰められて正常な判断を下せなくなってしまう。

『それまでは精々稼がせて貰うとしようぜ。後輩も随分膨れてきてるみたいだしな』

それに乗る形でガットが応えた。敵は戦力を確保するために随分と傭兵なども雇っていた。尤もそれらは少し前まで海賊を名乗っていたような連中であり、陣容もそれに倣っている。これに加えて敵対国家の反政府組織がCGSに接触を図ってきているのだが、こちらも非合法組織の名に恥じない人員構成だ。当然それらは指揮を執っているCGSの相談役の逆鱗に触れ、いつも通りの対応をされている(海賊と同じ末路を辿っている)。お陰で火星に帰るには輸送船を買う必要があるそうだとトドとビスケットが笑いながら話していた。そんな事を思い出し、ダンジは少しだけ笑顔になると息を小さく吐き出しつつ、少しだけ首をひねった。

ギャラルホルンはいつまで大人しくしているつもりなのだろう？

「既に大勢は決しています。これ以上の攻撃は地球圏秩序に対する明確な脅威であると考えます」

真剣な表情でそう訴えるエレク・ファルクに対し、表面上は微笑み

を崩さぬままマクギリスは口を開いた。

「些か発言が飛躍してはいませんか、ファルク公。確かに現在アーブラウは優勢に事態を進めています。ですがそれが地球圏の脅威であるとは私には思えません」

「それはファリド公の経験が浅いからではないですか？」

「左様ですな。傭兵などという粗暴な輩が相手の兵力を奪った後に行うことなど明白ではありませんか！」

好き勝手なことを言うファルク公とバクラザン公に対して思わず出てしまった冷笑を組んだ手で隠しながら言葉を紡ぐ。

「彼らの倫理観についてはイシュー公やクジヤン公が担保してくれているものと考えますが」

「残念ですがお二人とも武門に相応しい性根の持ち主です。狡猾な連中相手に真意を見極める事は不得手でしよう」

悲し気な表情でそうファルク公は首を振る。その意見自体には同様の思いであったが、そんな事はおくびにも出さずにマクギリスはむしろ顔を顰めて見せた。

「直接言葉を交わした二人よりも、言葉どころか会ったこともない両公の方が正確に彼らを判断できると仰るのですね？さすがは老練なファルク公とバクラザン公。私もその様な見識を身に着けたいものです」

解りやすい皮肉にファルク公は一瞬顔を顰めるが、バクラザン公は好々爺然とした笑い声を上げて見せると口を開いた。

「長く当主をしていると見えるものもあるのですよ。なに、齢をくえば皆こうなるのです」

「成程、勉強になります。そのお二人からするとアーブラウは地球圏の秩序を脅かす存在であるわけですね？」

「少しだけ誤解しておりますな、我々はアーブラウではなく彼らを隠れ蓑にしたCGSが危険であると考えております」

警戒すべき相手の矛先を変えるべく発した言葉は即座に否定される。その間にもマクギリスの頭脳は高速で情報を精査していた。現在の戦局はアーブラウが極めて優勢である。既に停戦に合意すれば

十分な賠償をもぎ取れる程度には勝利を重ねているが、アーブラウ側は一切それらに応じていない。何故なら他の経済圏はアーブラウの存続を無意識に容認していたが、アーブラウ側は他の経済圏の存続を許していないからだ。ある意味それは当然の思考であるとマクギリスは考える。本来の戦力でぶつかれば、勝利するのは3つの経済圏の方だった。仮にここで手打ちにしたところで、火星とのつながりが深いアーブラウが独走を続ければ、戦力が整い次第同じことが繰り返される可能性は極めて高い。そしてCGSというイレギュラーから見限られた瞬間、アーブラウは他の経済圏の搾取対象に落ちる事が決まっているのだ。つまり他の経済圏からすれば単なる経済戦争の延長であるが、アーブラウにしてみれば国家のその後を左右する生存闘争になってしまっているのだ。中途半端な妥協はそれこそアーブラウが敗北するまで戦争を繰り返される危険を孕んでいる。

(結局のところ既得権益が惜しいだけなのだろうか？老害共)

穏やかな表情の裏で嫌悪感も露にマクギリスは内心吐き捨てる。このまま戦争を続けさせるといふ事は世界の統一、即ち3つの経済圏の消失を意味する。当然、仮想敵国を失えば軍縮が行われるだろうし、ギャラルホルンの発言力も低下する事は間違いない。

(少々追い詰め過ぎたか)

MSの不正供与の疑いがかけられている両家は既にギャラルホルン内でも苦しい立場に置かれている。ここで经济圈との繋がりが断たれば挽回する事は極めて困難だ。どうするべきか悩むマクギリスをフォローしたのは、珍しくヴィーンゴールヴに顔を出していたラスタル・エリオンだった。

「私としては、この戦いは止めるべきではないと考えます」

明確な戦争肯定の言葉に全員が目を見開く。その視線を受けつつ、ラスタル・エリオンは持論を展開した。

「無論略奪や民間人への被害は十分に警戒すべきです。ヴィーンゴールヴの地上戦力だけでなく地球外縁軌道統制統合艦隊からの監視及び即応態勢の用意が必要であるとも考えます。ですが、同時にこの戦争は最後までやらせるべきでしょう」

「正気ですか、エリオン公!？」

悲鳴じみた声で問うファルク公に対し、ラスタル・エリオンは真剣な表情で頷くと言葉が続ける。

「戦局はご存知の通りアーブラウが圧倒的に優勢です。1年と掛からずに全面降伏まで持ち込めるでしょう。そうなれば現在分断されている各経済圏は一つにまとまる事になる。無論それは非常に緩い結束でしょうが、それでも人類は初めて世界統一国家を手に入れるのです。それが今後どれだけの価値を持つか、聡明な両公ならばお判りでしょう?」

統一国家樹立による国家間対立を軸とした紛争機会の消失。ここで止めるならば確実に継続しうるそれが失われる事は、極めて大きな意味を持つ。

「申し訳ないが、その想定は些か理想に過ぎるのではないかな?アーブラウが他の経済圏を蔑ろにしないという保証は何処にもない」

バクラザン公が眉を寄せながらそう問うが、ラスタル・エリオンは笑いながら応じる。

「それこそ我々の出番ではないですか。不当な弾圧に武力はつきものです。当然、世界の監視者である我々が掣肘する必要があるでしょう。そして国家間紛争の可能性の方が遥かに高い。ならばこの変革は止めるべきでは無い。如何か?」

『賛同致します。既にCGSは弱者救済という点において多くの実績を出しております。此度の戦争においてもその行動理念は揺らいでおりません。ならば今こそが最良の転換点であると愚考致します』

『あくまで監視は必要であると考えますが、私もクジャン公と同意見です。長期に渡る社会不安は早期に払しょくされるべきだと』

即座に声を上げたのはイオク・クジャンだった。更にカルタ・イシューが続いたことでセブンスターズの意思は決定される。

「ではその様に」

短くマクギリスが口を開き皆が頷き合う。尤も、ファルク公とバクラザン公は苦虫を噛み潰したような表情であったが。アーブラウから各経済圏に対し、無条件降伏が打診されたのはそれから1週間後の

事だった。

82. 軍事的優位を取った状況での交渉は、譲歩してはならない

以前の世界でも思っただけけれど、停戦交渉って超面倒だよな。

「火星における統治領の完全放棄!? そんな話が呑める訳ないだろう!!」

「しかも現首脳陣を全て公職から追放だど? こんな要求が本当に通るとお思いか!?!」

妥協点を模索するはずなのに、全拒否で微塵も話が進みません。ところでたかがPMCの顔役風情がこんな場所になんて呼び出されているんですかね? 中世かな?

「困りましたね、こちらとしては随分と譲歩しているつもりなのですが?」

此方へ頻りに視線を送りながら、ラスカー・アレジ氏がそう口を開く。そうぞー、そっちのMSはほぼ殲滅したからな。ここから再開となると、通常戦力だけでこっちを相手にする事になる。ついでに言えば降伏勧告を蹴られるから、こちらとしても手加減が出来なくなるんだが。

「と、とにかくもう少し内容を検討頂けませんでしょうか、これでは国民を納得させることも出来ません」

頻りに額の汗を拭きながらオセアニア連邦の交渉担当者がそう口にする。同意するように他の経済圏の交渉役も頷いた。黙っていても良いのだが、あんまり長引かせたくないんだよな。遠征先じゃ欠食児童を食わせるだけでも大変なんだよ。

「交渉が決裂した場合の事は当然考えているのだろうか?」

腕を組んだまま、俺はそう口を開く。

「こちらからの降伏勧告を蹴るのだから、当然攻撃は再開させてもらう。この程度では降伏できないと言うならば仕方がない。もう少し各国の民衆に戦争を直接味わって頂くとしよう。ああ、それと今後そちらからの降伏は認めない。既に何度か偽装降伏でこちらに被害が

出ていてね？明確な条約が無い以上、ルール違反だなどと騒ぐつもりはないが、部隊保全の為に君達からの降伏は全てそういう物だと判断させてもらう。当然これは民間人にも適用させてもらうよ」

俺の言葉に顔を青くする交渉役達。おいおい、まさか俺が部下を殺されてヘラヘラ笑っているとでも思ったのかい？舐めてんじやねえぞ。

「そ、そんな事をギャラルホルンが許すわけが！」

苦し気にそう反論するアフリカユニオンの交渉担当者を俺は鼻で笑ってやる。

「寝ぼけるな。民間人に被害が出ない程度の内容では降伏出来ぬと、戦争の継続を望んでいるのはどちらかな？こちらはそちらの都合に付き合っただけでやっているに過ぎん。そもそもこの戦争はそちらから仕掛けてきているのだという事を忘れるな」

大義もへったくれもない戦争を仕掛けてきたんだぞ？お前達の言葉借りるなら、それこそ生半可に許すなどアブラウ側の国民が納得する訳がないだろう。

「し、しかしこれでは我が経済圏の独立が…」

馬鹿かよ。

「手前勝手に戦争を吹っかけて来るような連中が自主独立？そんなものを交戦国が認めると本気で思っているのかね？そういう寝言は戦争に勝ってから言いたまえ」

「わ、我が経済圏はアブラウから宣戦布告された立場です！同列に扱われる謂れはありません」

おっとオセアニア連邦君裏切ったー。はっはっは、SAUとアフリカユニオンの交渉担当者がすげえ目で睨んでるぞ。だがこのマ、容赦せん。

「友人は良く選ぶべきでしたな？」

そうやって俺は持っていたタブレットを操作し、録音された音声を再生する。その内容はアブラウに対するSAU・アフリカユニオンの武力侵攻を黙認、アブラウへの支援を行わない代わりに係争地を譲渡する旨について確認を行っているものだった。

「ね、捏造だ！」

聞くにつれ顔をみるみる青くしていったオセアニア連邦の交渉担当者がかぶ。言うと思った。

「そう言われるのは承知していましたが。ですからちゃんと第三者機関に内容の精査と解析をお願いしております」

ギャラルホルンの監査局っていうんだけどね。お願いしたら喜んで協力してくれたぜ。

「先に言っておくが、ここが妥協できる最低ラインだ。呑めないと言うのは別に構わんが、これよりも条件が好転する可能性はあり得ないぞ？戦争が長引くだけこちらの負担も増えるのだ。国民を納得させるにはより多くの代償を支払わせる義務が指導者にはある」

勝算があつたのだろうか、自分から手を出したのは失敗だったな。せめて経済封鎖なりなんなりでアブラウの暴発を誘うべきだった。そうしたら俺達が巻き込まれる事も無かったから、彼らの思ったような戦争が出来ただろう。尤も歴史にもしもは存在しないので、彼らには現実を受け止めて貰うのだが。

「暫し、お待ち頂きたい」

そう発言するSAUの交渉担当者にラスカー氏が頷くと、同じくアフリカユニオンとオセアニア連邦の交渉担当者も中座する。それを見送ったラスカー氏は困った顔でこちらを見てきた。

「少し、強気すぎではありませんか？」

彼はアブラウ内において蒔苗氏の後継者と目されている男だ。以前の事件の際も蒔苗氏復帰の為に色々と骨を折ってくれた。だがまだ覚悟が少しばかり足りていないな。

「これでも随分譲歩していますよ。本来ならば自治権と軍事力の放棄を言い渡したい所です」

絶対認めないだろうから言わんけど。

「それでは、独立国家ではなくなってしまう…」

呻くように言うラスカー氏に俺は冷めた目で口を開いた。

「先ほども言ったが、その自主独立とやらのおかげで貴方達は戦争に突入し、我々は巻き込まれたわけだが。それでも彼らの自由を保障し

たいと言うなら好きにすればいい。だが次の戦争ごっこは地球人だけでやれ、我々を巻き込むな。それから今回の報酬が払えないなどと言う寝言を抜かせばどうなるかはよく考えておくんだな」

火星の割譲はこっちの報酬なんだ、絶対に妥協してやらん。まあ現状を考えれば、この位までなら連中も領けるだろう。何せ各経済圏は火星との取引における関税を大幅に緩和させられている。カルタ嬢が圏外圏における不平等条約による経済格差が治安悪化に繋がっている旨の報告を、繰り返しギャラルホルンに送っていたからだ。ここにイオク君とマクギリス君が乗つかる事で、地球における世論を操作してくれた。経済的に余裕があれば、次は体面を気にするのはこの世界でも一緒という訳だ。問題は関税を緩和したのに、アープラウの様に積極的な投資をしなかったから、ハーフメタル等の価格が落ちず、それでいて食料生産なども低調であるために火星の経済が改善していない事だ。火星をちゃんとした市場にするのが宗主国としての立場を失った各経済圏が執るべき手段だと思っただが、そう簡単にはいかないらしい。なんせ搾取の時代が長かったからなあ。

「…火星を独立させたとして、地球の支援無しに上手くいくとは思えません」

当然だな。支援者の有無で独立の難易度が変わるなんて経験済みだよ。だが、ちよつとばかりし君達は火星を虐め過ぎたんだ。

「無論地球の協力があればよりスムーズに事は運ぶだろう。火星は地球の植民地ではなく、重要なパートナーとして人類は再び発展の時代を迎えるだろうな。だがね、それは別に火星だけでも出来ないわけじゃない」

火星における人口の大半を占めているのが所謂貧困層だ。真面に就学も出来ず、単純な肉体労働で酷使される、あるいはその仕事すら手に入れられずに浮浪者となってしまふ人々。そんな彼らに必要なのはまず衣・食・住である。既に農業や畜産については研究成果も出ていて、値崩れを防ぐために売り物にせず廃棄している食料も多く存在する。アープラウ領内だけでも農産物は爆発的に生産量を増加させているんだ、短期間で農耕地を開墾するノウハウも蓄積している以

上、食料面での経済制裁は怖くない。そこさえクリアしてしまえば、後は娯楽や情報といったプラスチックになるわけだが、そんなものを望めるのは火星人もごく一部の特権階級だけだ。仮に彼らが独立に反対したとして、起こりうる未来は良くて追放、最悪独立に燃える革命家による粛清だろう。

「地球人が締め付けすぎた代償だね。大半の火星人は食うものに困らず、眠る場所があれば満足出来てしまふんだよ」

植民地にするにしても、娯楽や嗜好品に手を出せる程度の余裕は与えておくべきだったな。そうすれば、それらを失ってまで独立したい、今の生活から抜け出したいなんて思う人間は出てこなかっただろう。そして同時に地球側は火星を切り離せない理由がある。

「対して地球圏はどうか？今後経済規模を火星抜きに発展させるならば、木星は火星の影響が強すぎる以上、残っているのは地球周辺、となればコロニー建造が主になるだろうが、大量のコロニー建造に必要なハーフメタルを一体何処から手に入れるつもりかね？」

無論地球や資源衛星、崩壊した月からもハーフメタルは産出する。だがそれは火星と比べれば遥かに少なく、加えて鉱脈自体の分布もまばらだから採算が取りづらいのだ。大した装備も必要なしに露天掘りが出来る火星とは訳が違う。

「おまけにあの練度だ。万一が起きた時の経済損失は馬鹿にならないだろうな？」

そう、それに加えてハーフメタルはその性質上、至近にMAが埋没していても掘り起こすまで発見できないという厄介な問題がある。無論起動させてしまっても最終的にギヤラルホルンが処理するだろうが、それまでの損害が無視できる訳がない。訓練をしているとは言っても兵士の練度はお粗末だし、機体についても大半はフレックグレイズや旧式機だ。まあMSに関してはウチも似たり寄ったりだが、阿頼耶識システムのおかげでパイロットの技量は雲泥の差だ。しかも曲がりなりにMAとの実戦経験者まで居るのだからはつきり言っただけにすらならない。そのことはラスカー氏も理解できているらしく、苦々しい顔になる。

「何、どちらにせよそれはこの戦争ごっこが終わってからのお話だ。先ずはこの交渉を成功させるとしようじゃないかね」

俺の言葉にラスカー氏は再び溜息を吐く。

「とても彼らが要求を呑むとは思えません？」

「それについては現状を正しく認識させるしかないだろうな」

ああ、やっぱり馬鹿を相手に戦争なんてするもんじゃない。俺がそう考えていると、中座していた面々が会議室に戻ってくる。その顔は一樣に暗くなっている。これはあれだな、全部拒否しろとか言われたな。

「…本国に、確認を取りましたが、アブラウの提示する要求はとてもではないが承諾しかねる、と」

意を決した表情でそう告げて来るSAU交渉担当者。そうか、それなら仕方がない。

「どこがいい？」

「は？」

間の抜けた声を出す目の前の男に笑いながら聞いてやる。

「君達の見解は良く解った。だから選ばせてあげよう。何処が良い？」

「その、失礼ですが、何処とは？」

震え気味の声でそう問うてくるアフリカユニオンの交渉担当者に対して、俺は親切に答えてやる。

「吹き飛ばす都市を選ばせてやると言っている。選ばないと言うなら、こちらで勝手に決めさせてもらおうが？」

「馬鹿な、不可能だ！その様な戦力など!？」

うん、そんな戦力は流石に持っていないね。けどさあ。俺はゆつくりと人差し指を天井へと向ける。その意図を理解できず怪訝な顔をする面々に俺は笑いながら言い放つ。

「お忘れかな？君達の頭の上にはコロニーが浮かんでいて、それは現在我々の支配下にある。一つや二つ地球に落としてやっても我々は何も困らないぞ？」

「こ、コロニー落としたと!？」

「そんな暴虐が許されると思っっているのか!？」

思っっているとも。

「貴国らとの交戦規定に、大質量兵器による地上攻撃を規制する内容は含まれていなかったと記憶しているが? 恨むなら杜撰な交戦規定のまま開戦に踏み切った自身の無能を恨みたまえ」

なんせダインスレイヴは禁止されているがコロニーを地球に落とすなという国際条約も無いからな。まあとは言え俺も鬼ではない。

「取りあえず1発ずつだ。さ、何処に落とすかね?」

言いながら俺はゆつくりと立ち上がり、壁に掛けられていた地図を見る。その地図は俺の知っている地図に酷似していて、オーストラリア大陸に見慣れた円が刻まれている。つまりこの世界でも恐らくコロニー落としは最低でも1回は行われているのだ。ならばその威力が如何程のものかも理解できている筈だ。当然、都市を狙って落とすところで、被害がその程度に収まらない事も含めて。

「わ、わが国は、わが国はアーブラウの要求を受け入れ、降伏致します!」

一番最初にそう叫んだのはオセアニア連邦の交渉担当者だった。そらそうだろうな、経済圏の中で、最も海洋からの影響を受けやすいのがオセアニア連邦だ。何処に落とされても、津波という二次被害で多くの沿岸都市に多大な被害が発生する。沿岸部に人口密集地を持つかの国では、それこそ再起不能な被害が出る可能性が高い。俺はここやかに頷くと口を開く。

「ふむ、一発余るな」

「ブラフだ! その様なことが簡単に出来る訳がない!!」

S A Uの交渉担当者が立ち上がり、震えた指先で俺を指す。だが、その言葉に応じたのはラスカー氏だった。

「:確かに簡単ではありません。ですが彼の言葉は紛れもない事実だ。既にそれぞれのコロニーから住民の疎開が行われています。まさか、このような事の為だったとは」

顔を手で覆いながら呻くラスカー氏を見て、正しくそれが実施されている事を理解し、全員が絶句する。だがそんな事は考慮してやら

ん。

「地図から自国の都市が幾つか消えれば、流石に国民も納得できるだろう。まあその後の寒冷化やら何やらでもっと死ぬかもしれないが、そこは君達の国の問題だ、上手くやりたまえ。質問は以上かな？では、選びたまえ」

そう言つて俺は地図を拳で叩いて見せた。

83. 帰ろう、故郷へ

『つまりですねえ、この公職追放というのはアーブラウからすれば当然の要求なんですね。何せ戦争を計画し、実行しちゃうような危険な人達なんですから』

『要求として過大なものではないと?』

『敗戦国に対する処遇としては破格だと私は思いますよ。侵攻していた領土は全て返還。当然ここにはコロニーも含まれています。その上戦後賠償は火星領の譲渡だけですからね。経済損失は正に微々たるものです』

『今後の経済発展の足がかりを失ったと言う方もいらつしやいますが?』

『それは勿論その通りです。その通りなんですが、じゃああのまま戦争を続けてそんな条件を引き出せたのか?そこが重要だと私は思いますね。戦争は長引けば長引くだけ相手国の戦費も増大します。それを回収するわけですから請求額は当然増えます。それをこちらの経済も疲弊した状態で支払うのですから今より過酷になるのは間違いありません。その点だけ見れば、引き際として最悪は回避したと考えて良いでしょう』

流されている茶番を、俺はのんびりと眺めていた。あの停戦交渉から3週間で過ぎ、俺達の地球からの撤収準備は漸く最終段階に入っている。

「なんて言うか、他人事みたいですね。こいつら」

横に座って同じくモニターを見ていたユージンが不快そうにそう言葉を漏らした。戦死したフジ・ブルーノは古参の三番隊だった。口数は少ないが優しい奴で、年少組にも慕われている男だった。彼の亡骸と私物は既に纏められていて、ウィル・オー・ウイスプの霊安室に運び込まれている。そんな彼を殺した連中が暢気に語っているのが、ユージンには耐え難いのだろう。

「そう仕向けたからな」

ぶつちやけ連日報道されているこんな番組も、大体はアーブラウ経

由の情報操作だ。でなければ3週間も前に終わった戦争の事などマスメディアが取り上げる事は無い。

「長期的にはともかく、短期的に見れば彼等の生活に影響が出ない範囲で話をつけた。彼等にしてみれば完全に他人事なのだよ。まあ人間なんてそんなものだ」

大多数の人間は、自らの生活に影響を及ぼさない事柄に関心を抱き続ける事が難しいし、その事柄について真剣に調べようなんて気にはならない。だからそこに、こうだという正解を用意してやれば簡単にそれを信じてしまう。何故ならそれが真実であろうとなかろうと、自らの生活は変わらないからだ。

「そして人間は好き好んで悪者になりたい奴など居ない。だから悪いことをしたのは指導者であって民衆ではないと言う免罪符を与えてしまえば躊躇無く切り捨ててくれる。後は親アブラウの人員にすげ替えて、段階的に政治から侵食していく」

経済圏同士の関税の撤廃や国家間の移動に関する規制の緩和辺りが当面の目標になるだろう。順調に行けば100年もしない内に地球は一つの経済圏に纏まれるのではないだろうか。

「…そこまでしてやる義理が俺達にあるんですか?」

大いにあるとも。

「隣国の政情が安定している事は経済発展において重要な事だぞ。それに統一政府が出来る事は火星にとっても大きなチャンスになる」
「チャンス?」

怪訝そうな顔をするユージンに、俺は笑いながら答える。

「関税を撤廃すれば、流通量は増えて国民は安価に物を手に入れられる。だが同時に保護されていた連中は窮地に立たされると言う事だ。アブラウなら農業関係者が、他の経済圏なら工業関係者だな。そして火星ではそうした知識層が慢性的に不足している。現状と同じ待遇を提示すれば、喜んで移住してくれるとは思わないか?」

勿論各経済圏だって無思慮に実行はしないだろう。けれど行う以上絶対に一定数そうした人間が出てくる。そうした人間を火星で引き取るのだ。経済圏は失業者を減らせる。事業者は職を失わずに済

む。そして火星は知識層を手に入れる。誰も損をしない素敵な取引である。まあ、長期的に見れば経済圏は火星という都合の良い輸出先を失う事になるので大損害を受けるわけだが、それに気付くのは身の回りに安い火星製の品があふれ出した頃だろう。

「いいかユージン。仲間が殺されて気が立つのは仕方がない。だが、その怒りを相手にぶつけてはいけない。それは戦争ではなく、私闘だ」

その感情を否定するつもりは無い。暴力に抗う意思は絶対に必要であり、それに対して怒りを覚えるのは正常な反応でもあるからだ。だが戦争には持ち込むべきでは無い。

「戦争は外交の手段であって、好悪で判断すべき事ではない。…ですよね」

「解っているなら良い。それと慣れる必要は無いぞ。こんな事に慣れてしまったら、私みたいな駄目な大人になってしまうからな」

そうユージンに告げ、俺は視線をモニターへと戻す。相変わらずのプロパガンダ放送を眺めながら、小さく溜息を吐いた。ああ、早く火星に帰りたい。

「貴様の企みは全て白日の下に晒されている。神妙にお縄を頂戴しろ」

唐突に告げられた言葉にノブリス・ゴルドンは混乱した。火星の本社オフィス、彼の牙城と言わなければならないのは、ギャラルホルンの制服に身を包む育ちの良さそうな青年だった。

「お待ち下さい。一体何の事でしょうか？」

武装した隊員を引き連れて現れた青年に対し、ノブリスは慌てて問いかけた。後ろ暗い事をしていないなどとは言わないが、同時に捕まるような証拠を残す間抜けはしていない。だからこそ彼はそう問い返す。しかしそれは青年の逆鱗に触れた。

「面白くない冗談だな。貴様はギャラルホルンを無能の集まりだとも思っているのか？」

凜猛な笑みを浮かべる青年が視線で合図をすると、傍に控えていた

男が手にしていた端末を操作しノブリスへ突きつけてきた。そこに表示された数字を見て彼は怪訝な表情を浮かべるが、放たれた言葉に目を見開くことになる。

「貴様によって地球圏に密輸されたティワズ製モバイルカーの購入履歴だ。輸送業者までティワズを使ったのは周到だったが、運ぶ荷を偽ったのは失敗だったな？」

その言葉で彼は目の前の数字を理解するが、同時に大いに混乱する事になる。確かに青年の言う通り地球圏へモバイルカーを送る手筈を整えたのは自分だ。しかしそれはティワズをはめる為にギャラルホルンと共謀した計画であったからだ。当然自分の関わりを隠蔽するために、金銭のやりとりもそれ用のフロント企業を通してしている。

「臨検を受けた輸送業者は素直にこちらに従ったよ。コンテナの中身をこちらが調べるまで、本気でただのバイオ燃料だと信じていたからな」

「お待ち下さい。これは何かの行き違いが起きているかと存じます！」

ノブリスはそう言うのと懸命に思考を巡らせる。直接ここに乗り込んできたと言う事はフロント企業が自分と繋がっていることは露見している。しかし、そもそもフロント企業は普段からこうした場合に備えて切り捨てて自らの保身を図る為に用意していたものである。従業員に関しても、経営層の数名以外は自分達の会社がノブリスと繋がっている事すら知らないし、知っている者達は忠誠心に厚く万一の場合の対応も心得ている。ならばまだ、彼等から自身の無関係を証言させることでギリギリの保身は成せるとノブリスは考えた。

「確かに彼等に対し、経営面でのアドバイスや共同で商いをした事はございます。ですが、この件に関して私めは全く関わっておりません。申し訳ありませんが、一度確認させて頂きたい」

そうノブリスが頭を下げると、青年は愉快そうに歯を見せて笑うと口を開いた。

「成程、確認か。確認は大切だな。では、今すぐ問いたただすが良い」

「…はい。少々お待ちください」

その言葉にノブリスは再び頭を下げると机へと向かい、端末を操作する。数度のコールを経て回線が繋がるのを確認したノブリスは即座に用件を告げようとした瞬間、普段対応する男とは異なる声に止められる。

『よお、ゴルドンの旦那かい?』

「なっ!?!」

聞き覚えのある、しかし絶対に今聞くはずの無い声にノブリスは思わず声を上げてしまう。もう一度端末に表示された番号を確認するが、そこに映っているのは間違い無くフロント企業の番号だった。

『随分と舐めた真似をしてくれたじゃないの? ウチをはじめようなんざ良い度胸じゃねえか』

通話相手であるジャスレイ・ドノミコルスの怒気を孕んだ言葉に、ノブリスが返答に窮している間にも事態は進行する。

『この連中は正直に吐いてくれたぜ? 全部お前の指示だってな? こっちは身に覚えのねえ疑いに加えて大事な身内を危うく犯罪者にされるところだった。手前この落とし前、どう付けるつもりだ? ああ!?!』

「そ、わた、しは」

「どうした、ノブリス・ゴルドン。確認は済んだのかね? 私も暇ではないのだが」

「お、お待ち、お待ち下さい!」

『その様子じゃ、俺達が落とし前を付けさせる時間は無さそうだな。残念だよ。ま、手前が居なくなつた後の火星はこっちが上手く仕切つてやるよ。だから安心してくたばりやがれ』

その言葉と共に通信は一方的に切断される。同時にこちらへ向けられる一切の温度を失った青年の瞳を見て、現状を打開できない事をノブリスは悟った。

「気は済んだかね。では、連れて行け」

イオク・クジャンの指示で動くギャラルホルンの隊員達にノブリスは項垂れたまま拘束されると、部屋から連れ出されていった。

「商売人が時勢を読み切れなくなつちやお終えだな？ ゴルドンさんよ？」

クリュセに構えたオフィスの一室でジャスレイ・ドノミコルスは応接用の机へ脚を投げ出し、手にしたウイスキーグラスを揺らした。グラスの中に注がれているのは、CGSから手に入れたバーボンだ。バイオ燃料の製造検証の最中に偶然出来たなどと連中は嘯いていたが。「叔父貴、例の連中はどうしますか？」

テイワズへと寝返ったフロント企業の人間をどうするか。そう尋ねられ、ジャスレイは酒を一口含むと笑いながら答える。

「金で靡くような裏切り者なんか信用出来ねえよ。鉾山にでも送つとけ、あつちも人手が足りてねえからな」

ハーフメタルと同様に、テイワズが製造している木星メタルの需要も順調に伸びている。当然採掘に必要な人員数も同じように増えている。面倒な人間を送り込むには最適の場所と言えた。

「承知しました。…それ、旨いんですか？」

その指示に頷いた部下は、楽しそうにグラスを傾けるジャスレイにそう聞いてくる。普段地球で造られている高級酒を愛飲しているのを見慣れているために、粗悪と言つても過言では無いそれを飲んでいる事を不思議に思つたのだろう。ジャスレイは上機嫌で応じる。

「樽も悪いし熟成も足りてねえ、未熟も良いところよ。けどな、未熟つてのはこれから熟すつて事でもある。つまりこれからが楽しみな味って訳だ」

何もかもが足りていない火星。だがそれは大いに成長の余地を残した状態だと言う事だ。ここに様々なものを注ぎ込めば、それ以上の実りをテイワズに齎すであろう事をジャスレイは確信していた。

「悔しいが、名瀬の奴の目も確かだったってこつたな。ま、頭に見る目があるつて事は良いことだ」

そう言つてジャスレイはグラスの中身を流し込む。差し当たり次に出向く時は良い樽を土産にしよう、そんな事を考えながら。

84. 継がれゆく意思

『あの、本当に良いんすか?』

「おう、いいからやれ」

命令に従い、新人が操る2機のMSが地面に杭を突き立てる。その様子を見てアキヒロの横に立っていたマルバ・アーケイは深々と溜息を吐いた。

「遂に第1演習場まで潰しやがった」

「大丈夫です社長。これは工場付近での訓練を想定した演習場です」

タブレットから目を離さずにそう欺瞞を吐くアキヒロに対し、マルバは半眼になって応じる。

「お前らが食品加工業の資格を取るまではな。まったく、あの馬鹿の悪いところばっかり覚えやがって」

「恐縮です」

「褒めてねえよ馬鹿野郎この野郎。はあ、またどっかに土地買わねえと」

そう言っ頭をかくマルバに対し、アキヒロは困った笑みを浮かべる。

「本社も手狭になってきましたからね」

拾った。端的にそう口にして、社長相談役が地球からヒューマンデブリや孤児やらを連れてきたのは半年程前だ。行きよりも輸送船が2隻増えていた時点で皆凡そ察してはいたが、今回は今までと文字通り桁が違った。

「鹵獲したりアクターの殆どをアーブラウが買ってくれたから何とかになったが。絶対あれは確信犯だな」

先の大戦においてCGSは200近いリアクターを無傷で鹵獲していた。半分ほどはその場でアーブラウが買い取っていたが、残りの半分について相談役が火星への帰還間際にアーブラウに対して問いかけたのだ。

「このままだと全部持って帰るが、どうするね?」

その言葉の意図を正確に察した蒔苗・東吾ノ介は顔を青くした。既

に火星全土はアープラウが権利を掌握しており、委任統治という形で旧統治領管理者達から発足した議会が統治している。但しその関係は決して良好とは言えず、その調整に苦慮しているというのが実情だった。仮にそんな所へ100機ものMSが供給されたなら。そんなものは特大の火種になる事は想像に難くない。しかも万一武力衝突にでも発展した場合、今度はCGSが敵になるのである。そしてアープラウにはCGSヘリアクターの販売を止めさせる権利も権限も持っていない。つまり事前にこの火種を潰すには、残りのリアクターをCGSの言い値で買う以外の選択肢が残っていないかったのである。

「良くギャラルホルンに泣きつきませんでしたね？」

「現アープラウ政権にしてみりや、折角大人しくなった奴にまた色々口実を与えて干渉されちゃ堪らないだろうからな。本当にあくどい事しやがる」

「今まで渋って来た分ですから、同情する気にはなれませんね」
「違えねえな」

鼻を鳴らしてそう切り捨てるアキヒロにマルバは笑って応じる。

「そんで？あの馬鹿は今クリュセか？」

「ええ、クーデリアさんの所へ」

「あつちも大変だろうからなあ。まあこればかりは仕方ねえか」

MSによる建設風景を眺めながら、二人はそう言って笑った。

「オルガさん。俺、昨日会社の経理の手伝いしてたつすよね？」

「ああ、してたな」

本社のオフィス、据え置きの情報端末に向かってひたすら手を動かしながらザツクは同じく端末に向かっているオルガ・イツカに話しかけた。

「先週は一週間サルベージに行ってたつす。ちょっと阿頼耶識が羨ましくなったつす」

「モバイルワーカーを使つての実作業はどうしても差はでるな。申請な

ら受け付けてくれると思うぞ?」

言いながらオルガが手元のパネルを操作し自軍を素早く操作する。見る間に敵軍が数を減らし、遂には敵の母艦を沈める。同時にザックの端末からチープな電子音が鳴り響き、目の前に使用者を煽り立てるような敗北メッセージが表示された。

「ぬあああ!?!」

「奇襲や強力な持ち駒に頼り過ぎだ。華麗に勝つことよりも堅実に戦う事を覚えたほうが良いぞ?」

「うつす…、いやそうじゃなくて!?!」

「なんだよ?」

感情を乱高下させつつザックは訝し気な表情のオルガに対して訴える。

「なんで俺部隊指揮の演習やらされてるんすか?ウチの会社は俺に何をさせるつもりなんすか!?!ちよつと業務内容が節操なさすぎじゃありません!?!」

「まあ、実際ウチの業務は節操がねえからなあ」

そう言つてマグカップの中身を飲みつつ笑うオルガに、ザックは眉を寄せながら疑問を口にする。

「いや、そうなんすけど。他の奴らはもつと適性を見てるっていうか、仕事の割り振りに方向性があるじゃないすか。同期で部隊指揮の演習やってんの俺だけだし」

「ありがてえ事じゃねえか」

「ありがたいつすか?」

その言葉にオルガは真面目な表情になると、マグカップを机に戻しザックへと向き直る。

「色々教えてもらえるって事はよ、ザック。色々な可能性を貰えるって事だぜ」

「可能性…」

「他の奴らがやれる事を見つけてしまつてよ、お前が焦る気持ちも解らないでもねえよ。けどよ、あいつらからすれば、お前の方が何倍も羨ましい立場に居るんだぜ?何せお前は、これから学んで、自分で自分

の好きな事を選べるんだ」

「……」

「お前が憧れてた鉄華団を名乗ってた連中なんて、俺も含めてひでえもんさ。出来る事を必死にやっちゃいるが、それ以外はからつきしだ。自由に選ぶどころか、選択肢すら無かった。だからよ、ザック」
そう言つてオルガは笑顔をザックに向けて来る。

「お前は、俺達の希望の星なんだぜ？元デブリ、浮浪児、半端物。そんな奴らでも学べれば自分のなりたい自分になれる。お前は今、お前という存在そのものでそれを証明してくれているんだからよ」

「…ウス」

そう肩をたたいてくる憧れの先輩に、ザックは何とかそう短く応えるのが精一杯だった。

「何故、こんな事になっているか理解しているな？」

クリュセの一角、消毒液の匂いを僅かに感じる一室で、俺は目の前で正座をするミカヅキに向かってそう声をかけた。

「あ、あのクベさん！」

焦りを多分に含んだ声音でそう俺の名を呼ぶアトラ嬢。だが人は鬼にならねばならぬ時があるのだ。

「アトラ嬢、本当は君にも色々と言いたいところだが、まずは男同士の話にケリをつけねばならん。少し待っていたまえ」

「で、でもっ」

まだ何かを言いたげな彼女から視線を外し、強引に会話を打ち切る。そして床で正座を続けるミカヅキに話しかける。

「前にも言ったな？未成熟な体での妊娠は母体に大きな負担がかかる。それは命に関わるという事だ。パートナーの願いを叶えてやりたいという心意気は解る。だが、本当に相手を思うならば、危険とわかる行為には注意をすべきだし、それに自身が関わるなら止めることが正しいと思わないか？」

「…うん」

神妙な顔でミカツキが頷く。視線だけで彼の思い人を確認すれば、既に腹部は注意深く見れば解る程度の変化を起こしていた。

「解ったなら、しっかりとフォローをするように。男なぞ種を付けてしまえば後は原則女に全てを任せつきりだ。ならば最低限それ以外の負担を肩代わりするくらいの度量は見せろ。ミカツキの分の産休も申請しておいてやる」

「おっちゃん、流石にそれは」

ミカツキは働きの者だ。阿頼耶識組のパイロットに対する教練に農作業、最近では追加した養鶏場と養殖池の管理まで担当している。これだけでいざ事が起これば我が社のエースとして前線に出張ると言うのだから、どこの超人だと問い詰めたいほどだ。だが俺は知っている。育児とは子供という最強の相手を敵にしたゲリラ戦である事を。昼夜どころか周期すら存在しない不規則な赤ん坊の泣き声、目を離した途端何をしでかすか解らない予測不能な行動。武力も交渉も一切通じない相手に、それを年単位で繰り返し広げねばならないのだ。そしてその前哨戦は既に始まっている。

「子育ては戦場だ。甘く見るな、一人でも大騒ぎだと言うのにお前の場合二人なのだぞ。通常業務などしている場合か」

「申し訳ありません…」

弱弱しい声でそう謝罪したのはベッドに横になっているクーデリア嬢だった。その顔色は悪く、一目でつわりが酷いことが見て取れる。そう、つわりだ。俺達が地球で戦争の真っ最中、クーデリア嬢の妊娠が発覚した。当然父親はミカツキである。アトラ嬢とそういう関係である事は明白だったので注意はしていたのだが、その仕方を俺は失敗していた。

「いいかミカツキ、アトラ嬢はまだ体が出来上がっていない。だから妊娠は危険だ」

これを聞いたミカツキはクーデリア嬢と致す際に準備を怠った。そらそうだ、なんせクーデリア嬢は体が出来上がっているからな。ついでにクーデリア嬢も確かなつながりを欲して準備を確信的にしていなかったらしい。勝ち誇った声音で懐妊を告げてきたアドモス

女史がそう言っていた。この主従さては策士ですね？そしてそれが羨ましくなったアトラ嬢の懇願にミカツキが折れる形で更に新たな命が誕生。現在に至ると言う訳である。因みに妊娠後もアトラ嬢はギリギリまで隠匿していて、普通に本社で働いていた。身重の体で仕事とか本当やめてほしい。

「傍でしっかり支えてやれ。仲間も大事だが、家族を蔑ろにしてまでお前に仕事をしてほしいなんて奴はCGSには居ない。だからしっかり、父親としての責任を果たせ。解ったな？」

「解った。おっちゃんも頑張つてね」

頷いたミカツキがそう返してくる。頑張る？ああ、お前が抜けた分は頑張るとするさ、それが大人の見栄だからな。と、思っていた時期が俺にもありました。

「失礼、お話は終わりましたかしら？終わっているならこれを頂いていききたいのですけれど」

「「どうぞ、どうぞ」」

先程から入り口でこちらを待っていたカルタ嬢がそう言つて俺の肩を掴む。その笑顔に対し、同じ様に笑顔で俺を指し出すミカツキにアトラ嬢とクーデリア嬢。

「今日という今日は逃しませんよ？」

そう言つて俺をズルズルと引きずつていくカルタ嬢。その間にもお小言は忘れない。

「まったく！ふらふらふらふらと！解っているのですか!?今の貴方はギャラルホルンの要監視対象なのですよ!?どうして一所で大人しくしていないのです!？」

事の発端は終戦交渉の際にしたコロニー落としての恫喝である。本気に見せかける為に住民の疎開までやったから流石にギャラルホルンにバレた。そこからは蜂の巣をつついたような大騒ぎである。厄祭戦の時代、コロニーを制圧したMAによって件の蛮行は実施された訳だが、この世界は以前の世界に比べてコロニー落としに対する危機感が強かった。何せコロニーは巨大なエイハブリアクターを備えていて、宇宙塵対策にナノラミネートが施されているのだ。遠距離攻撃

で破壊する事はほぼ不可能な上に大気圏に突入しても間違いなくリアクターが燃え尽きずに地表に到着する。それで壊れればまだマシンで、機能を維持したまま残ってしまえば一帯に強力な機器障害を起す偏重力帯を形成するという、控えめに言って地獄が生まれる。そんな事の実行を示唆したもんだから、流石にギヤラルホルンとしても無視はできず、再び俺は観察処分となったわけである。

「外出届は出していたと記憶しておりますが」

「不用意に出歩くなと言っているのです！…あまり自由にされては、私としても庇い切れません」

その表情を見て、俺は小さく溜息を吐いた。皆が笑って、明日が訪れる事に疑問を持たない世界。そのなんと遠い事か。

「まだまだだな」

「何か？」

「いえ、なんでも。そろそろ自分で歩きますから手を放してください、カルタ嬢」

そう言っただけ俺は立ち上がり、大きく背をそらす。さあ、今日も夢に向かって足掻くでしょう。